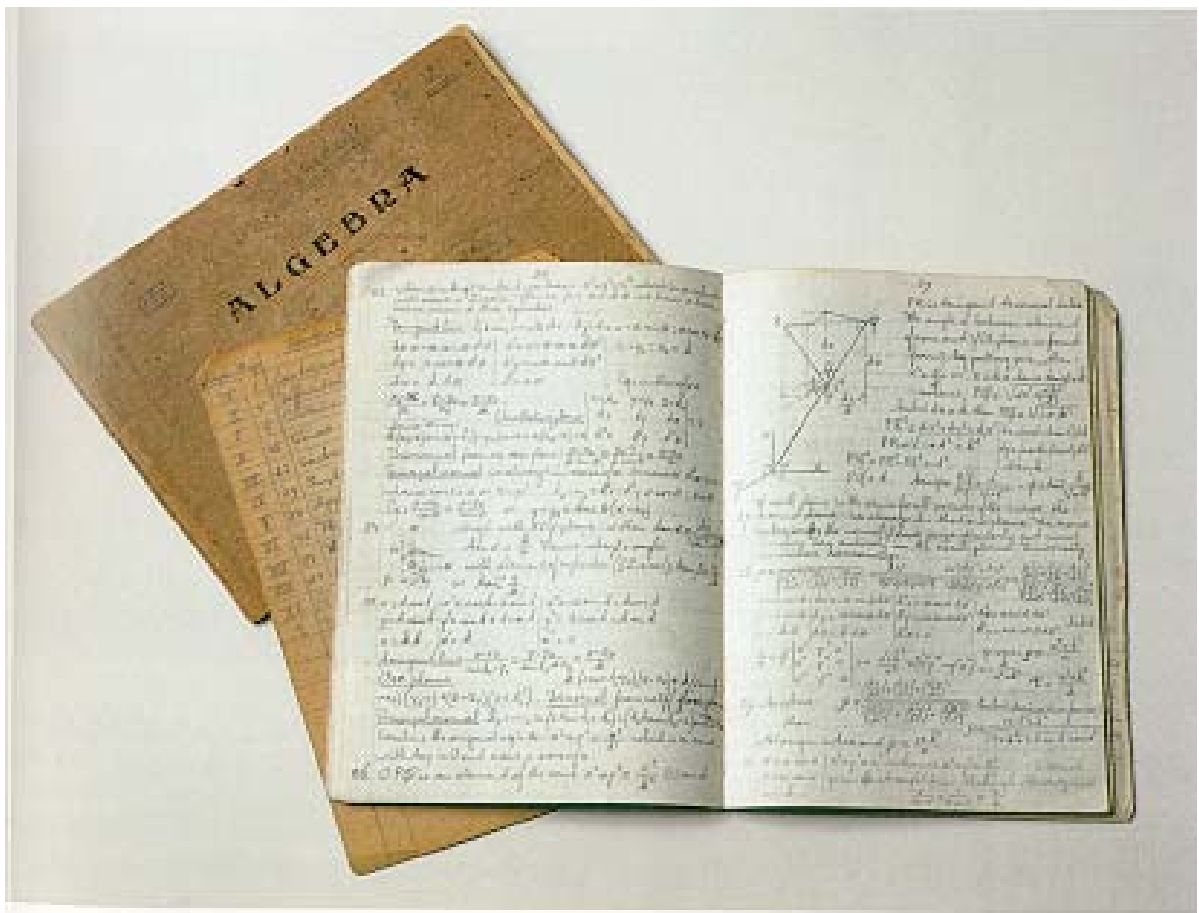


日記でみる日本占領時代の蘭印

アンバラワ 6 に於いて書かれた日記



この出版物はオランダ戦争資料研究所が「日蘭歴史研究プログラム」の一環として行った『日記プロジェクト』の成果の一つである。「日蘭歴史研究プログラム」は、1994年に当時の村山富市首相が提唱した＜平和友好交流計画＞から生まれ、日本政府による助成金により運営されるものである。

2004年、オランダ戦争資料研究所

A digital version of this manuscript can be studied on <http://niod.nihon.nl>

日記でみる日本占領時代の蘭印

アンバラワ 6 に於いて書かれた日記

編纂 : Mariska Heijmans-van Bruggen

編集 : Richard Voorneman and Elisabeth Broers

翻訳 : Naomi Bom-Mikami and Reiko Suzuki

目次

背景	1
抑留所	3
輸送と住環境	29
収容所組織／ヨーロッパ側及び日本側収容所スタッフ	77
日本人の抑留者達に対する扱い	117
食料及び物資的状況	147
労働	188
健康と医療状態	207
イラスト	238
家庭教育、気晴らしと宗教事	242
’戦後’の生活についての思考／収容所の雰囲気	270
社会と政治の意識	287
相互の関係と性生活	290
収容所の外との接触	306
戦争経過についての情報と風評	336
事件	355
和平の知らせ	365

出版にあたって

日本の蘭領東インド占領に関して残された一次資料は数少ない。日本の公文書は終戦時に大量に破棄され、インドネシアの資料は殆ど無いか、またあったとしても、その入手は困難である。一方、オランダの資料は主に戦後になって作成された報告書や声明書に限定されるが、その中で例外が戦時中に記された日記である。この日記を基に十一巻からなる<日記シリーズ>が編纂され、これはそのシリーズの一冊である。シリーズのうち五巻分の日記集はすでに『日記の中の日本占領』シリーズとして、ベルト・バックャー社（アムステルダム、2001-2002年）からオランダ語で出版されている。日記は現実の主観的表現ではあるが、日本占領下での日常生活の様子を良く表している。

ここで言う日記はすべて、オランダ人が記したものである。日本人管理下の収容所では‘書き物’をする事は禁じられていた。収容所外でも、家宅搜索の際に日記が見つかると思われ、罰を受ける可能性があった。それでも多くの人々が敢えて日記を付けていたことから、日記が書き手にとっていかに重要な意味を持っていたかが窺われる。彼らの個人的な語りは、これまでに形成されてきた日本占領のイメージに新たな視点を提供するものである。

シリーズでは各巻毎に強制収容所、あるいは捕虜収容所に焦点を当てたが、収容所外の生活にも関心を注いだ。シリーズにはある日記を一冊、丸ごと収めたわけではなく、日本占領下の西欧人の日常生活がはっきりしたイメージが得られるように、取捨選択が行われている。

選択に先立って、複数の日記からの情報をいかに明瞭な方法で組み合わせるにはどうしたらよいか、熟考され、長い議論が行われた。一見すると、それぞれの日記から部分を選んで、日付順に並べるのが最も妥当ではないかと思われた。しかしこのように並べると、日記の各々の部分が提供する収容所生活の独立した側面についての情報を全体の中から抽出する事が難しくなり、そのために情報が失われてしまう恐れがあると懸念された。また、我々は日記の部分さらに細かく項目分けすることで、全体がさらに読み易いものになるではないかと考えた。さらに最終的には、シリーズには各収容所毎、独立した巻が設けられ、複数の日記が出版されるということがあり、我々は複数の日記からの情報を並べ、比較することができるような方法を見いだそうとした。

そこで結論として、日記を各々、収容所生活の重要な側面を表す項目に分ける方法が選ばれた。項目毎に日記の部分を日付順に並べ、時の経過がはっきりと分かるようにした。さらに、こうすることで、シリーズ内の複数の日記に見られる話題の発展、例えば医療状況を、互いに比較することができる。しかし実際、項目内容はそれぞれ相互関係にあり、分け難い。したがって日記の部分の多くは幾つもの項目に跨るものである。

編纂にあたっては日記原本を使用した。ただし、読み易くするために、文章は現代オランダ語に統一する方法が採られた。また、紙不足から日記の書き手があまり考慮しなかった句読点や段落を付け加えることにより、読み易さを促進した。略語は幾つかの例外を除いて通常語に戻した。読み易いようにするためか、あるいは説明のためか、いずれにしても原本に後

から書き加えられた文章は、すべてカギ括弧で括った。プライバシー尊重の観点から、文中、書き手を著しく傷つけるような文脈、あるいは犯罪的な行為をしたとなどの非難の文章に限り、その個人名を伏せるようにした。時には書き手自身が、ある状況の中では名前を伏せている場合もある。全体として、書き手の認識は個人的なものであり、彼らが置かれていた極端な状況に影響されているものであることを特記しておきたい。

使用した日記の著者およびその近親者からは、我々が彼らを捜し出せる限りにおいて、この日記プロジェクトに彼らの日記を使う許可を得ている。

アンバラワ第六抑留所

始めに

1942 年末、日本占領軍はジャワ島中部におけるヨーロッパ女性と子供の強制収容に踏み切った。中部ジャワのいくつかの場所が強制収容所に改装された。そのうちの 하나가、戦前すでに使用不能とされていた蘭領東インド軍 (KNIL) 兵舎で、アンバラワ市の南側、バンニュービルに至る道沿いに有った。この抑留所がアンバラワ第六という名前で、あるいはいくつかの記録によれば抑留所 1 として、後に知られるようになる。アンバラワ第六抑留所は、アンバラワ周辺に最終的には 4 ヶ所設置される抑留所の一つで、1942 年 12 月から 1945 年 8 月の日本降伏まで使用されることになる。

抑留所の外観と住人

アンバラワ第六抑留所に最初に収容されたのはメグランからきた女性および子供たちであった。彼らは、すでに 1942 年 11 月からメグラン兵舎に収容されていた。12 月 25, 26, 27, 28 日に 800 人の婦女子がメグランから列車でアンバラワに送られ、第六抑留所に収容された。12 月 26 日にはジョクジャカルタからの婦女子 409 人も到着。数日後アンバラワ周辺の人々を加えて、収容人数はさらに 150 人ほど増大した。取りあえずこれがアンバラワ第六抑留所への最後の輸送となり、総人数は 1370 人であった。その後 1945 年 8 月までの期間に収容人数はセマラン、バンドン、ソロ、アンバラワ、ムンティランからの民間人の輸送によってより膨れ上がった。抑留所から連れ出されるグループも有り、それは 10 歳以上の少年と老人であった。このほかにも 1945 年 8 月 3 日には 600 人の女性が近在の労働キャンプ、アンバラワ第九抑留所に、綱を作るために移されている。これらの移動により、1945 年 8 月 15 日の降伏時点には収容人数 3500 人を数えることになる。アンバラワに入る、あるいは出て行く輸送に関しては添付資料 I をご参照いただきたい。

アンバラワ第六抑留所は 11 の兵舎から成り立っていた。床は表面の粗いタイル、あるいはコンクリートで、壁は 80cm ほどの高さまでは煉瓦、それ以外は木造であった。いくつかの兵舎はシラッペン(板張り)の屋根、残りは瓦葺きであった。シラッペンは全く腐敗していたので、この兵舎はいたるところで雨漏りがした。最初に入った 2000 人はベッドで寝ていたが、後に来た人々は木製の台にブルトザックン(瘤袋)と呼ばれた携帯用マットレスを置いて寝た。兵舎の一部にはエンペルス(廊下)がついていた。1944 年 11 月に、チハピット(バンドン)抑留所から婦女子 500 人が近々アンバラワ第六抑留所に移動して来ると発表されたときには、兵舎はすでにいっぱいであった。彼らの眠る場所を作るため、アンバラワの女性達自身でいくつか

のエンペルス(竹とゲデック(竹で編んだマット)で遮蔽し、木の台を入れた。バンドンから1944年11月17および22日に到着した女性達は、在住女性の最大限の努力により作られ、しかしその技術の及ばなさゆえにかなり状態の悪い、廊下に作られた木の寝台と細い通路とを与えられ、そこで生活することになった。その上、チハピットからの女性と子供たちの数は500人ではなく、900人であった。

一棟の兵舎は元々164人の兵士居住用に造られたものであったが、最終的には320人の婦女子を収容することになり、寝るための幅は一人50cmしかなかった。ジョクジャカルタ、マゼランおよびアンバラワからアンバラワ第六抑留所に収容された女性達はまだ家具などの持ち込みが許されていた。その後移動した人々にはこの特権は与えられなかったため、一つの家具を次第に大勢で使わなければならなくなった。一つの箆笥を使う人は最後には10人から14人になった。さらに台所での燃料用の木材調達のため、‘余分な’家具は燃やされた。兵舎の扉のほとんども同じ運命をたどった。兵舎の周囲には蓋のない溝が掘られ、一日に2度、収容されている人々によって清掃された。水は上水道が引かれていた。抑留所内には湧き水も有り、何らかの理由で上水道の水が使えない時の救いとなった。浴室設備は6つの大きな浴室といくつかの小さな水浴び所で構成されていた。この水浴び所は79個あった。そして、112の、水の流れる溝が刻まれた小屋があり、便所として使われた。

抑留所敷地内には‘リド’と呼ばれる広い芝地があった。それは収容者たちが司令官の命令によって点呼などのために何度も集合させられた場所であると同時に、子供たちの遊び場であり、母親たちの会合場所でもあった。1944年10月、女性たちは自らの手でこの芝地を耕し、野菜畑にしなければならなかった。この野菜畑がどれだけの期間存在したかは不明である。明らかなのは日本人の抑留所長がアンバラワ第六抑留所で日本の降伏を発表したときには、少なくともリドの一部はまた芝地となっていたことである。

抑留所の囲いは1942年12月からの初期には鉄条網で仕切られ、収容者はまだ外を見ることができた。しかし1943年4月には2メートル半の高さのゲデック(竹のマット)で周囲を囲まれることになった。この囲いは、一つには女性達の外界への視野を妨げるためであり、また一つにはヨーロッパ女性と抑留所外に住むインドネシア住民との接触を阻止するためであった。この接触は主に‘カワッテン’あるいは‘ゲデッケン’と呼ばれ、鉄条網(カワット)や竹の囲い(ゲデック)を通してインドネシア人の商人から食料を購入することだった。アンバラワ第六抑留所の見取り図に関しては添付資料IIを参照されたい。

日本降伏までの抑留所生活

アンバラワ第六抑留所の責任者は日本人抑留所長であった。しかし所長は抑留所には殆ど顔を見せず、日常の運営に関しては部下に任せきりであった。1943年4月まではアンバラワの現地人統括者、つまりウェドノ(ジャワ人の地区長)が、抑留所の世話を任されていた。その後、

この職務は日本軍の運営に変わるまで、ジャワ人の警備要員が担当した。1945年2月になって初めて、抑留所敷地内に日本の抑留所長の事務所が作られ、所長がアンバラワ第六抑留所の日常の采配を振るうようになった。ジャワのすべての抑留所の運営が民間から日本軍に変わる前に誰が抑留所長の地位にあったかは定かではない。アンバラワ第六抑留所では1944年3月26日の公式な軍管理への移行の後、一等中尉のサカイ サダオが抑留所長となった。この期間の日常の運営は日本人や韓国人の部下の手中に有った。第六抑留所では軍属のオガタ スエヒロが1944年4月から日常管理の指揮を執った。4月以降は抑留所長も抑留所指導者も何回か交代した。彼らの名前に関しては添付資料 III を参照されたい。これらの人々は、1944年以降の多くの蘭領インド内の抑留所職員と同様、一部は日本人、一部は韓国人であった。

アンバラワ第六抑留所の警備は1944年6月頃までは六人のジャワ警官が、ジャワ人の衛兵長の元で行っていた。彼らは一部の例外を除いて、全般としては適切な職員であった。この例外的警官の一人が‘バックバールチャ (もみあげ)’と渾名された人物で、収容者からは全く行動の予測がつかない人物とされていた。ジャワ人の抑留所警備員はごくまれに日本人の兵士によってチェックされるのみであった。1944年以降、抑留所の警備は50人の兵補と呼ばれた日本軍内の現地調達兵に任されることになった。彼らは日本軍の帽子をかぶり、木製の‘銃’または単に棒切れを持っており、そこから‘一本足木馬’と渾名されていた。

日本人の抑留所指導者の決めた命令を収容者に伝え、実行するのはヨーロッパの抑留所運営係りの責任であった。この組織は日本側のガイドラインに従い、添付資料 IV のごとくになっていた。さまざまな指導者や長たちは抑留所の中では一般的に‘ストレーペン(線)’と呼ばれた。この渾名は、長たちが服の上に付けなければならなかった何本かの色の違う線からきていた。ヨーロッパ側の抑留所長は、1943年9月27日までは J.G. スフルト-エックハルト婦人であった。彼女の抑留所指導期間は上記の日付に彼女が憲兵隊によって連れ去られたことで突然終わった。この原因はジャワ人の警官が、1943年1月に抑留所内で唄われた歌の中に、日本を侮辱する一節がある事の手紙を発見したことによる。スフルト婦人と共に、この歌の唄われたパーティーの夜を企画したボウメスター婦人と、何人か 一いくつかの日記に5人、6人あるいは7人とある一 の歌を唄った少女達がセマランのブル懲罰刑務所に閉じ込められた。この中から抑留所に帰ったものは一人もいない。1943年9月末から日本降伏まではジルデルダーフィッサー婦人がヨーロッパ側抑留所長となった。アンバラワ第六抑留所に最初に来た、ジョクジャカルタおよびマゲランの人々にもそれぞれのリーダーがいた。おそらくは配偶者が高い位置にいたという理由で、ジョクジャ・グループの長は知事夫人の J.G. アダムーデ・フリース夫人、マゲラン・グループの長も知事夫人の C.M. ブルハー-ハウト-ハウデコーパー夫人がリーダーになっていた。この両グループの名前は炊事場にもついていた。ジョクジャ炊事場とマゲラン炊事場である。この炊事場のほかにも米用炊事場と特別食用炊事場が有った。1942年12月の強制収容開始時から日本側は中央炊事場で一括炊事をする予定であったが、これが実現されたのは1944年になってからであった。これ以前にも食料品の洗い場は一個所にまとめられていたが、調理は別々に行なわれた。多くの場合収容者は自前の調理器具、通常アングロ(卓上

コンロ)で調理した。このための燃料としてアラン(炭)が支給された。中央での一括調理が導入された後も、何らかの方法で入手した食料が兵舎内で調理された。兵舎での調理は禁じられていて、1945年3月にすべてのアングロ没収がおこなわれたが、しかし秘密裏に続行された。

抑留所の保全是抑留者自身の仕事であった。1942年12月末の収容時とその後1週間半の間はクーリエを抑留所に入れて便所などの掃除をさせることが許されたがこれも長くは続かなかった。幾つかの雑役係り、野菜の洗浄、清掃係、浴室便所係などが、戦前にはジョクジャカルタのキリスト教系 MULO 学校の教師であった A. ミセット夫人によって仕切られた。日本人の命令によっても幾つかの作業が行われた。1944年4月からは女性達で夜警に回る、いわゆる不寝番が置かれ、完全に放置されていた敷地内のババッテン(草刈り)、パジョレン(掘り起こし)や、一部には植え付けも行われた。1944年には針仕事をするのが要求され、1945年には炊事場の燃料木材不足のため、敷地内の木を自分達で切り倒して木片に挽かなければならなかった。荷物運びなどの重労働は初期には年かきの少年達の仕事だったが、1944年9月に彼らが少年抑留所に移されてからはこの仕事は年かきの少女達と若い女性達の役目となった。大方の重労働の報酬は‘ペウク’と呼ばれた調理場の残り物の現物支給であった。ペウクは抑留者内で順番に分けられもした。

日本人から支給される食料は十分なものではなく、特に1945年からは確実に減っていった。エクストラの食料その他を得るために抑留所内に日本側運営者によってトコ(店)が作られた。1943年2月、女性達は金銭を供出させられた。これと交換にトコで品物を、おそらくは日本側の仕入れ値よりも高い値段で買うためのクーポン券が支給された。

この時全額を供出した者が殆どいないことは、抑留所内で何度も行われた住居捜索で押収された金額を見ても分かる。その後も金銭が残っていたことは特に最後の年にヨーロッパ側運営委員によって収容者から集めた金銭で何度も食料を一括購入していることで明らかである。この運営委員による金銭募集では、始めのうちは幾ら出すかは個人の自由であったが、すぐに一人幾らと決められるようになる。この抑留所金庫には日本側が看護婦、抑留所運営係り、炊事場係に支払っていた1日15セントの給料も定期的に、直接入ってきた。

食料調達のもう一つの方法が、前記の‘カワッテン’あるいは‘ゲデッケン’である。この時の支払方法は、主に外部で非常に不足をきたしていた布地であった。カワッテ取引は公式には禁止されていたが何人かの警備員、特にジャワ人の警官は見て見ぬふりをした。しかし彼らも時には厳しく取り締まることもあり、一時的な恐怖を呼んだ。兵補警備員はより厳しく取り締まったが、抑留の全期間においてカワッテン取引が絶えることはなかった。飢えが収容者の一部に、懲罰を受けるかもしれないという危険を冒させることになった。

すべての支給された、あるいは購入した食糧は抑留者内でなるべく公平に分配された。しかしカワッテンによって入手した食料は個人、あるいは一家族の胃に収まった。これは抑留者が自分の畑で栽培した野菜や果物に関しても同様であった。1944年6月から日本側の命令によって畑が作られ、収穫は抑留者全員のものとなった。残念ながら共同栽培した食料は微々たる量で、病人のメニューを少し増やすのみであった。アンバラワ第六抑留所収容者は1944年5

月と1945年5月の二度、赤十字社小包の分配に沸いた。

アンバラワ第六には病室と診察所が設置されていた。第一回輸送の抑留者の中には医者は居なかったが、1943年2月始めセマランからG. B. ワルフーソルフドラーヘル医師がアンバラワに来た。1944年2月にはスモウォノからの輸送者中にJ. Ch. ネウイエンーハッケル医師が居た。1944年8月9日にはチマヒ男性民間人抑留所から3人の男性医師が到着、ファン・レーント医師、アバルバネル医師、そしてヒーセン医師である。同年9月17日には男性外科医J. ロデル氏がそれに続いた。この日からアンバラワ第六でアンバラワの他の抑留者の手術も行われるようになった。これ以前の手術はスワンディ氏が医師長を勤めるアンバラワ病院で行われていた。1944年11月バンドンからの輸送によりもう一人の女性医師、Ch. フラウメンハフト医師が到着した。1945年5月にズワネンブルグ歯科医がアンバラワ六に到着するまでは、抑留所外部から週に一度歯科医が来ていた。1945年6月にはスホルテン歯科医がズワネンブルグ氏に替わった。

抑留所報告書によれば、1945年8月には抑留所内に10人の医師が居た。日記執筆者もすでに記しているように、“彼ら(日本人達)が薬も食糧も供給してくれないのであれば”この医者達にも出来ることは少なかった。何度もジフテリアが大流行した。マラリアもよく見られる病気だった。1945年には栄養不良性の浮腫に苦しむ患者が確実に増えていった。病室は増えていき、看護人が不足してきた。アンバラワ第六抑留所では1942年12月から1945年8月までの間に117人が死亡した。遺体は抑留所外のマゲランセ通りに有ったヨーロッパ人墓地に埋葬された。棺桶は外部から持ち込まれたが、最後の時期には竹の棒と竹製のマットだけであった。時には家族も同行が許され、時には禁じられた。

収容者と外部との接触は、1943年8月以降には、禁じられていたカワット(鉄条網)越しのインドネシア人商人との取引のみとなった。1943年4月から8月までは収容者の家族が(まだ)収容されていなければ、家族に会うことの出来る面会日が設けられた。この機会には同時に多くの包みも受け取ることができた。また、収容者のグループが外部で雑役をさせられたことも数度有った。家族からの手紙は突発的に、特に初期の頃にはよく抑留所に届いた。しかしこの‘手紙’の中身は殆ど定型文で占められており、女性達にとって情報源とはなり難かった。返事を出して良い時が4回有ったが、内容はやはり殆ど定型文であった。収容者の出した手紙が、ある種の日本の判を押されて返ってきた時には、受取人が亡くなったという意味だった。これとは別に、公式な死亡通知も来た。

抑留所が軍の管轄になった1944年4月1日から1944年10月まで、アンバラワ第六抑留所の収容者達は毎週“The Voice of Nippon”という、戦況を記した新聞を受け取った。その後はまた、とどめない噂話や抑留所内に居た透視家、予言者などに頼らなければ‘ニュース’は手に入らなくなった。

収容所内の単調さを打ち破るため、文学の夕べが催され、時々寸劇の公演などがあった。1943年5月からは抑留所内図書館が作られ、収容者達自身が提供して300冊の本が揃えられた。また多くの収容者は料理の作り方の本を編纂していたが、これは恒常的な空腹感がさせ

たものと思われる。食事は、特に最後の頃は収容所内の女性達が昼夜を問わず気を煩わせていたテーマで、このため熱心に料理方法の数々が収集された。

1944年3月31日にすべての集会は禁じられた。これは文学の夕べに関してもであるが、それまで抑留所内で行われていた宗教のミサにも適用された。この時から、最高10人までの小さな宗教者の集まりが、兵舎の廊下で許されるのみとなった。1944年6月にはそれも禁じられたが、その代わり週一度、金曜日に公式ミサを行うことが許可になった。抑留所内には多くのローマン・カソリックと新教の改革派の人々が居た。これが、時には互いの関係に問題を生んだ。1943年3月13日から1944年9月17日、少年や老人達と共に少年抑留所に移されるまで、J. Ph. L. ディデリッヒという神父がアンバラワ第六には居た。牧師は抑留所に来たことがなく、説教は女性たちが持ち回りでした。

教育は、当初は行われたが、フルベル学校(幼稚園)を除いて、すぐに禁止された。秘密裏に教えはしていたが、限りのあるものだった。

1944年2月23日、アンバラワ第六抑留所は、日本人達が何人か来るから18歳から28歳までの女性はすべて警備員まで出頭せよという命令に大きく揺れた。訪れた日本人達は彼女らを検閲し、結婚しているかなど、幾つかの質問をした。翌日、また日本人達は戻ってきて前日の女性の中から何人かを選び、前日と同じ質問をした。この尋問の理由に関してオランダ人運営者達は何も聞かされなかった。1944年2月26日、アンバラワ第六に、4人の日本人が乗ったほとんど空のバスが来た。9人の若い娘達が呼ばれ、急いで荷物をまとめてバスに乗るよう命じられた。母親達の抵抗も無駄であった。唯一知らされたことは娘達はセマランに行くということだけだった。日記の文章から、娘達の行方について非常に心配していることが読み取れるが、日本人用慰安所で、売春を強要されることが現実としてあるとは考えられていなかったことが伺える。日記中では娘達は宣伝フィルムに使われるとか、宴会に侍らされるのであろうとしている。実際には、サマランの日本軍用慰安所に送られ、日本軍人にサービスを提供することを強要された。抵抗すれば、単に強姦された。

中部ジャワでの女性選択は7つの女性抑留所で行われた。アンバラワのアンバラワ第六、アンバラワ第八、セマランのランペルサリ、ゲダンガン、ハルマヘラ各抑留所、スラカルタのジッケンゾルフ抑留所、ムンティランのムンティラン抑留所である。最終的にアンバラワ第六、ハルマヘラ、ムンティラン、そしてゲダンガンの娘および女性達が日本軍用慰安所行きとなった。これ以外の抑留所では収容されている女性達の激しい抵抗に遭ってこれをあきらめている。女性調達の原則とされていた自由意志が有ったといえるのはセマランのゲダンガンだけで、そこでは何人かの女性が戦前から‘その仕事’をしていたとして、選択された娘達の身代わりを申し出ている。

アンバラワ第六で連れ去られた娘達の母親は、1944年5月8日に再会するまでその消息を一切知らされなかった。この再会はボイテンゾルフ(ボゴール)のコタ・パリスキャンプで行われ、娘達はその少し前にキャンプに連れてこられていた。彼女達の居た慰安所は1944年4月末に、女性収容所での自由意志による募集という原則に全く反していることが日本軍上

層部に判明して閉鎖された。コタ・パリスで母親達は娘達がどのような運命を辿ったかを聞かされた。

アンバラワ第六を震撼させたもう一つの出来事は1945年1月4日に勃発した、いわゆる‘朝鮮人反乱事件’である。1944年から日本軍は民間人収容所の管理に朝鮮人軍属を投入していた。朝鮮は1910年以来日本に併合されていた地域である。投入するに当たって、日本軍は朝鮮人軍属に好条件を提示していた。しかし日本軍は約束を守らない。1944年末になって、日本軍の劣勢が明らかになると、抑圧された朝鮮人達は抵抗を試みる。これが武装蜂起になったのはアンバラワだけであった。1945年1月4日夜、アンバラワ第六抑留所周辺で突然銃声が興った。一本足木馬達（兵補/現地人補助兵）は抑留所内を走り、ゲデックをよじ登り、抑留所の警備を空にして逃げてしまった。抑留所を少しでも守るため、女性達自身で不寝番を倍に増やし、鉄の棒や、その他武器になりそうなものは何でも持って警戒に当たった。朝鮮人がアンバラワの指揮権を取り、日本人が何人か殺されたということだったが、それ以上具体的な情報は収容者には入らなかった。戦闘は何日か続いた。セマランからの応援を得て、日本軍は蜂起を数日で押さえた。抑留所の警備は数人の日本兵が引き受け、1月12日にはアンバラワに静けさが戻った。

アンバラワ第六の生活がまた‘平常’通りになり始めた1945年1月28日の朝9時ごろ、一機の飛行機が地平線から現れた。これがキャンプの真上を通ったとき、翼の下に赤、白、青の国旗が明確に識別できた。キャンプに歓声が沸き起こり、全員が手近に有るものを何でも振り回した。飛行機は戦況の書かれたパンフレットを撒き、その大部分は抑留所内に落ちた。この時現れた飛行機はB-25のN5-185番機で、王立オーストラリア空軍のN. E. I.（蘭領東インド）第28飛行中隊に属しており、中東部ジャワにおけるNEFIS（蘭領インド軍情報部）の特別使命を帯びていた。F. ファン・ブレーメン少佐に率いられた6人のオランダ人乗務員は、視覚と写真による偵察およびパンフレットの散布、そして地上目標物の射撃も命じられていた。彼らはアンバラワの幾つかのキャンプ内で、飛行機を見て興奮する人たちをはっきりと観察することが出来た。アンバラワ第六内は大はしゃぎとなり、数時間後に兵補達が抑留所内に落ちたパンフレットを集めるためにキャンプ内の搜索を始めるまで、誰も日本人がこの事態をどう受け止めるか考えもしなかった。もちろん、兵補が集め得たのはほんの一部であった。そのため全員に集合がかけられ、抑留所長の演説が有った。彼は、すべての紙を回収すること、そしてその内容を‘忘れる’ことを厳命した。数人がその命令に従い、即刻捕らえられて食事無しで夜八時半まで抑留所内の刑房に閉じ込められた。この素晴らしく始まった日のいやな終わり方にもかかわらず、収容者の間の自由に対する希望は膨らんだ。この希望はある日記執筆者にとっては日記を書くのを辞めてしまうくらい大きなものだった。1945年2月16日、彼女は、こう日記を再開している。“あの飛行機以来とても期待が大きくて、何も書かなかった。でも私たちが思ったより長く掛かるわ、またあなたの誕生日を迎えてしまった。ああ、ウィレムピヤ、本当にあれで終わりだと思ったのに。でも、最後は近づいているわ。”

日本降伏が現実となるまでに、まだ半年かかった。1945年8月23日、アンバラワ第

六で翌日から食料が倍になること、欧印人は出所してよいことが知らされた。24日の夜になって、初めて公式に戦争終結が発表されたのである。

日本降伏の後

ジャワ全体がそうであったように、アンバラワでもこれは解放者の来ない解放であった。8月26日以降、日中は食料買い出しなどのために抑留所を出ることが許されたが、日本軍の警備は続き、収容所生活者の公式な出所は許可されなかった。全ての女性達がこの規定に従ったわけではなく、二人の日記執筆者を含めた幾人かは知り合いや友人の元に去っていった。しかし多くはアンバラワに留まり、‘解放者たち’の到着を待った。この待ち期間は長く、最初の英国インド軍がアンバラワに到着したのはやっと1945年10月24日だった。この間、1945年9月から10月の初めにかけて町の状況はひどく不穏なものになった。ペムダと呼ばれる若いインドネシア民族運動家達がオランダ支配復活に反対して活動するベルシャップ期間が始まっていた。ペムダ達はヨーロッパ人に対する食料ボイコットを開始し、アンバラワ抑留所の電気や水道設備を破壊した。幾度も抑留所内の食料倉庫が略奪された。1945年11月20日、状況は頂点に達し、武装ペムダは滞在する英国軍や日本軍を襲撃した。抑留所にも攻撃が加えられ、アンバラワ第六も例外ではなかった。1945年11月28日の榴弾攻撃により、収容者6人が命を落とした。キャンプ外に出ることの危険を考慮して、この死亡者達は抑留所敷地内に葬られた。

12月1日には軍事状況が落ち着き、収容者達の避難が開始された。続く2週間の間に避難完了し、その後英国インド軍はアンバラワを撤退した。避難者はセマランに移った。しかしそこも安全とは言い難く、さらにバタビア（ジャカルタ）、シンガポール、セイロン（スリランカ）への避難が必要となった。

執筆者達

チャッケスーグレイン

マリア C.C、呼び名はミア、チャッケスーグレインは1901年10月13日、ヴェールト（オランダ）に生まれ、1941年12月には中部ジャワのマゲランに夫のヨス（1896）と供に住んでいた。ヨスはKNIL（蘭領東インド軍）の一等軍医であった。彼らは町の北方に有ったKNILの駐屯地の一つに住んでいた。1941年6月以来、ヨスが検査医に任命されて旅に出ることが多かったため、ミアは殆ど独りで過ごしていた。彼女はこの時期に、ヴェールトに居る家族、特に彼女の母親と、オランダを発つとき母親の元に預けてきた息子、ジョージに宛てるかたちで日記を付け始めた。ジョージは1941年5月10日に14歳になっており、ヨスとミアはその時点で結

婚4年半であることからして、多分ミアの前の結婚で生まれた子供であろう。オランダとの定期的な交信は1940年5月10日のドイツ軍によるオランダ占領のため不可能となった。手紙は検閲の対象となり、宛先に到着するまでに長い月日が掛かった。手紙には25単語以上書くことが許されなかったため、手紙に書ききれなかったことをミアは日記に書き留めた。日本との開戦によって交信は全く途絶えたが、ミアは日記の中で一方的に手紙を書きつづけた。1942年2月26日、彼女はこう記している。

“私がこれを書くのは皆将来のためだ。これを読み直す時、私自身も一緒に居られるように望んでいる。”

ミアの最初の手紙日記には“1941”という日付が有り、おそらくその年の6月に書かれたものである。この最初の“手紙”の後、1941年7月31日以来、彼女は頻繁に日記を付けている。1941年12月8日の宣戦布告以来、ヨスはそれまで以上に家を空けることが多くなった。ミアも戦争準備のために身を挺する。電話交換手として働き、病院の看護助手になる。オランダに手紙を書くことは出来なくても、彼女の日記のスタイルは変わらなかった。オランダに居る家族に宛てて書き、締めくくりは常に次のような文章で終わるのだった。

“さようなら親愛なる人たち、勇気を持って、私たちのことは余りに気にしないでね。私たちなら大丈夫。さようなら私の息子、あなたのママであるミアからキスをいっぱい。”

1942年2月初め、ミアとヨスは、戦争の危険を避けるためにテルナテ島からジャワに逃げてきた一人の女性を、彼らの家に受け入れた。それは若い女性で、ウィリー・ムルダールボレという、欧印系の女性であった。彼女の夫はテルナテに残った。1942年3月8日、蘭領インド軍は降伏した。3月19日ミアは書いている。

“ヨスと、この近所のクレイマン医師だけが残っている医者だ。彼らは収容されなかった。本当にありがたいことだ。一緒に居ることがとても支えになるのだから。”

しかしこれは、はかない望みに過ぎないことが判明する。4月23日にはヨスも捕虜となり、マグランの兵舎に閉じ込められ、3日後にはスラバヤのヤールブルステレインに移された。ミアとウィリーは二人だけ残され、まだ残っている金銭で出来るだけ長く暮らせるように、耐乏生活をする。時間をつぶすため、彼女たちは編み物や縫い物をし、そして“お喋り、お喋り、何でも、これから興でであろう事に関して。”この他に彼女たちはよく‘テーブルダンス’をした。これは降神術集会のようなものでテーブルの動き方によって様々なことが占われた。1942

年 5 月 29 日には；

“ヨスが病気で、他の人たち（3 週間半後に帰って来るであろうという）と一緒に帰っては来られないというお告げばかりだ。よくないお告げは信じたくないし、反対に良いお告げにはしがみつきたくなる。”

このお告げをミアはそれほど信じてはいなかったようで、“全くからかわれているようなもの
だわ。”と結論している。

1942 年 6 月初め、ミアはスラバヤの知人を通して、ヨスが無事であることを知らされる。やはり知人を介して、ヨスに食料を始めとした様々な必需品を入れた小包を送っている。7 月 13 日にヨスから初めての手紙が来た。

この間にも日本軍はヨーロッパ女性の生活をやりやすくするために、次々と新しい規制をかけてきていた、と少なくとも女性達自身には思えた。1942 年 8 月 2 日にミアは次のように書いている。

“静かな日曜の朝、ラジオが、今は私の居間に改造された、元の事務室にやわらかく流れている。私の家にはグレート、アネケそしてリンチャ・デ・ハール（マゼランから来た知人）が居るのだ。ニッポン側の命令により、全ての欧州人（純血）は町中を去り、想像上の境界線の後ろに移らなければならなくなった。これは全く混乱の極みで、なんなら私は、彼らみんなを家に受け入れよう、そうすれば少なくとも何をしているかははっきりするし、誰がこの家に来るのかも分かるというものだ。グレートとアネケは自分たちの家具で居間兼寝室を作り、リンチャにはわたしの着替え室を与え、彼女の持ち物で内装した。ウィリーと私にはまだ居心地のよい一角がある。”

1942 年 10 月には全ての戦争捕虜はジャワから連れ去られるという根強い噂が広まった。

“一人は‘バリへ’といい、別の人は‘マラッカ’という。私はひどいことだと思ふ、特に連れ去られる男達自身にとって。私は手紙を送ろうとしていたところだった。もう彼はこれを、すんでの所で受け取れない。カッシアン（残念）、私の小さな人、私達がこの次再会するのは何処になるというのかしら。”

1942 年 11 月 8 日、ミアとその同居者達は“ぎよっとする”知らせを受け取った。ミアの家のある駐屯所前後地域の立ち退きを命ぜられたのだ。

“我々全員が‘ヘット ブロック’（やはり軍駐屯地の一部）に移り、10 人で一

軒の家に住み、全ての大型家具と一軒につき最低一つの蚊帳付きベッドを置いていかなければならない。”

引っ越しは翌日から始まり、11月10日に終了した。割り当てられた家は下士官宿舎で、ほかに5人のモルッカ人の女性と同居であった。1942年12月20日頃、日付は日記には記されていないが、ミアはこう書いている。

“ドカン、と収容令状が来た！最も予測していなかったことが起こった。27日にツグラン兵舎に出頭するという通達だ。持ち物：小さな折り畳み式ベッド1つ、調理道具を入れた戸棚一つ、スーツケース1つと手荷物。大きなものは一定の番号をつけて駅へ、残りは自分で持たなければならない。おお神よ！ここまでの事態になろうとは誰も想像していなかった。”

ウィリーは欧印系であったため、召集令状はこなかった。ミアは彼女のために伝道病院に居場所を確保した。そして12月27日が来た。強制収容の始まりだ。彼女が一昼夜を過ごしたツグランから、彼女が入れられた女性と子供達のグループは列車でアンバラワに送られ、アンバラワ第六に収容されて、その後日本の占領が終わるまでの全期間をそこで過ごすことになる。登録番号1003を付けられて、彼女は第五ブロック（兵舎）に入れられた。

ミアは毎日ではないが、よく日記を付けている。彼女の手紙に繰り返されるテーマは家族の、特にオランダに残してきた息子の心配と、それと共にもちろん彼女の夫の心配である。彼女はよく、息子をオランダに残してきたことが果たして良かったかどうか気に病んでいる。

“私はいつも、私の息子にこんなに長く会えない、彼の若い時期と一緒に過ごすことができないことに抵抗を感じてしまう。これに関しては自分自身で納得することはないだろうし、彼を置いてきたことが良かったかどうか、これからも問題にしてしまうだろう。”

平時であれば、ヨスと彼女はすでに1942年2月に引退して、オランダに帰っているはずであったが、戦争がこの計画を無効にしてしまった。彼女の夫の居場所に関しては長い間はっきりしなかった。1944年7月29日になって初めて、彼が生きているという印を受け取った。

“タイの第六P.O.W.（戦争捕虜）キャンプから葉書が来た。印刷されたもので、ヨスだけが私にとって意味のある文字だ。彼の“ヘルス”は“エクセレント”で、“アイ アム ノット ワーキング”。やっとなら、少なくとも何かが分かって、約束されたとおり返事を書く住所もある。”

外部からの知らせは非常に不定期にキャンプに入った。最初の頃はウィリーその他の知人と、指定された面会日に会うことができた。しかしこの面会日は1943年8月に廃止された。その後は時々ウィリーから手紙が来た。オランダとの交信がないことはミアにはとても寂しく、そのために日記を非常に大切にした。1945年3月、何度目かの家宅搜索の後、

“6日前に又家宅搜索があり、全てはひっくり返されて、武器や紙や鉛筆や電気器具が探された。今回は割合うまく行ったが、神経がびりびりする、特に私に取って一紙一紙は。もしも彼らがこれ(日記)を取り上げたらと想像するだけでもたまらない。”

彼女のローマン・カソリック信仰は困難な時期の彼女を支えた。彼女は日記の中でよく彼女の‘ヴェールトの聖母’に向かって語りかけている。おそらくこれは、彼女のマグランの家に有って、抑留所に持ってきていたマリア像のことであろう。1945年1月7日、彼女はため息混じりに書いている。

“おお、ヴェールトの聖母よ、私達を早く助け賜え。私達の杯はまだ空になっていないのでしょうか？私は心から家(オランダ)に帰りたい。我らが聖なる神にお願いしてこれで十分ではないかと聞いて下さい、私達のためだけではなく、それよりもっと、今戦火を交え、若い命をこの狂気に捧げている可哀想な若者達(兵士)のために。”

上記の文章から彼女は戦争が終わったら彼女のヨスと共にオランダに帰ることを願っている事が分かる。彼女はその時、インドネシアの状況が戦後どの様になるかについてはあまり考えていない。ただ蘭領インドに於けるオランダ人の威信喪失については心配している。すでに收容される前から、何人かのインドネシア人の、彼女や他のオランダ人に対する尊大な態度が、彼女にすれば非常に侮辱的であり、次のように危惧している。“現地人に対する威信をこれからどうやって取り戻せばよいのであろう。”

キャンプ中でミアは何人かの良い友人を得、共に小さなクラブを形成していた。幾人かの近所の子供達とも、とてもうまく付き合っていた。キャンプ内のプライバシーの欠如、お互いの唇を付き合わせて暮らすような状態は彼女にとって、耐え難いもので、時には“鍵のかけられる部屋”が望むべき最高のもののように思われた。女性一般のお喋りは大嫌いであったが、收容期間を通じて彼女らの比較的しっかりした態度には敬意を感じていた。

アンバラワ第六への移送がある度に、彼女の良き友人リーンがその3人の娘達と来ることを願った。リーンについては、リーンとその子供達がジャワの何処に居るかという短い記述が何度か日記にでてくる。收容される前には手紙で互いの近況を知らせあっていた。1945年5月29日、アンバラワ第六にソロのジッケンゾルフ抑留所からの移送者が到着した。ミアは大

きな期待を抱いて門に向かい、そこでリーンが亡くなったという衝撃的な知らせを受け取る。翌日彼女は日記に書いている。

“大きな期待を胸に、昨日私はリーンを迎えに行き、そこでリーンチャはもう決して決して来ないという、一番ひどい知らせを受け取った。彼女は死んだー死ーまだ私には信じられない、私の敬愛する活力旺盛な友人がー亡くなったーそんなことがあるだろうか、打ち砕かれてしまう。悲惨だった。彼女を知っていた人たちは皆まるで妹か家族が亡くなったかのように私のところに来た。私も同様に感じていた。だって私達は20年もの間一緒生きてきて、私達ほど多くの体験を共有し、共にくぐり抜けてきた友人関係も少ないのだから。それに私は彼女と話したいことがまだ山ほど有った、あれもこれも言いたかったし、まだ話していなかった事をはっきりさせたかった。私は彼女のために小物を取って置いたのに、今彼女は独りでソロに、全く独りで残されなければならなかったのだ。”

リーンの3人の娘達はアンバラワではなく、バニユビルに送られたことが分かった。日本降伏の後、ミアはリーンの娘達のために心を砕き、娘達もアンバラワに来た。アンバラワではその後ベルシャップ勃発となる。10月5日、彼女はヨスからまだ生きてタイに居るという知らせを受け取る。1945年11月16日、ミアはオランダから初めての生きている証を受け取り、家族は皆怪我も無く、無事に戦争を生き抜いたことが分かる。12月10日にミアと‘娘達’はセマランに避難し、12月17日、ミアは一人でバンコク行きのレイク・チャールズ・ビクトリー号に乗船する。娘達は抑留所から戻ってきた父親と供に残った。クリスマスの朝、ミアは彼女の日記に書いた。

“私はヨッシャの側に居る、これはまだとても非現実的な感じで、時々これは私自身なのかと自分をつねって確認する。一昨日の朝、下船することが出来、3時間ほど小ボートに乗り、その後は車で、先ずはホテルに、そこからヨスに電話をしたら、一時間以内に（丘から下りて）私を迎えに来た。”

ミアはその後も日記を書き続けた。

ブルゲル - ダウファス

ジェッティーC. ダウファスは1913年3月18日にリンブルグ州（オランダ）のトレーベークで生まれた。1933年、彼女はライデン大学のインターンであったヴィムC.ブルゲルと婚約する。最初はヴィムのそばに居るため、後には自分でも確信を持って看護婦になる教育を受け、好成

績を上げていた。1939年、ヴィムは医師試験を受け、職探しを始めた。1939年7月29日、ジェッティーとヴィムは結婚する。ヴィムはサラティガ伝道会で医師の職を得、1940年1月、夫婦は蘭領東インドに出発する。ヴィムがサラティガ伝道会から最初に送られた所はプロラで、ここで1941年3月5日に長女エルシャが生まれる。戦争が勃発した時には、一家は既に、ヴィムが9月に異動を受けたプルウォダディに住んでいた。ヴィムは徴兵され、二等軍医としてジョクジャカルタに送られる。ジェットは彼の後を追ひ、ホテル住まいをした。すでに彼女のお腹には第二子が居た。蘭印軍が降伏した3月8日、ヴィムはバンドンの周辺に居た。彼は戦争捕虜となり、チラチャップの捕虜収容所に送られた。

1942年5月21日、ジェッティーは日記を次のように書き始める。

“最愛のヴィム、あなたにきちんとした手紙を書けたのはもう随分前になってしまい、最近の手紙は皆返ってきてしまうので、どの手紙をあなたが受け取って、どれを受け取らなかったの殆ど分からなくなっていました！だから私はあなたに向けて日記のようなものを書くわ、そしたらまだ、あなたが何時か読む可能性もあるから。”

彼女はその時すでにジョクジャカルタの知人ラインチャ宅に寄宿していた。ジェッティーは夫の居ない生活にひどく困惑していた。彼女の日記の中でも初期には自信の無さが出ている。すべてを独りでやり遂げることが出来るかどうか不安である。1942年5月25日に彼女はこう書いている。

“私の新しい赤ん坊のことを考えると、私には殆ど勇気が出ない、私は一人では何もうまく出来ない、間違いを沢山するし、元気も殆ど無い。今からもう駄目になるのではないかとしょっちゅう思うし、何にも関心の無い、浮遊しているような人間になってしまいそうな気がする。ただ一つの希望は、もうすぐ、これがみんな終わってヴィムが戻って来たらということ……。”

この後に続く数年間に、ジェッティーには、彼女自身に取っても思いもよらぬ力があつたことが明らかとなる。

1942年7月14日、ジョクジャカルタのペトロネラ病院で次女が誕生する。ジェッティーはこの赤ん坊に、ヴィムの子供時代の先生の名前を取ってマリアンヌ・フレデリカと名づける。ジェッティーの友人の手紙から、今はチマヒの捕虜収容所に移されていたヴィムはこの嬉しい出来事を耳にする。1942年8月、ジェッティーは子供たちと供にウンガランの知人、エイミイの家に寄宿するために引越しをすることを決める。時々、殆どいつも他の人に頼らなければならない状況が彼女を苛む。彼女の家具などは全てプルウォダディに置いてきてしまっていた。伝道会を通じて時々幾らかの金銭を受け取った。

ウンガランの滞在も長くはなかった。1942年11月2日、彼女は書いている。

“41年12月以来、ホテルを含めて6番目の家。ここは結構良いところよ、ヴィム。今日の午後、私は子供たちとフェミイ(他の同居人)と共にここに到着しました。エイミイはもう何日も前から友人達といっしょに家の中を整えていました。この家はずっと小さいけれど、悪くは無いし、余裕もまだあるわ。”

ジェッティーがここで言っている家は、アンバラワの軍駐屯地内にあった下士官宿舎である。日本軍の命令により、アンバラワとその周辺に居たオランダ人女性は全員ここに住むことになった。1942年12月にこの駐屯地内で何回か引越しをした後、12月29日、ジェッティーは次の言葉を書き記した。“‘アンバラワ抑留所タワナン(収容者)1、ペルリンドンガン(保護区)第六バラック’に収容される。”ここが彼女の今後2年半に渡る滞在地となる。ジェッティーは日記を子供たちの成長記録のつもりで書いた。これは自分で子供たちの成長を見ることの出来ないヴィムのためのものであった。子供達の世話や心配が、日記を付けるたびに書き留められている。それと共に夫の居ない寂しさがいつも繰り返されるテーマである。書く事で毎日の気苦労を紛らわしていた。“あら、書くと元気が出るわ、何だかちょっと、あなた(ヴィム)と話しをしているみたい。”ヴィムからの直接の手紙も1943年11月までに4通受け取ることが出来た。その後は全く音沙汰無くなった。

抑留所内でジェッティーは、より強く彼女の依存性を感じるようになる。彼女が必要なものは殆ど全て人から借りなければならなかった。エイミイとの関係はこのために急速に冷却する。“もし彼女にいつかこの借りたものを返すことが出来たら、どれだけ神に感謝することでしょう”とジェッティーは収容1週間後に嘆いている。窮屈な女性収容所での生活はヴィムが居ないためだけではなく、重苦しいものだった。

“全てが不愉快だけど、特にひどいのは人間だ。ひどい人だと思いながら、いつも目の前に居て、付き合っていかなければならない人たち。通常的生活なら知り合いになることも無い、せいぜい名前を聞いたことがある程度の人たちがあなたに強制し、することなすこと口を出し、人の食卓を覗き込み、お喋り、お喋り、お喋り、舌が痺れ、悪意と饒舌で精神が飽和するまでしゃべりまくる。”

ジェッティーの一番の関心は、自分自身と子供たちを大事無く戦争の終わる時まで持たせることだった。子供たちの一人が病気になったときには恐怖が日記から伝わってくる。将来に関しては、彼女の家族関係の中でしか考えていない。1944年7月に、彼女は2年前の日記を読み返して、次のように書いている。

“もう一度全てを味わうのはとても素敵だ、赤ちゃんを得るのは何と嬉しいこと

だろう。もしマリアンと三番目の子供との間がそんなに大きく開かなければ、今もう3年は勘定しないといけない、これからあなたが戻るまでにまだ数ヶ月有るとして、そしてまだ10ヶ月くらいは勘定に入れないといけない。”

戦後の政治的状況に関しては何も思い描いておらず、全ては元どおりになると思っていた。これはジェッティーとヴィムが1940年初頭に蘭領インドに来たばかりだという事情からきている。

1945年6月9日、ジェッティーはまた新しいノートに書き始め、“これが最後よ！この中に収容の終わりが唄われるはずだわ。”彼女の願いは叶った。日本降伏直後に、ジェッティーと子供たちはアンバラワ抑留所を出て近くのウンガランの知人宅に入った。このため、インドネシア人の抑留所襲撃には出会っていない。10月にヴィムからの知らせを受け取った。彼はパレンバンに居てチャリタス病院で仕事をしていた。ウンガランの状況はベルシャップ期間にどんどん不穏になった。英国インド兵の輸送と共にジェッティーもセマランに避難し、そこでまたヴィムを連絡を取ろうとした。これはうまく行き、1945年12月7日にジェッティーとエルス、そしてマリアンヌはパレンバンの空港に降り立った。

“11時半に私はパレンバン空港からヴィムに電話した。彼の声聞くのは嬉しかった、信じられないほど嬉しい！！彼は私たちを直ぐ車で迎えに来て、今私たちはみんな一緒に病院内の家に住んでいる、居間と寝室と、浴室とトイレのある家に。”

ジェッティーは日記を1945年12月17日で終えている。彼女はその直前に彼女の兄が1943年、タイの捕虜収容所で亡くなったという知らせを受けた。ヴィムの従兄弟も捕虜収容所で亡くなっていた。ジェッティーは彼女の日記を次の言葉で終わっている。

“ここにはお墓がいっぱい、悲しみに沈む人で溢れている、12月のお祝いの日々が始まるとういうときに。この全てを慰めるために、神は何と限りの無い哀れみを必要とされることだろう。”

ファン・デル・クロフト

ミップ・ファン・デル・クロフト、1926年8月24日生まれで、1942年7月24日、16歳で日記を書き始めたときには、マゲランに住んでいた。この日は彼女の18歳になる兄ヘラルドが、市内の機関銃部隊駐屯所に強制収容された日だった。2日後に彼はそこからセマランの、彼の父親も収容されていたジャティンガレー抑留所に移されている。マゲランの一家はその時、ファ

ン・デル・クロフト家の母親とミップとその6人の妹達が居て、年の順に、キティー、アンドレア、ジェット、パオラとエーフィア（双子）、そしてハネケであった。ハネケは1942年7月の時点で2歳であった。

7月末から8月初めにかけて、マゲランのヨーロッパ人家族は、チャッケス・グレイン夫人も書いているように、日本人の命令ですべて市外の軍事駐屯所に移された。ファン・デル・クロフト一家は後部駐屯所のハウス D8 に引っ越した。11月に一家はまた、同駐屯所内のブロック N にある小さな家に引っ越した。それに続く1942年12月27日に強制収容が始まった。ツグラン兵舎を経て、彼らはアンバラワに送られ、その翌日、日本降伏後まで滞在することになる、アンバラワ第六抑留所に到着した。

1942年12月25日、収容の知らせが来ると、ミップは彼女の日記に別れを告げなければならなかった。

“さようなら日記さん、私はあなたから去っていかなければならない！お母さんがあなたを持って行ってはいけないというの。あなたは大型トランクの奥深くしまわれて（両親の）家に行くのよ。あなたをまた取り戻せるように熱烈に願っているわ。大切な日記、私がキャンプから出たら直ぐに、あなたの所に飛んでくるわ。そしてあなたも何とかしてなるべく早く、ミップ・ファン・デル・クロフトの所に来て頂戴ね。住んでいた所；バジェマン 12、その後、後部駐屯所 D8、その後、ジャングロノ G81、そして今、アンバラワ抑留所 C.P.。さようなら大切な日記。あなたに最後のお別れをするために散らかりっぱなしの部屋に居るの。さあ、親愛なる日記さん、さようなら、何時かあなたが戻ってきますように。”

幸い、この別れは一時的なものだということが分かった、というのも1943年1月11日にミップは書いている。

“嬉しい！....日記さん、あなたはまた戻ってきて、私はこれからどこに行くときもあなたと一緒に行くの。あなたのことで、私はひどく気に病んでいたの。昨日ハリー・デ・ラナイがあなたを持ってきてくれて、今朝、私は感謝の印に聖ヨゼフにろうそくを灯しました。私は1月1日からメモを付け始めていて、これから、借りたインクであなたに書き続けます。この短い間に随分いろいろなことがありました。”

ミップは1月1日から紙片に書き留めていたことを、日記に書き移した。ミップはこの日記が日本人に見つかったときに自分や他の人たちがどのような危険に陥るか理解しており、家宅捜索が有るたび戦々恐々としていた。しかし彼女は頑張り続ける。

“私は全く無駄なことをしているという思いに襲われる、と言うのもここには私自身や他の人たちにスサー（困難）を呼ぶようなことが書いてあるから。でも私は聖ヨセフが、この日記が不必要な人の手に渡らないように守ってくれると信じています。

ミップは当初から自分のために日記を付けていたのだが、時間の経過と共に、彼女の母親も父親も、最初は彼女が日記を付けることを奨励していたことが分かる。1943年11月9日、彼女は書いている。

“日記に対する全ての興味を失ってしまった。キャンプ全体が悲しみに包まれている。改善される見込みは全く無いけれど、でも私は日記を書き続ける、だって、お父さんはそれを望んでいるのを知っているから。”

ミップの日記にはアンバラワ第六抑留所の日常生活と、その中のファン・デル・クロフト一家の心配事が詳しく書かれている。ミップは抑留所内の年かさの娘として多くの雑役をこなさなければならなかった。同時に、一家の長女として大きな責任を担っていた。彼女は信仰に支えられていることを知っていた。将来に関してはかなり先まで考え、戦争の後には、一家は全てを無くして、もう一度、一から始めなければならないと思っていた。

“私は既に一生懸命インド（インドネシア）の料理の作り方を書いている。この後、なるべく安く暮らしていくために。”

日本降伏の後、一家はアンバラワに留まり、抑留所第六に対するペムダの襲撃を体験した。その間にも、父親と、兄ヘラルドから、二人ともチマヒに居るという知らせが入った。12月初め、ミップと母親、そして妹達はアンバラワからバタビアに避難した。兄ヘラルドはすでに避難船の雑役夫としてオランダに発っていた。1946年6月、残りの一家がオランダに向けて出発した。彼らは親族の多く住むマーストリフトに家を与えられた。ミップはその後しばらく日記を書きつづけるが、1946年8月23日、彼女の20歳の誕生日の前日に、次の言葉で日記を終えている。

“明日私は20歳になる。信じられない、何という老齢でしょう。私は新しい人生を始めることに決めました。汚れた着物は脱ぎ捨てて、つまり私の悪い習慣は辞めることにするの！”

モード

アドリアナ・モードは、1902年8月22日、ハーレルム（オランダ）に生まれ、蘭領東インド軍が降伏した1942年3月8日にはジョクジャカルタに住んでいた。彼女はそこで州立のMULO（より広範な初等教育）学校の先生だった。彼女の13歳になる息子、イエレ・デ・フリースは彼女と共に住んでいた。1931年にアドリアナはイエレの父親と離婚していた。1942年4月11日、アドリアナは“オランダに居る私の家族に”宛てて、日記を付け始めた。彼女は日記を次の言葉で始めている。

“なぜ私がこの日に限って、あるいはやっこの日に、あるいは既に今日、書き始めたかは、私にも分からない、はっきりした理由は無いのだ。私の側には1939年にイエレがシンタクラスの贈り物にくれた緑色の絹表紙のノートが置いてあり、この中には私があたながたに送った全ての手紙と、あなた方が私にくれた全ての手紙が（1940年5月以来）書きとめられている。送った殆どの手紙には返事が来ているが、しかし全てではない（...）。今私は一冊のノートに、なんの目的も無く私の思い浮かんだことを皆書きとめて、何時か、何時かはあなたたちがこれを見るときが来ることを願っている。”

1942年3月から学校は閉鎖となった。今アドリアナが教えているのは一人、彼女の息子だけであった。1942年10月‘トトク’（純血ヨーロッパ人）男性は既に収容所に送られていたが、女性は、氏名、出生、職業などを書式に書き込まなければならなかった。

“人々は、この情報を全てのトトク女性を収容所に送るために集めているのだと言っていて、私の見る所、今度はこの噂も正しいようだ（...）。昔はトトクであることを自慢してインド系の人を見下していた人々が、突然現地人のお婆さんを思い出し、インド系の血が流れていると言い出すのは全く奇妙なものだ。”

1942年12月、そのとおりに強制収容所送りが始まった。1942年12月26日、約500人の女性と子供たちがジョクジャカルタからアンバラワ第六抑留所に送られ、アドリアナとイエレもこのグループに入っていた。

キャンプ内で、アドリアナはまた授業を始め、教育をすることが許されている間は続けた。しかし1944年1月、彼女は教鞭を置く。

“私は学校の仕事を、教材不足と生徒のやる気の無さ（殆ど誰も紙も鉛筆も持ってきていない、教科書のことは言わないとしても）のため、辞めることにした。これから私は一日置きに2時間野菜洗浄をすることにしよう、そしたら私も少し

いらいらせずに済むわ。”

1944年3月、彼女は抑留所内で別の仕事を与えられた。三棟あった、いわゆるジョクジャ兵舎の内、彼女の住んでいた兵舎の組長（兵舎サブリーダー）になるように、彼女曰く“はめられた”のである。1944年6月、新しく到着する収容者達のために、日本人の命令でアドリアナは第六兵舎に移動した。組長の職はこれで失ったが、1944年8月6日、第六兵舎の住人によって、今度は班長（兵舎リーダー）に選ばれ、昇進した。

1944年9月、12歳以上の少年達はアンバラワ第六を離れて別の少年抑留所、以前のセント・ルイス協会を改造したアンバラワ第八抑留所に移動しなければならなくなった。このため、アドリアナは息子イエレと引き離された。

“私たちはその前夜に別れをし、ニッポンに私たちが泣いている所を見る楽しみを与えてやるまいと約束し、私たちはその約束を守ったが、それは簡単なことではなかった。”

アドリアナは日本の占領がインドネシア人とオランダ人の関係にどのような影響を与えるかを現実的な目で見ていた。1942年7月に彼女は既にも書いている。

“オランダであなたたちも激動の時を送っているでしょうが、でもやはり私たちとは違います。ジャワを見てごらん。4千万人の現地人、20万人のヨーロッパ人、50万人の中国人その他。これがおおよその民族構成です。占領軍がどのくらい居るのか、私にはもちろん全く分からないけれど、まあ5万人としましょう。この人たちは、自分では現地人達を‘解放しに’来たと言っていますから、ヨーロッパ人だけが彼らの敵です。つまり私たちはここでアジア民族の中の非常に小さな少数民族なのです。”

同年10月、アドリアナはインドネシアの民族主義について見解を述べている。

“私たち降伏の直後に、インドネシア人の間でインドネシア国歌が流行った。暫くしてこれはニッポン当局から禁止され、学校ではインドネシア人は先ずニッポンの国歌を習っている。これが、彼らの解放の結果よ、うすのろ。ジャップ達は陰でどんなに民族主義者達を嘲笑っていることか。しかし、我が政府も後に大きな問題を抱えることになるだろう。私の周りでは、ほんの一握りの人たちしかこれを認めようとしなないけれど。”

戦後に関するこの見解は、当たりすぎるほど現実となった。日本の降伏が、アンバラワ第六で

公式に発表された日の翌日、1945年5月にアンバラワ第八からアンバラワ第七に移されていたイエレが母親を訪問してきた。

“彼はひどく痩せ細ってしまった、いつも腹を壊していて、‘腫れた足’にもなったという。栄養不良性浮腫だ。こんな事ではないかと少しは想像していたが、しかし振り返ってみれば、彼がどんなにひどい状態に長く居たのか、知らなくて良かったと思う。”

イエレはアンバラワ第六の母の元に戻って良いという許可を得る。アドリアナは彼女の日記を1945年9月2日で辞めている。彼女の書いた最後の文章は次のようである。

“私の書き物はこれで辞めるとしよう、私達は双方とも、早急に世界のニュースを直接聞くことが出来るようになるだろうから。オランダから何を聞かされるのか、恐い気がする。時々口伝てに聞くことは、余り勇気づけられるようなことではない。しかし、兎に角、何とかなるわ、前進せよ、振り返るな...！”

1946年8月、彼女は後書きを日記に付け加え、1945年9月から1946年5月のオランダ到着までのことを手短かに書いている。マゲランの受入態勢のこと、インドネシア民族主義者の襲撃を避けるためのセマランへの緊急避難、オランダに向けて出発するまでのバタビアでの滞在についてである。

テ・フェルデ

アーヒャ・ヘリッヒャ・ヤナ・テ・フェルデ、呼び名はアチー、1928年4月11日ズウォレ（オランダ）生まれ。ロンドンのオランダ亡命政権が1941年12月日本に宣戦布告をしたとき、彼女はテルナテに住み、父親は副知事であった。アチーは大家族の一員で、兄弟5人、姉妹が3人居た。1941年12月の時点で、アチーはテルナテに居る子供たちの内では最長年で、姉のヨーケとメイニー、そして兄のアリーはその時オランダに居た。彼女の弟と妹の名は、年の順に、ハルム、ジェットイー（イケとも呼ばれた）、アルベルト、ヘンク、ヤンである。

アチーは1943年6月15日、テ・フェルデー一家がジョクジャカルタで収容のための呼び出し令状を受け取った日から日記を付け始めた。日記は、戦争開始以来一家に何が興ったかという導入部から始まっている。

“1941年12月26日、私達はテルナテを出ました。ダヴァオ湾は日本軍に占領され、私達の地域も日本の飛行機の活動範囲内に入ったので逃げなければならな

かったのです。“ノラ号”に乗って、私達はモロタイ（ワジャブラ）、トベロ、ウエダ経由でアンボンに行きました。1942年1月1日に私達は到着し、1月5日までそこに居て、今度は蒸気船“ファン・デル・ライン号”でスラバヤに向けて出発し、9日に到着しました。私達はそこで11日まで、プロンプ牧師の元に泊まりました。それからジョクジャカルタ行きの列車に乗りました。そこに今私達は居ます。お母さん、ヤン、ヘンクとアルベルトは最初はカウペルス牧師の所に、ハルムはグラスメイヤー夫人の、そしてイケと私はヴァイナ夫人の所に、1月末にウィリス大通りの家に住み移るまで泊まっていた。”

父親はテルナテに残った。1942年12月23日の最初の呼び出し令状には、テ・フェルデー家は従わずに済んでいた。アチーの弟ヘンクがジフテリアに掛かっていたため、伝染の可能性が有るとして全員‘検疫隔離’状態だったからである。実際にはヘンクだけが一部屋に離れていなければならなかったのだが、医師が家全体が汚染されている、という手紙を書いてくれたのである。

1943年6月15日に第二の呼び出し状が来たときにも、一家は様々な健康上の理由でこれを避けようとした。しかし今回は日本人医師が来て全ての申し立てを却下したため、うまく行かなかった。6月19日、テ・フェルデー家は列車に乗せられ、マゲラン経由でアンバラワに送られて、アンバラワ第八抑留所に収容された。キャンプ内で、アチーはベビーキッチンで働く。そこでは小さな子供たちのための食事が用意された。また、彼女はボーイフレンド、ラウケ・チャベスを得て、彼女自身が、初恋と呼んでいる。この恋は、暫くして彼女のほうから冷めてしまった。1943年12月12日、彼女は書いている。

“今朝、又ラウケと一緒に、上に座っていた。彼は将来のことを語りすぎる。私達が、将来は結婚する、などということも話したことが有る。もう十分、という気になってくる。”

1944年1月にラウケを含む年かさの少年達がアンバラワ第八を出なければならなくなったときにも、彼女はとてもほっとしている。

“彼のお母さんと彼にとってはひどいことだけれど、私は自分勝手に喜んでいい。”

1943年12月末に、アチーは病気になり、23日に彼女は抑留所外の病院に運ばれた。病気の原因は盲腸とマラリアの重複であった。1944年1月7日に、彼女はまた抑留所に戻ってき、盲腸は後にまた手術で取り去られる予定であった。最終的に、この手術はやっと1944年9月12日、日本人が、女性と子供はアンバラワ第八を出なければならない、と発表した日に行われた。12

歳以上の少年は後に残り、アンバラワ第八は少年抑留所となる。このために、ハルム・テ・フェルデはキャンプに残り、その他の家族は皆アンバラワ第六に移された。1945年1月にはアルベルトも少年抑留所であるアンバラワ第七に行かなければならなくなり、一家は一層離れ離れになった。この間、1944年7月にセレベス（スラウエシ）のパレパレ抑留所に居た父親から手紙を受け取った。

アチーは第六抑留所の小病院に入れられた。健康が回復すると、彼女はその病院で仕事を始めた。それと同時に、彼女は家族のための様々な仕事、洗濯などもしなければならなかった。テ・フェルド家の母親は体が弱く、アチーは出来るだけ彼女の負担を軽くしようとし、子供たちの世話も多くは彼女の肩にかかっていた。アチー自身が病気になる、彼女は罪悪感を持った。

“もう一週間、午後から夜にかけて熱が出る。今日はもう隠しておく勇気が無かった、午後には37,5度だった。さて、これから数日間ベッドに寝ていなければならない。また何もできなくて、全てをお母さんにやらせなければならないなんて、いらいらする。ベッドに寝ているのは気持ち良いのだけれど、お母さんが走り回るのを見ているのは気が重い。”

しかし一方では、厳格な改革派の母親に、アチーは不満を持っていた。ダンスやその他の楽しみは禁じられ、全ての教会ミサに行くことを義務づけられた。

“お母さんはどうして分からないのだろう、教会に行くのも、強制されて、反抗心を持って行くとしたら、行かないのと同じだということ。そしてその反抗心を私は持っている。こうしていたら、私は将来不信心になってしまうのは目に見える。そしてそれはお父さんとお母さんのせいだ。彼らが厳しく、強制するから、私は反発してしまう。”

改革派ではないライケ・チェベスとの付き合いも、彼女の母親には歓迎されなかった。これに加えて、アンバラワ第八内での改革派社会の人間関係や、キャンプ内のカソリック派の人たちとのライバル意識に、アチーはうんざりしていた。1944年7月7日、彼女はこう書いている。

“M女史は‘人々’が、彼女は改革派の人を前面に押し出していると言うのではないか、実際には最も後に置いているのに、とひどく恐れている。彼らが、バイブル会で彼女の言うことをすべて甘いクッキーのように飲み込んでしまうのは全くすごいことだ、“それで、あなた自身はどうなの？自分で最初にやっごらん、私達に押し付ける前に。”なんて考えもしないで。そしてこれがみんな改革派だから。これみんな、なくてはならないの？もうたくさん！もしここから出た

ら、改革派でない友人を探すわ。改革派はもう懲り懲り。マルタ叔母さんがいいわ。私は彼女が一番好き、彼女が百倍もカソリックでも。彼女とは少なくとも、話が出来る。”

これら全てにも関わらず、アチーは神を信じており、天は彼女を守ってくれると確信していた。アチーと母親の関係も、主に母親の態度が軟化することで、徐々に改善された。

将来に関してはアチーはあまり考えていなかったが、抑留所内でのオランダ人の立場の下落については気付いており、それは1944年4月16日に彼女が書いた、次の少々皮肉な記述にも伺える。

“全くお笑いだわ！D.テ・フェルデ夫人、旧姓ブラウワー、副知事 A.テ・フェルデ修士の妻、警官のパンツを縫って、卵15個を報酬にもらう！”

アチーにとっての大きな不満は、キャンプ内に殆ど友人が居ないことだった。幸いアンバラワ第六では双子の姉妹、リーンとネル・デーが知り合いになる。彼女たちは一緒に病院で仕事をしていた。しかしアチーはこの友情に不安を感じていた。

1945年4月19日、アチーは突然、何の理由を挙げることもなく、日記の記述をやめてしまう。1945年1月3日から、アチーの妹のイケが、やはり日記を付け始めていた。この日記は今回の草稿に入っていないが、こちらの日記は1946年6月29日に終わっているため、1945年4月19日以降にテ・フェルド一家がどのような運命を辿ったかを以下のように記す手がかりとなった。

1945年8月24日に平和回復が発表されるまで、アンバラワ第六のテ・フェルド一家に大きな変化はなかった。8月27日にはハルムとアルベルトの兄弟が少年抑留所からアンバラワ第六に戻ってきた。9月23日、マカッサルの軍事病院に収容されていた父親から手紙が届いた。1945年11月のアンバラワにおける悲劇的事件の後、テ・フェルデー一家は12月3日にセマランに避難する。1946年2月、さらにバタビアに送られる。父親もマカッサルからそちらに来たため、2月25日には一家全員が揃う。同年5月、オランダに帰還した。

グメリフ・メイリング-エーケルス

N. J. Th. グメリフ・メイリング-エーケルス夫人は1914年2月24日生まれで、1941年12月にはバンドンに、彼女の夫と、二歳になる娘のヘベルと共に住んでいた。1943年8月まで、一家は収容所外に住んでいたが、この理由ははっきりしない。8月20日に収容呼び出し令状が来る。翌日、グメリフ・メイリング氏は男性抑留所に改装された地方少年院に出頭しなければならなかった。8月23日、グメリフ・メイリングは彼女の娘と共に、バンドンの女性抑留地、チハピ

ット区に移住する。この日から、グメリフ・メイリングは日記の記述を始める。母娘は抑留所内のブランタス通り7番地に入れられる。当初はこの家を、もう一人の女性とその二人の子供達と共に分け合っていたが、収容期間が長引くにつれて住人も増え続けた。グメリフ・メイリングは、そこで家長となり、これは日本人の命令を他の住人に伝えるなどが役目であった。1944年11月、チハピットは殆ど全員立ち退かされた。最後の輸送で、グメリフ・メイリングとヘベルは1944年11月15日、アンバラワに送られ、そこで第六抑留所に入れられた。1945年1月、彼女は自分の住んでいた兵舎の班長（兵舎リーダー）となった。

グメリフ・メイリングが、チハピットでもアンバラワ第六でも就いていた、ヨーロッパ側のキャンプ運営者としての役割から、彼女の日記には抑留所内での生活がどの様に組織されていたか、例えば炊事場の組織、必要な作業をするためのアレンジ方法などが繰り返し出てくる。

おそらく、キャンプリーダーとしての仕事がどれだけ大変なものか、彼女自身がよく知っていたために、キャンプの組織の仕事をする人たちに対する賞賛の記述が何度かある。彼女は‘御婦人達’が、何らかの方法で、日本人達をごまかすのに成功することを楽しんでた。彼女にとっては、これは日本人達が彼女たちを屈服させることが出来ないという証であった。チハピットではグメリフ・メイリングも少しは娘の状況について書いていたが、アンバラワ第六では殆ど見られなくなる。彼女は他の事柄について書く方を優先した。彼女が抑留所内で日記を付けることの危険をよく承知していたことは、1945年3月13日、家宅捜索のあった日の記述に現れている。

“私達が保存しておきたいものは、全てなるべくしっかりと隠しておく、私の日記とパンフレット（1945年1月28日に連合軍飛行機から撒き落とされたもの）は自分自身で持って。なぜなら兵舎のどこかに隠すより、自分で持っていた方がよいと思う、もしジャップが兵舎内でこれを見つけたら、より多くの人を罰するだろう、そうなったら私はとても、とてもひどい気持ちになるだろう。”

インドネシアの民族主義は、彼女に取っては知らないことであった。日本降伏の後、アンバラワ第六の女性達が抑留所外で買い物が出来るようになると、彼女たちは赤と白の旗をたくさん見ることになる。これについてグメリフ・メイリングは次のように書いている。

“あれは一体なんだというの？どの党の旗？現地人が今では自分たちの旗を持っているですって？そんなもの見たこともない！”

1945年9月7日、バンドンのそばのチマヒに居た彼女の夫からの便りを受け取る。これが9月15日、抑留所を出てバンドンに行く決心を彼女にさせることになり、ジョクジャカルタを経由して同月17日にそこに到着する。

“到着してみたら、私の夫はまだ来ていなかったが、私達のホスト（戦前から知り合の中国人）が急いで電話をしてくれ、そしたら彼は歩いてチマヒからバンドンに向かい、夜8時半に到着した。私達の娘は、この数年間、斜めに構えた父親の写真しか見たことがなかったが、彼を見た最初の反応は、“ほら、ママ、彼はお耳が2つあるのよ。””

日記は短い後書きで終わっている。

“この日記はジャワでの私の抑留期間に書いたものです。最初、私はバンドンの‘チハピット’抑留所に1万6千人の女性達と共にいました。その後このキャンプは殆ど閉鎖され、私達は700人ごとの束でジャワ全域に送られ、私はアンバラワ第六に辿り着きました。

ニッポンの占領中は書き物の存在は禁じられ、これが見つかるとう死刑で罰せられました。家宅捜索や身体検査の時には私も相当な恐怖に耐えました。私の書いた全ては、文学的なものとしてではなく、気持ちの捌け口として書いたものです。”

輸送と住環境

モドー（ジョクジャカルタ出身）

1942年12月21日

やはりこう来るのね：今日、多くの婦人達（純血オランダ人）は水曜日〔1942年12月23日〕に日本の政府事務所に出頭せよとの呼び出し令状を受け取った。私もその選ばれし者の1人。行けば何処に運ばれるか聞くことになるであろう。夫がまだ在宅の女性達には呼び出し令状は来ていない。

モドー

1942年12月22日

今日、残りの純血女性達に次の木曜日に来るようにという、同様の呼び出し状が来た。

チャッケスーグレイン（マゲラン出身）

1942年12月28日

ドカン、と収容令状が来た！最も予測していなかったことが起こった。27日にツグラン兵舎に出頭するようにという通達だ。持ち物：小さな折り畳み式ベッド1つ、調理道具を入れた戸棚1つ、スーツケース1つと手荷物。

大きなものは一定の番号をつけて駅へ、残りは自分で持たなければならない。おお神よ！ここまでの事態になろうとは誰も想像していなかった。またもやノート類を一緒に詰め、またもや混乱と悲劇だ。私達は戸棚か何かから始める。

欧印系なので令状を受けなかったウィリーの住む場所を探すため、伝導病院に行く。その後、警察に言って許可が下りるかどうか、彼女は何を持って行っていいのか、等と何度も何度も質問し、際限無く待たされ、こうして貴重な時間は過ぎて行く。

ウィルのために戸棚1つと幾つかのスーツケースに荷物をつめ、クリスマスの前日に病院に送った。それ以外は荷造りと荷運び。

最後の2晩はホテルに（秘密で。ブランダ[オランダ人]を受け入れることさえ禁じられているのだ。）泊まる。あの優しい人たちは私達にとっても良くしてくれた、みんなここに残る人たちだけど。ウィルのことは[G. J.]ドレクメイヤー女医が全て引き受けてくれた—経済的にも—彼女にはもう何一つ残っていないのだから。

朝、ニップ達に追い出されるように家を出てツグラン兵舎へ。丸1日そこで待たされる。―地面に寝て―畜獣の扱いの一語に尽きる、西洋婦人にとっては恥辱である。こんな事をする必要はどこにも無く、獣（けだもの）以下のやり方だ。全員これには同感。そこは悲劇的な場面であった。私はまだまだ幸いなことに、幾つかの側面にユーモアを見ることが出来る。ツグランから出発し、歩いて駅まで行く―ヨッシャが通ったのと同じ道―これはとてもつらい道のりだった。私のケボン[下男]とM家の人たちが来て、私達の荷物を運んでくれた。駅には敬愛すべき友人達が皆最後の別れにきて居て、こうして私達は名も知れぬ目的地へと旅立ったのだった。

モードー

1942年12月30日

ここ、‘収容所’に今私達は居る。ジョクジャカルタから80キロメートル、マゲランから40キロメートル、そしてセマランからも同じくらいの距離だ。全てがどの様になったか、できる限り順序立ててお話ししよう。先週の水曜日に、約100人の最初の女性達の一団がニッポンの政府事務所に集まった。ある決められた時間の中に入り、1人ずつ呼ばれて番号の付いた布切れを付けられ、椅子の並んだ部屋に入らされた。そこで、重要そうな書類の束を受け取った。全員が中に入った時、何人かの日本人とジャワ人が入ってきた。日本人が演台に上った。私達は全員立ち上がり、お辞儀せねばならず、それは男性達によって重々しく返礼され、そして全会衆が座った。1人のジャップを除いて。この男は[1942年の]8月に私が職探しに行った時に会った男だった。この人物はとても美しい演説を日本語でしたが、私達にはもちろん1行たりとも理解できなかった。

ジャワ人の1人、ポーブン-ディグール¹に収容されていた、オランダで弁護士になる勉強をしたことのある、つまりオランダ語が立派にできる人物が、同じ話を（高地）マレー語で繰り返し、このため内容は少ししか分からなかった。ただ、セマラン州のある場所に送られることだけは理解できた。最後にオランダ語を喋るジャップが舞台上に登場し、私達からの質問を受ける用意が有ることを明らかにした。それからまたお辞儀をし、家に帰った。

さて、これが水曜日の朝のこと、木曜日の朝6時半にはわれわれの大きな荷物を列車に乗せなければならなかった。土曜朝にはわれわれ自身が出発だ。許可された持物の量は家族数によって決まり、私達のは戸棚が1つ、食器棚1つ、ベッドが2つ、スーツケース2つにバケツ2つ。土曜日には、自分達で運べるものは手荷物として持って行くことが許されていた。[.....]

¹ ポーブン-ディグールは、ニューギニア（イリアン・ジャヤ）南西部に有った強制収容所で、蘭領東インド政府により、インドネシア人の共産主義者や民族主義者が収容されていた。

この夜、眠ることなどできないというのは当然だろう。単純に、そんな暇は無かったし。ベッド枠はすでに解体、梱包し、蚊帳は戸棚に、できる限り多くの本と共に詰めてあった。数時間、床に置いたマットレスの上に横になったが、眠ることはできなかった。蚊が煩さすぎたのだ！5時に使用人達（私がまた幾らかの収入を得るようになってから、コキ[料理女]の息子も家で働いていた。私がお家を空ける時にはその方が安心だった。）が再びやって来た。そして朝の光が射し、全ては用意されていて駅に運ばれるばかりだった。他の人たちの戸棚は全体をマットで包まれていたのに、私の鏡付き戸棚は梱包されることも無くそのまま運ばれ、鏡がどうなることか冷や汗物だったが、どうやら壊れることも無く到着した。おかしな事に、彼らは私達の行く先をどこまでも言いたがらず、ただ、涼しい気候の所に行く、と言うのみだった。しかしアンバラワと言う名前は執拗に言い交わされていた。

ブルゲルーダウフィェス（アンバラワ出身）

1942年12月31日

ほらごらん、私は収容所入り、ぎりぎり今年中に。ジャップは私達を[鉄条網の]中に押し込むのに何とか間に合った。第二クリスマスの日ジョクジャカルタの人たちがきて、これはひどかった、と言うのも彼らは家に入ることになると思ってすごい荷物を引きずってきたのだ。彼らはエンペル[外廊下]も無い納屋の中の、2メートル四方の小部屋をあてがわれた。そして荷物の半分は来ていない！全ては交錯して駆け回り、大混乱だ。最初の夜にベッドに寝た人はほんの一握りだった。

幸いにもヴィム、ジャンヌはこの中に居なかったわ！いいことではなく、彼女は子宮炎で病院に入って居ただけだけど、でも私はこれを聞いた時、筆では書き表わせないくらいほっとした。彼女のことはものすごく心配だった。フロート医師と一緒に来ていて、[医師のJ.G.]ホルンシェル氏や数人の看護婦も一緒に、ジョクジャカルタ組が来たこともまだ知らなかった時、フロート医師に呼び出された。私はジャンヌが気絶したかもっとひどい事になったかと思って駆けつけたが、彼は私に挨拶するために呼び出しただけで、直ぐにジャンヌの話をしてくれた。それからすぐに私はヴェラを見つけ、ゲルダ・エンデンブルグ、プラウス夫人、パウテラール夫人、フィッチャ、ネッティー、つまり知人をどっさり見つけた。少し経ってから私達も中に入る事が許された。最初は死ぬほど驚いた。ヴェラもゲルダも子供達と一緒に、何もない小部屋の中で床に座っていた！有るのは幾つかの鞆に入れた食料と衣類だけ。旅に疲れ果て、つまり、全くひどい状態だ。

私はそこら中からクッションや毛布をかき集め、私にできることは皆したけれど、それでも大したものではなかった。次の数日は彼女たちのために買い物しっぱなし、彼女たちは外出を許されていないからだ。そして我々もここに入らなければならないという根強い噂。神経が逆なでされる。

そして一昨日突然、我々150人もが体操場に行かなければならないという知らせ、そこは窓も廊下も無く、天井に隙間が開いているだけの場所だ。その時私はひどく泣いた、本当にどうして良いか分からなかった。雨が降ったら、子供達と一緒に何処に居たらよいのか。今は毎日雨が降っているというのに。ウェドノ [地区長] もひどい話だと思い、最終的には幸いにも第六兵舎に入ることができた。そこに今私は居て、それほど悪くもない。私の部屋は長さ4メートル、巾2.50m。短い側の向こうは廊下なので壁があり、反対側はカーテンで仕切られている。中通路側は戸棚とクレー [簾] の壁で、前は日除けが下がっている。見られたものではないが、私が例えばマリアンに授乳している時に外から覗かれることはない。子供達にも適当な場所があり、マットの上ではエルスが楽しく遊べるだろう。

チャッケスーグレイン

1943年1月1日

アンバラワ保護収容所！これをどの様にか書いたらよいのかまだ私には分からない。話すことは山ほど有り、そのたびに「これは覚えて置かなくては、これは書いて置かなくては」と思うのだけれど、その5分後には結局何にもなりはしないのだ、と考えてしまう。この大騒ぎの中で今私に分かっている唯一のことは、私のケボン [下男] は最後まで忠実に私を助けてくれたこと、最後に宿を貸してくれたあの家族 (アンボン人) は私達の状況緩和のために全てのことをしてくれたことだ。そしてシュワンク家の人たちは私達を2日間快適に泊めてくれ、そしてこの収容所で私達は無料給食風食事を与えられることだ。

あとは、がらくたと大騒ぎと騒音と水漏れと身を切る寒さと隙間風と埃と疲れ。私達はできる限りのことはして、そしてこれが長く続かないことを望むのみ[.....]。

私達に有るのは1人2平方メートルの権利。私は抗議する。雌鳥でさえ繁殖するために広さ2平方メートルの歩き回る場所の権利が有るのだから。私達も今は雌鳥のようなものかもしれないが、しかし2平方メートルには大きすぎる。何人かの母親達は途方に暮れている。子供たちと一緒にでは尚更大変だ[....]。

時々私は完璧に参ってしまう。そんな時、私は自分のカーテン小屋に引き下がって横になるが、それも収容所内を野火のように駆けめぐり、知れ渡ってしまう。

ファン・デル・クロフト (マゲラン出身)

1943年1月2日

先週 (1942年12月26日) には、私達はまだがらくたに囲まれ、散らかしっぱなしの絶望的状况の中で忙しく荷造りをしていました。4台のベッドとマットレス、洗面器、大型トラ

ンクと箆筒を駅に運んだその後にはです。ジョクジャカルタ[から来た人々]は、食器棚や応接セットなど、私達よりずっと多くの物を持ってくることが許されていました。アンバラワ[から収容された一団]は、殆ど何でも持って入ることができました。そして彼らは、私達がジャティンガレー²に行くと言いました。

マミーは平静さを失い、叫び続けました。それで、カノコ草の鎮静剤を飲んで少し休息しました。ハネケはその日ひどく風邪を引いていてすぐに泣きべそをかきました。夜遅くまでかかって、みんな梱包しました。最後の夜、アンドレアとジェテケと私は床に寝ました。[それは]少々硬かったわ！

次の朝「1942年12月27日、日曜日」、私の体はすっかりギクシャクしていました。急いで残りを梱包[しなければなりませんでした]。これは大変なことでした。まるで麻酔をかけられながら動いているみたいなのです。私の避難袋には必需品を入れました。それは、ヘアピンの箱、アメリカの首飾り、小間物、ヘアブラシ、私が使っていたパパの銀製食器、爪切り、髪切りバサミ、ポケットナイフと鉛筆入り小袋、全て完璧。全て、すぐに梱める所に有ることになる！大きなバラン[荷物]はグローバッキェ[荷車]に、タップとヴォーニクのバランも、積み込みました。地区を出た時、橋の上に3人のニップが立っていて、私達の家を鍵を受け取りました。

ヴォーニク婦人とマルタはドグカル[小車]に乗り、アンドレアと私はベチャ[自転車タクシー]で行きました。「その避難袋を、このドグカルにお乗せなさいな」とヴォーニク婦人が呼びました。私はあの重い荷物が無くなると思うだけで嬉しくなりました。機関銃部隊兵舎[ツグラン]に来た時、私達の前グループが、歩いて駅に向かった所でした。私達は急いで車をおりて手を振りました。知った顔がもう何人も居ました。ベチャの男が料金を請求しました。私は避難袋を持っていないことに気が付きました。ドクカルに行きました。ヴォーニク婦人はもう車代を払い終わり、避難袋のことは見向きもしなかったのです。ひどい気持ち！目から涙が溢れてきました。私は無くしてしまった首飾りを思いました、可愛いうす青の[首飾り]、パパの赤いスピッツファイヤーの[ブローチ]、私の思い出帳、ベルギーの切手、腕時計、ティツ叔母さんからもらった、ハネケがまるで子犬のように、可愛い犬小屋から這い出てくるところの写真、それにまだ靴1足、ワンピース2枚、新しい下着、私の新しい室内ガウン！ひどい、思い出すにはあまりのことです。多分、これからもっと沢山無くすことになるだろうと、自分自身を慰めました。

門の前で、私達はずっと立っていなければならなりませんでした。私達がほとんど最後で、8つの大型ハモニカ式トランクと袋を持って中に入りました。クーリーに手伝わせることはできました。私達は何人で、どれだけお金を持っているか申告させられました。家長は皆、番号の書かれた(私達はM89だった)赤と白の布を受け取りました。その夜、私達はまたぎこちなくマットに横になり、ほとんど眠りませんでした。

² ジャティンガレーはセマランの刑務所だった。

次の朝[1942年12月28日、月曜日]、また荷物を集めて詰め込みました。10セント払えば、トランクはトラックで運んでくれるはずですが。9時半頃、袋やら包みやらに荷物を詰めて、駅に向かって歩き始めました。列車に乗ってから、私達はラングハウト婦人やマレイス[婦人]などにひどく甘やかされました。アイスシロップやクッキー、小さな子はおもちゃの動物をもらいました。列車が出発するまでに優に2時間はかかりました。どこに行くかは、それでもまだ分かりませんでした。

やっとのことで私達は出発しました。アンボン人はまだ私達に手を振ってさよならをしてくれました。途中で雷が鳴り出し、どしゃ降りの雨の中でウィレム一世(アンバラワの駅)に到着。やっぱりアンバラワだったのです。雨が小止みになるまで駅で待たなければなりません。多すぎる荷物はまたトラックに載せられました。霧雨の中を、ほぼ3時ごろに、この放棄されたタンシ[兵舎]に着きました。全てはみすぼらしく見えました。居心地の悪い思いが、特に大部屋の簡易ベッドに寝なければならないと聞いた時にはひどくなりました。

ジョクジャカルタ組みは既に来ていました。ツルース叔母さんが急いで私達の所に来て、私達(あるいは大家族)は別部屋がもらえる、と告げました。彼女は私達を、沢山の人が羨ましがるとこの部屋に連れて来ました。マミーはツルース叔母さんからベッドを1台と籐の椅子を2脚貸してもらいました。私達はその夜、積み重ねられた簡易ベッドで、まだ簡易マットレスも無く寝たけれど、私達だけで居心地良く別部屋に居て、ドアを閉めて喧噪を締め出しました。次の朝、少しずつバラングを積んだトラックが到着し始めました。ベッドに簡易マット、完全に中身のはみ出した私達の箆筒。クーリーの手伝いで中に運ばれ、組み立てられました(チップをあげて)。とても良く寝られました!!!

モードー

1943年1月2日

木曜日に、先送りする荷物を出してしまうと、一段落着いたが、しかし余りゆっくりはしてられない、まだ始末することが沢山有る。ペットは連れて行けないのでモリーとグライス[二匹の猫]の行き先を見つけなければならず、これは幸いうまく行った。特にモリーを残していかなければならないのが私達にはこたえた。もう一度彼女に会うことが有るだろうか？

持って行けない家具は家に残しておくこともできる。ニッポン政府が私達のために‘預かって’くれるそうだ。しかし彼らに過大な要求や期待をしない方が賢明に思われる。だから私はできる限り売り払った。私達の自転車などだ。もちろん全ては安すぎる値段でしか売れなかったけれど、何がしか有れば何も無いよりましだ。全ての女性達が同様に考えたわけではない。出発する前の日に、自分のピアノを300ギルダーで売ることができたのに、1年前に600ギルダーで買ったものだから、という理由で売らなかった女性を知っている。もちろん彼女は、もう二度とそのピアノを見られはしない!私の3つの大型トランクも持って行く事がで

きないので物を詰めて知人に預かってもらった。心配なのは、この人たち（夫はまだ工場で働いている）も、もうあまり長く自由では居られないのではないかと、という事で、そうしたら預け物はやはり無くなってしまいうだろう。私達は、‘丁重な’やり方で略奪されている！最後に家に残ったものは知り合いや使用人に分け与えた。ニッポン用に残しておくよりその方が良い。

最後の二晩はホテルに泊まった。土曜の朝はそこで朝食をしたが、幸運にもパンが有り、大当たり！この一週間はジョクジャカルタの殆どのパン屋で小麦粉切れになり、1日中米食に頼らなければならなかった。この収容所でもやっている事だけれど。最悪という分けではないが、慣れるまで大変だ。

モード

1943年1月4日

12月26日土曜日、つまり第二クリスマスの日、私達は手荷物を持って8時に私達の家正面の競技場に集合させられた。そこで長々と待たされ、警官が、私達を40人ずつのグループに分けた。列車の車両1台分だ。やっと最初のグループが私達の家すぐ後ろの駅に向かった。5分ばかりの距離だが小さな子供と荷物を抱えた女性にとっては遠すぎる。1人途中で倒れたら、荷物用のトラックが来た。私達は最後のグループだったのでその車に乗っていく事ができ、私達は‘上流階級風’に駅に乗り付けた。

もちろん住人の全ての階層の人たちが見に来ていた。ジョクジャカルタに残るオランダ人全員が道沿いに、そしてその後プラットホームに立っていたであろう。ヌネス婦人も居た。私達は機嫌良く、歌を唄い、列車が出発する時には“また会いましょう”と呼び合った。3食分の食べ物と飲み物を持っていて、レバーのセパン、ピサング、お茶にケーキだ。こうして私達は慎重な警護の下、長い列車の4等車両に乗ってジョクジャカルタからマゲラン経由でアンバラワへ向かい、のろのろとした5時間近い旅の後、午後4時近くになって到着した。それぞれの車両の前後のバルコニーに警官が立ち、小型の3等車両にはニッポンが3人同乗して何回も人数を数えに来た、これほど彼らは私達の事を心配していたのだ！

モード

1943年1月5日

まだ私は、なぜ私達が収容されたかという理由を書いていない。私達をインドネシア人から守るため！もう何ヶ月も画策され、扇動されているにもかかわらず、その方面からの危険はどこにも見られないけれど、とにかくこれが公式な理由なのだ。なかには、1月[1943年]には[インドネシア]民族主義者が政府内でより多くの権限を持つようになり、その前に私達の‘安全

確保’をしなければならず、これはアメリカが白人に何か有ったら報復措置を取ると日本を威嚇しているからだ、と言う人も居る。私はこれは全く信じていない。

どうであれ、私達は今‘安全に’鉄条網の中に居て、6人ほどのジャワ人警官に警護され、時々それを数人の日本人達が監督している。私達の安全に対する危惧は非常に大きく、私達はここを出る事も許されないほどだ。家族や知人の訪問を受ける人は、数人の警官の付き添いの元に収容所の入り口でほんの少し話したら訪問客はさっさと退出しなければならない。私達は囚われの身だ！！

モードー

1943年1月10日

12月26日土曜日[1942年]、丁度三時半にアンバラワの小さな駅に入ったわけだ。そこにはバスやトラックが待機していて、私達を数分のうちに収容所に運んだ。私が最後の日にジョクジャカルタで歯磨き粉の箱を買った店の老植民者は、私達がアンバラワに行く、という「フム、それはあんまり良くないね。それじゃああんたたちはきっとあそこの古タンシ[兵舎]に行く事になるよ。」と言った。後に彼自身もここに収容されることになった、あの老主人の言った事は当たっていた。私達は当時、我が政府から不適格とみなされたジャワ兵士用の兵舎に居る。

敷地は察する所 200 掛ける 500 メートルで、その上に 10 ほどの兵舎、あるいは納屋が建っており、そこに私達は‘住んで’居る。私達の‘部屋’は広さ 2、30 掛ける 2、50 メートル、つまり私達二人用で 6 平米に満たない。私達のベッドがそのうち 4 平米を占め、残りは‘着替え場所’で、箆箆はその全体、食器棚は半分、広い中央通路にはみ出している。あの 1、50 メートルはもう少し狭くしても良い、と私達は思い、他の人も同感である。数日前、ここに‘高官の訪問’が有り、その時いろいろな棚がはみ出しているのは紳士方のきちんとしたお目に触ったらしく、われわれの指導者は、箆箆など、はみ出しても 10cm 以内にするよという命令を受けた。もちろん、それではどこに置いたら良いのかという事は言わずに！

今私達は、ここにまだ山ほど残っている兵士用簡易ベッドを積み重ねるようにして、二つのベッドを上下に重ねれば、2 平方メートルが節約できるわけだ。私は、私達の‘部屋’を指定された時、つまり、われわれの番号を床に見つけた時に湧き上がってきた気持ちを説明する事はとてもできない。それは絶望と怒りとユーモア（しかしひどく苦々しい）と、やり場の無い憎しみだった。考えてもみてごらん、長い、木造の納屋に素焼きの屋根瓦、その床石（大きな青いタイル）にチョークで番号が書いてある所を。約 2 メートルの高さに梁の枠が有り、2.30 掛ける 2.50 メートルの升が作られていた。納屋の照明は暗く、中は全くがらんどろだった。

幾人かの女性達は泣き出し、子供たちはベソをかいたが、長い間そんな事をしている時間は、幸いな事に、無かった。アンバラワはマラリアで有名な所だったので、早急にベッド

を組み立てて蚊帳をその周りに付けなければならない。先ず、私達の荷物を探さなければならなかった。先送りした荷物全ては外の、納屋の間に置いてあったからだ。いや、全てではない。多くの人たちの荷物はまだ来ていなかった。幾つかは今日になってもまだ来ていない！イエレは幸いにも私達の荷物を直ぐに見つけ、住まなければならない納屋からそれほど遠くなかったので、力を合わせて全て中に運び込んだ。始めは椅子とバケツが1つずつ見つからなかったが、数日後に別の納屋で見つかった。誰かがどうも‘借りて’いたらしい。

私達のベッドは蚊帳が固定されていて組み立てるのがとても簡単だったので、すぐに終わり、イエレはその後隣人を手伝い、私はさっそくあれやこれやと荷解きを始めた。その間に収容所横の道沿いの長屋に住まわされていた女性達が、コーヒーと温かなスープを持ってきてくれ、もちろん喜んでいただいた。その後すぐに私達は寝た。1つのベッドと一緒に。もう1つには知人が彼女の娘と一緒に寝ていた。彼女たちのベッドはまだ届かなかったのだ。私達は疲れ果てていた。この収容所の最初の住人は私達ではなかった。1日前に、マゲランのグループが来ていて、私達の次の日にはマゲランからの残り組みが来、その間にもジョクジャカルタからの残り組みがここから4キロほどのバンジュビル[11]に向かうのを見た。

それから数日後に、アンバラワ住まいの女性達、私達の到着の日にはスープで私達を元気づけてくれた人たちも又、多くの所持品を持って入所し、彼女達は中では最も良い状態だった。マゲラン組みは箆筒とベッドの持ち込みしか許されておらず、最も条件が悪い。テーブルも椅子も無い。そこで、キャンプ内に沢山有った長椅子と支柱とが彼女たちに与えられた。

モードー

1943年1月14日

私達の‘部屋’は、こうして一方だけ本当の壁がある、白く石灰を塗った板壁に過ぎないとしてもだ。残り三方は私達で取り付けたカーテンやマットでできている。私達は今、私達のベッド枠の一部を使ってできた二段ベッド状のものに寝ている。イエレが上で寝ている。こうすれば場所の節約にはなるけれど、例えば頭をぶつけずにベッドに座る事ができないなど、多くの面で不都合でもある。私達のテーブルや椅子は、私達の‘小屋’には入らないので、一種のリクレーションルームに置いてある。

アンバラワやマゲランの人たちが居る納屋には縦の全長両側に覆いのある外廊下が付いており、全ての家族は寝室のすぐ外に屋根付きの居間をこしらえる事ができる。ジョクジャ用の3棟にはこの廊下が無く、非常に不便だ。15歳と16歳の少年達は別棟で寝ており、これを少年部屋と呼ぶ[.....]。

トイレは12センチほどの幅の溝が床に掘られており、その下を水が流れていて、そこにジャワ人風に、まあ、しゃがみ込まなければならない。幸い全て独立した扉付きの小部屋

だ。浴室も贅沢な作りとはいえないが、もっと悪い事もありえる。ここには少なくとも、キャンプ敷地内に湧いている、清涼な泉がある。

モドー

1943年2月4日

今日新しい衝撃；今年17歳になる少年達はサラチガの男性収容所³に移される。もう分かっていた事ともいえる、というのはバンジュビル[11]からここアンバラワの病院に入院していた女性達から、彼女らの収容所の大きな少年達は連れ去られたという話を聞いていたからだ。こうして今朝16歳の少年12人が、普通の路線バスで、自費で(!)サラチガに向かった。彼ら自身はそれほどでもないようだったが母親達はひどく悲しんだ。

ブルゲルーダウファス

1943年2月22日

嵐と雨とどしゃ降りが続いていて、どこもかしこも水漏れし、ついさっきも私の頭に水が流れていた。マリアンはつば無し帽を被ってベッドに寝ており、彼女とエルスのベッドの蚊帳の周りは毛布で覆って隙間風から守り、箆笥の扉は開けて、そうすると前垂れのすぐ前に来て風除けの戸になるから、それを椅子で押さえてある。そしてこれほどしても頭の毛が逆立っているほど風が吹きつけている。

チャッケスーグレイン

1943年2月22日

夜8時。このひどさに泣きたくなる。もう三日間嵐が続いている。風を避けていられる場所は何処にもない。食事は皿を膝に載せてし、それでもコップやグラスがテーブルから吹き落とされる。明かりは15ワットの電球だけ。何も見るができない。

³ 男性抑留所ジュン・エングのことで、サラチガ近郊のツンタンス通り90番地に有った旧中国人邸。ジュン・エングは1943年2月から1944年2月までの間、民間人抑留キャンプとなっていた。

ブルゲルーダウファス

1943年3月21日

ヘニー・ハンゲルブルックのところ、今朝は楽しかった。彼女は結構良い部屋にいる。小さいけれど風は入らず、大きな外廊下付き、でも家具を持ってくることが許されなかったので中は何もない。洋服箆箆さえもなく、食糧貯蔵棚だけ。支柱の上に渡した板が彼女のテーブルで、それに籐椅子と長椅子1つずつ。それ以外は何も無し。

ブルゲルーダウファス

1943年4月5日

あのひどい風はやっと鎮まり、人々もあまり風邪を引かなくなった、腹風邪も少なくなり、あの溝の上 [トイレ] ではあんまりだ。あの風はすさまじかった！そして浴室の中。私は髪を洗ってもう何回もひどい風邪に罹ったが、今はまた入浴が楽しくなった。

ファン・デル・クロフト

1943年4月18日

ヘデック [竹で編んだマット] のパゲル [囲い] が今日完成し、ここはひどく悲しい所となりました。でもまだきれいな青い山はここから見えるわ！

チャッケスーグレイン

1943年5月5日

このブロックに新客が来た、それはナンキンムシ。みんな‘ブンカルト’ [掃除] したが、もちろん効き目はない。私達が住んでいるのは居住不適格とされたタンシ [兵舎] なのだから、虫達も繁殖する時間が十分あったというものだ。とにかく、この状況もきっと私達は乗り越えられるだろう。

ファン・デル・クロフト

1943年6月11日

ああ、何という驚愕の1日だったのでしょうか！昨日突然バラング [荷物] を載せた2台のトラックが来ました。その数日前にすでにニップ達が検閲に来ていました。彼らは教室とジョクジャ地区のレクレーションルームを見ました。スフルト夫人はその時、また何人かが来る、といていました。今日、その人達が来たのです。サラチガの人たちを乗せた4台のトラックです。そしてその時突然、シスター（修道女）達もよく分からない内に、彼女たちも収容されてしまいました。マリアスクール⁴の12人のシスター達と、病院に居た7人がバンジュビル [11] に向かったのです。彼らは私達のキャンプ前で止まり、修道院長が降ろされ、彼女はここに残らなければなりません。他の5人は通り過ぎました。マリーージョセフ修道女は病院の物全て、帳簿など、提出しなければなりません。

ファン・デル・クロフト

1943年6月12日

みなさん、私はだんだん居心地よくなるようになってきたわ。キャンプは、特に夜になるとホテルのような感じになってきました。浴室ではちょっと角の向こうを覗けば他の人の裸が見え、風の吹き渡る小溝の上で、小さな壁に囲まれて用を足さなければならず、御用はちゃんと溝に落ちるように気を付けなければならないとしてもね。

モドー

1943年6月12日

昨日約70人の人たちがキャンプに増員された。今日まだ80人来るといふ。これらは殆ど老人で、父親がオランダ人だった欧印人だ。彼らはあり得ないような場所に押し込められた。

私達ジョクジャ組は寢室小屋の横に外廊下がないので一種のリクレーションルームを居間にしていたが、この新来者のための寢室小屋（畜舎の家畜入れそのもの）を作るために

⁴ おそらくヘイタウセンのフランシスカ派の人たち（尼僧）で、アンバラワのマリアスクールの教師をしていた。学校はアンバラワの端にあり、MULO（広範初等教育）学校所属の、カソリック系少年寄宿舎セントルイスの隣に建っていた。日本軍の占領期間中はマリアスクールはアンバラワ第9、セントルイス少年寄宿舎はアンバラワ第8となっていた。

明け渡さなければならなかった。だから私達は今、寝室小屋で食事しなければならない。私達の家具は、また二列に並んだベッドの間の通路に50センチもはみ出しているが、私達の小テーブルを入れるのはそれでも不可能で、そのため病棟に居る看護婦さん達を喜ばせて上げることにした。

‘新規律’の影響がまた出ているのは、場所作りの大作業が始まったのはやっと昨日、つまり人々が来るその日だったことだ。彼らは入所するとき、金銭を渡さなければならず、その荷物は全て綿密に検査された。彼女達はひどく楽天的だ。二ヶ月後には戦争が終わる、と言っている！

チャッケスーグレイン

1943年6月15日

ああ、収容所内は今ひどい騒ぎだ、また沢山の人が収容され、この人たち皆の居場所を作るため、私達は右往左往している。私の隣、ヴィースの所にはマラリアの女性がごった返しの中に寝ていて、見るに耐えない状況だ。そのもう一つ向こうにはひどい腎臓障害の女性が寝ているし、私の向かい側には骨が見えるほどやせてしまった若い女性が、2人の手のかかる子供を抱えているし、オランダからちょっと娘の顔を見に来た老婆は60歳を過ぎてこの収容所に、今や魔女の釜のように煮えたぎった状況の中に入れられてしまっている。どの人も皆神経質で怒りっぽい、あるいは病気だ。

ブルゲルーダウファス

1943年6月20日

また150人の新来者がサラチガから来た。ジョクジャ組のあの大きなロビーは今や小部屋に仕切られ、満杯だ。この人達は混血で、インド系の父親、あるいは祖先を持ち、一部の人たちはとてもインド系の顔をしている[.....]。

ジョクジャからはまた360人が収容され、伝道寄宿舍[アンバラワ第8]に入っている。彼らが来たのは土曜日だ。残念ながら私達はまだ連絡が取れない。私はジャンヌがその中にいるかどうか、とても気になる。そしてラインチェは？一度手紙を書いてみよう。サラチガ組が来る前の数日は大騒ぎだった、全てはもちろんまた最後の最後に行われ、あのロビーが仕切りで小部屋に分けられたほか、ミルクキッチン、床を壊して平らにし、全く変わってしまった。そしてそこにも仕切りを入れ、今や教室も準備が進んでいて、ということは、まだこれから来るということだ！

ブルゲルーダウファス

1943年8月15日

私の隣人クフさんは出ていった。バンジュビルの収容所 [11] に移ったのだ。そこには彼女の姉妹が居て、彼女は最初からそちらに行きたいと申し出ていた。他にも家族の関係で変わりたいという人たちが居て、たっぷり文句を言った末、やっと実現した。

ファン・デル・クロフト

1943年9月1日

今し方、今日の午後5時に、尼さんばかりが乗ったバスが数台通りました。⁵そのうち2台は15人の尼さんを乗せて私達のキャンプに入って来、残りはバンジュビル [11] 方面に向かいました。尼さん達がトラックに乗せられ、バラン [荷物] と一緒に入ってきた光景は、まるで中世か革命が興っている時のようでした。キャンプ中が又外に出てきて、少年達やみんなが急いで荷物その他を降ろすのを手伝いました。みんなとても親切でした。彼女たちはみんなからパンと卵をもらいました。マミーはタンゲルデル夫人と一緒に調理してお茶を出しました。今夜は彼女たちは診療所の待合室で寝ます。明日、第一兵舎の教室の1つに移動します。そうそう、この尼さん達は、セマランのゲダンガン孤児院から来たのです。彼女たちは、そのの尼さんが100人、今日連れ出されたと言っています。私達の病院のルナタ尼僧も今朝収容され、おそらくセントルイス⁶に入っています。マゲランの尼僧達も通って行ったと言われています。

ファン・デル・クロフト

1943年9月2日

今日、朝早くから尼僧たちは、教会の横の暗い小屋を、他の多くの人たちの協力を得て掃除し始めました。みんな笑いながらやっていました。人々もこれには驚いています。午後2時から2時半までは誰も浴室に行くことは許されません。この30分は尼僧達が沐浴するために取られた時間です。彼女たちは、他の尼僧達と同じように、7時に突然呼び出され、2時半にトラックの、バラン [荷物] の上に乗せられたのです！そしてそれまでの間、彼女たちは談話室に閉じこめられ、食べ物も飲み物も与えられず、トイレに行くことさえ許されませんでした。2人の老尼僧は耐えられず、倒れるように床に座りだしたのです！やっと同情を買い、少し出るこ

⁵ これはおそらくセマランからのフランシスカ派である。

⁶ セント・ルイス協会は1928年にフランシスカ派の神父によって設立された。これはMULO付きのカソリック系寄宿舍である。軍政になってからここはアンバラワ第8収容所として知られている。

とが許されたのですが・・・警官が付き添ってきました。ニップ達自身はキッチンに行ってミルクを頼んだりしていたそうです。

チャックスーグレイン

1943年11月7日

さらに、私達の収容所で年老いた男性が又死んだ。ここには70歳をとうに過ぎて収容された悲惨な老人達が多いのだ。今、あの哀れな人たちの人生最後の時をこうして台無しにするなんて、全く恥知らずな話ではないか！多くの人たちは現地人女性と結婚し、他の人たちはインドールブランド [欧印人] と結婚していて、この夫人達は彼らが一生をかけて働き、今は完全に放置されてしまった農場に残されている。

ファン・デル・クロフト

1943年12月23日

1月2日「1944年」には16歳の少年達が又連れ出されます。30日 [12月] はさよならパーティーでダンス公演があり、今日の午後はその練習をしなければなりません。

モドー

1944年1月9日

昨日はニップが収容所に来て、15歳と16歳だけでなく、14歳の少年も、少年ルームで寝なければいけないと宣言した。この少年ルームは収容所の隅の第一兵舎にある。汚く、湿気た場所だ。そこからは、今刑務所になっている、歴史的なウィレム1世要塞の遺跡が見える。イエレは、直ぐに喜んで移っていった。

チャックスーグレイン

1944年1月18日

今朝、大きな少年達23人が、行く先の分からないまま出発した。母親や姉妹はとても悲しみ、キャンプ全体が同情した。全てはとてもいやな方向に向かっている。[彼らは] 自分でトランクを運ばなければならなかった。警備所のそばで、あまり長く少年達のそばに立っていると警官

に怒声で追い払われた。

ファン・デル・クロフト

1944年1月18日

9時半頃、今年17歳になる少年は全員警備所に出頭させられました。24人居ました。昨日か今日中に出て行くはずでした。彼らは簡易マット無しで、全てを自分たちで運ばなければなりません。昨日の午後、彼らは炊事係の女性達とお別れの食事をし⁷、その後彼らのガールフレンドと一緒にキャンプ内を行進しました。今日、彼らは荷物をまとめて10時に出ていきました。歩いて、たぶん最初に警察に行ったのでしょうか。何人かの母親達はひどく悲しんでいました。例えば、ヤン・ファン・ダムも行っていました。彼はその母親にとっては大きな支えでした。また、ファン・デル・ワルの所の2人の少年も。夫人は最初、やっと彼らに会えたと思ったのに。ルドルフが又行ってしまったことは彼女には相当こたえたようです。さらにヤーブ・スフルト、家族が皆散りじりになり、父親を始めとして、夫人はセマランに、ヨープはここに居て、今ヤーブはどこか他の所に行かなければなりません。私達は彼らが横を通っていくと思って、ヘデック [竹マット] のところで待っていました。でも誰も通りませんでした。彼らはきっと幹線道路を通って、サラチガに行ったのでしょうか。ただ、バンジュビル [11] の少年が2人、警官に付き添われて通りました。今ここはがらんとして、死んだようです。

モドー

1944年1月29日

10日ほど前に、1927年生まれの少年達がサラチガの男子収容所に送られ、昨年2月に1926年生まれの子供に起こったのと同じことであった。今度は23人だった。こうしていれば2年後にはイエレの番だ、まだ私達がここにいて、餓死していなければ。

ブルゲルーダウファス

1944年3月10日

スモウォノ収容所から350人の人たちが来る、ソロ出身者だ。明日来るという。昨日から忙

⁷ この少年達は収容所の炊事場で雑役をしていた。そのため、炊事場係の女性達からお別れディナーの招待を受けたもの。

しく場所作りが行われた。多くの人たちは、ずれて詰め合い、学校は空にされ、つまり、大騒ぎだ。私達の場所は幸いもう狭すぎて、これ以上どうしようもない。

ファン・デル・クロフト

1944年3月11日

大体同じ頃に、ニップが、スモウオノから約400人が来るから1人用に1メートル掛ける2メートルの長さを計るようにと命令したと聞きました。キャンプ全体大騒ぎ。ある人は喜び、ある人はそうでもない。私達の所は、もう4人受け入れなければなりません。

リーダーたちはニッポン人達[の仲介]によって、小部屋に入る事ができました。ジルデルダ婦人⁸は医師の部屋に、ウィーレンハ夫人⁹、‘ケパラ II’[副長]は、あの後ろの、マリアーヨセフ尼僧と修道院長の部屋に、移動させられました。尼僧たちは尼僧たちの所に（彼女たち、つまりリーダーたちは、尼僧達をこの2つの部屋に、つまり私達の部屋とブルゲルハウト夫人の部屋に入れるつもりでした。）、そして医師は診療所に。主任神父も自分の部屋を明け渡さなければならず、教会ももう使えなくなる寸前でした。幼稚園のがらくた全てがその中に入れられたのです。私達はそれを脇に寄せ、今朝、それでもミサを上げる事ができました。ミセット[女史]はとても意地悪でした。聖餅を警備所に取りに行った少年達に、「あらあら、何てあなたたちは楽道家なの。今は教会のバラン[荷物]を運んで、でも教会は無くなるのよ。」と言い、主任神父には「主任神父、ジルデルダ夫人は、あなたの部屋を取り上げられるのではないかと、とても恐れていますよ」。そして彼女は妹と一緒に住んでいる広い場所から決して退かないのです。尼僧たちはあの広い部屋、彼女がその一部を使っている所に移り住まなければならないのですが、彼女は全く出たがりません。尼僧たちはもちろん抗議し、全ての引越しは暫く取り止めになりました。リーダーたちだけが引越し、それに兵舎1Aの人が少しだけ、例えばリーゼとかです。彼女たちは今エヴェルススの部屋に、そしてエヴェルススは彼女達の浴室の隣のグダンキェ[予備食糧庫]に居ます。彼女達は第9兵舎に戻ってピートは少年宿舎に行くか、あのグダンキェにするかを選ぶ事ができました。彼女達は庭のためにグダンキェを選んだわけです。私達の隣は、今朝、ブルゲルハウト夫人の所に[ファン] フォールンフェルト夫人とチャックスが移ってきました、4人で大部屋1つです。みんなひどく嫉妬しました。私達も、私達の隣にこんな大権力者が来るなんて、全くいやな事だと思います。

⁸ G.J.ジルデルダ・フィッサー夫人。長期間アンバラワ第六のオランダ側運営委員長だった。

⁹ J.D.ウィーレンハ夫人。長期間アンバラワ第六の副委員長だった。

ファン・デル・クロフト

1944年3月12日

ああ、私にはもうほとんど、頭の整理が付かないわ。全ては混乱し、騒然としている。もうすでに激しく引越しが行なわれ、ジョクジャ[の一団]さえもマゲラン[の一団]の所に移りました。ツルース叔母さんは第一兵舎の小部屋をもらうかもしれません。エヴェルス夫人はそこら中に場所を探しています、だって彼女はまた出て行かなければ行けないのです。私達は留まっています。彼女は何も言ってきてないので、私達は居ていいものと思っています。

ファン・デル・クロフト

1944年3月17日

火曜日[3月14日]に、スモウォノから新しい人たちが来たわけです。とても健康的で、まるでオランダから来たばかりの人たちのように見えました。彼らは出発する1日前になって初めてそのことを知らされました。出発する前の日に、部屋を出されて家宅捜索が行われました。彼女たちは糸を何巻きも持ってきました、編み物用綿糸、カーテン、敷物などです。1人3つずつトランクを持って来ることができました。ミシンや筆筒などは全て置いてこなければなりませんでした。ある収容所から、ラ・ラウ¹⁰とか言う人が一緒に来ました。[彼は]昔、軍の司令官だったのです。彼は白い頭をしていてとても優しそうでした。又それは私達がもう何ヶ月もこんなきちんとしたヨーロッパ人を見ていないからです。フルン氏はこんな冗談を言いました。「昔は彼は私の上官だったが、今はルームメイトさ。」

チャッケスーグレイン

1944年3月28日

この間にもスモウォノ住人の半分はここに来て、その中には退役軍司令官のラ・ラウとその夫人も居る。悲劇的、ある種のことは全く悲惨だ。

¹⁰ H.F.ラ・ラウは蘭領東インド軍の退役中將で、日本軍占領以前はバンドンに住んでいた。

モドー

1944年4月2日

スモウォノ住民の到来は、ここに民族大移動をもたらした。

その結果は：縮小、屋内建設、解体、引っ越し、箆笥や、ベッドや食器棚とベビーテーブルの交換、借り出し、譲与、等々。あれやこれやは、もちろん当然の、あるいは余分な、諍いや、泣き出し場面などの、精神を高揚させる場面や紛糾を伴っていた。

ファン・デル・クロフト

1944年4月4日

お話しするのを忘れていましたが、1週間前にプリンター [命令] が来て、ベッド間のカーテンやティケルス [就寝用マット=ティカル、の変形] は全て取り外さなければならず、1つの箆笥を4人で使い合わなければなりません。大家族は3対箆笥を使うことができます。こうして私達は先週の水曜日、ブロックランドのすてきな鏡付き箆笥をもらいました。当分は、絶えず誰かが鏡の前に立っています。今日プリンター [命令] が来てびっしり隣りあって寝なければならず、1家族のベッドはぴったりくっつけて置かなければならなくなりました。二つの家族の間の通路は40cm巾です。ひどいこと！大部屋にいたら、おまるを使う勇気が出ません。1度病気にでもなっごらん。彼らは「私達の風紀と習慣を考慮している」¹¹ そうな。そうでしょうとも、14歳までの男の子達と1つ部屋に寝てね！全員が小部屋にひどく嫉妬しています！でも私達もベッドはぴったりとくっつけなければなりません。出入りや、ベッドを整えるのにひどくやっかいです。

モドー

1944年4月17日

変化は次々と急速に起こり、書いていくのが追いつかない。先ず、‘小部屋’の前や間にあつたカーテン全部を取り外さなければならず、着替えなどをするのにも覆いが一切無くなった後、そのほぼ1週間後に、1家族のベッドはきっちりと隣り同様に合わせなければならぬと言う命令が来、家族間の通路は約30cm、私達はニッポンの**兵隊達**のような生活をしなければならぬ

¹¹ この文章は1944年3月26日の、民間管理から軍管理に移った時の日本当局者演説からそのまま取っている。この時から、ナカタ マサユキ大佐がジャワの全民間人抑留所及び捕虜収容所の総司令官となった。このナカタの宣言には「あなた方の件は人道に則り、あなた方の風俗習慣を考慮して正当に扱うであろう」とある。

い。こうしてそれぞれの大部屋にできた小さな空間に全ての箆筒、テーブル、椅子がぎっしりと詰められ、全てはもっと陰鬱になった。

ファン・デル・クロフト

1944年5月28日

[今は] ジョクジャ達が私達の所に [居ます]。マゲランは、ずれて行かなければなりません [でした]。[そのために] 全員がもっと小さな場所に [居ることに] なります。私達はまだ変わりません。みんなひどい嫉妬ぶりです。私達の前廊下の半分はドアを閉めて提供しなければなりません [でした]。全ての簡易寝台を提出しなければなりません [でした]。数日間はアイロン台の上 [で寝ました]。昨日の午後、簡易寝台の半分を取りに行つて良いことになりました。今や [それは] 二重に評価されています。

ブルゲルーダウファス

1944年6月2日

またもや引っ越しをした。同じ部屋の中とはいえ、ジョクジャ兵舎から75人を入れなければならない。あの3兵舎は明け渡されるからだ。月曜日「1944年6月5日」にセマランから500人が来る。私にとっては、またもや徹底的な引きずり仕事だ。でも私はこれで又結構良くなった、最初1人で居たときと同じ様な物だ。やったわ！アミーとフェミーから離れられた！！今私達は、イニ・ニコライとティヌ・メイヤーの間に居て、とても楽しそう、静かで居心地よく、ジロジロ見られることも粗探しも無い、道徳ぶった、えせ聖人ぶりも無いわ。ヨーケとディディも遙か遠くに離れ、ハニーもそうだ。私達の前には今や空の兵舎がある。月曜日には新しい人たちが来る。ここではまだ熱心に仕事が続いていて、大工仕事や掃除や、長椅子やテーブルの移動が行われている。

チャッケスーグレイン

1944年6月5日

セマランの人たち500人の到着。¹² 素敵なバスに乗って行列してきた。しかしその人達の何とひどい姿、特に子供達は青白く痩せこけている。ミープとテア・ファン・デル・メールがそ

¹² この被収容者の一団はセマランのカランパナス抑留所から来たもの。

の中にいた。ミーブは85から53キロに痩せてしまった。彼女はスラバヤのケンペ [イタイ] に入っていて、かなりいろいろあったのだ、ともかく全て並べるには多すぎるけれど。テアはひどく痩せてしまったが、いまだにやはり美人だ。さらにマルヒー・ファン・ルースト、プールウォレジャでヨスの前に医者をしていた人の夫人や、ル・プートレー家、リーンの姪とベック夫人だ。皆も言っているが、残念ながらリーン自身と彼女の可愛いアルマミア [リーンの娘] はここには居ない。全員がそれぞれの場所と温かなコーヒーを与えられた。昼食を食べたが、彼女たちは大喜びした。「ここはいつでもこうなの？」ここで守られている規則や規律に感嘆している。この面ではセマランではひどいと言う以上の物だった [...]。

何人かのシンセンな婦人達も入って来て、その人達はヤップの彼女だったという。もちろん全ての悲劇には喜劇的要素、というよりおかしさと悲しみが両方ある。「お雪さん¹³」と人は言う、「見てごらん、男が1人居る、まあ何て馬鹿な」。この‘男’が側を通過して彼について言われていることを聞いた時‘彼女’は、「ふん、私が何だか知りたかったら私の脚の間をいっぺん見て見るんだね、そしてお黙り、私達は粗暴なキャンプから来て居るんだからね。」と言った。私達は心臓が止まるかと思うほど驚いた。彼女は通称‘マリーおばさん’と呼ばれ、後になってみたらそれほどひどくもなかった。

ブルゲルーダウファス

1944年6月6日

あの500 [人] が到着、一昨日の午前中のことだ。ひどかったわ、ヴィム、何という行列でしょう！ぎりぎりまで飢餓状態の、青白い、目の落ち窪んだ人たち、病人が多く、全て陰惨で哀れだった。子供達は何かぞっとするような感じだ。年寄りのような顔をしていて明るさも色合いも見られない。おお天よ、悲嘆にくれてしまう。彼らはマランとスラバヤから来た。知り合いは1人も居ない、ディニも居らず、彼女は前の輸送でもう運ばれたという。ジェツチェ・ファビウスも居ない。マランのヨピー・ボールケもまた入って居なかった。

モドー

1944年6月9日

私達のキャンプに又500人が加えられ、つまり私達は今2,250 [人] 余になる。最後の‘新人’たちは、セマランにある収容所から来た人たちで、そこには3ヶ月間居ただけなのだが、死亡者が多発したため出なければならなかった。その前には彼女たちは事実上まだ収容さ

¹³ ユキは日本では売春婦を指すのによく使われる言葉だった。

れていた訳ではなく、幸運な人たちだ、スラバヤとマランの閉鎖された地域に住んでいた。いわゆるジョクジャ兵舎、つまり兵舎1、2と3は彼らのために空けられた。殆ど全部のジョクジャ部門は彼らが来る10日位前にマゲラン部門の兵舎に移らねばならず、これは兵舎5から9までで、私達にとっては大きな改善になった。

というのも、たとえ私達のベッドはひどく狭苦しく並べなければならぬとしても（マゲラン人は彼らと私達の数に比例して少しずつ、ずれなければならなかった。）、私達は今兵舎全体の両側にある開放式外廊下に居間を作ることができ、これは私達の最初の‘家庭’には全く欠けていた物だった。セマランから来た人たちはこの引っ越しを喜んでいる。これは彼女たちにとっては大きな改善だったのだ。

ファン・デル・クロフト

1944年8月10日

昨日11時に、3人のオランダ人男性がキャンプに居るといふ噂が広まりました。本当に、その少し後に彼らはウィーレンハ女史とお医者さんと一緒にやってきました。キャンプ中が出てきました。子供達は踊りながら母親に呼びかけました。「彼らが来るよ、ママ、来てよ、彼らが来る！」それはチマヒ [第4抑留所] から来た3人のお医者さん達でした。そこに居た75人の医師の内、15人が選ばれて列車でセマランに運ばれ、夜中の1時にその女性収容所でコーヒーをもてなされ、彼らのバラン [荷物] が調べられました。

翌朝、彼らは3つのグループに分けられ、その内の1つがここに来ました。彼らは、[暗号で] トキオと言ったらバンドンのことで、タイランドはチマヒのことだと言い、シガウイ人はスカミスキン [バンドンの刑務所] に移されたそうで、そこで彼らは5時から翌朝7時半まで房に入っていなければならなかったそうです。その後彼らはチマヒの収容所に入れられ、その収容所からこのお医者さん達は来たのです。フェルメイデン夫人は夫からの挨拶を送られ、クルル夫人も同様です。彼らは兵舎1の看護婦さん達の隣りに部屋を与えられました。

ファン・デル・クロフト

1944年9月16日

でも今、本当の大きな驚きがキャンプに来ました。木曜日に12歳以上の少年の母親達が警備所に呼ばれました。そこで彼女たちは、彼ら全員がセント・ルイス [アンバラワ第8抑留所] に、尼僧達や主任神父と、ここに妻の居ない老人達と共に送られると聞かされました。これはとてもひどいことです、特にやっと12になるかならないかの小さな男の子にとっては。日曜日 [1944年9月17日] に彼らは行きます。昨日主任神父は聖なるミサを上げ、まだ20

0の聖餅を分けることができました。テオ・ファン・レンスもロビー・パウメンもオンケ・ワッシュもオニー・ファン・ボメツも、みんな行かなければなりません。

そこは寄宿舍のようになるのです。それぞれ少年20人ほどの部屋に尼僧が長としてきて、他の収容所の神父や少年達も来ます。私達の収容所からは161 [人が] 行きます。そのためセントルイスから161人の女性や子供達を受け入れるのです。そして私達が炊事場に行くことになるでしょう。別の宗教の人たちは全く反対しています。スチフテル夫人はパウメン夫人に向かってこんな事を言い放ったのです。「もしみんなカソリックにしようとしなければね」考えてもごらん下さい！教科書は持っていても良いそうです。

チャッケスーグレイン

1944年9月19日

この頃、11歳の少年全員がセント・ルイスに集められている。全ての母親にとって大きな悲しみだ。新しい人たちがセント・ルイスからここに [来た]。

テ・フェルデ (アンバラワ第8から移送)

1944年9月20日

さて私はベッドに横になって書いています、それは・・・病棟の中・・・第一収容所「アンバラワ第6」の。ええ、この1週間の間はずいぶん沢山のことが起こったわ！ [1944年] 9月12日火曜日朝、ジャワ時間約10:00時に私は手術を受けました。全ては白く、シーツを張り巡らせて。お医者さんや看護婦さんも白衣でした。フルフネル医師が私の手を握ってくれて、私は怖がっていたわけではないけれど、それでも良い気持ちでした。私の頭の中にはこれがあって、全然出ていこうとしません。“激しき嵐よ吹かば吹け。私の周りは全て夜。神、私の神がお守り下さる。”¹⁴このために私は安心していました。17まで数えたのを私は覚えていますが、27まで行ったそうです。日本時間の1時15分前に又覚醒しました。これは目を開けたら直ぐにルナタ看護婦に何時か聞いたのでよく覚えています。全てはうまくいきました。ロデル医師はこの時期を過ぎたら危なかった、と言いました、というのも私の盲腸はひどく炎症を起こして膨張し、硬化した便が4つ入っていたのだそうです。

本当に、ぎりぎりで間に合って良かった、だって午後に見目が醒めたとき、3つの会話の断片を耳にしたのです。「収容所第1かバンジュビル [11] へ」「申し込みできるのよ」この時に、私達の収容所全体を明け渡さなければならないと発表されたところだったのです。私

¹⁴改革派教会詩編、詩編435番。

達は他の収容所の全ての男性、老人、そして12歳以上の少年達と交換されるのだそうです。ハルム [兄] はだから残されます。痛みは殆どありませんでしたが、始めの数日はとても疲れしました。疲れすぎて眠ることができませんでした。そのため、モルヒネの注射を3回受けました。フルフネル医師は、私を彼女の患者として書き込んだので、私達はきっとバンジュビルに行くでしょう。お母さんは2日目にそれを私に話しましたが、私はその時とても疲れていて少しの間泣き出してしまいました。又新しい女の子達と1から始めなければならないと思うと、とても嫌だったのです。彼女たちはもちろん既に彼女たちのクラブを作っていて、私は又その狭間でぶらぶらしなければならない、デー家の子達ととてもうまく行っていたのに、彼女たちはきっとロデル医師と一緒に第1収容所 [に行く] でしょう。そしたらお母さんは、私の知らない内に2人の医師の所に行って、私をロデル医師の方に書き替えてもらいました。それで私達は今ここにいます。

テ・フェルデ

1944年9月21日

全ては順調で、土曜日には、日曜日の輸送を考慮して抜糸が行われました。日曜朝、私は担架に乗せられ、前庭に運ばれました。それから簡易マットでトラックの荷台に、他の病人達と一緒に乗せられました。こうして第一収容所方面に向かいました。ここは良い病院で、看護婦さん達も親切です。特にファン・アウケン尼 [僧] は。

モード

1944年9月22日

イエレは他の収容所に移った。私が1946年1月以前には無いだろうと思っていたことが、1944年9月17日、日曜日には起こってしまったわけだ。先週の木曜朝 [9月14日] 突然全ての兵舎長は収容所長の所に呼び出された。私はまだ医者から安静を命じられていたため、私の2人の“副班長” [予備兵舎長] の一人がそこに向かった。彼女はひどく驚愕した顔で戻ってきて、1932年以前生まれの男の子を持つ母親は全員事務所に行くようにという伝言を伝えた。それ以上は、兵舎長は口外を許されておらず、私も私自身が兵舎長で、彼女も私には言っても良いのだ、ということを全く忘れていて、直ぐそちらに向かった。偶然その前日に一人の少年が何かをやっていたので、私達はお互いに、そして自分自身に、その事について何か言われるのであろうと言って、気を落ち着かせようとしたが、私達全員が実は他のことを恐れていて、そしてそれは当たっていた。既にその前の夜にニップ達はジルデルダ夫人に対し、12歳以上の少年全員と、全ての尼僧と何人かの老紳士達は日曜朝にセント・ルイスに移送される

と告げていたのだ。それは、ここアンバラワにある別の収容所だ。収容所第八（私達は収容所第六）は寄宿舎付きの前ローマンカソリック学校校舎 [だ]。

収容所第八はいわゆる女性収容所なので、入れ替えが必要というわけだ。ここから出ていく約160人に対して、ほぼ同じ人数を受け入れることになり、この周辺の他の収容所でも同様だ。この引っ越しは大きな衝撃をもたらし、対象となる母親と全ての長達には大変な仕事となった。ジルデルダ夫人と私にはこの両方が当てはまる。他の兵舎長には息子は居ない。私達はもちろん大急ぎで子供達の着替えの準備をしなければならず、これはその収容所を指導することになる尼僧達が、洗濯や丈直しをすることを最大限に考慮して行われた。私はイエレのために頑丈なズボンを手に入れることができた、これは彼の椅子と交換で、どうせ持って行くことはできないし、家宅捜索の時にも探索の目を逃れた物だ。

日曜 [1944年9月17日] 朝7時に、彼らはみな荷物や袋を持って、7時半に行列していくために門の所に集まった。私達はその前夜に別れをし、ニップに私達が泣いている所を見る楽しみを与えてやるまいと約束し、私達はその約束を守ったが、それは簡単なことではなかった。少年達のマットレスやトランクを取りに来たトラックはそのまま収容所第八の人たちを運んで来て、私達にとっては同時にその人達の居場所を作るための仕事があり、特に老人や病人が多いため手が掛かった。

ファン・デル・クロフト

1944年9月23日

日曜日 [1944年9月17日]、少年達は朝早く出ていきました。その後セント・ルイスから160人、老人が多かったのですが来て、ミーブ・スフレイナーも居ました。全ての少女達が今や重い大型トランクや箱（一緒に来たロデル医師の2つの大きなオバット箱 [薬箱]）をトラックから降ろす手伝いをしました。私達は勇敢にそれに立ち向かいました。私達は猿のように車によじ登りました。ニップ達は私達を見て楽しんでいました。最後に幾つかの重い荷物を持ち上げることができませんでした。そしたら1人のニップが来て手伝ってくれました。それから暫くは、よくトラックに乗せられた少年達が通り過ぎるのを見ました。

何人かが日曜午後に私達の収容所に何かを持って来て、あそこは水がホンの少ししかなく、全てが汚い、と話していきました。

ブルゲルーダウファス

1944年9月24日

しばらくの間、何も書かなかった物だわ！ここはまたもや大騒ぎだった。先週、12歳以上の

少年達と全ての尼僧や老人達も、出ていった。この近辺の他の収容所も同様で、彼らは皆、カソリック系宿舎セント・ルイスに、最初にジャンヌやラインチェが居たところに運ばれた。そこにいた女性達は他の収容所に振り分けられ、ここからは160人が出て行って140人が入って来た。ジャンヌとラインは残念ながら入って居らず、彼女たちはフルフネル医師と共にバンジュビル [11] に行った。

ロデル医師はその家族、夫人と4人の子供達と一緒に来た。なんて運の良い夫人でしょうね！ロデル [医師] はここで手術をすることができ、かなり沢山の器具を持っている。明日は又、ヘルニアと盲腸だ。もちろん又大変な忙しさで出ていったり、住み着いたりである。看護が必要な老人が多く居たため病室を整えなければならず、出ていった少年達の母親にとってはとても不快なことであった。まだあんなに小さな、12歳の坊や達！ダウもその中に入っていた。エルスは彼と感動的な別れをし、彼の妹もだ、彼女は彼が大好きだったのに。尼僧達が少年収容所の世話をすることになって良かった、医師達も一緒に行ったし、ヒーセン [医師] もね！これは大掃除だった、シーフ [ドルスト] は彼がいなくなってどれだけ喜んでいることか。

テ・フェルデ

1944年9月24日

今日の午後、私は自分の部屋に行きます。手術する患者のために場所を空けなければならないのです。ロデル医師がまた執刀します。

テ・フェルデ

1944年9月25日

ここ第十兵舎に私は居ます。ある一面は良くなり、他の一面は悪くなりました。でもきっと慣れることでしょう。トイレがとても変です。ただの溝の上に小屋があるだけ。扉は鍵を掛けられないけれど、閉まっていれば使用中ということです。その溝の上に屈んで、それでは皆さん狙いを定めて！

テ・フェルデ

1944年10月1日

今日浴室に行ってきました。浴室は長い列になって並んでいて、全体を‘乗り合い馬車’とい

います。扉は無く、入り口に衣類が掛かっていれば、それは使用中！という意味です。水入れの上に身をかがめれば、隣の小屋が見え、下から水に映った他の人の姿が見えます。とんでもなく愉快。

ファン・デル・クロフト

1944年10月6日

どの人が歩けないのかということが言われ、書き留められました。そこから、私達はここを出されるのではないか、ということになりました。誰もが皆この話をしていました。その時、いつもより早めの集合が掛けられ、ニップ自身が私達に通達をするためにやってきました。ほらごらん。私達の大変驚いた事に、9日か10日の間に500人の人たちが来るという話でした。これにはほっとしました。幾つかの兵舎（4，6，7，8と9）の広い外廊下は全く明け渡され、そこを箆箆やヘデック [竹で編んだマット] で遮蔽しなければなりません。1，2，3の兵舎の間の中間納屋も同様です。ジルデルダ夫人とウィーレンハ女史とその姉妹は彼女たちの部屋を病室にするために又明け渡し、特別食用の果物配給部屋になっていた内の1室に移り住みます。

ブルゲルーダウファス

1944年10月18日

今日、高官訪問があった、テルラルー [とても] 高官だ。そして明日は500人が来る。これが最近の週のニュースだ。どうやってこれ以上の人を押し込められるのだろう。圧縮ミートになってしまう。彼女たちはこの兵舎の広い外廊下に住むことに、これが住むといえればの話だが、なる。つまりこの兵舎の反対側だ。私は今居るところに留まり、私の窓の前の廊下を維持することになる、万歳！今回やっと、狭い側に居る私達がラッキーだったのよ！向かい側の人たちは彼女たちの廊下を失うことになり、そのことで言い争いが起きている。彼女たちの椅子は今や私達側のあちこちに置いてあり、全てが小さなスペースだ。このために私達は一層狭苦しく住むことになる（！）が、私達がまだ外に持っていた箆箆はみんな広縁の方に運び、新来者の後ろ壁になる。その後ろに、将来的にはヘデック [竹で編んだマット] が来るという、早く来れば良いが！そこに住まなければならないなんてひどいことだ、雨漏りはひどいし、箆箆で遮蔽してあるから薄暗く、むっとするし、ああまったく、なんて状況でしょう。

高官訪問のため、この数日間私達は必死になってパチョル [掘り起こし] やババット [草刈り] をし、全くよしてほしいわ。全ては一樣にきちんとしていなければならず、この数週間の掘り起こし作業のために私達の畑は何にもしていない。しかし今や全ては見事に整い、

旦那様方も何も見つけられないであろう。知ってる？ずれ動きのために、今私の廊下には楽しい新隣人が居る。ポップ・リップス¹⁵といい、二人のお豆ちゃんと一緒に、4歳の娘と8歳の息子だ。又今までとちょっと違う。イニはその又隣りに、いや違う、もう1人、間に居る、私達は両方とも私達の窓の所に留まることができて、二人とも便器の面などで是非そうしかったので、私達の間隙間ができたのだ。それでも私達は直ぐ側にいる、3人で巾1.35メートルですもの！！圧縮豆かミートと同じよ、どんどん強く圧縮される。

グメリフ・メイリング-エーケルス（バンドンのチハピット収容区から移送）

1944年11月11日

今日は新しい通達が予定されていた。今度は誰の番であろうか？午後5時に、新しい命令が出て、私達もその中に入っていた。私達のブランタス通り¹⁶全体だ！だから私達は荷物をより分け、これは持って行かなければ、あれは持てない、これもだめ、全て何もかもとても神経質だ！その時私達は物を隠し始めた、私達の銀製品は屋根裏部屋に、いろいろな別の物、例えば余った衣類などと一緒に入れた。私達はくたくたになるまで働いた。

私達の輸送は11月14日水曜日に行われる。それぞれの輸送に対して彼らは別々の指図を出し、私達が何か準備するということが出来ないようにしてある。私達1人に対して持って行って良い物は、マットレス1枚、10歳以上の人間は毛布2枚、蚊帳1つ、20キロの重さのトランク1つ、それに10キロの重さのリュックサック1つ（家長のみ）。さらには私達の腰に回したベルトに水を入れた瓶を4つ下げる。食料品、炊いた米などを入れた籠も持って行って良い。鍵が閉まっていなければね。又、10歳以下の子供は何もぶら下げていってはならず、人形などを手に持っていくことさえ禁止だ！

テ・フェルデ

1944年11月15日

本当にひどい話！今度来る人たちは外廊下に寝なくてはいけない！ヘデック [竹で編んだマット] だけが壁で、長く並べた板張り寝台の上で。もし雨が降ったらどうしろというの！！全ては大急ぎで数日の間にはもう準備しなければならないのよ！婦人達はこれを全て自分たちでしなければなりません。

¹⁵ J.C.P.リップス・アールツ夫人（呼び名はポップ）、（1908年12月10日生）は、息子のC.リップス（1936年3月8日生）と娘のK.リップス（1940年11月8日生）と共に、アンバラワ第六に抑留されていた。

¹⁶ ブランタス通りはバンドン市の一地区、チハピット民間人抑留地の中の通り名。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1944年11月18日

マットレスは火曜日に門の所に差し出し、リーダー達（班長＝宿舎長）は同日午後最後の指令を受け取りに事務所へ行った。これはムルイ¹⁷から聞かされる予定で、つまり彼は又もや戻ってきているわけだ。我々の輸送は、700人の女性から成り、そこに8人のリーダーが来る。通りの長がリーダーを選んだ。私も引き受けるよう、頼まれた。我々8人はこの日午後9時に行くことが予定されていた。

そこに行く途中、我々は非常に陰惨な出来事を目撃してしまった、ジャップがいかに女性を殴り倒せるか、ということだ。この男は後ろから、つまり男からは彼女が見えるが彼女には見えないように車を走らせた。彼は車に乗って、彼女が歩いている先5メートル位のところで止めて、この哀れな女性を完全に打ちのめした。我々は立ち止まった。これがどうなるか見たかった訳ではなく、この女性を助けたかったからだ。ジャップは最後には自分が何をしているかも分からない様子で、それほど激情していた。この女性が手に持っていた薬缶はマットレス叩きのように使われ、10セント玉のようにひしゃげてしまった。この男がやっと止めたとき、哀れな女性は口を利くこともできなかった！彼女は病院に運ばれた。

我々が事務所で受けた命令は、もちろんばかげた物で、「自らの子供のように充分たちの仲間の面倒をよく見ろ」という具合だ。そして窓を閉めなければならなければ最初の指令で文句を言うことなく閉めるのだ。付き添いの日本人に迷惑を掛けてはいけない！さらに彼は、我々がアンバラワに行くと言った。これらの指令を我々の管轄の女性達に知らせなければならぬ。我々は彼女らに全てを正確に伝え、話の最後に、「彼は永遠に嘘ばかり言っているの、この話も本当ではないかも知れないけれど」と自分達で付け加えた。

火曜日 [1944年11月14日]、この忙しい真っ最中に、1時間半も通りに整理しなければならず、將軍か何か来るからという事だったが、全く現れなかった！！それから我々のトランクが1つずつ通りの長のところで計られた。1キロでも重すぎる場合は、その1キロ分取り出さなければならぬ！5時に簡易マットレスが門へと運ばれた。誰も我々を手伝うことは出来ず、なぜなら全員名前や番号で忙しかったからだ。そうそう、子供は便器を持って行けるが、これは逆さにしてその小さな頭にかぶせ、その上から覆いを被せなければならぬ、なぜならトランクに入れることは許されないから。ふん、我々のはちゃんと中に入れましたよ！そしてこの日は我々の試験航海日だった。これは何という日であったことか。全くひどいものだわ。終わった時にはくたくたになっていて、明日はもっと多くのことに耐えなければならぬ、出発し、60時間の旅に向かうのだ！我々は夜になって石のようにベッドに倒れ込んだ。マットレスは無かったけれど、しっかり眠りましたわ！

1944年11月14日 [ママ] 水曜日、朝8時に、夜の7時になってからの出発だ

¹⁷ 1944年11月末には、スエキチ ムロイ（ムルイと訛った）がチハピット抑留地の司令官だった。

と聞いた。良かった、出発までに丸一日 [ある]。我々の予定表にはまだすることが沢山あるのだから。幸いにも1時に米の追加配給があった、これが無かったら何処で手に入れたらよいか分からない。しかしこれは素晴らしい配慮だ。米を調理する時間もたっぷりあるし。我々は数人の残留者から鶏を二羽もらい、焼くための油を借りてから朝の内に締めた。しかし・・・12時半に命令が来て、7時ではなく、2時に出発しなければならないという。

全く何という災い、我々の計画は全て水泡に帰した。今や何もする事が出来ない。全ては我々から取り上げられてしまった。なぜ今になってこんな事をするの？我々が苦しみ足りないともいうの？今になってこのいじめだ！もう我々には何をする時間もない。我々の子供達を風呂に入れて、旅の衣類を着せなければいけない。それから我々の食事をこしらえ、自分たちも風呂に入り、服を着て、出るのだ。幸いにも私達の近所にはまだ気持ちの優しい人達が居て、永久保証書を持つ残留者だけれど、彼らは我々をずいぶん助けてくれた。どれだけ彼らに感謝したことか。まだ沢山の文句、梱包それに別れ挨拶の後、リーダー達は1時半に、残りは2時にそこに居なければならなかった。我々は皆、超神経質になっていたので、整列もうまくいかない。

我々と共に医者が1人行き、それぞれの車両には資格を持った看護婦が1人乗る。リーダー達は左腕の番号付き腕章でそれと識別できるようになっていて、その番号によって乗る車両が分かるようになっている。我々のグループは、70人から成っていて、第4車両を割り当てられた。我々は遅れてきた7人を長く待たなければならなかった。小さな子供を持った母親達と、2人のとても年老いた老女だ。このみすぼらしい大勢の人たちは哀れな眺めで、この引っ越しをさせた方はさぞ自分たちを豊かに感じたことであろう。ニッポンが我々のトランクとマットレスの面倒を見るといい、トランクは鍵を掛けることが許されない。絶対中身の半分は無くなっていることだろう。この瞬間、我々は、とてもとても貧しく感じた。日本人達は荒々しく我々の周囲を歩き回るので、我々は立っていなければならなかった。さあ、このようにしなければならず、全てひっくるめて、ひどく大変なことであった。

遂に我々全員が揃い、行列が動き始めた。我々は5人毎の列になっていて、門の側の机の上に立っているジャップに取って数えやすい様になっていた。門の外には覆いのないトラックが待っていて、そこに我々はよじ登らされた。それは2分以内にしなければならず、それぞれの車で同じ指令が出ていた。それに間に合わない場合は、とにかく上に来るようにしなければならない。自分の番をきちんと待っていれば鞭で打たれることになる。もちろんこれはムルイが打つのだ。彼は常に、私達に何か興る度に、そして鞭で我々を打つ度に、ひどく意地の悪い顔で笑いながら立っていた。我々はとても早く出た。ものすごいスピードで通りを飛んでいった。15分後には小さな片隅の駅に到着した。全ては日本人達により、銃剣で閉鎖されていた。それは魅力的な光景だとは言い難かった。そこに我々の列車が待機しており、まるでその瞬間に出発するかのように、我々は又ひどく急いで飛び乗った。

列車は全く目隠しされていて、我々が最初にしたことは日除けシャッターを開け放つことだった。しかしこれには日本人が抵抗を起こした。それは禁止である。しかし、長々と話

したところ（この人達は偶然片言のマレー語を話した。）、プラットホームに向いていない側のシャッターは開けて良いことになった。これだけでも我々はどんなに嬉しかったか。我々の車両は4等車両で（通常は現地人を運ぶ物だ）灯りも水も無かった。¹⁸トイレは有ったが後の調査によって詰まっていることが判明した。我々は最大限くつろげるようにし、リュックサックでさえ座る場所として使った、というも2人の寝ている病人が居たので座席が足りなかったのだ。ここから我々の体験がすでに始まっている。そして待つばかり、5時になり、6時になった。我々の水は終わりかけ、保存食糧を食べる事にした、60時間の旅用に持ってきた物なのだが、それが傷まないかどうかは二義的問題として！しかし、慰めが1つあった。1回分の食事はニッポンが提供するという。

車両間のバルコニーには、それぞれのバルコニーに2人の兵補[日本軍の補助兵となっている現地人]が銃剣を持って監視している！そして我々の瓶が空になりかけた時、彼らに新たに[水を]頼まねばならなかった。すると彼らはジャップに我々の依頼を伝えに行き、すると事の是非はジャップのその時の気分次第である。今回の答えは是であった。リーダーだけが車両から出て良く、瓶を受け取って駅構内の大きなドラム缶から水を汲んだ。やっと7時半に我々が出発するというプリンター[命令]が出た。つまり我々はこの間中何もせずに、結局は最初の指令通りの時間丁度に出発するために待たねばならなかったのだ。これは極悪非道ではないか、全く途方も無い嫌がらせだ！

目隠し列車で我々は出発した。こうして10時半まで走り、また小さな駅でプラットホーム側のブラインドを開ける事が許されると、そこには我々のキャンプの女性が1人、バンドンからブリッツバギー[ジープ]に乗って、おいしい熱いコーヒーと紅茶を持って来て居た。彼女は私達が大急ぎで出発しなければならなかった事から、何かエクストラを受け取ることができるよという交渉に成功したのだ。彼女は新鮮なパンの入った袋まで持っていた。ああ、何という善行であろう、我々がどれだけ感謝した事か！我々は自分たちがいかにひどい状態にあったかという事をまざまざと感じたのであった。上記の人は何とか方法を見つけた、日本も我々を突然輸送した事がどんなに非常識な事であったかを認識したからだ！もちろん長々と説得、説明の後に！これがバンドン抑留地の夫人達が私達にできる最後の事であった！

この30分の後、列車はまた走り出した。我々は、夜に入っていった。我々の車両には明かりが無かったので、私は念のため、大きな上質ろうそくを入れた嵐用カンテラを持って来ていた。これはとても役に立った。しかし、何ということか、我々に随行した日本人がそれを気に入って持って行ってしまった。

散々交渉した結果、代わりに小さなろうそくをよこした！良かった、我々にまた明かりが戻った。

この間に、私は他の女性達にも緊急用のろうそくを持っているかどうか聞き、直ぐに

¹⁸ オランダ占領時代は多くのインドネシア人は3等か4等で旅行し、それは安価だからであった。豊かなインドネシア人は殆どのヨーロッパ人同様1等あるいは2等に乗った。

幾つか集まって、何かあった時のためにしっかりと仕舞っておいた。窓のシャッターは幸いな事に開けても良く、涼しい夜風を入れる事ができた。もう既に11時になっていた。子供たちは早々と寝場所を見付け、どんなに窮屈であろうと、床の上で、ベンチで、折り重なるようにして眠りに就いた。しかし、夜半過ぎにもならない頃、病人が出た。我々の看護婦は素晴らしい働きをした。

数人の女性が、過労とこの数日間の緊張のため倒れた。1人の女性は胃に差し込みを起こし、我々の‘上等車両’に横にさせねばならなかった。私が医者を連れてこなければならぬとなると（彼女は4車両向こうに居た）、全ての寝ている、半病人の哀れな人たちを乗り越えて、[そして]全てのバルコニーで‘ニョニヤ・ドクター’[女医先生]呼び出し許可を得、そして彼女と供にまた同じ道を戻らなければならなかった。この女性はその道のりで、どうして全ての病人に、あんなに暖かく、安心させるような言葉を掛ける事ができたのかは、未だに私にとって謎のままだ。この陰悪な、このように様々な事が起きる暗い夜に、それはどれだけ支えになる事か。そしてそんな夜がいかに長い事か。何人かの細菌性赤痢患者も出て、この陰湿で狭苦しく、衛生の行き届かない場所で、これが大変な事である事は言うまでもない。

どのようにしてかは分からないが、夜は終わった。沢山の悲劇ともがきの後に、朝は来た。食物の事を考える人はもう誰も居なかった。芯から健康な子供だけが何かを口に入れてみたがった。最大の悲劇は、特にこのような事態になった今となっては、流す事のできないトイレだ。そのために我々はすでにバンドンで、水を予備タンクに入れてくれるよう日本人に頼み、入れてくれたのだが、これだけ長い夜と、これだけの人々にはとても間に合わない事が分かった、私の所には70人が居るのだ。

1944年11月15日。この日を、我々は走りながら迎え、それは何と10時まで続いた！ケロヤと呼ばれる駅に着いた。我々のよろい戸は開いたままだった。しかし列車が止まった時、全てのよろい戸を閉めなければならなかった。30分間待った後、「プラットホーム側を開けよ」という命令が来た。そこ見えた物は？全ての車両のドアの前に、テーブルが有り、その上にバナナの葉で作られた皿に盛られて、米といろいろなおかず、全て現地食が用意されていた。それぞれの車両に専用食事だ。それは真に驚きであった。同時に、ドラム缶に入れた熱いお茶も用意されていた。誰も熱狂はできなかったが、これが我々にとって喜びであった事を、私は隠す事はできない。またもやリーダーだけが車両から出て、皿を中に渡す事ができた。これはうまく調理されている、おいしい、などと言って、食事が終わるとボタンとよろい戸が閉められ[そして]1時まで待った。その後は又、遅々とした走り続けるのであった。

女性達の雰囲気は申し分なかった。我々はその時互いに話し合い、その夜も列車の中で過ごす事になるかどうか分からない事、昼間の内に時間分けをして、皆交代で眠るようにする事を取り決めた。これはそれほど簡単な事ではなかったが、あちらこちらと調整した結果、何とかうまく行った。病人は、その時12人居たが、動く必要は無くした。この女性達の次が子供たちの番だ。午後の間に、又病人が増え、吐きつづけた。おそらくはあの大量の食事の所為で、我々は長い間あのように食べてはいなかったのだ！薬は非常に少量しかなく、全ては個人

所有であった。幸い胃病の有る可哀相な女性は、ジャップの許可を得て、もう少し余裕のある別車両に移る事ができた。もちろん、これはこちらから申し入れたのだ。この午後は、うめき声と痛みの訴えで過ぎていった。

夜八時に突然、大きな籠に入れたバナナを持ってジャップが入ってきた。彼は籠を置いていき、つまり私が分けるという事だ。我々は果物というものを、最低4ヶ月は見ていなかったため、誰もがこれに飛びつき、これは我々にとって大きな代価を払う羽目になった、というの、数時間後には新しい不幸と腹痛が始まったのだ。ただ悲惨というほかはない！毎度毎度新しく横になる患者が増え、我々の所には実際に場所が無くなった。床全体一杯になり、斜めになり、互いに隙間を見付け、頭は中央椅子の下に、足は端の椅子の下に入れて横になっている。こうする事で最も大勢を寝かす事ができたのだ。病人の数は30人に増えていた。そのうちの1人は、その上腎臓結石発作を起こした。この哀れな女性は苦痛を抑える事ができなかった。幸いにも、医者が注射を打ってこの女性を救った。

夜10時、我々はよろい戸を開けたままソロに入った。ジャップから、その時点で憲兵隊の手に渡されると聞かされ、それは事態の改善を意味するものではなかった。実際に、突然すべては厳しくなった。別のジャップが先ず列車に乗ってきた、恐ろしげな男であった。しかし我々の状況は実際にこれ以上持たない物だったので、私は全てを賭けて助力を頼むことにした。私は列車から降りる許可をもらいに行き、自分で責任をとるという条件で許可は降りたが、私はこれをこの女性達のためにしたのだ。私はそして駅の司令官の所に行き、彼にちょっと列車を見に来てくれるように頼み、全く驚いたことに彼は直ぐに承知した。車両に実際に乗り込む前に、彼は口と鼻を布で覆い、白手袋をはめた！

中に入ると、彼は見るからに驚愕した。我々は彼に数人の病人を見せ、我々の明かりとトイレを見せた。彼は直ぐ又出ていき、私をプラットフォームに呼んだ。そこで私は彼からろうそくを6本！！と長いホースを受け取った。自分はホースを水道につなげに行った。彼は又車両に跳び乗った。我々は何が起こるかをよく理解し、全てをなるべくしっかりと床から持ち上げ、そこに彼は水を発射した。汚れ物は後部バルコニーに山積みし、それに彼は持参したクレゾール液をかけ、それも水浸しにした！この後彼は出ていき、3人の現地人と共に戻って来て、彼らに水洗タンクに水を入れさせた。我々は彼にととても感謝した、しかし車両は水浸しでだれも横になることが出来なかったが、そこにも我々は解決策を見つけた。現地人に何枚かの古布を頼み、それで車両を出来る限り拭き乾かした。何という大きな改善だったことか！この全ては10分以内に起こった。我々の悲惨な状況を理解した、実行力のあるジャップであった。バナナは不愉快以外の物をもたらさなかった。そしてそれは際限なく続いた。とてもゆっくりと、しかし確実にそれは起こり続けた。この悲惨な、二度と忘れられない旅が一体何時終わるのか、我々には謎であった。2時になり、3時になり、又病人が増え、看護や面倒を見ている我々は次第に疲労が重なってきた。その時、突然、列車は止まった。

又駅だ。“アンバラワ”。駅はとても混雑していた。我々は寝ている人を起こさないようにと、大声は上げられなかった。我々が見た物は、最初にひじを突き合わせて並ぶジャップ

達、そしてブロンドの女性が1人、その後ろに又日本人の列、そして武装した兵補〔日本軍内の現地人補助兵〕の列、そしてその後ろに、オランダ人少年達の長い列。私は何人かの女性達を起こして、煌々と明るい駅を見せた。それは奇妙な見物だった。一体何が起きているのだ？なぜ急にこんな事に？誰もその先を考えるような理解力がなかった、誰も殆ど物が考えられなかった。しかし、直ぐにそれは明らかになった。ドアが乱暴に開き、日本人達がなだれ込み、一度に騒々しくなった、彼らはひどい声で怒鳴り立てた「ツールン、ツールン（出ろ、出ろ）」。

そう、我々は全ての荷物と病人と供にそこに立っていた。我々の子供達は服を着るにしろ着ないにしろ、そこに眠っていた。急いで、急いで、我々は手に掴める物は皆持って、病人を助け起こし、子供達は出来るだけきちんと服を着せた、まだ夜（4時半）で、つまり寒い、特に、この息詰まるような列車の後では。

4分以内に全てはプラットホームに出なければならなかった！幸いオランダ人の少年達が、我々の重いリュックサックを持ち上げたり運んだりするのを手伝ってくれた。我々は仲間達を支えるだけで精一杯だったのだ！プラットホームではまたもや全員が5列に並ばなければならなかったが、もちろんそれは無理な話であった。我々の30人の病人は立つこともろくに出来ず、皆精気を失い、助けを必要としていた。

幸いあのオランダ人女性が通訳らしく、我々を助けにきた。幾つかの落ち着いた言葉で、彼女は我々に、日本人の言うとおりにするように、それでないとは彼らは乱暴な行動に出るから、と頼んだ。この言葉に我々は少し助けられ、苦しいながらも5人の列を作った。整列した後、リュックサックは全て駅に置いて、我々は暗闇の中に歩き出し、収容所に向かった。この哀れな人達が歩く姿を見るのは、とても、とても悲痛であった。あちらこちらでまだ吐く人たちが居たが、直ぐに兵補達によって列に追い戻された。私達一隊の前、横、後ろに、こうした男達が50人は歩いていた！

腎臓結石の患者は我々の看護婦に半分もたれ掛かっていたが、直ぐに私が、援助に呼ばれた。患者はもう歩けなかった。彼女は我々が支えられる限り、全身でもたれかかっていた。我々が他の人達の速度に合わせるのは不可能であった。するとまるで最大の悪人のように、監視が厳しくなった。私の思うに、約45分くらいこうして歩いていた。他のグループの人達が何処にいるのか、私には分からなかった。この夜、私達は彼らを見ることはなかった。そして我々は、我々の荷物をなぜ置いてこなければならなかったか疑問に思っていた。

やっと我々は明かりが灯っているのを見た、とても乏しい物であったが、とにかく明かりである。あれが我々のキャンプだろうか？そう、その通り、我々は門に着き、それはジャップによって開けられた。そして中には何人もの女性と1人の男が我々を待っていた。我々は途中で既に、先頭の人担架を頼むように申し送っていた。実際に担架が我々を待ち受けていたが、それがキャンプ外に出ることは許されなかった。最後に患者を我々から滑り落とし、彼女は気を失ってそこに倒れ込んだ。[.....]

その男は我々の外科医であった。彼は我々の一隊の半分を受け入れ、直ぐに病院に連れていった。健康な者は、ひどく乏しい灯りの中を寝場所へと連れて行かれた。何かを見分け

ることは出来なかった。しかし時々蚊帳の下から手が差し延べられ、我々をしっかりと掴んだ。あるいは囁き声で呼びかける声「頑張るのよ」。しかし全てはひどく狭苦しかった。我々が居た抑留地はきれいな広い場所で、空間も当然十分あったが、ここは兵舎風で、明るくなった時、実際その通りであったことが分かった。

我々に与えられた滞在場所は木造の兵舎で、屋根が長く突き出しており、その下が廊下になっていた。その廊下が今や私達の寝場所であった。そこが我々の住居であり、寝室等であった。中に入ってくるのには、当然のこととして時間が掛かり、こうして途中で明るくなってきた。そこに居た女性達は我々にとっては母親のようであった。彼女たちはやはり起き上がってはいけないと言う命令を受けていたが、この騒ぎでどうにも目は覚めていた。あのおいしいコーヒーや紅茶が何処から来たものか我々には見当も付かなかったが、しかしそれは染みわたるおいしさであった。内部兵舎、とそれは呼ばれるそうだが、内部兵舎の女性達は、直ぐそのベッドを我々に、我々の病人や子供達に明け渡した。我々はその時一人一人、精神安定剤を飲むにしろ飲まないにしろ、全員がしばらくの眠りに就くことが出来た。私自身は2日2晩眠っていなかったの、その間に起きた全ての出来事が私の中に堆積していた。

私も深くしかし短い眠りに就いたが、ものすごい驚きで起き上がった。我々は我々のトランクが、特に我々のマットレスが、配られるようにしなければならなかった。これに付いてもキャンプリーダーは用意を整えていた。若い娘達（食事係り）が役割を与えられ、我々のバラング[荷物]を住居まで持ってきた。我々はどれが自分のものであるのか指図さえすれば良かった。本当に素晴らしい組織力だ。全ての中から自分のものを見つけた（全て無くならずには到着していた）後、我々は又納屋（アンバラワでは兵舎と呼んでいる）に向かった。我々のマットレスを木の板に乗せ、トランクをその下に置き、皿や湯飲みを幾つか取り出し、少し衣類を出せば、終わりである。その後、我々はキャンプ内の視察に行った。

キャンプリーダーはキャンプ内の女性達の間から選ばれた、2人の女性である。彼女たちは収容所内に事務所を持っている。収容所のニップ達の事務所は、その隣のドアだが、実際にはそこは収容所外で、その周りを少し離れたビリク[編んだ竹マット]で囲ってある。兵補[日本軍内の現地人補助兵]の警備室もそこに有る。

この収容所は、使用不能とされた現地兵用タンシ[兵舎]である。古くくたびれた木造物だ。11の兵舎からなっている。その間には緑の芝や小畑がまだ有る。全体を突き抜ける道が1本有り、全ての兵舎の先端がそこに向いている。この道は広々とした、「ブルバード」という名を付けられている。我々はトイレも見てきたが、とてもトイレと呼べたものではない。溝の両側にそれぞれの足を乗せて立たねばならず、その下、溝の奥深くに水が流れている。衛生という面ではもちろん悪くは無い。しかし、このような原始的なものに少々驚いた事は白状しなければならない。我々の浴室はきちんとしている。そして大きな水槽に、全ての方向に流れ出ている水が有る。炊事場は2つ有り、最初にここに来た人たちの出身地から、マゲラン炊事場、ジョクジャ炊事場と呼ばれている。それから米用炊事場が有り、米[を炊く]だけだ。前記の2つの炊事場で調理されるのは野菜のみ（もし有ればだが）。そして2つの病室が有る。1つ

はとても広く、様々な病人が寝ていて、もう1つは赤痢患者だけが寝ており、その病室は収容所の隅に隔離されている。

ここからの眺めは素晴らしい。一方にはメルバブーが、その反対側にはウンガランが見える。¹⁹本当に素敵だ。それを邪魔するのは数メートルのビリクだけ。昼食には我々が考えられる限り一番おいしい食事が出て、量もたっぷり、飛び切りおいしく調理してある。我々の胃は残念ながらこのような物に慣れておらず、多くは人にあげる事になる。我々の体調が許さなくなってしまうのだ。ここの女性達はやはり皆健康そうだ。雰囲気も生き生きしていて楽しそうだ。彼女たちは実際一日太陽を浴びていて、外気の中に居る！！ここの気候もとても良いからだ。しょっちゅう寒くて風が強いけれど、それは大した事ではない、バンドン人はもう慣れている。夜はとても早くから毛布の中に潜り込んだが、その時、雨が降り出した、ごく普通の事であるが、我々は完全に疲れきっていたので何時の間にか水溜まりの真ん中に寝ていた事にも気が付かなかった。内部兵舎の人たちが我々を起こしてくれた。子供たちは急いで彼ら自身のベッドに移し、我々は数少ない乾いた場所を探してうたた寝でもしようとしたが完璧に無理だという事が分かった。これが1944年11月18日土曜日、アンバラワにおける我々の最初の夜だった。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1944年11月20日

3時〔夜の〕に笛が鳴り、バンドンからの病人輸送を手伝うボランティアが募られた。私は直ぐ名乗り出た。私はこれを結構楽しみにしていて、まだ我々の知り合いが来るかも知れない。こうして我々20人ほどが担架を10個持って門を出、駅に向かった。列車はまだ到着しておらず、待つこと15分後にやって来た。前と同じで大勢の日本人と、幸いなことに通訳もプラットフォームにいた。ドアが開け放たれ、起きられる患者は外に出て整列させられ、我々の中には入って着替えを手伝い、担架に乗せて駅構内に運んだ。我々はしかし、ニッポンから、新来者達と言葉を交わしてはいけないと言う命令を受けていた。数十人のニッポン達が見張っているのだから、これは〔もう〕殆ど不可能なことだ。それに病人達はひどい状態で、言葉など話すこともできず、呻くだけであった！（我々が第六抑留所に来たときも、ニッポンは女性一人でも我々を迎えるために起きてはいけないという命令を出しており、これを犯せば大きな反抗とみなされるだろう。）

我々は最初の便の人たちと収容所に戻った。そこには医者と看護婦が我々を待っていた。彼らがその後の世話を焼き、〔我々は〕又戻っていった。三回の往復の後、我々の交代要員が待っていた。我々は家に帰り、彼らが後を受け持った。このように我々の兵舎リーダーが手

¹⁹ メルバブーは標高3.000mの火山。ウンガランも火山で標高約2.000m。

配していたのだ。

ブルゲルーダウファス

1944年11月20日

新しい人達が来た、バンドンからだ！1000「人」増員になる。600人は既に来ていて、あさって残りが来る。我々はこの数日間大仕事であった、数人の大工とクーリーの手伝いを得て、自分達で外廊下にヘデック壁[竹で編んだマット製の壁]を付け、バレバレ[寝台兼用ベンチ]を作った。杭や板を沢山運び、彼らの到着時にはトランクや簡易マット、バケツやたらいを運んだ。親戚は誰も居なかった、残念ね、来ると良いと思っていたのに。ディニヤリートと又会えたら嬉しかったのに、居なかった。収容所はひどく一杯よ、ヴィム、3000人ですもの！そして雨が降れば、新来者は当たり前のように外廊下から泳ぎ出てくる。

ファン・デル・クロフト

1944年11月27日

[1944年11月] 17日 [金曜日] の前の晩、金曜の朝4時（ジャワ時間）に新しい人達が来ると聞きました。ニップは、それは少しの食べ物でよい家に住んでいた‘オラン・ジャハツ’ [犯罪人] だと宣言しました。私達は囚人かも知れないと思いました。次の朝、11月17日、彼らはもう来ていました。一晩中列車の音がしていました。残念ながら知り合いは居なかったけれど、15 [才] 以上の新しい女の子が沢山来ました。2回目の輸送は先週 [1944年11月] 22日水曜日でした。[そこには] 知り合いは又居ませんでした。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1944年12月1日

この兵舎には幾つかの箆筒が有り、私達の日用品を入れるために分けられた。私達18人で箆筒1つをもらう。大きな進歩だ。

モードー

1944年12月6日

ほぼ3週間前、つまり11月半ばに、‘新しい’人々が到着し、その数は発表された500人ではなく、900人だった。その前夜、兵舎リーダー達はニップからミーティングに呼び出され、当夜に最初の人たちが列車でバンドンから来る事、全ての班長[兵舎リーダー]は3時半に迎えるため出てくる事、その間他の住人は全員ベッドに居なければならない事が伝えられた。このため私は不寝番に3時に起こさせると、すぐに遠くに機関車のきしむ音を聞いた。列車はすでに近づいていた。

急いで顔を洗い、服を着、前夜コーヒーと砂糖を入れておいたコップを持って米用炊事場にいった。150グラムの熱湯を使い、1杯の慰めを手に入れた後、門へと急いだ。‘ジャゴイエン’（自主管理者）以外にも、2人の医者と看護婦が数人居たが、最初の輸送者たちは健康な人たちばかりだったので、この人たちはあまりする事が無かった。間もなく彼らは中に入り、総勢500人であった。まるで移民のように少しの手荷物を持った女性と子供たちは38時間の汽車旅の後、暗闇の中を駅から収容所まで歩いたのだ。街灯の中を通りすぎていくその姿は哀れなものであった。急いで人数を数え、彼らの兵舎へ送られていった。

その前の2日間、女性達自身で、ヘデック[竹で編んだマット]と、竹と紐で、第4、6、7、8、と9の兵舎の外廊下を覆い、(第5兵舎は運が良かった、その外廊下は細すぎたのだ。)それと同時に長い簡易寝台を作る大作業が始められ、そのために必要な丸太や板も私達自身で運ばなければならなかった。

モードー

1944年12月8日

でも私はさらにバンドンの人達の入場について書く。彼らはバンドンで閉鎖された地区内の[比較的]良い家に住み、多くの家具と快適な設備があったが、今はここにカポックマットレスと手荷物だけで来て、何もない外廊下のまるで籠のように雨漏りのする屋根の下に露営しなければならず、それもこの雨期の始まりにだ！私達のキャンプリーダーが前もって検査に来たニップ達に雨漏りのことを伝えると、その一団の長はその屋根を修復するような資材は無く、その人達はこれまで私達よりも良すぎる暮らしだったのだから、これから悪くなくてもどうということはないのだ、と言った。私達は箆筒の中をそれぞれ皆整理して、バンドン廊下[バンドンから来た抑留者の住む外廊下]に8つから10の箆筒を置き、トランク以外にもその箆筒の中に収納場所を得られるようにした。

最初の夜は私達の兵舎に来る人は無く、第八兵舎の140人にお粥を持って行って、よそう以外には私のする事も無かったが数日後に第二輸送が来て、これは300人、第六兵舎

にも141人が来、私達は今総数358人となった。

私はこの全体のケパラ [長] で、仕事を片付けるために1/3の副ケパラ [副長] と三人の組長 [兵舎長補佐] を付けられている。もちろん、最初の週にはものすごく沢山の、すべき事があった。そこら中で私の助けや、しょっちゅう仲裁を求められた。フー!!! キャンプ内には今や3100人近い人が住み、これは昔居た兵隊達の2倍強だ。つまりここは満杯だが....、何とかやっている。今は蛇口や浴室や、バンドンの人達が名付けたように‘プルンプ’つまりWCで待つこともあるが、ここにある無比の泉のおかげもあって、押し合うようなことは無い。熱帯スクール時には我々の‘外の人達’の内、約50人は急いでマットレスを巻いて、中で臨時の眠り場所を探さなければならないが、おとなしい羊は小屋に沢山入るものだし、幸い夜にこの事態になったことはこれまで2回だけだ。‘内部兵舎’の217人は今や全員西側外廊下に居間をもらい、これは私にとってひどく頭を悩ませられた事だった。

ファン・デル・クロフト

1945年1月2日

最新プリンター [指令]: 10才と11才の少年は当キャンプを出る。ベルナルド・タンゲルデル、ジャッキー・ファン・レンス、ピム・ファン・ヘッセル、ヘンク・ストラウケル・ブディエーなどです。母親達は皆ひどく落ち込んでいます。私達はカナン-キリ [あちらこちら] で手助けをしました。

テ・フェルデ

1945年1月2日

アルベルト [弟] は出て行かなければならないのです! 今年11才になる少年は全員。なんてひどいこと! 何時かは分からないけれど、いずれにしても、2日以内に準備を整えなければなりません。全ての年老いた男性も、病気である無しに関わらず、3人の医師以外は出て行かなければなりません。

テ・フェルデ

1945年1月3日

男性や少年達の出発のために全ては忙しく働いています。アルベルトのための準備は殆ど整いました。彼らは金曜日に出て行かなければなりません。おそらくはセントルイスへ。アルベル

トが [彼の兄の] ハルムの所にいけなくて残念です。

チャックス・グレイン

1945年1月3日

明日10歳以上の少年達と医師以外の全ての男性は出なければならない。全ては又落ち込み、悲しんでいる。70歳の夫と82 [歳] の妻の夫婦が居る。毎日彼は忠実に彼女を訪問し、妻はその時間のために生きているのだが、今や彼は別れを [多分永遠の] 告げなければならず、彼女の人生最後の時は台無しにされる。本当に全く悲痛だ。そして誰も何もして上げることができない。‘ニッポンが [そう] したい’、[から] そうなるのだ。

ブルゲル-ダウファス

1945年1月8日

私の小部屋は今こうなっている。子供用ベッドのためにいかに節約できているか分かるわ。今は古いティーテーブルの側に座ることだってできる。それには窓から小椅子を取り入れる (子供椅子万歳!)。特に子供達が病気の時にはとても便利だ。もう外にあるのは丸テーブルと子供椅子1つ、籐の小椅子が2つに皿などを乗せるための小さな棚だけだ。ベッド間の空間はホンの少し、1家族1通路だ。ティヌ・メイヤーのベッドは私にくつつき、マレイケ・ニコライのはマリアンののに付いている。通路側にも仕切りはもう無く、全体が1つの大ベッドルームになっている。このノートの前の方に偶然、私の以前の小部屋の見取り図を見た。全然違うわよね?

ブルゲル-ダウファス

1945年1月10日

10歳と11歳の小さな男の子達も今や少年収容所に行かなければならないのだが、これはもう2回延期された。奇妙なこと。向かいの収容所(7)から約20人の女性達がおととい来た。彼女たちの話では、その収容所は空にされたそうだ。600人の女性達はソロへ [送られ] 400人はムンティランに [運ばれ] その代わりに男性が来た。バンドンからの病人輸送で、民間人抑留者、ひどく弱った人達だ。大勢の腫れた脚や、結核患者が居て、息も絶え絶えに周りのことも構わなくなっている。陰惨だ。さらにそこには今は少年達も居て、私達の最後の少年達もそこに行くという。その際セントルイスの尼僧の一部が彼らの世話のために行くそうだ。

テ・フェルデ

1945年1月10日

突然第七収容所の女性達数人が入って来ました。収容所長と、抑留者が出発した後の処理をしなければならなかった女性達です。一部はソロへ、又一部はムンティランに [行きました]。マルタおばさんはムンティランです。アルベルトは明日出なければなりません。第七収容所には既にチマヒからの沢山の男性が、全て病人で、数人の看護婦や医者達と共に来ています。バンドンの人達はカワッテン [禁制取引] を試みてばかりいて、時には成功もしているようです。

ファン・デル・クロフト

1945年1月11日

昨日の午後、二台のトラックがこの向かいの収容所、前第二収容所、現第七収容所の21組の家族を乗せて入って来ました。オラタという、私達の前のニップも一緒でした。彼はモミアゲさんだけれど、でも私達には親切でした。²⁰第七収容所には多くの老人と病人がいます。

テ・フェルデ

1945年1月11日

男性と少年の出発は又延期 [された]。

モードー

1945年1月12日

この直ぐ近く（我々は第六収容所）の第七収容所は空にされ、最後の21人の女性と子供達がそこから私達の方に送られ、現在第七収容所には何人かの少年と男達が入れられ、ソロから来たと聞いた。その収容所に [ここの] 男性達や小さな少年達も移らねばならず、つまりニップが最初に言ったように第八収容所ではない。つまり、いつものごとく、命令と反対命令だ。

²⁰ 1943年に、モミアゲのある、攻撃的なインドネシア人警官が居り、悪名高かった。この日本人司令官はファン・デル・クロフトに依れば外面的には似ているところもあるが親切な人間であった。

テ・フェルデ

1945年1月16日

アルベルトは居無くなりました。10歳や11歳の、まだ小さな母親っ子もいる男の子達を見るのは変な気持ちでした。アルベルトはよく我慢しました。最初に彼らが出て行き、その後で少女達が荷車でバラン [荷物] を運ぶことができました。二回目の運搬の時私も一緒に行きました。こうして又道路を歩き、ヘデック [編んだ竹マット] を見ることなく辺りを見回せるのはよい気持ちでした。でもやっぱり外に出ない方が良いのだと思います、なぜならその後、自由の無いことが余計に辛くなるからです。

第七収容所では私達も少し門の中に入り、直ぐ荷下ろしをして又即座に出ました。若者達を見るのはおかしいものでした。年寄りばかりに見慣れているし、今は私達の収容所には三人の医者以外男は誰もいません。第七収容所の男性が1人、手術を受けるために私達の病室に寝ています。彼はチマヒから来た人で、セレベスの男性も女性も子供達もみんなジャワに居ると言っています。だからお父さんも近くに居るかも知れません。これは楽しい考えです。

ファン・デル・クロフト

1945年1月17日

昨日、やっと老人達と10歳の少年達が出発しました。少女達はこの向かいの第七収容所までバラン [荷物] を運んでいくことができました。リフトフット夫人と娘 (小病室で私と一緒に働いている子) は彼 [おそらくリフトフット氏] からの知らせを受け取り、一緒に行くことができました。3年ぶりで彼と再会することができ、ひどく痩せていたのはもちろんです。あそこでも皆空腹におなかを鳴らしています(もちろん私達と同様に)。でも文句は止め[ましょう]。

モドー

1945年1月17日

昨日老人と小さな少年達が第七収容所に出て行き、今日はその影響でいろいろな移動があつて、これにはいつも沢山の複雑な問題が付き物だ。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年4月2日

噂では、この五月に500人の女性と子供達が、水の全く無くなってしまった収容所から我々の所に来ると言う。つまり又詰めると言うことだ。幸い我々の兵舎ではあまり詰めることはできない。我々は既に40cm間隔で寝ている。

ファン・デル・クロフト

1945年4月29日

第9収容所から500人の人が、‘水飢饉’のために又ここに来ます。その子供達はどぶ水で沐浴したのです！第2兵舎が明け渡されます。そこには赤十字社の看護婦と障害者達が来て、休養所のように[になります]。さらに[5月の]1日か2日に来る新しい500人のために第2, 2A, それに8A兵舎が明け渡されます。この二日間は忙しいものでした。ゼーウェン夫人と娘が同居に来ました。私達は結構な状態です。座るところは無く、幾つかのベッドの間に狭い通路があるだけです。そこら中が又ひどく‘リブット’[騒然と]しています。

ブルゲル-ダウファス

1945年5月2日

又500人が来る！このスラバヤ収容所²¹から、水の欠乏のためだ。全般的には、この水は潤沢とはいえないまでも何とかなっている。私達はより窮屈に押し込められるが、これはほとんどの通路を無くし、母親と子供を1つのベッドに入れる事で成り立っている。私はすでにエルスと一緒に1つのベッドを使っているので、これは変わらない。ただ、私のベッドの間の空間はほとんど無くなり、出る事もままならず、ゆっくりと横ばいするしかない！ベッドを整えたり、拭き掃除をするのはほとんど不可能だ。幸い私にはまだ小窓とエンペル[外廊下]がある。いつでも外に行けるし、窓は私だけのものだ。そこは他の家族が通る必要も無い。私の両隣のように大きな窓だと、その必要があり、とても自由とはいえない。

²¹ この女性達はアンバラワ第9収容所、旧マリア学校から来た。アンバラワ第9には、1943年10月から1945年5月までの間スラバヤ、セマラン、バンドンからの1300人ほどの女性が抑留されていた。この収容所が1945年に閉鎖された時、抑留者達は残りの3つの収容所、アンバラワ第6、バンジュビル第10、バンジュビル第11に分けられた。

チャックス・グレイン

1945年5月3日

5日前から、第9収容所（セントルイスの上）からの500人が又ここに入れられるのを待っている。私達は1200人から、時の経過と共に3500人になり、すべてはこの調子で進んでいく。まあまあ落ち着いて、抵抗も少なくなってきた。先回はニップ自身が500人のバンドンの人達をエンペルス [外廊下] に入れるためにできる限りの援助をしてほしい等々といった依頼をしてきていた。今回はケパラ [長] から簡単に話があり、全員があきらめて仕事に掛かり、それぞれの場所をより一層狭くした。今では2つの兵舎が立ち退かされて他の兵舎と一緒に入れられ、我々は次の気まぐれを待つのみだ。最初は2日に、そして4日に、そして今ではやっと7日に来るといふ。何故？

モード

1945年5月5日

この1ト月ほどは又いろいろなことがあったが、そのためにかえって私はそれを書き留める機会がなかった。14日前に第9収容所閉鎖（水の欠乏のためだ。そこではずいぶん前からその問題で苦慮していた）のため我々の収容所に500人ほどの場所を作らなければならないという通達を受けた。昨年、“セマラン”が私達の収容所に入れられた時と同様に前方の3兵舎は空にして、そこに住んでいた人達はその先の兵舎に引っ越さなければならない。兵舎リーダー達は、詰めたりベッドを取り替えたり（例えば子供の1人居る母親は1人用ベッドに、子供2人の場合はセミダブルに、といった具合だ）して又何人かの人を受け入れるようにしなければならない。私は35人を受け入れたので、私の兵舎は今や377名を数えるようになった、小さな村のようなものだ！全てをうまく考案し、悪いことも我慢して整え、新しい輸送者達を落ち着いて迎えられるようにしたと思ったらそのとたん、収容所ニップは、兵舎リーダーは皆その兵舎の前方に住まなければならないという命令を出して驚かせるのであった。それは収容所の入り口の方向で、警備所や収容所ニップの住居のあるところだ。ええ、殿方はこのごろ収容所内に彼の‘秘書官’と一緒に住んで見える。

兵舎リーダーの半分、その中に私も入るのだが、に取っては又引っ越しということになる。私はやっと扉の近くの場所に移動したところなのだが、又私の全ての持ち物と共に兵舎の反対側にある小部屋に移らなければならない。ここに今、わたしは他の3人の婦人達と共に住んでいる。この小部屋の長所は、大きな納屋の中の場所よりも静かであるということだ。短所の方は、今は炊事場から100メートル以上離れてしまい、50 [メートル] 以上浴室やトイレから離れてしまったことだ。

ファン・デル・クロフト

1945年5月5日

昨日の朝、思いがけなく300人もの人達が第9収容所から到着しました。昔知っていた頃は太っていた何人かの人は、今は見分けることもできないくらい痩せてしまっていました。今日は又100人くらいが来るでしょう。キティーとアンドレアは6時にバラン〔荷物〕を運ぶため外に行かされました。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年5月23日

命令が来て、2000人の女性達が入所するという。今はこの女性達の居場所を見つける努力がされている。彼女たちは幸い1度に来るのではなく、何組かに分かれて来る。どこかから来るかは発表されていない。場所を空けねばならず、ニッポンは2つの兵舎の内部部屋にこの人達を入れると命令した。それはこのようになる。兵舎の中は6メートルで、女性達は側面側に普通のベッドで寝ており、ベッドの裏側に60cmの空間があって、そこで着替えなどをし、190cmのベッドがあり、1メートルの通路があってその向こう側も同様になっている。

今ではベッドの頭を両壁に付ける、両側共だ。中央にできる空間は220cmになる。ここに長い寝台が来て、私達が寝ているように190cmの中になる。するとその両側の空間は丁度15cmで、やっとすり抜けられる巾になる。これはどうしようもない状態だ。女性達はどうしたら良いか分からない。例えば夜中に急いで兵舎の外に出なければならないような時、そんなときには全ての蚊帳も張られているので何処にも殆ど光が無い。そして私達の腹具合が悪くなるのはいつもの事だ。我々女性達は2兵舎をこのように準備しなければならない。ひどく不愉快な状況だ。このような事があると雰囲気も良くはならない。

ファン・デル・クロフト

1945年5月28日

全ての女性収容所はこの3収容所²²にまとめられるという噂です。新しい人達は今夜ここに来ると思われまます。先週は大人も子供も5Aと8Aに、それから私達の部屋(5B)に来て、ベッドの間の列に、南京虫付きの板で長寝台を作らねばなりませんでした。〔1945年〕5月2

²² 1945年5月には、アンバラワとバンジュビル周辺ではアンバラワ第6収容所とバンジュビル第10、バンジュビル第11だけが強制抑留所として使われていた。

2日に、テーペ夫人と息子が私達の部屋に来ました。私達の部屋には今12人が居り、隣は10人です。

モドー

1945年5月28日

私達の‘便所溝’には水が流れているべきなのだが、この収容所に流れ込む場所で、しょっちゅうジャワ人に堰き止められてしまう。意地悪でしているのか、水が何か他の目的に必要なのか。そうなると全ての溝は干上がってしまい、これだけ大勢の人間が居る所ではもちろんひどく汚いことになる。娘達が外に出て障害を取り除かなければならない。そうすれば水は直ぐ流れて来るのだが、また誰だか分からない犯人によって止められてしまう。かくして世界に仕事が創造される。[.....]

そして私達はいまだに詰め続けている！約500 [人] がこの月の始めに来た後で、近日中に又600 [人] が来る、そのため、またもや幾つかの兵舎では中身を他の兵舎に移さねばならず、こうして‘私の’兵舎は今や既に406人を数える。1年前にこの兵舎に居たのは175人だということを考えてしまう。そこに我々ジョクジャからの50人が入らなければならなかった時には、兵舎リーダーはお手上げ状態だったものだ！

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年6月1日

今週300人毎の婦人の輸送が2回有った。彼女たちはムンティランとソロからの人達だ。私はその多くの人達と話し合った。あちらでも良い状態ではなかったであろうが、何故今そこを出なければならなかったのかは、彼女たちにも分からない。おそらく、女性達を一所にまとめたのである。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年7月31日

数日前から、毎日100人ほどの女性が縄をなうために他の収容所に行かなければならない。ニッポンがこの女性達に金の山を約束したために、多くの人が申し込んだ。収容所の外を歩くという新しい事だけでも、たとえそれがニッポンの警備下であっても、何人かの女性にとっては興奮すべき事だった。我々の収容所の女性達を使って‘労働キャンプ’を作ろうとしている

という文句が既によく聞かれていたが、私達はそれは信じなかった。彼らは今になってまだ私達を引きずり回すというの？だとしたら何と非人間的なことではないか。

医師達はニッポンとこの件について話し合ったが、ニッポンは譲らなかった。650人の女性達、できるだけ仕事の助けになるような大きな娘が居る女性達を指名しなければならない。我々の医師達は一緒に人選をしている最中だ。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年8月3日

朝5時に、またもや可哀想な、みすぼらしく疲れ果てた女性達が他の収容所に向かった。ひどい光景だ！

チャックス・グレイン

1945年8月4日

2日前、[ここは] ひどく打ちのめされていた。650人の女性が、第9収容所、永久労働キャンプに行かなければならない。全てを又引きずり出し、トランクと簡易マットレスと小さなバラン[荷物]は持って行くことができる。全ての女性達の力が又発揮された。リンチェも、旧マゲランクラブの人間としてはただ1人、入っていた。それはまたもや悲しみを呼ぶものだった。朝4時に行列は収容所を出なければならなかった。2時間歩いていく内に、8[人]が倒れてしまった。あそこはひどい有様で、全ての人を取り乱している。這ってでも戻って来たいであろう。

ファン・デル・クロフト

1945年8月5日

木曜朝[8月2日] 600人(なるだけ独り身の女性と4歳以上の子供の居る人)が出て行くと聞きました。その代わりに、ムンティランから500人の病人が来、もうすぐ、1時に来るそうです。ピートおばさんも第9収容所に行かなければなりません。彼女はひどくいやがって泣きました。タンゲルデル夫人、エフェルス夫人、ホーツェン[夫人]、ファン・デン・ドップ、その他の人達です。木曜から金曜にかけての夜、5時に彼らは歩いて第9収容所に引っ越ししました。棚や、箆笥やベッドは持って行くことが許されませんでした。私達が午後には食事を持って行ったら、彼女たちは本当にしおれていました。彼女たちは1日バター缶二杯の水をもらい

ます。そして丸1日、ニップが仕事に追い立てます。彼女たちは手足で這ってでも戻って来たいでしょう。重い大型トランクや、トランクスや箱は娘達（オポチミスト）²³が運ばなければなりません。荷車の上に乗せて、その収容所に運ばれました。他のバラン〔荷物〕はトラックでも行きました。ニップがジルデルダ夫人に娘達はそれを運ぶ事ができるかと聞いた時、彼女は“ピサ、ムスティ・ピサ！”〔やらなければならないのだから、できるのよ〕と言いました。私達の所にはゼーヴ〔夫人〕の代わりに4歳の子供の居るドイツ女性が来ました。

モードー

1945年8月8日

第9収容所、労働キャンプには又人が住むようになった。私達の収容所からは650人が、子供の居ない人か、あるいは大きな子供の居る人がそちらに、縄を作るために向かい、私達は毎日そのために人を送り出す必要が無くなった。考えとしては悪くなく、あちらに十分な水があったなら、私も一緒に行くと申し出ていただろう。兵舎リーダーなので、その義務はなかった。出て行った労働力となる人達の代わりに600人近い人達をムンティラン（マゲランの側）の収容所から受け入れたが、その半分は病人で、多くの浮腫患者が居た。だから私達はこれで良くなったわけではない。私の兵舎には今418人が居る。今日は1日中バンジュビルに向かう道に列が続き、〔それは〕ムンティラン収容所の全員が、この近隣の収容所に配分されたからだ。

²³ オポチミストは荷運びを役割とする専用雑役グループの別名。

収容所組織／ヨーロッパ側及び日本側収容所スタッフ

ファン・デル・クロフト

1943年1月21日

つい今し方、新しい命令が来た：歓声を上げのは禁止（多分これからの、王女様の件²⁴に関してでしょう）；[又]夜8時半過ぎに外を歩くのは禁止で、カワッテン[禁制取引]禁止、さもないと、3日間食事抜きです。

モード

1943年1月29日

我々の、様々な改善に関する申し入れはほとんど実行されていない。ただ、ニッポンの医師が検査に来て、米が臭い等と証言したが、しかし我々はそのかび臭い古物を使い切らなければならない。その次の日に6人ほどの高官がバタビアから来、様々な改善を約束したが、その遂行を任された、ここアンバラワに居るジャップは、翌日になってその殆どは実行できないと言い、このために今は警官の監視の目の下で盛んにカワッテン[禁制取引]が行なわれている。

ブルゲル-ダウファス

1943年1月30日

こんにちは愛しい人、私達は又もや登録をし、私達が残してきた物の価値などを申告しなければならなかった。私は私達の持ち物を f 4, 000. - と見積もってしまった！まあ、これは高い方だけれど、あなたの本全部に機器類、あなたの服、銀製品あなたの本全部や機器や服、リネン入れ [の中身]、等々と、フォード [アメリカ製の車] も忘れてはいけない！私は、全てはフランパスト [没収された] と書き添えたので彼らはそれに対する税金は掛けられない。それから私達はお金をいくら持っているか申告させられ、私は f 75. - と書き (f 400. - なのだけれど)、我々の夫は何 [の職業] だったのか、彼の収入はどれほどか、どの様な書類を我々が持っているかを書かされた。そして私達がここに持っている物の価値だ。これは勿論又、何の意味も有りはしない。もう、私達は、3日後にはオーストラリアに行くのだと言っている

²⁴ この「これからの件」はベアトリクス王女の誕生日を指している。彼女は1938年1月31日生まれである。

人たちひとたちもいる！お喋りばかり。

チャックス・グレイン

1943年2月2日

又噂が飛び交っている！我々はンガウィに、チマヒに、バンドンに、シンガポールに、[あるいは] ああ、何処で無いというの、どこかに移送されると言うのだ。これは新規の登録から来たものだと思う。我々は又申告しなければならなかった。名前、年齢、夫の収入はどれだけだったか：月収 f 800. - ; 夫は何だったか：彼は医者で、一等軍医；マゼランに残した物の価値は：f 10,000. - ; 彼がここに持つ物（家具）の価値は：f 50. - （彼らは証書などを意味している）、仕事ができるか：否、まだいくらの金銭を持っているか：f 110. - 。我々はこれは一体何 [のため] かと訝っている。

モード

1943年2月4日

我々は先週、再登録させられ、今回はそのために支払いをする必要は（まだ？）無く、[しかし] ここに何人で居るのか、ジョクジャに残してきた物の価値を推定し、今持っている金銭は幾らかを申告させられた!!! 怪しいわよ、この好奇心。この裏には何があるのだろうか？

チャックス・グレイン

1943年2月16日

今朝、又私達はムシられた。全ての金銭を提出しなければならない。我々はそれにたいする領収書を受け取り、私は残念ながらまだ f 76.95（私は番号 279R）もあった。これからは一月に f 1.50（壹ギルダー五拾セント也）の金券を受け取り、それでこれから設営されるキャンプ内の店で必要品を買うことができる。何と私達は肥え太れることよ！始めはぶつぶつ文句を言いながら、それでも我々全員が、又おとなしい羊のように、我々の最後のコインを犠牲に差し出した。

モードー

1943年2月16日

今、我々はその登録の意味が分かった。今日突然、我々の金銭を全て提出しなければならなかった。ニッポンは我々の金銭を預かるといい、我々は一種の領収書のような物まで受け取った。彼らはこれから一人一日5セントの金券を出し、我々はそれで細かな出費、例えば靴の修繕代などを賄う。これからまだカワッテ [鉄条網] 越しに何かを買う人は金銭を隠匿していたことになり、つまり懲罰の対象となる。彼らにしてやられたわ！

モードー

1943年3月2日

最近又、ニップの高官が収容所に来た。彼らはキャンペリーダー達に、我々は控えめにすべきであり、我々の政府自身が、全く戦争を欲していなかった日本に対して宣戦布告したのであると言った。この戦争は彼らにとって迷惑な物で、今ここにもアメリカやオーストラリアからの品物が入ってこず、それでも彼らは我々の処遇をできる限り良く、アメリカが収容した日本人に対してよりも良くする、云々 [と言った]。彼らが炊事場に視察に来たとき、炊事場リーダーはもちろんすかさず、ジャワ人のコックや手伝いを廃止するという決定に関して話し始めた。その時二人のニップが一緒に一つの空の薬缶を火の上から持ち上げようとしたが、薬缶はびくともしなかった！後になって16人居たジャワ人の炊事場職員（3つの炊事場用）の内、6人は残って良いという知らせが来た。

ブルゲル-ダウファス

1943年4月5日

今朝ニッポンの視察があった、権力高官の、やけに仰々しいものだった。彼は幾つかの兵舎を駆け回り、大体15分で又消えた。事前には、もちろんがらくたを片付け、エンペルス [外廊下] をきちんと整え、子供達は私達の小屋の中に居させなければならなかった！一隊が近づくと、リーダー達が警告してくれたので、私達は一時、中に居ればよいだけで、このためお辞儀をする必要も無かった。リーダー達は滑稽なほどお辞儀を繰り返さなければならず、あんな卑劣漢に対して、不愉快なことだ。一番上のリーダーは、その前にウェドノ [地区長] の言うことをよく聞かなかったというので、頬を張られてさえいる！この辺をよくうろついているヤップからだ。それ以外には、幸いなことに事故は無し [だった]。

ブルゲル-ダウファス

1943年4月21日

今日の午後、私達は番号と字の書かれた赤い布きれを取りに行かされた。それを身につけなければいけないのだけれど、みんな箆筒に入れてしまった。ほつれ糸ばかりのひどいぼろ布だ。その番号は登録カードにも印刷された。いったい何のためなのだろう。

モード

1943年4月27日

先週、まだ自由の身のオランダ人同様に、我々も番号付きの赤い帯を受け取り、腕に巻かなければいけないという。毎度何か別のことがある。

モード

1943年5月24日

今日又‘高官‘の訪問(約1, 5メートルの高さの!)兵舎リーダー達は収容所の入り口に整列し、この男が通り過ぎるとき、卑屈なお辞儀をさせられた。収容所リーダーは、我々が’亭受‘している住居や経費やその他全てのすばらしい恩恵に対して、我々の敬意を込めた感謝を表明しなければならなかった。

ブルゲル-ダウファス

1943年7月10日

今日、本当に、家宅捜索があった! やっぱり来た。しょっちゅう言われてはいたけれど、一度も無かったことだ。私達は殆ど本気にしなくなっていたのだが、しかし今朝、司令官が、兵舎リーダーに本当に行くと警告し、そのためみんなガラクタを隠した。

彼らは何も見つけられなかった。1500人が居る全収容所中で約100。ー! [そして] 私達の兵舎では一セントも。彼らの探し方も全然下手だった。私の所では、ちょっとベビーテーブルの引き出しを見て、箆筒を少し見ただけ。そこに壊れた、電池の入っていないフラッシュライト[懐中電灯]が有って、それを持っていった。それでお終い! でも、あちらこちらで、有るもの皆ひっくり返す場面も見られ、又他の兵舎ではとても無礼でいやな警官も居たようだ。とっても素敵だったのは、全て終わった時、私達の兵舎では事前警告と親切なやり方

に感謝して寄付が募られ、f 4 7. 一集まった。私達の警官はとても良くやったので、彼がそれを受け取った。いやな[警官]はセマラン出身の奴で、彼は何ももらえなかった。

モードー

1943年7月13日

先の土曜日、長い間恐れられていた家宅捜索が遂に行なわれた。お金は見つからなかったけれど、私の大きな新しい地図と小さな地図、ドイツとフランスの百科事典、それにイエレのボーイスカウト用ナイフを取り上げられた。もし彼らがそんな物を探していると知っていたら、安全な所に隠しておいたのだが。そのための時間は十分に有った。イエレのナイフは炊事場での仕事に使っていたものなので、これは彼に取って、とても応えるものであったし、私にとっての本も同様だ。

何人もの女性の所で、彼らはその夫の写真を、特に軍服を着ている場合は破り捨てた。カメラや8ミリ、フラッシュライト[懐中電灯]も彼らのお気に入りだ。金銭に関しては、全収容所内でf 1 0 0. -を発見！それぞれの兵舎に5人ほどの警官が、記入係と供にやってきて、誰から何が‘押収された、重々しく書き留めた。戦利品を受け取るためにニップが一人来ていた。彼らは私から、ここに’新規律‘が導入されて以来手に入らなくなっていたマッチも一箱取って行ったが、奇跡のその又奇跡的に、後になって返してきた。この家宅捜索に関してはもっと書きたい所だが、もう少し待った方が良いでしょう！

ファン・デル・クロフト

1943年7月24日

この後に、2週間前に起こった[行われた]家宅捜索に関するお母さんの報告を記します。私はその時病気になるまで、お母さんは少し書き留めたのだけれど、残念なことにひどく忙しくなったために全部は書き留められませんでした。私は黄疸という、黄色になって長くかかる、つまらない病気に罹っていたのでこれまでペンを取るような元気が出ませんでした。これはとても残念なことで、というのも何時かはやって来る自由に至る、最も興奮すべき時が近づいているらしいからです！さて、お母さんの報告です。

1943年7月11日、日曜夜

昨日は何と変な日だったことでしょう。9時前に、私は身仕舞いをし、お粥を始めたところで

した。そこにファン・ボメル夫人が駆け込んできました。‘家宅捜索があるのよ’ 私達は全く信じませんでした。そんなことはしょっちゅう聞いていましたから。今や、ファン・ボメル夫人は彼女の膨大な貯蔵食料を減らし始め、私達の所にも持ってきました。タンゲルデル夫人も少し取りに來いと言われました。少し後で私達はそれぞれ大きなピサング・アンボン [大バナナ] を贈られました。いずれにしてもこれは幸運なことです。私達は、普通に仕事を続けました。カチャン [落花生] の皮むきです。ハネケは病気で寝ており、[私は] 彼女の側に座って縫い物を始めました。キティは炊事場で働いていました。

9時半になろうという時、車が近づく音がし、警察の大隊が、40 [人] ほどもやってきました。12人くらいがクールト夫人など、前方に住んでいる女性の所に駆け込みました。ツルースお婆さんは、第7兵舎ではそのようにして、全ては徹底的に調べられた、と言っていました。彼らは景色の写真や、軍服を着た男性の写真を沢山持って行きました。ピエールおじさんの大きくきれいな肖像写真は、ツルースお婆さんが急いで取り戻し、もう渡しませんでした。他の写真の包みは持って行かれました。

この間に、彼らは既に私達の兵舎でも始めていました。これを見た子供達が私達に知らせに來ました。エフェラディの切手帳、写真、お金、乾電池や武器。トンの切手帳、日記帳や本、例えば地図帳、全ては安全な場所に隠しました。彼らは私達の所からは何も発見できませんでしたが、トランクなどベッド以外は全てはひっくり返されました。3時少し前にやっと彼らは全てを終えて行進し去って行きました。私達はみんな張りつめた雰囲気のために頭痛がしました。それでも最終的には何もひどいことは起こりませんでした。とてもうまく行ったといえます。彼らは朝早くから別の収容所でこれをしてきて、私達は最後[の順番だった]と人は言っています。つまり彼らはもうチャペ [疲れている] だったのです。

チャックス・グレイン

1943年7月25日

私達は家宅捜索までされ、これはひどく神経に触る事だ。全てのランプー・センテルス [懐中電灯] は取られてしまい、まだ見つけられる金銭、そして始めの頃は写真もだ。しかし、それには私達は抗議した、なぜなら他のものほともかく、写真だけは持っていたいからだ。全てのトランクや箆筒は、一から十まで調べられ、これは皆現地人がした。彼らがあなたのベッドに座る。ふん、これも昔とは違う所ね。しかしそれ以外はきちんとし[た態度で]していた。

モード

1943年8月19日

昨夜、突然ジャワ人コックはもう収容所に入れないという通達が有った。今朝又命令が有り、全ての鶏とハトは殺さねばならない。今夜は又明かりを消す！最初のものが意味する事は、我々の13、14、15歳の少年達が炊事場でより一層の重労働をしなければならないという事。二番目に関しては、まだ少し静観しよう。私達の唯一の、今は毎日卵を産む鶏は、もし可能なものならば残しておきたい。明かり消し……、これには私達はもう何度も喜んだものだが、それに関しては沈黙を守った方が良いでしょう。

モード

1943年9月1日

今日初めて‘点呼’が行なわれた。病気の者や役目のある者は出る必要は無く、つまりあまり本格的なものではなかった。

ファン・デル・クロフト

1943年10月21日

ジルデルダ夫人が、私達の支持台を持って行ってしまいました。権力誇示のため、彼女は警備司令官を引き連れていました。ジョクジャ部ではブロック長の出すありとあらゆる命令のために、大きな動揺が起きました。新しい特別食用炊事場が、尼僧を長として設立され、皆満足しました。

ブルゲル-ダウファス

1943年10月24日

今日、本当にあなたから郵便為替が来た！[今年の]8月31日以来私達は何も書いたり受け取ったりする事ができなかったのに、今突然これだ！又チマヒから、前回と同じ27.126番。タイプされた手紙だけれど、生きている証だ。7月31日[1943年と]8月8日のアンバラワの消印がある！これには皆とても興奮してしまった。私はこれを今夜受け取ったのだ。もっと他にも来ているのか、とても興味がある！あのね、私はあなたがチマヒに居ることに関しては確信していて、ひどくびっくり仰天はしないのよ！でもあなたは可愛い人、私に忠

実にお金を送ってきて、ただ私がそれを受け取れないのが残念！

でもこの収容所でも何かの時の経費にお金が使われる、例えば誰かがここの病院で死ぬと、このお金で死装束やお棺用の布代が支払われる。というのも、ついこの間一人の老人が亡くなり、この人はお金が無かったので覆いの無いお棺で埋葬された。これについてリーダー長が苦情を申し立てたところ、ウェドノ [地区長] が幾つかの郵便為替を通したのだ。その中に私の物もあったわけ！だからウィレム、もし私が倒れたら、あなたが私の葬儀代を払うのよ。まあ、なんて嫌な想像、でもあなたが知らなくて良かった。

モードー

1943年11月6日

一昨日、とても大量の‘高官訪問’があった。先回、私達が慎重に隠れていなければならなかった時と違って、今回は全ての健康な女性と子供達は外で兵舎の前に並び、殿方が通るときには指示通りのお辞儀をしなければならないという命令を受けた。彼らは今回はまあまあ友好的（寛大！）であった。

ファン・デル・クロフト

1943年11月9日

先週、私達はジャップ達の前で、きおつけをしなければなりませんでした。最初は8時に練習。神経の疲れる日でした。10回も整列しなければならなかったのですが、そのたびに、偽警報でした。やっと1時に、10人の紳士方が重々しくやって来ました。彼らが居なくなるまで、食事を取りに行くのは待たなければなりませんでした。私達はみんなしっかりお辞儀しました。彼らの一人が私達の方に寄り、私達には着る物も履く靴も無いのか、と聞きました、なぜなら子供達は全員裸足で（わざとでは無く）並んでいて、大人はその後ろでした。彼はメモ用紙を取り出し、全部書き留めました。庭もきれいだが狭すぎると言いました。この忙しく働いている女性達に、彼は一体何を期待しているのでしょうか？

ファン・デル・クロフト

1943年12月1日

選挙。全員辞任したがったけれど、殆どの人は再選されました。幸いダウツ夫人は違います。リンデルス夫人とデ・フリース [夫人] がその [代わりに] 選ばれました。

モードー

1944年2月15日

ここはどんどん厳しくなる。今や、それぞれの大部屋に灯せるのは、しっかり覆いを掛けたランプ三つだけで、これは約20人に一つの割合だ。私達は運が良く、三つのランプの内の一つが私達の小屋の直ぐ前にあるので、カーテンを開ければ読書ができる。殆どの人は、夜は寢室小屋の間の、狭い通路に座っている。今日から兵舎リーダー達は毎晩9時半に全ての女性達が居るかどうかチェックし、それから私達はベッドに入らなければならない、私は早すぎるとは全然思わないけれど、多くの人達は思うようだ。この人達は、夜はベッドに入れられず、朝はそこから出せない。

ファン・デル・クロフト

1943年2月19日

この週一杯、私達の収容所にニップ達が忙しく出入りしていました。今朝は私達の兵舎の通路さえ通って、彼はそこから出られなくなりました。困り抜いた彼は、幾つかの小屋のカーテンを押し除け（偶然裸で居たら！）ひどく神経質に‘マナ ピンツ、 マナ ビサ ジャラン カルワル?’ [ドアは何処ですか？ 出口にはどう行ったら良いのですか？] と聞きました。縫い物をしていて、驚いたパウマン夫人の所では彼は立ち止まって、何を作っているのか聞きました。 [彼女は答えました] ‘パカ [ジャ] シ アナック’ [私の子供達の服]。‘あ、そう’ と言って彼はまた先に行きました。もしあなたの目の前にこんなニップが突然現れたら、どんなにびっくり仰天することでしょう。

ブルゲル-ダウファス

1944年2月22日

今、私達は9時半に点呼をしなければならない、つまり兵舎リーダーが全員在宅かどうか見に来るのだ。そして彼女はそれを収容所リーダーに報告し、彼女は又それを警備司令官に報告する。そしたら夜間照明にして、兵舎一つに小電球のランプ三つ、そして全員就寝しなければならない。私達はいつも大体10時半頃まで3人で楽しく私達の小屋にいたので、私達にとっては残念なのだけれど、殆どの人達は早くからベッドに入っていたので、彼らにとっては大したことではない。

さらに、この4つか5つの収容所全体の長官²⁵として2人のニップが来た、大きな口を叩き、人々を殴りつけ、脅し言葉をたっぷり吐く、ひどく嫌なやつだ。しかし彼らもまだ2日目なので、時間が経てば、彼らもましになるかも知れない。彼らはもう炊事場用の薪や、野菜や果物などを、門から中に自分たちでゲピクルト [運ぶこと] しなければいけない事にした、それというのも、彼らが昨日車で入って来た時に荷車を押している人が彼らにお辞儀をしなかったからというのだ。今朝子供達は一人幾つかずつ薪を持って運び、とても早く済んだ！大きな少年達が残りをピクルデン [運んだ] が、これは多かった、これを毎日するなんて！

兵舎間の芝も開墾して野菜を作らなければならない。これが出来るまでには時間が掛かることでしょうよ。又私達は互いにマレー語で喋らなければいけないと言い、その時ジルデルダ夫人が‘小さな子供達はどうするのよ！’と聞いたら、‘そいつらは黙っていることだな’と彼は言った。しかし、その直後に彼は吹き出した、これは少なくとも人間的だ！。

モドー

1944年2月23日

女性収容所は今や通常の警察下ではなく、全く軍警察の、つまりケンペイタイ、私達が‘ゲシュタポ’²⁶とも呼ぶ物の下に来たようだ。8歳以上の子供達は、今や全員仕事をさせられ、このために教育がひどく難しくなった。

食料、薪などは車で運ばれるのではなく牛車で運ばれて収容所の入り口で降ろされ、そこから子供達が少しずつ炊事場に運ばなければならない、この距離は約300mだ。子供達は芝も刈らねばならず、道路の清掃などもする。

我々は互いにマレー語で話さなければならないという命令を受け、又笑うことは絶対禁止、これはニップが周りにいる時はだ！一匹の犬がヤップの一人に吠えたと、収容所内で熱狂的な犬狩りが行われることになり、十数匹が犠牲になったようだ。その後又新しい犬が、おそらく空腹のために入って来た。捕まった [犬] の中でも幾匹かは戻ってきた。そして最後に全ての楽器は提出させられ、これはニップがギターを弾いている少年を見たためなのだ。

²⁵ 1944年2月の時点でアンバラワ周辺には4つの民間人抑留所があった：アンバラワ第6，アンバラワ第7，アンバラワ第8，アンバラワ第9である。

²⁶ ゲシュタポはナチス・ドイツの秘密警察で、1933年以来、体制に反対すると見なされた者に対して残酷な制裁を加えていた。

チャックス・グレイン

1944年2月25日

9時15分には我々はベッドに行かなければならず、そこで我らのブロック長にチェックされ、それから‘全員居ます’と収容所リーダーに報告され、[次に]警備に報告しなければならない。ワキ・ケパラ[長代理]を選ばなければならなかった。私が数少ない適任者の一人だということになった。フン、マリッチェには、結構でございますことよ、全くこれには、こみ上げる気持ちを抑え難く.....。

モード

1944年3月8日

今日ニップの士官が[来て]言った。

1. 収容所は近々もう軍事警察ではなく、直接軍当局の管轄となる。30人毎に責任者としてグループリーダーが来る（既にこの私のはめられている役だ）
2. 音楽を演奏する事は全く禁止で、理由はともかく、万全を期するため、全ての楽器は収容所リーダーに預けなければならない。
3. 今は全ての犬は殺さなければならず、飼われているとしないと関わらずだ。どうやら私達の暮らしを楽しくするようなものは一切いけないらしい。リーダー達はニッポンの肩書きと認識章を受けた。私は‘組長’[副兵舎長]で、白の三角に一本の赤い横線で見分けられる。

チャックス・グレイン

1944年3月9日

私達は今やケンペイタイの代わりに軍部の管轄下にあり、[3月]12日から10人のタイピストが警備室で一日4時間仕事をしなければならない、オランダ語でタイプするのかしら？

ファン・デル・クロフト

1944年3月9日

昨日は又、生き生きした日でした！私達は又もや[ファン] フォールンフェルト夫人の話を聞くために集合を掛けられました。“我々はもうケンペ[イタイ]の下では無く軍部の管轄下にな

る。”（大変な違いです事！）30人毎に長が一人来、私達が逃げないようにしなければなりません。フットハルト夫人が私達と彼女の部屋全体の面倒を見ることになります。全ての望遠鏡や写真機は提出しなければなりません。

ブルゲル-ダウファス

1944年3月10日

さらに私達は、又書式に書き込まなければならなかった。今回は我々自身の父親と母親の名前と、父親のオランダの住所だ！夫の住所もだ。ニップは3ヶ月毎の定期的な通信とオランダ赤十字社用だという。さてさて！これが本当だったらね！さらに私達は家族毎に箆筒一つ、椅子は一人に一脚ずつだけ持って良い。私には三つの箆筒が有り、一つは扉無しの、一つは洋服箆筒、もう一つは棚付きベビーテーブルだ。これは多分数に入らないので、新しい人には、一つ上げる事になるだろう。その人たちはバラング〔荷〕をホンの少ししか持って来ないのだそうだ。

ファン・デル・クロフト

1944年3月12日

私達の2つのアイロンは電気ミシンやレコード盤やセンチルス〔懐中電灯〕と同じように提出しなければなりませんでした。ピアノは無くなり、一家族で箆筒は一つしか持てません。ニップはきれいな椅子はないかと聞き、今日〔私達はそれを彼に〕持って行かせました。それでもって、ジルデルダ夫人は、大家族は箆筒2つ持っても良いように話をつけようとしています。全ては多分中央で調理されることになり、みんなとても嫌なことだと思っています。

ブルゲル-ダウファス

1944年3月13日

又もや起こったことは、みんなとても素敵よ、ヴィム。土曜日には一人1メートルの空間しか持てない事になった。そのために大勢の人達は詰め合わなければならなかった。例えば私は1.45m有ったので、そこに又場所が出来、新しい人、あるいは引っ越してきた老人が使うことが出来る。エンペルス〔外廊下〕付きの、空間のできた兵舎では大移動だった。みんなが半日掛かってずれ合い、うろろした後、それは必要無いという知らせが来た！！

私達は幸いまだ何もしていなかった、というのも、先ず少し待ちましょう、まず最初

に落ち着いてお茶を飲みましょう、と言っていたからだ！私達が丁度準備が出来たとき、引越しは必要無いという知らせが来た。ただ通路は広くしなければならず、内側にずれなければならなかった。でもそれは直ぐに出来た。それからはマゲラン兵舎、これまで私達と比べて広すぎた[場所だった]ので、やはり詰め合わなければならなかった。それでとても広い場所が出来た。

今やこれからの2日間に他の兵舎の人達がそこに行くことが出来る。その後新しい人達が来て、その後は誰も変えてはいけない。つまり今日は散々走り回り、荷運びをし、言い争いをした日だった！そして私はといえば、全然関係なく静かに見ていたのだ。いい気分！

ファン・デル・クロフト

1944年3月24日

[この]日記帳を小さくしなければなりません。[1944年3月22日]水曜日[の]家宅搜索は思ったよりずっとうまくいきました。ただ残っていた二つの鏡が持って行かれました。

チャックス・グレイン

1944年3月26日

収容所全体が野外に呼ばれた。何時間も立って、全員居るかどうか数える。ジャワ収容所司令官の演説。[それに続いて]ワキル・ケパラ[オランダ人の所長代理]の、全収容所を代表する宣誓。七人の女性が拒否し、たちまち牢屋に入れられる。

宣誓[は次のようなものだった]：署名者、ジャワ抑留所に保護されるであろう被抑留者は、全能の神の名に於いて、ジャワ抑留所の司令官の決める命令や規律を犯さず、逃亡の試みを起こさないことを誓う。ヴィーレンハ[事務所副長]。

この前に、最初にニッポン語で、次にマレー語、最後に理解可能なオランダ語で次のことを聞いた。一国家と他国家の外交関係が破棄された場合、あるいは既に宣戦布告がなされた場合、敵国の臣民は全ての国でそうであるように、抑留される。現時点での彼らの状況はその様なものである。非枢軸国のやり方を考えてみよ。²⁷言葉では彼らは正当性と人道を唱えながら、行動はその逆を証明している。これに関しては十分な証拠がある。我々はこれを非常に悲しみ、非常に遺憾に思う。それにも関わらず我々のあなた方に対する態度は非常に寛大かつ丁寧である。これら全てにも関わらず、あなたがバラ・テンタラ[軍部]に対して感謝しないとすれば、あなたを人に比する訳にはいかない。現在までは抑留所問題は政府が管轄していた、しかし本

²⁷ この中には英国、オランダおよび合衆国などが含まれた。

日からはこれを人道と正当性の国際法に従い、“タワナン・ミリテル” [戦争捕虜事務所] で扱うこととする。汝はこの規則に喜んで従うものとする。もし汝がバラ・テンタラに対して丁寧かつ誠実であるならば、我々もそれと同様の誠実さで応え、何も [恐れる] 必要は無いことを誓おう。感謝の証しは丁寧さである。であるからして、私は現時点より、軍人その他のニッポン人に対し敬意の印が表明されることを期待する。

規約

これまでは抑留所は司政官によって管理されてきた。本日より、管理は軍部に移譲される。この知らせはあなた方が喜びを持って迎えるであろう、なぜなら軍部は全ての作業を迅速確実に行うからである。移譲に際しては何らかの仕事に遅れをきたすことも有り得、あなた方の協力は非常に重要なものとなり、それについてはあなた方も近い将来非常に満足を得るであろう。

グンヨウ クリョチョウ。ダイ サン ブンショ。軍事抑留所ジャワ第3号。

[第3地区民間人抑留所本部、全軍時捕虜及び民間人抑留所総司令官]

ファン・デル・クロフト

1944年3月26日

昨日はジルデルダ夫人が血が出るまで殴られました！（何か‘オランダの女の人と男の人’とか）。今朝は、静けき聖なるミサが上げられました。7時15分過ぎ [に私達は] 兵舎の番号順に並びました。ハネケ [は] 病室から来なければなりませんでした。そこで2回から3回数えられました。11時まで待ちました。それからリドへ、キャンプ全員で。ジルデルダ夫人が頭に包帯を巻いてそこにいました。そこで私達は軍に引き渡されました。

一人のニップが櫓の上でオランダ語で話しました。その後 [私達は] 宣誓をしなければなりませんでした。したくない人は前に出なければなりませんでした。改革派の人達と、洗礼派（彼らは宣誓してはいけないことになっている）は前に出ました。彼らはびっくりしていました。改革派は引き下がりました [が]、8人から10人の洗礼派の人達は警備所に行きました。それからヴィーリンハ夫人が全収容所の名の下に、私達は命令に従い続けることと、逃亡の企てをしないことを誓わされました。大きな動揺と混乱がその後に行きました。

ブルゲル-ダウファス

1944年3月27日

昨日、[1944年3月] 26日 [日曜日]、我々の収容所のケンペ [イタイ] から軍部への移譲 [が行われた]。これについては土曜日に通達があり、日曜朝の7時半に全被収容者、2000人がリドに集合すること、病人はマットレスに乗せて、赤ん坊も含めて後に残る人の無いように、ということだった。スモウオノの人達がこちらに来る直前に家宅搜索、そしてランパッセライ [没収] があったときも全員が外に出なければならなかったのも、私は、今回もそれに違いないと思った。しかし後になってあまりに沢山のプリンターズ [命令] が来て、移譲のための本物の人口調査だという事が分かり、最後には重病人は後に残って良いことになった。これにはとても安心し、私は資金だけを首から下げた。家宅搜索の時にはマリアンの背中に入れて置いたものだ。私達は身体検査をされるのを少々恐れているからね！

さて、日曜朝7時半、私はお豆ちゃん達を連れてきちんと列に並んだ。我々は大きなキャンプ通り沿いに少しずつ前に移動し、その度に待たされ、数えられた。全てのリストは検査され、幸いにも全て合致していた。その後、道際の芝の上で少し休むことが出来た。その時ツワン・ベサル [高官] が到着し、我々は演説を聞くためにリドに整列させられた。小さな子供と弱っている人は先ず家に帰って良く、マリアンも、それまで結構良い子にしていたが、ベビーサークルに入れ、一杯のご飯と砂糖とを渡した。これはエルスと私も急いでちょっと貰った、だってお腹が空くことなのよ！エルスは演説を聞きに行きたかった。それは素晴らしく、とても堂々としたニップで、ゲーリング²⁸のような体格をした人が櫓の上に立って、重々しく理解できない言葉で話をした。その横に、少し下がって、一人の小さなニップェが同じ事をマレー語で読み上げ、その後私達の副収容所長がオランダ語で言った。その内容は、現在私達は軍の管理下にあり、保護され、我々がいい子なら待遇も良くする、云々。最後に彼は、我々は逃亡をせず、ニッポンの言う通りにするという宣誓を読み上げた。この通りにしたくない者は前に出ろと言う。

正直にも全教会理事達が出てきた！私には全く理解できなかったが、彼らはこれからも私達は信仰集会を開けるかと聞いたのだった、というのも[1944年] 4月1日からそれは禁止されていたからだ。そのためには大変面倒な行動であったが、ゲーリングは最後には10人までのグループでなら許すと言った。殆どの女性達はそれを聞いて引き下がったが、7人くらいが残った。彼女たちにとって、これは信条的に不可能な事で、そのため小屋に押し入れられた。そこに彼女たちは今日もまだ入っている、間抜けな人達。その後、副収容所長のウィーレンハ夫人が、ニップの方を向いて、つまり私達全員の前に立って、例の宣誓をしなければならなかった(誓いを立てるわけではない)。この全部に3時間掛かったけれど、これだけ大きなキャンプにしては長くないでしょ？

²⁸ ヘルマン・ゲーリングは肥満した軍人で1933年以来ナチス・ドイツの防衛大臣であった。

私達の収容所ニップは、気のよい人だけれど、前もって私達に、リーダー達は全てが整えられるようにベツール [実際に] 気をつけなければいけない、と言っていた。というのも、ジョクジャのそばのセミナリウムで、スラバヤの女性の一団が居るムンチランでは、全てを整えるのに3日間掛かり、ツワン・ベサル [高官] は怒りの余り、もしここでもうまく行かなかつたらニョンニャ [婦人達] を殴り、彼も殴ると言ったのだ！しかし、本当に、午後には上級司令官は、収容所リーダーと全てのリーダーの女性達に対し、とてもきちんと整えられていたことを感謝させたのだ！

その前日には、一人の醜いニップが、自分でリストを作り間違えておきながら、ジルデルダ夫人がそれを訂正したとき彼女をひどく殴りつけた。強烈に彼女の顔を。彼女は目の上と頬とに二つの傷が出来た、卑劣な男だ。彼女は頭中に包帯を巻いていた。そして太った司令官が何故そうなったかを聞いたとき、彼女は座って良いという許可を得、副ケパラ [副所長] がその後の指揮を執って良いことになった。つまり、全体的には悪くはない、ただあの7人が小屋に入れられているのは残念だけれど。私は生気がよみがえる思いで、今、軍の管轄になって、良い方向に行くような気がした。残念ながら嫌なこともあるが。自分たちで調理するのは禁じられ、全ては [1944年] 4月1日 [日曜日] から中央で行われる。そうなったらプリンやパンケーキやケテラクック [カッサバ芋のクッキー] や、砂糖菓子やらを自分で作ることが二度と出来ない。ひどい話。自分でばたばたキパッセン [扇ぐ] しなくて済むのはとても結構だけれど、私はホンの少しだけ自分でしていきたい。

ブルゲル-ダウファス

1944年3月31日

すると私達のカーテンは全部取られ (自分たちで保管して良い)、つまり自分のコーナーはもう無いことになる。最初はとても変だったけれど直ぐ慣れて、私はこの方がすっきりすると思う。今は部屋に少し風が通る。午後と夜にはベッドの周りの通路側に、光が子供達に当たるのを遮るために何かを張っても良く、そうすれば私のコーナーは全部閉め切ることが出来る。箆筒はエルスとマリアンのベッドの間にある。多くの箆筒は取り去らなければならなかった。私のは幸い保持できた。余った物は、箆筒を持って来ることが許されなかったスモワナの人達の所へ行った。これは大騒ぎと大荷運びだった。

そして中央炊事場が始まった。まだ新しい炊事場が完成していないので、今のところお粥だけだが。そして4歳までの子供達は半人前しか貰え無いという新食事規則だ。一人前でも惨めなほど少ないのに！！激しい抗議、私もこれはひどい話だと思う。今は自分たちで少しは調理できるのでまだましだが、卓上コンロを持ってはいけないことになる悲惨なことになる、エルスはたっぷり食べる子なのだ！まあ、様子を見ましょう。昨日は完全なお粥騒動だった、一食分が最低の量だったから。それは医者達の決めたことだ。

スモウォノも一人連れてきた、ネウエン医師²⁹という、44歳 [の] がっしりした女性だ。私達の³⁰はもう60 [歳] だ。それから、出店が閉鎖された。今日が最後のクッキーだった。子供達にとってカッシアン [残念] だ。そして昨日は最後の文学の夕べだった。もう集会を開いてはいけないのだから。

モード

1944年4月2日

近々私達は全ての卓上コンロとアラン [炭] を引き渡さなければならない。なぜなら今後は全て中央で調理されるからだ。しかし炊事場はこれほど大勢の人達（数週間前に、閉鎖されたアンバラワの上のスモウォノ収容所から350 [人] が、その殆どがソロ周辺の出身だが、その人達がここに入れられたので、今は1800人になる）用には作られていないので、いわゆるミルク用炊事場が、全収容所用の米炊き可能なように改造されるまでは暫くの間、午後用の米炊きと、紅茶やコーヒー用の湯沸かしに関しては、決められた場所に置かれた幾つかの卓上コンロで、自分たちですることが出来る。

ファン・デル・クロフト

1944年4月7日

視察。収容所はきれいに片付けられました。10時15分前 [に] 兵舎前に整列。イエテケ [は] 病気 [でした]。第7兵舎 [の] 室内を通りました。11時に終わり。彼らはとても満足していました。

ブルゲル-ダウファス

1944年4月13日

中央炊事場はまだ完全には始まっていない。私達は現在アランプラーツン [炭場] で料理しなければならない。そこには支持台の上に卓上コンロがあり、兵舎毎に調理時間が決まっている。米炊きと湯沸かしだけだが、幸い小さな子供達のためのミルクお粥もある。

²⁹ J.Ch.ネウエン-ハッケル医師で、1899年10月29日生まれ。

³⁰ G.B.ワルフ-ソルフドラーゲル医師。彼女は1943年2月以来アンバラワ第6の医師である。

モードー

1944年4月17日

私は最初に、2604 [1944] 年3月26日、日曜日に、荘重にも軍部に‘引き取られた’ことを書くべきであった。我々は先ず慎重に数えられ、その後芝地に集められた。將軍のような人の演説を受け、それから合同で、従順にし、逃亡を企てないことを宣誓しなければならなかった。全ての集会は、つまり学校や信仰集会も禁止である。

後者の件で、直ぐには宣誓をしたがらなかった数十人の女性は、一週間余り、我々がニッポンの軍部から受けるであろう正当なる扱いに対する信頼すり込みのため、閉じ込めの刑を受けた。その前日には我々の収容所リーダーが、この儀式の準備のために来ていたニップに理由もなく床にうち倒され、頭に出血傷を負った。彼女が厚く包帯を巻いた頭で將軍の所に行こうとすると、嫌らしい‘演出家’よって元に戻され、彼女の助手が、客人をお迎えしなければならなかった。殿方は多分、高位のおじさんが、彼女の頭の布きれは何故巻かれているのかと聞くことを恐れたのであろう！

[1944年] 4月1日に、又新しい収容所ニップが来て、この人はとても親切なときもあるが、この間、点呼の時に何かつじつまの合わないことがあると、何人もの老人を殴りつけ、包帯を巻かなければならないような怪我をさせた。今では朝の8時と午後の4時の一日二回点呼があるわけで、これはひどく軍隊式に行われる。前後4列の隊列を組んで並び、2人の兵舎リーダーが、これは順繰り交代で、その日いわゆる防火番に当たっている人が、これを検査する。この人は肩から斜めに掛けられた白くて赤い線の有るベルトによって見分けられる。我々は皆ニッポン式に立って互いにお辞儀をし、見るも面白い光景だ、特に最近のように収容所ニップがそばに居るときには！この後者のケースが昨日だった、我々の兵舎リーダーが防火番で、つまり私が彼女の代わりに我々の兵舎を統率することになった。幸い病気のため、あるいは役目が有ったの欠席者など、全てはきっちり合っていた。全ての参加者達は大きな人も小さな子もきっちり自分の場所に並び、遅れずにお辞儀し、番号（日本語で！）もさっさと言えた。何という役目でしょう！

この人形芝居に付随する号令も日本語で掛けなければならず、全ては軍隊調だ。我々が、彼が激昂し、殴りまくるのを恐れていれば、彼はもちろん、内心笑いこけているのだ！

ファン・デル・クロフト

1944年4月22日

今日午後、今夜役目のある人は全員警備所に行かされました。そこで私達はこれらの日本の言葉を習い、夜ニップにあつたら文章全部を暗記していなければなりません。

フシンバン	=夜警
カイチョウ・フシンバン	=夜警長
ニチョク・シリシンバン	=夜警 II
ニチョク・フクワン	=夜警 I
イチョ・アリ・マセン	=異常なし
ダイ・ゴ・ハン	=ブロック 5
キウオツケ	=きをつけ
バンゴ	=数える
コンバンワ	=今晚は
サヨナラ	=今日は [ママ]
ダイゴハン・ウアリ	=巡回終了
ジュージュウイテー・フクムシマス	=私は警備を続けます。
クースーカイホ	=空襲警報
カイカカイホ	=空襲の危険有り
カイカカイホ・カイジョ	=空襲警報解除
スウィジイン	=炊事場長

‘フセンバン・ダイ・ゴハン・フクムチュー・イチョアリマセン’

8時半に私達は又警備所に行かされました。ニップは私達を灯りの真ん中に入れたけれど、私（は警備をしたばかり）は他の人達の陰に隠れていました。彼は幾つかの言葉を言わせて笑い、冗談を言いました。彼は私達が分からなくなると、とても嬉しそうでした。

ファン・デル・クロフト

1944年5月16日

やっと炊事場からのご飯が来ました。

ファン・デル・クロフト

1944年5月20日

今日は全てを整え、棚板から物を降ろし、高価な物は片づけ、居心地の良い壁布は取って明日の高官訪問に備えました。

ファン・デル・クロフト

1944年5月21日

7時から9時 [まで] 高官の訪問。そこら中で質問し、見て回りました。豚を二匹連れてくる事、より多くの肉、油、果物、衣類に靴を約束「しました」。案内事務所も来るそうです。[彼らは] 収容所に関して大満足 [でした]。

チャックス・グレイン

1944年6月1日

昨日朝は又、最高級の興奮の渦が起きた。6時に私達はベッドからたたき起こされた。大急ぎで起き、全てを掃除し、そしてその少し後に‘整列’した。全員が列になり、そこにニップが一人と、一人の小さく貧弱な、国籍不明の男が来て、この男が命令を出し、これが聞かれないとケパラが‘プクール’ [殴られ] た。ヤーアアア、プクールと、そのフート [新参者] は言い続けた。彼は実際あちこち殴りつけ、夜には全ての兵舎を歩き回り、ベッドの中を覗き、殴りつけたりした。その結果：ケパラが収容所司令官に苦情を申し立てた。今やそれは無くなった。多分新しいのが来るだろう。我々は今や点呼の時日本語で数えさせられ、これは時に陽気な場面になる。

ブルゲル-ダウファス

1944年6月2日

私達の所に、又別の看守が来た：現地人で、日本語を話し、始めはひどく強硬に行動し、私達全員にお辞儀させ、怒鳴りつけ、しかしこのため我々の収容所ニップ（オガタという名の）に叱りつけられて、今、2日後には終わりになった。

一昨日の夜、私達が8人くらいでティヌ・Mのところで灯りの下に居たら、この紳士方が突然私達のところで立ち止まった。私達は立ち上がり、お辞儀をすると、彼らは何か恐ろしいな事をして又ズルズルと行ってしまった（これに先立つその午後にも、彼らは私達に大げさに怒鳴り立てていた）。少し後に、又彼らが来て、我々は又立たねばならず、お辞儀をし、その後私達はこれをやり続け、みんなで互いにお辞儀を十回ほどもし、全くの見せびらかしで、私達はお腹が痛くなるほど笑い、男達は見せ物の猿みたいに歩き回っていた！我々の収容所ニップは新しい人達が来たら居なくなる。彼の後継者は既に居るが、[その人物に関しては] 余り知られていない。

ファン・デル・クロフト

1944年6月4日

我々の収容所ニップは全ての警察〔官〕と共にいなくなりました。新しいのがニッポンの警備兵と共に〔来ました〕。最初の頃は沢山殴りました。私達は抗議しました。彼らは罰を受けました。

モード

1944年6月9日

少し前から私は‘飯盛り女’の役割を果たしている。これはつまり私が毎日500食から600食をよそうという、通常、暖かな仕事だ。私の‘クミチョー’〔副兵舎長〕の地位は引越すことによって失った、一人余分になったので、自分から地位を落とすために申し出たのだ、‘下士官’の仕事は私には向かない。

チャックス・グレイン

1944年6月16日

この間にも高官の訪問があった。せいぜい15分間〔居ただけ〕で、誰も何も言わなかった。我々は全員部屋の中でベッドの横に立ち、彼らが中に入ってきたらお辞儀をするはずだった。しかし何も来なかった。我々は少しだけ、アメリカ人が来るかも知れない、と期待した。しかしこれはまだ先のことのようなのだ。

モード

1944年6月18日

今朝は、それぞれの兵舎から10人の女性達が出て、一時間半パチョレン＝芝地を掘り起こして野菜の苗床作りをさせられた。前の収容所ニップも、私達に一度これをやれと言ったが、一日後には幸い我々の収容所リーダーが、これは一般的に言って女性の仕事ではなく、特に熱帯では全くだめだということを彼に理解させ、そのため少年達がこの仕事を担い、我々は定期的にババッテン＝芝刈りと草取りをすれば良いことになった。今回の新しい男性は全く違う考えを持っており、自分自身は前任者よりかなり少ししか動かない。全てを数人の本物と、幾人かの偽物（＝ジャワ人の）ニッポン兵に任せ、これは私達に取っては良いことではない。

それでも今日の‘ほり起こし’は思ったより良かった。7時から8時15分前まで殿方が現れるのを立って待ち、それから...、幾つかの小石の山を塀の外に運び、大いに笑いながら‘厳重な’警備の元に半時間でやり終えてしまった。明日は又100人の女性達がこのような種類の仕事のために出てくるはずだが、恐らく彼はこの件に関してはもう何も言わず、それなら私達も勿論言わない。今や我々はその度に違う命令を受ける。点呼有り、点呼無し、やはり点呼有り、お辞儀する、お辞儀しない、やはりする、夜警の時突然屋内だけ、それから又屋内無し、それから又屋内と屋外を巡回する、など殆ど毎日変わっている。変わって良くなった一つの点は、それぞれの兵舎で2人ではなく1人で警備に回れば良くなり、回ってくる回数が少なくなったことだ。

ブルゲル-ダウファス

1944年6月27日

又新しい収容所ニップが来た。前回は半月の劣悪管理の後（最後の週には実際、殆ど食物を貰えなかった）解任され、今は又もう少し収容所のことを考え、姿も現すツワンが来た。もし私達が夜に又ケテラ [カッサバ芋] を貰えるならよいけれどね。コンソメスープだけということが今は多く、それをコップ一杯とサンドイッチを数枚だけだ。

ファン・デル・クロフト

1944年7月7日

‘高官訪問’が今日はある予定だったのに、そのかわりに第一級の‘泥棒訪問’である家宅捜索が有りました。7時に私達は不意打ちされました。“ピギ、ピギ [出ろ、出ろ]！”私達は全員リドに行かされました。ハネケは起きたばかりで、キティの所に寝に行きました。お母さんと私はろうそくやマッチ、ランプやハンマー、ニッパーなどの上に乗っていました。[私達は]出る必要はありませんでした。私達の周囲ではひどい散らかしようでした。体温計と鉤針の付いた体温計入れだけが持って行かれました。アンドレアはリドへ [行かされ] そこで身体検査されました。私達を怖がらせるため、先ず2人の女性達が蹴り倒され、打たれました。

ワッシュ夫人も激しく打たれました。そしてらお金がいろいろな方向に転がってきました。多くの人達はそれを地面に捨てました。そして他の人がそれを又拾いました。他の人はストラウケル [ブディエル] 夫人のように人に上げました（何も戻ってきませんでした）。それから2人の女性がニップを側において体に触りました。全ての人はとても怖がっていました。とても書けないほどです。セマランから多くの裏切り。彼らはf 1400. 一取り上げました。笑いながら彼らは去っていきました。

モードー

1944年7月8日

ほらごらん、今日からお金無し、心配も無し、ニップが私の最後のコインまで取り上げた！彼らは私達を昨日、酷くもやっつけた。‘高官の訪問’が7時半前に有るという通告があり、我々はそれを通常通りの荘重な方法で迎えなければならず、つまり先ず収容所をきれいに片付け、それから全員主要道路に沿って整列するはずだった。にもかかわらず7時前に、それぞれの兵舎に何人かのニッポン兵が突入してきた。我々は彼らの監視の元に全てのトランクを開けてベッドに乗せ、それから収容所の角にある芝地、いわゆる牧草地に行かされた。その時初めて、私達はこの訪問の意味が分かった：家宅搜索だ！そして今回は私達に友好的なジャワ人ではなくニッポン自身によって。

殆どの女性達は金銭を何とか自分の身に付けるのに成功したが、私のベッドと所持品は扉の直ぐ前にあり、そこにはニップが立ち番をして、私の指先をいちいち監視していたのでそのチャンスはなかった。イエレは既に6時半に警備所に並ばなければならなかった40人の少年の中に含まれていた。“掃き掃除をするためだ”と私達は思っていたが、後で分かったことは、彼らはニップ達が家宅搜索で押収した物の“事務管理”の手伝いをさせられたのだ。

数時間後に紳士方は牧草地の我々の所にやって来て、3回命令を出し、女性達に自分で持っている金銭を即刻リーダー達に差し出すように言った。何人かはその通りにし、殆どはせず、数人はそれを破り、又は単に捨ててしまった。それに対して数人の女性が指名され、残りを身体検査させられた！紳士方はつまり態度を崩さず、私達に触らなかつたことは、私から見れば絶対に評価すべきだと思う。この‘身体の調査’は、この為に全体としては大成功だったこの不意打ちの、弱点となった。勿論、殆ど何も見つからなかつた！それから私達は中に入ることが出来、恐怖に心臓を締め付けながら兵舎に戻った。どうやって自分の物を見つけたら良いのだろう？

さあ、それは一目見た時には大変な混乱状態だった。全てはベッドや床に広げられ、しかし後になってみると思ったより大丈夫で、それは混ぜ合わされても、壊されてもいながつた。だから私達は我々の物を急いでトランクに集めることが出来た。私は勿論、最初に私のお金、f100、一強がまだ有るかどうかを見たが、でも何にも無かつたわ。私がそれを仕舞って置いたバッグは空でベッドの上であり、猫がその横でぐっすり眠っていた！それ以外は彼らは私からは、電球を幾つかとロウソクを持って行っただけだった。これはコントラバンデ〔秘密ブン取り品〕で、というのも最近では搜索に立ち会う者は誰から幾ら持ち去つたか正確に書き留めなければならない、なぜなら……同じ金額を日本のお金で返してくれる事になっている！さて、どうなりますか興味深いこと！

おかしな事に、私は確かにf100、一以上持っていた筈なのに、リストには私の分としてf89、一と書かれている。まあいずれ、無くなつたものは無くなつたのだ。午後の点呼の際、まだ隠してあるお金をこれからでも両替に出すようにという最後通告が有つた。今後

オランダの金を所持しているのを見つけた者は叩かれる。この時にも何人かの女性が脅しに負けて又何がしか、特に銀貨は隠しておくのが難しいので差し出された。私は忘れていた引き出しから古い財布を見つけ、そこにイエレの貯金が f 1 2 . - 以上有った。その上私はどこかにきれいな f 2 , 5 0 の銀貨を持っていた、これは大切に保管しよう。総額では f 1 4 , 0 0 0 . - 以上押収された。

さらに幾つもの熱体温計と薬品が取り上げられ、医師に渡された、これまで彼が何度も女性達に頼んでいたものだ。多くの人たちに社会意識が無いのは恥ずべき事だ、そうでしょ？最後に、あちらこちらで紳士方がその責任の所在をはっきりさせずに取り上げたものも有るけれど、全体の量からすれば少ないものだ。何人かの女性達は、意識してかせずに、紳士方の一人の機嫌を害し、頬を張られたり、蹴られたりしたが、それも偶発的なものであった。

ブルゲル-ダウファス

1944年7月9日

さらに7日に、つまり金曜日「1944年7月7日」、特筆すべき家宅捜索があった。この日には非常な高官の訪問があると告げられていて、私達は今回は何も準備が出来なかった。私達は前日午後に全ての野菜を準備し、当日は5時から既に熱い湯を取りに行き仕事始めていた、高官は7時半には来る筈だったから！この為キャンプ中が朝早くから動いていた。

私は6時前に自分の小屋の準備が殆ど終わり、きれいに洗った便器を持って窓から出ると、目の前にいたニップと顔を突き合わせてしまい、その男はブカ [開ける] とかカルアル [出る] とか何とか怒鳴った！マリアンはベッドに立って歓声を上げていた。ニップ、ニップ！エルスも私のベッドに座って、喜んで叫んだ。ニッポン！ニッポン！さて私は少し思案してからマリアンをベッドに置いていくことにした。

私達は全員野原に行かなくてはならず、そしてこの冗談にどのくらいの時間が掛かるのか全然分からない。まだとても寒く、きつい風が吹いていて、この子はまだ服を着ていなかった。お粥はもう食べ終わっていた。エルスと私も、幸いにも朝食は済ませた。それで、私は彼女が病気だといった。よし、それではベッドに居ろ。彼女の向かいには病気のファン・ダム夫人が彼女の娘と共に居た。この人達が彼女を見ていてくれると言う。私は彼女に、おもちゃの籠を与え、とても機嫌の良い状態で後にした。その時棒きれ男³¹が来た。そこら中に出てくるわね、突然、全キャンプ中に何十人も！彼らは食べ物と椅子を持って行ってよいと言った、長く掛かるであろうからと。私達はコーヒーポットとパン入れを、椅子にしっかり付け、それらを引かずっていった。エルスは小さな椅子を持って前に歩いた。ここまではまあまあであったのだが、この時男達は私達を追い立てだし、この兵舎のツルース・サンダースはお辞儀をし

³¹ 日本軍内に居たインドネシア人補助兵、兵補のあだ名で、棒だけを武器として持っていた。

なかったといって突然ニップにひどく殴られた。彼女は叩きのめされたのよ、ヴィム、酷い。彼女は倒れ、そいつは彼女を蹴ったり殴ったりし続けた。フェニック尼僧、私達の看護婦で、彼女を助けようとした人も同じ目に遭った。

別の兵舎の人たちは皆この二人が倒れている傍を通らなければならなかった。惨澹たる光景で、叫び声と押し合いとでパニック状態だった。エルスは幸いこの出来事が起こる前に彼女の子供椅子を持って野原に行き居たが、イニの子供たちはこれに動揺し、叫び声をあげて駆けて行った。イニはその後を追い、私はそこに、椅子とパンとコーヒーポットとを持って人込みの中に居た。私はそっと前方に移動しつつ、人々に冷静になって歩き続けるように勧めた。あの二人を、あの場で助ける事は出来はしないのだ。私はあまりの驚きのために全く冷静になっており、マリアンを連れて居なくて本当に良かった！と思った私達が細い通り道を抜けて野原に出てしまうと、余裕が出、落ち着きも少し戻ってきた。私達は座る事が出来、これは10時か10時半まで続き、身体検査もされた。前もって、私達は金銭を提出するように要求された。これは大収穫だった。F9000。一前後、それに兵舎の中でも、大層なお金が見つかった！大量の銀貨、ファンタスティックだ。この収容所内にまだこんなにお金が有ったなんて夢にだって見た事は無かった！

終わった後の兵舎内の散らかり用は書き表しようも無い。通路は単純に物でいっぱい、全てのトランクも戸棚もぶちまけられた。混沌としていた。幾つかの兵舎ではゲーリングス[丸型クッション]やマットレスまで切り裂かれ、オバト瓶[薬瓶]も投げ壊されたりした。私達の所はまだましだったけれど、私はどうせトランク3つしか持っていないのだ。それらはベッドの上に有り、少々かき回されていたけれど、それだけだった。そしてエンペルス「外廊下」に有った戸棚は手付かずだった！兵舎の他の人の所では文字通り全てが投げ出されたけれど、私達が当たった一隊は破壊狂ではなかったようだ。マリアンは彼らが居た時、マレイケ・ファン・ダムベッドの上で静かに遊んでいて、とても良い子だった。ただ、私のクリスマスツリーの、最後のろうそくが無くなっていた。惜しい事をしたと思う、幼児はこんな光が大好きだったのに。ママの誕生日にも又2つ火を点けたかった。

ブルゲル-ダウファス

1944年7月14日

全くなんて事でしょう、ヴィム、気をしっかり持って、すごい事が有るのよ。先回の家宅捜索でニッポンがどれだけのお金をここから持って行ったか分かる？ f24,000。ー！！この内 f14,000。一前後は小屋の中で見つかって、f9,000。一は広場で供出され、残りは、数百ギルダーだけだけれど、後になって提出された。

そのうち最初の分は没収、二番目は私達の銀行(!)に預けられ、残りは返される、でも勿論違う、日本のお金で。

私はまだ純粋にあっけにとられてしまう、あんなに沢山のお金がこの収容所内にあったなんて、そしてどれだけまだあることか！少なくともあの3倍はある。私達は最後の最後までではぎ取られる。脅迫され、強奪される。何とまあ、私達の収容所は家宅捜索の13番目だということを考えてごらん！！私は自分が数千ギルダも持たず、持った事もなくて良かったわよ。あの人たちはその為にどんなにびくびくしていた事でしょう、それなのに今になって、無くしてしまったんだわ！ヴィンピーーヒンピー、私達がここから出たら、あなたは熱心なホームドクターとして現物で払ってもらいましょうね？そして彼らは少し後で又取って行くのね？人生は美しいこと。

チャックス・グレイン

1944年7月16日

7月7日金曜日、つまり第七番目の第七番目で、無邪気な人に依ればフランス風幸運日に、高官の訪問がある筈だった。しかし、私達がまだベッドから出るか出ないかの内に（ヨピーはマラリアで寝ていた）収容所に男達の侵略隊が来た。まるで割れた蜂の巣の様な騒ぎ。それは全く予期しない、家宅捜索だった。全ての女性達はいわゆる‘リド’に、病人はベッドに、そしてケバラ [長] 達は監視のため室内に居させられた。

神よ、全く何てひどく散らかして行ったことか。全てが、ありとあらゆる物がひっくり返された。全ての体温計は取り上げられ、私の洗浄器と、見つけられた金銭も全部。始めには持っていても良く、そして今は全て提出しなければならない。吐き気を催す。いわゆる、充分なホルマット [敬意] を示さなかった女性は盛大に打ちのめされた、全くひどい、嫌々、泣き出し物だ。しかし一人として、どんなにひどい気持ちで居るかを気付かせた女性は居なかった。

リドでは全ての女性がボディーチェックされ、大きな混乱を呼んだ。何人かは気絶し、他の何人かは、まだ持っていた少しの金銭を、捨てたり破ったりした。

ファン・デル・クロフト

1944年7月21日

新ピンター [命令]。私達の身体を柔軟で体調良く保つため、一日二回、点呼の後に体操をするべし。なぜなら、整った身体から全てが始まるのだから、とニップは言いました。

モード

1944年8月4日

私達は毎日点呼の後に20分間体操をしなければならない、なぜならニップは私達が怠け者で、動かないと私達の健康が心配だからだと言う。ふん、勿論適当にやってるわ、彼がお出ましになる、幸いにもごく限られたとき以外はね。

モード

1944年8月9日

我々の兵舎、あるいはブロック、又の名を納屋6番のリーダーは、7ヶ月間彼女の職務を誇り高くこなしたが、赤痢の重い発作の後、すっかり嫌になってしまった。炊事場の長で、この兵舎に住み、私の隣で寝ていて、私の中に従順な創造物が居るのを見通した女性の勧めで、私はこの仕事に立候補し、驚いた事には、大多数の賛成を得て選ばれてしまった。

‘知らないものは愛されない’という諺は、この際当てはまらなかったようで、というのも、私に投票した人の多くはマゲラン部の人で、まだここに来て間も無い私の事を知るはずも無い人たちだからだ。‘新しいしい箒はきれいに掃ける’とあの人達は思ったに違いない！とにかく、1944年8月6日、日曜日、私は班長[兵舎リーダー]、とニップが呼ぶものになり、白い長方形に赤い横線が二本入り、収容されている人達全てが持つ番号入りの印をいつも身に付けていなければならなくなった。私の義務は今や大量で多岐に渡る。ただ一つの特権は、私のベッド横の一通路の巾が、35cmではなく85cmになったことだ。さてこれから、私の227人の‘臣民達’が気が合うかどうか、お楽しみだ！マゲランの人達は殆どがオランダ兵士か下士官の夫人達だ。

モード

1944年8月12日

朝6時。[私は]不寝番をチェックするためにキャンプ中を回ってきたところだ。これは兵舎リーダー達が交代で24時間しなければならない防火番の仕事の一つだ。つまり、病人が出たりしなければ、10日に一度回ってくる。その際は一日中、時には夜も、二本の赤線の入った‘斜め帯’とか‘二本線’とか呼ばれる、たすきを掛けていなければならない。私達の助手は‘一本線’をか掛けているけれど。勿論これはここで良くある冷やかし言葉だ。ここで私が気付いたことは、暗闇を怖がる人たちがたくさん居ると言うことだ！私は夜に静かなキャンプ内を歩くのが好きだけれど、睡眠時間が減るのは面白くない、特にこの仕事をしていると昼間も歩く

距離が長くなるからだ。夜間の空襲警報が有ったときには不寝番は防火番を起こすことになっており、防火番は警報が解除されるまでキャンプ内を歩き回らなければならない。

ファン・デル・クロフト

1944年9月29日

ジルデルダ夫人から話があり、恐らくこれからは、最初の5兵舎の人達は第一炊事場に、残りの5兵舎は第二炊事場になり、一月後には交代することになるでしょう。一つの炊事場がもう一つより食事が多いという苦情がとても多かったからです。

チャックス・グレイン

1944年11月13日

2日ごとに検査がある。明日は‘ジャカルタ’から最高長官が[来る]。私達の收容所長は又全てをきれいにするために駆け回っている。最初のは、自由時間には少年達の髪を刈り、その後のは彼らとビー玉遊びをし、今のは彼らと散歩し、一緒に遊んでいる。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1944年11月19日

今日は朝が早かった、全てのマットレスは日向に[運ばれ]、毛布も同様。この為にベンチや洗濯紐を内部兵舎のリーダーから提供された。このリーダーはこの後、私達にいろいろ説明するために、私達を笛で呼び集めた。私達は兵舎リーダーを何人か選ぶことから始めなければならない(班長と二人の助手(組長))。そして、私達が翌日から直ぐにも全ての收容所内雑役に振り分けられると言った。つまり時間は余りなかったが、彼女たちは今や助力を必要としていた、こんなに沢山の人が入って来たのだから。私達の收容所には今や9000人[ママ]の女性と子供達が居るのだ!

全ての收容所内の仕事は、一時間半の仕事時間だが、幾つか例外があり、それは病院係り、持ち上げ係り(100kgの米袋を持ち上げたり、木材伐採のきこりグループなど、重労働)、炊事場係りなどで、作業時間がずっと長く、この為には強くて、体が健康でなければならない。その他の仕事は野菜洗浄と、野菜を門の日本の警備所から炊事場に食糧車(2つの輪に長い木が渡してある、低い押し、あるいは引き車)に乗せて持ってくる係りだ。

さらに夜間にはフシンバン[夜警に歩くこと]があり、これは夜8時半から始まって、

2人で、全て安全かどうか兵舎を見回る係りだ。一時間半が終わったら、次の人を起こさなければならない。最後の見回りは4時から6時までで、つまり長く掛かるということだ。検査する日本人に分かるように、腕には日本語でフシンバンと書かれた腕章を巻く。さらに、この男に会ったときには、日本語で（勿論暗記しておく）自分がフシンバンで、異常が無いことを知らせなければならない。彼と一緒に次の兵舎番の所まで行き、そして自分の担当区はこれで終わりなので戻ると告げなければならない！これ全部が、私達にとって全く新しいことだ。

6歳以上の私達の子供達も既にかり出された。ここには女性の指導の元に草取りをする庭がある。専門家だ。この10歳までの小さな息子や娘達は、朝は草取りを手伝い、毎日午後には水撒きを手伝う。13歳から16歳までの少し大きな娘達のグループもあり、浴室とトイレの清掃をする。ここでも又とても（幸いにもね）美しい女性の指導の元だ。一日二回、全ては上から下まで掃除され、一週間に一度、全ては掘り返される。書き忘れたけれど、勿論この年齢の少年達もかり出されている。10歳から13歳までの少年少女達は残りのキャンプ内の係りで、つまり‘ブルバード’とその他の道を一日二回掃き清めるのだ。

残っているのは10〔歳〕以上の少女達だけで、この子達は通常病院で手伝いをしたり、炊事場で助手をして、ドラムを持ち上げたりする。ここで私が言っているのは全てを煮炊きする大きな鍋のことで、火に乗せたり降ろしたりするのだ。これはすごい重労働だ。最も強い娘達だけがこの仕事に耐えられる。私達の兵舎が野菜洗いの番になると、私達はこれを全員でやる、その方がずっと早く終わるからだ。一時間半毎に自動的に交代要員が来る。ここでは、私達の別のキャンプでよりも、より一体となって仕事が行われている。あそこで行われていたことは、余りに自分だけの為過ぎたが、ここでは社会全体のために仕事をする。ここのやり方は全く悪くない、でも、私達はまだ兵舎リーダーの笛が鳴る度にびっくりしてしまう。しかしこれにも直ぐに慣れることだろう。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1944年12月1日

今朝早く通達〔が有った〕‘高官訪問〔有り〕’。全て清掃しなければならない。先ず兵舎だが、〔それから〕私達がやっとの思いで取り付け付けた蚊帳も取り外さなければならない。全てのマットレスは仕舞われ、私達の服、木に掛けてあり、私達が毎日使うものもトランクに入れなければならない。そのトランクは簡易ベッドの下だ。庭はヘババット（草取りと芝刈り）をする。

12時頃、予行演習で、つまり又笛を鳴らし、外の‘ブルバード’に点呼のために整列、寝ている病人だけが屋内に居られる。キャンプ・ニップは兵舎検査のために回り、あちらこちら棒で叩いた。〔彼は〕きちんと整列した全ての女性達に沿って歩いた。女性達は折り畳みナイフのようにお辞儀をしなければならない。そして2時にその高官が来た。全ては同じように繰り返され、ただ今度は星を沢山つけた男がいろんな副官を連れて一緒に歩いただけだ。全

ての兵舎は検閲され、そのため全部合わせるとずいぶん時間が掛かった。4時に全ては終わった！このような訪問があると全ては止まってしまい、炊事場、野菜取り、全ての人が出てこななければならない。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1944年12月20日

ここでは1日2回の点呼があり、リーダーを先頭に2列に並ばされる。幸いリーダーは何人もいるので全てが一人の頭上にかぶさるわけではない。しかし朝7時半に笛を鳴らし、これは私達もさっさとするようになった、こんなに長い兵舎では呼んでいても埒が明かないであろうから！点呼は女性達が取るが、時にニッポンと一緒に来る。何時彼が来るかは、事前には分からないから、我々はいつも行かなければならない。

点呼を取る女性は‘防火番’と呼ばれる。彼女たちは胸から背中にかけて、斜めに渡した赤い帯でそれと見分けられる。第一‘防火番’は線二本、第二は一本が付いている。彼女たちは一緒にキャンプ中を回り、病院に寝ている人の数、兵舎内で病気に伏せている人の数を書き入れる。

さらに彼女たちはニッポンの最新命令と伝える。この女性達は終わった後で日本の警備に報告し、人数を日本語で伝えなければならない。

全てのリーダーにこの荣誉が与えられる。この人達の間で順繰りに回ってくるからだ。彼女たちの仕事にはフシンバンを一時間半毎にチェックする役目もあって、そんな夜には眠りに就くことなど出来ない、なぜなら夜間にキャンプを回って全てのフシンバンの人達を見つけるまでにとくに一時間半は経ってしまうからだ。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1944年12月20日

私の周辺の人達はみんな細[菌性]赤[痢]で病院に入れられた。私達はここに来て一月だが、私達の半分近くが病室に居る[.....]。今この人達と共に私達の兵舎リーダーも病院にいますので、新しい組長[副兵舎リーダー]を投票で選ばなければならない。そして今、私が最高票を得たので、私がこのきつい仕事を引き受けてもよいことになった。辞退は出来ないし、他の人達が病室での休息の後こんな事を引き受ける状態には無いのを見て、私は承知した。組長だと分かるようにするために、私の収容所番号、ここに来て又変わったのだが、その下に赤い線を付けることになった。

ファン・デル・クロフト

1944年12月31日

私は、11時半から1時までの三回目の夜警に当たっていました。多くの人達はまだ起きていました。そこら中がざわついていました。炊事場ではまだ仕事をしていました。私達が一度‘ルックン’[収容所言葉で見回ること]すると、やっぱり、オリーボル[大晦日にオランダで必ず食べる揚げ菓子]を貰いました。12時には殆どの人が眠り、私は自分の相棒に‘明けましておめでとう’を言うことが出来ました。突然、物音がして、ニップが二人と、一本足木馬[日本軍内の現地人補助兵]が一人、部屋に消えていきました。彼らはトリップ夫人を上から下まで触って、どこにも空いている場所はないかのと聞きました。それから彼らは私達と話しました。私達はタスキを逆さまに掛けていました。そして蚊帳の無い人たちは、私達が良く布団に入れておかなければいけないそうです。

私の相棒のズウェーブ夫人は、全く怖がる様子を見せませんでしたから、私も平気でした。私達は火の点いているのが分かる炊事場に歩いていきました。一人のニップは私達の後を追ってきました。私達は彼に‘ケパラ・ダプール’[炊事場長]が火は‘ベルルー’[必要上]点けておかなければならない、なぜなら肉が良く煮えないからと言った事を伝えました。昨日、私達は10頭の死んだ羊をもらったからです。彼はとても従順で、帽子で捕まえられそうなくらいでした。彼は何の肉なのかと聞き、亜鉛の調理台に座り込み、あちこちゴロゴロしながら煙草を取り出し、火を点けてくれと頼みました。’チャペ、チャペ’[疲れた、疲れた]と彼はため息を尽くばかりです。強い酒の匂いがしました。彼は火を点けた煙草を返してもらおうと、私達にも一本差し出しました。煙草が5本有れば、パン一つと取り替えられます。それからこの紳士は台の上に長々と伸び、私達に‘テルース’[ずっと]そこに居てくれと頼みました。ズウェーブ夫人は彼に、‘ツワン’[旦那]はここに横になってはいけない、外に行かないと、火の傍だからすぐに眠ってしまうから、と説得しました。でも彼はもう眠ってしまっていて、私達は互いに、‘こんな奴、とっとと居無くなればいいのに’と彼が寝ている直ぐ傍で言いました。私達が次の人たちを起こしに行った時にはジルデルダ夫人がもう出てきていて、この男は居無くなりました。

チャックス・グレイン

1945年1月3日

新ピンター[命令]。いつも、夜でも、番号をつけていなければならず、もしニップと会ったら、たとえその時、自分一人であっても‘ケイレイ’と叫んでお辞儀しなければいけない。ヘデック[竹で編んだマット]越しに見る人は叩かれる。全ての穴は塞がれた、なぜなら、と司令官は言う‘どうせブランド[オランダ人]は居無い、インドネシア人ばかりなのだから’。あー

あ、全く、たくさんだわ。

ファン・デル・クロフト

1945年1月8日

今日の午後やっと病室から出ました。‘風と共に去りぬ’の第三部を読めたのは楽しかったけれど、でも早々に邪魔が入りました。高官が訪問してきたのです。アンバラワ組の兵舎では、一本足木馬 [日本軍内の現地人補助兵] とニッポンがトランクや戸棚を嗅ぎ回りました。私は日記のことでドキドキしていました。彼らは戸棚を叩き、メモ帳を眺め、一人はヴィットベルフ尼僧とオランダ語を喋りました。一人の一本足木馬がここに来ましたが、V. N. 夫人がニッポンの旦那がここはもうヘブリクサット [調査済み、ペリクサ=調査、の訛ったもの] した、と言いました。ヤッタネ！

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年1月8日

10時に家宅捜索があると通告された。全ては大騒ぎ、まったくひどいわ。本当に神経をすり減らされる。一度有ったばかりなのに、又直ぐ次が待っている。そして10時に、その通り、ケンペ [イタイ] の一隊が入って来た。通告では、武器弾薬を探しての抜き取り検査で、私達のトランクを見るのだそうなの！ケンペ [イタイ] が入って来た。このケンペ [イタイ] は最も友好的で、お辞儀する女性に礼儀正しく挨拶した。彼らは収容所中を通り過ぎ、私達のトランクは全然見なかった！

テ・フェルデ

1945年1月8日

今朝、突然ヤップ達による抜き取り検査があり、おそらくは武器 [を探して] です。これはまるで紀元ゼロ年の家宅捜索のようなもので、彼らは私達の所には来もしませんでした。第10兵舎はいつも簡単で、ここに来る頃には彼らはもうやる気もなく、疲れています。高官の訪問があるときには、それは第5か第6兵舎で飽きてしまって、又帰って行きます。私達はヤップ達が来たときにはもうそれが分かっています。

モードー

1945年2月2日

独特なのは、収容所ニップが囲いに穴を見つけると逆上することだ。彼はある夜、私や誰彼を、殺すと脅した（‘ポトン・レヘー’）[のどを切り裂くぞ] もし翌朝早くに扉が補修されていなければと。しかし今そこら中で火が燃やされている事は、それは炊事場で薪不足のために湯を提供できないからなので、彼は知らん顔をしておくつものようだ。彼は少なくともまだ何も言っていない、これは私達がバラ・テンタラ [軍隊] の管轄下に入って以来、厳しく禁じられているものなのに。

紳士方は長くなればなるほど、収容所内の出来事に干渉し無くなるように見える。例えば点呼の時には、彼は殆どまったく見に来なくなり、そのため女性達も姿を見せない人が多くなってきて、これは兵舎リーダー達にとっては大きな迷惑で、というのも、もし彼がこれに気付いたら、殴られるのは私達だからだ！私はだから、私の婦人達に、そんな事になったら彼女たちに利子付きで返して上げると約束した！しかし点呼そのものがばかげているのだ、最も純粋なるいじめだ、何故って私達の一体誰が逃げることなど考えるというの？ここで白い皮膚だったら何処にも行くところは無いじゃないの！私達はだから、もし点呼の人数を、何人居無くして何人居ると報告したら、いったいどうなるかと、悠々空想している。

ファン・デル・クロフト

1945年2月13日

夜にヘデック [編んだ竹のマット] の外で、一本足木馬 [日本軍内の現地人補助兵] とその周りで自転車に乗ったあのニップが、女性達を引きつけようと立っていました。その誘いに乗らないように、私達は警告され、というのもセマランでは衣類を盗られているからです。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年2月17日

さてでは一度、組長の仕事に関して。それぞれの兵舎に、つまり一人の‘ハンチョウ’ [兵舎リーダー] と三人の‘クミ [チョウ]’ [副兵舎リーダー] が居るわけだ。彼女たちは全員、一日中、兵舎に持ち込まれる物で、分けられる物ならば何でも分ける態勢になっていなければならない。

早朝に熱湯が来るが、これは病人用だ。これは最初に炊事場から運ぶのだが、知らせを受ける前に行ってはいけない。クミ [チョウ] 一人とボランティアが、言われてから炊事場

に桶を持って行き、そこで病人の数を告げる。するとそれだけのccを受け取る。これを直ぐに必要な人達に分ける、通常一人100cc、時には少なく、時には多い事もある。それから普通の人用の熱湯が来るので又分ける。これで何を作るかは勿論自由だ。コーヒーか紅茶、もうそれが無いときは‘収容所ブイヨン’もよく作った。それには先ず塩こしょう、ナツメグに、細かく刻んだトマトの葉を少し入れる。華々しい飲み物ではないが、飲める物だ。

すると炊事場の娘が私達に、腹をこわしている人用のお粥が出来たと知らせに来る。笛を又取って、兵舎伝いに‘お粥を取りに行つて’と大声で告げる。何人かの人と又一緒に炊事場に行く、というのもクミ[チョウ]が居無ければ何も支給されないからだ。そして又少ししてから、ご飯を取りに来るよという知らせが来る。このご飯を入れた重い入れ物を運ぶために、毎日新しいグループが呼び出される。クミ[長]はチェックのために一緒に行く。それからナイフでご飯をほぐしていく。ご飯はひどくくつつくものだから、こびりついたご飯をもらったら損であろう。外にしつらえられた我々の配給台上には、配分が少ないと思う人のために秤が置いてある。それが実際に少なかった場合は、もう少し貰うことが出来るが、それが多かった場合には、当然削り取られてしまう！この配給の間にも入り口の門の所に何か来る可能性があり、トマトとかバナナなどだが、その場合は他の組長が行く。1時に食事を取りに行くための笛が鳴ると、又‘ストレーパー’[腕章の線]の一人が監督のために同行する。そして午後には何かのリストを作る仕事が無いと、やっと15分間静かになる。夕食が有る時は、又同じ様なことになり、いつも一緒に行かなければならない。

モードー

1945年2月27日

まるで、ここに充分難儀が無いとでも言うように、収容所指導者は外廊下に寝ている何人かの人達を兵舎内に入れないといけないと言う。全体に詰め合い、縮小し、ベッドの交換、必要と有れば強制的に、抵抗、争いに泣きわめきや罵り合い、等々。ニップがやっとしばらく我々に手を付けないとなると、指導者自身が人々を患わせるようなことを見つけだす。私は今、丁度病気で、しばしの幸運だ。今は私の助手が、やり遂げる番だ！私はベッドから事務を執るだけだ。

それは[1944年]11[月]にバンドンからここに来た人達の居場所は、私達よりかなり悪いけれど、その代わり私達は、彼女たちが来たときにはもう2年近くこの忌まわしい収容所において、その2年間、彼女たちは私達よりずっと良い食べ物や住居が有って、その上、彼女たちは全体的にまだ資金力があるのだ。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年3月13日

今朝、全ての‘ストレープン’、班長〔兵舎リーダー〕と組長〔副兵舎リーダー〕は、警備所に呼ばれ、兵舎順にきちんと4列に並んだ。そしてそこで、衝撃的な知らせ、‘これから20分以内に家宅捜索〔が有る〕。これを皆に知らせ、もう一度呼ばれたら又ここに戻ってくるように。’私は少しでも時間をかせようと、これまで一度も無いほど急いで走り戻った。私達が取っておきたいものは全て出来るだけうまく隠し、私の日記とパンフレットは自分の衣類の中に押し入れた、これは自分で持っていた方が、兵舎のどこかに隠すより良いと思うからだ。なぜならヤップがもしそれを見つけたら、彼は多分多くの人を罰するだろうし、そうなったら私はとてもひどい気持ちになるだろうから！私達がいわゆる病人をベッドに寝かして、全てを片付けた時、私達が又戻らなければならない笛が鳴った！

私達は又整列し、私達のグループに、兵舎毎に2人のヤップと4人の兵補〔日本軍内の現地人補助兵〕が付き添った。私達は全員紙切れと鉛筆、それにバクール〔竹で編んだ籠〕を受け取り、兵舎に戻った。この間に残り的人全員は点呼に呼ばれていた。〔彼女たちは〕‘ブルバード’に立っており、家宅捜索が行われている間は兵舎に戻ることはできない[...]。‘ストレープン’は紳士方と一緒に歩き回り、彼らが見つけた物は全てバクールに収納し、誰から、何を見つけたかを紙に記録しなければならない。私達は直ぐに、これは金銭、ネガ、電球や電気製品、例えば差し込み、鉛筆、紙、そして彼らが良い、あるいはきれいだと思った物は全部だということに気が付いた！彼らは幸い兵舎の反対側の端から始め、彼らが最終的に私達の部門に来たときには、私が期待したように、幾らか、いわゆる‘チャペ’〔疲れた〕であった。

私の計算は間違っていなかった、なぜなら最初の頃は彼らはしっかり細かく、全てのトランク、バッグ、戸棚、全てをひっくり返した。そして屋内兵舎の女性達は、彼女たちの家のもの全て持って来て良かったのだから、とても持ち物が多かった！ヤップが最後に私達の所に来た時には、もう物に対する興味を実際には失っていたが、しかしそれでも彼らはやり続けなければならなかった。私は屋内兵舎の家宅捜索にも一緒に付いて行って、その‘ストレープン’から多くを学んだ。ヤップが何かを籠に入れ、もうそれを振り返らない時には、彼女たちは、それをさっと又元に戻した。この方法を私も我々の兵舎に適用した、罪のない差し込みやマッチの箱は残して。4時間の捜索の後、この不快な日も終わりになった。何という緊張感！5時頃私は門に行き、彼らが別の兵舎から持って来た物の量を見た。悲嘆すべき物だ！何という金銭、唯々すごい。

テ・フェルデ

1945年3月24日

今朝、全収容所の新長官がここに来ました。気味の悪い男です。ひどく怖い顔をしています。彼からは余り期待できないでしょう。その後、全ての卓上コンロを提出しなければいけないという命令が来ました。もうだいぶ前から火を焚くのは禁じられていたのですが、みんなやっていた事で、それをニップはこうして止めさせようとしているのです。これが効果があるかどうかは疑問で、というも幾つかの煉瓦の間でもうまく行くからです。最後に、彼は自分で卓上コンロを探しに来ましたが、数個しか見つかりませんでした。私達はそれを植木鉢にしてみました。

私達は[1945年3月]18日以来、4.1/2食の代わりに4.1/4[ママ]食を貰うことになりましたが、ま、殆ど変わりません。私達、つまり16から20歳の娘達は1/4食分多く貰える、だからイケはここに入りません。毎月一定の年齢の、有るグループの体重を量り、現在は16から20歳のカテゴリーの人の体重が、一番落ちていることが分かったのです。それでこの変更があったわけです。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年3月28日

最近、5回空襲警報があった。そうすると全員兵舎内にいなければいけない。トイレに行くことさえ許されない。それぞれの入り口や戸口で‘ストーレーブ’は見張りをする。全ての洗濯物は屋内に、つまり、女性収容所かも知れないと思わせるような物は何も見えてはいけないうのだ。防火番(女性達の)だけがそれぞれの部署に着かなければならない。そしてニップ達だけが外を、ヘルメットをかぶって歩き回る。

ファン・デル・クロフト

1945年4月14日

一度、金銭ペルカラ[金銭問題]がありました。一人につきf 3. 一振り込まなければなりません。これをしない人は、贅沢品、例えばコーヒー、たばこ、石鹸などを貰えません。

モードー

1945年4月8日

食料の配給は、兵舎毎に行われ、現在かなりうまく取り決められている。ご飯は午前中に、組長によって大きな籠あるいは桶に入れて米用炊事場から（慎重に計量されて）兵舎に運ばれ、直ちに配給される。計量用にはフィンガーボールが使われ、ある日にはふっくらと、又別の日にはぎゅっと詰められる。

1時には通常、残りの食事の用意ができ、野菜を少しと、ソースもどきを一すくい、そしてそれを取りに行くには、兵舎一棟毎に知らせが行く、いや二棟ずつで、この為には炊事場が二つあるからだ。兵舎の順番は毎日変わる。それぞれの兵舎から取りに行く人達にも一定の順番があり、これも規則的に変わっていく。組長は自分の兵舎の人達が、誰も所定の量以上は取りに来ないようにチェックしなければならない。彼女たちはそれぞれの家族が何食分貰えるかというリストを持っており、これは3歳以下の子供は1/2食、6歳までは3/4食、12歳から16歳までは1.1/4食貰えることになっているので、複雑な経緯となる。この計算管理は勿論兵舎リーダーに掛かってくる。

規則としては2時半に全収容所内に昼食が行き渡る事になっている。朝にお粥や、夜にスープがあるときには、炊事場によって同様の方法で配給され、パンは私達が桶で取りに行つて兵舎で配給し、果物も同様だが、しかしそんなことは非常に稀だ。

ブルゲル-ダウファス

1945年4月11日

炊事場の中や周辺では又大騒ぎだ。今ではチェック制度が設定された。それが必要だというのだ。大きな楽しみよ、なかなか起きない火の側で、ばかみたいにキパッセン [扇ぐ] しているのを、検査官が後ろから見てるなんて！ナチ制度だわ、私のやり方には合わない。

ファン・デル・クロフト

1945年6月9日

その同じ日曜日に、会議によって、一人 f 10.-払わなければならないことになりました。マミーは f 80.-も払うつもりはありません。私達はトランク、紐、チケルス [寝床マット] などを、お金を作るために売りました。水曜日にマミーはウェインベルグ夫人（警察長官）と話をしに行きました。その人は、私達が今後8人で外に出た時のために幾らかは残しておかなければならないという点で、マミーと全く同感でした。そこでマミーは f 40.-払いました。

昨日、金曜日 [1945年6月8日] クリグネット夫人が休養所に送られ、マミーは監視評議会に呼び出されました (スハレンベルグ [夫人] とスチフテル [夫人])。 “ファン・デル・クロフト夫人、我々はこの件について考えてみましたが、あなたに少なく払わせるような条項は無いということになりました。6人子供の居る母親も、この為に財布をはたいていますし、あなたにもそのように願います。そしてもしあなたがそれが出来ないのなら、我々はあなたのトランクを検査してまだ売れる物があるかどうか見ますよ。” マミーはそれに答えて、“あなたの方がこのままにしておけないというのなら、そうすればよいでしょう。” “我々が今後あなたを見捨てると思っているのですか？” “ええ”、とマミーは即座に答えました。“この2年半の間、あなた方は一度も、「あなた達8人に十分な衣類は有るのですか？」などとは聞きに来なかったではありませんか。” 最後に、彼女たちは兵士の妻も、今は將軍の妻より多くを持っているのだからと主張し、だから全員が10. 一払わないといけないのです。ウェインベルグ夫人の言葉 “ここでは、いかに子沢山の家庭が良く面倒を見られているかを聞けば、悪魔達が喜ぶことですよ。ここは独り身の女性の楽園ですよ。”

ファン・デル・クロフト

1945年6月14日

[1945年6月] 10日、それは又日曜日で、スハレンベルグが来て、まだ払っていない人達に、まだ靴、紙、あるいは衣類はあるかと聞きました。彼女はそれを書き留め、又戻ってくるそうです。キティーがそれを聞き、マミーに話しました。それでマミーは神経質に様々な物をテープ夫人やピートおぼさんの所に隠そうとしました。

午前中いっぱい、私達は待ち続けました。最後にファン・ポプタ夫人が来て、マミーにそっと、全然払わなかった人の所だけで探しているのだ、と教えました。彼女たちはフードハルト夫人の所にも来ました。彼女は拳骨でテーブルを叩いて、“私達はドイツに居る訳じゃない。それに私が何も無いと言ったら、それはなんにも無いという事なのよ。そしたらあなたは私を信用すべきで、まるで私がジルデルダ夫人のトランクや箆笥を検査して、彼女が多く持ち過ぎているんでないかと調べるのと同じよ” と言いました。彼女は泣いて、興奮の余り我を忘れていました。

ファン・デル・クロフト

1945年7月3日

新しい収容所ニップ [が来ました]。聞くとところによれば、私達は又経済学者³²の下になったようです。新ピンター [命令]、毎日曜日の4時から5時までは歌を唄っても良い。しかし、私達は自分たちが自由だと思っはいけないのです。

モード

1945年8月15日

私は又、銀行口座を持たない人達から、お金を集めに行った。一人 Fl. 10. - を、追加の食料購入のために。今回はうまく行かない、半分よりほんの少し多く集まっただけだ。多くの人達は実際にお金が無いのだけれど、しかし、貧乏の振りをしている人も多い。収容所から出たときのためにお金を残しておこうというわけだ。でも、私に言わせれば、それはその時生きている人が心配すればよい事。もし私達が追加食料を買うことが出来なければ、いざ門が開いたときには多くの人達がもう生きてはいないでしょうよ！集金係は、全く大変ですよ。

温湯供給について、今は次のように取り決められた。朝6時に、炊事場でいわゆる病人用の湯を供給する。それぞれの兵舎の住人数の1/7分で、一人分大体200gである。病人へ配り終わってからまだ少し余っていたら、50歳以上の女性達がカップ一杯づつ貰い、これは老婦人湯と呼ばれる！少し前までは‘ストレープン’つまり兵舎リーダーとその助手達も、この後者の湯をもらっていた。しかし、今は、幸いにもその必要は無く、というのもこの数日前から、嬉しい事に炊事場リーダーは病人用湯と同時にストレープン湯を配っている。班長や組長は自分達のために、一日の仕事を始める前に飲む、一杯のコーヒーや紅茶用の湯を、取りに行ける事になった。やれやれ、我々の最初の（そして唯一の！）特権、ここまで来るのに長く掛かった事！

しかし、これからが大事なところだ。炊事場の奥で、一日中いろいろなゴミを燃やして湯が沸かされる。兵舎用湯、大人一人につき（17歳から）200g、そして子供は一人100g。ほとんど毎日、このおかげで全ての兵舎に順番が回ってくる。もっと早くこれを思い付けば良かった！最後にまだ‘職務用湯’と‘秘密湯’が有り、前者は炊事場の（ほら又炊事場！）係になった女性や娘達が薬缶に沸いた湯を家に持って帰って良い事になっている（これが許されていなかった時にも彼女たちは同じようにしていた！）。最後のは彼女たちが仕事に家族や知り合いのために、隠れて家に持って行く分である。湯の問題はこれで今の所、解決した。

³² 1942年12月末から1944年3月末まで、民間人収容所は、軍属化された日本人民間要員が指導者となった。彼らは経済学者、といわれた。

ファン・デル・クロフト

1945年8月23日

昨夜7時半に私達は集合させられ、インドーブランド [欧印系人] で、生活の出来る者は、極近い内に外に出られると言われました。私達は呆気にとられていました！そして6人の重病人達はスワンディ医師の病院 [アンバラワ市内の] に運ぶことが出来ると言われました。

日本人の抑留者達に対する扱い

モドー

1943年2月16日

昨日は大騒ぎだった。数人の少年達が、収容所内の片隅にある警備所の壁に、チョークで“オランダはよみがえるであろう”と書いたのだ。犯人は早々に名乗り出たのだが、それでも10歳以上の少年全員（約80人）がコタ[町]の警察署に連れて行かれた。そこで彼らの名前と年齢が記録され、その後又収容所に戻された。犯人は、警備所の小部屋に捕えられ、セマランからのその後の指示を待っている。落書きをされた小警備所には4人のニップが見に来、写真を撮り、その後、落書きの上に毛布をかぶせてくぎ止めされた。何と大げさな！

ファン・デル・クロフト

1943年3月26日

突然、全く予期していなかった時に、パウメン夫人³³が[小トランクに入れた]衣類を持ってくるようにと呼び出され、車で連れ去られました。レシー、ロビー、マルリーシェ、そして私達みんなを恐ろしい不安の中に残して。

ファン・デル・クロフト

1943年4月7日

今日の午後、3時15分前に、レシー[パウメン]とロビー[パウメン]は警備に呼ばれました。スフリンク夫人もです。二人のニップと二人のインドネシア人が小さな車でマゲランから来ました。レースは1人で尋問を受けました。彼女はファン・ヴェーゼル夫人のラジオがあるのを見ました。それで彼女は理解したのです！スフリンク夫人は彼女の服を荷造りし、彼女のお母さん用にも少し入れました。その少し後に、前の座席で二人のインドネシア人に挟まれた、彼女を乗せた車は門を出て行きました。彼女は勇敢さを保っていました。彼女は腕を振りほどき、元気良く私達に手を振って、大きな声で“さよなら”と言いました。でも私達の誰も叫び返しませんでした。私達は呆然と彼女の去って行く姿を見つめていました。

³³ H.M.J.パウメン-ブルスケンス夫人(1906年1月17日生まれ)は、娘のT.M.F.(呼び名はレース)パウメン(1927年6月7日生まれ)と、息子のロビー、そして娘のM.P.F.(呼び名はマルリース)パウメン(1939年1月26日生まれ)と共に、アンバラワ第六に収容されていた。

ブルゲル-ダウファス

1943年4月17日

又急に、小包を入れてはいけないことになり、全てはホテルに運ばれた、二台のグロバクス〔荷車〕1杯！趣味の悪い意地悪だ。ベーっだ、囚われの身なんて退屈だ。ロットが今日来たけれど、中に入れなかった。〔彼女は〕私達に小包を持って来〔てくれたけれど、それも〕受け取れなかった。コンチクショ！私は本当に腹を立て、ふて寝してしまう。

ファン・デル・クロフト

1943年4月18日

ひどい嫌がらせだったのは、金曜日に2つも小包を受け取れるはずだったのがだめになったことです。ティーツ小母さんからの物が1つと、ローズからの物が1つです。ティーツ小母さんからは、もう私達に小包を贈ったという手紙が来ていました。金曜夜〔1943年4月16日〕に小包をいっぱい積んだ1台のトラックと二台のチカルス〔荷車〕を私達の門の外に止めさせて、でも何も、なんにも中に入れさせませんでした。私達に小包が来るなんて事は1度も無かったことで、それがやっと2つも来ることになったら、私達の鼻先をかすめて通り過ぎるのです！逆上しました、怒り狂ってしまう！！

ファン・デル・クロフト

1943年4月19日

エルスと私は警備所から戻ったところで、太った警察司令官からとてもおいしいサテー〔焼き鳥風のインドネシア料理〕をごちそうになってきました。彼も、暗くなっていたからできたのです。それは8時でした。彼は私達のために20本注文しました。“カシアン・アナック”〔可哀想な子供達のために〕と彼はサテーの売人に言いました。とてもペディス〔辛い〕そのサテーを持って、私達は暗いリド野原に向かいました。〔辛さで〕燃えてしまいそうでした。それでもみんな食べてしまい、〔その後彼に〕もう1度ありがとうを言いに行きました。

ファン・デル・クロフト

1943年6月5日

ああ、本当に嬉しい。今朝、10時半頃、私が拭き掃除をしようとしていたら、トレース・フ

アン・ヘッセルが興奮して来て叫びました。“レシー [パウメン] が居る、パウメン夫人も！”最初は何を言われたのか理解できませんでした。私は“彼女はまた、何を口走っているのやら”と思いました。でも1瞬してから私は気違いみたいにマミーの所に飛んで行き、マミーは警備所に行きました。私は病気で寝ていたスフリック夫人の所に行きました。それからエルスとマリーシェが警備所に駆けていき、私も同様です。そこで私は彼女のバラン [荷物] を持ち、お喋りしながら彼女たちの家に向かって歩きました。キャンプ中が出てきました。

レシーがこの2ヶ月の間にお母さんと話せたのは5回だけでした。警察署の向かいの署長の家に彼女用の部屋があり、そこでマラリアに5回罹り、塗り薬も何も無いまま、黄疸や水疱瘡にもなりました。彼女はとても具合が悪そうです。部屋に閉じこもっていた人の、青白い顔をしています。

パウメン夫人は警察署の牢に入っていました。ラーイマーケル家のジョンゴス [使用人] のカルトが密告し、彼らがそれを告げたとき、彼女たちは聞いたことを白状しました。その男は、ネリー・ファン・ヴェーゼルが聞いているのを、自分の目で見たのです。昨日、彼女たちは全て荷造りしなければならず、その時には、おお嫌だ、きっとこれまで言われていたように、バタビアかセマランに行くのに違いない、と思いました。今日はショッティフ [おかしな] 車に乗せられ、彼女たちが前に、後ろにはニップが2人乗ってきました。通りすがりの現地人達はその車に深々とお辞儀しました。彼女たちは、この慣れない長旅に疲れ切っていますが、又家に戻ってこられた事をとても喜んでいます。彼らは囚人の一大整理をしているようです。そして警察署には [ラジオを] 聞いたという理由で捕まった人達が山のようにいたのです。さて、私はもう寝ます。お休み。

ファン・デル・クロフト

1943年6月27日

又何かが興りつつあります。カワット [鉄条網] の外で、カワット売人 [秘密取引をする人] 達の隠し名が見つかりました。それで警備の司令官がスフルト夫人にそれが誰なのか探し出すように命じました。難しい状況です。どの方向にも行く可能性があります。収容所内搜索 (ひどく痛めつけられたバンジュビル [XI] のように)。又お金を差し出すか、スフルト夫人が打ちのめされるか。

モードー

1943年7月17日

家宅搜索 [1943年7月10日の] 数日後、全ての鶏と鳩を片付けるようにという命令が来

た。これ [命令] が実は何処から来たものなのか、まだ私達には分からない。ニップか、警備司令官がニップに叱られるのを恐れてのものなのか、それともキャンプリーダー自身が嫉妬した収容所住人にそそのかされてのことなのか。イエレは鶏を5羽飼っていたが、そのうち4羽は売り、その鶏は絞められた。五番目のは丁度卵を産み始めたので、彼は飼っておいたのだ。これからどうなるか見てみることにしよう。少年達はみな鳩を飼いつけることにしている。

ブルゲル-ダウファス

1943年7月30日

とても長い間書かなかつたけれど、何故かというと私達は又大変厳しい灯火管制下にあつて、自分の小屋の中には明かりが無く、通路に幾つか有るだけだったからだ。ここでは又驚くような事が有った。アニメ ANIEM³⁴の男達が突然来て、最初の兵舎の梁の上にあつた電線を切ってしまったのだ。その先の兵舎に住んでいた人々は、その時もっと利口になり、自分たちで線ははずしてしまった。私達も同様だ。今は厳しい灯火管制も終わり、そこここで明かりを灯して良いことになった。私の所も同様、というより、私の新しい隣人のキュー夫人の所だ。でも私もそれを楽しんでいる。勿論青い覆いを掛けて、光の強い電球は使えない。

ファン・デル・クロフト

1943年8月31日

昨日、私は日記を書こうと思ったのですが、でも、“明日は私達の女王様の誕生日、そしたら何か興るかも知れない” と思いました。そして、その通り、[それは] 又色々なことが起こった日でした。朝とても早くから、私達は皆、赤、白、青のものを洗濯紐にぶら下げました。オレンジの獅子の付いたクッションまで下げられました！8時半くらいに、8機の飛行機が1列に、轟音を響かせて飛んできました。日本の飛行機だったのでしょ。それからジャップを乗せた車がキャンプを見回りに来ましたが、彼らは少し後に又居無くなりました。

午後三時前に、何か呼び声が聞こえました(私達は皿洗いをしていました)。旗をとれ！旗をとれ！私がちょっとクレー [細い竹ひごで出来た、巻き上げ式日除け。すだれ] の下から覗いてみると、二人の警察 [官] がファン・ボメル夫人の前にあつた、赤、白、青の布に向かって歩いて行き、それを取り除いていました。そして彼女の隣りでも同じ様にしました。その先、そして何処も皆、全ての旗がサッと無くなりました。愉快なほどでした。向かい側でも、現地人が数人、赤、白、青の服を持って歩いているのが見えました。それは9A兵舎の衣服で

³⁴ 全蘭領インド電気会社 (Algemene Nederlands Indische Electriciteits Maatschappij=ANIEM) の電気技師。

した。それは門の側の道に向けて出されていたので、勿論最初にやられたのです。彼らは警備に呼ばれました。でも数時間後に彼らは衣服無しで戻り、そして衣服は門から車で出されました！[.....] 収容所全体が、もう書き物をしてはいけないと言う罰を受けました。これは、昨日の罰でもあると私は思います。その時、‘1セント半’[という渾名の警官]が暗号を訪問者の握り拳の中に隠しました。でもそれは見つかってしまったのです。

チャックス・グレイン

1943年9月1日

昨日は私達の女王の誕生日だった。多くの人達が赤ー白ー青のものを並べて洗濯紐に下げた。朝にニップ達の訪問があり、午後に警察が来て全てを押収した。長のスフルト夫人は犯人の女性達と共に警備に呼ばれ、警察は何故こんな事をしたのかと聞いた。弱虫達は“洗ったばかりだから、トランクから出したから、云々”と言った。警察がスフルト[夫人]に何の日なのかと聞くと、彼女は少なくとも堂々と、“8月31日³⁵よ。誰がそれを忘れるものですか。”と言った。

最終的に起こったことは、今後の指令が有るまで、手紙も小包も無し！勿論、私達の誰もこの日を忘れはしないけれど、しかしあの人たちは、私達が1時的に抑圧された環境に居て、このような表面的な態度は嫌な結果しか生まないという事が分かっていないか、認めようとしなないのだ。いずれにしろ、これも既に終わり、私達も将来を見ていくとしよう。

ファン・デル・クロフト

1943年9月3日

今日、ミセットさんが警備司令官と話をしました。その時彼女がうっかり‘オブパス’[使用人]という言葉を使ったら、モミアゲが即座に彼女の顔をクレワン[短剣]で叩いたと言うことです。彼女の眼鏡は床に落ちて壊れました。キャンプ中がたちまち大騒ぎになり、全ての女性達が前に出[て来]ました。あの背高警官が私達に、“ビキン・ラポルト、ノニャ、アヨ、ビキン・ラポルト、ノニャ！チダ・ムスチ・タクト、サヤ・ツルン。”[これについて報告書を書かせなさい、奥さん、恐れることはありません、私が援助しましょう]と、勧めてくれました。これが私達の背高警官、ヘンクです。

私達が前に出ると、モミアゲはまだ戦闘的に“マウ・アパ？”[何の用だ？]と言いま

³⁵ 8月31日はウィルヘルミナ女王(1880-1962)の誕生日。蘭領インドでは常に盛大に彼女の誕生日を祝った。アンバラワ第六でも、禁止されていたにもかかわらず、多くの人達は女王の日を祝おうとした。

したが直ぐに恐れて事務所に入り、少し後で偶然警察署に来なければならなかった女性と一緒に門を出て行きました。ショックで鼻の周りが白くなっていました。ああ、なんて嫌な奴！今日の午後、私達はモミアゲには気を付けなければいけない、なぜなら彼は警備に付いていて、半分‘マタ・ガラップ’[狂乱状態]だったから、と言われました。

司令官や警官達自身も彼を恐れていて、彼が居無くなればよいと思っているようです。彼は密告するので、彼らは彼の言うことは直ぐやります。彼はボーフン-ディグールから来ていて、これでみんな説明がつくわ！私達はニッポンが来たときのために苦情を入れておきました。

ブルゲル-ダウファス

1943年9月9日

ここは全く沢山のことが起こる、3人の女性が警察に連れて行かれた。[それは]二日前のことで、[彼女たちは]まだ戻っていない。これは見つかった手紙に関しての事で、そこには収容所生活の詩が書いてあり、“日はまだこんなに高く昇っていても、やがて沈んで行く！”等々が書かれていた。そして又家宅捜索があった。8月31日にみんなが洗濯紐に旗を掲げ、片づけに間に合わなかったものが警察に取り上げられた。その人達は今日事務所に呼ばれ、彼女たちの小屋は家捜しされた、[警官達は]またもやあの詩を捜していたのだ！彼らは誰が作ったのかを知りたがった。残念なことに彼らはロマン夫人のところでは大量のお金を見つけた、それを探しに来たわけではないのに、全く残念だ！しばらくの間気味悪く、我々全員が家宅捜索を予想しているが、まだ何も起こっていない。

モード

1943年9月25日

‘旗’の出来事には、まだ醜い尾ひれが付いていた。名前を記録された女性達の所は、出し抜けに徹底的な家宅捜索が行われ、その中の1人の場所からF500。一余りが見つかり、勿論持って行かれた。さらに何人かの婦人は先回の面会日に、訪問者に手紙を渡そうとしたために刑務所（収容所外）に入れられた。ひ・ど・く馬鹿な話で、というのも警官達が傍に居て、鼻を突きだして見ていたのであり、そのために彼らは特別に、オランダ嫌いの人間を選んであるのだ。

その大馬鹿阿呆の1人、インド系で、おまけに[1943年]6月に収容所に入ったばかりで、多分1度面白いことをしてやろうとしていたのであろう御婦人から、長い手紙が取り上げられ、それにはニップ達やジャワ人達に対する様々な侮辱的な表現が使われ、その上ここで[1943年]1月の楽しい夜に、16歳と17歳の娘達によって唄われたという詩が書

かれていた。私はそれを知らないし、誰が作ったのかも分からないが、どうやら私達に有利な戦争の終わり方に大変な信頼を寄せた表現になっていた様で、今や紳士方は誰がそれを作ったのかをどうしても知りたがっている。この為今や、次々といろいろな人々が警察署で尋問されている。

このすべてのスカー [困難] の原因になった人は昨日やっと解放された。彼女は3週間余り刑務所において、全く同じ衣服を着続け、風呂にも入らず [入れず] にいた。この‘クールな’ 気候の中では夜は快適だが、午後のこの木造兵舎内は90度ファーレンهایت [30度セルシウス以上] になる。しかし私は心から彼女にその状況を進呈する、彼女は良心を痛ませなければならないことが沢山あるはずだ。彼女が何かを密告するつもりであったと言えないこともないのだ。彼女に対するこの‘罰’ は形式だけのものであったのかも知れない。彼女には要注意だ！

モード

1943年9月28日

我々の収容所リーダーは数日前から刑務所に入っている。彼女の‘臣民’ の行いの悪さ、主に、8ヶ月前に唄われた歌の罰として。お願いよ、まるでそれに対処することが出来たとでも言うようじゃないの。彼女の後任者に対しては又何か不測の事態になったら、例えばカワット [鉄条網] 越しの売買、詰まってカワッテン [秘密取引] が続くようなら、彼女も収監する、と通告された

チャックス・グレイン

1943年10月3日

我々のケパラ [長]、スフルト夫人は、もう随分の間、外部事務所の小部屋に毛布も枕も、チカル [寝床マット] さえも無く入れられている。石の床の上にそのまま座り、横になり眠らなければならない。[彼女には] 自分が身につけている衣類以外は何もない。ひどいことで、先週は又4人が捕らえられ、この全てがああ最初のパーティーの夜と、その時唄われた歌のためなのだ。

ファン・デル・クロフト

1943年10月4日

スフルト夫人の身にそれが‘降りかかった’日（1週間前）、彼女はバウメスター夫人と一緒に警察に呼ばれ、それ以来帰ってきません。3人の御婦人方は釈放され、彼女達がそこに入ったのです。彼女たちは18日間、1度も風呂に入れずに、そこに入っていました。1日に1度、2杯の紅茶をもらい、少しのケテラ[カッサバ芋]が昼食でした。午後にはヤナ・ブッシングとアニー・ファン・ボメルも呼ばれ、“いつか素晴らしく美しい日が訪れる、云々”という歌を作ったのは誰かと聞かれました。アニーは何も知らない、彼女の母親は病気なので家に帰っても良いかと聞きました。よし、帰っても良い。ヤナに対してはもし何も喋らなければ小屋に押し込めると脅しました。彼女は何かを喋り、その中にトレース・メイヤーとレニー・ロンドンの名前も入っていました。ジルデルダ夫人は激怒[しました]。その子達は数日後に警備所で1人ずつ尋問されました。夜はそこで、何も無い所でケープだけ掛けて寝ました。次の日の朝、彼女たちは車で連れ去られました。そのあとアニー・ファン・ボメルとトト・メイヤーが連れ出され、今日は3人、ヤナ・ブッシング、エリー・ドゥ・フリース、ヘルトルーデ・ヘリツンです。全ての少女達、あの不名誉な歌を、1943年1月30日、9ヶ月前に唄った子達です。最後の3人はトラックに乗せられ、笑って、挨拶をしながら連れ去られました。

ブルゲル-ダウファス

1943年10月10日

まだ書かなければならない陰鬱なことは、大勢の少女達が、私達がここに来たばかりの頃、少々反[日本]的公演で歌を唄ったという理由で、ニップ達に捕らえられたことだ。サラチガ出身の、珍しいくらい馬鹿な、この収容所に来たばかりの人間（インド系）が、その歌詞を手紙に書き、ひどく馬鹿なことに、先回の面会日に警官の目の前で彼女の面会人に渡し、即刻取り上げられた。大騒ぎになった。

先ず、その女性が14日間この警察署に捕らえられ、手紙に名前の挙がっていた2人の女性も一緒だった。それから彼らは誰がその歌と作ったのかばかりを聞き、散々いろいろあった後、最初は何も見つけられなかったが、子供の1人が明かしてしまい、16歳から18歳位までの9人の少女が捕まり、セマランの刑務所に、収容所リーダーのスフルト夫人やその夜の指揮を執ったバウメスター夫人と共に入れられた。彼女たちは既に14日間帰ってこない！ニップは彼女たちは大丈夫だと言うが、その言葉に何の意味が有ろうか？悲劇的でしょ、こんな事が、9ヶ月もたった後で、あのような馬鹿な人のためにばれてしまわなければならないなんて！

ファン・デル・クロフト

1943年10月13日

全ての鳩は取り上げ[られました]。収容所は大きなショック[を受け、その後]、鳩は総屠殺されました。

モドー

1943年10月14日

一昨日、突然又、全ての鳩を一掃するという命令が来、殺すか、警備に提出するかだった。この後者をした人は、勿論だれもいなかった。イエレは彼のを売った。私達は自分たちで食べたくはなかったからだ。どうやらニップは、私達が鳩を使って、外界との連絡を取るのを恐れているらしい。私には、こじつけとしか思えないが、しかし、彼の意志が残念ながらここでは法律で、これで又、多くの子供達の涙が流された。一体何をびくびくと、彼らは私達に隠そうとしているのだろうか？

チャックス・グレイン

1943年10月23日

スフルト夫人とバウメスター [夫人は] 今やもう1ヶ月も出たままだ。セマランに、あの若い娘達みんなと一緒にいるだろうと思われている。何をするか分からない民族だ。

チャックス・グレイン

1943年10月23日

きのう、兵舎での私の忠実な友、私達の犬、ブラウンチェは、出て行かなければならなかった。全ての犬は警備に連れていかされたが、それが今日になったら、残った犬（彼らが捕らえられなかったグラダッケルス [誰にも飼われていない犬] だけだ）は紐につないで収容所に置いておいて良いことになった。この為に苦い涙が相当流された。こんなことも遂には受け入れてしまう。人間も陰しくなる。

ニップ達の命令で、鳩もみな出さなければならなかった。もし子供達が殺すのを嫌がるようなら、籠に入れて警備に連れてきて良いと言われた。しかし鳩達は全て食用にされ、殆どは子供達自身によってだ。ああ、私は胸が悪くなる。

モードー

1943年11月17日

多くの尋問の後で、警察の紳士方は今から約1月前に6人の若い娘達を、例の歌を1月のあの夜[1943年]に唄ったとして収監した。彼女らと共にその歌を習い、その夜の指揮を、いわば執ったといえる女性は、もう9月[1943年]に収容所リーダーと共に連れ去られた。この全員が、恐らく今はセマランの、ジャワ女性刑務所³⁶に入れられている。どの位の期間になるかは分からない。ひどい話でしょう、娘達の母親にとっても。

ファン・デル・クロフト

1943年12月19日

昨日の午後、食事の直ぐ後に、パウメン夫人が又、驚き恐れながら呼び出されました。彼女は彼女の子供達と一緒に警察署に行かなければなりません。何のためか分からず、衣類を持って行くことは許されませんでした。警察署では、水曜日[1943年12月22日]にマゲランに、いわゆる証人として(何の証人なのかは分からず)レース[パウメン]と共に行き、ランド評議会³⁷に出頭するために呼び出されたと、署名させられました。多分又ラジオのことでしょう。

火曜日[1943年12月21日]に彼女たちは連れ出され、列車で[アンバラワから]マゲランに行きます。マリーシェは最初ここに来るはずでしたが、ロビーと彼女は自分たちの場所に置いておいた方がよいと夫人は言いました。彼女に取って、何と又ササー[困難]な事でしょう。彼女はとてもしっかりしています。みんな彼女に感心しています。

ファン・デル・クロフト

1943年12月23日

さて、パウメン夫人のことです。数日前に、彼女は全てをトランクに詰め、出すべき物は出しておきました。水曜朝3時に呼び出されました。

急いで服を着、一緒に行きました。ゾクゾクする寒さだったと言っていました。それから列車でマゲランへ、ドグカル[小車]に乗って評議会堂(プライテルの家)に行きました。彼女は彼女を引率する若い警官に、水を頼みました。ええ、彼は買ってくれると言いました。“え、いらないわ”とパウメン夫人は言いました。“そんな嫌な物。”病気の人がとても多かつ

³⁶ おそらく、セマランの女性刑務所、ブル刑務所であろう。

³⁷ ランド評議会は、地域裁判所のこと。

たのです。

彼女がマレイス [家の住居前] を通った時、彼女はマレイス夫人がバルコニーに立って、石のように彼女を凝視しているのを見つけました。“水を貰える？”と彼女は叫び、直ぐに中に入りました。彼女はズワングも見ましたし、ソルベ夫人やリリアン・ドレにも駅で会いました。町には全く人がいませんでした。全ての店は閉まっていて、数人のニップが背囊を背負い、裸で歩いていただけでした。彼女は全てが現地人に任されているような感じがしました。その時、彼女は食べ物頼み、ビー・シン・ホーに行っていいかどうかと聞きました。“プラン・ディ・アンバラワ・マル！” [アンバラワに戻りましょう] と警官は言いました。こうして彼女は食事の直前に、キャンプに戻ってきたのです、私達をびっくり仰天させて。

ファン・デル・クロフト

1944年1月14日

12日の水曜日は、最悪の点呼がありました。3人の警官は、名前が呼び上げられていた時、ジョクジャ部の所で、‘リド’と言われました。これで既に彼らは気を悪くしていました。アンバラワ部では、多くの人たちが野菜運びに行っていました。彼らが私達の所に来た時、[ファン・]フォールンフェルト夫人が居ませんでした。チャックス夫人が急いで彼女を呼びに行かなければなりません。三人の男達はこれを聞き入れず、何も言わずに警備所に戻って[行きました]。[ファン・]フォールンフェルト夫人は警備所に行き、何かドキマギした様子で戻ってきました。“これに付いては後で話しが有るでしょう”と彼女は言いました。お昼前に、公演会遂行を全く禁止すると言われました。みんな、これは[ファン・]フォールンフェルト夫人の所為だと言いました。

先日、4人の少年達が、出店の車からケテラ [カッサヴァ芋] を盗んだというので、24時間警備所の牢屋に入れられました。(ピット・エーフェルスもその内の1人です。)それでいながら、山のように家に持って帰る炊事場係の女性には何も言わないのです。水曜の午後 [1944年1月12日] に、全ての本が、又昔のジョクジャ部のレクレーションルームに集められました。学術的な本があるかどうか、ニップが知りたがったのです。マミーは‘扉をノックする音’という厚い本が返ってこないのではないかとびくびくしていました。でも、幸いにも昨日、マミーは最初に本を返された内の1人で、その本も幸い入っていました。

ファン・デル・クロフト

1944年1月30日

昨日の午後遅くに、又大事件がありました。私はテン・ブリンク夫人の所にわすれな草とピン

クのヴィベナを交換しに行くところでしたが、突然、流線型の車が、クラクションを鳴らしながら入って来ました。えっ、こんな遅くに？車は炊事場の横に止まりました。1人の日本人がドアを開け放ち、ヘデック [編んだ竹マット] に向かって一直線に走っていきました。その途中にいた婦人達はみんな顔を殴られました。それは3人で、ベッケリング夫人、ポーチェス夫人、それにディルクマート [夫人] です。いつも興奮がちなベッケリング夫人は、怒って彼を見て、“ドイツ野郎、汚い腐ったドイツ野郎め！”と罵りました。

一体何があったのでしょうか？池の向こうに [収容所敷地外] 又ニップが来ていて、いつものように人々はそれを立ち止まって見ていました。この間の正月のように、魚を投げてももらえないとも限りません。ニップ達は、あちらに行けと合図していたのですが、若い少女達、マウト・ファン・ゴーツ・ファン・フェットやマリー・ムルダーなどは面白がって立ち続けていました。ニップは何が欲しいのかと聞きました。“お魚よ”彼はそれを聞くと彼女の頭に向かって長い棒を投げつけました。彼女は身をかがめ、少し後に又ヘデック [編んだ竹マット] 越しに見ながら“テリマ・カシ・バニャック” [どうもありがとうございます！] と言いました。これが彼らには我慢できない、行き過ぎだったのです。

彼らは車に駆け寄り、こうして彼らはここに乗り込んできたのです。彼らは勿論どの少女も見つけられませんでした。彼らは激怒していました！ジルデルダ夫人が急いできて、しかし、少し離れて立ちました。彼女は深くお辞儀しました。彼は怒鳴り散らしました。大人も子供もより深く彼らにお辞儀しなければいけない。さもなければジルデルダ夫人が叩くだろう。“いいえ”と彼女は言いました。“私は叩きません。”“何故叩かない、カシアン [同情している] からか？”“いいえ、それも違います。”それならお辞儀しない者は彼女が捕まえるべきだ。私達は恥を知らなければいけない、私達は‘ネグリ’ [国] を持たない人間で、それなのに日本民族に対して頭を下げないとは！車で出て行く前に、彼らはジルデルダ夫人に、無理矢理答えさせて言いました。“おまえ達にはもう国は無いだろうか？”“ええ”“俺が一番で、おまえは二番だ”“はい”“おまえは俺に従属しているのだろ？”“はい”それからまだ何か、でももう覚えていません。いずれにしろ、この質問をしてから、彼は拳銃を抜いて彼女の足元に撃ち、激昂して走り去りました。

そばに立っていた司令官は、驚いて両手を上げ、何かマレー語で叫びました。ハハハ、勇ましいこと。彼は直ぐに縮み上がってしまう。対照的に、ジルデルダ夫人は冷静を保っていました。今日の午後、昨日の午後にヘデックの所から見ていた人は皆警備所に呼ばれました。10人以上居たはずだ、とニップは言いました。偶然トイレに行こうとしていて、この事件に遭遇したラウデンス夫人も警備に行かなければなりませんでした。ニップが1人居て、名前を書き留め、全てを電話で報告しました。マウトは特に念入りに尋問されました。彼女がそこで何をしたか？“私は魚を待っていたの。”何故ニップが向かって来た時逃げたのか、怖かったのか？彼女は正直に“ええ”と答えました。それでは魚を投げ込んだニップはいつそこに居たのか？“元日に。”いずれにしろ婦人達は帰されたけれど、マウトは留められました。

.ジルデルダ夫人は、マウトをここに置いておくためのあらゆる努力をしました。彼女

をここで罰し、ただ、女性達の委員会が、若者達を簡単に罰することに同意しない、とか何とか言いました。彼女がわざとそう言ったのか、誰も、あるいは、とにかく私には分かりません。いずれにしろ、ジルデルダ夫人は委員会の女性を呼んでこなければなりません。彼女たちが来たとき、ニップはランベルツ夫人に眼鏡を取るように言いました。そして彼は2人の女性とマウト、みんなの顔を、向かいにいる警察と現地人達の目の前で殴り付けたのです。

ランベルツ夫人は“痛みを感じるより、屈辱だったわ！”とっていました。その後直ぐに彼らは去っていきました。ジルデルダ夫人も泣きながらブルヘルハウト夫人（彼女はいつも一緒にいなければならない）と一緒に出て行きました。マウトは1人で残りました。門が開きました。

車が進んできました。ニップが乗り、走り去りました。その後にマウトが、警官に付き添われ、自転車で、ズボンをはき、下着を二重にし、ケープを付けて続けました。彼女のお母さんはこの全てを見ていました。彼女は気が狂いそうでした。マウトは早々には戻ってこないでしょう。他の女の子達ももう4ヶ月も戻っていません。

チャックス・グレイン

1944年2月1日

日曜日には又キャンプに一騒動有った。魚の居る池の向こうに、酔っぱらったニップ達が居て、ニップが“ピギ”[ペルギの訛ったもの、行け]と何度か叫んだ時にはキャンプ側から数人の娘達が見ていた。1人の向こう見ずな二十歳の娘は、彼が竹の棒を彼女に向かって投げた後、“バニャック・テリマ・カシ”[どうもほんとにありがとう]と叫んだ。彼らは猛り狂った雄牛の様に車で乗り入れて来た。その娘は何処にも見あたらず、勿論だれも告げ口などしなかった。その‘紳士方’は花壇に小水をかけ、吐き戻し、そして車に乗るとき、ケパラ[長]の足元に拳銃を撃ち放した。脅し言葉：あそこに立っていた娘達は全員、明日警備所に来い。

この間にも、静かに夕日を見ていた多くの罪のない女性が、何度もひどく殴られた。その翌日、全員が警備に呼ばれ、マウトという例の娘は散々顔を殴られた。ケパラは指令を出していなかったのかと聞かれ、既に神経質になっていた彼女は、指令は出していたがニョニヤス[婦人達]が聞き入れなかったのだ、と言った。“それはどの婦人達だ？”彼女たちも来なければならなかった。今、年かさの若者達に関しては、彼女だけの決定で罰するのではなく、委員会の決定で罰しようと言う運動が行われていたところだったのだ。その女性達が呼ばれ、バシバシと、十発も、顔を拳骨で殴られた。“チダー・ツールット・プリンター、へ”[おまえ達は命令を聞かないのだろう]マウトは警官と一緒に彼らの車の後についてアンバラワの警察署に行かねばならず、今のところ、その後の彼女の消息は全く分からない。彼女の母親は絶望の中にいる。“繁栄と平和と安らぎ”を彼らはもたらすそうだが。

ファン・デル・クロフト

1944年2月11日

さて、マウト問題です。今[月]8日の火曜日に又1人のニップが来て、おそらくはマウトが告げなければならなかったのでしょうか、数人の女性が呼ばれました。ロース夫人（軍事収容施設の）に、彼はマウトを知っているかと訊ねました。“いいえ”と彼女は言い、それは本当でした。するとニップは直ぐ、彼女の顔を殴るために背伸びをしなければいけないのでした。最初のはそれほどきつくありませんでした。2番目のは彼女の歯茎全体から血が出るほど激しいものでした。彼女はしばらく、両手を顔に当ててふらふらしていました。他の人達も、ひどく殴られてから、開放されました！

モードー

1944年2月15日

収容所の隣の湿気た土地に、ニップ達はジャワ人の囚人を使って魚の池を作らせ、そこに時々魚釣りに来ていた。一度、数人の兵士が、禁止されているにもかかわらず囲いからそれを見ていた数人の若者達に、たばこと、彼らが釣った魚を贈り物にしたことがあった。数週間前にも、夕方近くに数人の軍服を着た男達が魚釣りをしていた。20人ほどの人達、その殆どが若い娘達だったが、囲い越し、あるいは間からそれを見て、大声でそれに関して話していた。

少し経ってから、数人のニップが車に乗って去って行くのが見えたが、彼女たちはこれから何が起こるか、全く想像していなかった。突然、その車がすごい勢いでキャンプに入って来、物見高い人達が立っていたところに行った。

4人の怒り狂ったニップが降りてきて、その人達の所に突進した。彼らは勿論逃げ出していたが、20歳になったばかりの1人の娘は別で、その娘は挑戦的に立っただけではなく、生意気が過ぎて、ニップの1人が木片を彼女に投げた時、マレイ語で“あら有り難う”と言う始末だった。その後彼女は兵舎の間に逃げていき、ニップが彼女の後を追ったが、すぐに彼女を見失い、彼は暫く他の逃げていく人たちを追いかけ、気違いのようになっていた！

この間にも収容所リーダーが駆けつけ、この男の怒りを一身に浴びることになった。最後に彼は、明日又戻ってくること、その時には身に覚えのある者は全員警備所に来るように、と言った。別れの印に、彼は拳銃を引き抜き、車の踏み台に立って彼女の足元の土を撃った。幸い彼女は筋一つ動かさなかったが、彼女の隣に立っていた警備司令官は、足をガクガク震わせていた！これがケンペイタイの紳士方のやり方だ。そう、彼らはケンペイで、兵士ではなかったのだ。翌日彼らはその通り戻って来、‘犯罪人達’は全員姿を現し、尋問され、例の娘は連れて行かれた。彼女はまだ戻ってきていない、勿論、彼女の母親の大きな心配をよそに。数日後に又その男達がやってきて、見物していた人達が又皆呼ばれ、列に並ばされて全員が顔を数

発激しく打たれて、この件は終わりとなった。

ブルゲル-ダウファス

1944年3月31日

宣誓しなかった哀れな人達³⁸は、まだ小屋に入ったまま、ひどい話だ。彼らは風呂に入れず、衣服も替えられない。[彼女たちの]携帯用の櫛やハンケチは取り上げられた。1人は下痢をしており、二人は月経中だがナプキンはもらえず、7人で3セットしかない。空気の入れ換えはなく、壁の上の方に小さな通気口があるだけだ。

色々な人達が入っていて、ウンガランから来たリースの従姉妹の、ヤンツさんも居る。彼女は洗礼派なので、誓いを立てることは出来ないのだ。彼女は50代の終わりに違いない！食事は十分に与えられている。良かったと思える唯一のことは、彼らが連れ去られなかったこと、キャンプを出ずに済んだことだ。

ブルゲル-ダウファス

1944年4月13日

ニップからの最新の知らせは、夜間に私達が、1時間半の間警戒に回らなければいけないということだ。1つの兵舎を2人で、つまり1晩12人である。これは嫌な労働で、特に1時から2時半や、1時半[ママ]から4時に当たったときにはそうだ。4時から5時半も好きではないが、その時はそのまま起きていけばよい。これは8時半に始まり、5時半までだ。私は夕べ8時半から10時の番で、これはどうと言うことはない。

彼が検査に来て、犬が吠えたためにひどく騒がしくなった。私達、フェミーと私は外でゆったり椅子に座っていた！これは全然許されないことなのよ、あなた。私達はテルース[いつも]行ったり来たりしていないといけけないのだ。私達は騒ぎを聞いて急いで駆けつけ、折り畳みナイフみたいにお辞儀をした。彼はフラッシュライト[懐中電灯]を持って廊下に立っており、犬はやたらに吠え立てていた。幸い彼は怒ってはおらず、私達と一緒に歩いてはいけけないと言っただけだった。

しかし、しばらくしてから、大騒動が聞こえてきた。その時彼は炊事場に火がついているのを見つけ、それはあってはならない事というので炊事場-ケパラ[炊事場長]は殴られた。

今朝、点呼(今は朝の8[時]と午後4[時]にある)の時も彼の機嫌はひどく悪く、

³⁸1944年3月26日に軍部管理が導入された際、宣誓することを拒否した女性達。

きちんと列に並んでいないというので老人達全員が殴られた、神父もだ。ああ、嫌なことだ。今日はまだ何か起こるかも知れない。

ブルゲル-ダウファス

1944年4月27日

ああヴィム、今夜は大変な目に合ったわ！ 私達は夜警に回っていた、フェムと私で、きちんと私達のブロックに行く代わりに別の道を行ったら、ニップに出会ってしまった！おおなんと、彼はひどく怒り、私達の頬をなぶった、でも幸い余り激しくなく、思ったよりずっとましだった！そして私達は警備に行かねばならず、きっと閉じこめられるに違いないと思った。

幸い無事に済んだわ、私達は丁寧にアンペン[許し]を乞い、そしたら出てこられた。私達は2人のどぎまぎした寄宿舎の娘のようにそこに立っていた、馬鹿みたいだった！相当な恐怖だったのよ。ここからどんなペルカラ[問題]に発展するか分からない。私は今日になってもまだ安心はしていない。1日中、出頭の呼び出しを待っていたが、幸いな事にそれはなかった。彼は私達が単にその道を行き来してただけだと言う事を信じようとせず、どこかで何かをしでかしたと思ったのだ！勿論この話は最大の尾ひれを付けてキャンプ中を駆け巡った。いずれにしろ、何時もこうなのだ。でも、私は二度とこんな馬鹿な事はしないわ！

ファン・デル・クロフト

1944年5月28日

昨日の朝、2人のニップは、神父が聖なるミサを6人の人達と上げているのを見ました。それはいつしても良いのではなく、金曜日だけだったのです。全ての‘クンプルス’[集会]が今は禁止です。いつもと同様に、又もや軽率な事をしてしまいました。

ファン・デル・クロフト

1944年6月17日

昨日は‘高官訪問’[が有りました]。その前にスモウォノ出身者全員が収容所ニップに呼ばれました。そしてスモウォノの家宅搜索の時に何が持って行かれたのかを高官に言わないでくれるようにと頼まれました。悪いヤップも居ますが、良い人も、ブランダ[オランダ人]もそうであるように、良い人も居るのです。なぜなら彼らがしばらくして日本に帰ったら、彼らは殺されてしまうかもしれないのです。だから私達が黙っていてあげたら、彼は私達にとっても感謝

するそうです。

ファン・デル・クロフト

1944年8月7日

丁度これ³⁹を始めようとしていたら足音が聞こえ、私達の収容所ニップが私の目の前に立っていました。でも彼は幸い良い人で、幸運にも、私が何をしているか見もしませんでした

ブルゲル-ダウファス

1944年9月24日

先週は大きく揺れた。全ての女性はパチョレン [掘り起こし] をしなければならない、リド全部を掘り返さなければいけないのだ。丸1日よ、4交代で、5時半から8時、8時から10時半、11時半から1時半、1時半から4時半。それぞれのグループに、兵舎から10人ずつ出なければいけない。幸いパチョルの数が少ないので3人毎のグループで仕事をした。5分間パチョレンで、10分間休憩。できるものよ、私は大丈夫、でもこういうことをしていると、自分がまだ若いのがよく分かる！

最初の日は勿論大騒ぎ、取り決めがかみ合わないし、半分は仕事を拒否し、太った仕事ニップは激怒してあちらこちらで殴った。次の日にこの男は異動していった、昇進だ！この収容所がしっかり働いたから！面白い組み合わせだ事。今は収容所ニップが時々見に来る、温厚な男だ。あのフトッチョは本当に阿呆な奴で、いきなり何かを殴りつけるし、何を言っているのか全然分からない、嫌な奴だ！スネブファンゲル [夫人] とファン・フェール [夫人] も炊事場係なのだけれど、彼にお辞儀しなかったというので殴られている。

ファン・デル・クロフト

1944年12月24日

クリスマスの準備は全てニップによって取り消されました。クンプランス「集会」禁止、ロウソクを灯してはいけなくて、飾りも無し！がっかりだわ！それでも家の中でアフリカーンチェの木に紙鎖など色々な飾りを付けてクリスマスツリーを作りました。キティーはもう何日もキリスト生誕の馬小屋の像のための人形を作っています。とても美しくできました。

³⁹ 彼女の日記を書くこと。

モードー

1945年2月2日

先の週、ニップの間で騒乱があつて以来、又よく‘ヘカワット’あるいは‘ヘビリクト’＝秘密裏に購入、が行われ、この数日は昼日中にさえ堂々で行われた。ニップ達はリーダーにこの責任を負わせるが、彼女たちにはどうすることもできないのだ。1月31日「1945年」に、10日分の米、塩、砂糖をフダン〔備蓄納屋〕から収容所に届ける、いわゆる米ニップが、多くの婦人達がオレンジ色の物を身に付けているのを見た。彼はそれをひどく怒った。これが王女様の誕生日⁴⁰だからだということ信じようとしな。一体それでは何だと思ったのだろうか？

彼がまだブツブツ言っているとき、捜査官が来て、囲い越しに、卵などが売買されていると告げた。それで彼は、この罪を犯した女性は申し出るようにと要求した。勇敢なる資本家達は、しかしこの呼びかけ従わず、そのためにニップは食糧供給を2日間延期した。こうして彼は一部の人達の違反のために収容所全体を罰し、これは勿論、カワットに対する反対者と賛成者の激しい議論を呼ぶこととなった。

テ・フェルデ

1945年2月10日

最近、収容所ニップがキャンプ内に住んでいます。警備所に付随する2部屋を内装させ、そこに今落ち着いています。それは新しい、気分の悪い奴です。今日もまた、番号を付けていないとか、ホルマット[敬意]表現が充分でないとかの不正が行われていないかどうか、嗅ぎ回りました。

彼はみだらな奴で、私は、彼が番号を付けていない婦人の胸を掴んだのを見ました。けがわらしい奴！ほかの人に対しては鼻先をつねり、第七兵舎でもそうしたら、1人の婦人が、威嚇的な態度を取りました。彼をそれを見て、“殴れるものなら殴ってみろ”と言いました。それで彼女は彼を殴り、少ししてもう1度殴り、こうして彼女は今警備所で、許しを請うまで、頭を上げて膝まづかされています。ニップは収容所全体、1週間米をもらえないと言いましたが、これはうやむやになるでしょう。

⁴⁰ ベアトリクス王女は1938年1月31日生まれ。

テ・フェルデ

1945年2月11日

又、感情的な日でした！先ず昨日の件の顛末です。例の婦人は自分の非を認めず、もし他のキャンプ・パパが間に入らなかったら半殺しに打ちのめされていたでしょう。今、彼女はフダン〔貯蔵倉庫〕に1週間入れられ、キャンプは幸い罰されませんでした。さらに、大きなカワット騒動〔密売騒動〕がありました。ここではまだ盛んにカワットされ、ヤップがそれを見つけたのです。

ヘデック〔編んだ竹のマット〕の外で、1人の男が捕らえられ、と少なくとも山本は好んでこの話を言い立てていますが、その男が、1党30人で様々なキャンプに卵を売っていると白状したのです。

それでヤップはカワットした女性を呼び出しました。指導者はこの際カワットをした人は全員出て行くほうが良いと言いました。私達の兵舎長のコープマン夫人は私達のお母さんに、もし行かないなら、それは反社会的態度だと言いました。そのためにお母さんはまだ調子が良くなく、しょっちゅう頭痛がし、赤い斑点があるにもかかわらず、出て行きました。これが、数日前、収容所リーダーから禁止され、又ニップがとても重い罰を科すことにしたので私達はやろうともしていなかったのにです。3時半頃、婦人達は行き、雨が降ってきても警備所の前で待たされました。お母さんもずぶぬれになりました。私は彼女を急いで暖かなベッドに寝かせて、悪くならないように祈るばかりです。

婦人達は明日の朝9時に戻ってくると約束させられましたが、この部屋ではお母さんに戻っていくことを止めさせようとしています。1人の婦人、ファン・デウテコム夫人はお母さんの身代わりに行ってくれるとさえ言っています。とても親切な人です。ヤップはカワットをする人を見つけたら、キャンプにはもう卵を与えないと言っていたのでみんな一体どうなることかと思っています。そして、そうなったら衣類は3セットを残してみんな取り上げるとも言っていました。でもこれはうやむやになるでしょう、彼はそれほど機嫌が悪くはなかったし、彼女たちが立っている間にも1000個の卵が入って来ました。

テ・フェルデ

1945年2月12日

全ては大したこともなく終わりました。婦人達はもうしないと言う約束をして、家に帰されました。

ファン・デル・クロフト

1945年2月12日

土曜の午後〔1945年2月10日〕、久しぶりに固ゆで卵を1／4味わいました。ピート叔母さんが、私達のためにヘデック〔密買〕してくれたのです。着古した青いワンピースで、鴨の卵三つです。私達は雲の上を歩く気分でした。翌日に突然、私達は全員集合させられました。カワッテン〔密売買〕は断固として終わりにしなければならない、なぜなら、彼、ニップは私達に食事を控えさせるという罰を与えるに違いないから。それに彼は土曜の朝にアッセンデルプ夫人⁴¹に叩かれていることもある。それはこういうことです。彼は見回りをしていました。ほとんど誰も番号を付けていませんでした。付けていない人には、彼は鼻の頭をこずきました。でも誰もそれを理解できませんでした。彼がアッセンデルプ夫人その他の人が‘居住する’部屋に来たとき、アッセンデルプ夫人は“ケイレイ”〔お辞儀〕と声を掛けました。全員頭を下げました。彼は彼女の鼻先を叩きました。彼女は何だか分からず、挑戦的な態度をしました。

彼は彼女を叩きました。彼は“カラウ・ブラニー、ボレー・プクル・ケンバリ”〔もし肝っ玉があるなら殴り返して見ろ〕と挑発しました。そしてバシッと彼は1発受けました。彼女も1発顔に受けました... 彼も1発返され... ! 怒り心頭です。彼女は警備所に連れていかれました。そこで彼は上着を脱ぎ、彼女に殴りかかろうとしました。彼は激昂していました。ジルデルダ夫人は出て行けと言われました。彼女はそれを拒否し、二人の間に割って入りました。“ドゥル・ビチャラ、ツワン、ツワン!”〔先ず話し合ひましょう、旦那様!〕

彼女が殴り殺されなかったのは夫人のお陰です。彼はケンペ〔イタイ〕を呼びました。ジルデルダ夫人は、彼女が空腹のために気がおかしくなっていたのだ、と説明しました。“ベツール、ツワン!”〔本当です、旦那様〕。後になって、彼はケンペ〔イタイ〕を巻き込んだことを後悔したようだ、ということです。彼は3回もレギ（1日中、“ニッポン悪い子”と叫んでいる面白い息子）を見に行きました。ジルデルダ夫人はアッセンデルプ夫人に彼がレギの様子を見に行き、仲直りをしようとしている、と伝えさせられました。そして、もしレギがお母さんが恋しくなって泣いたら、彼にフーリング〔丸枕〕を与えて“マミーは直ぐ帰ってきますよ”と言えということです。彼は3回も“ママ・ブラニー・プクール・ニッポン!”〔日本人を殴るなんて、おまえの母さんはなんて勇気が有るんだ〕と言いました。彼女がもし男だったら今頃生きてはいないでしょう。午後には、彼はマミーとパパイヤの木の下で、気さくに話をしました。これが土曜日のことです。昨日、日曜日、演説の時に、3百万〔ルピア〕入ったと聞かされました。これで砂糖、卵、茶色豆、ベーコンなどが注文されました。昨日の午後には、とても久しぶりにパンが入ってきました。キャンプ中大喜びで歓声を上げました。1000個の卵も来て、私達もやっと4つ貰いました。ルースさんの油で、とてもおいしいオムレツを作りました。

昨日午後には、彼女たちはまたもやカワットをしていました。外の男が捕らえられ、

⁴¹ N アッセンデルプ-ファン・デル・ウルプ夫人、1911年2月23日生まれ。

30人の名前を白状しました。そして、もしカワットをした人達が30分以内に警備所前に来なければ、お金と衣類を没収する（それはフダング〔備蓄納屋〕に積み上げて置くそうです）家宅搜索をさせるというのです。‘マリー叔母さん’はみんなを呼び集めました。雨の中を、雨合羽に身を固めて、100人以上の行列が警備所に行き、土砂降りの中で立っていなければなりません。やっとプリンター〔命令〕が来て、明日7時半に戻ってくると約束するならば帰って良いことになりました。彼女たちは濡れネズミのようになって帰ってきました。本当に、今朝7時半に又行列が行きました。彼は全員が又出頭したことをとても高く評価しました。彼女たちは又くだらないことをいろいろ約束させられ、その後帰されました。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年2月17日

食料が少なすぎるため、女性達は、私達を警備する兵補達〔日本軍内の現地兵〕を通じてキャンプ外とコンタクトを取る罪を犯した。彼女たちは夜に活動し、連絡を取る努力をし、こうして多くの卵を買った。この作業は‘ヘデッケン’〔密買〕とか‘ビリッケン’〔密買〕とか言われる。これは勿論、全く正しいことではなく、なぜならこうすることでキャンプに災いを呼ぶし、こうしてキャンプ内にまだそれだけの金銭があることが分かってしまう。この紳士方の要求する値段は当然のことひどく高いが、我々の空腹はひどく、女性達は彼らの要求するどんな値段でも払ってしまうのだ。鴨の卵1つは、通常ならf 0, 03だが、今では現地人達は先ずf 0, 50と言い、その後f 1, -になった。これを又キャンプ内でf 2, 50以上で売った女性もいる。

全く手が付けられない！ニップ達は遅かれ早かれこれら全てを知ることになるだろう、というのも裏切りの機会はひどく多い。そして特に嫉妬に駆られた女性が他の人達を密告するのだ。状況はひどく緊迫し、その通り、ある時へビリクトとした（ビリキ〔竹を編んだ物〕越しに買うこと）女性は全員門に呼ばれた！我々はなるべく大勢で出頭した。なぜならニッポンは、これは既に我々が体験的に知ったことだが、個人はすぐ罰するが、大勢の女性達には簡単には手を出さないからだ！自発的に行った女性もいるし、中には行かなかった人もいる、スポーツマンシップが無いこと！

警備所に来たら我々はクッションに横になって手を挙げるように命令された。我々はその時女性500人ほどであった。これは、勿論日の照る下での、不愉快な光景であった。ヤップはいなくなり、しかし腕が下がってきたら殴りつけるように、監視が数人残った。だいぶ経ってからヤップが戻って来、その時にはもう土砂降りの雨になっていたが、彼は私達が明日の朝戻ってくことで、私達を帰した。我々はその時足をやっとの事で延ばし、兵舎によるめきながら帰った。

我々は幾人もの女性達とよく相談を‘行い’、明日我々が質問されたら1人の女性が話

をする事にした。夜には、とにかく全員で行くようにという回状が回された。翌朝には実際に我々は800人になっていた。警備では我々は‘ヘデクステル’（買う人）[密買人]と‘食べる人’に別れさせられた。しかしこれは幸いうまく行かなかった。我々は全員その恩恵を被っているのだから全員が‘ヘデクステル’の方に立ち、ヤップを苦笑いさせた。それから私達は何故そんな事をするのか云々というとても立派な演説を聞かされた。話をする事になっていた例の夫人も彼に立派に答えを述べた。彼は全てを理解した。我々はそれから彼に決してもうヘデッケン[密売買]をしないと約束させられ、約束すれば彼は1週間に3回、全キャンプ用の卵をもらえるように努力するという。なぜなら、私達がもらえるのなら、彼ももらう事ができるからだ。その時丁度門が開き、9000の卵を積んだトラックが入ってきた。この荷物は歓声で迎え入れられた。我々はその後家に帰された。

ファン・デル・クロフト

1945年3月25日

命令が来ました。婦人達がヘデック [編んだ竹の壁] を燃やす限り、火を焚いてはいけません。全ての卓上コンロは提出しなければいけません。11時にニップ達と一本足木馬 [日本軍内の現地人補助兵] 数人が来て、何人かの所から鉄のベッドを持ち去りました。その後ニップ自身が兵舎の順に木製のガラクタを取りに来ました。7人のニップが警備所に住みに来たのです。そのために彼らは私達からベッドや机を持って行ったのです。1人の裏切り女、ニップのガールフレンドが部屋を掃除し、東インド人の年寄りの女性が彼らのために電気で料理をさせられます。高く膨らんだパンとバターが机の上に乘っていたそうです！

テ・フェルデ

1945年3月30日

私達は今夜病室で歌を唄い、ニップが突入してきたとき、門のそばの病室でやっていたところでした。びっくりした！私達はみんなすぐベッドに座り、訪問客のような顔をしましたが、でもヤップは私達が唄っていたのをもう見てしまったのです。

ジルデルダ夫人が早急に呼ばれ、ファン・レーン看護婦⁴²、病室長と、私達のリーダーのベック夫人も来なければなりません。少し後で、明日はキャンプ中食事無しと発表されました。みんな猛烈に怒り、そこら中で、“歌を唄うなんて何をしているのだ、黙っていれば

⁴² M.G.P.ファン・レーン-ファン・デル・ラーン夫人、1896年11月25日生まれ、アンバラワ第六で看護婦として仕事をしていました。

よいのに”などと言っていました。とにかく、これがうやむやになることを祈りましょう。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年4月1日

復活祭の金曜日に、我々のキャンプの娘達からなる合唱団が病院で数曲の歌を唄った。ヤップがこれを知った。この為に病院と、合唱団のご婦人は1日中食事無しだった。このご婦人達は警備に連行された。

テ・フェルデ

1945年4月1日

復活祭！やれやれ、私はくたくただわ！昨日の朝日本時間8時半に、コル・デーが来て、私達に警備に来るようと言いました。途中で残りの人達を拾いながら行き、10人の少女達、ベック夫人とファン・レーン看護婦です。ベック夫人は、ヤップが炊事場に来て、ジャグン [トウモロコシ] がやはり分配されたのを見て激怒したと言いました。ジルデルダ夫人が、それは夜にもう茹でられていたので、そうしないと酸っぱくなってしまおうと言ったら、彼はもしニップンがそう言ったなら、目の前の皿にのった食事にも手を付けてはいけないのだ、と答えました！彼ならね！とにかくベック夫人は私達は自発的に、キャンプを許してもらうために行くのだ、と言いました。私達は勿論それに賛成でした。

私達が出頭したとき、ニップはまだ寝ていて私達はまだ立って待っていなければなりません。しばらくしてからニップが現れて、私達は列になり、顔を太陽に直接向けて立たされました。彼はそれから何も言いませんでした。私達はそこに立ち続けます。時々、彼は同じ質問をし続けました。“どうして私達は唄ったのか”“病人がそのために良くなるのか”彼は腹が痛いから彼のために唄ってくれないか。誰に殴って欲しいか、彼にか、それともジルデルダ夫人にか。でも私達が“ジルデルダ夫人に”と言ったら、彼女はきっぱり拒否しました。こうして私達は2時間半、照りつける日の中に立ち、その後、日陰に行って良いことになりました。

ファン・レーン看護婦と3人のデーさんはもう耐えられず、幸い彼女たちは座ることができました。それから私達は日本時間5時15分過ぎまでそこに立ち、百回も同じ質問を聞かされ、最後に蕩々たる演説の後、家に帰ることができました。キャンプは食事をする事ができましたが、私達は丸1日食事無し、でも内緒ですが勿論そっと食べていました。でも今日になって初めて、いかに芯まで疲れ果てているかを感じました。私はひどく火傷していて、ドレスを着ることもほとんどできません。でも、これも私は乗り越えるでしょう。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年4月2日

全てのクミ [長] (ストレープン) [兵舎副リーダー] は警備に呼ばれた。私達がそこで最初に見た物は、合唱団のご婦人達が、まだ立ち続けている姿だった！なぜその時私達が警備に行かなければならなかったのか、いまだに私には分からない。しかし女医の1人が、少なくとも病院は今日食事をさせて貰えるように懇願していた。恥知らずな話じゃない？結局、彼女は3時間立って喋りつづけた。最終的に病院は今日の夕食を食べられ、合唱隊のご婦人方は叱責とともに帰ることができた。このごろ彼らは私達に食事を与えないことでキャンプ [中] を罰すると脅すことが多くなった。例えば、兵舎内で煮炊きをしてはいけない。それでも我々はやはりする、しかしこれは最終的には畏にはまるようなものだ。というのも突然ニップが入って来て火を見ると、全キャンプを1日食事無しで罰するのだ。だから、私達は明日、食事無しである。

ファン・デル・クロフト

1945年4月5日

夜に、ベック夫人が私達の所に朗読をしに来るはずでした。その前、6時半に彼女は第二病室で合唱隊と一緒に唄っていたとき、突然ニップが入って来たのです。又大騒動。“食事無し”と彼は命じました。翌朝彼女たちはキャンプ全体を罰するのを止めてもらうよう、‘アンブン’ [許し] を請いました。さあ、そしたら彼女たち十数人、3人のデーさん、ファン・レーント看護婦、エルス・カペルス、トレース・ファン・ヘッセル、ベック夫人、その他は7時半から4時まで日なたに立っていなければなりません。デーさん3人はすぐに失神しそうになって座らされ、でも飲み物は貰えませんでした。歌を唄った病室の7人の患者は、その日食事を貰えませんでした。

ファン・デル・クロフト

1945年4月20日

昨日、バンジュビルの患者が手術のためにここに運ばれました。ニップは身体を覆うための白いコートを彼女に貸しました。午後になって彼が返してもらいに来たのですが、その女性は寝ていて、私達は何も知りませんでした。今朝は全ての看護婦が警備に呼ばれました。私達は怒鳴りつけられ、わめき散らされ、彼はサーベルで脅しました。もう、嫌になります。最後に、私達はこれからプリンター [命令] に、‘前から’ 即座に従うと約束させられました。そしてお辞儀をして私達は消えることができました。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年5月3日

やはり赤十字の小包は来ていた、しかしそれを公式に我々の収容所リーダーに渡す將軍を待たねばならず、それは毎回延期され、そして我々は罰を受ける。例えば挨拶をしないからだとか。その度に、もう1日小包を待つと言われる。彼らがしていることは唯の嫌がらせで、なぜなら私達はその小包を本当に必要としているのだから。食事は惨憺たる物で、ほとんど野菜はなく、もう数ヶ月肉も無く、果物も同様だ。グラ・ジャワ〔椰子砂糖〕（固まりになった一種の茶色砂糖）だけは、幸い定期的に入ってくる。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年5月13日

高官が来るという。そのために全ての‘ストレープン’は警備に来させられた。警備所近くに長いテーブルが、大きな白いシーツを掛けて置いてあり、小包のいろいろな缶詰があった。“今だ”と私は思った、“これはもうすぐ分け与えられるだろう”。これも間違い。最初に予行演習のような事をしなければならない。

我々は長い列になってテーブルの前に並ばされた。そして我々のだだの収容所ニップがその時は‘高官’の役目をした。彼は歩いて入ってくるだろうから、そしたら我々は全員お辞儀をする。そこでは、英国の婦人は彼女の言葉で、ハンガリー人はハンガリア語で、ロシア人も同様、そして最後にオランダ人が、それぞれ自分の言葉で、日本帝国の気前の良さに対して感謝しなければいけないと通告された。その儀式もこれから行われる。ただただ馬鹿げている、こんな人形芝居は見たこともない。その後我々は帰ることができ、‘高官’到来が告げられたら、きちんとしたワンピースを着て、靴を履いて現れなければならない。そして私にはもう靴が無い（犬が兵舎の外に持って行ってしまった）ので、行く必要もないと思った。しかし、これはそう簡単にはいかない。一方ではとても残念に思うし、他方ではそれほどでもない。そのため私はやはり見に行くことにし、でも借りた靴で歩くのはよし。

12時半に警備所に戻る。全ては混乱していた。食事を取りに行くのも食事自体も、でも私達にはどうでも良いのだ、赤十字社の小包が受け取れるのだから。1時には門の前は大変な混みようだった。そこには巨大なトラックが8つの木箱を乗せて〔待機していた〕。それらは持ち上げられた。その後にヤップ達の包みが沢山〔続いた〕。私達は驚いた、どれだけのものかは予測する事もできない。突然みんなが横によけ、ひどい叫び声がし、お辞儀をし、‘高官’が入ってきたようだった。彼には女性達が見えず、というより彼は見ようともしていなかった！最初に彼は8つの木箱を処理しに行った！我々の外科医が呼ばれ、彼の居るところでそれは開けられた。この男は喜んで宙に跳び上がった。薬の木箱が8つ！それは大した事よ、薬が充分

にあるなんて、綿花、包帯、肝炎用の血清、針、手袋に数千のビタミン剤。おお、これはみな、何という贅沢なことでしょう！

テーブルの隅には、他の包みが高く積み上げられていた。若い少女が呼ばれたが、その娘たちはおらず、それでヤップ達は自分で処理にかかり、包みを開けた。缶詰はこの時開けられ、‘高官’の指し示す皿の上に出され、それはもう沢山あった。このごちそうを紳士方はかき回し、指で、ナイフで、そしてサムライ（長いサーベル）でかき回した。その時女性達ももっと開けるために呼ばれ、全てはテーブルに載せられ、そこここで、味見もされた。

この全ては盛大に、ニップの1人によって撮影された。そのために我々はきれいなドレスを着、靴を履かなければいけなかったのだ！このフィルムの中では全て、ニッポンが我々をいかに良く遇しているかという宣伝にならなければいけないのだ！！そしてその時、我々は最大の幻滅に撃たれた。我々は4時に、小包無しで家に帰らされた。全ては又梱包され日本の警備の前に運ばれた。開けられた缶詰は、そのまま病院に運ばれた！これは誰も予想だにしていなかった。何ともひどい話だ。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年5月14日

朝8時に、ハンチョウ [兵舎リーダー] だけが警備に呼ばれた。それぞれ紙を受け取り、そこには、アメリカがニッポンの船を魚雷攻撃したにもかかわらず、赤十字の小包を運搬する公式通行証を得、私達が小包を受け取ったのは、ニッポン帝国の偉大なる善行のわざである、と書かれていた！この文章は英語で作られ、英語で記述され、本名全部書いて署名しなければならない！これを全ての‘ストレープン’が送るのだ。

午後3時に‘ストレープン’全員が桶を持って警備に集められた、紙巻煙草が放出されたのだ。それは普通の20本入りのチェスターフィールドとキャメルだった。何という贅沢さだろう。全ての煙草は箱から出され、箱（の中に禁制品が入っているかもしれない）はヤップの所に残された。我々は貴重な荷物を持ってに兵舎に帰った。全員40本づつ煙草を受け取った。これが配分され、すると我々は又今度はチョコレート（そして、なんと気持ちの良い）石鹸、干しぶどう、クラフト・チーズを取りに行かされた。チューインガムや角砂糖も有った。量的には多いものではなかったが、やっと再び‘本物’の味を味わえる事に心底感謝してしまう。私達に慈善を施した人は、いかに私達がおいしく食べているか見てみるべきだわ。

ファン・デル・クロフト

1945年5月17日

何年ぶりかで、またチューインガムを口にしています。先週の土曜日にやっと小包が貰えるはずだったのですが、それも少し後に中止されました。日曜朝 [1945年5月13日] に、小包が給水塔の前の日なたに積み上げられました。たくさんの缶切りの載ったテーブルも用意されていました。ハンチョウ [兵舎リーダー] とクミチョウ [兵舎副リーダー] は晴れ着を着てその前に立たされました。少ししてから彼女たちは又帰されました、なぜならそれは予行演習だったのです。

1時にまた彼女たちが呼ばれました。1時間してからやっと高官達が来ました。テーブルの向こう側から班長達に演説が怒鳴られ、そして...それが撮影されました。一番良い服を着て。それは新聞に載り、私達はまだこんなに良い状態だということになる！包みが1つ、開けられました。添え書きは後で読むために持ち去られました。そして彼らは、もう時間が無いという説明で出て行きました。小包はフダン [備蓄納屋] にまた入れられました。[私達は]猛烈に怒りました。私達はまだ何か受け取れるという希望を全くなくしました。

やっと、月曜朝になって、コーヒー2缶を12人で分けるように、干しぶどう2箱、これも12人用、チーズを2固まり (20cm づつ)、1人2つのチューインガム、角砂糖12個、それぞれにチョコレート2つ (2cm の)、小さな石鹸1個、紙巻きたばこ44本をもらいました。全ての箱や缶はすぐに返さなければならず、とても残念でした。ニップは最初全てを桶の中にぶちまけて混ぜようとしてしました。でもそれにはジルデルダ夫人が幸いにも抗議しました。火曜日 [1945年5月15日] 2缶のクリムメルク [コンデンスミルク] を10人で分けるように、コーンビーフを2缶 (10人用) もらいました。水曜日 [1945年5月16日]、昨日は、10人用にジャムを2缶と、1人1缶のバターをもらいました。6歳以下の子供達は別のバターをもらいます。ホンの少ししか [通常の食料は] 入ってきませんが、この大ごちそうのためにそんなことは忘れていません。

ニップは5人の婦人のところでアランの火 [炭火] を見つけました。この5人の婦人達は顔をひどく殴りつけられ、アメリカの小包はその後1つも貰えませんでした。今し方、私達は豚肉を4缶、10人で分けるようにもらったところです。おいしい！新しいニップが来ました。ましな人だと聞いています。ルンルル。

モードー

1945年6月7日

私達にコーヒー用の湯を提供するのに十分な木が炊事場にはないため、多くの婦人達は、また自分たちで火を起し始めた、ニッポン小父さんから厳しく禁止されているのだが (歴史は繰

り返す、収容所の中でさえ！)。‘罰’として、ニップは先の日曜日、全ての椅子を炊事場に持ってこさせ、薪にし、そのために我々は今やベンチか、箱かトランクに座るしかなくなった。それも私達から取り上げられるまでの話だが、犬を殴ろうとしているものにとって棒を見つけるのは簡単・・・なのだから！苦労して、私達は病人と60〔歳〕以上の婦人の椅子は火あぶりの刑から救い出すことができた。

チャックス・グレイン

1945年7月8日

勿論それは日曜日だった、それでなかったら嫌なことにはならなかつたらう。朝に、今日が夫人を亡くして1年目に当たるトベのことを追悼した。その前の日に、“明日12時に、あなた達が自由の身であると聞くことになるだろう”と言われていた。ヴィースはロムボック〔唐辛子〕を皆に配った。コックスと私は少しベッドに横になっていると、“全てのハンチョウ〔兵舎リーダー〕は警備に来るように”と呼び出しが入った。おお神よ、いよいよだわ。“コックス、急いでロウソクをちょうだい、火を点けて”それはうまく行かず、倒れて火は消え、スサー〔困難〕を呼んだ。

知らせはやってきた、全てのハンチョウ、医師、全32人が腕を上げて焼け付く太陽の下に立った。〔日本人は〕32人が署名して収容所が提出した、食事の量を多くして欲しいという嘆願書に激怒していた。このところ食事はひどいものだ。朝はどろどろの混ぜもの、昼は米と少しのサジュール〔野菜〕夜はまたどろどろ、1日置きに小さなパン1つ。朝、まだ起きていない胃にあの冷たいどろどろは堪らない。

ブルゲル-ダウファス

1945年7月8日

日曜日には、第三、第四兵舎は、火を起こしたというので昼食無しの罰を受けた。勿論キャンプ中で火を起こしている、炊事場からは湯がもらえず、もう何週間もなのだから、しかし、私達のところで偶然1つ捕まったのだ。面白くはないわよ、でも私達は何とか切り抜けていくわ。

モドー

1945年7月11日

我々の食料の質と、特に量の改善を要求して、今月初めに我々は収容所リーダー、収容所副リ

一ダー、兵舎リーダー、医師が署名して嘆願書を提出した。これはニップ紳士方にひどく悪く取られ、察するところ彼らは食料供給者と結託して不正をしており、私達の嘆願書を契機として彼らの上官から調査の手が入るのを恐れているのだ。

ただ、我々は3匹居る豚の内の1頭を屠殺して良いという許可を得た、これは雄豚のレーンチェで（雌豚の1頭が子豚を生み、この為にまた新しい係りができた：豚小屋の番！）この為に我々はやっとまた少し脂肪のあるものを味わうことができた。この豚は67kgあり、これを私達は4,000人で分けたのだ！

だが、嘆願書の話に戻ると、先の日曜日にケンペ [イタイ] の紳士が何人かキャンプに来て、嘆願書署名者全員が警備に呼ばれ、尋問され、叱りつけられた。全てはその場の雰囲気合った声色で、通訳によって訳され、その後我々の‘恩知らずさ’に対する罰が来た。全員横並びに、焼けつく太陽の中に両腕を上げて立った。それは1時半のことで、そいつは“明日まで”我々はそうして立っているのだと言った！一本足木馬 [日本軍内の現地人補助兵] の1人が我々を見張り、腕を下げる者は顔を殴れという命令を受けた。ふん、実際にはこれは大したことはなかった。一本足木馬はしよっちゅう目こぼしをし、裏の部屋に行ったニップ達がこちらに来るときには我々に警告してくれさえし、そして2時間後に我々は中に入って良いことになった、勿論、日本語での幾つかの演説の後で、そしてそれはアビंकさんによって感情を込めて訳されていた。

ファン・デル・クロフト

1945年7月13日

[1945年] 7月8日、日曜日に、嘆願書に署名した医師全員が警備所に呼ばれました。‘紳士方’は激昂していました。彼らは2時間も両手を上げて日なたに立っていなければなりませんでした。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年7月21日

今日はバンドン組から適当に10人、マラン組からも10人、それにバンドンの他の女性キャンプから来た人達の中からも10人、警備所に呼ばれた。一時間待った後、ニッポンの高官自身が来て、全ての婦人達が、つまり様々な収容所で後に残してきた家具をニッポンが売り払い、総額でf. 17,000.-になったと言った。我々はその金をどうしたいか？収容所金庫に入れるか？より多くの食料を買うために？さて、婦人達はそれに同意した。その後、バンドン組の十人は残っていなければならなかった。他の人々は家に帰って良し。それから彼はニッポ

ンは先月、この収容所の女性の食料を f. 2, 000. 一分少なくし過ぎた、と言った。これも彼はすぐに訂正したいので、この金も現金で払われる、つまり我々の収容所金庫が肥え太ることになる。正直言って、誰もこの事態を理解できていない。しかしこれにも何か裏があるに違いない。

食料及び物資的状况

モドー

1943年1月18日

ここの食事は囚人用としてはそれほど悪いとも言えないが、単調で、我々にはあっさりしすぎている。朝はかび臭い米の粥とシロップ、昼はかび臭い赤米と煮きった野菜と数立方センチメートルの煮きった肉、そして夕方はそれと同じか、ポタージュスープだ。幸い、我々は今までは毎日、秘密でパン（トウモロコシ粉の）を買うことができている。先週は少量の砂糖、コーヒー、石鹼、木炭が支給され、我々はコーヒーを1杯、ミルク無しで飲むことができるが、ほとんどの収容所住人はそれを（まだ！）楽しんでいない。紅茶やココアは、殿方は余計な贅沢品だと思っているようだ。幸いにも我々の多くは、そのようなものを幾つか持って来ている。

チャックス・グレイン

1943年1月20日

今日の午後、私達はおいしいカチャング・イジュ・スープ [小さなグリーンピースのスープ] を飲み、私はデザートにクレープを作った。みんなフライパンの周りに集まってきて、“まあ、あなた方はまだ粉やバターがあるの？”と言った。私達は、私達の備蓄品をみな1カ所に集め、こうすることで、たまにはおいしい1杯のコーヒーなどを飲むことができる。私達は、より多くのアラン [木炭] や、コーヒー、砂糖、卵、石鹼をニップ達から貰えるという。これがいつまで続くものか興味津々だ。

ブルゲル-ダウファス

1943年1月22日

今や鉄条網越しに何かを買うことは禁止されたが、定期的に石鹼、砂糖、コーヒー、卵、アラン [木炭] を受け取っている。紅茶はまだだが、それも来るという。果物も同様、ただ、余りたくさんではない。

ブルゲル-ダウファス

1943年2月22日

私達は、お金を無くした、もう知ってた？全ては供出させられ、その受取証をもらった(!)、それにはニッポンが私達のために預かっているとある！そしてf 1, 50の価値のクーポンを受け取り、それで、この敷地内に来るであろう(!)店で買い物をすることができる。鉄条網越しには何も許されない。私はつまり、3人分、f 4, 50を月々受け取ることになる。私はf 33, 37を供出し、戸棚にはまだf 400, -を安全に隠してある。

私達はこの2週間の間に、すでに2つの素敵な小包、1つはボックス[夫人]から、ソーセージとベーコン、ジェルックス[柑橘類]、ビタミンCとBの錠剤、駄菓子とクッキー入り、もう1つはまだ自由の身のロットからで、ライストターフル料理を作るためのもの、おいしい。それにクッキーに石鹸！素敵なことですよ、今は何かをもらうことがこんなに嬉しい。

ブルゲル-ダウファス

1943年2月25日

店ができて、クーポンも来た、10, 5, 3, 2, 1セントのクーポンの束で、毎日パンが買え、悪質で高いが石鹸も、それにクッキーやバナナもだ。それ以外の果物はない。ボックス夫人は、私達を何でも援助したい、と書いてきた。ファン・レウセン[氏]が、彼女にお金を渡したようで、ロットは勿論まだ仕事をしているし、それにヒルダにベルタだ。私達は、だからとても長い注文票を送りつけた。

ブルゲル-ダウファス

1943年3月5日

昨日スミーデスカンプさんから、小包を受け取り、ティーポットカバー、薬缶(頼んでおいたもの)、布巾に鍋つかみ、銀のビー玉あめなどが入った、大きなあめ玉の袋、それにジェルックス[柑橘類]入りの大袋。いい気分、私達は大いに楽しんだ。そうそう、マリアンに、毎日炊事場からジェルックスあるいはトマトが貰える、これは嬉しい。これ以外には果物がとても少なく、毎日バナナを数本と、3日に1度パイヤを1切れくらいだ。出店では毎日パンが買えて、これはまあ食べられるし、時には石鹸、たまに卵、クッキーは1人2つ、それにこの間は紅茶やケチャップ[調味料]もあった。まだ沢山あるわけではないけれど、でもとにかく、始まりの何かではある。

ブルゲル-ダウファス

1943年3月19日

まだとても疲れやすいの、ヴィム、全然、全く元気が出ないわ。私の体重はたったの44キログラム。見られたものじゃないでしょ、こんなに痩せたことは1度もないわ。これが私の最低の時よ、これから又良くなっていくわよ。もしまた50キログラムになることができれば、またずっと調子よくなると思うわ。エルスはとても健康的、日焼けして赤いホッペで、マリアンもきれいな健康的な顔色だ。ああ、私達は大丈夫。ただおいしい食べ物が十分に無いだけ、少なくとも私には。ありがたいことに、今は毎日パンがあり、卵も多い。ほとんど毎日卵1つはある。

エルスは今でもこれが大好きで、いつでもパクパク食べるし、焼いたり茹でたりしていると歓声を上げる。彼女はよく食べる、ほとんど何でも好きだし、ミルクお粥だけは嫌いだ、これは私がそれでも食べさせる、毎朝器に半分だ。この方が水の中で煮た米よりもずっと良いし、今ならまだ貰える。子供が3歳になったらもうだめなのだ！私もいつも少し貰って、私の米粥の中に数さじ混ぜている、その方がずっとおいしくなる。

午後にはいつも米とサジュール [野菜]、スープの中で肉を煮たようなものとバナナかカテス [パイヤ] で、カテスは4日に1度だ！10時には私はいつもパンを暖め、そしてエルスはミルク入りココアを飲み、オフォマルティヌの最後の缶からの1さじも一緒に。4時には彼女にミルクを少し入れた紅茶を飲ませ、サンドイッチも食べる事が多い。丁度この時、新しいパンが来ているから。そして夜は最初に米を1皿にサジュール、それから卵サンドイッチで、バナナも1つ。だから、まだ大丈夫なの。あなたの方はどう？多分ずっと少ないのではないかしら、ずっとましだと良いけれど。あなたが健康で戻って来てさえくれれば、ヴィム！

ブルゲル-ダウファス

1943年3月27日

カワット商売 [禁制取引] がまた盛んになったこと。毎晩、箱一杯になって物が入ってくる。警官は何も見ない。時々少々言われることもあるが、厳しかったことはない。いつかはヤップが介入して、何人かは捕らえられるだろう。いずれにしろ、どうなるか見てみましょう。赤十字を通じては何も貰えない、多勢の人々は可哀想なのだから。その人達がこうしてエクストラを手に入れるのを悪く思っはいけない。何も受け取れない人がいつもとても沢山居るのだ。

ブルゲル-ダウファス

1943年4月3日

カワット購入 [禁制取引] は又最高リーダーのスフルト夫人によって禁止された。彼女は演説をして、これは今や完全に行き過ぎの状態であり、ニッポンがひどく怒っていると言った。さて、何という奇跡、今週の状況を見てごらん、籠にぎっしり何杯も物が入って来、昼日中でさえも行われている。私はやっていない、私は自分が欲しい物は全てきちんと警備を通じて受け取っているから。

詳しくどうなっているのかは知らないけれど、ジョクジャ [部門] の誰かに申し込んでおくと、きちんと入ってくるようにしてくれる。フェラが私のために申し込んでくれた。靴、卵などを焼くためのオルポリヌ (サラダ油の一種)、バター、ソーセージ、ベーコン、缶入りミルク、缶入りクッキー、それにドレスを作るためのサロン布だ。そうそう、それにクルブック [エビ煎餅] 一箱にキパッセン [センス] もある。幾つかの物はまだ入って来ていないが、入ってくるまでにいつも数日かかるから、全て来るかはお楽しみだ。ああ、それに私達はよく小包も受け取れる、これは大きな違いだが、何も受け取れない人達も大勢居る。これは辛い事よ、他の人達がシント・ニコラス祭みたいに贈り物を次々と開けているのを見ながら、自分の子供にはなにも無いなんて。

チャッケス・グレイン

1943年6月5日

我々はもう隣人の、虫の入ったベーコンでも食べてしまうところまで来ている。それでも私は文句を言っているわけではないのよ。私達は何とかやっている。私達には夫達からの手紙が一番必要なのだ。もしそれが分かれば、朝のブブルー [粥] も、昼のサジュール [野菜] 付き米も 'ソップ・ブランダ' ['オランダ風スープ' の意] も、うーん、夜にはもう少しその気になって、飲み込んでしまう。さよならヨッシェ、よくおやすみ、そして又会う日まで。

ファン・デル・クロフト

1943年6月17日

マミーは、今朝始めのうちは、山のようになった繕い物がなかなか片づかないので、少々機嫌が悪かった。私はもう、よく手伝いをしたし、明日は雑巾掛けをする必要がないので又しっかり手伝える。ここでは全てがどうしようもなくすり切れ、色あせてしまう。

ブルゲル-ダウファス

1943年6月20日

私はこの女性の1人にドレスを作らせた。とてもきれいにできた。こういうことはここでは簡単にやって貰える、ただ、順番が来るまでに長く待たなければならない。私はもう1月前のようにぼろ布をまどってはいない。自分でもスカートを作ったし、バックス夫人は4枚のブラウスを送ってくれて、毎朝また充分着る物があり、今は又、この午後のドレスが加わった。これで私の衣装箱も又水準に達したわ！ロットは私のドレスを作るための素敵な布を送ってくれ、これから作って貰う。いい気分じゃない、まだお金があるって事は。

ファン・デル・クロフト

1943年6月28日

そして私達のきれいな薬缶はぼろぼろになった、まだ穴はあいていないけれど、そこら中がはげてしまい、これは.....器用なフィンのお陰。マミーの表現を借りれば、これでマミーの人生の楽しみが消えて行く、です。そしてハネケの収容所言葉では、‘ばっちり悪さ’され、‘汚く突つかれた’と言っています。

ファン・デル・クロフト

1943年8月26日

食事は私にとってスサー [大変なこと] です。明日は自分で粥を煮て、自分で米も炊いて、それにサジュール [野菜] も煮ることになるかも知れない。でもこれはいま分配できなくて、[この為に] 今夜会議が開かれることになりました。そうしたら炊事場は休業になります。でも幸い私達には自分たちの畑で採れるトマトがあります。知ってた？もうとても沢山収穫しています。そしてみんな又これをまねようとしています。パウラはその隣りを新しい畑にするために耕しました。効果甚大です。

モード

1943年10月16日

3週間くらい前までは、1日置きに1人1つの卵が来ていた。突然少なくなり、現地人の正月⁴³で大量に卵が使われ、鶏も大量に殺されたからだと言うことだ。

しかしそのお祭り騒ぎはもうとっくに終わっているのに我々は精々週に1個の卵しか貰えない。今日はその上通告があり、1日分の肉と脂肪の量を半分にするというのだ。“外部地域からの家畜輸送が困難なため”。現在ジャワのほとんどの食用家畜はスラバヤ近郊のマドゥラから来ているので、‘困難’が有るかどうかが疑問だ。これは金の問題だろうと私は思う。いずれにしても、我々の、すでに乏しい食料状況はより悪化することになる。

チャックス・グレイン

1943年10月17日

今日、我々の肉が今後半量になるという知らせを受け取った。それでは手の平の、親指の付け根の半分くらいしかなくなる。日曜日には粥用の米も、もうない。この調子でいけば、残るものは多く無い。果物も過酷なほど少ない。それでも我々は絶望はしていない。

チャックス・グレイン

1943年11月15日

最近の我々の食事は劣悪の一語だ。飢餓と言うにはまだ早い、1日中、信じられないほど少ない。月末からはパンももう入ってこない。これはひどい話で、私は1日で1番楽しみにしていたのに。それでもとにかく、何とかやっていく。

モード

1943年11月17日

我々は全く嬉しくない知らせを受け取った、今月末からパンの供給が止められるというのだ。これまで受け取っていたものもホンの少しだが、それでも我々は、それがひどく恋しくなるだ

⁴³ “現地人の正月” というのは恐らくレバランのことで、ラマダン（イスラム教の断食期間）の終わりの大きな祭りである。

ろう。我々のベルトを又もときつく締めて、私はこれまでにないほど痩せてしまい、私のドレスは塩の袋のように私の身体にぶら下がっている。

ブルゲル-ダウファス

1943年11月26日

私がとてもラッキーなのは、毎日900グラムのミルクをエルスとマリアンのために貰えることだ。クレープを焼いたり、フレンチトーストやプリンなどを作るのにはミルクが必要で、私はこれをいつでも楽しく作ることができる。たとえ最低量しか貰えないとしても、いくらかは手に入る、これは全然違うことなのよ、ヴィム！毎日少々の栄養のあるものを口にできるか全く無いか。最近のミルク規則はこうなっている、全員、ミルクの割り当てが毎週100グラム、でも子供達は例外で、毎日貰える。これはよい方法で、例えば私の隣のヨーケ・ユンケルさんは、子供がいなくて、もう数ヶ月間もミルクを貰っていなかった。今では彼女も水曜日に100グラム貰える、これは有るか無いかの量だけど、それでも幾ばくかだ。私もそれを貰えるが、私は例えばヨーグルトなどの、他のものも貰える、私はいつも鍋までなめてしまう！

ファン・デル・クロフト

1943年12月16日

ああ、私達は今日の午後、またもやとっても食欲旺盛だったわ。キティーとアンドレアが戸棚に向かって突進していき、そこから私達の最後の、よく聞いてちょうだい、スペキュラース [冬の祭りに食べるクッキー] の缶を出した！それはもう4年以上前のもので、かび臭くなっているのではないかと思ったけれど、全然、大丈夫よ。まるでオーブンで焼きたてのようにカリカリしていたわ。その時、私達は少し後悔しました。私達は少し早すぎたのではないだろうか。でも、そんなことはないわ、私には経験がある、取っておくことで、私の避難袋は、首飾り、腕時計、一杯詰まったセカンドバック、ドレス2枚、等々が入ったまま、無くなってしまったのだもの。もう考えたくもない！それに戦闘態勢の兵士の模様のチョコレート缶、私達が始めの頃に開けたものは、もう何も残っていない。それに、まだ沢山ある。だから、絶対にとっておいたらだめよ！

モードー

1943年12月31日

今や我々はここに1年以上居る！もう14日間パンが無く、アンバラワには粉がない。肉の量（！）は又減らされ、私には食事の後、実際に満腹したのがいつのことか、覚えもない。私のウェストは10センチ以上痩せてしまった。それでもニップは、彼は最善を尽くしていると言う、我々の面倒をできる限り見ていて、しかし無いものは.....。米の割り当ては本当に貧弱なもので、全然足りるものではない。幸い、時々ケテラ[カッサバ芋]が1食、追加としてくる。ほんの少しのココヤシ油でももらえれば、今や我々は大喜びである。

昨日は鴨の卵とココヤシ油と砂糖、ケテラ粉[カッサバ粉]で、とびきりのクッキーを焼いた、昔はこの油の臭いがするだけで吐き気がした物なのに！ええ、キャンプ生活も、どこかに良いところがあるものよ！

イエレにはもう小さくなって、私には大きすぎる何足かの靴を、彼にはとても大きすぎるシャツと交換した。それを私は今縮めている。学校は休暇中なので、今は時間があるのだ。炊事場には非常な少量しか入ってこないの、我々はもうここしばらく（午後の米以外にも、朝の1杯のお粥も）自分たちで木炭を使って煮炊きしなければならない。それに週2回、昼食用の野菜も。この方がおいしいけれど、手間は非常にかかる。特に娘の居ない人たちにとっては！

イエレの鶏は、今月第2回目の産卵に入った。（第1回目[の時に]は、42日間継続して43個の卵を贈ってくれた！）これは丁度よいことで、というのもニップからは約9日間に1個の卵しか貰えず、これはカンポングスで大量の鶏が殺されたため、食料状況はバラ色とはとても言えないようだ。

衣類用の布、金物（釘！）電球、等々も不足している。電球に関しては、キャンプ内で1つ壊れることがあると、警備から新しいものを出させるのはこれまでも至難の業であった。個人用ランプの使用が禁止されてから数週間後に、全ての余った電球を警備に提出するようという命令が来た。ふん、収穫は大きなものではなかった。非常に光度の弱い物が数個と、壊れた物がいろいろ！この後すぐに通達があり、今後電球の配給は無しになった。

チャックス・グレイン

1944年1月12日

さあまた仕事が始まるわ。私は今朝のサゴ粥と1杯の紅茶の後で、もう衰弱してめまいがする。おろしケテラ[カッサバ芋]と少量のヤシ砂糖とで、フライパンを使ってクッキーを焼く。先日は、ケテラコロッケを食べた後で、腹痛のために1晩中起きていた。

ファン・デル・クロフト

1944年1月14日

最近、私達は上手に物々交換をしていて、トコから買ったタバコとグラ・ジャワ [椰子砂糖]、あるいはロールドオート缶1杯の砂糖、英国製ティースプーン4本に対しては、カチャン [落花生] 3カチ [1, 800グラム、1カチは600グラム] に、グラ・ジャワ [椰子砂糖] 4玉、それにケチャップ [調味料] を1瓶までもらえました。私達はこれで、おいしいグラ・ジャワ-カチャンクッキー [椰子砂糖ピーナツクッキー] を作りました。

ブルゲル-ダウファス

1944年1月27日

嫌になるわ、もうほとんどアラン[木炭]がもらえず、米は1日130グラムだけ。エルスはその半分で、沢山のケテラ[カッサバ芋]を副食にもらうが、でもこれを食べるとすぐにお腹を壊してしまう。エルスもだ。そしてこれはとても長く煮なければならない。火をととても長く使うのだ！私はそれでなくても、ミルクや粥を煮なければならないのでアランで苦労している。煩わしい！私の分の朝食は止めにして、子供たちは冷たいプディングで、そして10時に何か暖かなものだ。その時には米を煮たりするのに火を起こさなければならない。バンジュビル[第十]の男達は又連れ去られた。今度はいったいどこにぶち込むつもりだろう。キャンプ内は不安でいっぱい、特にこのアランのために！

ファン・デル・クロフト

1944年1月28日

昨日から、又みんな木をくべて煮炊きしています、貰えるアラン [木炭] の量がひどく少ないからです。少年達は木に登り、イエテケはココヤシの木の皮を持って帰ってきました。今は、前に私達によって収容所に入れられていた野菜ニップがいて、そこはここよりずっとひどかった、と主張しています。⁴⁴ほかの人たちは、彼らは1人で鯛の缶詰半分貰っていて、ドイツ野郎はワインも貰った、と言っています。本当の事を知りたいと思うけれど、それよりこのめちゃくちゃな状況から出られたらもっと良い！何もかもずっと少なくしか入ってこず、ミルクも

⁴⁴ 1941年12月8日以降、東インド諸島在住の日本人の一部がオランダ東インド政府によって抑留された。この一団の一部はその後オーストラリアに運ばれた。1942年6月と8月に、日本と連合国側との間で2回の捕虜交換が、ポルトガル領東アフリカの港町、ルレンソ・マルケ、現在のモザンビックのマプトで行われた。この時蘭領東インドから行った718人の日本人が自由の身となり、その内の一人が、この‘野菜ニップ’である。

少なくなりました。雌牛達が病気なのだそうです。男の人達がここから出なければいけなかったのは、ジャワ中部で供給できる食料が少ないからだ、人々は言ったり、推測したりしています。でもその効果はまだ見えません。みんなこの話をしています。

モードー

1944年1月29日

兵舎の間は、どこもかしこも煙でいぶっている。木炭の供給が余りに少ないので、多くの人達は木を燃やして粥を作っているのだ。盛んに薪を集めて。多くの人達や子供達の衣類は悲惨な状況で、際限の無い繕いと調整だ。古いシーツの、まだましな部分を使って私はイエレのパジャマの上着を作り、その下に履くパジャマズボン私の物を彼用に作り変えた。こうして私達は、もがきつつ進んでいく。

チャッケスーグレイン

1944年2月1日

私達はここでゆっくりと飢え死にする運命なのだろうか？ケテラメール [カッサバ粉] ももう入ってこず、砂糖も、肉も野菜も少なくなった。もしこれから1杯の紅茶やコーヒーも無くなるとしたら、ああ、可哀想な女達よ。一体どうなるのだろうか？

ブルゲル-ダウファス

1944年2月11日

又もう少しアラン「木炭」が入ってくるようになった、でも肉は殆ど無くなり、2人分で、幼児用に切った小さなかけら10個くらいだ！米はまあまあ。私は1週間に2回ケテラ [カッサバ芋] を食べており、これなら後は米でも何とかなる。ケテラは皮をむいてから一晩塩水に浸しておく。こうすると腹痛や下痢を起こさない。これは実際その通りで、私はやり始めたばかりなのだけれど、効果てきめんだ。

ブルゲル-ダウファス

1944年2月16日

あなたのために砂糖菓子を作るための十分な砂糖さえもう無いわ。⁴⁵今日の午後、雨が上がってすっきりして、私がとてもやる気になったら、多分ね。でもね、エルシェの誕生日のためにも砂糖を取っておかなければならないの。それまでにはまだ間があるけれど、これまで4日分として受け取っていた物をこれからは6日分として使わなければならない。この違いは大きくて、クッキーや砂糖菓子のために除けておくのは一苦労だ。

私は紅茶に砂糖を入れなくなった。まあ飲める物だし、子供たち用にも少し減らした。

モドー

1944年3月8日

明日のイエレの誕生日を祝うため、今日2種類の砂糖菓子を作った、ココナツの物と、グラ・ジャワ [椰子砂糖] の物だ、しかし今夜食べる物が、小さな皿に入れた薄いスープ (17グラムの米入り!) しかなかったために、その砂糖菓子はもう半分食べてしまった!

チャッケス・グレイン

1944年3月26日

今は少しましになりつつある。古いやり方を続けているべきではない、さもなければ我々はネズミのように死んでしまうだろう。1日半グラムの脂肪、20グラムの砂糖、50日に1個の卵、果物は殆ど無しで、水っぽい肉汁の中に肉が3かけら。[我々は] 馬のように働いている、おお何とひどいことだろう。全ての balan [荷物]、木などは、門の所におかれて、我々は自分たちでそれを炊事場に運ばなければならない。最初、私は乳母車で、1回にアラン [木炭] 2籠つつ運んだ、なぜなら私は医師から手で運ぶのを禁じられている。私は黒人の双子を持ったことがあるかと聞かれた、ここには警官の子を宿している女性がいるのだ。

⁴⁵ ブルゲル-ダウファス夫人の夫、ヴィム・ブルゲルは、この日が誕生日。

ファン・デル・クロフト

1944年4月1日

今日、1週間分の砂糖を貰いました。平均、1人1日20グラムです。聞くところによれば、来月から全く米を貰えなくなるそうです。今日以降、出店ももうありません。幸い、[私達は]この数日間に少し多めに物を受け取り、テンテン [ピーナツクッキー]、砂糖少し、サゴ椰子玉、あめ玉を1人5個ずつ。明日はアンドレアの誕生日よしの食べ物を、前もって作り始めるつもりです。そしたら、最後のファン・クウェーの包み [大豆粉] を空けて、プディング用にミカンの缶詰も開けます。リア・ワッシュ⁴⁶がその日は食事に来ます。

ファン・デル・クロフト

1944年4月2日

朝は寝坊しました。(本当は私達、キティーと私は6時10分過ぎに体操に行かなければいけなかったのです。) 8時半にリアとハルマをして遊びました。それから炊事場でキャベツの葉やネギの茎やらを、私達が作ろうとしている、‘ライスト・ターフル料理’ ウフン、に使う、サンバルを作るために集めました。

私達は‘ライスト・ターフル’を大いに楽しみましたが、その時知らせが来て、5時半までに卓上コンロを提出しなければならないという事です。又始まった。でも丁度この日を私達の最後のごちそうを食べる日に選んだというのはラッキーな事ではないでしょうか? この頃よくあるように、又今回もキャンプ中が大騒ぎです。誰もみんな煮炊きや焼き物を始めました。私達はそこら中でケテラ [カッサバ芋] を貰い集め、クリピック [カッサバの細切り焼き] を作り、お腹が空いた時のために仕舞っておきました。砂糖菓子も幾つか作り、[ファン] ポプタ夫人からはロールドオートの缶一杯の飴玉をもらいました。チャーハンを作り、ゼリーにコロッケも! 私達は夜になるまで、お腹がはち切れるほど食べました。リアにはコロッケを持たせて家に送りました。

ブルゲル-ダウファス

1944年4月13日

ミルクは今は温められてくる。朝と昼はその一部を使って、水を足して、粥を作る。エルス用

⁴⁶ L.H.C. ワッシュ (呼び名はリア)、1930年7月13日生まれで、ミップ・ファン・デル・クロフトの友人。リア・ワッシュは、1907年9月6日生まれのC.B. ワッシュ-ファン・ディンテルの娘。

に、今は200ccのミルクが来る、しばらくの間は100 [ccだったが] これは少な過ぎた。そして幸いなことに子供の粥用に又匙に山盛りのシロップが貰える。この新食事規則が始まったときには [匙に] 半分だった！これはほんとにひどく少なくて、だって砂糖も今は1人1日20グラムしか貰えないのだから。これは1週間で小さな蓋付き瓶1杯くらいの量で、これでは、例えば粥の中に入れてたりする砂糖は残らない。

ブルゲル-ダウファス

1944年4月27日

多くの女性達が参ってしまっている、食べ物がひどく悪い。朝はケテラパップ [カッサバ粥] とジャグン [トウモロコシ]、昼は少しのサジュール [野菜] と同様の肉、ただおいしく料理されてはいる。炊事場の女性達は最大限の努力をしているが、夜はどろどろスープで、ひどい代物だ、ペ！ ニップは砂糖、果物それに石鹸を出店に入れると約束したが何も来ていない。1週間に1度傷んだバナナ、1月に1度カテス [パパイヤ]、時々ジェルク・バリ [柑橘類] かマンギスタン [果物]。あのジャグン [トウモロコシ] だけが楽しい、子供たちは大好きだ。あなたたちは何を食べているの？ 多分私達と同じようなものでしょうね。男の体がこれで持つのかしら！

おととい、私達の小切手を提出しなければならなかった。先日、ツワン・ベサル [高官] が f. 45, 000. -、を全ての経費を賄うために、とキャンプ長にくれた。それは金庫に入っていて、誰も何に使ったら良いか分からない、馬鹿な話だ。中央炊事場が今度の月曜日から始まり、そうしたら私達の食べ物はずっと少なくなる。私は今まではいつも、午後には子供たち用のプディングを作っていた。

ファン・デル・クロフト

1944年5月4日

私達は今までに無く激しく仕事をしながら、食べる物は少ししかありません。ほんとに少ない。思い出してみれば、1日1さじの砂糖、1週間に1度バナナを1切れ。ロウソクの油脂で、硬いクッキーを作りました。お腹が空いていたからおいしかった。今週、私達は全ての領収書を提出しなければなりませんでした。

ファン・デル・クロフト

1944年5月9日

夜8時半に、長たちが警備所に呼ばれました。そこで彼女たちは、門の前に、ある金額分の荷物があるが、これは私達自身で支払わなければならない、と聞かされました。みんな憤慨し、そんなことはしないと拒否しました。ジルデルダ夫人が、よく話し合うために来て、こうして今日から新しい出店が警備所の側に開店しました。全員に、ロールドオート1缶分位の砂糖がありました。やった！ニッポンのお金では払えないけれど、おつりはニッポンのお金になります。装飾品や靴はニップが買ったがるので、そのお金で[私達は]出店用の品物を買うことができます。野菜もずっと沢山入ってくるのです。

チャックス・グレイン

1944年5月11日

最近の食事は最高だ。今は出店—私達が、本当にもうお金なんか無いのに1人f 0, 50づつ入金してできた—から、砂糖を1ポンドもらい（座りながら匙でなめてしまう）あめ玉4つ、石鹼を1かけ、たばこ二本、コーヒーに紅茶。後でもっと来る。

ファン・デル・クロフト

1944年5月14日

昨日は、秘密めかして囁かれていました。「アメリカの食料品の入った、赤十字の箱が私達用に到着している。」これは信じられないことでしたが、今日、それが開けられ、それぞれの兵舎に分けられました。キャンプ中に歓声が響きわたりました。子供達が解き放されました。彼らは狂ったように缶詰の周りを跳び回りました。私達はみんな少しずつ貰いました。私達8人用に四角なチーズ1かけ、バター、コーンビーフ、スモモを5つ、みんな4個づつの[砂糖]、パテ、クリーム[ミルク][コンデンス・ミルク]、コーヒーにチョコレート、本当に小さな1片だったけれど、とってもおいしかった。そこら中に今は満足げな顔があります。おお、[1944年5月]5日にはパンを貰いました、これを全く忘れていたわ。でも、多くの人達はそのためにお腹を壊しています。

ブルゲル-ダウファス

1944年5月16日

そして私達は今週、‘アメリカの赤十字を通じて’全てを受け取った。最高においしい物ばかり。缶入りコーンビーフにスパム [缶入り味付き豚肉]、クリーム [ミルク] [コンデンスミルク]、レバーペースト、角砂糖、缶入りバター、チーズ、粉末スープ、ココア、コーヒー等々。みんな少しずつ、びっくりするほど多くはないけれど、でもみんな同じようにおいしい。あのチーズの1片、クラフト・チーズだったわ、美味だった。それに丁度又パンを貰ったところだったのも素敵だ、これもついこの間からだ。2週間前から、私は1日2個半のパンを貰っている。それは昔と同じで、結構良いのだが、時々生焼けがある。最初の頃は本当に満足感のある物で、今ももちろんそうだ。子供達のために何時でもあげる物があるというこの感覚！あのパン、ヴィム、バターとレバーペーストを付けて！！ヴィレム、余りのおいしさのために舌まで飲み込むかと思うほどだったのよ。

缶入りバターは3人で1缶だったので、私は1缶丸ごと貰った、それはアーミー・スプレッドでチーズ味付きのバターだった、おいしい！そしてもっとニュースが有るのよヴィム、私達の所には又出店ができた。私達は1人当たりf 0, 50を支払わされた。キャンプの中は大騒ぎだったわ、だってこの民間管理の元では金銭を持つことは死刑の罰をもって禁じられているのだから！！軍部の考えは別らしく、私達は今やコーヒー、砂糖、氷砂糖 (グラ・バツ)、紅茶、たばこ、それにあめ玉を買うことができる。とてもおいしいコーヒー、これは素敵だわ、だってここで出されるコーヒーはひどい物なのだから。ここのタバコは良い物で、ジャグンの葉 [トウモロコシの葉] で巻いてある。でもヴィム、赤十字の小包の中から私達はとてもおいしいタバコ、チェスターフィールド、キャメルにオールド・ゴールドを貰った！私は50本有る！！彼らはこれを1本半セントで売って、その売り上げで炊事道具を修理した。私が今ここにこうして冷静に書いたことは、その一つ一つがキャンプを大きく揺れ動かしたことだ。このところ、喋り散らされている。

ブルゲル-ダウファス

1944年6月2日

私は未だに、自分で料理をする必要がないことをとても楽しんでいる！そして食事はまだとても良い、ただとても少なく、特にお米が少ない。果物は又結構沢山入ってきているし、1人砂糖を1ポンド余計に貰ったし、グラ・ジャワ [椰子砂糖]、石鹸、クッキー、あめ玉、その他も貰い、これは先月、f 1, 000。一に対しては受け取った物が少なすぎたからだ。そのために私達はひどい飢餓状態だったのだ。

モードー

1944年6月9日

炊事場は、最初は子供達と病人用のミルクを煮立てるだけだったのだが、今は全キャンプ用に昼食用お米（＝1人1日100グラム）を調理できるようになった。それとは別の2つの炊事場は、それ以外の食事をそれぞれ半分ずつ、全て薪で、調理する。又いわゆる特別食用炊事場といわれる小さな部屋もあり、そこではアラン [木炭] で病人用の調理が行われる。私達は現在1日200グラムのパンと、さらに野菜、ケテラ [カッサバ芋]、肉を少しと、時々果物少々を貰う。これは些少な物で、我々は常に空腹だが、しかし、苦情を言うてはいけない、なぜなら、もうこれ以上の物はないことが明らかなのだ。キャンプの外でも空腹に苦しんでいる。これに関しては確信している。それは全ての戦争のもたらす状況の1つなのだから。

引っ越し [別の兵舎への] (5月7日頃) の少し前に、私達は赤十字社の仲介でここまで送られてきたアメリカの缶詰に喜んだ。これは実はアメリカ人の捕虜用だったのだが、そういう人たちが居ないので私達の所に来たのだと、人々は主張している。私にはそうは思えないが、いずれにしても、私達はバター、チーズ、レバーペースト、ジャム、コーンビーフ、コーヒー、ミルクなどを堪能した。タバコも沢山あった。

イエレは今はたまに1本は吸っても良いことにし、私は年を取ってからコーヒーを飲むことを始め、これについてはイエレも一言有り、というのも、彼はこれまで飲んだことがなかったのだが紅茶より好きだという。我々のカカオは終わった。

ブルゲル-ダウファス

1944年6月11日

おととい、新しい人達 [セマランのカランパナス収容所からの] が自分達のバラン [荷物] を受け取った。昨日からもう物々交換が始まった！彼らはまだとても良い靴やたくさんの衣類を持っているが、皿や鍋や、砂糖が足りない。何人かの人達は石鹼も沢山持っている。私はすごい交換をした。洗濯石鹼を1対と、パルモリバ [石鹼の商標] 1つを、小さなマグカップ1杯の砂糖と交換！出店から2回砂糖を貰ったので、私は砂糖は充分ある。そして私の石鹼は終わりにかけていた。特にパルモリバには本当に嬉しい、これは気持ち良いくらい長持ちする。兵舎内では盛んに取引が行われ、素晴らしかった！エルスのために、私は靴を2足手に入れた、すごく美しいものではないけれど、ともかく。少し大き目なので、今度又雨季が来た時のためだ。マグカップ1杯のコーヒーで子供用編み上げ靴、フランネルのおむつでベルト付きの子供靴を1足。彼女は靴を二足持っているけれど、両方とも丁度良いので、きっちりし過ぎているような気がしていたのだ。こうした交換の動きが有るのは楽しい。信じられないような事が興る、例えば、グラ・ジャワ [ヤシ砂糖] 1袋と糸巻き1杯の糸、とか！靴1足とお皿1枚、煙草10

本と浴用タオル、等々だ。でも一番望まれているのは砂糖で、すぐにドレス1着と交換できる。

チャックス・グレイン

1944年6月16日

食事は変わってきて、セマランからの人に来て以来、ひどく少なくなった。私達は腹を満たすために又自分でどろどろ粥を作っている。

チャックス・グレイン

1944年6月21日

昨日、70人分の野菜が入ってきて、今日はそれで2、254人分の食事を作るという魔法のようなことが行われ、それが又おいしかった。人参とロバック [ラディッシュの一種] の葉を細かく切って、ウラブ・ウラブ [きざみ物] に、肉とネギを使ってサンバル料理に、タマネギとテペ [発酵させた大豆を固めた物] で炒め物、それぞれの量は少ないが、これをサンバル・バジャック [辛み調味料] と食べるととてもおいしい食事となり、私は毎日この全てに対する感謝を聖なる神に捧げている。今朝は又グラ・バツ [氷砂糖] 半分。空腹感に襲われた時には、この1片を口に入れることができる。私の小さなお友達のオノは、先日のババッテン [草刈り] の時、白い、乾燥しきった犬の糞ばかりを集めてきて言った“ミア、ケテラ” [ミア、カッサバ芋だよ]。ここでは食べ物が全てだ。私は今はまだ62キロ有り、私が東インドに着いたときと同じだ。ここから出るときも同じで有ればよいと思う、そうでなければ仕事をするのも楽しくないであろう。今日は私達のオランダのお金と東インドのお金⁴⁷を提出させられ、その代わりに日本のお金を受け取った。あら、どうして？

ブルゲル-ダウファス

1944年6月23日

昨日も又、全く果物はなかった、何日間も何も貰えず、土曜日に最後のジュールザック [果物] で、それは1週間前のことだ！子供達にビタミンCの錠剤を飲ませなければならないだろう。自分の内部屋に逃げ込んで、ビタミンなどに関する考えは頭に残ったままだ。食べ物、食べ

⁴⁷ オランダ政府も、蘭領東インド政府もそれぞれの通貨を発行していた。オランダのギルダーは東インドギルダーと等価。

物、話ときたら食べ物の話ばかり。あなた達も同じ？しばらくしてからこれを二人で比べてみられたらいいわね。

ファン・デル・クロフト

1944年7月21日

13袋の砂糖が入ってきました、それぞれ100kgの物で、それにコーヒー、紅茶に石鹸です。キャンプは歓声を上げ、みんな嬉しそうにしています。法王のお金で次の物が入ってきました。砂糖菓子と、兵舎毎にくじ引きで分ける、大人用のスリッパ9足ずつ、1歳から3歳児用の靴数足。

モード

1944年8月4日

炊事場では全ての鍋が徐々に漏り始め、とても困難な状況になっている。このような物資は定期的に点検し、補修しなければいけないのだが、ここではそれは無く、今や全てがすり切れ出している。これは私達自身の鍋釜、バケツや洗面器、靴や上履きも同じ事であるが。

多くの女性達は、子供達もだが、今や常に裸足で歩いている。私は、最初にカーテンとして使っていて、今はこの状況なので必要なくなったバチック染めのサロン布と交換に、イエレのズボンを手に入れることができ、本当に嬉しかった。私達の綿ネルの毛布はひどく薄くなってしまい、激しい風が吹くと、そしてそれはここアンバラワでは良くあることなのだが、そうなるとイエレは2枚毛布を掛けても夜は寒さを感じる。私は古いカーテン地2枚の間に薄いマットを縫い込み、掛け布団のような物を作ったので、とても暖かく、私の2枚の毛布の1枚をイエレに上げることができる。私のドレスは何枚も、背中の中がすり切れてしまい、そこに古いシートで当て布をして、これで今暫くは大丈夫だろう。

ブルゲル-ダウファス

1944年8月11日

ワーオ、又素敵なおことになった。今日は肉4キロと1籠半のキャベツで2250人分だ。ええ、ええ、私達はここでしっかり太らせて貰ってます。私達が今何を食べてるか知ってる？一種の茶色豆とケテラ [カッサバ芋] のスープ (ケテラは沢山入ってきて、豆はしばらく前に入荷した物を、賢くも保存してあったのだ)。このスープは12時に [飲む]。その時には我らのお米

100グラムも貰う。この中から夜用に残して置くように言われ、夜にはセルンデンが来る、これはココナッツをすり下ろし、そしてその後に焼いた物だ。これはホロホロとしておいしく、これをご飯にかけて食べる。それから私達のパンがまだあり、これは朝食と10時に数切れ食べる。これなら、まだ何とかなる。スープは又とてもおいしくなるだろう、炊事場の女性達は天才だ。今朝はジャグン粥 [トウモロコシ粥] が来るはずだったが、入ってきた薪が、ばかばかり少ないほど少なかったために予定より長くかかり、昨夜になって、これ以上やっていると痛んでしまう恐れがあったため、昨夜8時前に配給された。夜のお粥1皿はとてもおいしく、まるでバターミルクのお粥のようで、子供達も堪能して食べていた。おろしココナッツを沢山入れて、グラ・ジャワ [椰子砂糖] を混ぜて、本当においしい。でもそうになると今朝はパンで朝食をしなければならず、もったいないけれど、でもとにかく、朝に、食べられない酸っぱい粥が来るよりも、この方がいいわ。

モード

1944年8月12日

この数日、薪がホンの少ししか入ってこず、炊事場ではそれでなくても少ない食材を殆ど調理することもできない。コーヒーや紅茶用の熱湯は、この為にホンの少ししか貰えず、燃やせる物は全て使っているというのにだ。‘新しく来た’男達 [医師達] に依れば、チマヒ [収容所] の食糧供給状態はずっと潤沢だという。彼らは、ここでも自分達は、私達が受け取っている量よりも多く受け取る権利があるという意見だ。ふん、私達には彼らなんぞ必要無いわ。なぜ私達が今さら彼らを甘やかさなければならないの？彼らは婦人達が重い荷物を運んでいても、手を貸そうともしない、例えば野菜やケテラ [カッサバ芋] の入った籠や、米や砂糖の袋を炊事場に持って行くときにもだ。あんな男達は、私達には不要だ。

チャックス・グレイン

1944年8月19日

ヒッセン医師の、改善努力の約束にも関わらず、食事は惨憺たる物だ。1日1/3グラムの肉(いつも、黄金を1グラムづつ計っているように思ってしまう) 1月に1本のバナナ、野菜は殆ど無く、卵は全く入らず、計り知れないほどの量のケテラ [カッサバ芋]。やれやれ、まるでふらふらになってしまう。朝には、1週間に2度のジャグン [トウモロコシ] 粥、ココナッツも砂糖も無く、さらには1日小さなパン1つ、これには私達は大喜びなのだが。私達はもう一度全員の体重を量った。女性達が痩せていくのは驚くほどだ。まだミルクを飲んでいる子供達はまだまだだ。又収容所に知れ渡ったニュースがある。今週に第9収容所からの贈り物として、f 6

00. -ギルダーでペパーミントを受け取れるというニュースに沸いた。私達にはお金が無かったため、それを買うことはできなかった。それはバラ・テンタラ [軍部] から来たものだ。彼らは一掃大売り出しでもしているのだろうか？

ファン・デル・クロフト

1944年8月26日

今日の午後、しばらく振りで焼きそばを貰いました（スプーン2杯分）。そして砂糖24袋（だからみんなに1kgの砂糖です！）の配給券が入ってきました。歓声はなかなか止みませんでした。これで、もしあの門が開放されたら一体どうなることでしょうか？木曜日 [1944年8月31日、ウィルヘルミナ女王の誕生日] にも何かがあるに違いありません。私達は最近、食べ物のためにだけ生きています。

テ・フェルデ

1944年9月26日

この時点では砂糖が沢山あります。みんなコーヒー砂糖を作っています。お母さんは機会さえ有れば1日3回コーヒー砂糖を作っています。今は食事は殆ど充分で、これはお母さんにとってさえもです。

ブルゲル-ダウファス

1944年10月7日

それに神の御加護か、ヴィム、私達はより多くの食べ物を貰っている。毎朝ジャグン [トウモロコシ] 粥、毎朝よ！！これは大変な違いよ、大違い。それに1日置きに夜はケデレスープ [大豆のスープ] かケテラ [カッサバ芋]、殆どの夜に又何かある。パンの状況は前より良くなったことはよく分かるでしょ、ただパンは最近小さくなって、半分くらいになった。これは今や平たいケーキくらいのもので、でも味はまだ良く、今は本当に10時や、お茶の時間に食べられる。おかしい位よ、このところ私は再び十分に食べている。だって実際、お米半人前は本当にわずかな物で、子供達は2人とも半人前なのだ。1人前は小さなフィンガーボール1杯分で、その半分ときたらどれだけわずかな物か分かるでしょう。勿論子供達には何時も私の分からご飯を分けてあげる。私は何時もそんなことは感じないと思っていたけれど、今、もっと食べられるようになると、米ではなく、あのお粥とスープだけれど、やっと今までどれだけ空腹だったか

が分かる。知ってる、私は自分の意志で本当に自制しているの。パチョレン [耕し] の後以外はね、その後では本当に空腹で、見つけられる物は何でも飲み込んでしまう。私は大丈夫、ひどく痩せてはいるけれど、それは皆同じ事だし、顔色も良くて、気分もまだ良いわ。

モードー

1944年10月8日

私達は今や1日200グラムの代わりに150グラムのパンしか貰えず、でもその代償として、毎朝トウモロコシのお粥が来て（それは先ず自分たちで粉に引かなければならず、又新しい仕事ができる）、1日置きにケデル豆 [大豆] のスープ、これは小さな茶色の豆だ。だから全体で見れば食料が少し増えているが、まだ肉や野菜や果物はほんの僅かしか入らない。野菜は殆ど何も捨てない。昔はゴミになっていた物が今では食べ物になっていて、例えば人参の葉もそうだし、野菜を茹でた湯は病人や、健康な人も、好んで飲んでいる。ここには今2200人の住人が居るにも関わらず、ニッポン小父さんが私達に贈ってくれた3匹の子豚に食べさせるに充分なくずも出ないのだ！

テ・フェルデ

1944年10月23日

最新の動詞を‘どろどろする’といいます。今のところパンが来なくて、タピオカ芋の粉が配られ、笛が鳴ると‘どろどろしよう！’と言われ、[そしたら] 作った粉を入れた鍋を持って炊事場に行き、湯をかけて貰います。これが私達の夕食です。朝はアジア粥、昼はお米と野菜、夜はどろどろ。[これは] 苦々しいほど僅かです！

ブルゲル-ダウファス

1944年10月30日

今週は大ショックだった。パンが来なかったのだ！その理由は、イーストが腐ってしまい、新しいイーストが用意されるまでに数日間かかる、というもの。誰もがこれを信じているわけではなく、私達の大事なパンが貰えなくなるのではないかと、ひどく恐れている。そして最初はその代わりも全くなかった！粉はパン屋が1日ごとに持って来て、それを煮て粥にするのだけれど、これは大変なことで、というのも鍋は漏るし、火の窯は壊れているし、そこで2300人分の粥を煮るのは生易しい事ではない。

かしましく騒がれ、空腹でお腹を鳴らしたが、この2日間は大丈夫だった。夜は5時と7時、2回お粥が来て、後の分は翌朝の10時用にとって置くことができ、これでまあ結構な物となる。何て私達はお粥を食べたことか、おいしかった。少なくとも私はそう思う、私は大好きで、それはケデレ粥〔大豆粥〕だった。昨日はお米1食分と粥2食分を交換した。セマランの人達はカランパナスでこれを毎日食べていたので、このごた混ぜにげっそりしていて、交換にはとても熱心なのだ。私はたまに食べるには全然気にならず、やっと食べ続けられるのでとても嬉しかった！私は何てお腹が空いているんでしょう。そのことを考えなければ、気にもならないのだけれど、食べ続ける機会があると、底無しに食べてしまう。“どうしてそんなことが出来るの”と隣人達は言い、彼女たちが食べきれなかった粥を持って来てくれる。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1944年12月5日

食事は悪くなってきた。私達が貰える物は全て上手に料理してあるけれど、量が不十分だ。昼食には、時には3時か4時になるが、お米の食事で、180〔グラム〕を炊いた物、4歳までの子供は1/2食分、6歳までの子は3/4食だ。これは多いとは言えない。それに1さじの野菜と、ある時には肉の味がしたりしなかったりする肉汁が1さじ付く。これが私達の昼食だ。パンは今は1日置きに150グラムの配給がある。これを私達は夜に半分食べ、翌朝に少し取って置くようにする。これに今は‘どろどろ’が添えられ、これはかたく作った粥で、その上に熱い湯を1かけ、かけて貰う。

ファン・デル・クロフト

1944年12月6日

ハネケは最近ベッツ小母さんから、肝油と、食欲を増すための飲み薬を貰いました。この為に彼女は最近よく食べます。彼女はシント・ニコラス祭の贈り物も、それで沢山貰いました。読み方を習うための文字の入った箱(私から)、彼女の人形のためのケープとブラウスとおしめパンツ、それに、大きなピノキオの切り取り絵本で、彼女は大喜びでした。最初の驚きから醒めた後、彼女は、“こういうの、私達のトランクにも入っていたわよね、ママ？”と言いました。私は知らない振りをしていました。私達は缶入りミルクももらい、それは今朝すぐにみな飲んでしまいました。

最近私達は又本当に空腹に苦しんでいます。幸い昨日はパンを沢山(栄養は全然ないけれど)、炊事場で、桶1杯の砂糖とハーブを沢山入れて作った、デドゥックと言う一種のスペキュラース〔シナモン入りクッキー〕味の物を塗って食べる事が出来ました。実においしかった。

たわ。私達はこの日1人半ポンド [250グラム] の砂糖を貰い、グラ・ジャワ [椰子砂糖] も、それぞれコップ6杯分、それに砂糖菓子を4つ、配給して貰いました。今は炊事場から貰える食事は1日1回です。それは昼食です。夕方にはどろどろを作るための粉を貰います。昨日は余分にお米スープを貰いました。

テ・フェルデ

1944年12月12日

この頃は、入る薪が何時もひどく湿っていて、お米用炊事場がとても苦勞しています。昨日は炊いたお米を貰ったのはやっと日本時間7時になってからでした。これはオトコノコチャン[彼女の弟のヤン・テ・フェルデ] にとっては辛いことで、こんな丸1日、彼に何を与えたらよいのか分かりません。

ファン・デル・クロフト

1944年12月14日

私達は又とてもおいしく、でも量の少ないジョクジャ炊事場に移りました。私達は又空腹に苦しんでいます、特にお母さんは。暖かな1杯の紅茶やコーヒーさえ貰えなくなりました。あの湿った木ではどうしようもありません。

テ・フェルデ

1944年12月31日

昨日の夜遅くになって、お米お粥を貰いました。取って置いた、炊いたお米と一緒にすると結構な物です。私達は今朝は、アジア粥を食べ、今夜は茶色豆スープです。パンも又来ました。そして.... 明日用に山羊が10匹入りました！！！！

ブルゲル-ダウファス

1945年1月14日

今日は又食物を買うためのお金が集められた。幸い、今度はシステム通りに行われた。最初に払って、それからバラン [品物]。これまでは、資力に従って払う形だったのだが、これは激し

いタカリ合いになってしまった。これはまだ三回目のことなので、どの形が一番いいのか、これから分かるだろう。そして勿論、実際に何も持っていない人達もいるけれど、でも殆どの人はまだ持っている。クリスマスと大晦日から正月にかけては様々なおいしい物があり、茶色豆やデンデン [乾燥味付き肉] にカチャン [落花生] だ。これからは卵も入ってくるらしい。これが今度こそ本当ならね！

モードー

1945年1月24日

この数ヶ月の間に、動物性脂肪、タンパク質、果物など、一定の栄養素の不足のために次々と人が死んでいる。肉はひどく高価なために、殆ど何も入ってこない。骨1キロ、肉など殆ど付いていない物がf 1, 70する。これでは勿論、1日1人17セントでは買えはしない。この金額で、収容の初期には充分だったのだが、今は全ての食料品が最低6倍はするようになり(つまり、ニッポンの金はオランダの金銭の1/6しか価値が無いのにも関わらず、同等の価値があることにさせられている)、この金額ではとても足りなくなってしまった。為替レートの差は、戦況中の日本の立場を反映しており、それなりに喜ばしいことなのだが、我々はこの大きな被害を被っている。今や時にはそれほど痩せてない犬が捕らえられ、殺されている、ブルブル！我々の豚も小さく痩せたままで、あの哀れな動物も飢えているのだ。そして炊事場では、穴のあいた鍋や、湿った薪や、調理器具の欠乏、等々と格闘している。

テ・フェルデ

1945年2月1日

実際にお米を貰いませんでした。でも幸いにもケテラ [カッサバ芋] が充分にあり、それに今日の午後はホツポット [オランダ料理] を沢山食べました。その先は、お粥、お粥、それに又お粥です。おとといは、イケがカワット [鉄条網] 越しに私のドレスと14個の卵とを交換するのに成功し、これは私達、本当に堪能しました！とってもおいしかった！そのうち4つは人にあげて、残りはみんなお腹一杯に食べました。

ファン・デル・クロフト

1945年2月3日

31日⁴⁸水曜日にはみんなオレンジ色の物を着て、午後には盛んにカワット [禁制取り引き] し、‘カインス’ [布] と引き替えに数百の卵が入ってきました。丁度イエテケは卵を沢山持った男が来るのを見つけました。イエットは自分の古いドレスを持っていたのですが、その時、ニップが鞭を持ってやってくる、と誰かが叫びました。一瞬にして....誰もいなくなりました。あのたくさんの卵をまだ1つも手に入れられませんでした。でもよかった！その時呼び出しがあったのです。“カワット [禁制取引] をした者は全員警備所に来い”

誰も出頭しませんでした。そしたらニップは2日間食事無し、と脅しました。確かに、2日間米は入ってきませんでした。木曜日には炊いたお米の食事、朝はアジア粥、夜もアジア粥でした。野菜はそれでも入ってきました。そして昨日もです。私達は全然飢えに苦しみませんでした。イエテケは炊事場において、彼女の食事を食べ切れませんでした。それに私達は若いパイヤの実を蒸しました。みんな最近、薪で火を焚いています。1日3回お粥が来ます。みんなお粥のために、頭をふらふらさせ、膨らんだお腹に腫れた足で歩き回っています。私達がアメリカのクリスマス用小包を受け取れるという話がありますが、それならずと前に貰っていたはずなのですが。

テ・フェルデ

1945年2月5日

昨日、第六兵舎から、1人に付き鴨の卵半分を配り始めました。公式には、この卵と肉は昨日中国人から提供された物だという知らせでした。私達がそれを私達自身のお金で買わないかということで、そしたら彼はより頻繁に手に入れるようにするそうです。今はカワッテン [禁制取引] はリーダー達から厳しく阻止されていて、というのもカワット [鉄条網] 越しにご婦人達があまり高価に買っていたら、その中国人は門のところで売り渡す用の品物を安く仕入れることが出来なくなるからです。これについてはリーダー達が正しいと思います。卵は病人にとってとても貴重な物で、いたる所で栄養不良性浮腫がはびこり出しているのですから。すでに数人の死者が出ていて、重病人が大勢まだ寝ています。

⁴⁸ 1月31日は、ベアトリクス王女の誕生日 [1938年]。

ファン・デル・クロフト

1945年2月7日

午後に又カワット小騒動 [禁制取引小騒動] がありました。ティーメンス夫人、ヘティー・デ・フロートとテムス夫人が、捕らえられました。夜10時まで、彼女たちは警備所に居なければなりません。今はよく卵が入ってきます。私達は最後の最後に順番が来ます。昨日100kgの、骨のない肉が入りました (自分たちで払って)。とても多くが病棟の方に行き、私達には余り差が見られませんでした。でも味は、昔の脂肪の沢山入った肉汁の味がとても良くしました。凝固した脂肪は、将来オムレツを焼く時用に、すくい取っておきました。今日は卵10個しか入りませんでした。私達はいつもツイていません。

チャックス・グレイン

1945年2月8日

朝には私達は‘スルンス’を貰う、これは粉に水を入れて煮固ませた物で、目止めパテの臭いがする。昼にはお米少しと野菜少々、それに水の中に所々肉の繊維が浮いている物。1500人に28キロの肉だ。夜は‘スルンス’に野菜かケテラ [カッサバ芋] を混ぜた物で、その後又‘スルンス’粥が来ればみんな大喜びだ。

食料が有ると、薪が無い。薪が有ると食料が無い。今のところはその内の1つも無い。私達は今夜のスープを煮ることが出来るように、いたるところで可能な限り兵舎のドアや窓枠をはずしている。明日用の野菜はまだ全然入っていない。茶色豆が1袋、全キャンプ用にあるだけだ。人々は空腹と悲しみでめまいを起こしている。栄養不良性浮腫、腫れた足や紅斑、身体の一部をむくませた人たちが大分居る。

テ・フェルデ

1945年2月12日

結構良く卵が入ります。私達はもう1回 [卵] 半分貰いました。その度になんと嬉しいことでしょう。さらには時々、キャンプ金庫からの資金で、自分たちで買った肉も貰えます。浮腫病患者にはとても良いことで、この人達はタンパク質を沢山摂らなければいけないのですから。私達はもう、1度カタツムリさえ食べました。

沸騰したお湯に入れて、殻が簡単に取れるようになるまで茹で、それからきれいにし、細切れにして、油と調味料で炒めます。これがとてもおいしいのです！それにここには大量のタンパク質が含まれているはずですが、でも余り沢山食べてはいけません、そうすると腸に何か

興るらしいです。私達は最近、何でも料理してしまいます。何もないところからお母さんは何かを創り出します。そして有る物何でも全ては燃料として使われます。実は火を起こしてはいけないのだけれど、でもみんなやっているのだから私達もしないという方はありません。

テ・フェルデ

1945年2月14日

お母さんは朝早くから夜遅くまで、熱心に料理方法を書き写しています。そうしているとお母さんの空腹が忘れられるようです。食事は最近又ひどく少なくなりました。あのアジアスープは全然栄養がありません。それに午後の食事は、あの湿った薪のお陰でこの頃とても遅くなることが多いのです。

ブルゲル-ダウファス

1945年2月16日

しょっちゅう卵が入る、先回は全員に鴨の卵半分が渡った。わーお、何というお祭りだ！毎日病人に届けられ、その数はとても多い。そのために兵舎内の配給はそれほど迅速には進まないが、しかしそれでもゆっくりと先に進む。しばらくの間、特に卵に関して、盛んにカワット〔禁制取引〕が行われていた。それは今は厳しく禁止された。始めは誰もそれを気に掛けなかったが、幾つかの出来事の後、我々はこれを止めた方がよいのだということが分かった。私は最近お粥と一緒に煮ている、1500人用の粥を煮るのは重労働だ！でも楽しい仕事だ。夕方に調理する。そして薪が良ければ、9時前に終わる。しかし最近薪がびしょ濡れの為、しょっちゅう真夜中になってしまう。

テ・フェルデ

1945年2月18日

昼御飯を食べる頃になるとみんなベッドにくずおれています。例えば今日は、日本時間8時にお粥を少し食べただけで、昼食はやっと日本時間3時半になってからでした。食事がこんなに遅いと本当に気持ちが悪く、力が抜けてしまいます。そして今夜もきっと遅くなるでしょう。最近夜の時間がありません。食事が終わったら、もうすぐベッドに行かなければなりません。本当に嫌な状況になってきます。それに食事を待っていると、とてもエネルギーを消耗します。今日、〔私達は〕又卵半分貰いましたが、それは鶏の卵でした。〔これには〕抗議の声が起こり、

それは勿論鴨の卵より小さいからです。私達は明日、もう4分の1貰います。これでも喜ばないわけには行かないでしょう。

ファン・デル・クロフト

1945年2月19日

おいしいデンデン [乾燥味付き肉] を沢山。ベッツ小母さんはアジア粉とハーブとグダ・ジャワ [椰子砂糖] で湯煎ケーキを作らせました。味見しました。おいしい！マミーは [ファン] ポプタ夫人と一緒にパパの為のワイシャツの裁断を習っています。もう1週間、砂糖もコーヒーも貰っていません。1日置きにパンが入ります。私達の食事は遅くなっています。量が少なく、その上湿った薪でどうしようもありません。ドア、トイレのや浴室の、それに仕切り壁など、いたるところでみな家財を壊しています。私達の熟していないパイヤは柔らかく蒸して、カタツムリ (瑪瑙カタツムリ) も私達は料理しています。ハネケやその他の大勢の子供達が百日咳にかかっています。

ファン・デル・クロフト

1945年2月23日

生焼けのパンが入りました、でも、それでもパンです！1人につき4つの鳥クッキーもです。これはご馳走です。4人の少年達が毎日来て、薪を割り、古い木を伐採しています。キティーとアンドレアは外でバッテン [草刈り] をして、57匹のカタツムリとケテラ [カッサバ芋] の葉を持って帰ってきました。私はカタツムリを殻ごと茹でた後、きれいに下ごしらえしなければなりません。興味深い仕事。私達はピット小母さんと分け合い、クリグネット夫人にも少し、ベッツ小母さんにも少し、そしてホーツン [夫人] やファン・デン・ドップ [夫人] にもです。それはおいしい物でした。少し硬くて、腎臓みたいに見えますが。あちらこちらで、‘店’が出来始めています。服や道具の、無くても構わない物を彼女たちはかなり高い値段 (オランダギルダー) で売っています。私の体重を量ったら48kgでした。[私は今] 18歳半、[私の] ウエストは62cm、背は1.68m。

チャックス・グレイン

1945年2月25日

ブルヘルハウト夫人の誕生日だ。それを祝して、炊事場から、私達があげた生パイヤで作っ

た辛み料理とキャベツや人参の辛み料理を1つずつ、貰った。私達はガツガツ食べた。私達の1食分のお米を添えて暖めて、そして100回もその良い香りを嗅いで。これから私達はまだ今夜のスープがある、ついでに。私達はまるで動物のようにそれを食べてしまわなければならなかった、もう誰も、他の人に余分が有ることを許そうとはしないのだ。これから数日後にはもうどうしたら良いのか、実際分からない。全てのドアや窓枠はもう燃やしてしまった。これからは私達の天井を取り去り、そのためにひどい雨漏りがするようになるだろうし、その又後は箆箆や椅子だ。3,011人の人達のために毎日の食事を調理するには要る物があるのだ。パンはもう入ってこない。それは互いにぶつけて殺し合うことが出来るほど硬い物だった。それでもなるべく早く、また入って来て欲しいと思う。

モドー

1945年2月27日

この数週間の間にはここではいろいろな‘店’が開店し、そこでは様々な品物、多くは衣類を、委託販売する。私はすでに15ギルダーで売ったので今は又お金が少しある。栄養不良性浮腫が広まっているので、人々は戦々恐々としている。炊事場では十分な湯を供給できないので、数人の優先権のある人達だけしか毎日1杯の紅茶やコーヒーを飲めず、そのために婦人方は又自分たちで火を焚き始めた。そして今ではそこで他の物も煮炊きされ、例えばカタツムリ、カエルや盗んだ野菜！パン屋にも薪が無いので、パンは殆ど入らない。時に供給されるパンは、その粉が主にケテラ [カッサバ芋] 粉で、イーストが入っていないため、質はひどく悪い。パンと言うよりゴムのようだ。パン屋がパンを焼けないときは、我々に粉を送ってくるが、炊事場でも薪が無いために粥を煮ることが出来ない。悪循環だ！暫く経つ内に、キャンプ内の木製品で、無くても何とかなるかも知れないと思われるような物は全て壊され、燃やされた。これから一体どうなるのだろうか。

テ・フェルデ

1945年3月1日

[お母さんの誕生日は] 大成功でした！昨日はお母さんは十分な思いをしました！やったわ！私は固ゆでや、柔らか粥でのペウク [残り物] のお米を貰うのを昨日まで延ばすことが出来、イケは昨日米用炊事場係で、バケツからランタン [小鍋] 3/4 分の柔らかなご飯をこそぎ落としてくれることが出来ました。全部集めると大変な物でした。私はパンも取ってあり、こうして私達は昨日存分に食べ物がありました。

朝食はいつも通り [でした]。11時においしいサンドイッチを何枚か。1時には、

固ゆでお米全部にカレー粉を混ぜたチャーハン、私達の、前回挽いたカチャン・イジュ [小さな、緑の豆] のお粥、ロバック [ラディッシュの一種] の炒め物に、サゴ椰子でんぷんのプディング、そしてコーヒー砂糖のデザート。4時にはサンドイッチ1セット、そして6時には柔らかお米全部と昨日の昼の野菜、それに肉汁とケテラ [カッサバ芋] で、私はおいしいすりつぶし (焼き上げて) を作りました。さらに昨日の夜にはデーさん達が缶入りミルクを持って来て、それでとてもおいしいコーヒーを、焼いたアジアボールにグラ・ジャワ [椰子砂糖] シロップをかけた物と一緒に飲みました。

このアジアボールは、ついですがとてもおいしくて、でもパンの代わりに貰うのでとても量が少ないのです。次にはパンが来るのですが、それは1日置きで、パンの来ない日にはアジアボールが来ます。お母さんは贈り物に大喜びでした。

1. 4枚のおむつを縫い合わせたテーブルクロス (未完成)
2. それに合わせた紅茶ポット保温帽 (未完成)
3. それに合わせた食器棚用敷き布 (未完成)
4. かぎ針編みの白い小クロス
5. 砂糖菓子入り、飾り付きの蓋付き瓶
6. それに合わせた、髪留めを入れる小箱
7. イケが作った敷物
8. カレー粉 (交換することが出来た)

それにまだ、ハンカチ2枚とかカレーとかの、他の人達からの物が幾つか有りました。

ブルゲル-ダウファス

1945年3月9日

ここには今や様々な小店があって、とても楽しい。1人の婦人が始めたら、たちまち雨後の竹の子のように出てきた。今はお金を支払っているが、時に物々交換もある。

私達はニュースは全然、何も聞けないが、食事はまあまあいける。いつもカチャン・イジュ [小さな緑色の豆] か茶色豆のスープと1日置きに肉を沢山。パンは時々来るが、その粉を今ではボールにまとめ、茹でて配られ、それを私達が自分で薄切りにして焼いたり炒めたりして食べる。とってもおいしい、パンよりずーっとおいしいのよ、わたしは堪能してしている！グラ・ジャワ [椰子砂糖] のシロップを上かけると、ポッフエルチェ [ミニパンケーキ] みたい。子供達がほおぼっているところを見せたかったわ。あの薪は大変なスサー [代物] だ。みんなびしょ濡れなので、私達の昼食はやっと4時近くに来る。でもお米はいつも時間通りに出来るので、私達は12時にそれを砂糖と一緒に食べ、4時にはいつも殆どケテラ [カッサバ

芋] が来る。そうするとお米は無くても大したことはない。今日は焼きそばを作ろう。ボールを薄切りにし、それを又とても細く長く切って、中華鍋で、肉汁と肉と野菜を入れて暫く炒める。これはとてもおいしいし、いつもと又ちょっと違う物だ。

チャックス・グレイン

1945年3月10日

ああ、私の愛する人達、私達には結局何が起こるのだろうか。私達はすでにゴミ箱をあさっている。もうカタツムリも食べ、食事が終われば次の食事をあてにして生きている。もし私達が自分たちで支払っていなければ、私達はとっくにもっと少人数になっていただろう。今又お金が必要だ。人々は何も持っておらず、配給の間違いにも怒りっぽくなる。そしてもっとひどいこともある。死亡通知リストが来たところだ、悲痛なことだ。31歳の女性が栄養不良性浮腫で亡くなった、こういう嫌な話ばかり聞く。わたしの手は又全くひどくなり、神経も同様だ。売店が、雨後のタケノコのように出てきている。ひどく高い。ばかばかしいほどだ。サンライト・石鹸が1つ5ギルダーか6ギルダーする。衣類、大型タオル、ハンカチ、嗜好品等。気分が悪くなる。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年3月13日

先回 [1945年2月24日] とこの日の間には特記するようなことは興らなかった。ただ粥が廃止され、今は兵舎で粉が配給される。それを私達で団子に丸めて炊事場に持って行く。そこで茹でられ、それぞれが皿に暖かなだんご（目止め用パテのよう）を受け取る。またもやひどく疲れる仕事で、粘つく粉の量たるや大変な物だ！

テ・フェルデ

1945年3月16日

ヘンクの誕生日。出来る限り楽しい日にしたけれど、でもね、特別な物はもう余りありません。幸い、今は食べ物が少し多くなっています。当分パンは無いけれど、その代わりにジャグン [トウモロコシ] とケデレ [大豆] です。あのアジア粥も幸いすぐお終いになりました。朝食は今ジャグン粒が2日、ケデレが1日、昼はお米とジャグンの混ぜ合わせ、でも通常の量なのでお米は取って置いて、それで夜も又半食分のジャグンと一緒に貰えます。残念なことに私はジ

ジャグンを食べるとお腹がひどい引きつけを起こしますが、でもそのうち慣れるでしょう。これでお腹がたっぷり一杯になる、これが今のところ最も重要なことです。私達は先ず始めの1週間はこのように貰います。その後のことは又後のことです。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年3月28日

私達の‘お団子’は既にもう終わり、今は‘ジャグン [トウモロコシ] 粒’を貰っている。

ブルゲル-ダウファス

1945年4月2日

人は私のことを最近とても調子が良さそうに見えると言う。これは今、私が自分の分をより多く食べているからだと思う。今エルスは3/4もらい、これで彼女は充分なので私はマリアンに少し足してあげればよいだけだ。彼女はまだ1/2食だが、今は3人分別々によそって貰うので、特に良い配膳係に当たれば半分は3/4に、そして3/4は殆ど1食分になる。この違いが私に現れているのだ。ここではこんな小さな事が、決定的な差になる、それが私にはよく分かる。お米もそうで、私は今エルスには彼女の実際の割り当て分を、そしてマリアンには私の分から1さじ、彼女の半食分に加えてやり、これなら私は毎日殆ど1食分全部を食べられる(約240グラム)。今年は3人で2食分、別々によそって貰えなくて大変だった！この別々によそうのはつい最近許されるようになり、その違うことと言ったら！

ブルゲル-ダウファス

1945年4月3日

今朝はクッキーが、本当に小さくて馬鹿高い、1つ5、6セントの物が入ってきた。馬鹿げているが、それでも勿論買った。さらにデンデン [乾燥味付き肉] を、うーんおいしい、1人45グラムだ。これは支払う必要はなく、すぐに配り終えてしまった。これは炊事場で調理中に、誰かさん達の懐中にかなり消えてしまったからだ。ふん、全くずいぶんな量を貰いましたわ。炊事場からこんなに貰ったことは今まで無かったこと。

私の誕生日のことを全然書いてなかったよね、それはとても楽しかったわ。素晴らしいプレゼントよヴィム、アドリーから、リンブルグ [オランダの州] の紋章の付いた銀のティースプーン、ヘルからは可愛い黄色の耳飾り、手製のツーツップ [襟高のブラウス]、髪覆い、

サテンの針山、花を沢山と、タバコを16本！！この最後の、すごい贈り物で、タバコ1本最近はお25するのだ。この間10本入りの箱をリクス[f2.50]で買う機会があったのだけれど、もったいないから買わないでおいたら今こんなに沢山貰えた！私はとてもおいしいコーヒー砂糖とプディングを作った。幸運にもその時にはまだ砂糖があった！今はグラ・ジャワは有るけれど、それももう終わりかけている。私はもう殆ど何処にも砂糖は入れないし、子供達にもほんのたまにお菓子として上げるだけだ。

飲み物は悲惨な状態だ。少なく、悪質な薪のお陰で、この数週間、コーヒーや紅茶用の湯は炊事場からもらえない。自分で何とかしなければならぬ。勿論いたるところで火を焚いている。薪にするため、テーブルや椅子を叩き崩している。私達は子供用ベッドを燃やしてしまった。これは長持ちした。しかし突然ニップが怒りだし、全ての卓上コンロを盗っていった、火を焚くのは厳重に禁止だ。今は時々、炊事場からなにがしかが来る、大体1日コップ1杯で、恐ろしいほど少ない。

幸いマリアンはまだミルクが貰える。彼女は砂糖抜き紅茶は嫌いなので、水に紅茶を一差し混ぜた物を上げる。ここ暫くはパンがなかったが、でも今は1日置きに、続く限り、入ってくる。最近ジャグン[トウモロコシ]が沢山来る、しょっちゅうカチャン・イジュースープ[小さな緑の豆のスープ]に時々あの卵、この面では現在私達はましな状態だといえると思う。しかし、砂糖、ああ、砂糖は！

ブルゲル-ダウファス

1945年4月11日

砂糖は又山のようにある。砂糖の配給と、特別配給、この後の方は1人1.1/2ポンド[750g]だ。通常配給は1人分小マグカップ1杯、これで10日分だ！そして明日は、ヴィムピエ、明日には又赤十字の小包が貰えるのよ(もし本当ならね)。もう入って来ているのだけれど、何人かの高官方が検閲してからでないと分配されない、そしてそれは明日行われる予定だ。それはジュネーブ、アフリカ、アメリカ、そしてオーストラリア[からの物]だ。勿論、キャンプ中が興奮している。その他には、私達は又金銭差し出し、今回は1人f3.-だ。

たくさん話し合いと文句が言われたが、でもどうしろと言うの？ここを出たときのためにお金を貯めておいて、その間に浮腫病になるか、あるいはキャンプのために、手に入れられる物は何でも買って置くか、たとえそれが間違いじみた値段だとしても。私は後者を取る、そして最終的には皆そうなのだ。昨日はジルゲルダ夫人は卵、グダ・ジャワ[椰子砂糖]、肉、カチャン・イジュースープ[小さな緑の豆]を、キャンプがお金を差し出せば、買うことが出来た。考えてもごらん、これをまた持って帰らせるなんて！！！！幸いそんなことはまだ必要でなく、私達はまだ生きていける。あなただって生きていくのに必要な物にお金を使い、ここを出たときに何をか手に入れるために取って置くなんて事はしないでしょ？出来たら私だって少しは

残しておきたい、でも集金がある度に、最後の1セントまで払うわ。物を売ることもここではしょっちゅう行われる、キャンプ内でお金を移動させる、とても良い方法だ。

テ・フェルデ

1945年4月19日

入ってくる食料が余りに少ないので、私達自身のお金で買った1,200kgのケテラ [カッサバ芋] が入荷しました。これはやはり悲しいことです。このまま行ったら、もうすぐ、私達は私達の野菜にもお金を払わなければならないでしょう。そしてその度に私達は何かを買うためのお金を提出しなければなりません。しかも‘私達用’には、品物はひどく高いのです。例えば、卵1つの‘値段’は、f 0.45です。恥知らずな値段です。ヤップは勿論キャンプから出来るだけ沢山のお金を吐き出させたいのです。それに薪も本当に絶望的です。

チャックス・グレイン

1945年4月20日

人々、特に女性と子供達が困窮している！“どの様にしてここを生き延びるか”が緊急な問題だ。野菜は殆ど無く、非常識に高い。鴨の卵1つ f 0.40、デнден [乾燥味付き肉] 1kg で f 7.50、カチャン・イジュー [小さな緑の豆] 1キロで f 2.40、グラ・ジャワ [椰子砂糖] 1キロ f 1.60、バナナ 1kg f 0.55、ココナッツ 1つ約 f 1.、骨も内臓も付いた肉が 1kg f 4.、。

食費は1日 f 0.15で、それに100グラムのパディ [米] と10グラムのケテラ [カッサバ芋] かトウモロコシが朝のお粥用だ。上記の物は全て私達自身で支払うのだ。でなければそれさえも手に入らない。今はキャンプ長のジルデルダ夫人は、中国人が提供する物は何でも買ってしまふ。先日は1つ4.6.9セントするクッキーだった、まずい現地のクウェー・ブールン [鳥クッキー] だ。今は私達は銀行口座からお金を降ろしても良くなり、本当だと良いのだが、そしてこれで暫く何とかなるだろう。これまでに私達は最後の1セントまで犠牲にしてきた、豆やカチャン・イジューを手に入れられるかどうに私達の存続が掛かっているのだ。

ファン・デル・クロフト

1945年4月29日

今週は私達8人用に16個の卵が2回来ましたが、2回とも自分たちで半額支払わなければならず、全部でf 16,-で、グラ・ジャワ [椰子砂糖] も買い、小さな固まりでf 0,50でした。これまでに初めて興ったことは、昨日バターを貰ったことです。

ファン・デル・クロフト

1945年5月5日

昨日の午後は又哀れでした。野菜と水のスープだけ。そして数時間後にお米が来て、それを私達はサンバルソースだけでかき込みました。ハネケでさえおいしいと言いました。おとといは、又みんなに鴨の卵が来ました。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年5月16日

[赤十字の] 小包の中から、警備所に取りに行った物：ジャム、バターそれに子供達に‘ペウク’ [残り物] のチューインガムと角砂糖。ほらほら、あの子供達、何て嬉しそうな顔でしょう！涙がにじんできてしまう！

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年5月20日

パテと鮭と、5歳以下の子供用にもう1度バターを少し受け取った。この全てがスプーンで計って分けられた。これは大変手間のかかる仕事で、くたくたになる、特に全員が自分の分をきっちり要求するからだ。彼女たちは配分の時、上方に立ち、少ないことが絶対にないように注視している。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年5月22日

ベーコンと、トマトジュースと2種類のジャムと、とてもおいしいオールドチーズを受け取った。そして今では全てが終わったようで、私達はあのおいしい物を楽しんだ。気分の良い1週間だった。

チャックス・グレイン

1945年5月25日

ああ、親愛なる人達、私達はひどく苦勞している。今までこれほど食べ物少なく、そしてこれほど重労働をしたことはないと思う。ここには又600人の人が入所し、そのため、寝場所を大作業で作らなければならなかった。若い娘達は馬のように働いている。私達は自分たちの薪を自分で切らなければならなかった。木は1本1本切り倒されていく。散々意地悪をされた後で、やっとアメリカの小包を受け取った。空の缶は1時間以内に警備所に戻さなければならなかった。こうして私達は毎日おいしいおやつを食べた。それは皆それぞれにおいしかったが、しかしそれも既に終わったのだ。これから先、どんな楽しいことが興るのか、どれだけ早く来るのか、知りたい物だ。過去の記憶だけに頼って生きるのは難しい。

モドー

1945年5月29日

赤十字社の小包は、やっと[1945年]5月13日に、‘ストレープン’全員が、1時間に渡って日なたに立ち、必要な演説を聞かされた後、高位の殿方によって開陳された。この時、アメリカからジャワに小包を運ぶために通行許可を貰った船は、帰路に撃沈されたのだから、今、私達がこの小包をそれでも受け取ることが出来ることをしっかり感謝しなければならない、といわれた。私はすぐ、それが帰路であったことは私達にとって幸運だった、と思ったのだが、翌日、彼らが私達に、この、私達の連合仲間の悪行を知ってどう思うかを書き記せと要求されて、この考えは引っ込めておくことにした！思考を巡らすのは自由自在、強制収容所の中でさえ！

演説の後に、そしてそれに続く、我々からの感謝の意表名の後に、兵舎リーダー達は前に呼ばれ、数人のニップが監視する中で、それぞれの種類（アメリカ、オーストラリア、南アフリカ、スイスからの小包があった）1箱づつを、そしてその中から種類毎に1つの缶、あるいは紙箱を、中身の点検という名の元を開けるようにと言われたが、しかし我々が開けてい

る間は、紳士方の1人が熱心にフィルムを撮っていた。

この‘儀式’が終わった後、私達が指をなめたい衝動を抑えるのに苦労していると、私達は又屋内に返され、全ての小包は又グダン〔貯蔵納屋〕に戻されて、配給は明日になってからだというのだ。それでは私達は空腹にお腹を鳴らして歩いていかなければならない！嫌なのは、全ての空き箱や空の缶はすぐ又提出しなければならず、そのため例えば、2箱のタバコの代わりに40本のバラを受け取ることになり、私達は全てを食べ続けなければいけないことだ。このような缶は、一度開けたら中身を保存しておくことは出来ないのだから。缶をコップ代わりに使うことを期待していた人も、がっかりすることになる。

この善意の贈り物の配分に約1週間かかり、その週には‘偶然’いつもより又ずっと少ない食物しか入らず、結局我々は何も余分に貰ったわけではなくなる。こうして我々は例えばその週にはパンは貰えず、そのためにバターやチーズ、レバーペースト、ジャムその他のおいしい物をそのまま缶から食べてしまわなければならず、そして翌週には我々のパンを付ける物も無くそのまま食べなければならぬ。ええ、殴られることは多くはありません、でも嫌がらせは...！いえいえ、それは偶然です、パン屋に薪が無かったのです！特別に、ハンチョウ〔兵舎リーダー〕達は、余っていた紳士用靴下1足と、ハンケチを貰った。私は鮭缶か粉末ミルクの方が良かったわ！

モードー

1945年6月7日

アールの誕生日！先回は、兵舎毎に順番に、フライパンに一定量の湯を入れて貰うために炊事場に行く‘どろどろ’の話を書いたので、私はここで後2つの収容所料理を、忘却の縁から救っておこうと思う。それはコーヒー砂糖とケデレ〔大豆〕砂糖だ。

まず最初の物は、収容所独特の物ではなく、昔から作られ、親しまれていた物だ。抽出したコーヒーを泡立て器でかき混ぜ、少しずつ砂糖を加えて、しっかりしたクリーム状になるまで泡立てる。とてもおいしいが、砂糖が沢山要る、少なくとも私達の最近の基準で言えば。何人かの‘お金持ち’は誕生日にはこれでもてなしをするが、その際の客は、砂糖やコーヒーを数さじ持って行って協力することもある！

ケデレ砂糖も同様にして作るが、抽出したコーヒーの代わりに大豆の煮汁で作る。こちらは砂糖は少なく済み、大豆の煮汁を先ず少々酸っぱくなるまで置いておくと、早くできて、バターミルクのような味になる。砂糖以外に栄養は無いが、胃を刺すような飢えをしばらく癒してくれる。そしてそれは大変価値のあることなのだ。

ブルゲル-ダウファス

1945年6月9日

さらに、私達は又飢えて参っている。パンはもう2日間入って来ず、野菜ももう殆ど無い。しかし、今日又パンが来た、万歳！！それに私達の椅子も提出しなければならず、これは燃料として薪になった。カッシアン [残念]、今私達は借りた本箱に小マットレスやクッションを置いて座り、これでも充分だ。マリアンの子供椅子は持っていることが許された、良かった。私達は今度はテーブルの番だと思っている。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年6月10日

大したことは興らず、ただ激しく仕事をしただけだ。今日は燃料として全ての椅子が提出させられた。それは悲痛な光景だ。寝ている病人でさえ、椅子は差し出さなければならなかった。これには抗議書が作られ、夜8時になって、医師の診断書により椅子を持っているべきとされた女性は又取りに来るようと言われた。椅子は全て炊事場の後ろに積み上げられていた。その中から自分の椅子を探し出せと！病院では外に座る事のできる患者のために椅子が5脚保持された。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年6月28日

白砂糖が入荷！！女性達は興奮のために気が狂いそうになっていて、又グラ・ジャワ [椰子砂糖] に魚まで！何が起きているのか全然分からない。

ファン・デル・クロフト

1945年6月29日

私達は1週間前に食物を多くするようという嘆願書を提出しました。本当に、効き目が少しあったのです。まず最初にタフー [豆腐]、テンペ [大豆を発酵させて固めた物] それに魚が入荷しました。ソースを作るのにやっとの量でした。こうして全員がその味を楽しめます。それからグラ・ジャワ [椰子砂糖] が350kg、その後700 [キロ] くらい、そして昨日は1000kgのグラ・ジャワです。2日前にも500グラムの砂糖 (茶色っぽい) を貰いました。そ

してみんなが驚いたことに昨日パンが入りました。昨日はパンの日ではなかったのですが、でも今朝はケデレ [大豆] がお終いだったのです。

ファン・デル・クロフト

1945年7月3日

ああ、あの食事！今月も毎日どろどろです。全ての [追加の] 1/4 は廃止され、炊事係の女性など、重労働の人達だけが、まだ追加の 1/4 食を貰えます。駅から全てを引きずってこななければならない女の子達 (オポチミスト [荷運び係]) は角砂糖を数個貰いました。幸い茶色豆が5袋入り、又グラ・ジャワ [椰子砂糖] もです。これが続くことを祈ります。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年7月7日

キャンプ内に私達で世話をすることになっている豚を飼っているが、今は長い間肉が入荷しないのでそのうち1頭を屠殺する申請を出し、幸い許可された。そして今日は1頭が処理された。今朝6時に医師が炊事場長に補佐されて [屠殺を] 始めた。

ブルゲル-ダウファス

1945年7月8日

テーブルはまだ有るけれど、椅子だけが消えた！！最大の悲劇だが本当だ。おそらくこれは、自分で椅子を持っておらず、人から買おうともしなかった、ソロから来た通訳のお陰だ。日曜朝に全てを提出しなければならなかった。みんな金槌や鋸を手にして、ベンチに改造しようとし、病棟には突然回復期の患者用の椅子が潤沢に供給された。木製の椅子は燃やされた。私達はもう1度それで粥を煮たが、殆どキパッセン [煽り立てる] の必要はなかった。籐の椅子も一部はアヒル小屋の囲いに使われ、それ以外は燃料になった。その時には薪がひどく少なかったもので、これは必要を満たすことにはなった。

チャック・グレイン

1945年7月8日

昨日卵を1つ貰った、お祭りだ。あの日曜日、私達は豚を1頭屠殺する事が出来、それは約4000人の人達に分けられ、最高部位は浮腫患者の所に行った。それは全体で69キロの重さだった。それでも何人かは肉汁中の挽肉少々に胸を悪くしていた。いずれにしろ、我々はばたばたと生きていく。フシンバンの仕事〔夜警係〕は強化され、これは盗難が増えたためで、食べ物はどんどん少なくなっていく。私はこれについて語り合える日が来ることを祈っている。私達は衣服やお祭りのことは全く考えず、食物のことばかりだ。食べ物、山のような卵にコーヒーにビフテキ。ああ、私はそれをいつもどれだけ楽しんでいたことか、そしてこれからは二重に評価することだろう。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年7月8日

豚肉ソースでおいしい食事。私達がそれをどれだけ楽しんだことか。我々の昼食、つまりご飯に今はソースが付き、数日はそうで、これが唯一の、本当の食事だ。他の食事は‘どろどろ’で構成され、これは固めの粥だ。

ブルゲル-ダウファス

1945年7月28日

トマトの時期が又来て良かった。私は何株も持っている。それはきれいに成長して、何本かには、結構沢山実が生っている。私のカテスの木〔パパイヤの木〕も上出来だ。私は5つもぎ、2つは盗まれた。まだ青い実は日陰に置いておく。すると14日くらいで完熟する、うーん、おいしい。

ブルゲル-ダウファス

1945年8月1日

また新支払い規則。1人1月f10、一すると1月に9回、カチャン・トロ〔豆の一種〕、卵、グラ・ジャワ〔椰子砂糖〕、1週間に500グラムの砂糖、1月に2回塩漬けの魚が貰える。さらにジャグン〔トウモロコシ〕にペウジェム〔発酵させたカッサバ芋〕だ。これが続く間はね！

始めは人 f 10, - で3ヶ月分だったのだが、今や本当に1ヶ月分になってしまい、私にとっては3ヶ月で f 90, - ということだ。

チャックス・グレイン

1945年8月20日

まだ引き続きひどい状態、ただただ悲惨、悲しみと飢えだ。我々は飢えのために青黒くなっている。これは比喩表現ではない、実際にそうなのだ。我々は特別の食糧を買うためにお金を集め続けているが、我々の支払う膨大な代価にもかかわらず、入ってくる物はほんの僅かだ。我々が食べる物は全て集めても少なすぎる。栄養不良性浮腫が蔓延している。ムンチランから輸送されてきた人達の様子は天をも嘆かせるような物だ。毎日誰かが亡くなっている。マカッサル出身のフレンスケ・スミツの所のスミツ夫人もだ。法王から、彼自身の仲介で、f 42, 180 が送られ、13の銀行口座に振り込まれた。来月の金銭不足がこれで少しは軽減されると良いのだが。私は挽肉器を貸して、洗濯代を捻出している。

ファン・デル・クロフト

1945年8月23日

人は近い将来私達は赤十字社の管轄に入り、多分もっと食物（缶詰）を貰えるようになるとも言っています。今は実際とてもひどいからです。パウラはゴミ箱に入って人参のしっぽやケテラ [カッサバ芋] を探し、炊事場の排水溝から豆粒やジャグン [トウモロコシ] を拾い、それを私達が乾かしてその後つぶせば、パンを焼くための粉が少し出来ます。この数週間間に、毎日何人も人が亡くなりました。この数日間で、白い棺が4つ（それは何という棺でしょう、蓋も閉まらない物です）次々と門を出て行きました。その全てが栄養不良性浮腫で [亡くなった人達] です。

労働

ブルゲルーダウファス

1943年1月12日

私達には今又洗濯用の使用人を持つ事は許されない。今朝彼女達は未だ中に入れて来ていたし洗濯物を私は鉄条網越しに手渡した。明日はどうなることやら。

モードー

1943年1月14日

私達はここで全て自分達でしなければならない。最初の頃はバブ（女使用人）達が来たので、彼女等に私達の洗濯物を渡したが、それも今は禁じられた。それは殆どが前ジャワ軍人の女房達で、同じタングシイ（兵舎）に住んでいた。最初の数日はトイレ、風呂場そして下水溝の掃除に通例クリーン達が中にやって来たが、今はそれももう許されない；（それは）我々自身でするしかない。

チャッケスーグレイン

1943年1月14日

それは良い、それは駄目、それは禁止或いは大丈夫。最初は洗濯物を取りにバブ達は中に入れてもらえたが、今それはもはや許されず、如何に疲れていようが気分が悪かろうが洗濯は自分でしなければならない。私の両手は全ての勤務で既に硬くなっている。今朝は炊事場で果物（ワラン タイパン）洗淨しなければならず、全くうんざりする。とはいえ私達も既に少しは落ち着いてきて、私もいらいらすることは止める。5時半には早くも皆の水の音が聞こえる。でもマリアは7時頃まで横になっている。何せもう相当寝不足だから。

ブルゲルーダウファス

1943年1月14日

今日の作業はうまく捗り、そして私には今拭き掃除少年がいる、この抑留所に居る年の頃なら12歳位の少年で、週10セントで私の家を毎日拭き掃除してくれる！どんな風になるか、

もちろん試して見る事にする。

モード

1943年1月18日

イエレは浴場、トイレそして下水溝を掃除しなければならない少年達によってグループに分けられた。初回彼は吐き気をもよおしていたが、今はなかなか気に入っている。

ブルゲルーダウファス

1943年1月22日

今洗濯は自分でしている、というのはもはやキャンプの外に出す可能性が本当に無いので。思った程のことは無い。子供達は衣服をそんなに汚さないし、私自身の物もそんなに多くない。ここはとても空気が澄んでいるので衣類を毎日汚すことがない。例えばアイロンは目に付くものだけにして、その他はベッド下に敷く。実にうまく行く。

ブルゲルーダウファス

1943年1月24日

又しても日曜日(がやってきた)、日々がここでは走り過ぎる！私は自分の仕事を如何に分配するかがかなり判ってきて上手にやっている。知っての通り、私は秩序整然とした仕事が好きで、全て時間に間に合う様に行い、全て決まった場所に収める。それは私が病院で充分習得した事だ。エネルギーを最小限に押さえて自らの結果を最大限に楽しむ。マリアンの養育で私も時間に縛られている。

朝9時に洗濯を終えなければならない、それからマリアンにお風呂と飲み物を。エルスを同じ風呂水に(!)、私の身支度を整え、それからコーヒーを飲む。それから部屋も片付いていなければならない。だからトビアスは8時半に来て拭き掃除をしなければならない。もしこれが遅れれば、事はうまく運ばないわけで、彼は頻繁に遅刻して来る。彼にもうこの習慣を止めさせなければならない。

コーヒー後は約11時15分過ぎ。それから私はエルスと遊び場(リド)へ、それはあたかも平和そのものの静かな浜辺で、皆地面に敷いた寝藁に又は安楽椅子に座っている母親達と、既にその周りに遊んでいる小さな子供達だ。エルスはそこが大好きで、彼女は沢山の男友達と女友達を持ち、元気一杯走り叫びまくっている。私達がそこへ行く時は彼女はいつも

スキップし始める、それほど大好きなのだ！マリアンは保育箱に横たわっている。

12時に私はナシ ティム（かなり柔らかく炊いた米）を取りに行く。それからマリアンに食べさせその後我々自身が食べる。それは12時半に取りに行き、だからこれで丁度うまくいく。それからエルスを寝かせ、私は食器洗いを手伝い、それから入浴し3時半ごろまで昼寝する。私は前もって一本のバナナとジェルク（柑橘類）を持参しておき、マリアンはこれを4時に貰う。エルスはというと私のベッドで遊んでいる。この子は普段3時半前には起きている。その後彼女は頻繁にむずがる。私はいつも彼女の機嫌を取るのに何か考え出さなければならない。その間私自身身支度を整え、4時にミルクと小さなそら豆を取りに行かなければならない。それからエルスと私もお茶を飲み、5時まで未だちょっと散歩する。それからマリアン用に粥を取りに行かなければならず、食べさせそれから又食事をする。その間を縫って洗濯物を紐から取り外しオムツなどを奇麗に畳む。アイロンは目に付くものだけにする。アイロンがけも毎日などはしない。それをする時は遊び場には行かない。又その間に時々マリアンのおしめを替えるが、頻繁は必要ない。又エルスの便器を空にする事もその内終わるだろう、とはいえそんなに遠くまで歩いて行く必要はないのだが。夜食後に私は（石鹸の）水を準備する。全ての汚れ物がそこに入る。昼中水の中に浸しておく。そしてそれから私は気楽に座ってお茶と煙草、それからはいつも誰かがやって来る、とても寛ぐわ。

モトー

1943年2月16日

未だ居たジャワ人の炊事使用人も、我々自身で給料は支払わなければならなかったが、次の月にはもうこの収容所に来る事は許されない。彼らは主に火を熾したり鍋重いやかんや平鍋を運ぶ為に居た。今は誰がこれをしてしなければならないのだろうか？これは女性達や未だ16歳にも満たない少年達の仕事ではないだろうか？「それなら炊事場を閉鎖するしかないわね。」、と'ジョクジャ炊事場の'班長は言ったが、少年達はその仕事なら十分出来ると言った。

ブルゲルーダウファス

1943年3月8日

私を助けてくれているその女の子は、とても優しい。ヤニー・オヘルネと言う名前だ。彼女は粥や（ナシ）ティム（かなり柔らかく炊いた米）そして食餌を取りに行く、等あらゆる事をしてくれる。そして彼女はお風呂の水を用意したりマリアンを乗せて行ってくれる。そして私の洗濯物を屋外へ！！ ヴィム、これはとても助かるわ！これを行っているのはマゲランキャンプ出身の力持ち；赤いほっぺに太い腕の何でも出来そうな真の元気印。私は子供達の洗濯物だけを

渡すつもりでいるの。私自身の物とベッドシーツは自分ですわ。そうでないと彼女には多過ぎる。彼女が私の洗濯物の為に病気にでもなったら！私が又元気なれば又自分でするけれど、未だ力が無くて。とはいえ回復に向かっているとは感じているけど。

モード

1943年3月10日

イエレは今週2回炊事場で朝6時から午後2時まで作業している。それはきつい仕事だが、一生懸命やっている。今もう少し太ってくれば良いのだが！

ブルゲルーダウファス

1943年4月7日

私はいつもお風呂に入るのが凄く楽しい。2時に入る。子供達が寝て食器洗いが終わったら。浴場から出て来ると、気持ち良くちょっと座って煙草とお茶を飲み、それから未だほんの半時間ばかり横になる。

4時半まで昼寝する事は近頃はもう出来ない。4時に店だから、私は身支度を整えなければならないし、エルスも同じく。4時15分前にはそこへ走る。それから4時半に果物を取りに行く。私はいまだに未だ1日1個のジェルク（柑橘類）かトマトが貰え、ティメル夫人が私にいつも数個の小さなトマトをエルス用に与えてくれる。そしてそれから洗濯物を大きなバケツら釣り上げ3番バラックに持って行く。そこから戻って来ると通常は未だ砂糖或いは卵を取りに行かなければならず、それからマリアン用の粥を取りに行かなければならない。その間にエルスがお茶を欲しがりマリアンはおしめが濡れている。斯くの如くそれでも5時半、それから粥を食べさせ、その後私は手早く火を熾してパンを焼き、1個の卵を茹でるか焼かかする。こんな風で休養後にゆっくりお茶を飲むのは無理なのだ。それだから私は今お風呂に入ってからそれをするという訳だ。

午前中はこのところもうそんな忙しくはなく、慣れてきたこともあってエルスの朝食に今ならもう少し時間をかけられる。6時頃にはマリアンに飲み物を与え、私が定時に目が覚めたら前もってお茶用の火を熾す。それにはミルク炊事場に行き炭を取って来る。そこではクーリー達によって既にとても早く火が熾っている。マッチなど私は使った事が無い。私が日中火を必要とする時は隣からいくつかの炭を借りてくる。皆がそうしている。それから6時半前にはエルスに服を着せ7時前にはいつも廊下を掃除し、保育箱の埃を叩く、そうすれば私は綺麗な部屋で朝食が取れるというものだ。7時に粥を取りに行き、それからその間お茶を用意し、パンを焼いて準備し終わったところで食事する。7時半頃には終わり、食器を洗い、それから

ベッドを屋外に出して囲い場を先に奇麗にするか洗濯する。それは程ほどにしておかないと8時半にマリアンは粥を食べそれ以降私達は乳母車で出かけ、9時半に戻り、コーヒー用の水をかけ、10時前にコーヒーとトーストと果物。それからその囲いと洗濯物を仕上げ、早く終われば外に未だ座っている。11時半にマリアンをお風呂に、それからエルス、12時(ナシ)ティム(かなり柔らかく炊いた米)を取りに行き食べさせ、それから食事をする。全て丁度時間に終わる。余分な時間など決して残らない。

ファン デル クロフト

1943年5月26日

私達は今自分達で塵箱を空にしなければならない。小さな子供達はこれが楽しいらしい。彼らは自分達で門を開けることを許されて、この塵を歩哨小屋の前の大きな木箱に捨てるのだ。

ブルゲルダウファス

1943年6月20日

この大きな炊事場の最後のクーリー達も今出て行かなければならない事から、私達は今自ら赤ん坊の粥を作らなければならない。そして未だ更にもっと加わってくる事だろう。又仕事が増え、手っ取り早くは出来るが、火を又熾さねばならない、等。

モドー

1943年10月2日

料理人達が解雇されて以来私達は昼のご飯を自分達で作らなければならず、残りの食事の準備には今毎日6人の少年達が3人の婦人達の指導のもとに各炊事場で働いている。私がここに来たとき、言われた事は:'共同で炊事される'と言う事だったので多くの婦人達は全く炊事道具を持ってこなかった。幸い最初の数ヶ月は私達もここで沢山の物が買えたので、殆どの者が平鍋とかの類を持っている。毎日50人余りの女性達が数時間かかって全収容所に野菜洗浄をしている。

イエレは炊事班を2回午後1時から6時までと、続く翌朝5時から1時まで、その上3週間に1回は日曜日の朝5時から3時まで担当する。日曜安息(有り難や!)の為炊事場は昼間3時から閉まるので、私達は皆自分達で夕食を作らなければならないが、公には少なくともキリスト教徒として行動している。少年達はこの炊事作業をととても一生懸命やっていて、

食事は以前に比べて少しも劣らない。イエレの全作業服は・・・1つの半ズボン、だから随分汚してしまう。

ブルゲルーダウファス

1943年10月10日

私は週2回1時間炊事場へ野菜洗浄に行く。最初はマリアンが居る為その必要は無かったのだけれど、今は自分から名乗り出た。大丈夫。9時から10時まで居る、毎水曜日と土曜日。1時間なんてとても早く過ぎる。思ったほどでなくとても居心地が良い。彼女達がぶつぶつ文句さえ言わなければ！じゃね、最愛のヴィメル、これから未だ少々読書してそれから寝るわ！

チャッケスーグレイン

1943年10月17日

10月11日（1943年）以来思いがけない贅沢に出くわす。続く腹痛で医者に行ったところ1週間ベッドに横になって充分休養しなければならないとの事だった。これは嬉しい。1週間も長く何もしない、私をひどくうんざりさせていた全ての厄介な事柄：アラン（木炭）を取りに行く！ケテラ（キャッサバ）を取りに行く！店！食事の呼び鈴！砂糖－卵の配分！米を取りに行く！お茶を用意する－キパッセン（扇で煽ぐ）－拭き掃除－洗う－齷齪働く－ブルル、反吐が出る。ヴィスと私は今洗濯物を他の人に手渡し、全て面倒を見て貰って王様気分だ。

チャッケスーグレイン

1943年11月20日

私達は今、まるでクーリー達のように、抑留所の草を刈らなければならない。5日以内に全て綺麗にしておかなければならない・・・さもなければ、噂に依れば、私達はバンジュビルカスモウオノに送られてしまったことだろう。まあ、様子を見ることにしよう。

ブルゲルーダウファス

1943年11月20日

今朝は又突然大変だった：まず沢山の洗濯物、（それから）部屋を片付け、エルスの便器を研究

所に。マリアンが彼女の便器を蹴り上げてしまった。拭き掃除をする（故に）！病気のエルスの為に炊事勤務は家でしたが、籠一杯の玉ねぎ（を切らなければならなかった）、泣けてくる！その間：お米を取りに行き（と）、自分で下ごしらえする為に野菜を取りに行く（これは時として余分）、店へ余分な米を取りに行く、ご飯を炊き、ミルクを取りに行き温め、（ナシ）ティム（かなり柔らかく炊いた米）を取りに行き、洗濯物を紐から取り外し、その間時々便器に座らせ、子供達を入浴させ、食べ物を取りに行き、食べさせ、自分も食べ、2時15分前に終え、子供達を寝かせ、食器を洗う。それから幸い少し休憩。お茶を飲み少々読書する！全く、そんな朝はくたびれる。自分でもどのようにしてこれらの玉ねぎを切り終えたのかわからない。しかもそれはすべて1時間立ちっぱなしでこれらの服を擦り、又濯ぎ、掛け終わった後の事だ！ここに居たら遅くなる。貴方が帰ってくる時は私は親指で地面が打てるほど強くなっていることよ！早く！

ブルゲルーダウファス

1944年1月4日

今日私達は本当に抑留所生活を満喫した。ベッドを出て朝食を作る家否や：アラン（木炭）を取りに行く。籠を持って採掘場へ走る。列の中で待つ。再び家、ちょっと仕事をしているか洗濯：アラン（木炭）を余分に取りに行く！繰り返し。家：ミルクを取りに行く！週に100cc。子供達はずっと貰えるのよ。マリアンには日に600ccも。エルスには日に150cc。私自身は週に2回100cc貰える。家：ピサン、ケテラ（キャッサバ）、お茶、卵を取りに行く。家：店！それはエルスが行き、朝食クッキーとコロンバインチェを持って来た。それからケテラ粉をジョクジャ店に取りに行く。それから米を取りに行き、それから未だ手に入れてなかったグラ ジャワ（パルム砂糖）を探さなければならなかった。その間食事の世話、自分で野菜を料理しなければならなかった。それを今は隔日にしなければならぬ、子供達用にミルクを取りに行き料理する。いやはや、こんな風だから困り場、洗濯、すべての他の事柄や炊事以外、何か他の事をする時間なんて全くない。実際のところ1年前と比べてみたら、私達がこれに耐え忍び、又あちこち人が神経衰弱になっている。でも貴方の逞しい妻は柱のごとく立っているのよ。

ファン デル クロフト

1944年1月26日

12歳から16歳までの女子達は、今少年達（16歳以上の）が出ていってしまったので、トイレ勤務をしなければならない。アンドレアがそこに属する。今朝彼女は初めてそれをした。

そして彼女は実のところ炊事場へ行かなければならなかったのだが。彼女はヴェルメイデンさんから故に行かなくとも良いという許可を貰った。他の婦人達は又何も知らなかった。又喧嘩があった。ここの規則は滅茶苦茶だ。キティは月曜日他の人と病院を拭き掃除しなければならない。私は（私の意志など聞きもせず）一人でジョクジャの診療所を拭き掃除しなければならない。それじゃ、おやすみなさい！

モードー

1944年1月29日

数日野菜洗浄勤務をした後、私は他の仕事を貰った：'店員'、つまり私達が日に1人1ギルダー50セントのカードで買う事の出来る品物を売る手伝いをしなければならない、ということだ。

チャッケスーグレイン

1944年4月26日

毎晩1時間半交代で2人の女性が腕章をつけてバラックの周りの夜警番をしなければならない。そして私達が日本兵或いは歩哨を見たら、そこへ行って言わなければならない：「フシンバン フクムチュウ イジョウ アリマセン」、少なくともそう聞こえる。「それは日本語だよ」、と人は言う。そこでは既に事情によってかなりのビンタも有る。

チャッケスーグレイン

1944年4月26日

草刈勤務が定められた。アア、最初の3時間はぶっ通しでババッテン（草刈）をし、そしてそれから草の山を入れた鉄製の荷車を引張る。私にはもう耐えられないと思った。全敷地はとても美しい。この作業は辛い、確かに私達の為にはなる。

ブルゲルーダウファス

1944年4月27日

ところで一番最近の事柄としては、私達は今自分達でこの用地を綺麗に維持しなければならない、草を刈り、縁等に沿ってパチョレン（鋤作業）をする。沢山の人手で仕事は軽くはなるけ

ど、大変な労働だ。私はすべてに頑張れる、疲れてもいないし落ちこんでもいないから、ただ徐々に鈍感になって、まるでもうこのまま変わらないのではないだろうか。

ファン デル クロフト

1944年4月29日

ハリ バサル（天皇誕生日）⁴⁹。その3日前には6歳以上の子供を持っている全婦人は全ての芝生を綺麗にババッテン（草刈）、端をパチョレン（鋤作業）させられた。8時から昼の11時まで。至る所が今は美しく見える。でもこの労働にもかかわらず、私達の貰う（食べ）物がだんだん少なくなる。昨日の昼子供達は日本兵からドックス（小さな、黄色の、丸い果物）を貰った。ミセット先生はこれを分配した。ジェテケは病気だったので何も貰えなかった。

昨日はちょっと忙しい日だった。5時半に内緒で母と教会へ；6時に体操、それから部屋を片付けて食事をした。8時に点呼でそれから暖炉を掃除しなければならない（がこれはパスした）。そしてそれから未だ今夜夜警に歩くが、幸いこれが最後の見周りだ。一瞬マラリアに又かかったかと思ったが、幸いそうではなかった、でも膝から倒れてしまった。

ブルゲルーダウファス

1944年5月1日

今朝6時ただちに洗濯、大変な量の訳は、エルスが土曜日の真夜中ケテラのごった煮（キャッサバのごった煮）から病気になったからだ。それは剥き皮と既に炊いてあった事と泥からだ。私は思う。それは少なくとも非常に土臭い味がする！8時に点呼。だから間に合わせるのに余りも急がねばならない、朝食やベッドを片付けたり他すべて。

点呼後エルスを学校へつれて行く、マリアンを便器そして保育箱そしてそれから食卓テーブルへと走る。疲れきってしまった。それから未だキャベツを切る、毛虫とナメクジだらけの凄く大きな木炭、想像に絶する汚い生塵。

9時半に戻ってきてから即炊事をしなければならなかった。そしてその時やっと一杯のコーヒーが貰えた。それから再び子供達、食器を洗い、洗濯物を中に取り入れ、まだ他色々の仕事。私にはもう無理だ；もうこれ以上耐えられない。マリアンの事が心配だ。又しても殆ど野菜の入っていない（ナシ）ティム（かなり柔らかく炊いた米）；果物は彼女はもはや殆ど貰えず、青白く小さい。

⁴⁹ 天皇陛下とは皇帝裕仁を指す日本の象徴である。彼の誕生日(1901年4月29日生)は祭日として祝われた。(蘭領)東インド群島では1942年4月29日に初めて祝われた。

ファン デル クロフト

1944年5月4日

火曜日（1944年5月2日）全女性はまず石を運び、それからパチョレン（鋤作業）。翌朝再び5時半にパチョレン。これは耐えられなかった。ジルデルダ（夫人）と医者達は日本兵と（その事で）話し合った。今は炊事場の全女子と婦人達が入替わった（木箱を掃除する等。）この女子達は清掃勤務と木材を運ぶことになる。少年達がパチョレンをすることだろう。

ブルゲルーダウファス

1944年5月16日

私達は近頃草を刈らなければならない、週2回で1時間。バラック間の原っぱ等。私は莫藎を手を持ち、（働きながら）その近くにゆっくりと座る、しゃがむのは疲れるので。その外私達は炊事をする必要がもう無い；すべて今は共同で行う、幸せ！これはかなりの休養だ。

モードー

1944年6月29日

ここ収容所内で今では全く普通になっているのは、女性達が石の様なそしてこの時期コルクの様に乾いた固い地面に鋤を入れ、混ぜ返す作業をしなければならない事、それは少年達のグループが何度も収容所の外で日本人の為に作業しなければならない間だ。例えば、サラティガの前男性抑留所に居た住人達がバンドンとチマヒに送られたので鉄条網の柵を後始末する。ハイハイ、私達は軍下に置かれていて戦争捕虜として扱われ、そして習って、故に規則には従いません！

モードー

1944年7月27日

先週私は5番バラックの一人の若い女の子と一緒に8時半から10時半まで初めての夜警番をした。9時に突然至る所にみすばらしい夜の照明が消えた。小村落でケトンガンス（太鼓）の叩く音が聞こえた。囲いの外に居る警備員達が叫び声を挙げていることで、彼らは寝ていなかったと知る外は死んだ様な静けさだった。気味悪さみたいなものは感じたが、決して怖くはなかった。私達は落ち着ける隅に戻り、時々いくつかの気づいた点を囁きながら交し合った。

10時半に私達は真っ暗な寝室用バラックで私達の交代人のベッドを探さなければならなかったが、そう簡単ではなかった。そして日本語の印のついた白いバンドの腕章をつけた人が私達の'任務'を引き継いだ時、私達は自分達の萱の中に潜り込む事が出来、11時15分まで鳴り響いた警報にもかかわらず、自分でも驚く程眠気に襲われた。私達は今アメリカの爆弾が私達を巻き添えにしないだろうという事を一様に硬く信じている。我々の男の子達が警備室の近くに避難塹壕を作らなければならないことから日本兵達はその事がそう確かとは思っていないと見える。やっと先が今見えてきたのだろうか？

チャックスーグレイン

1944年8月1日

私は死ぬほど疲れている。今日の午後私は原っぱへ同行し、ケテラ（キャッサバ）を植える為に土の塊を砕き、苗床を作り上げなければならなかった。しなければならぬ事の全てには泣けてくる。炊事勤務は1時間半を6回、夜警番、ババット勤務（刈り作業）、引張る、溝掃除、洗濯場、給水（やかん）班、101種もの勤務、それに忘れてはならないのが便溝を攫える事。ある人は他の人よりも少し働くが、これはその人の健康状態と気分による。

モドー

1944年9月22日

年長の女子達は今では少年達の任務を受け継いでいる。炊事場や他の重労働にも、そして彼女達はそれらを逞しく貫いている。先月曜日（1944年9月18日）に訪れた収容所日本兵の最高官がここは未だ余りにも野原が多過ぎる、と言ったので、翌日婦人達は再びパチョレン（草刈）を強いられた。今日は例えば100人が4グループに分けられ各々2時間から2時間半働かされた。そこには50個の鍬しかないので、これら100人は草刈や石ころ探しそして休憩を代わる代わるした。それは日本兵がそこに居るかどうかによるのだが！重労働だわ、燃える熱帯の太陽と栄養不良の体では。

ファン デル クロフト

1944年9月23日

キティと私そしてもっと他の16歳以上の女子達は1週間に2回炊事係の仕事を買った、アンドレアは毎土曜日病人食炊事を受け持つ。重労働だが食べ物は充分ある。あの大頭が木曜日の

午後（1944年9月21日）急に怒り出した。リドは鍬作業をしなければならなかったのだが、婦人達が来なかったのだ。その時彼女らは叩かれると脅され（実際数人が叩かれた）、リドは人の流れで埋まった。100人が居残らされた。残りは再び帰って良かった。昨日は5時半から3時半まで一日中鍬作業だった。今日も又。

ブルゲルーダウファス

1944年9月24日

そして先週は大騒動だったの。全女性が鍬作業をさせられ、全リドの何処も彼処も。一日中なんだから、4つのグループが5時半から8時まで、8時から10時半まで、11時半から1時半まで、そして1時半から3時半まで。各バラックから10人を1グループ毎に出さなければならなかった。幸い鍬が少ないので毎度3人のグループがこれに当たった。5分鍬作業で10分休憩。うまい具合だ。私は対処できるが、こんな事から自分は未だ若いという事を良く認識する。

ブルゲルーダウファス

1944年10月7日

私は鍬作業を未だ一生懸命、ほぼ毎日やっている。私は今4日間の番を終え今日は自由。今は日に3回となった、6時半から8時まで、8時から9時半まで、そして午後1時半から3時までだ。全リドは既に綺麗な野菜畑に変わった。そして後ろの最後のバラック、10番バラック、も全草原が掘り返された。そこは巨大な古墳が地下に有って、1個の石に10分もかかり、時にはそれでも未だ取り除けなかった！

私達は今5分作業し10分休憩、あるいは10分作業して20分休憩、を代わる代わるしている。だって、わかるでしょう、これは私の様な若くて丈夫な人には大丈夫だけど、年配で弱い人にはとても過酷なもの。自分で炊事をしなくとも良くなったことで、家では必要な仕事が益々少なくなって、只自然に必要なに迫られた事だけをするようになる。というのは鍬作業の後は実際あまり動けない。例えば家を再度清掃したりとか蚊帳を洗ったりはもう無理だ。それより今は服の修理を又している、ちょっとボタンを付けたり穴を補修したり、これが精一杯よ。

モード

1944年10月8日

バラック主任はこのところ、毎日数人の婦人達を土方と裁縫作業に送り出さなければならない。普通の綿から実際とても質の悪い糸で手袋を機械で縫う、間抜けた形ばかり。これらは兵補（日本の軍隊の助兵）達用に使われるらしいが、これでいったい何をしなければならないのか私達にはさっぱり判らない。

テ フェルデ

1944年10月9日

私は今日初めて病院へ行った。7時半から10時頃まで。実際は後に付いただけで食器を洗った。とは言えとても疲れた。私達の主任看護婦はシスター ファン レントでとても親切だ。

ファン デル クロフト

1944年10月18日

忙しい日々が続いた。全婦人はパチョレン（鋤作業）、或いは帽子と手袋の裁縫をさせられた。全リドが鋤で混ぜ返されると、そこから石が出てきて、それらを私達が收容所の外にほりださなければならなかった。今はすべて完了して、いつでも重要な高官の訪問を待つばかりとなり、だから明日には新しい人達がやって来れる。私達の收容所日本兵はとても優しい。彼はすべて余り贅沢にしている風に見せない様に、衣服は仕舞い、深鍋や平鍋等も（目立たない様）、というプリンタ（命令）を出した。

ブルゲルーダウファス

1944年10月22日

マリアンは人気者で、我らが通りの慰み、誰もが彼女の前で立ち止まり楽しんでいる。年長の女子達は競争で彼女を入浴させ服を着せたがる。私にとってはうれしい事だけれど、これらの年長の女子達はここであまりにも多い勤務を持っているのでしばしばそれが出来ないでいる。1日中彼女らは働いている、炊事場を助け、木材を運び、畑を耕し、塵箱を空にし、本当にまあ何と、まるでクーリーの様に働いている。でも彼女達は一般に顔色も良く、筋肉逞しくて元気だ。

ブルゲルーダウファス

1944年10月30日

私は朗らかでかなり体調が良い、物を運び、鋤作業、野菜洗浄勤務をして夜警番に歩く。昨日は100キロの砂糖袋を担いだ！12個、畜生目。そして各50キロのジャグン（とおもろこし）袋とケデレ豆（大豆）、幾らほど重かったのか私にはわからないが、20キロと思う。各バラックから5人の逞しい女子達が召集された。女子達がいなければ若い女性達はその番になる。報酬としてマンガが貰えた、美味しい！エルスは喜んだ。彼女は自分の母親がマンガを稼いだとすごく自慢して歩いた。

ブルゲルーダウファス

1944年11月12日

鋤作業が終わった、手袋は未だ一生懸命縫わされている、数千も！私達はやっと落ち着いて、今は又定められた勤務を受け持っている。私は再び毎月曜日と木曜日に1時間半野菜洗浄、そして毎火曜日と金曜日に約1時間ババテン（草刈）をする。それは今ではもう決まっている。それで毎水曜日と土曜日、3週に1度日曜日には野菜洗浄勤務。

ファン デル クロフト

1944年11月27日

昨日以来ミセット先生によって勤務が又新しく定められた。私達女子は今少し軽めになり、自由な日1日と1回だけの炊事勤務、木材勤務、便溝を掻き出すか、ミセット先生の庭でババテン（草刈）をする。炊事婦人達は不寝番（夜警）から開放された。

グメリフ メイリングーエイケルズ

1944年12月5日

10日毎に日本軍は沢山の米の在庫をトラックで門まで送って来る、そして女性達が召集され、それら100キロの袋をグダン（貯蔵庫）まで引張られる。そこからその同日に他のグループ引張り屋により飼料用荷車に積まれて炊事場まで運ばれる。私自身もこのグループに入れられたが、立つと膝が震える事を私は知っている、でも日本兵が後ろに立っているからやれなければならない。かなり頻繁に落伍者が出る。持ち上げすぎる故或いは弱体による。そのあとはもう

力が無く、消耗しベッドに横たわる！その仕事をすれば少なくとも午後には炊事場に残っている食べ物が貰える、'調理場の残飯'。

モード

1944年12月6日

そのような日々に即私が書き記す事が出来ないのは残念だが、それには単に全く時間がない。夜8時半には疲れ切って萱の中へ潜り込み、即寝る、5時半には再び起きる、時々朝の雑役から開放されている間はとてもうれしい、少なくとも私の洗濯物をする事が出来るし、私のベッドの下を拭き掃除し、埃を取り払い、そして時々最も必要な私の衣服の修繕に当てる。

私はバラック主任としてそこでは義務はないのだが、私のバラックから私が指示しなければならない婦人達のすべての勤務先には、可能な限り行って一緒に働く。それだから私自身の為に割く時間が少ないのだが、だからこそ色々な異なる労働について自分の経験から一緒に話し合う事が出来る。

テ フェルデ

1944年12月24日

私は今日又病院へ行き母は又家に留まっていた。私は今一番後方の病室、小児病棟で働いている。でも終わるのに大急ぎだ。赤痢患者達に便器を持って大変走り回る。公式には10時半(日本時間)には家に帰れる。私は未だ母を助けなければならないので、それはそのままのはずなのだが、今朝やっと家に帰ったのは12時だった。これからどうなるのだろう！

ファン デル クロフト

1945年1月4日

パンは来なくなりましたが、10袋の小麦粉は有る。沢山の木材と油の頻繁な引張り作業。そしてすべては全女子がやらなくちゃ、彼女達は他の人達以上にはもう何も必要ない。大勢がもちろんのこと病気なのだ。病院は人手不足で、彼女等は私に手伝ってみてはどうかと聞きに来た。私は良いが、ミセット先生はそれは向いていないと思った：「でも貴方はもう戻って来る必要は無いわ。即すべての班からはずしましょう！」。「ハイミセット先生、どうも有り難うございます！」。それで私はそこを出た。初めて病院で始めることには震えが来る。そのような事は未だまだしたことが無かった。母は私と一緒に通りを一つ歩いてその事について話合ってくれた。

テ フェルデ

1945年2月1日

突然母の向こう脛に数個のかなり大きな赤い斑点が出来た。彼女はすごい頭痛を伴った吐き気をもよおした。ところでもう数日になるが、今彼女は（痛い足で）座らなければならないのだが、私が何度も外出しなければならない時はどうしたら良いのだろう。母を休ませる為に私が数日家に留まれるかを医師に相談に行く。1日中小さなヤンを食べさせる事に奔走した。幸い割合お腹は大丈夫だが、便には注意し続けなければ。

テ フェルデ

1945年2月2日

私は暫くの間完全に家に居る。ロデル医師は最初この人手不足と大勢の人が病気だから無理だろうと思ったが、申し出は通った。うれしい、というのは今私自身も少々休養できるから。私も又えらく疲れる。そしてファン アウケン看護婦は私の後に厳しく付きまとい、1日中働かせたいらしい。彼女は本当に感じが悪く私をいらいらさせる。だからこれは相当面白くない仕事だ。

グメリグ メイリングーエイケルズ

1945年2月17日

今月日本は全く木材を送って来なかった。日本によればそれはもう無くなってしまい、その上収容所内に未だ充分木があるからとの事だった。そこで一番強い女性達で一つの班を作り、この仕事を始めなければならなかった。これらの女性達は報酬として1食分余分に貰え、彼女達が又実際儲けたことは、その為に3つの炊事場の火が燃されたことだ。上げ蓋、天窓そして時には戸などの余分な木材がバラックから取ってこられた、と言うのは木の切り材はとても湿っていてくべる木としては使えないからだ。

切りだし班はそれぞれの炊事場に木材を供給した。各々丁度均等に。炊事場に他の切りだし班が最後の木材を割りに来た。どちらも私はしばしば手助けをしたので、それが如何に重労働であるか経験で解る。そしてその材質が良ければ良いのだが！木々を伐採するのはとても危ない作業だと私は思う。

と言うのは良質の縄と引張る材料が双方ともないのだ。そのような木が倒れる寸前にある時には、収容所の大部分が通行止めになる。残念ながら数回バラックの屋根の小さな部分が一緒につぶれてしまったことがあった。大勢の人々が栄養不良でもう立てなくなってしまう

ている為と今だ猛威を振るっているあらゆる種類の赤痢で、私は粥班に炊事場に着て欲しいと頼まれた。これには夜7時に炊事場に潜り込み、翌朝用に粥を作らなければならない。

この班は同じバラックの人々から構成されているので、毎晩他のバラックの班が行く。そこでは通常殆どが気に入らない条件の元で作業する、例えば未だに暗い事、燃料が少なくそして働き始める時は既に日中の任務で疲れ切っている。時々日中班が5時に始まる時にやっと終了したりする。それが又疲れる、というのは重いドラム缶等を持ち上げ、或いはそれら同士を流し入れる、予想以上だ。とはいえこの作業班の精神状態はだいたいいつも良好だ。そしてこの炊事場を出る前は、そこがすべて美しく磨きあがっていなければならず、これがこの作業の中で最も嫌な事だ。この班は通常4人からなっている：すべてに責任を持つ主任と3人の働き手、でもこの主任は同じ様に一生懸命作業しているのよね！

ブルゲルーダウファス

1945年4月3日

炊事場用の木材がえらく欠乏する。だから私達は木を伐採しなければならない。今朝6時から7時まで私は木を切った。石のごとく硬い木、重い斧、やれやれ重労働だ。でも私達は8人でこの任務を定期的に交代する。これなら何とかなるが、おてやわらかに。そしてこの木を小さく割って炊事場に持って行くまでにはクリスマスになっている。私達は又再び外でババッテン（草刈）をさせられる、日に100人の婦人達が収容所の周りの条地へ。

チャッケスーグレイン

1945年4月4日

新しいプリンタ（命令）が布かれて数日になる—良い命令？—ここのこのガラクタ抑留所に一度でも良い事があったかしら。有るわけないわよ。日に100人の婦人達が外に行き収容所の周りをババッテン（草刈）する。日に10人の婦人達が中にもう木材が無くなったので木を伐採する。毎晩再び自分のバラックを。不寝番（夜警番）に歩く。ア—ア、結末は未だ見えないのかなあ？

私も一緒に行かねばならない、番号を左胸につけて。最初点呼があつて、それから門が開かれ、私は2年余り立って後にひとかけらの自由な世界へ出た、輝いている、3人の日本軍隊に居る土着の助兵達に導かれて悲しくそして腹を立てながら私達は目的地へと出発した。各自は場所を指示された。そこで私達は溝側を掃除できる様に腹ばいになり始めた。幸い草はすぐ剥がれ、私が終わった時、道端に座って、美しい山々を見ながらコペンに強い郷愁を感じ

そして・・・もっと更には自由を。

モード

1945年4月8日

私達は又もや新しい勤務を貰った：木を伐採し小口に切る！最も傑作な事には、私達には全く
適当な道具が無いと言う事だ。光栄にも収用所日本兵も一緒に一生懸命働いている事を言わな
ければならないが、婦人達にとっては過酷な仕事に変わりはない、私達の大半と一緒にそれをす
るのは1時間、そして週に1度以上誰も望んでいない。

ブルゲルーダウファス

1945年4月11日

私達は既に4本の大木を伐採した。今ではそれ用に素晴らしいのこぎりが有る。各自が決めら
れた1時間足らずを切る。バラックの真中に立っている大木を切り倒さなければならなかった
時は大騒ぎだった。収容所日本兵達とまだそのお偉方が1人、そして屋根（編んだ竹藁）を
修繕していた少年収容所からの4人の少年達と全婦人の列がケーブル縄をその木に架け正しい
方向に向けて引張る！何度も彼等は又ちょっと鋸で切ったり鋏をいれたりして、それから又再
び引張る、そうしたら縄が又しても切れた、ヤレヤレこれは余興だった。木は奇跡の上にも奇
跡で良い方向に倒れ、ほんの少し廊下が壊れただけだった。

ファン デル クロフト

1945年5月28日

先週はキティとアンドレアにとっては辛い週だった。最初の数日は8番収容所（空）をパチョ
レン（鋏作業）させられる。それから5Aバラックと他の場所を、600人が加入して来ると
いうので、撤退しなければならなかった。

モード

1945年6月29日

撤退した9番収容所は作業所として設置された：強制収容人の婦人達と年長の女子達によって

縄が作られる。今毎日其処へ私達の収容所から50人が行く。本当に刑務所の仕事だ！

チャックスーグレイン

1945年7月2日

毎日ここでは約100人の女性達が9番収容所へ行かされ縄作りが始まった（以前は女子刑務所の仕事）、其処では彼女等は4時半まで働かされる。

ブルゲルーダウファス

1945年7月20日

その間、最愛のヴィレム、私はかすかに聞こえるトランペットの音に耳を傾ける年老いた戦闘馬の様な気分、と言うのは私は病院で夜警番をしている！今までは子供達の為に毎回断ってきたが、やっと決心したわ。日中ここでは眠れないので、その寝不足からイライラして機嫌が悪くなり疲れ過ぎると恐れた。でも今は1晩警備に当たり、3晩寝る、を繰り返すと決まったので私にも出来ると思う。それは通常2晩起きて、2晩非番だったので私には過酷と思われた。今は1時から6時まで勤務して、出かける前にはまだ子供達にオシッコをさせ、それで充分である事を祈って。翌朝はどうなっているかしら。

モード

1945年7月29日

最初私達は毎日50人の婦人達を縄作りに9番収容所へに送り出さなければならなかった、それから100人になり今は150人、だから平均各バラックにつき15人ずつ。そして毎日これだけ揃えるのは容易くない。一度は190人も行かされたが、これは昨日数名出席していなかった為のお仕置きだった。私は自分で2回一緒に行った、徒歩20分余りだ。

この勤務は辛くは無いが退屈だ。私は少なくとも大変な眠気に襲われたが、他に何の任務も与えられなければ各日に行く気は有る。それは置き去りにされた収容所内の気持ちのよい静けさがある。子供の泣き声はなし、大きな空間に小人数。この'作業班'は7時に私達の収容所を出、半人分のご飯を持ち、其処で一皿の泥と数杯のお茶を貰う。もしこの'縄班日本兵'の機嫌が良ければ、1時に私達の収容所から野菜とソースが運ばれてくる間、1杯のコーヒーも。4時半まで勤務する。だいたい5時には行列が再び門の中へと行進し、それからこの勤労者達は残りの半分のご飯とまだ時にはスプーン1杯の紛いのソースを探し出す。

健康と医療状態

ブルゲルーダウファス

1943年1月7日

今日は全てかなり上手に行った、只私の膝が震えて10時になってもまだ疲れ、もうこれ以上は不可能という気がしている。コーヒーの後は少し回復し2時から3時半まで石のように寝る。それ以降やっと元気になる！マリアンは彼女の歯に悩まされている。今日は涎がすごく彼女にしては珍しく泣いてばかりだった。さもなければ彼女が泣く事は本当に少ない。彼女は予防注射はまだしていないが、これはもう少し時間がかかるだろう。

困ったものだ。エルスと私は再びチフスコレラの注射を受けた。エルスはほんのちよっとだったがものすごく泣き叫んだ。彼女はそれで病気にならなかったし、しかも腕の痛みも無かった。私はちよっと有ったがたいしたことはない。

チャックスーグレイン

1943年1月20日

グレイトは昨日診療所へ行った。彼女にとっても私達にとってもこれでやれやれ、というのはそれは大変だったのだ。今望む事は彼女が充分回復して戻ってくる事だ。この週ドレックメイヤー医師が門まで来たが、中に入ることすら許されなかった。私はまだちよっと呼びかけることが出来、彼女をこの病院に入れて貰おうと試みた、そうすればマゲランから特別に彼女を助けに来てくれるだろう。

ブルゲルーダウファス

1943年1月22日

シーフ（ドルスト）がここで診療所の主任である事は大変便利だ。彼女は色々な事で私を助けてくれる。一昨日3才児のエルスが右目をえらく見苦しく掻き毟った。それは災難だった。彼女は目を徐々に開けていられなくなり、何度も見ようと試みたが、この加減の悪い目では上手くいかなかった、光に耐えられず悲しそうに泣いて私の膝を離れなかった。彼女は全く自制心を失っていた。私はとても恐ろしくなって、おお神様、ヴィレム、何とも息苦しいわ！幸い昼寝の後は最悪の状態から峠を越した。目はまだかなり充血していて、今は角がまだ少し黄色味を帯びていて今朝は睫毛もくっ付いていた。それで私はシーフの所へ連れて行き、彼女はサル

ファ ジンシ薬を1滴入れてくれ、それは今から毎日治癒するまで続けなければならない。その後彼女には全く痛みは無い。

ブルゲルーダウファス

1943年2月4日

ああ ヴィメルチェ、又帰って来てよ、何とかして又帰って来てよ。もし貴方がマリアンを見たら喜びで飛び上がって、見飽きる事が無いと思うわ。そして私も貴方が彼女を二度と見られないだろうと心配する必要はもはや無くて済むしね。彼女の生きるチャンスはここでは余りに小さいのよ。

余りに大勢の赤ちゃん達がここでは病気だ。殆ど皆栄養障害があるか肺炎や中耳炎にかかっている。私はしばしばとても不安になる。彼女は今又少々風邪を引いている。彼女の鼻に数滴液を入れてもらったのが良く効いて、今はもう鼻をすすらなくなった。彼女は汚い目をしていましたが、そこにサルファ ジンシクス薬を2日間入れて貰って、今は殆ど治っている。昨日彼女を量ってたら、ほぼ14ポンド(13ポンドと350グラム)。そして私は92ポンド！おお嫌だ、ヴィム、私は又棒切れみたいになって、酷い事、でも沢山食べてはいるのよ。私としては最善を尽くしているけれど、即又減ってしまっ

ブルゲルーダウファス

1943年2月9日

私は又少し回復した。この怠惰な日曜日がやっぱり助けになったと見えるが、今マリアンが少々咳き込んでいる、死ぬほど怖い。そしてエルスはまだかなり咳をしていて、この子は今丁度ペルトシンの様な大変美味しい咳止め飲料薬を貰っている。この収容所には既に相当の病気が発生していて、今は又既に赤痢だ。百日咳は既に即始まった。私はエルスに予防注射を4本してもらった。今はそれに関しては少なくとも心配する必要は無い。

それから大量の子供達は皆、称して下水溝潰瘍、で包帯をし、全収容所はかなり劇症下痢が多い。今ほんのちょっとの下痢でも既に劇症下痢と呼び、これが実に頑固で、特に子供達には。私達には相当素人の医者が居るが、他の収容所も診ているので、私達だけではない。でも明後日にはセマランから1人やって来る、とウェドノ(地区長)が言い、この人は私達の収容所に駐在する。

モードー

1943年2月16日

数日前この収容所にやっと1人の女医がやって来た。60歳がらみの医者でセマランからやって来たワルシュ（＝ソルフドラーヘル）という人だ。彼女はとにかくジフテリアの疑いの有る症状の患者で手が一杯だった。私達は多分近日中に皆ジフテリアを予防する注射をしてもらい、又既に破傷風と幼い子供達にはそれに百日咳、これは既に最初からここ一帯征服していて、その予防をしてもらった。

ブルゲルーダウファス

1943年2月18日

げっそり、何という日で何ということか、何という災難な状態だろう！今日はここに最初の犠牲者が出た、8ヶ月の赤ん坊だ。栄養失調と救い様の無い気管支炎そして病院には入院させる場所が無かった！スワンジ医師が今日看護婦に「あの子はどうしているか、昨日電話をしたのだが、」という質問に彼女は答えた：「墓場です」。更に彼は「それならどうしてその子をここに連れて来なかったのか」と。惨めなものだ。その葬式行列は余りにもひどかった。どしゃ降りの上に驚くなかれ2台の車の後に花輪を持って日本兵達が。私だったら其れを受け取ろうとしなかつたらと思う。

ああヴィム、貴方がもしマリアンチェに二度と会えないとしたら！この思いだけで既に私は押しつぶされる。そして今朝彼女は着替え台から落ちた。私が落ちた靴下を取ろうとして屈んだら即彼女がひっくり返った。彼女は体を回して其処から滑ったのだ。彼女の行動は急に余りにも素早くなった。私は余りのショックで心臓が止まったままひどくうろたえた。半時間ばかり座って彼女をあやし慰めた；彼女はちょっと泣いただけだった。

何処にも瘤は出来ず今日は実にご機嫌だった。何も無かったとはいえ、いつも考えるのは例えばもし何か彼女の脳に障害が起きてめくらになったり知能が遅れたりしたら、とか。ああ、ヴィム、そうなったら私の責任だわ！ヴィム、そしたら貴方は私を一生許さないだろうし私も私自身を。このバラックには今余りに多くの赤痢が発生している。私の向かい側の2人の子供達、私の横の1才半になる子、そして2つ角先の3人の子供達！恐ろしい。ヴィム、全てが余りに不愉快よ。そしてマリアンはまだ注射が許されないし今は既に良く食べるので、私はセレベルスの様にハエを監視している。有り難い事にそれは大した数ではない。

ブルゲルーダウファス

1943年2月22日

ほらね、何と上手くいくのかしら、ヴィム！何と私の右脛に静脈溜ができたの!! 少なくとも全て明らかで、約3センチ平方が部分的に赤色を帯び、とても熱く（丁度その場所）ちょっと腫れていて何となく歩いている時は痛い横たわっている時はそうでない。鼠けい部も痛いリンパ腺の腫れは無い。おお嫌だ、この足を高くして居なければいけないことになるかと恐ろしくなる！それは出来ないわ、ヴィム、まだ2歳以下の二人の子供を持つ母親には言語道断！本当に馬鹿みたい、聞いてよ、昨日強い流感にかかってベッドに伏せてしまったの。一昨日は気分が悪くなって寒く至るところが痛くなって、後から熱が出てきたわ。ベッドに潜り込みその夜はすごく苦しみ、翌朝もうちょっとでマリアンと一緒に倒れてしまうところだった程の大変なめまい。シーフが力づくで医者を呼んでくれたの、このシーフは最高、さもなければ看護婦達が伝達を忘れるので、医者を見るまでは大概1日待たされるのよ。

彼女は懇切丁寧に私を良く調べてくれ、流感用の錠剤と300ccのミルクを加えてくれたわ。私は今500cc貰える！この錠剤は素晴らしく良く効いて今朝気分は再び爽快だった。だからベッドから降りて小屋で色々な事をするつもりだった。フェミーは既に洗濯で忙しくしていた。その時その脛が又痛んだが、とても暗かったーその瞬間は長く続いた悪天候でー私には特別何も見えなかった。ちゃんと良く見ていなかったのと流感の後引きぐらいにしか考えていなかった。でも今日の午後は余りに意地悪く痛むので、その時この場所を見たら、ショックで死にそうになったわ！鼠頸部の痛みが一昨日は特にひどかったの。今よりもっと痛かった、変よねえ？明日医者が又来てくれる、今日の午後はとても忙しそうだったので来てはくれないし、足を高くして座り、最小限しか歩かないけど、ヴィム、それは絶対不可能で、エルスはしょっちゅう何か必要だしマリアンのオムツは濡れているしね、フェミーやハニーは既に私の為に1日中洗濯、食事を取りに、等などで走りまわってくれて、便器を持っていくのも忘れてはならないし、そう、とにかく大変！

ブルゲルーダウファス

1943年2月27日

今日は何というひどい日か！既に14日間も歯医者に通っている。この男性は毎土曜日だけしか来ず神経治療を始めた。先土曜日（1943年2月20日）に彼が詰めたものを私は月曜日取り出さなければならなかった。その時丁度流感にかかっていて上手に取り出せなくて、今その残っていた物が炎症をおこした。この前週は実際痛みで死んだも同然だった。貴方には書かなかったけどこれは相当なもので本当に何度も痛みで泣いた。

彼もこれを見たときは驚いて週に1度しか来れない事にぶつぶつ文句を言い結局こ

の奥歯を抜いてしまった。私は実にうれしかった。そんな週が再び有ればもう私は生き残れない！でも今日の午後穴の後が痛んだ、ひどく！もう我慢出来ず再び大泣きに泣いた。私の全顎は硬直して痛い。充分麻酔が効くまで彼は5本の注射をしなければならなかった。勿体無いわよね、この奥歯の為に、さもなければ彼はこれを保管できたろうに。今私の口には大きな穴が開いた、あーあ。

ブルゲルーダウファス

1943年3月1日

彼女（マリアン）の熱は治まっている。6時には36度5分だったが今10時には再び39度5分！そして息が苦しそうでまだ何も良くなっては入らない。何と恐ろしい事かしらヴィム。私は怖い、気管支炎は相当厄介だし彼女は華奢だし、ここはいつでも隙間風が入る。ああヴィム、日本兵達が彼女をも殺すわ。それは嫌。その悲惨なものたちのせいで私の小さな宝を失いたくない。彼女の小さな顔があまりに白く、今は全く笑わない、それほど病気の。私の可愛い赤ちゃん、私の可愛い小さな子。

ブルゲルーダウファス

1943年3月14日

殆ど1週間何も書かなかったのは私が入院していたから！火曜日（1943年3月9日）に再び気分が悪くなり、それが私をここへ引きずって来た。ここは気持ち良く、静かだわ。何からこうなったのか判らないけど、勝手に回復していった。私は気持ちの良い窓に向かって横たわり空や木々、そして洗濯桶を引きずって文句を言っている母親達の代りに、朝早く鳥達のさえずりの声を聞いた。私が来た時はまだ2人の病人が横たわっていた。後からは満員になった。私は幼児達が恋しい。初日はそうでもなかった、何かを考えるには余りにも疲れていたもので、でもそれ以降は彼女達にとっても会いたくなかった。マリアンはエイミーの所に居たが私は何も信用しなかった。エイミーは余りに不器用なのでマリアンを落っことしたりしないかと心配する。エルスはハニーの所に居るが、ちょっと風邪を引かせてしまって彼女の目元が炎症を起してしまい、そして風邪が膀胱に来たという、というのは今でもまだベッドでお漏らしをするという。ヤレヤレこれは又私が直していかなければならない、大変だけど。私が出て行った時はまだ健康だったのに。さて、もう寝ることにするわ、まずマリアンが母乳を貰いに来る。そろそろ9時半。じゃね、愛する人！

ブルゲルーダウファス

1943年3月22日

ああヴィム、ファン デ ワールデ夫人の赤ちゃんが今朝亡くなったの！余りに突然。この子は大変病気で今日ワルシュ医師の病院へ行かなければならなかったけど、今朝この母親が一瞬バケツに水を取りに出て帰って来た時、この子は死んでいた。彼女は可愛そうな人。彼女はいつもそういう重荷を背負っている。彼女にはまだ4人子供が居るし、器用ではない、全てに見れば判る。彼女はここで暮らせない、彼女は大勢の人々の様に最初は段取りが取れなくとも今は自らを併せて慣れていく、こともしなかった。この赤ん坊はいつもとても弱かった。ジョクジャではこの子が2ヶ月の時私は2回訪れた。その時この子は余りにひどい様子で、青白くとても大きな変な頭をしていた。この子はここでは良くなった様に私には見えた。彼女はよく外へ乳母車で連れ出していたが、最近では頻繁に病気で、気管支炎だった。それをこの子はマリアンの前にかかり、お腹が治まらず昨日は再び大変加減が悪くなった。一晩うめいていたと言うが、彼女は余りに疲労していたので見には行かず、今朝隣の奥さんに言った：'ロバーチェは今とても気持ちよく眠っているわ。まるで恰も死んでいるみたいに！'そしてこの奥さんが見に行ったら彼が本当に死んでいるのが即別った。そして既に数時間立っていると医者と言った。残念よねえ、彼女がそれを自分で見届けなかった事は！解るでしょ、この不愉快な収容所がしでかした事なんだわ、疲れ切って最後には夜も起きあがれず自分の子が死ぬときでさえも。ああ、ヴィム、日本兵達がここで私達にしでかす事は何と余りにひどいのかしら。これは記述できるものではないわ。イエット バウウェスが居る9番バラックでは、どしゃ降りに雨漏りがする、今では毎晩だ、本当に洪水だ。そして真夜中には塵くたの周りを溝鼠が走り回る。今夜は私も自らこれを聞いた。彼等はチュウチュウなき喚き、犬でも来たものなら真夜中に小屋に逃げ込む。イエットの子供達は又しても加減が悪そうに見えた、白い鼠顔ととても大きく大きな目。彼等は二人とも再び病気だ。イネケは腹痛と熱。彼女は真だ便器に座っているが、余りに弱く転げてしまう。アーチェはえらく咳き込みそして熱。イエットはファン デ ワールデの赤ちゃんの事でももちろんとても動揺していた。ところで私もそうなのだ、数時間完全に何が何だか判らなくなっていた。私はマリアンと1周して歩いた。この子はとても元気で、エルスも、でも明日は彼女等に何が起こるか誰が知ろうか！

チャッケスーグレイン

1943年3月22日

3日前はじめての死亡事例があった。9ヶ月半の子供だ。可哀相に。収容所主任のスフルテがウェドノ（地区長）にお棺とお花代を貰う為の交渉しなければならなかった。我らがオランダ人の少年達はこのオランダ人の幼児をお墓まで担ぎたがったが、門から先は許されず、其処か

らは現地人たちに引き継がれた。日本兵殿も花輪を送ってきた。この母親は悲しみに麻痺していたに違いない、さもなければこれをほりかえしただろうに。'故人への敬意'彼等自らの罪なのに。馬鹿みたい！

ブルゲルーダウファス

1943年3月26日

エイミーが再び退院した。足はそんなにたいしたことは無いし又歩いても良い。この收容所潰瘍は容易なものではない。エイミーはバケツに掠ってから数日後に大きな穴が彼女の足に開いたのだ！

ブルゲルーダウファス

1943年4月3日

マリアンは今既に9ヶ月になる！私には未だ生理が来ない。これが暫くまだ遠ざかってくれる事を願っている。

ブルゲルーダウファス

1943年4月3日

殆ど1週間貴方に何も書かなかった、不真面目ね！それは良い週だったわ。何の身体的な問題は無かった。只1つエルスが今水疱瘡だが、ほんの初期で未だ気分の悪くなる所まで入っていない。それはとても小さくて未だほんの少々だけ。さて明日は身体一杯に広がっているかしら。全小家屋にこれが広まっている。何人かの子供達はかなり身体一杯広がっていて、ずいぶん加減が悪かったが、私達の小家屋は今までのところ未だ1人だけで、ジョクジャとマゲランにはもっと多い。

ブルゲルーダウファス

1943年4月5日

ところでヴィム、昨日私は再び奥歯を抜かれてしまったわ！今度は反対側。金曜日（1943年4月2日）に痛くなり、即歯科医に問い合わせた。彼は近頃は日曜日に来る。私は7番目だ

ったので、番は早いと思った。ところがやはり11時半になってしまった。彼は私の奥歯を軽く叩いた。それが大変な痛さで、先生が心配そうに見ていた（これはハーディ先生が詰めた物だ、と思う）。彼は其処に穴をあけ（嫌な痛みだった）詰めてあった物を取り出した。それは大変な悪臭でだからこそ彼はそれを取り出さねばならなかった。この穴あけで私は気を失ってしまった!!（私にはこれ以上の痛みには耐えられなかったと見える。暫く横になった後、彼は其処へ注射をした）。そしてそれを彼が抜くまで私は再び横にならなければならなかった。これはすぐ抜けて今回は全て上手くいっている。今までのところ炎症は無い。口内に2つの穴が開いているのは何か変な感触だ。でも食べるには支障は無い。彼は全てもう一度良く診察してくれ、左下の奥歯に注意していなければならないと言った。後は全て大丈夫。ヤレヤレ、マリアンの事で既に私の2本の奥歯が代償となった。もうこれで充分だ！お休み愛するヴィム、寝ることにするわ、もう11時だから。

ブルゲルーダウファス

1943年4月30日

まあ残念な事に私は又しても座りっぱなし：私の左向こう脛にウルクス トロピカム（熱帯潰瘍）が出来つつある！ちょっと蹴躓いたら、かすり傷が今は大きな穴となった。即包帯をしたのにもかかわらず。それで座っていなければならないということで可能な限りその様になっている。それは確かに痛い、たいしたことは無い。我慢は出来る。これが長く続かない事を祈って！ベラと隣の奥さんが私を助けてくれている。エイミーからの助けは要らない。うんざりだから。ここではゆっくり休むのが難しく、私はそれが苦手、アアア、他の人にまだ手助けをお願いしなければならない事には抵抗を感じるわ。

ブルゲルーダウファス

1943年5月15日

私はマラリアにかかった、初めて、（マラリア）テルティアーナ。1日とても気分が悪くなりその後すぐ回復した。思ったほどではなかった。私が丁度すごく気分の悪かった時、エルスが突然すごい熱を出した。

最高39度9分で夜も昼も激しく苦しんだ。最後には私も疲れきった。寝る事はもうできなかったし、でもとても眠かったしで！ゲルダとベラは私の事をとても心配してくれ、隣の奥さん、ブルネ夫人も彼女なりに、この人にはこれが即過剰で何とか言い訳を探しもう助けはくれなかった。向かいの奥さんはこれを聞いて代りに彼女の出来る事は無いかといいに来てくれた。エルスは最初エウキニーネ（薬）を貰ったが、彼女の処方箋は反作用して、それか

らはプロントシルを貰いこれは即作用した；彼女は翌日良くなった。キニーネを飲む事により私は良くなったが、正常に生理になった！5月9日（1943年）を覚えておかなければ、たいした量でなく丁度充分だ。今再び普通に戻った事は素晴らしいし、何千人もの女性達がここでは既に何ヶ月もこの厄介な物が無い。

ファン デル クロフト

1943年5月18日

母がますます悪化して行くのでスワンジ医師の所へ行かなければならなかった。アニー ファン ウイが母が即入院した事を告げた。最初彼女は少し悲しかったが、シスター達を見たときは再び元気になっていた。今日の午後はシスター ウィットベルグとシスター ポルドン⁵⁰が私達が全て詰めた小型トランクの服を持って行ってくれた。残念ながら私は今日の午後其処へ行く事を許されなかった。でも彼女達はハネケを彼女達の中に内緒に入れて連れて行ってくれた。ハネケは、私達が屋根（編んだ竹藪）の上から'さようならハネケ、お母さんに宜しくね!!'と叫んでいる間、まるで孔雀の様に誇り高げに2人の看護婦達の間に入り歩いていった。明日は面会日で無く私達は又しても行く事が出来ない。ということは木曜日（1943年5月20日）まで待たされる事になる。

ブルゲル—ダウファス

1943年6月6日

マリ안의疱瘡（予防注射の跡形）は素晴らしく、2個の小さな丸で、既に乾いている。今日は彼女の体重測定をしたら、15ポンドと240グラム、エルスは25ポンド、私は95ポンド。私達は故にまずまずだといえる。私の足の潰瘍も今は殆ど回復している。厄介な物ほど長く続くものねえ？既に6週間になる。そうそう、昨日私は正常に生理になった。この収容所では結構調子が良い。天気は気持ちが良いし、食事もまずまずだ。ただかなりのマラリアと黄疸が流行している。医者自身がアムベン（赤痢）にかかり、とても悲惨に見えたが、彼女は未だ働いている。

⁵⁰ C. ウィットベルグ夫人、1893年1月17日生まれ、そしてJ. C.H. M. ポルドン—ムルダ—婦人、1892年生まれ双方ともアンバラワ第六で看護婦として働いていた。

モードー

1943年6月17日

ここ4日間の間に多くの子供達が、特に幼児達が吐き気と腹痛に悩んでいる。彼等は脱水症の予防に塩水注射を受けている。今日は数人が病院へと外へ連れ出された。噂ではある種のコレラとか。私達は飲料水を念の為沸騰させなければならない。

アンバラワ病院のオランダ人の看護婦達、修道女達、も先週又皆強制収容された（他の収容所に分けて）、ただ病院長、スワンジ医師、ジャワ人でかなりの国家主義者は、超満員の病院でその女性達をそのまま働かせておく様強調して依頼したのに。病院に運ばれた子供達の1人が既に亡くなったが、これはコレラではなく良性の種類、例えばコレリネによるものだと私達に納得させてくれた。

ファン デル クロフト

1943年6月17日

今日は私達の収容所から3番目が腸カタルで亡くなった。ピチェ カピティンは来月4歳になるところで唯一の子供だった。（カピティン）夫人は私たちの歌のレッスンに参加していた。昨日彼女は未だ彼と一緒に散歩していて、散歩後彼が嘔吐し始めた。昨夜はとてもひどい状態だった。ウィットベルグ看護婦が彼に塩水注射をした。今朝彼が病院へ運ばれて今日の午後亡くなった。ひどい！そして恐怖はとても沢山の子供達がこれを持っているということだ。ジョクジャ部では軽いパニックの声が上がった。彼女達は2人目の医者を望んでいる。この病院そのものが混乱していて、すべてが手におえない。

ブルゲルーダウファス

1943年6月20日

今週はいろんな事が起こったのよ、僕ちゃん!! 貴方の一番下の娘が病気（だった）：吐き気と下痢、洗礼を受けた1日後。そして今日彼女は初めて又かなり回復した。再び遊んで笑った。彼女は数日本当に病気だった。とても大人しく横たわりそしてとてもよく寝ていた。此れはちょっと面白いことではない。最も大変な事は、ここの収容所全体にこの病気が広がっていて、とても多くひどいものだから彼等は即点滴を受けなければならない。それらは空になりマゲランから来た3才の男の子は24時間以内に死んでしまった！ひどいものよねえ、このところの収容所の雰囲気は、全母親達が一様に心配しているということだ。病院には未だ数人の重症の子供達と婦人達が入院していて、とても苦しんでいる。1人は夜中が峠だと思われる。エルス

も寝た。この子は突然又ひどく風邪を引いてかなりの高熱を伴った。朝は37度5分、12時には38度に上がり、今夜には39度4分にまで！医者は彼女に聴診器を当てたが、別にたいしたことは無いと診断した。彼女はアスピリンを貰った。今は彼女が良く寝てくれる事を祈るのみだ。彼女はここ二晩とても良く寝ていた。私は幸い未だ元気で何の問題も起こっていない。マラリアももはや戻っては来なかった。

ファン デル クロフト

1943年8月1日

私は今既に3週間ベッドに伏せている。私は気分爽快でお母さんは気分の優れないまま働いているが、小水がを未だ黒く医者は長椅子を外に出して座るのを勧めない。今はパウラとフィネケ⁵¹も病気だ。

パウラは黄疸(が出て) (日本兵みたいに)フィネケは39度3分の熱とひどい下痢。私はベッドを自分で整頓してハネケに食べさせ、色々な細々とした事をした。こうしてもちろんお母さんを手助けしている。

ファン デル クロフト

1943年8月19日

今日の夜中2時半にコリーチェ ファン デル ゾウが病院でなくなった。夫人(ファン デル ゾウ)が呼ばれたのは4時半になってからだった。来月コリーチェは1歳になるところだった。しかしこの子は母親が多くの問題を抱えていた所のまさに戦争っ子であった。とはいっても最近はこの子の体重はかなり増えたのだが。これは母親にとってももちろん難しい事だが、私達は既に8ヶ月間これらの数千人の中でこの子が未だ4人目の死亡者である事を幸いと言わなければならない。本当、ここは未だそんなに悪くはない。

チャックスーグレイン

1943年10月3日

今週私達はフェルミンカーペンター アルティング夫人を門まで運び出した。私達にとって

⁵¹ パウラ ファン デル クロフトとフィネケ ファン デル クロフトは双子の姉妹であった。彼女達は1933年10月25日に生まれた。

初めての大人の死。悲しかった。彼女が傍にやって来た時、道に沿って立っていた全女性が歌い始め、そしてそれはすすり泣きに代った。簡易な木のお棺は現地人によって担がれた。手に花束を持った彼女の3人の子供達はその後ろに続き、加えて7人の婦人達も付いて行く事を許された。門の所で担ぎ屋の1人が主任に彼女を'貧困墓地'へ運ぶのかと聞いた。血が頭に上った。この男は忠告されてなかったと見える、というのは今までこのアンバラワで誰一人として其処への許しを与えたものは居ないからだ。いやはや、私達はこれから未だどれほどこんな悲しい知らせを待たなければならないのかと考えると時々息苦しくなる。ドレックメイヤー先生がこの3人の悲運者達の面倒を見る事になり、そしてこの収容所の生活は再び続行して行く。

ファン デル クロフト

1943年10月4日

2週間前私達の収容所で4番目の死亡者が出た、フェルミン夫人で、3人の子供達を後に残して、この子達は今ドレックメイヤー先生によって面倒を見てもらうことになっている。彼女は精神的にも肉体的にも衰えていった。そして水曜日の午後（1943年9月29日）彼女は病院で亡くなった。全収容所がその時は又動揺した。彼女のご主人を探すべく努力がなされたが、果たされずのままだった。

ファン デル クロフト

1943年10月21日

木曜日に年配の男性が亡くなった。この収容所はその事で感傷的だった。我らの少年達が彼を洗わされ、服を着せ、そして埋葬させられた。彼はNSB（国家社会運動）党员だった。彼は幸い手厚く扱われ、私達のカソリックの神父様により埋葬された。

モドー

1943年11月1日

コレリンが再び又台頭してきた。年寄りと幼児達が犠牲になっていく；他の人々はそれぞれで無事だ。黄疸、風疹そして赤痢が今至る所に流行している。年配の大人達と子供達も同じほどに。

ブルゲルーダウファス

1943年11月3日

彼女達は両方とも風疹で既に数日ベッドに伏せている。マリアンはかなりの熱でエルスはそれより低め。今日マリアンは至る所ぶつぶつだらけだ。彼女は本当に加減が悪くえらくうめいている、とても静かに、大変可哀相。幸い彼女はとても沢山飲む。エルスは少なめだが、この子は未だそんなに加減は悪くない。今日彼女は光と喉の痛みを苦しんでいる、明日は発疹（一時的な皮膚の症状）が出てくるだろう。マリアンも又1日早くうなだれて熱っぽい。全バラックが風疹にかかっている。又この病院にいる子供達もかかっている。10月31日（1943年）にマリアンから始まり、エルスは11月1日。マリアンは11月5日に熱から解放され、発疹もその時全て消えてなくなっていた。只未だ咳が残っているだけとなった。彼女は数日相当病気があった。エルスもまた。エルスはその上熱帯マラリアにかかった。でもその症状は目立たなかったが、2日間はとても加減が悪く、全てマリアンの1日後に起こった。

モード

1943年11月17日

やっとの事でこの全収容所で再び腸チフス、コレラと赤痢の予防接種が行われる。これらは実際の所半年間有効だが普通私達はそんなに短期間扱いにはしない。この収容所内では患者を隔離出来ない、本当は必要なのだけれど。私達はまだ去年3月（1942年）ジョクジャでしてもらったばかりだ。今は風疹の上に又風疹。又年長の子供達も時としてそれから大変病気になる。私達、イエレと私は今までのところ幸いこのような災難からは免れている。

ファン デル クロフト

1943年12月10日

今夜11番目の死亡者が私達の収容所に出た。それはブルグハウトさんの男のこだった。不思議にもこの収容所では1人の女性を例外として、5歳以下の男の子と年老いた男性だけが死亡する。

モード

1944年1月9日

ワルシュ医師の要望で私達は皆体重を測定し、又強制収容される前体重が幾らであったかを申し出なければならなかった。さて：イエレ（身長1メートル70センチ）は去年44キロから48、9キロになり、私は62キロから49、3キロ。私はこれまで未だ彼にすれすれ勝っているが、50キロにはもはや達しないだろう！

ファン デル クロフト

1944年1月15日

私達は不正確な炊事場の計りで体重を計った：お母さんは64、2キロ、ミーブは48、5キロ（1943年の5月は未だ54、1キロだった）、キティは49、5キロ、アンドレアは48、5キロ、ジェテケは29、5キロ、パウラは32、3キロ、フィネケは33、5キロ、そしてハネケは33、4キロだった。

ブルゲルーダウファス

1944年1月21日

私は怠け者になっているの、ヴィム。特別するべき以上のこと以外は何もしないし、私に都合の良い事はなんでもするという具合。もう何もする気力がなくなったら、翌日までそのままほっておくわ。私が生理になった時だけは本当に疲れて気分が悪いけど、2日目過ぎたら鶏のごとく又元気になれる！医者が言うには私達、洗濯や炊事に煩わされない事だと。さもなければ辛抱できなくなるという事には私も全く同感する！嫌いな日本兵達の為に奴隷の様に死ぬ事は無いわ。貴方と再会する時には私も未だちょっとは若く快活でいたいもの！

ファン デル クロフト

1944年1月23日

昨日の午後ここ収容所でフッセンソン氏が心不全で亡くなった。彼は心臓病患者であったのでこれはいつの瞬間にも起こり得ることだった。昨日の午後彼の娘がベッドで亡くなっている彼を見つけ、大変なショックはもちろんの事だった。今日の午後2時に彼は埋葬された。この収容所ですでに12番目の死亡者だと思う。全ての年少の男の子達と年配の男性達が死亡する、

という事が全く本当に思える：そして他の者達は銃殺される！今は4時で私は歩哨の所へ行って来たが、その人は未だお棺の中にすら入っていなかった！お棺は未だ歩哨の所だ。彼の奥さん（現地人）は門の所に立っていた。彼女はサラティガからやって来たが、中には入らせて貰えなかった。サラティガに彼等の家族墓地が有る。彼女等はあらゆる努力をしてこの死体を其処へ持って行こうとしている。この死体がここにおかれて多分二晩目になる。このバラック小家屋にはあまりにも多くの溝鼠や家鼠がいる為、昨晚と一夜中は娘と1人他人が夜番をしなければならなかった。気持ちの悪い話。

チャックスーグレイン

1944年1月27日

今週ここで年配の男性が亡くなった。彼の娘が3時10分前に彼のもとに着き、彼は3時に死んだ。これがこの実態だ。父と娘が強制収容され、妻であり母である者は、少しでも印人に近ければ（そして其れゆえに）外に置かれる。この妻は忠告されてはいたが、この収容所では彼女の主人を引き取る事は許されていない、お棺は良かった（これはあらゆる手続きで翌夜中11時までかかった）。其処に入った死体に、娘と数人の知り合いが門まで後ろに続いた。このお棺が門を何とか通るや否や中に立っていて手に持っていた花束をお上に棺の上に置く事さえ出来なかった娘の鼻の前に戸が閉められた。外に立っている母親は娘すら見る事は無かった。この娘はただ何時に彼が息を引き取ったかを大声で叫ぶだけだった、そして・・・さようならも。

モドー

1944年2月18日

今多くの婦人達が、熱帯性潰瘍に悩んでいる。其れが肉に深く食い込んで治癒がとても難しい。実際、治す薬がほぼ無くなってしまっているのが状態を悪化させているのだ。食料も徐々に少なくなってきている。去年の今頃は未だ良かったがその時私達は既に文句だらけだった！後1年立ったらどうなっている事やら？

ファン デル クロフト

1944年2月19日

木曜日の夜中私はとても気分が悪くなりお母さんもところで同じ。前日に私達は骨を茹でたス

ープを食べたが其処にかなり沢山の脂肪が入っていたに違いない。それに私達はもはや耐えられなかった。

モドー

1944年3月6日

私の体重は今47キロのみでイエレは49, 5キロ。

ファン デル クロフト

1944年3月9日

ハネケはこの病院に自ら余りに期待しすぎた。最初の2日間はとても快活だった。でも今までの所訪問時間が終わったらほぼ毎日泣いていた。其れを見るのはとても可哀相だ。私達はワッシュ夫人によって作られた人形の体の部分に愉快的頭を乗せた。彼女は大喜びだった。又人形用の服の入った手提げカバンも貰った。私達は今毎午後びっくりプレゼントをしている。彼女は幸い徐々に回復に向かっている。彼女は既に1度ミルク粥を貰っている。後は未だ果物だ。明後日で彼女は入院2週間になる。

ファン デル クロフト

1944年3月24日

ハネケが出て明日で4週間だ。彼女は今日始めてご飯、野菜そして肝臓を食べる事を習った。皆体重測定をして、一様に減重していた。私は2ヶ月の間に5キロに2オンス少ない、4, 8キロ痩せた。

ファン デル クロフト

1944年3月27日

大人しくしおらしくなったハネケが退院して来ている。彼女は空腹で、お皿一杯食べている、しかも幸い・・・1人で！これは彼女があそこで少なくとも習ったのだろう。

ブルゲルーダウファス

1944年5月16日

私は何と痩せたのかしら、ヴィム。骨だけ。ベッドに横になる時は未だに蹴躓いているの。貴方が帰ってきたら貴方の帽子を私の肩甲骨に吊るす事が出来るわよ！エルスはすごく太って頑丈だけどマリアンは華奢のままに実にお人形みたい。そして彼女が何か特別な物を貰うと、其れは必ず彼女のお腹に来て、其れでとても苦しむのよ。私は最近彼女を連れて医者に行ってきたけど、この人は私をととても安心させてくれたわ。彼女は日に1本のピサンを処方してくれた。これを余分に貰える。これは有りがたい。私達は再びもっと多くの果物が手に入る。私が前回書いた時、5月1日（1944年）はまだ最も少ない時だった。ひどい状態だったわ。その時私はどんなにマリアンのことを心配したことか。今の様なら本当に一息つけるけどね。

ファン デル クロフト

1944年5月28日

又2人赤痢に亡くなった。この病院は拡張された。

ブルゲルーダウファス

1944年6月2日

再び強力な赤痢の突風が吹き荒れ、2人の子供が亡くなった、ゴーチェ バイレイベルドとファン エルベンの赤ちゃんだ。他の色々な子供達も未だとても加減が悪いが、持ち直す事だろう。そして年長の少年もまた亡くなった、ヨーブ ヒルケマ、11歳だ。ひどかったわ、嫌な時代、ブルブル。

ファン デル クロフト

1944年6月17日

お母さんとシスター マリージョセフが大変加減が悪い。彼女等は未だ高熱が続いている。昨夜は両方ともカンフルの注射を受けたが、タンゲルダー婦人はお母さんの横に付いて寝てくれた。今日は熱が強力に下がったが、其れが持ちこたえられるまでは。

ファン デル クロフト

1944年6月30日

今日もまた再び多くの赤痢患者。パウラも今高熱で横たわり薄い便をベッドでした。

ファン デル クロフト

1944年7月3日

とても多くの赤痢と思われる患者達がいる、特にマゲラン部には。出来る限りの患者達が病院へ、その中にはジェテケも。

ファン デル クロフト

1944年7月4日

キティとフィネケも傍に横たわっている。お母さんは外来患者として病院へ行かされた。パウラは熱で病院へそしてキニーネ粉末を貰い水無しで飲まされた。1日中彼女は泣いていたが、後で又スモモを褒美として貰った。

ファン デル クロフト

1944年7月6日

お母さんは2日目になるが今日又調子が悪く私が傍に付く。私も血と粘液が便についているらしい。アンドレアは洗濯でとても忙しい。フーツェン夫人とファン デン ドップ夫人は何かと手伝ってくれる。

モードー

1944年7月8日

沢山の赤痢患者がいるが治す薬が無い。又キニーネも少なくあるのは粉状のものだけ。普通の甘い錠剤はもう製造されていないらしく、伝染病用のセルムは私達用には全く残っていないらしく直り様が無い。

チャックスーグレイン

1944年7月16日

其れ以来再び嵐が私達を襲った。まず5番バラックの一大事はある種の赤痢で、結果的には良性に終わったが、最初は混乱を引き起こした。死ぬほどの気分の悪さ、血と粘液と高熱。殆どの婦人や子供達が病院へ運ばれて来た、私も其れにかかったが、私は子供が近くにいない部屋に寝ていることから我が家に留まる事にし1週間で再び回復した、でも余りに疲れ果ててしまった。私は今ほんの60キロで何となく青白い。疲れる、果てしなく疲れるので丈夫になる為5日間150グラムのミルクを貰うことになっていたが、間違いで1日ごまかされてしまい、まさに災難と神経質になって大泣きに泣いた。

ブルゲルーダウファス

1944年7月16日

明日私達は再び腸チフスーコレラー赤痢の予防注射を受ける。前回は12月（1943年）の終わりだった。

モドー

1944年8月9日

今日この収容所内に大騒動があった。3人のオランダ男性がカバンを持って中へ入ってきた。チマヒの1万人の一般人強制収容所出身の医者達らしかった。その中にはスモウオノ族の女医が居た（ネウエン医師、国民産議会⁵²の委員だった、聞くところによると、彼女のご主人は降伏直後【1942年3月】日本兵に殺された）、これで私達には今この収容所に既に5人の医者達がいる。何と私達は健康になれそうだ！男性達はもちろんご婦人達から旦那の事、息子達の事、等の質問攻めにあった。目立った事には、彼等は日本人にとっても丁寧にお辞儀をする、私達はそんな勝利者が近づいて来る時に偶然を装って他の方を見ているというのに！

⁵² 国民評議会は蘭領東インド政府の顧問機関であった。

ブルゲルーダウファス

1944年8月11日

ところで又ちょっと特別な事が有る：3人の男性が中にやって来た、一昨日、突然、50歳前後の3人の医者達。この人達は私達の健康状態を改善する為に民間人強制収容所から引き抜かれてやって来た！ヤレヤレ、彼らだって薬も無ければ食物も供給できないとすればたいしたことも出来ないだろうに！とはいえうれしい事だ。彼等は又色々な情報を持ってきて多くの女性達は彼女等のご主人からの一報が聞けた。

モード

1944年8月19日

昨日私達は又新しい医者達によって体重と身長を測定した。私は益々衰えていく。体重は43, 6キロ(身長1, 67メートル)、イエレは今丁度50キロで3月(1944年)以来ほんのちょっと重くなった様だが、身長もまた伸びている。今既に1, 76メートルある。ネウエン医師の到着直後彼女の積極的指導で食料配給が定められ、4歳以下の子供達は全ての半分は貰える。6歳までは4分の3、そして12歳から16歳までは1+4分の1。この最後の分量は今男性医師達も貰えるので、彼等は思春期の子供達と同等に扱われた！私はとてもうれしかった、というのはレレがもっと貰える事になったからだ。其れまではいつも私の分を彼に分け与えていたし、其れは実際私に全部必要な物だから。

ファン デル クロフト

1944年8月21日

3人の医者達がこの病院へ任じられ私達を再び測定した。お母さんは54キロ、私は48, 7キロ、キティは52, 5キロ、アンドレアは45, 7キロ、ジェテケは27, 4キロ、パウラは28, 5キロ、フィネケは32キロそしてハネケは15, 7キロ。

ブルゲルーダウファス

1944年8月22日

エルスが既に3日間入院している！土曜日の朝突然彼女は其処へ行かねばならなかった。私は良くなったものと思っていた。熱も無かったし大便もしたのだが、突然血を伴った数個の粘液

片が出て即入院となった。彼女はその他調子は良く、何も心配する症状も出ずまづまづの気分と見える。家に居る時よりとても大人しく、面会時間が終わって私が帰る時はライオンの様に泣く。彼女は最初果物食療法のみだった。そんなに沢山の果物をここ何ヶ月も見たことが無かった。今はもう柔らかいご飯とミルク粥を食べ私は自分の野菜畑で取れたトマトを彼女に持っていく。

ブルゲルーダウファス

1944年8月28日

エルスが再び家に居る。昨日の午後。全てが又順調だ。でも今マリアンが昨夜又熱39度2部出している！この子には何が起こったんだろう？風邪を引いていたが、其れからこんなに熱が出るのか、ヤレヤレ、ワルシュ医師がすぐ来てちょっと見てくれる。

モードー

1944年8月29日

私の誕生日は今回なかなか特別だった、楽しさを除いては。私の便に血と粘液が付いていた為、赤痢であり、今朝この収容所に留まって以来初めて医者に来てもらわなければならなくなった。今日は初めて又外出した、というのは私の場合かなり軽症だったのだがこのようなお腹の病気はいつも少なくとも1週間安静にしていなければならない。これはでも不思議だ、今これにかかるなんて、1ヶ月前に再度注射をしてもらったばかりなのに！

イエレは最初の数日私を介抱してくれたが、彼自身気分が悪くなり先金曜日彼をベッドに送った：マラリア。これで2回目だが丁度私が看病できないこの今そうなるなんて。其れ故に彼は日曜日の朝即少年診療所と呼ばれる男性医師達と数人の修道女達によって優良な治療と看護をしてくれる病院へ入院した。私は今積極的な隣人の婦人達の助けを借りていて有りがたい。最初医者はちょっと入院させようとしていたが、幸い其れはしなくて済んだ。死んだ方がましなもの！

ブルゲルーダウファス

1944年9月3日

私は又奥歯を取り上げられた、ヴィム。1本の親知らず、右下。突然大きな穴が開いているのに気づき、ここで最初のような同じ災難に再び会うという恐怖から即シスター マリージョセ

フの所へ走り、彼女が抜こうとした（麻酔無し！）。この婦人は即ペンチを手に持ったが、この歯は抜けなかった。厄介だ、これはまるで拷問だった！最後にこの全ての受難を差し引いて思ったのは：未だ数ヶ月この歯痛に苦しむほうがこの同じ事を又やられるよりましだと！

数日前突然シーフが、ファンレーント医師が麻酔をして抜いてくれると言いに走って来てくれた。彼は残り1個のカプセルを見つけたのだ。私は恐怖と震えで其処へ！思ったほどでなく彼は早く終わらせてくれた。これは奇形で根が炎症を起していた厄介な物だった。再び家に戻った時数時間最悪な気分の悪さを感じ、ひどい後痛と今数日経っても未だいつも痛い。これらの筋肉を使い過ぎたと私は思う、特に最初の時。其れが余りに長く続きひどい痛みだったから。今朝（医者からの）錠剤は未だ大丈夫かどうかちょっと見てみたが、幸い全て正常だった。食べるのは未だ辛い、アアア 全くやるせない。とは言えこの歯が抜けたのは本当に天国だ。

今朝ロダー医師が数人の回診の中にやって来た。喉に何か有りそうに思ったが、早く終わった。シーフがその内伝えてくれるだろう。彼はセントルイスに居る。（・・・）今既にビタミンと淡白不足のかなりの数の婦人や子供達が居る。彼等の足に赤い斑点が出、痩せこけて腫れた顔つきだ。

チャックスーグレイン

1944年9月7日

私は又1週間腹痛でベッドに横たわっている、腸が完全に混乱している。厳しい食事療法、つまり日に1人分の柔らかいご飯、150ccのミルクと果物があれば、に従った。それらは残念ながら全く無いのではあるが。'味の無い枇杷'、とヴェールト地区では言う。

テフェルデ

1944年10月13日

かなり沢山の人が今'腸チフス熱'と呼ばれるものにかかえている。何週間も長く、毎日高熱で体が衰弱しとても大変だ。医者達は対処の仕方が解らずにいる。

ブルゲルーダウファス

1944年10月22日

あまりに多い病気、余りに過酷、余りに望み薄。もはや見覚えが無いほど、余りに惨めな顔つ

きのの人を何人も見る。そしてこの人達は何度も新たに病気にかかり、マラリア、お腹、熱帯熱、次から次へと。回復する時が無い。この前私は手伝って朝に人を病院へ運んで行った。其処には3部屋後ろに続いていて、私達はその最後の部屋まで歩いた、だから長く全患者の列に沿って。皆一様に青白く静かで痩せていて、惨めだ。コビー ハースマは既に余りに長く入院している。この子は完全に透き通って白く、痩せ細って全く良くなっていない。或いは結核かも？その病気ではないと言われているが、ワルシュ医師などとはとにかく何も言った事が無い。病院内自体もまた多くの病気がうようよしている。子供達が一番回復しやすい。私達の幼児達は良好で、快活且愛らしく悪戯で、彼女達の母親の喜びである。本当ヴィム、私は毎日が彼女達と一緒にとてもうれしいの。彼女達に恵まれた事をいつも神様に感謝しているわ。私の宝。

ブルゲルーダウファス

1944年10月30日

沢山の女性達がここでは腫れた顔と生理の止まったお腹、そこに加えて足に有る赤い斑点の為座っていなければならない、事に苦しんでいる。この足はだから痛くて彼女達は過度の疲労を訴えている。彼女等はこれ用に酵素を貰う。これはここで作られている。先週ジャクジャのムルダー夫人が亡くなった。彼女は50歳前後だった。彼女は最近かなり痩せ細っていた。又心臓病も持っていたと思う。彼女は完全に落ち込んでいた。彼女の25歳くらいの娘が一人後に残された！誰かが死ぬのはいつも惨めよね、彼女の場合医者達に言わせればどちらにしても長くは生きられなかったらしいが。貴方方の所でも沢山の男性が死んでいる？多分私達の所より少ないでしょうね、だって年配の人が全く居ないもの。

テ フェルデ

1944年11月4日

ある日ロダー医師と母の事について話をした。これではそんなに長くは持たない。母は長期になればなるほど衰弱し痩せて行く。そしていつも腹痛持ちのヤンでも困っている。今医者には母を° 外来患者° 扱いにしてくれるだろう。以来彼女は毎朝9時に椅子を持って病院へ行き食後まで休養してくる。其処ではミルクとカップ一杯のスープ、昼食はもっと多く貰える。つまりが脂肪肥やしの類だ。其れから私は朝早く病院へ行き、家で後沢山の面倒を見る為10時半には帰って来る。母は午後再び出かけ夕方には帰って来る。私は其れを本当に楽しみにしている。

テ フェルデ

1944年11月10日

多くの人が近頃は'腫れた'足を持ち、足に痛い赤い斑点が出ている。ビタミン不足と医者達は考えている。私の右足も軽く腫れている。後はなるべく長く足を高くして又その状態で寝なければならぬ。母は未だ結構楽しんでいる。修道女ファン レントとデー家の人々は良かれと思って可能な限り口に押し込む。だから母は其れに関しては感謝すべき対象物だ。

ブルゲルダウファス

1944年12月12日

シーフ ドルストは今日盲腸の手術を受けた。今にも其れが飛び出てきそうなので、ロダー医師は8時半に始めることになっている。今はほぼ9時。彼女はずいぶん長い間苦しんでいた、ひどい激痛ではないがなかなか厄介な物だった。今は回復を望んでいる。土曜日は緊急手術があり、ヘルニア インカルセラタ（腹膜破裂で通常は死につながる）で、他の収容所から中に運ばれてきた。（この患者は）持ちこたえられなかった。同日の夜中長い間終局を待っていた1人年配の男性が死んだ、1人の若い男の子もまた既に駄目だった。残念だ、3人が断て続きに、其れは嫌な日曜日だった。

ファン デル クロフト

1944年12月14日

火曜日（1944年12月12日）ハネケが又血と粘液（陰悪な、汚物）の為新病院へ入院した。そして今日の午後彼女の近くに居た10歳の女の子が亡くなった。近頃は多くの死者が出る。今ではもはや通知されない。10時に死ぬと12時にはもうお墓の下に眠っている。母と私が一番ハネケを恋しがっている。私はあらゆるプレゼントで彼女を甘やかしている。

テ フェルデ

1944年12月15日

腸チフスの熱は再び通り過ぎた様だが、今は本物の赤痢の爆発だ。誰もがこれをお腹に持っている。昨夜になってから加減の悪くなった7歳の子供が今朝亡くなった。とにかく恐ろしい、人々はこういったショックにはもはや耐えられなくなってきている。

テ フェルデ

1945年1月1日

今朝早く私達の部屋の1人の婦人が亡くなった。彼女は既に数日病院に入院していた。何処も彼処も衰え腹痛が長く続いていた。それから私自身もまた今にでも熱が出そうだ。何だか理由は判らない。

ブルゲルーダウファス

1945年1月10日

エルスと私はペストの予防接種を受けた。マリアンは加減が悪かったばかりなので未だしていない。

ブルゲルーダウファス

1945年1月23日

私は疲れた、ヴィム、余りに疲れた。もう駄目だと思う。手は錘のようで、足も同様夜中になるといつも背中が余りに痛い。朝とても早く起きるのはベッドに居たくないから。何度もまるで全てが落ち込んで行く様で、今足が腫れだんだん駄目になっていくのではと息苦しくなる。

チャッケスーグレイン

1945年1月25日

災難は益々うなぎ上りだ。多くの死者。ファン リーンチェ デ ハーン叔母さんもその1人。私達は既に患者達に犬まで殺して食べさせるという状態まで来てしまった。多くの人が腫れた顔、手、足をしている。これは益々ひどくなり未だどれほど長く続くのか？私の手はまずまず良好だが皮がたるんでしまった、見られたものではない。私の体重はほんの55キロ。全てごそごそになった。勝手になるが良い、他にもっと大変な事があるのだから。昨日25歳で2人の子持ちの若い奥さんが、彼女のご主人が何処かで落ちてその傷口から亡くなった（1944年5月8日）という知らせを受けた。

グメリフ メイリングーエーケルズ

1945年1月26日

食糧事情が今のところとても不安定だ。米は貰えるが、その量は又少なくなったし野菜はもう殆ど残っていない。病院は困っている。今週1週間で16人の死者が出た。今までのところ未だお棺が有ったが、日本兵が告知する事にはもうお棺は無いと！栄養不良浮腫の場合は終わりが無く、女性達の一般状態が大変悪い。でも日本兵は言う：'弱者は死に、強者は衰弱するだろう。'ヤレヤレ、このおっしゃる方向には既にとても上手く進行しております。

ファン デル クロフト

1945年2月7日

月曜日の朝ドーレンボス夫人の6歳の男の子が4日の間に栄養不良浮腫で亡くなった。彼は肺に水がたまっただの。

ファン デル クロフト

1945年2月7日

今朝命令が来て、私達1人当たり60本の髪の毛を約15センチの長さで供給させられる。其れらから彼らが私達の健康度を見る事が出来ると言うのだが。

モードー

1945年2月16日

10日前渡は自分の体温を測ってみた。既に少なくとも1週間大変気分が悪く、驚いた事に39度2分まで上がっていた。ベッドに潜り込んだ時からもう起きあがって来る事はなかった。こんなに弱く物憂げに感じた事は今までになかった。私は既に数週間大変な風邪を引いていたので、医者是最初マラリアか流感か疑っていた。2日後熱が下がった時、私達は後者の方だったと思ったが、今日明らかに黄疸が出ているのが判った。何と、私のこの年で！全てがひどく味気なく気分が悪い、でも骨に皮だけなのだから何せ食べなければならない。

ファン デル クロフト

1945年3月7日

昨日ヘイネ夫人が続いて栄養不良浮腫で死んだ、2人の子供達を後に残して。彼女はカソリックだった。お祈りはあったが、彼女を見ることはもはや許されなかった。

ブルゲルーダウファス

1945年3月24日

私達が書いていた間貴方方からは何も受け取っていないわ。バンジュビル抑留所から聞いたところではズワーン医師とフラマンと医師も亡くなってしまったとか。悲惨だわ！ここでは又多くの人々、年配が死ぬ。毎日ほぼ1人が、多くはバンドンから。ここに一番長く居るグループ、ジョクジャ部、マゲラン、そしてアンバラワは死亡者がえらく少ない；其処は又殆ど年配の人が居ない。

チャッケスーグレイン

1945年3月29日

私の体調が少し良くなってうれしい。多くの女性達は過労で倒れ、日に日に男性達は白髪が増え顔つきも老け込み日焼けして行くのは私達が1日中外で生活しているからだ。

モードー

1945年4月8日

一般不思議な収容所の現象としては、殆どの婦人達、又若い女子達には生理がたまにか或いは全く来なくなっている事だ。すごく楽でいいのよ、特に今私達には全く石鹼が手に入らないから！

チャッケスーグレイン

1945年4月20日

栄養不良浮腫患者と死者の数が急速に増してきている。ラネフト夫人はもう助からない、可哀

相な人。彼女は彼女の娘を訪ねてやって来て、ここ深い憎しみのアンバラワに埋葬されているのだ。彼女が愛したグロニンゲンを再び見られることは無いだろうが、行ってかえって彼女が幻滅したかもしれない事から良い思い出だけを残せたのではないだろうか。

7番収容所から一人の男性が手術の為運ばれてきて、ここでバンドゥンから来た彼の妻と2人の娘達を見つけた。昨日彼は亡くなり、彼の妻は大いなる回復の望みの無い難しい病気にかかっている。栄養不良浮腫。これが悲劇でなくてなんだろう。最初お互いが引き裂かれ、其れから一緒になって娘達は両親の死に目に会うなんて、この収容所で貧しく埋葬される事は二重の悲劇だ。これらのお棺はもはやカンナがかけられていなかった。釘も私達が自ら何処から抜いて来なければならず、最初のスコップ一杯の土がお棺にかかった時、蓋が既に折れ曲がり、収容所責任者と一緒に唯一付いて来る事を許された人、もし誰も居ない場合には一番の知り合いで来たがっている人の目の前でこれらの死人達が既に泥だらけになる。大昔からのグロテスクな古い霊柩車に乗ったこの死体は、1ギルダーを強請る、其れは収容所の金庫から支払われるが、嫌な奴等の手で荷台で後運ばれて行く。

ファン デル クロフト

1945年5月28日

昨日の午後私は初めて手術に立ち会った。盲腸の手術だ。最初は局部麻酔だったが、長時間に渡って盲腸を探しまくったあげく見つからなかったので、彼女は全身麻酔されこの「物」を見つめるのに更に2箇所へ渡って奥深く探索し、其れは腐敗しつつあった。私は其処へ行く事に相当抵抗があったが、一度見てしまえば其れがごく普通に思えた。その後私達は一杯のコーヒーとケテラのごった煮（キャッサバのごった煮）を貰い、其れから洗い物と拭き掃除をしなければならなかった。4時半に其処へ行き終わったのは8時だった。

ブルゲルーダウファス

1945年7月8日

その間ここ収容所内は駆け足で悪化していつている。私達はずいぶん沢山の糊を貰い後は災難にも食べ物が少ないときている。ここには既に800人もの栄養不良浮腫患者達が居る。1日中空腹にぶつぶつ言っぱなしで、食べ物に文句を言うか食べたがらない子供達に気が狂わんばかりだ。エルスは後者のほうだ。この子は先週塩まみれのご飯のみを欲した。私が彼女を連れて診察に行ったとき、7個のビタミン錠剤を貰った、総合ビタミン剤。彼女は未だ2錠飲まなければならない、1日1錠。そして食事療法、つまり柔らかいご飯と特別な野菜、しばしば人参とサラダ菜。彼女はこれが気に入り突然再び全部平らげた。行って良かった。今又残念な

がら彼女の調子が良くない、彼女の目の上に傷が出来今彼女の顔が鼻の上から腫れている。私はここを冷やし続けなければならないし彼女は痛がっている。赤くは無い、栄養不良浮腫とも思える。傷はたいしたことはないけど、其れかと思うととても恐ろしい。彼女は朝中眠りつづけている、私の可哀相な子羊ちゃん。私自身既に今月又2回も病気になった。最初はマラリア、2日間40度以上の熱でもものすごく気分が悪く今は腹痛だ。再び1日40度以上の熱でさすがに嫌になってしまった、ひどいのよヴィム。そしてとても寒い、凄く！私は粉薬、サルファエーグアニジン、正しく書いていけば良いけど、を貰いこれが実に効いた。この2日間私は何もしなかったが今はずいぶん良くなってきている。未だ私のベッドに座っているのは其処が未だ暖かく居心地良いから。

ブルゲルーダウファス

1945年7月20日

(この病院の夜警勤務の間) ここには11人の患者達が入院していて、大半が栄養不良浮腫、2～3人が続く高熱で一人は洗濯場で後ろ剥きにひっくり返った。あそこは通常とてもすべすべしている。後は2人重症患者達が囲われた片隅に居る。其処には常時看護婦が居る、マリー・ホーゲンドーレン、彼女は私のすぐ近くに住んでいる。其れは幸いな事だ。彼女は結婚する前に2～3年ここインドネシアで働いていた。私がここに留まるかどうかは判らない。たぶん他の病室へ行くだらう。今ここには8室あってそして未だこの収容所のほかの後方に3室ある。たくさんでしょ？—毎日1人死者が出、皆栄養不良浮腫。恐ろしい。ここに25歳ぐらいの2人の姉妹が居るが、栄養不良浮腫。一人はとても悪く、其れ故に他の一人も寝られない；彼女の妹の事が気になるからだ。この母親もこの収容所に居る。シレビス スミット夫人もここに入っている。彼女はマラリアだと思う。報告書は紙の欠乏でかなり限りがある。大半は口上でおこなう。蚊が一杯!!

ファン デル クロフト

1945年7月23日

最近再び沢山の人々が死んでいく。この少年収容所には数人の年配の男性が生き残っているだけとなった、この人達はここに來た事がある。数日前ここに14歳の少年が腸の手術を受ける為運ばれて來た。これは全く健康な少年ではなかった。彼は既に一度盲腸の手術を受けていた。手術後彼の母親がバンジュビルから來ても良いことになっていた。彼はその前にディデリッヒ神父様の前で懺悔をした。数日彼は生死の間をさま迷った。一昨日の夜彼は12時10分後に亡くなった。午前中彼の母親は來る事を許され慰め様が無かった。血と泡が彼の口に付い

ていた。私は彼を他の収容所から既に積みこまれていたお棺を乗せた霊柩車まで一緒に運ばなければならなかった。私達からの一つのお棺はその横に、少年の物はその上にしなければならなかった。女織工達は外でこれらの積み込まれているお棺で満杯の霊柩車をかなりよく見かける。ここに入ってくる竹製のお棺は脆い物だ。

ブルゲルーダウファス

1945年7月28日

ヴィム、私エルスの方が心配なの。彼女は既に長い事食欲が無くて。実際最近はとても良くなってきた所だったのに。彼女はワルシュ医師から特別食を貰っていて普通食より美味しいらしかった。でも彼女は顔色が悪く、灰色をして痩せている。前は私が彼女を測ったが、約3ヶ月前で、彼女は15キロ余りだった、そして一昨日は14, 4キロ！其れから再び彼女を診察に連れて行った。今彼女は葡萄酒とミルクを14日間貰い、これが終わって今日は何も無かった。ビタミン剤も貰っていたが変り映えはしなかった。彼女のヘモグロビンは60すれすれだった。今日彼女は普段より良く食べた。私は其れだけでうれしかったが、今夜になって急に腹痛が起こった。2回そして1回は嘔吐した。丁度私が外出した時彼女の体は又熱かった。アネケが幸い添い寝してくれたが、全く嫌になってしまう。栄養不良浮腫で無ければ良いのだが。このところの週は彼女も少々回復して再び良く遊び余り泣かなくなった。暫くの間は大変で何度も寝転がって長い間何をやる気力も無かった。貴方も知っての、この灰色は私を実に心配させた。何度もびっくりさせられた。そしてマリアンが（マラリア）テルティアナにかかり、今回は肯定だった。彼女は1日病気で、キニーネをちょっと飲んだがその後はすこぶる元気だ。

ファン デル クロフト

1945年8月15日

沢山の重病患者達がムンティランから連れてこられ、その中には4人のカトリックの修道女達が居て、その内の2人死の床に居た。痴呆症の修道女は昨日死んだ。この短期間に既にムンティラン⁵³から7人が死に、其れから未だ私達の収容所からもかなり。これは恐怖であり、悲劇だらけ。至る所で腫れた足を見る。

⁵³ 1945年8月初め何百人もの抑留者達が、放棄されたムテランキャンプからアンバラワ第六へとやって来た。

モードー

1945年8月19日

すぐ43歳、ブルル！白髪、ぼろぼろの歯、至る所皺と弛み。元気が無く全く記憶力もなくなつた。私は自分が恐ろしい、とはいえ他の大勢と比べてみたら未だ完全だし感謝する多くの理由は私の体の調子良さに有る：視覚も聴覚も未だ最高に良く機能している。マラリアも私は未だかかっていないし傷も私に関してはとても簡単に治る、他の人々がマチ針に刺されても潰瘍にまで進み、何ヶ月も長く直らないでいるというのに。

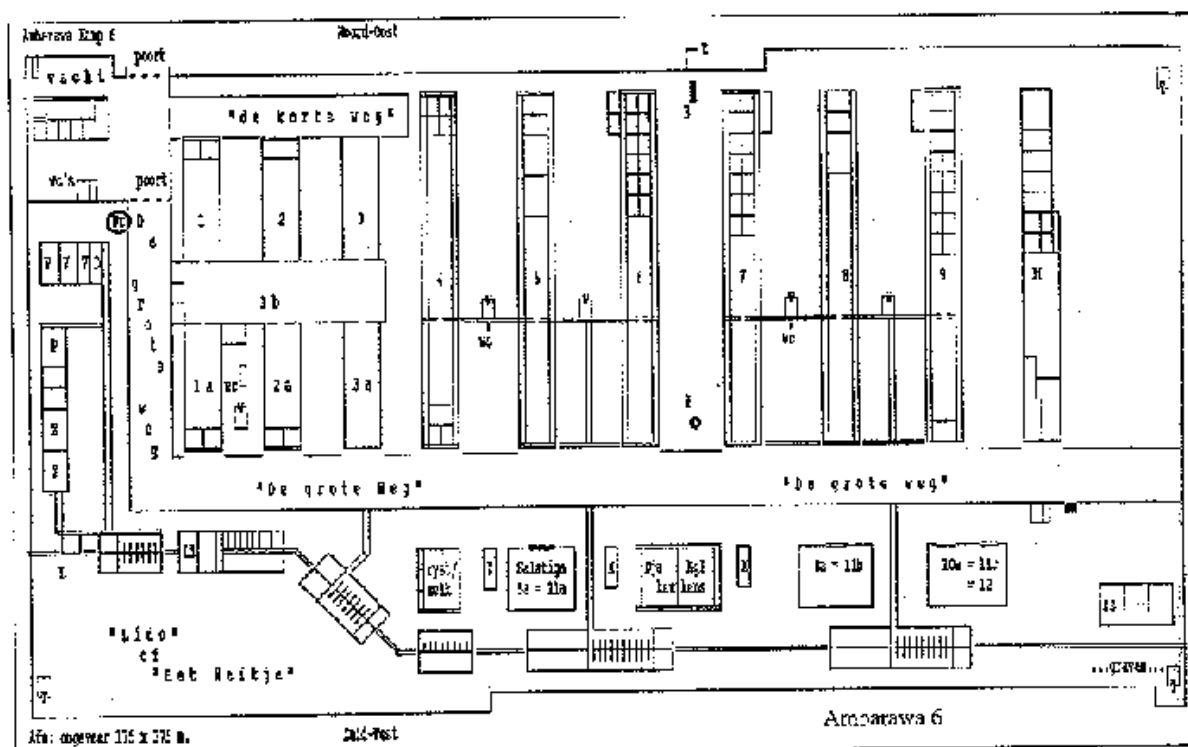
ブルゲルーダウファス

1945年8月22日

私達のエルスは既に1週間入院している；腹痛後栄養不良浮腫になり、其れは既に私の恐怖の的だった。彼女は余りにはやく収容されたので2日後は良くなりもう起こらなかった。その特別な食べ物が奇跡を起した；彼女はミルク粥と、毎日コップ1杯のミルクと何か果物そして有ればお肉、奇跡的な特別食とはとても言えない物ばかりだが、でも効き目は有った。私は彼女に出来る限り沢山のトマトを持っていく。パンと交換してもらうので私自身ちょっと空腹だが、頻繁に自分でパンを焼く。今はペウイェム（発酵させたキャッサバ）から酵母菌を作ることが出来るので、米ともケテラ粉（キャッサバ粉）とも上手く合う。後はただ誰か炊事勤務の人を探し、その人にバケツ1杯の燃えている灰の準備と焦げない様に気をつけてもらうことだ。でも其れは頻繁に成功する。今までの所何度も美味しそうなパンを受け取った。



ジャワ



アンバラワ 6 の地図

出典：H.Beekhuis 編纂 Japanese burgerkampen in Nederlands-Indie part 1: Java (発行：1996).



4 時に 点呼: C.M. Langenberg-van der Krogt 作.



カワッテン；禁制取引: C.M. Langenberg-van der Krogt 作.



炊事場雑役: C.M. Langenberg-van der Krogt 作.



ファン・デル・クロフト 収容所内病院で働く: C.M. Langenberg-van der Krogt 作.

家庭教育、気晴らしと宗教事

チャックスーグレイン

1943年1月16日

感情に走った朝の後はちょっとは休息できるかと思ったけど、とんでもない。其れは落ち着かない気分を駆り立てる。又何かを書き綴ったり、私のマリア様と少々お話をしたり、そして‘太陽の輝き’を見つめている事でやっと又気分が良くなってくる。

モード

1943年2月4日

私達の‘教育課程’（学校、私は週に6課程授業をするが、公には学校は禁止されているので無い）と平行して私達は今又‘気晴らしの夜’、主にダム、チェス、ブリッジ、歌、体操、等を若者や年配者達にしている。イエレも一緒に最初の2つに参加し、私は歌に参加。

ブルゲルーダウファス

1943年2月22日

まだ私だって笑う事がある。今夜私達は笑いこけた：私達は炎症クラブというのを設立する。炎症を起した事のある人だけ会員になれる。ハニーは腕に神経炎を起し、少なくとも、未だ痛くて医者はチャルコット飲み薬を処方した、故に私は彼女を入れた。シーフ（ドルスト）は顔が歪み、私は静脈炎そしてフェミーは背中が痛い、だから腱鞘炎ということにした。私達の合言葉は：ルポー、テュモー、カロー、ドロウ！そしてこれはイティスクラブ、と呼ぶことにする。健康な者は省かれる。その人達はクノレンだ。馬鹿な事をするでしょ、私達って？でも大笑いする事って楽しいし、シーフとハニーが一緒だと最高に面白い。

ブルゲルーダウファス

1943年2月25日

私は沢山探偵小説を読む、まめ本（ポケットブック）はここ収容所内にかなり沢山有る。そして今私は英国の著名なトーマス ハーディの‘ザ リターン オブ ザ ネイティブ’を読ん

でいる。彼については今まで聞いた事が無かった。トッパーという本を私は貸してあげた、それは次から次へと手渡って行く。誰もが楽しんでいる！でもただこれはある種の女性達だけが理解でき、私も又その人達のみ貸すのだけれど。

ファン デル クロフト

1943年3月13日

今朝8時半にアンドレアはハネケを初めてフルベル学校（幼稚園）に連れて行った。彼女はハネケを早急に先生に手渡し泣き叫んでいるハネケを後にした。半時間後彼女は一人で帰ってきて‘UNCH’をしなければならぬと言った。彼女がとても気に入って喜んで学校へ行く事を皆から誉められた。彼女が話すには、‘優しい先生のとほひ（り）’に座って‘タラ、バン’を歌ったそうだ。‘私の学校見たい、フィン？’彼女はとても大人っぽい口調でフィネケに聞いた。‘だったら私を連れて行きなさい’。こんな風に私達の3歳児の甘やかされた小さな妹は再び颯爽と学校へと歩いて帰って行った。

ファン デル クロフト

1943年3月13日

昨日丁度ノヴェネ⁵⁴が終わり、その中で私達は早急な家族全員の再会を、それが可能でないのなら‘私達の心の支えになる何かを’お祈りした。そしたら見て！家族の再会ではなかったけれど、神父様だ！アンバラワのディデリッヒ神父様で、バンジュビルで他の神父様たちと一緒に強制収容された人、が11時半に荷物を持って中に入って来られ年配の男性達の寝室の1つのベッドを頂かれた。

ブルゲルーダファス

1943年3月18日

さて、私は30歳。今日は泣かなかつたしそれどころかなかなか和やかだった。今朝以外は、と言うのはエイミーとフェミーがコーヒーを飲みに来て、自分達とその時居たハニーとだけで話をし、しかも食事についてだけ。これ以上嫌な物はない。エイミーが私の所にやって来たのはこれが初めてでそして無礼な態度だった。彼女は最初フェミーにコーヒーを飲みに来

⁵⁴ 9日間連続して唯一の願いを神様、マリア様、或いは聖霊に祈る。

ると言わせ、だから私は充分コーヒーが有る様に準備しておいたが、来て座った彼女の雰囲気はこうだった：追い返せはしないわよ、全ては私の物。ヤレヤレ、何処にも物が無くて私は何も出す物が無かったし、この水コーヒーですらが救いだっただ。その上クウェー タレム（プリン）或いは屑と呼んでも良いその作り方についてくだらない話を喋る！

幸いハニーの息子達がやって来てエルスとマリアンが其処に居たので何か飴を食べさせておいた。子供達はしばしば大人達よりも手がかからない。夜はゲルダとヴェラがやって来てとても楽しかった。その時はパンを焼き熱いベーコンをのせた；私は未だ一切れのベーコンとスモーク肉を持っていた。そして再びコーヒーと沢山の煙草。シーフ（ドルスト）もやって来てとても楽しくスイスについて話をした。何処へ旅をしたいかと私達は考えた、明日にでも。私はクールマジョーに行きたい。（・・・）エルスは私に夜素敵な熱いキスをしてくれた。間違い無く凄く沢山の飴を貰ったせいだろうけど。彼女は色々恥ずべき事を言う、例えば時々彼女の叫びを聞いていると：ダーンチェは間違い！そして何か彼女の思った通りに行かないとすると：チェッ！これはフェミーから習ったのだ、この人は腹を立てると畜生めという。彼女は他の子供達をいたずらだと見ると即引叩く格好をする、未だ本格的にはないけど、幸い、でも其れは（引叩く事）近い将来起こるだろう。本当の収容所式だ。

ブルゲル - ダウファス

1943年3月21日

今夜やっと再び教会に行った。例の歯科医のごたごたで5週間も行かなかった、というのは土曜日にいつも彼が弄繰り回したので日曜日は通常その痛みでイライラしていたから。教会は綺麗なタイルとペンキを塗った壁の部屋で、背もたれ無しの木製の長椅子がある。最初は話し手の頭の上に剥き出しの電球がかかっていた。それは不便で、直接目に入ってしまう。今は有りがたい事にそこに笠が付けられた。更にピアノが美しく伴奏されそして説教も大概満喫できる。

ブルゲル - ダウファス

1943年4月3日

（エルスが歌う）‘タラ、バン、其処に狙撃兵がやって来て’。そして‘小さな駅で’、も彼女は歌う。それで子供達はよくフルベル学校（幼稚園）で遊びそしてハンカチを置いて、というゲームで遊んでいる。彼女は喜んで一緒に遊ぶ。実際彼女は学校へ行けるのだが、年齢制限が2歳半というのと私が未だ彼女を手元において置きたいので・・・

モードー

1943年4月3日

この収容所には改革派が多い。彼等は至る所で作業を一緒に助け、又其れゆえに恐ろしいボスを演じそして殆ど全ての職務にうるさく口を出した。日本兵から神父様と牧師が約束されたが、最初の方だけが入って来た。この牧師選択に関しては婦人達の中で同意が得られなかった、多分又この選択された人は彼の妻と一緒に居たいだろうけど其れはここの収容所では許されない。唯一の夫婦、ここでは、60歳前の人達でご主人は年配の男性のバラックで別に住まなければならない！其処でもやはり神父様が派遣された。この人がここに来て間もなく、彼が炊事場で肉を切る勤務をかってでたが、ローマンカソリックが反対した：其れは聖人にはもっての外の仕事だと！彼等は彼自身よりももっとここの事情がよくお分かりの様で！私は今はもう諦めている、牧師が今来るとして何が起ころうが、ひょっとしてやっぱり彼が助けてくれるかも知れないし！全く、宗教間の嫉妬はここでも私達に休息をくれない！

ブルゲル - ダウファス

1943年4月16日

昨日、4月15日（1943年）はここでは祈りの日だった。朝6時半から説教は青年達の為の特別祈祷、其れには私は行かなかった。10時半に再び有りその時は貴方方、全ての捕虜達と闘士達の為。其れはとても素晴らしく夜7時半にも有った。その時にはここでの私達の共同生活に有るあらゆる困難と小さな出来事についてだった。其れは又とても素晴らしい説教だった。

（聖書：マルコ2章：25－27節、ヤコブ1章5－7節。夜：マタイ2章25－30節）。ファン デル メイデン夫人がその時これを担当した。彼女はここでの私達の困難を実に正直に神様に訴えた。あー、余りに多くの些細な事がここでは余りに大きな喧嘩の原因になるのよ。

貴方方の所でもそうかしら？男性達はしばしばもっと心が大きいけど、でもやはりその中にも変人達と多くの強制現象精神病患者が居るでしょうね。

ファン デル クロフト

1943年4月26日

昨日は復活祭だった。朝8時にトレース ファン ゲッセル（オルガンを弾く）、ファン ゲッセル夫人、エルスとヨーケ・エイベルス、トニー・ファン オーストベーン、カーラ・ネッセ

ル、ヤニー・オーヘルネ、グスタ・フェルネー、カップルス夫人、エルス・カップルスそして私がフルベル学校構内で聖ミサを歌った（3声）。とても儀式的で多くの他の宗教信仰者達もやって来た。

2番収容所（アンバラワ第7）のモールマン夫人はここの聖ミサに来る為の許可を取った。モールマン氏はお父さんのキャンプに居て、お父さんの4人の親友の中の1人で、毎日一緒にローゼンクランズ⁵⁵で祈り同じ部屋で寝ている。私達はとても美味しい食事を作った。美味しい自分で作ったスープ、最高に美味しいプリン、クウェイ タレム（プリン）、ロティ ククス（蒸しパン）、玄米粉のケーキそして夜はオルボリン油（サラダ油の一種）で作ったマヨネーズをかけた混合サラダ。本当の復活祭の雰囲気を得る為に、各人が絵の描かれた硬ゆで卵を貰った。これでこの収容所でも愉快的復活祭の雰囲気が覆った。

ブルゲルーダウファス

1943年4月30日

今日は（王女）ユリアナが34歳になられた。だからアंकもすでにそうだ。実際かなりの年だ！私達は皆赤ー白ー青の洗濯物で旗のようにした。私はエルスの赤のスーツ、白のオムツ、そして私の暗紺の長いズボンを洗濯紐にかけそしてマリアンのオレンジ色の歩行バンドをリボンの様にした。何処でも（旗のようなものが）見られ、凄く楽しい。今日の午後は子供達の試合があり私達は皆コーヒーにケーキを貰った。

モードー

1943年5月13日

全てが再び厳格になった：授業には結局マレイ語が話される事になり、私達は自分達の赤のたすきを未だつけていなければならない。夜9時半以降には大便（トイレ）に行く事以外、外出は許されない！授業をする事は故に現実には不可能になった。フルベル学校以外は仕事を又暫くの間差し止める事になったが、私達としては何か方法を考えなくては。イエレはここではオランダ語、英語、フランス語、植一動物学、算数と計算学のレッスンを受けていた。最初の2科目は今絶対禁止、でも必要があればもちろん私が自分で教える事にする。

⁵⁵ カトリック教徒である抑留者達の宗教上の集会。

ファン デル クロフト

1943年5月14日

私達は今大変偵察されているので、学校連は（1週間）閉鎖された。

ファン デル クロフト

1943年5月26日

あら全く、がっかりしてしまう、図書館が出来て1冊の本を差し出した子供達は皆この図書館を使用できることになったけど、あー、私は我々の数多い本の中から1冊たりとも持ち出す事が出来なかった事がとても残念。ファン ボメル夫人に1冊借りたいと是非頼みたいけど、ちょっと勇気が無い。

ブルゲルーダウファス

1943年5月28日

今ここに図書館が出来た、約300冊というのは未だ大変少ないけれど、大半の人は1冊も持参してくる事が出来なかった。ヤレヤレ、ということは私は300週間は借る事が出来るという事だわ！

ブルゲルーダウファス

1943年6月14日

今日は私達の小さなマリアンが洗礼を受けた。彼女はとても可愛かったわ、ヴィム、そして美しく、絵の様に、本当。とても大人しく私の腕に彼女は座り、愛らしいニコニコ顔で、ドレスに下がっているリボンで遊んでいた。彼女は一番美しい赤ちゃんだった。誰もが彼女を祝福してくれた。其処には11人の赤ちゃん達、あつ違う、大きい子供達も居た、2歳ぐらい、そして1人の婦人が信仰の告白をした。それはとても立派な礼拝、素晴らしかった。彼らが'神の祝福有れ！'と歌った時私は泣けてきた。貴方がそばに居なかったのがとても無念だった。其れほど無念に思うとは自分で考えてもいなかったけど、その瞬間私は大変な責任を感じたし大変な孤独も感じた。

チャックースーグレイン

1943年6月15日

聖ゲラルドゥスの為にノヴェーン（9日間の祈り）をする、私がマリーーカトリンから貰った本に沿って、'そうすれば海で命を落とす事は無いわ'と彼女は言った。私もまたこの地で命を落とす事がない様に望んでいる。

ファン デル クロフト

1943年6月19日

シスター マリージョセフと母はここのローゼンクランズから帰ったばかり。アア、私達はシスター マリージョセフといつも私が'不器用だ'と表現している母の事で大笑いをした。これは'懺悔'の事だった。シスター マリージョセフは真っ赤な顔で笑い、母自身も私達と一緒に笑った。今私達は再び前向きになれる。時として暫く大笑いする事は気持ちが良い。

ファン デル クロフト

1943年6月25日

昨日彼女（ハネケ）がこの手紙を持って来た：'幼稚園はこの14日間は8時から始業する。其れ以降の2週間は8時半（交代）。誇り高く彼女は其れを持ち上げた：「私の先生からよ、ママ！」又彼女は昨日白墨を手に入れたので、玄関、床という床、彼女の名前をひよこ歪ませながらキーキーいわせて書いていた。

ファン デル クロフト

1943年7月1日

私達は今日、いや強いて言うなら今夜、楽しいベルナルド皇太子⁵⁶の夕べを祝った、実際より2日も後にはなつたが。私達は'未だ歌えるなら、一緒に歌おう'⁵⁷の本の中から数曲歌った。カーラと私とレニー ウェグ、とが一緒に行き皆後ろの方に座った。最初はかなり厳粛に：さあ、今（皆一緒に）行きましょう、神よ、貴方のテントを据えて下さい・・・、といった感じ

⁵⁶ ベルナルド皇太子は1911年6月29日に生まれた。

⁵⁷ 「未だ歌えますか？では一緒に歌いましょう」はその時期に人気のあった歌の本。

のもの。でもその後は愉快でカーラと私は実に楽しい時間を過ごし且笑った！・・・涙が出てくるまで。

ファン デル クロフト

1943年7月26日

今日はジェテケの誕生日だ。奇麗で大きなゆりかごを彼女は貰った、そしてこれはお母さんが2個のベセックス（竹で編んだ籠）とキティの古い寝巻きのズボンで裏打ちして作った物だ。それはとても可愛くなった。姉妹達からは自分で作ったのお人形と沢山のお菓子を彼女は貰った。石鹸、木靴、そしてその他にももっと。彼女は実に甘やかされていて、そしてそれがしかもこの収容所内で！

ブルゲルーダウファス

1943年8月2日

話の先を続けるとしよう、再び気分を落ち着かせるのは難しい！マリアンは余りに沢山の楽しい物を貰ったのよ、ヴィム。其れは本当実に楽しい日だった、あらゆる事にもかかわらず。彼女は私からブルーに人形の絵の布の麒麟を貰った。有る軍人の奥さんがこれを作ってくれ、奇麗に出来そして可愛い形だった。コルフ⁵⁸の店ではもっと面白い物が手に入らなかったのだ。エルスからは犬、これは彼女が自分で作った。ゲルからは1個の大きなミートボール。フェムからは立派な尻尾の太った猫で首にリボンがついている。シーフからは布で出来たお人形で、カールの毛の素敵なお品。ヒルダとエミーからはゾウとアヒル、楽しいでしょ？彼女等はそれをリム夫人の焼き上げたクッキーの入った大きな缶と一緒にそのちょっと前に送って来てくれた。ベラからは可愛い服とエイミーからは同種の服。彼女はこれら全ての贈り物に大喜びで、座ってどんぐり眼で見つめていた。

ファン デル クロフト

1943年8月9日

先週の月曜日2日（1943年8月）再び学校が始まった。そしてお母さんはジェテケ（パウラとフィネケは病気だった）をミセット先生の所へ連れて行った。色々な角度から話し合った

⁵⁸ G. コルフはバタビアの大きな出版社兼書籍店の名前である。

後ジェテケは5 Aクラスに1ヶ月間入ってみることになり、パウラとフィネケも1ヶ月間新しいクラスで試してみる事になった。ミセット先生は今は実に親切だ。彼女はアンドレアを気に入って他の2人の年長の女の子達がもはや来ない事を残念がっていた。私は朝は行けないけれど午後スミット先生の所で英語のレッスンを受けられる様に取り決めてくれた。そしてキティは既に全週アンドレアと学校へ行った。3人の幼児達はケスラー夫人に補修を受けている。ジェテケは今頑張っている！彼女は今週平均語学に9点、計算に8点取った。彼女は今は学校が気に入っている。

ファン デル クロフト

1943年8月24日

私、今日17歳。ブルル・・・私の輝く青春時代がこの収容所で擦り切れて行く様に見える。でも故にがっかりしない。雨上がりにはお日様が輝く、とお父さんはいつもの葉書に私達を元気づけてくれるもの。私は凄く甘やかされている！お母さんからは黄色の鉤針編みの手提げカバン（未だ完全には出来あがっていない）。ルイデン夫人（隣の奥さん）からはそれ（カバン）用のチャック。タンゲラー夫人からは黄色の鎖。姉妹達からは最高に可愛いハンカチ袋。ファン ボメル夫人からは奇麗なエプロン、レース（パウマン）からはベセッキュ（竹で編んだ籠）でアンバラワ収容所の名前と日付が刺繍してある裁縫箱。エヴェルスからは写真立て。ヘイトン夫人からはボビンレースで作った下着掛（この収容所で作った自家製）、クリグネット夫人からはコティ - オドール（香水の一種）、バウマン夫人とペルクからは鎖、ワーゲマン夫人からは古風な甘いラベンドールの10センチ大の石鹸。シスター ウィットベルグからはハンカチ。クライネン夫人からは未だ何かわからないけど（製作中）。お母さんも未だ青 - 白の水玉のドレスを作ってくれ、其れに合わせて赤のベルトを鉤針で編んでくれた。そして未だ1本のオードトワレ。そう、凄いと思わない？これで収容所全員が私が誕生日である事を知ったわ。

モドー

1943年8月28日

私の誕生日は心地よい楽しさで過ぎて行った：私達は最後の、長く保管しておいた鮭缶と俗に言うケーキ、これはここの収容所の1人の婦人が私の為に必要な材料（小麦粉、砂糖、塩、卵そして炭）を交換してほんの小さなお礼だけで焼いてくれた。イエレは数個の小さな石鹸とカカオの缶というプレゼントで私を驚かせてくれた、これらはここでは実に珍しい品物で過去の月々彼が私から盗んで手に入れた物だった！

ファン デル クロフト

1943年9月5日

夜7時15分前に余興、X. Y. Z. -キャバレー（男性収容所の字）が有った。すごく面白かった、特にシスター ウィットベルグが最高に上手だった。1シーンで彼女は私の格子のオーバーを着た。本当に私達の世代の心理でもちろん悪意に満ちたものだったが、6人の日本兵達がやって来たので彼等は多くの部分をカットしなければならなかった。

チャックス - グレイン

1943年9月12日

シスター ウィットベルグ主演のショーがあった。日本兵達が見にやって来て聴き、全ての歌を手渡す様求め調査した。もはやさっぱり理解できない(彼が一体それで何をしたいのか)。

ファン デル クロフト

1943年9月12日

そして今スフルテ夫人が引っ越ししたがっている、というのは今彼女が住んでいる所はいろんな雑音で人の気を狂わせるというのだ。彼女はだから私達の隣のクライネン夫人とシスター ウィットベルグの部屋を望んでいる。そうすれば彼女は門に注意できる（言い訳）。其れから彼女は事務所がすぐ傍に有るように、そうすれば食事を見守る事が出来るというのだ。シスター ウィットベルグとクライネン夫人は故にあちらで2部屋貰えるわけだ。でもそうなるとファンデン ハム夫人は場所が無くなる。あらまあ、其れならシスター達の部屋に竹で編んだ屏風で囲いをしなければならなくなるでは。然し私達カトリックと他の宗教の信仰者達さえも皆其れに反対だった。

昨夜7時に教会の前で私達が集会し外で‘反対会議’を開いた。婦人達は皆同等に攻撃的だった。今朝数人の代表が彼女の事務所へ行き少し落ち着いてした。彼女が最終的には最善を尽くすということなので私達は皆彼女を信じざるを得ない事を約束した。今日の午後シスター ウィットベルグが私達にこの引越しが決まった事を伝えてくれた。いつになるのかは未だ解らない。そしてシスター達は自分達だけでこの2つ目の場所を使っても良い事になった。其れは聖ジョゼフ様が用意してくれたのだ。だってシスターと私達はその為に蠟燭を点したのだから。こうして私もこの日記が誰の手にも渡らない様に聖ジョゼフ様を信じなければ。

モード

1943年10月2日

炊事場から戻って彼（イエレ）の最大の楽しみはトキー、鶏、これが今8個の卵の上に座っている、そして其れ以外は最近手に入れた2羽の鳩。彼の学校授業は必要悪と見ていて、多分私もその言葉‘必要’というのを使わない様にしなければ。それは多分これらの少年達がこの収容所の為に余りに多くの作業をしなければならないことからきている（時間が無い）。女子達はこの点ではちょっと軽めだし女の子達の母親達も同様に！

今年少年達が沢山の炊事勤務を受け持っていることで、浴場とトイレの清掃は女子達でも出来るはずだ、とある人達は凄く憤慨するが、女子達は彼女等の母親の為に洗濯をし、しばしば代替わりに野菜洗浄勤務もしているのだ。だから彼女達は収容所作業に全く時間が無い！ところで話をイエレに戻すと：彼が既に最近言ったことには：「もし僕が飛行士になれなかったら、養鶏場を始めるよ」。とは言え彼はよく勉強出来るし又早い、もし紳士が（イエレ）がちょっと其処に注意を注いでくれたなら。彼は算数より計算学のほうが得意らしい、後者のほうは全くその気が向かなければ。

ブルゲルーダウファス

1943年10月10日

私達は今日とても素晴らしい説教を聴いた、ハガイ⁵⁹からのテキストだった。とどのつまりはここだ：強くなりなさい！ズワルト夫人、彼女はは良い説教をする人で、私は又彼女の聖書グループに居るが、しばしば殆ど眠りこけてしまう。其れが退屈だからではなくて、疲労からだ。教会でも。夜の礼拝となれば、私は決して居た堪れないがこの朝は素晴らしかった、私は瞬間たりともボーっとしなかった。

モード

1943年10月14日

英語の授業の代わりに、これが厳格に禁止されているので、今私はフランス語を教えている、私は気に入っているが、子供達は不愉快らしい。彼等は今1つだけ、皆英語を習いたがっている、**アメリカ人達が来る時の為!!!**

⁵⁹ ハガイは旧約聖書に在る預言者達の15冊目の本である。

チャックスーグレイン

1943年10月17日

私の誕生日は多忙な仕事を挟んで祝った、つまりはヴィスとリンチェだけが知っていると思ったのだが未だ多くが知っていると見えた。朝はベッドに1杯の紅茶と花瓶に花そして小箱一杯のポストプラート（水飴）そしてその日には未だ色々愉快的な事が有った、収容所ならではけどだからこそ面白い。こんな風でヤンティ・ウィッケルスからはとても欲しかった台所の布巾のプレゼント、シチェ・ペルクからは彼女のおばあさんが作ったという可愛いハンカチ、リンチェからは新たに毛糸で編んでカーデガンと何とお人好しな事に私の為に9ヶ月も長く保管しておいてくれたという小箱一杯のミント、それは彼女のお別れに彼女が私から貰った物だった。

年配のご婦人で私の大好きなクリグネット夫人も又2枚の可愛いハンカチを持って来てくれた。彼女が私の所へ来ると、誰か家族が来たみたいだ。だから私は彼女をちょっと抱きしめたくなくて、最近彼女が折った腕を強くひねったかも知れないと謝った。リシェ・ボームスマも可愛い布巾を、未だ沢山の人が誕生日を迎えるというのに、上げる側にこんなに多くの努力をさせて贈り物が集まるので、皆の気配りには二重の感謝をする。

ブルゲルハウト夫人と小さなヨピー・スフルテは近頃5日に1回貰える1個の卵を犠牲にして自分で焼いたクッキーを瓶一杯持って来てくれた。全てを含めてなかなか楽しかったし一瞬たりとも落ち込む事は無かった。

ファン デル クロフト

1943年10月27日

キティの誕生日。彼女はちょっと熱が有り、既に数日、耳の炎症から。とは言え私達は楽しい日を過ごした。レース（パウメン）、ヨーケとエルスがやって来て1日中居て食事を共にした。昨日私達のバラックでミルクの分配が有り今日の為にプリンを作ることが出来た。偶然又スープ用骨をフェルメイデン夫人から貰ったので美味しいスープも作ることが出来た。私達は又再び6個の卵とカンタイ粉で2個のケーキを焼いてもらった。夜はヨーケが彼女のアコーディオンを弾いてくれた。8時には私達皆でローゼンクランズに行き其れでこの成功した誕生日は終わった。

ファン デル クロフト

1943年11月18日

お母さんは月曜日が誕生日だった。（・・・）日曜日お母さんは棚全部を引張りだし父さんがと

でもよく写っている、椅子に座っている、綺麗な写真を探していた。私達はお母さんに静かに探させておいた、キティが其れを既に持っていたんだけど。

翌朝私達は早く起きまず庭の私の花で花笥を作った。其処に私達はこのカード：‘1943年11月15日。お前のトンより沢山のキスを’を差込みそして母さんが至る所探していた父さんの写真とをそえて。もちろん涙が出たけど、私がハンカチを差出し彼女は涙を早く拭き取った：‘其れは嬉し涙だよね、お母さん。私からお母さんは私達の収容所のサイン入りのテーブルクロスを貰った。キティからは綺麗な広いスカートの婦人が焼いて描かれたカレンダー板。皆がこれを素晴らしいと思った。アンドレアからはとても愉快的なキャンプクッション。パウラ、フィネケとジェテケは自分で作ったキャンプのブローチ。ジェテケは2個の木靴を彼女が形に切り取りパウラは磨きブラシ、フィネケがバケツ。其れも皆が又誉めた。ハネケからお母さんはフルベル学校で自分作った笥を貰った。

沢山の知り合い達が又やって来た。トゥルース叔母さんからお母さんは角製で銀飾り付きの砂糖用スプーンを貰った。シスター マリージョセフト修道院長から3枚のハンカチとこの切符：‘亜麻布で作った襟の権利を与える、其れが出来次第！アンバラワ収容所15-11-43’。タンゲルダ夫人にお母さんは過度に甘やかされた。彼女は未来の新しいサイドボードとサイドボードクロスを貰った。ベニーは愉快的な自分で描いた蠅用の蓋を作り、アニーはお茶瓶掴み。其れからストラウカー（ブジュエ）夫人、パウマン、エベルスとパウマン：砂糖、ポストプラート、1個の卵で作った小さなケーキ、それとボビンレースの衿。ハイトン夫人からは目に見えない卵を産んでいる鶏から2個の卵とペルク夫人から香料。あ、それから日曜日私達もポストプラートを作った、2個の円に8個の意味ありげなハートを付け、ペルク夫人が表現した様に：円は全て周りを回っているもの。ポプタ夫人とヘイデルベルグ夫人からは1個のスプールソーブ⁶⁰。

偶然私達が耳にした所では、神父様がその何週間もたって後やっとチャペルで聖ミサをする為車椅子でそこへ運ばれたとか。この日私達はお父さんとジェラルドの事を思い彼等の為に祈った、特にお母さんは。又私達はこの日素敵な食事をした。雨降りでも私達の貯めて置いた特別のジャガイモを目にする事は無かったし、炊事場からの肉を挽いてそれぞれにミートボールにし、梨缶から1個半の梨、これは私達が各誕生日だけに出してきた物で今この誕生日で空っぽとなった。サヤン（残念）！

チャックスーグレイン

1943年11月20日

今夜私達はヤンティ・ウィッケルスの所で又ちょっと木片で働きかけて見る予定だ（降霊集会

⁶⁰ 多分一つの商標名。意味は文字通り：「新鮮な石鹸」。

の為)。前回の御告げは：'ヨシュは元気で西ジャワに居る'、'何かが起こるだろうーそしてこうだったー' の色々な日付、気にしないほうが良い、と言うのは今まで何度もがっかりさせられてきているから。

ファン デル クロフト

1943年12月5日（日曜日）

日曜の朝私達の緑のテーブルは布に包まれたプレゼントで一杯だった。ミサの後其れを開けてもよいことになった。万歳の声が起こった。母さんはテーブルクロスとリンブルグ（オランダ最南に有る州）の家紋描いた小さな木を貰った。凄く素敵！私はキティが私達の収容所から12のシーンを描いた誕生日用カレンダーを貰った。たった一言、素晴らしい！アンドレアは裁縫シール（ママ）。ジェテケ、パウラとフィネケとハネケは色々違った色の服を着た紙製の着せ替え人形。ハネケの人形はケープが付いていて他の3人のは室内ガウン。ジェット、パウラそしてフィンは又未だ三角形に切ったエプロン、これは私が刺繍した物、を貰った。そして其れから未だカチャクッキー（ピーナツクッキー）とポップェルチェーコロンバインチェス（かなり柔らかく焼いたケーキ）。私達はミルク缶を開け沢山の水を加えた、これで朝も夜もコーヒーの為に充分使える。其れはやっぱり楽しい聖ニコラスの日だった。

ファン デル クロフト

1943年12月9日

12月2日（1943年）夜黒んぼピート（聖ニコラスの黒人召使で、悪戯な子供達を捕まえてスペインへ連れて行く役目を授かっている）が私達のバラックにやって来る予定だった。ルドルフともう1人他の少年が黒んぼピートになった。彼等は見事に着こなした。ルドルフは本当の黒んぼピート顔をしていた。彼はじつによくやった。ハネケはちょっと熱が有り他のペルク、ボウマン、グッドハート、ブレジュ・バルクの小さな子供達と一緒に私達の隣の部屋に行った。サンドラとハンスは、しかられた時、即泣き始めた。お母さんはハネケを腕に抱いた。そして黒人ピートがハネケの所に来た時、彼女の身体全体が大変震え彼を凝視していた。'ハネケはこれから自分で食べられるかな？' 'ハイ'、と小さな声でハネケは言った。'そしていつも可愛く他の子供等にも親切にしているかな？' 'ハイ'、とハネケは又言ったが、ちっとも泣かなかった。彼女は2～3個の水飴を貰った時、ほっとしてため息をついた。ヤレヤレ、やっと終わった！その後黒人ピートは他の病気の子供達の所と廊下の子供達の所へ行った。12月4日、土曜日は幼稚園に聖ニコラス（バイレベルド夫人、蚊帳で着つけたが、まさに本物！）がやって来た。ハネケは人形のエプロンと又水飴を貰った。

ファン デル クロフト

1943年12月19日

今日は20人の幼児達が彼らにとって最初の聖体拝領を6時間のミサで行った。其れはとても儀式的でこの建物は人で一杯だった。マルゴット・ファン レンスも彼女の最初の聖体拝領をした。彼女は私達からスカブラリオメダルの付いた鎖を貰い、それを彼女はとても喜んだ。彼女達はこの収容所の為に何とかして儀式的な日を設けたのだ。

ファン デル クロフト

1943年12月25日

2日間私はベッドに居たが今朝は起きた。昨日私達は今日の為にポッフェルチェ（小球状の焼き菓子）用の鉄鍋でポッフェルチェーロンバインチェス（かなり柔らかく焼いたケーキ）を作った。私の庭から抜いた、アフリカ植物（オレンジ色の小さな植物）から私達はクリスマスの木を作った。クリスマスの絵をベセッキュ（竹で編んだ籠）に差込み、苔と綿で飾って、家畜小屋が出来上がった。こんな風にして私達にも何かクリスマスの風物がある；とにかく去年よりも多く。でも私達には実際クリスマスの気分はない。

例えば今朝目が覚めて随分暫くしてからクリスマスである事に気がついた。教会に来てやっとクリスマス気分になった。其れは感動的な儀式だった。随分多くの人々がすすり泣いた。今朝私達はブロック班長からミルク缶を貰った、ところで全バラックが。そしてタンゲラー夫人から野菜の缶とカチャンソース（ピーナッツソース）をガドガド用に貰った。今朝私達は歌ったミサが3回あって、お母さんは3回とも出席した：1つはお父さんの為、1つはゲラルドの為、そして残りの一つは私たち全部の為。

チャッケスーグレイン

1943年12月26日

昨日はファン エルプ先生の朗読の夜で、可愛いクリスマスの詩が披露され、なかなか良かった。これが又終わって、これから大晦日が未だ来て其れから私達は又を出して前進するのみだ。去年、強制収容された時は、今よりも未だ希望に満ちていた。とは言え、あらゆる事にもかかわらず、私は未だ全てに感謝している、というのは未だ元気だし先を充分信じているから。

ブルゲルーダウファス

1944年1月3日

最愛のヴィム、私達今で既に1年丸々抑留されているのね！未だいつも健康で快活で居られるのが不思議だけどー教会の鼠のごとく貧しいとは言えーそして未だいつも希望に満ちた将来を信じている！私達今年再会出来そうかしら？もはや書く勇気が無いわ。全ての困難にもかかわらず今年のあまりに早く過ぎた事を思えば私達も早く会えるわ、今そんな気がするのは：未だもっと困難がきても大丈夫！

少し前に貴方からのこの葉書を私が受け取らなかったとしたら、私はこんなに良い気分ではいられなかったと思うわ。ほんの数行だけで何ヶ月分も勇気を与えてくれるの！このクリスマスの日々はとても楽しかった。凄く大きなクリスマスツリーだった。数人の年長の少年達が何処かへ行って木を伐採する事を許されたとは、楽しいじゃない？其れは銀紙でベルが奇麗に飾られ、綿で作られた縄の吊り鎖等。

青少年部のクリスマスはフルベル学校であった。これは大きなバラックでクラスは衝立で分けられているがこの様なお祭りにはそれらは取り外される。聖ニコラスのお祭りも其処であった。とても面白かった。バイレーベルト夫人ががシントになった。彼女はとてもよくやって、4人のピートを携え、2人が大きな、2人が可愛い小さな子供達だった。エルスは座って一緒に大声で歌いひやひやした顔つきで包みを貰いに行った。彼女は又1週間前に既に毎晩歌い時々彼女の靴の中に何かを見つけた、恒例だが。

私はクリスマスに彼女の為にダンボールで其処に乗せられる家畜小屋を作った。そして未だちょっと蠟燭で其れらしきクリスマステーブルを造ることが出来た。エルスはクリスマスパーティに行けたので幸い従順だった。私達は今余りにも沢山自分達で料理しなければならなかったので一緒には行けなかった。お粥もまた朝用と2種類作らねばならない；子供達用にミルクで作るのと私用に水のと！故に私は最後に行った。お話が彼女には余りに長過ぎたのでエルスは途中で既に又家に戻って来た、そして最後、6時半にちょっとだけ私が彼女を連れて一緒に行った。その時はマリアンを既にベッドに寝かしてきた。私達が中に入ると、木に明かりが点り全子供達が丁度最後の歌を一緒に歌う所だった：神に栄光を。

私はエルスを傍の高いベンチに座らせ彼らが歌い始めた時、彼女も本当に可愛く一緒に歌っているのを見て私の頬に涙が迸った！彼女はあちこちのクリスマスツリーの傍に来る事を許された時何度かこれが歌われていたのを聞いただけだったので既にこれを知っていたとは思わなかったが、教えた事も無いのにその時はさっと歌った。もし貴方がこれを聴くことが出来たなら、ヴィム、可愛い声と真面目な顔つき、その後のお祈りの時も。ブロックランド夫人、リーダー、が言ったのは彼らは皆敬意を表さねばならないという事だったのでエルスは小さな目を硬く閉じ手を合わせ、余りに可愛かったので回りの大人達が皆言った：あらちょっと見て！その時彼女はもちろん目を開けたがすぐ又恥ずかしそうに祈りに戻った。ほんとに可愛い子。

大晦日の夜は又とても寛いだ。私達は5人ほどで一緒に座り、ゲルとロット・スタウテン、アドリ・ルイテン、マリー・ホーゲンドールン、リス・リムスさん、そして私（これらの名前は未来の為に書く事にする！）。私達はケテラ粉（キャッサバ粉）とグラ ジャワ（パルム砂糖）とロットが未だ持っていたラム酒で一種のオリボル（大晦日に食べるレーズン入りの揚げ物）を作った。私達は実に美味しいグロギユを少し飲んで（それから）よく寝る！

ファン デル クロフト

1944年1月14日

1月10日（1944年）月曜日はまた劇があつて其れは大半がジョクジャ人の競演だった。午後私達は皆奇麗に着飾つて其処へ行つた。3時に始まる事になっていた。然し2時に高官がやつて来るというニュースが入り其れは延期させられた。と言うわけで私達は翌日の許可だけを貰つた、火曜日（1944年1月11日）。私達はただひたすら座つて待ち長く待つほど遅れるばかりだった。やつと彼らがやつて来たのが3時半。早急に全道は空っぽになった。ヤレヤレ、やつと彼らが帰つて行つた時、其れはやつぱり開演される事になった。

沢山の押し合いへし合いの後レイシー（パウマン）、ティネケ、リアと私達がかかなり前のほうに座つた。おやおや、其れはとても面白かつた。私達はチェルプ・ファン ローンの冷やかな冗談にお腹を抱えて笑つた。翌日、火曜日、其れは又施行されなかつた。でも私達は踊りに行つた（皆若者ばかり）。大勢の者は上手に踊れず、だからキティも私も参加した。大半の人と私達は何となく身体を動かしてただけだった、レコードの音が殆ど聞こえない中で。とはいえやつぱり何か習う事は出来た。

モード

1944年1月16日

私は不十分な教科書と完全な生徒達の情熱の欠乏が理由で（殆ど誰も紙と鉛筆を持ってこなかつたし、教科書に至つては言語道断）教育任務を放棄する事にした、だから今は隔日に野菜の洗淨をするほうが役立つと思う。多分イライラすることがこれで少なくなるだろう！

ファン デル クロフト

1944年1月19日

昨夜、7時半、神父様が司祭職についてレッスンをした。今私は我らが兄弟のそれらの長い習

得年月にいかなる努力をしてきたのかという事を知り頭が下がる思いだ。しばしばこのレッスンには多くの他の宗教信仰者も来る。あっそうそう、聖ミサを行う為の全てが徐々に無くなりつつある。神父様が全ウェハス（聖餐式のパン）を既に割って計算してもやっと約2ヶ月聖ミサを行える分しかない。

ファン デル クロフト

1944年1月28日

昨日レース（パウマン）とリア・ワシュと、私は又英語をデ ワイス先生のもとで始めた。週に2回習う、うれしい。

ファン デル クロフト

1944年2月11日

昨夜私達、お母さん、レース（パウマン）と我々2人年配の者が、ファン エルプ夫人の所へ文学の夕べに行った。現代のベアトリス（古い文学）についてだった。前回は中世であった。それ（の方）はもっと感動的だと思った。

ブルゲルーダウファス

1944年3月4日

明日エルスは3歳になる！今回私は彼女のプレゼントを既に作った、ベセック（竹で編んだ籠）から作った可愛い人形のベッドで、白にピンクの線の入った布で覆ってある。人形は行儀よく新しいガウンをまもって寝ている。又ケーキも3本の蝋燭を立て2本の瓶には水飴が一杯。更に彼女の髪用にお花のついたヘヤーバンド、ブローチとして使える鉤針編みの羽のついた小さな帽子、本当にキャンプならではのプレゼント！

ブルゲルーダウファス

1944年3月8日

私はとてもユニークな本を読んでいる：J. D. ベレスフォードの「キャンベルウエルの奇跡」だ。1人の祈祷師の話で、いかさま医者でなく、本当に彼の魂の影響で治癒を成就する。1人

の非常に単純な男、行商のようで、でも彼の目を見たら其れは不思議な人間とわかる。彼はキリストを思わせる。この本は実によく書かれている、たわ言でなく、貴方も必ず読むべきよ。

ファン デル クロフト

1944年3月11日

信じられない！ノヴェーンをまた今年も実行する！昨日神父様が自分で日本兵に神聖なウェハスと教会用の道具を頼んだ。この神父様が警察で何ヶ月も頼みこんでいたのに、彼（日本兵）にして即それが実現した。60枚の大きなウェハスと250枚の小さな物(ウェハス)、其れから未だ2本のミサ用ワインと蠟燭を私達は手に入れた。

ブルゲルーダウファス

1944年3月31日

其れから昨夜私達は最後の文学の夜を持った、つまり集会を設ける事はもはや許されなくなるので。其れは素晴らしかった、中世から現代までの詩。私は非常に楽しんだ。又「ヴィンクヴェーンの人々！」から（の詩）も。そしてヘンリエット・ロランド ホルストのとても美しい（詩）：「男と女」、素晴らしいと私は思った。

ブルゲルーダウファス

1944年4月13日

第1日目の復活祭で私は夜説教を前読みしなければならなかった。私達は今これを小グループに分けて順番に廊下で行っている。私はデン ハーグのグリットセン牧師の説教を読んだ。其れは良い(説教)と私は思ったし、前読みは上手く出来るのだが、只お祈りはどうも苦手だ、もちろんどもってしまった！私達は今毎水曜日の夜礼拝、そして日曜日の夜は説教を読んでいる。

チャックスーグレイン

1944年5月23日

私の息子は17歳になる、再度心から全ての幸せを貴方にと祈っているわ、ジョージケ。今夜貴方の写真がある透視できる人に見せたら、この人が言うには：‘この少年はとても優しいです。

彼は年配者達の家で居て、この人達は彼に非常に親切です。私には黒い服を着た白髪男性、女性もまた白髪っぽくやさしそうでこじんまり整った顔が見えます。突然彼女は言った：‘私には貴方の隣に女の子が見えます。娘さんをお持ち？’。‘いいえ’。‘この子は白いドレスを着て首に鎖をし、貴方の後ろに立っています’。私に聞こえる通りをお伝えしますと：‘女友達’。まあ カエルちゃん、そうなら貴方は既に早くも女友達たちと付き合っているのね、でも私は良い事だと思うわよ。貴方は未だ子供っぽかったとしてもあの人（彼の祖父）を慕っていたわ、（蘭領）東インドの事をとても懐かしみ戻るのを楽しみにしていたわ。毎夜貴方は時々私達を心配して泣いていた様ね、ラジオでいろんな事を聞いたからでしょう多分。ここは私達が思ったより自由だったわ。‘まあ彼は何て優しいのかしら’と彼女は間を縫う度に言った。貴方の事は心配しない様にしなければね。ヨッシャ（主人）の事についても彼女はまた次から次へと見えるらしい：良い将来、根が陽気。彼が軍隊から退役する時は、外国に仕事が貰える。彼はチマヒに居る。彼女は最初彼が上官だと思ったらしい。彼女は将来に船旅を見た。親しい知り合いがレンバンで戦死した、それは若い士官だと彼女は思った。彼（ヨッシャ）は健康で、十分食事も取っていたが皆寒がっていたと。

チャックスーグレイン

1944年6月1日

又3歳の子供が赤痢で死んだ。私の近所の子供達が聞くのには：‘ミアおばさん、何であの子は死んじゃったの、今からあの子は何処へ行くの？’ 等等。彼女は今私達の愛する神様のもとに居て、そこは全てが善く幸せなのよ、と私が言った時、彼らが尋ねる事には：其れはパガー（垣根）の外側にあるの？’。この子達は世の中の事が何も判っていない。私の最愛の男友達オノはここで2歳になる。父親は彼を未だかつて見た事がなく、こんな例は一杯、又死んだことも何も（自分達の子供がいたことさえ）父親達は知らない。これが今の生活だ。

ブルゲルーダウファス

1944年6月18日

黙想の時をほんのちょっとでも持つことが出来る様に静かな一瞬を見つける事が今は何と難しい事か！全てがざわざわと忙しく何処にも人目につかないところなど無い！これが私にとってほぼ最悪に近い事だ。座って聖書を読んでいるところを他の人に見られるのが私はとても嫌なのだ。気弱な事だけど、其れはどうすることも出来ない。それはまるで伝道協会からの者がキリスト教徒として実演したがついているみたいに見える。でも今それが（静かな時間）やっと実現した。イニが子供達を連れて散歩に出かけるころだったので、エルスとマリアンも一緒に歩

いて行った。其れが私のチャンスだった。私は今室内で長椅子として使う私のベッドの後ろにある木箱に座る。廊下を通る者は私は見えても、読んでいるのか書いているのかは判らない。この静けさ、ヴィム、自分自身の落ちつき、これは（チャンス）やはり神様のお助けで何度も又見つけられるものだ。今夜の為に前読みする何かを探さなければならない、本当に為になる何か。これは10人ですその礼拝の代りに今私達がしている事だ。其れは（10人の礼拝）もはや許されない、それだから今私達はこの様にしたい、夜ランプの下に座って何か有徳な物を皆で一緒に前読みし合う事を。もし私達が為になると思うなら多分全本まるまる。私達はお祈りの際に声を出さないことにしている、余りに難しいし、それはただ毎回どもりながらもガヤガヤと月並みな祈りになってしまう。それは貴方がたの所もそう？毎金曜日は公式に許された礼拝が有る。それで私達は一緒に修道女達の傍のベランダに来る、何人でもそれは関係無い。そして其処では聖書が読まれ以前に何時も教会の礼拝を受け持っていた婦人達によってお祈りされる。歌う事は許されない。でも私達は毎回一緒に「天にまします我らが父よ」を祈る。私達がこれを再びするようになって私はとてもうれしい。あの廊下での10人ずつのグループ連は何も楽しくないと私は思った。

ブルゲルーダウファス

1944年7月9日

私には今日は嬉しい日曜日だ。何の勤務も無い、炊事勤務は無し、運搬勤務は無し、ゆっくりする。中で朝食を美味しくベッドで取った。エルスとマリアンも其れが本当のお祭りだと思っている、そしてそれから朝中人形に服を着せ、鶏を折ったり、風車を作ったり石鹼を持ってきて石鹼水を泡立てた。彼女等はねぎをパイプにしてシャボン玉を吹いた！マリアンもちょっとは既に来る！こういった日曜日とはとても心地よいし私達はとても沢山美味しい物を貰った。11時半に大きなクルプク（魚粉で出来たかりっとしたクッキー）と夜はケテラ（キャッサバ）のフライドポテトに白豆とすっぱいソース！素晴らしいでしょ、二千人の収容所でよ！

ファン デル クロフト

1944年8月7日

金曜日（1944年8月4日）長期間後私達は再び聖ミサをした。日本兵が椅子に座ってミサ中出席していた。彼は実際私達の神父様にとっても丁寧だ。昨日彼はこの神父様が何処に寝て居られるかを知っておかなければならなかったので、一度室内に入るのに神父様に前を（日本兵は後ろに一歩下がって）歩いてもらった。

ファン デル クロフト

1944年8月21日

私達は今又皆すべて決められた授業を受けている。アンドレアとキティ：英語、フランス語、数学、オランダ語。レシー（パウマン）と私：週2回英語（リア、アンドレアそしてキティと一緒に）そして文学と1回スティフテル夫人から一般教養。3人のちびチャン達は週に2回ウィルソン先生から授業を受けている。ハネケは既にミートボールで5まで数えられ私達の名前のイニシアルを既にみなとても上手に書く。

ファン デル クロフト

1944年8月26日

木曜日私の‘18回目の春’を収容所でお祝いした。お母さんは残念ながらその日の大半‘外来病院’に居たが、プレゼントが全てを穴埋めしてくれた。それらはほぼ去年よりももっと素敵だった。お母さんからは可愛い鎖、2対の小さな耳輪、赤と青、毛糸編みのズボンと指輪。キティからは‘ミセットのバーンチェ’の肖像画、アンドレアからは裁縫箱そしてジェテケからは自分で作ったスマイルの入った植木鉢（椰子の実の半切り）。パウラからはとてもしゃれた華やかな裁縫籠。素敵！タンゲルダー夫人の指導で自分で作った物だ。フィネケからは..インク、それは私がどうしても必要な物だった！タンゲルダー夫人からは自分で作った部屋履き（パントフ）、アニーから櫛とかブラシを入れて置ける吊り布。クリグネット夫人からは歯磨き粉。パウマン夫人からは一番可愛い手製の財布、鎖と同色の紫で刺繍がしてあった。ワシュからグラバトゥ（カンダイ砂糖）とペパーミントロール。夜は美味しいトマトカップと（貯めておいた）ジェルクジュース（柑橘類のジュース）。美味しい！そして私達が今年にはここを出られる希望に満ちた見通しで、私の誕生日はとにかく楽しく終わったが、私はそんなに期待していなかった。

ブルゲルダウファス

1944年10月30日

私はロイド・ダグラスの本を読んだばかり；**妄想**。かなりユニークだ、一人の脳外科医の話で、この人は一種の現代的な宗教の概念に執着している、それは他人に良い事をする、それを無意識にする限りはそれが貴方自身に良い風に戻って来る、という考えに基づいている。この男性はこれによって彼の人生に成功をもたらせる、最初彼は役立たずだったが、其処には沢山の意味がある。（...）ただ私は意識的に其れを頭に入れてするという考えは全く共鳴できない。

この男性はある種の焼灼器を発明する、特別脳の手術用に、それは彼が良い行いをする事で一生懸命努力出来てそれがその結果だ。彫刻家が他の人を手助けした後で名作を作る、等の様な。

もちろん其れは正しい；善良であることによって自分が向上する。助ける同胞が多いほど、視野が広くなりそして可能性が多くなる、もっと多く努力して生きるわけだ。この結果を相当な発明とし名作とする誇張はかなりアメリカ人的だが、底辺にあるものは真理でももちろん自分でも考える気持ちにさせられる。そこに何かちょっと聖書が語られている。イエス様が称されて：ガリレアーでも何処にも無礼な事が書かれているわけではなく（むしろ）その反対だ。この筆者自身が牧師である。貴方もこれを一度読まなければ。貴方の判断を是非聞かせて欲しいわ！

ファン デル クロフト

1944年10月30日

あー、わたしは‘風と共に去りぬ’の第二部を読んでいる最中だ。素晴らしい。順番に私達はこれを読んでいる。アンドレア自身も。ファン エルプ先生も毎日曜日私達に（1グループ）‘キューリー婦人の一生’から何かちょっと読んでくれる。私はこれを楽しんでいる。

グメリフ メイリングーエーケルズ

1944年12月5日

この日の為に私達の子供達に何かを設ける動きが有った。ミシン(の数)はとても少ないが、バラック内の女性達が私達に貸してくれたので、それで私達も何とか何かを作る事が出来た。その上日本兵が砂糖を分配してた。その為に私達は大きな洗い桶を持って歩哨の所へ行かねばならず、それできっちり、バラック毎に、私達の分を分配してもらう。私達はもう1人ピートを見つけ、この人が子供達の歌う前で自分で作った人形や服などを分け与えてくれた。

テ フェルデ

1944年12月6日

これは（シンタークラス祭）とても大成功に終わった！私は心底疲れ切ったが、満足だった。昨日は病院から休日を取り、朝中忙しく過した。私はずいぶん長い間パンを貯めていて其れが5個余分に残るまでそっと隠し持っていた。幸い私達には又砂糖が手に入るので昨日の朝それらのパンを切りその間コーヒーを泡立てそのままにして夜に備えた。その棚はもちろんしっか

り鍵が閉まっていた。

食後すぐ皆屋外に留まらされ、私は中でプレゼントをトランクの上に掛けた布巾の下に置いて、其れからその回りにお皿とその間にパンを、こうして私達はプレゼントを分けながらパーティーを楽しむことが出来た。後は昨日の朝私達には分配した中のバター飴とお菓子が未だあった。彼らが手に小皿を持ち目を開けても良いと言われた時の彼等の顔は見る価値があった。それから私達は順番に母から布の下に手を入れ包みを取り始めても良いことになった。母に私は穴に花綱縫いを施した掛布と沢山の蠅蓋。イケには裁縫箱。ヘンクとアルベルトには各々未だ数個の小さな物を。私自身はイケ（あの小さな可愛い子）から彼女自身が大好きな小さなラックスの洗面石鹸、そして未だ自分で作った私のベッド用の袋とハンカチを貰った。彼等は皆とても喜んだ。楽しい事だ！

ファン デル クロフト

1944年12月6日

夜前に聖ニコラスがバラックにやって来た。それぞれの小さな子供が呼ばれた。ハネケも。彼女は幸いそんなにもう怖がらなかった。聖ニコラスは彼女のことにととても満足だったが、ただ彼女がお祈りをしている時、もう二度と言ってはいけない事が：‘もう終わったよ’。私達に授業をしてくれる先生達にも私達から何かを持っていった。この収容所で楽しく騒げるのはこの日なのだ。数人の女子達はセントルイス（アンバラワ8番キャンプ）に居る彼女等の兄弟達に小包を持っていくことを許された。少年達がトラックで米袋を持ってやって来た。ピート・エーベルスもその中に。そして丁度彼の母親が誕生日だった！

グメリフ メイリングーエーケルズ

1944年12月10日

びっくり。昨夜私達の為にある婦人が歌を歌った、なかなか聴き心地良いものだった。其れは突然何か違うものだった。舞台装飾はもちろんみすばらしい物だったが、私達は食べ物の事や空腹について話をしているより何か違った時間を過した。彼女は私達をそれから完璧に救い出してくれた。でも日本兵にそう入ったことが行われている事に気づかれては... 故に気配を感じたら私達に警告する様各ドアに1人づつ見張りを立てなければならない。何という生活なのだろう！

ファン デル クロフト

1944年12月25日

今早朝6時—昨日既に私達は知っていた—私達、カソリック教徒達はジルデルダ夫人の部屋の前で彼女も同席して一緒にお祈りする半時間を得た。ベック夫人が、クリスマスの福音と'キリストの模倣'⁶¹から1章を前読みした。ラーイマーカース夫人は来なかった。彼女はこれを新教のショーだと思った。各自が楽しそうに其処から帰って来た。

私達のテーブルは私が刺繍したクリスマステーブルセンターで覆われた。私達が朝食を取っていた時、昨夜遅く更にクッキーが中に持ち込まれた事を聞いた、其れは本当のクリームタルトとアーモンドコロンバインとクラッパー（ココナツ）コロンバイン。それぞれ、1枚のコロンバイン、紙に包んだ10個の飴、10個の水飴（ワヤンポップン）、2枚のアッセムクッキーそしてテンテン（ピーナツクッキー）を貰った。全収容所は喜びに溢れた。（私の'休日'に'快い'運搬作業をしなければならない）。1枚半のパン（まずい）を私達は1袋のフンクウェイ粉（大豆を摺った粉）と交換した。ミルク無しで私達はそれで（内緒で私達のアイロンで）プリンを作り、夜は蠟燭の光りのもとで泡立てたコーヒーを美味しく味わった。又秣桶の傍で更に歌も歌った。

グメリフ メイリングーエーケルズ

1944年12月26日

まるで画期的な日々である。日本兵がこれらの日には何をすべきかをえたのか私達は突然歩哨の所まで呼ばれ、少しの果物と其れから更に少々のお菓子を取りに行った。そして午後には18歳以上の婦人達が1人当たり10本のタバコを貰った。久しぶりのタバコは何と美味しかった事か。驚いた事に彼が金時豆を中へ送ってきたので私達は今夜金時豆のスープが飲める。何と嬉しかった事かしら。

チャックスーグレイン

1944年12月28日

クリスマスの日々は静かに過ぎた。マッチや蠟燭を保持する事は禁じられているにもかかわらず至る所蠟燭の火が点っていた。クリスマスの話、神経からくる喉の腫れ、そして... 人にとって一番素晴らしい時の1つが過ぎ、回りに愛してくれる人が一人として居ず。

⁶¹ 中世の作家、トーマス ア ケンピス の最も良く知られた作品の題名。

チャックースーグレイン

1945年1月3日

クリスマスの朝はベック夫人、リンの姪、が拝礼をした。彼女はカソリックの出ではない事ははっきり判る。其れより彼女は私達にオランダ語、フランス語、ドイツ語そして英語の詩を劇的に朗誦し芸術鑑賞の夕べを与えてくれた。

チャックースーグレイン

1945年1月7日

私は私自身に又戻りたい。ああ、ヴェールトの聖母様、私達を早く助け賜え。これでも災いが未だ充分ではないのでしょうか？私はどうしても家に帰りたい。我らが愛する神様に未だこれでも充分ではないのでしょうかとお聞き下さい。私達の事だけではなく今戦火の中でこの気遣い沙汰の為に若い命を奉げているもっと可哀相な若者達のこと。如何してる、元気、(これが)聞こえて欲しい、貴方達が散りじりに撒き散らされた何処に至るまで。パパも私達の事を心配しているわ、私はそれを感じるのよ。

ブルゲルーダウファス

1945年3月9日

エルの誕生日を私達は大成功で祝った。彼女は貰ったプレゼントに大喜びだった。特に人形の家具に狂喜した。彼女は1日中其れで遊んでいる。確かに其れは可愛い、トゥッツィー玩具の道具でスタンド、サービスワゴン、机等の家具。それはそれは小さいコーヒー豆挽きも貰った、机の上の電話等、そして手鏡。それらも彼女は素敵だと思っている。又一对の羽付きの粉白粉箱も。お人形達は今にも白粉だらけになるだろう。この小さな品物を私は3ギルダー50セントで見つけたのだけれど、何と幸運だった事かしらね？更に彼女の為に二個のハート型のポストプラート（水飴）を作った、そしてプリン。ピンク色でプルンプルンと揺れるのを与えるのに、それは小片に切られた固まったコーンスターチカスタード。全ての子供達が彼等の手の平に一片を貰って、凄く楽しかった。

テ フェルデ

1945年3月24日

私達は今朝毎金曜日の夜歌っている小さなコーラスと一緒に数曲フランスの歌を病院で歌った。患者達はとても喜びそして今私達のリーダーは私を含む10人の女子達にもっと何か練習して復活祭にも又歌わないかと持ちかけてきた。そうしたらこれらの可愛そうな病人達にも何か楽しみが出来るというものだ。今は相当多くの栄養不良浮腫の患者が居て、其れは実際ひどい。そして長くなればなるほどもっと増えてくる。

ブルゲルーダウファス

1945年4月2日

復活祭一卵で！昨日の午後突然2600個の卵が中に持ち込まれた。今日は残りの400個。考えられないと思わない？私達は顔を描いたり色を塗ったりこんな風にして出来る限りの数を使いきった。残念ながら粉砂糖が無く、其れは未だ入ってきていない。

去年の復活祭は全く卵が無かったのと礼拝も無かった事を読んだところだ。第1日目の復活祭の朝6時に炊事班長であるファン デル メイデン夫人によって礼拝があった。彼女はまず数行の復活の賛美歌を（歌うことは許されない）其れから復活の福音から異なる章を読んだ。個人的な話は許されない。其れは申し分無かったが、未だとても暗かった。私が5時半に起きた時、月が未だ澄んでいて寒かった、丁度オランダの冬の朝みたい。収容所は死んだ様に静かで澄んだ月の光、素晴らしい；私は決して忘れないわ。

ブルゲルーダウファス

1945年4月3日

マリアンが今朝かなり本気で学校へ行った。明日もまたこの様に成功するか気掛かりだけど！

テ フェルデ

1945年4月12日

昨日は本当に良い日だった。昨日の午後デー家族がやって来て、彼らはここで夕食をここで取りそれからずーっとここに居た。昨夜私達は沢山女の子達でゲームをして褒美としては：スプーン1杯の糊と濃い泡立てコーヒー！そして母は何と一生懸命やってくれた事か！私は随分

沢山のプレゼントを貰った、本当に凄く！でも私はこれをいつも記憶しておくつもり、私の17歳の誕生日は決して忘れない！昨日私達は又グラ ジャワ（パルム砂糖）を貰い今日もまた生のデンデン（乾燥した、香料で味付けした肉）を。高官は未だ来なかった。

ファン デル クロフト

1945年4月14日

アンドレアの誕生日、既に16歳。前もって毎日病院で切りパンをトーストしておき缶に貯めておいた。お母さんから彼女は鎖（交換品）、寝台用むしろで作った丸く巻いた手製の手提げカバン、'キリストの模倣'（これも交換品）。ジェテケと私は櫛、鏡、ブラシなどを入れる袋付きの布に刺繍（クロスステッチ）をした。キティは子供のコップを描いた。パウラは自分で作ったピンクッション、フェネケは歯磨き粉のチューブ、これはこの子が彼女の為に交換してきた物だ。ストラウケル（ブディール）夫人はコップ1杯の砂糖、ファン ドゥリル夫人はさくらんぼのブローチ、デ ルー夫人は小さな銀製のスプーン、トゥルース叔母さんはハンカチ、タンゲルダー夫人は傘のブローチ、クリグネット夫人は可愛い真珠の指輪。

朝このご婦人達がコーヒーを飲みにやって来た（私達が高く支払わなければならないこのコーヒーは、小さなサイズ1杯1ギルダー50セントする）。午後はリア・ワシュ（ハンカチとアンバラワのブローチ）、マリア・フォス デ ワール（ハンカチ）そしてマリアン・フィッサー（メモ帳）。

ファン デル クロフト

1945年6月29日

毎日曜日原っぱでフックス夫人によって'聖体拝礼'（ミサ典）が前読みされる。

‘戦後’の生活についての思考／収容所の雰囲気

ブルゲルーダウファス

1943年1月6日

あーヴィム、やっぱり帰って来て。これは長くは耐えるものではないわ。私は既にこれらの人々やここの子供達そしてその口論から気違いになる。私達の自宅と又子供達と一緒に自分達の生活が実に恋しい。貴方が又一緒に居てお互いの先を心配しないで居られる心地よい気分。主人と妻と子供達。いとおいしい、いとおいしいヴィム！

ブルゲルーダウファス

1943年1月7日

本当に事が早く進行するかしら？本当に今年貴方に会えるのかしら？私にはもう殆ど元気が無い。全てが余りに困難で、私にはとても難しい。誰もが貴方なら全て出来ると期待しているけど自分では何も出来ない事を自覚しているの。まあ又寝ることにするわ。さもなければ明日9時に既に遅れてしう！さようなら最愛の人。

ブルゲルーダウファス

1943年1月13日

ヴィンピー、私はこの収容所であまりに意地悪な女には是非ともなりたくない。時に恐ろしく、本当に恐ろしくなるのは、私が面影が無いほどに変わってしまい貴方がもはや私を愛してくれなくなってしまうことだ。余りに老けてあまりに厄介で不安定な、判るでしょ、いわゆる梅干ババアに私はなりたくない！

チャッケスーグレイン

1943年1月16日

ヤレヤレ、私は変えることの出来ない事柄、には文句を言わないことにした。全て振りかかってくる事は受け入れ勇気を持ちつづけようと決めた。

ブルゲルーダウファス

1943年1月28日

ウァー、何と嫌な日、私は半分死にかけて疲れ切り何もかもはやどうでも良い。貴方は私を絶対精神病院で見つけてでしょう。今夜突然警報が鳴った。警備所長にもちよつと驚きだった様だ。それは又元気付ける事だった。知らせはとても素晴らしい物で私達は以前と比べて今は又再び沢山の事が許されるようになった。今日でさえ皆日本兵からクッキーが貰えた！ 噂ではサバンで我等の旗が靡き、同盟が崩れそしてロシア軍がドイツの国境を超えた。

あーヴィム、彼等に相当一生懸命急いでもらわねば私はもうこれ以上耐えられない。1日中の生活、これらの子供達で忙しく、一瞬として静かな時が無い！昼寝は2時から4時まで。其れ以降兵舎は又騒音に揺れるから、寝続けたくとももう寝られない。最初は大丈夫だった、2～3週間は、今はもう駄目だ。私はもはや休めない、エルスが凄く風邪を引いて毎回泣く。こちらの気がおかしくなる。毎夜中に8回もベッドに走って彼女をあやしそれから殆どもう寝られない、だからこの近所の奥さん達が翌朝又腹を立てているの！

チャッケスーグレイン

1943年2月2日

私は落ちついた、諦めの気分だ。未だ先があるの？結局私達には逆らう事は出来ない。助けと生活の援助を信じて、そして自分の落ちつきに感謝している。私は時々やるせない気分で私の小屋の中に逃げ込んで来て：°未だどのくらい続くの？’と尋ねる他の人にも其の気分を伝えてあげられる。最愛の人を取られて置き去りにした感情的な気分を持っているのは自分だけではない、という思いを自覚して慰めを与えられる事はうれしい。私に忠実だったこの動物達を裏切った事。犠牲！戦争への私達からの貢献。あー、でもやっぱり早く終わらせてもらいたい。私達の主人を戻して下さい、そして彼等に新しいスタートをきる力を与えてください、そうすれば実に、人間的というもの。孫がジフテリアの疑いで病院へ入院したことで私が慰めた年配の婦人が彼女の文句の最後に言ったことに：’神に感謝、次の戦争に私は少なくとももう生きてはいないからね’。未だこれは肯定的な見方だと思えないか。

ブルゲルーダウファス

1943年2月25日

可哀相なヴィム、貴方はこんな報いに全く値しないわ。スキップールの写真を見たり私達の結

婚写真を見れば、何と格好良く、現代的で、快活な子供だったのかしら私って。其れが今は3年目にして痩せて殆ど剥げている。1日中便器とオムツを古びた靴で担いでいる。私の歯は虫歯で一杯一先週から奥歯痛でいやになる。毎土曜日ここに歯科医がやって来る。彼は其れに手を尽くしている一そして私はもはや笑う力も無い！いつの日か又普通になるかしら！もし私達がオランダに帰ったら、多分大丈夫ね！

ブルゲルーダウファス

1943年3月17日

明日私は30歳になる！私の人生の半分はこれで本当に過ぎて行く。何という無意味な人生、余りに多くのチャンスがあったのに余りに少ない品物の調達。ヴィム、今夜私の事を思い出してくれる？ヴィム、近頃私は毎日文句を言いつばなしだけど、もう耐えられないのよ。貴方から離れている間とこれらの厄介な事とに。私は充分強くない。何となく生きてはいるけど、力でなく、抵抗力も無く。私はそれで崩れてしまう。自分で良く判っているし抵抗も出来ない。私はいつも根が陽気でしょ、でもこれで私は殺されてしまう。以前病院でも相当仕事をしなければならなかったし、時には極限に大変だったけれど、わたしはいつも貴方の優しい顔を思いながらやってこられた。

いつも通り、休日が又やってきたら汽車まで走り前夜気持ち良いお風呂に入浴剤を沢山入れて入り、とても素敵なお洋服を何か着て其れから汽車にすれすれ追いついて乗って11分、貴方を待つ。貴方は出口に立って嬉しそうに私にキスをしてくれる。ヴィメル、其れが私にいつもどんなに難しい患者達の傍でも力と喜びを与えてくれた、其れが私には今欠けているの。余りに其れが欠けているので私は其れをこいねがう、いつの時も。其れは身体的な痛みであり、何にも代えがたい燃えている願望の消費。其れはここで又持てる全ての楽しみも壊してしまう。何故なら貴方が居ない。貴方は私を待つてはいない、キスはしないし一緒に連れて行ってもくれない、私を褒めてくれない、貴方、あー貴方、私は貴方をもう長くは離したくない、戻ってきて欲しい、欲しい、欲しい、欲しい!!

ファン デル クロフト

1943年3月17日

柵（編んだ竹のマット）が至る所ちょっと高く作られた。私達はこれが既にもはや大変な事とは思わなかった。すでにもう何も大変とは思わない。

チャックスーグレイン

1943年5月5日

私の小屋で1人きりというのはやっぱり一番心地よく感じる。今日は気分が良くなくゆっくりベッドで休養を取っている。今はまだ自分自身の使い慣れたマットレスを持っている。又再びヨシュから来た全ての手紙を読みつづけた。カッシアン(残念)、彼は私からの物は何も持っていない、全ての写真は見たし今又これで前向きにいける。

チャックスーグレイン

1943年5月23日

日曜日の朝、流れる雨。何処も彼処も雨漏りだ、私の思いはオランダに。私の一番幼い子、その子は今日°大人になるのだが、何処にどうしているのか?私は敢えて来年の事を考える事はもはやしない。其れからどうなるだろうか?これより未だひどくなるかも?この祖悪な食べ物や他の事は未だ耐えられるが、皆に關しての焦らされる不安感、これが痛烈で恐ろしい。ヨッシャについてもまた何も聞かされていない。

ブルゲルーダウファス

1943年5月28日

昨日私達は日本人の祭日だったということで余分にクッキーを貰った。そして本当にかんりのクッキーでもあった。貴方も今まで何か美味しい物或いは本当に美味しい食べ物を貰った事がある?ヴィム、私がすべて何も知らないということはやっぱり酷い事だわ。貴方がどの様に生活して働いているのか私にはさっぱりわからない。あーヴィム、この所私は又耐えがたくなってきている。貴方を恋しく思わざるを得ない事がとても辛い。其れが既に余りに長くてそして既に普通になっている!

ブルゲルーダウファス

1943年6月9日

私は時々もはや作業をする必要の無い事を切に願う、うちわで仰ぐ必要の無い事や木炭を運ぶ事や洗濯と拭き掃除!そして有る日再びゆっくりぐっすり寝られる事!全てはまづまづで私もここで耐えてはいるが、やっぱり又しばしば疲れを感じ、だからもはややっつけていけなくなる。

チャックスーグレイン

1943年9月1日

このところ私の気分は陰気で憂鬱だ。もはや中に新聞が来なくなっている。訪問客は新しいニュースなど知らないし私達が近い内にここから解放されるという私達の希望が日と一緒に蒸発する。其れは多分又今沢山の葉書が日本とビルマの戦争捕虜達から届いているというのに自らは未だ何も聞いていないことによる。とは言うものの何の知らせも無くてヨシユがジャワに居るほうが日本から葉書を受け取るよりましだと思う。彼等はまた戻って来なければならないしそれだけに又更に長くかかる。読んでみると私はかなり長い間書かなかった様だが、この生活が余りに全て単調なものだから。

チャックスーグレイン

1943年9月12日

あー愛する人、如何にして私達はこれに絶えていけるのかしら？ここでは全てが余りにひどい。全てが私達から徐々に取り去られてしまう。もはや何の小包も来ない、郵便局には未だ一杯置かれているけど。私達は外部から完全に断ち切られてしまった。郵便は禁じられている。予想を超えた災害で多くの場所の電線が取り外されてしまったので私達は夜な夜な暗闇に座っている。中も外と同じく。其れが全て憂鬱にさせる。全女性達は次から次のと喧嘩と強情さでびりびりしている。これがどうなるのだろうか？私はあまりにも取り残された気持ちと悲しみで何も言うことが出来ない。ウィリーの所に訪ねても結局何という効果も無い。彼女が後に残したイメージは夜のダンス、蓄音機、ホテルで食事等等。「確かに」、「私達未だ色々楽しんでますよ」、と彼女。私達も、ただ言うだけだけ。

ブルゲルーダウファス

1943年9月16日

ヴィム、何て長くかかるのかしら！そして洗濯ってやっぱり何て厄介な仕事かしら。そして何とか是非にもう一度貴方の優しい顔に再びキスをしたい。ヴィメル、ヴィメル、この女性達は既に気がおかしくなりそう、わかる？精神病と喧嘩そして其れから以降無神経になって。一人が病院に寝ているけど焦点無く見つめているだけで、1人は完全に気が違っている、植民地白十字の先生。この人は本当に混乱していて四六時中警戒していなければならない。時々私もちょっとおかしくなる。それからエルスがベッドにお漏らしをした時私はどうしてよいのか判らず彼女を引っ叩いたり抓ったりしたくなる。其れで彼女が何度もベッドにお漏らしをすると、

判るでしょ、凄く腹が立つ。だってその時には便器にいかねばと呼んでくれれば乾いたままでいられるんだもの。だから私は又シーツとパジャマを洗わなければならず、この洗濯が何度もだとやっぱり既にとても大変だ。実に厄介だ。今朝私はちょっと無責任に感じた、そしてこれは再び起こってはならない。全ての力を出して立ち向かおう。まずは早く寝る事だ。何故ならこのいとし子エルスが私のヒステリーの犠牲者になっては行けないから、其れはしたくない。もし又其れが起こったら毎回書き記しておく事にしよう、そうすればどれほどしばしば戻ってくるのが判る。何度も知っておかねば。其れは私を強いて教えてくれる。ここには随分沢山の厄介な事が有って私は正しく強くありたい。貴方にしばらくして2人を快活な子供達と見て欲しいし、老けた女房と見られたくない！私は毎日力をお祈りしている。今まで以上に神様の支えがとても必要で、神様にとても慰められている気がする、彼の安らぎの中で。

チャックスーグレイン

1943年10月3日

私達のママの儉約のお陰で私は無から有を作り出すのに結構器用に出来ている。スープを作った出し殻肉から玉ねぎ或いは時々卵を入れてラグーを作る。私達がよく男性達の事を思うのはこういった物は手に入らないにしても騒音も無いだろう、凄く騒ぎと回りの子供達の全ての病氣。あらゆる所から騒音と喧嘩を聞いたら時として一緒に叫びたくもなる。

ファン デル クロフト

1943年11月9日

日記への興味を私は無くしてしまった。全収容所は憂鬱な雰囲気だ。其処には何の改善の兆候も無いが、お父さんが望んでいるのを知っているからやっぱり私の日記は書き続けよう。

ブルゲルダウファス

1943年11月25日

ねえヴィム、私近頃とても健康で陽気なのよ。何とかきり抜ける本当に！何もはや気にしなくなった、少なくとも以前と比べれば。私の事変わったと思うわよ！すぐにカッと来る事は無くなったしヤレヤレ、如何に女性達と上手くやって行くかを習った！嘘吐き、本当に強情。決して其れほどまでとは思わなかった。私達家では決してそんな嘘吐きではなかった。例えば：ヨーケが私に言う：ファン デル ポスト夫人、何という人なの、彼女が何をしたか知ってる？

其れに続く話に私が憤慨して思う：まあ何て醜い、欠点！少々後で、ヨーケがその夫人に向かって：私の水飴を味見してみますか？美味しいでしょ？もう少しどうぞ。デーデーについてとても楽しいおしゃべりが続く、変な人だとか何とか！ヤレヤレ、最初の話に私を真から腹立たせておいて畏に嵌った感じだ！でもこれは今もうそんなに頻繁には起こらない。私はもう簡単には引っかからないから！私の古い頭を振って言う：恥、恥、心で笑って彼女等におしゃべりさせておくと良い。こんな事から私は又太ってきて元気そうに見える、ねえ、これが精神修養。

ブルゲルーダウファス

1943年11月26日

ヴィム、やっぱり実際意地悪よね。こんな幸せな若い結婚生活がこんなに残酷に邪魔されてしまうなんて！でも私達の再会はそれだけいっそう楽しいでしょうね、私は本当に何と優しくしてあげることでしょう！私達が毎月50ギルダの収入しか貰わないとしても素晴らしい超デラックスさは用意できるわ。そうしたら沢山の美味しい物をアラン（木炭）で料理し洗濯も、掃いたり拭き掃除も上手に出来るのよ。見てて。私達は一人の使用人だけで簡単にやって行けるわ。あらまあ、これは長点で、私は貴方が夢にも思わなかつただろうけどとても家庭的になったのよ。美味しい水飴、焼きケーキを焼くの、本当に、昨日も1つ。カテス（パイヤ）からピクルス、アチャー（野菜の酢漬け）、カチャンクッキー（ピーナツクッキー）、ノガ、テンテン（ピーナツクッキー）、パン用のペースト、ハツスポット、ナシ グレン、クルプク、プリン、つまり私は少ないお金で間に合わせてしまえるようになったの。其れはやっぱり良い事よ。そして私は、そんな家事の血統には決して育たなかつた！家事が好きなわけではないのよ、其れは私を決して満足させない。だから食器洗いなどはいつも罰則の様に思うし、其れにはお手伝いを頼まなければ：洗濯、食器洗い、と拭き掃除の為に、もし可能なら！

ブルゲルーダウファス

1944年1月16日

このところ去年の私の日記を座って読んでいるが、その頃の私は今よりなんと悪態をついていたのだろう。そして子供達に必要とするものはみな未だ相当貰っていた。全てひっくるめて良い話で読むことはとても価値がある！貴方も早く来て読むべきよ。

今夜中3時に侵入が始まった。ここ収容所で正確に事態が知れるというのは良いでしょ？この収容所が私にもたらした中で良い事の1つが、私自身が完全に今独立した事だ。もはやエイミーには完全に義務を感じない。如何に昔彼女が私を綱に縛り付けておいたかということを読むと実際驚いてしまう。間違い以上だ。本当、彼女は私に1人で何も出来ないと言っ

せるのには如何に影響を与えるかよく知っていた。そして今、あーヴィム、私は堂々と適当にしっかりやっているわ。些細なうっとうしい事は受け入れ、収容所のちょっとした騒音はコソで無くなるし！（...）日中はかなり暇になっている。洗濯は益々少なくなって去年より疲労に漬かりきることはもはや無い。あの時はやっぱり大変、とても堪えた。（1月15日に生理になった）。

ファン デル クロフト

1944年1月26日

あー、ここは何て余りに退屈になってきたのだろう。唾を吐く。いつも同じで同じ顔ぶれ、嫌だ！そしてこれら全ての喜ばせたりがっかりさせたりのニュース。何時になったらやっとなんになるのかしら???

チャックスーグレイン

1944年2月8日

私のヨッシャの誕生日だ。来年は貴方にとってこれ以上悪くならない事を望むわ、私の坊や。今はとにかく憂鬱で愚か。幸い殆ど誰もこれを知らない。全てが音無しで過ぎてくれる。あなたがボルネオに居た時には、私の写真が未だ間に合って受け取ったでしょうけど、今急に葉書を書くことが許されなくなったわ。嫌なこと、ほんとうううにもう充分だわ。時々思い出した様に完全に憂鬱で、そおいう時には希望はあまりない。いやいや、何もする気分にはならないが、今夜シーチェ・ペルクも誕生日なので行かなければならない。でもこういう状態が続くなら、早くベッドに潜り込む事にする。私は神経性胃炎だ。もう一度手紙を読み通した。その時は如何に又何を基本に希望一杯の気分だったのだろうか？愚かな馬鹿者よ私達って。何時も馬鹿にされて何時も又罨に嵌って。どの様にして私達今お互い再会するのかしら？

ブルゲルーダウファス

1944年2月16日

真の戦士、貴方の32歳の誕生日に心から幸運を祈っています！やはり愚か。私達が婚約した時、貴方の誕生日を一回でも欠かした事は無い。其れは約7回にわたったわね。そして今、結婚して、私は既に2回目を欠かしそして結婚してからはたった2回だけ一緒にお祝いしただけ。こんな割合は良くないわ、変えなければヴィレム！私達の結婚生活中の空虚さが生じるのはあ

っという間だった！あー愛する人、私は貴方に凄く会いたい。でも私は未だ泣かない、絶対に、エルスが転んだ時何時も私の所に慰めてもらいにくるみたいには。マリアンは貴方の写真を手に握って寝ている。今は昼寝の時で外は大雨だ。気持ちが良い。

チャッケスーグレイン

1944年2月26日

何故私はやはり何時もそう楽観的で人の良い面を探そうとするのだろうか？余りにも頻繁にいやみを言われたのに。あー神様、こういう事は本当に疲れます。昨夜私達は未だ一緒に無邪気に座っていた。何か美味しいものと収容所に全く関係の無い昔の話話を話していた。私はヴェートの大市の話などをした、今は全て又余りに悲しくうとうしい。何処へ、何処へ？自分の愚かさを考え込んでも何の助けにもならない。でも、心の奥底では今が暗くとも希望と信頼を持ち続けている。必ず何時かは助かる、絶対に信じている。

ブルゲルーダウファス

1944年3月19日

ほら、私は31歳。貴方無しに年を取って行く事に今は諦めの気持ちでいる。今は既に私の花盛りも2年が過ぎ、先が続いていく。30から40、これは人生でやはり一番良い時、夏、人間が成熟して結婚の絆と家族作りの時。この時期は私達には破壊され、やり直せない。後になって未だ充分幸せが私達にもあるだろう。其れを願い絶対信じているが、やはり何かしらがこの戦争で駄目になってしまった。貴方にとっては多分貴方の職業上、仕事の断絶が一番大変だと思う。私の場合は今まだ子供達が居るかぎり、この子達が、貴方に次いで、私の人生を左右するから何処に居ても同じ事だけど。貴方は昨日私の事を思い出しオランダでも彼等が私の事を思い出してくれていたでしょう。この幸せな思いを感じる時これが力強い元気を与えてくれる。昨日はとても楽しかったわ。去年よりもっと楽しくて、次のような素敵なプレゼントを貰った、自分で作ったなんと10瓶のジャムと花や植木を入れた缶。私の前廊下は天国だ！そして1つ素晴らしいプレゼントが加わった、缶に入った本当のコーヒー豆、生。私は午後それらを炒り夜缶ミルクで本当のコーヒーを飲んだ、最高。そしてあとでルムグログ、まあちょっと、これは本当のパーティーだった。私達の廊下は今とても広くなった。全ての棚を中にずらした事によって夜私達はもっとゆっくり座る事が出来るというものだ。私達は大きな仲間の輪を持っていて幸い沢山の煙草もあった。でも夜は寝られなかった。何時間も昔のあらゆることを考えていた。ここブローラでの私達の最初の年。そこはとても気持ちの良い静けさがあった。あーヴィム、私は実に安息を願う。静けさ、落ちつき、静かに歩くユム（家の使用人）そして

私の家事の堅実な進行状態、あなたの落ち着いた人格と静かな声、あの空っぽのインドネシアの中庭の雰囲気。もし私が1ヶ月そこへ戻れたら、再び気がしっかりするだろうに。

ブルゲルーダウファス

1944年6月15日

ヴィメル、ヴィメル、雰囲気はとても希望に満ちているわ。私達の長かったここでの時期は峠を越した事を私も真に信じている。私達が昨日5月13日（1944年）付で貰った新聞によると、スラバヤが爆撃されたとあった。50個の爆弾弾筒が東ジャワの上空へ行った。先日私達は貴方達のイニシアルを間違えなくそして貴方達が何処に居るか（もし知っていればの話）を知らせなければならなかった、ジルデルダ夫人がそれは何の為かと聞いたら、日本兵は私達の主人に何処で私達を見つけられるかを伝えておかなければならないからということだった！

先日には数人の医者達の訪問があった。その時数人の婦人達が十二分にお辞儀をしなかったと後で日本兵からリーダー達に忠告があった：今はお前達がお辞儀をしなければならぬのだからとにかくそれはしなさい。そんなに大変な事でもあるまいしお前達の主人達もやはりこれをやらされているのだ。近じか彼等は又トゥワンバサール（高官達）になったら、僕がお辞儀をしなければならぬ。だから自分だってそれをする、そうじゃないか！

想像してヴィム、今年にもう多分大きな変化が、しかもこの6月に。そしてそれから？私はちょっとした建物に1人の使用人だけで充分よ。私は今なら如何に安く美味しく食べられるか知っているし貴方と一緒にしっかりやって行ける、丁度ここでやって来た様に、いや未だもっとしっかりと。ここでは沢山習ったしそして色々念願から払うこともした。新しい始まり。31歳になったばかり、未だ大丈夫よ。貴方が来てくれて健康で以前のように陽気であってくれたら。どんな時代になるかしら、何という時代！迷うことなく、何度も更にもっと確信をもって進めば。徐々に、突然到来するはずは無いとも思っているのだから。

チャックスーグレイン

1944年6月16日

リーンについて良い知らせを聞いた。彼女は多分ソロに居る。一体どのようにして家族が皆一緒になれるのかしら。オランダはどうなっているやら。時々私達はその事が無性に気にかかる。日曜日6月11日突然私はたまらず故郷が懐かしくなった。あー私は何処にこの気持ちを委ねて良いのかわからなくなった。そうなる2300人もの人の中でも孤独だ。気持ちの通じるほんの何人かはとても優しいけれど、この人達とて本当に恋しいものを与えてくれることは出

来ない。

ブルゲルーダウファス

1944年7月16日

ヴィレムピユ、今日貴方から4枚目の葉書！それは私を驚かせたわ、素敵！私は即気分が良くなった。これは特効薬よ。あーヴィレム、ヴィレム、その小さな葉書が私にとってどれほどの意味を持つか貴方には判るかしら。第1番の精神補強剤。私が病気だった時、私は凄く貴方の事を思ったわヴィム。そうしたら又ゆっくり落ちつく事が出来る！そして我が家の事ー寝ながら何度も家のことを考えたーどうしてもその思いに浸って居たい色々な事柄ーその中での一番はデン ハーグからシッタード到着までの帰路、車で迎えに来てもらって、家路までのドライブ、そして我が家、夜、中に入ってそして全て。そういったことが有れば素晴らしい、慰め、心地良さ、あーヴィムー我が家！私はどうも郷愁を感じているらしい、どうしてもこの思いが深まる。何時か又全てが現実化するかしら？とても当てにしているわ。我が家がもはや存在しないだろうという思いなどには耐えられない。そうなったら宙に浮いて、実際1人きりになってしまう。それほどまでに私は私達の家よりまだ私の生家に強く結びついているー私達の我が家。それはまだ私と共に育つにはインドネシア人の事と同じほど短期すぎた。私達はここでは未だ定住してはいなかった。少なくとも私は未だだったわ。貴方は多分もう少し、貴方の仕事の関係から。私は又ここで大変楽しい事も未だ無かった。ほんとうにある時期ですら楽しかった思い出というのはないのよ。

一番楽しかったのは実際ブローでエルスを身ごもっていた時、私がゆっくり休養していた朝、窓辺にさらさらとそよ吹くチェマラの木のある気持ちの良い私達の寝室。開いたままになっているドア同士が何時も萱を通してそよ吹く風邪によって開いたり閉まったり。私は赤ちゃんとコーヒーを飲みに帰ってきた貴方の足音を静かに横になって待っていた。とても速く陽気に貴方は歩いて来たわ、お願い貴方が帰ってきたら又そうしてね？！明るく、元気で、陽気な貴方、それは大変な精力剤だった！そして貴方は白衣の上に金髪で、全てがとても輝いて、医学の白さ。気持ちがいい、この殺菌の匂いとタバコが一緒になったのって。もし貴方が橋を越えて来たら、中央を力強く歩く貴方の足音が聞こえた事でしょうね、バタバタとーそしたらトゥワンの貴方がやって来たということだった。やはり私は貴方がそれをしてくれる事を待っているー優しい顔。どうしても貴方の夢を再び見たいのに、叶わない。最後に見たのはかなり前だった。

ブルゲルーダウファス

1944年7月30日

私はこの5年間或いはむしろ去年1年で何と変わってしまったのだろう。おやまあ、ヴィム、彼女には髪の毛と顔色がまず気取り屋さんにとって大切な事(貴方の次ぎに)、それに汚い或いは磨かれていない爪は持たず、各ドレスにはそれに合う靴と帽子、更に推理小説と映画と歴史小説とその映画が大好きで(この後者のほうは私が無教育家庭の者ではないという証明)そして今私は指に裂け目のある、足に静脈瘤のできたまは生粋の主婦。何とか髪はまだカールがある、とはいえもはやそんなに目立たないけど、それに足った1対のまともな綺麗な靴と後は木靴だけ!

読書はやはり毎日しているし出来るだけ私の好みに合う物を。この瞬間は:アンネ・セドグウィックの**小さなフランスの女の子**、とても良い。でもしばしばまるで私が猿小屋の猿の様に感じる。決して一人でない。何時も回りにはキーキーと口論している獣達。唯一自分の場所は私のベッド。自分の思考の為の時間など決してない。それが実に嫌なのヴィム、時々それから立ち直ることなどはもうないだろうなどと思ってしまう。私は何時も邪魔される、本当にこの言葉通り。私の環境に邪魔される。でもそれも終わりが来るだろう。更に又美味しい物が食べられるより休養してそして我が家の心地良さが得られたらうれしい。1つの自分の寝室と1人の人:貴方、四六時中私の傍に居てくれる。そして後は誰も、誰も、誰も私の、私と私の子供達の事に口出ししない。全てが自分の物と期待する認識。それが現実になれば、人は日を刻む時間のような道を歩き始めた時、日向に生き、又夜間にも。こんなに明確にこの節は言っているから私はこれを即暗誦できた。

ファン デル クロフト

1944年8月21日

今日随分長くたって後再び新聞が中入り東条⁶²内閣が解散したとあった。皆が再び楽観的になり今年にこれが終結するべきだ。私は既に座りこんでここ以降可能な限り安価に生活する為のインドネシア料理の作り方を書いている。とても残念な事に私のインク瓶がひっくり返ってしまったけど未だちょっとこの本の分ぐらいは有る。

⁶² 東条英樹(1884-1948)は過激な右翼派の日本の軍人であった。1941年の10月から1944年7月まで東条は総理大臣であった。彼の内閣は1944年7月に日本にとって戦争の進行が思わしくない為解散の羽目となった。

ブルゲルーダウファス

1944年10月30日

新聞はとても興奮している。ペタインが彼の参謀と一緒にベルリンへ出て行き、チャーチルはモスクワで協議そしてバリクパパンは爆撃された。彼等は未だなお伝えているのはもしヨーロッパで戦争が終結しても、だからといって太平洋側は未だ終るわけではないし、たとえアメリカが日本を征服するだろうとしても、彼等は所有地を未だ手に入れていなかったのだ！そしてこのジェットー彼女は前方を待っていた！貴方はこの詩° **農夫ー彼は前方を耕した**’全ての災害と逆境にもめげず、を知っている？私は頻繁にこれを思うー又ヘルマンの節も：**持ちこたえなさい、私の心臓ーそなたはこれまでもっと大変な目に遭っているのだ！**私は未だこれをギリシャ語で言えるけど、書く事は出来ない。何故かは実際良く判らないけど、近頃私は楽天的な気分だ。

モードー

1944年11月10日

今私はちょっとでも食べられそうな物は全て食べるそれでもやっぱり空腹は続く。ねえちょっと、もしある日再び何でも好きなだけ食べられる様になったら何を食うかおおうかね！とは言ってもそれには必要な自製の訓練を絶対にしておく決心はしておいた。私達の胃はもはや慣れてはいないし胃の病気など御免こうむる。ここの収容所で私は凄い量の本当のインドネシア料理を習い食べそして楽しんだ。又あらゆる種類の果物、これを私達は以前見向きもしなかった。これを通して私達この戦争後は以前より安価な食生活ができるだろう。それは処でそうしなければならぬのは特に戦後の最初の年は全て破壊された物を再び建て直すのにここで少ない給料で一生懸命働かなければならないから。そして一生懸命働くのは私達又女性も出きる。ここ熱帯地方でさえも。それはこの収容所の生活が私達に教えてくれ、見せてくれた。

チャックスーグレイン

1944年11月20日

あー、テルナーテで占領後に私達がした様に今もう一度一緒に話が出来たなら。あの時私達は惨めな状態でも本当に一緒だった、でも今は全てがどうなるかという恐怖を誰も助けてくれないので全て1人で対処しなければならない。マリア様も以前のようにもはや私の助けにならない。なんてまあ、もちろん反対なのに。私が怠惰になったのだ。これもここで一人になった事がないからだ。以前は私自身の囲いの中で自分の気持ちを吐き出す事が出来た。私と又ヨッシ

ヤと我らが小さな勇敢なオランダの貴方方皆にそれはそれは特別に気丈さを再びお祈りしよう。さようなら全ての私の愛する人々、さようなら私の息子、貴方が今遭遇しなければならぬこの時に貴方の傍に居られない私を許してね。でも貴方は1人ではないのよ、1つの慰めは、私の家族、貴方自身の愛する祖母、叔父叔母が皆可能な限り貴方の事を心配しているわ。憂鬱で悲しい話はあるけど、又多くの良い、勇気ある人間な事柄も話すことができるでしょう。さようなら、この日々に私が悟った全てを書き残す事が出来たら良いけど。もう一度さようなら、さようなら、さようなら。早急の再会まで、そう私は望む、貴方達皆に再会したい。私の父さんがもはや見つからないというだけでも既に沢山だ。貴方達皆私が聞こえる？ヨッシャ、ヨッシャ、如何に私が貴方と一緒に居る思っているか感じる？どんなに連絡を待ち望んでいるか。ジョージケ、母は未だ居るわよ。もう少ししたら貴方の可愛い少年顔を又私の狐の襟巻きに押し付けてきてそれから一緒に話をしてそれで私には貴方がいるのだという事を自覚する。蛙ちゃん、私の小さな坊や、あまりにも多くの事を貴方は既に経験さされて。貴方が14歳になる前に再び戻って来ると思っていた時私には先が見通せていなかったのよ。分っているでしょ私の坊や、私が貴方の事を心から愛していることをそしてもものすごく貴方に会いたいことを。さようならみんな、私は貴方達の所へ行きたい。私はあまりに孤独そして既にあまりに長く1人きりだ。もう一人にはなりたくない。沢山のキスと全ての愛を、では又。ミア。

テ フェルデ

1944年12月17日

私の親指の爪の下に出来た膿瘍の為私は勤務から解放された。それはやはりかなり痛い。片腕では病院でやはり何も始められないし暫く自由になる為の良い口実だ。と言うのはやはりとても疲れて、実にもものすごく疲れるのだ。全てにうんざりだ。起きててもベッドに行っても疲れる。1日中疲労、疲労、疲労。夜中目が覚めた時でさえも、疲れを感じる。アア未だどれくらい、どれほど長く？余りにも長くかかる！

ブルゲルーダウファス

1944年12月26日

私達には予期せぬ良いクリスマスだった。昨日多くの美味しい物を貰った、素敵；ケーキ、クッキーコロンバインチェス、飴、砂糖で作った姿菓子と各人につき約1キロの砂糖！そして実に素敵な知らせ。そしてどうしても貴方に会いたい。幸い一冊の良い本：フィリス・ボットメの『**痛烈な嵐**』、プライベート ワールドの著者ーライデンでティツセから貰った精神病院についての本を覚えている？良い本、とても特別、だいたい1933年、ドイツに居たユダヤ人ー

家の話。私達の新しい図書館に絶対買うべきよ。ヴィム、私達全て又一緒に作り上げて行きましょう、全て。私達の家、私達の本、私達の仕事、私達の全人生。うれしいわ。私は強くなっている。2年前よりもっと強くなったし新たにスタートする事を待ち焦がれているの。全て作り上げて行く、新しくする、違う方法でももちろん、実にもっと簡単に、でも其処には私達の心と愛があって。私達は今や家族となっているから其処には娘達も入って。1942-1944、何と言う幕間劇。貴方は凄く変った？老けた？更に賢明になって白髪が増えた？私はそうよ！でも未だそんなにひどい白髪ではないしそんなに賢くもないわ。沢山の事に失策ばかり。

チャックスーグレイン

1945年2月25日

ウィリーは強制収容されていなかから私は彼女の事が又一番怖い。傷ついた社会で余りに孤独、若く、奇麗で陽気な彼女が。マレシュは武器を見つけた為刑務所に居る。彼の奥さんは素敵な店を放棄させられムンティランに居る。其処は日本兵のレストランになっている。おや、おや私達が一時に世間に戻ったらどういう風に思うかしら。とにかく私はもう何度も言ったが、私にとって親切で愛すべき皆に‘さよなら’を又言う。

テ フェルデ

1945年3月4日

私達は皆小匙で食べている、さもないければ食べ物がすぐ無くなってしまうから。特に母はとても空腹だ。早くこれが終結すればいいのに。° 人に寄れば今日にも、というのが何も起こらない、私達の希望は又3月27日に据えることに。毎回一歩前進。

チャックスーグレイン

1945年4月4日

今朝電報を事務所へ、私達の内の一人在選ばれるのを待ちながら。最初はもし上手く行かなかったら耐えられないと思っていたが、今はもし駄目でも許せる気になり始め、それはだから：’神様の思し召し’。私達はやっぱり全てに守られていて、貴方達も。何が来ても、来るべくしてくるのだから私は受け入れるつもりだ。それが来る時は何時も理由があるわけで後になってもっと良く理解するようになる。時として私もまたこの人生が失敗だったという強い気持ちを持つが、だから：’私にはこうだああだの、そうしただの’と言ってみても今は始まらない。

チャックスーグレイン

1945年4月7日

私の時間が外の勤務になって以来ここではもはや息が出来ない。時々叫びたくくなって夜中に私の同居人達の大きな邪魔が入るまで怒鳴り散らすとまた気が楽になり、時としては私の同居人達の陽気なはしゃぎにもなる。幸い2～3人と時々ウンザリ摺りきれしてしまうことなく気晴らしが出来ると、だからまあ又よし... ミケは前進するのみ。

チャックスーグレイン

1945年4月20日

私は結構よくドイェル夫人と話をしている。彼女は土着民とこの国の事を大変良く知っているが、彼女ですらもう少ししたら如何に多くの事を再びもとの鞆に戻せるのか気を揉んでいる。全てが混乱に陥っているのでこの戦後のごわめきはどんなことになるのやら。ヤレヤレ、生き残った者が心配することだわ。

チャックスーグレイン

1945年5月25日

余り沢山感情に走ると自分自身傷つく。毎日余りにも大きな災難を見る。'強くならなきゃ、ひよこちゃん'、ヨッシャが言うのが聞こえる。神様、何としても彼に会いたいです。私はものすごく疲れている。あー可愛い子、私達が如何にそして何時、という事をもっと知っていたなら。今でも同じ悲嘆の声、もう殆ど喜びもない。私達は夜コップと砂糖とコーヒーを持って人を尋ねる事が出来て其処でお湯をご馳走してもらっただけで既にうれしい。

ファン デル クロフト

1945年7月30日

28日は赤一白一青の飛行機が私達の上を旋回して半年になる。あ一時としてとても悲しくなる事がある。特に色々の若い女性達(25歳)、例えばブテル ファン オーストベーン夫人等の死亡事例に遭遇した時。そして4時間半から5時間便器を持って歩き汚いオムツを洗い落とす等など。何も余分な食べ物は貰えず、一方では監督と炊事係の婦人達が半分のパンを、そして7時間働いている人々が毎日炊事の残りを貰う。

グメリフ メイリングーエーケルズ

1945年8月4日

今日の噂では私達の内の一部がその上未だマゲランに送られるだろうという事だった。それは単に噂に過ぎなかったが、私達はこの間に日本軍隊は決めたら取り下げない事を知っている。女性達は神経過敏になっていた！食事をするまで長く待つ日々。もう本当に充分だ。彼等は私達を連れに来ないの？

ファン デル クロフト

1945年8月15日

ニュースはもう書かないことにしよう。もし私達が今出て行けるなら。ほぼ3年同じ囲いの中で、嫌だ...！それでも私達は未だ運の有る方である人達は7回も移動させられたそうだ。でも日本軍隊は異常に激しく輸送に忙しい。人が言うのには：'全女性はアンバラワにそしてC. Q.⁶³の男性はチマヒ4番収容所からセマランに'。幸運を祈って。嫌だなあ、全てにうんざりだ。だから時々私達はもう二度と出て行けない様に思える。

⁶³ C. Q. は察するに民間強制収容所、チマヒ第四の事と思われる。

社会と政治の意識

チャックスーグレイン

1943年1月20日

そうそう、朝洗濯場に立つと、面白い事を耳にする：’そうよ、今はアダム夫人（総監夫人）であろうがブルゲルハウト夫人（知事夫人）であろうが幸い私達は今皆番号だから、皆同等よ。’これはこの戦争がしでかした事で又良い事だ。トイレ（しゃがむのよ、皆さん）に数人の少年達が立っていて：’一緒に来いよ、そしたら水に裸の尻が見られるぜ。’それは実際流れる下水溝に跨いで立つもので、もし水が静止すると、本当お互いのお尻が見える、新鮮な話だよ。

未だもう一つ今朝の面白い話。’ねえちょっと、あのズボンのあそこが又綻びている’。おやまあ、構わないじゃないの。デン ハーグからの洒落た御婦人に綻びがあると。お腹を抱えて笑っている間に擦って指は駄目になり背中を中心を痛める。鉄条網越しの売買は罰として2～5日間暗い囲いに閉じ込められる。如何に人々が正直ぶって何かを売ろうとしていると見ると如何にまるで野生の動物みたいに逃げ去ることか、時々彼等の果物を後に残して。それは心が痛む、特にこんなやり方で物を買いたい自国民の為に。

彼女等は今収容所の後ろ側で椅子に座り編物をしながらその間何かを買うチャンスを待っている。どおいうふうに何時か威厳を取り戻せるのだろうか？

ファン デル クロフト

1943年8月24日

丁度10時前に突然（全収容所に）電灯が消えた。彼等はただ基のスイッチを切っただけ、この男性達は、（前ジョンゴス【家事手伝い】。以前にはニョニャ【女主人】の元で）私達に9時半にはベッドに行くべきことを警告する勇気がなかったのだろう。

ブルゲルーダウファス

1944年5月16日

昨日は又大変な騒動があった。私達は突然集められて外に出て草刈をさせられた。ババッテン（草刈）をさせられたことをジャワ人達に大騒ぎで馬鹿にされた。ヤレヤレ、カワット（鉄条網）と収容所に沿った運河の間の縁である事が分った。だから家の近くで1時間内で終わった。更に誰もその道に沿って歩く事は許されなかった。警官達は其処から人を締め出したので、私達が

嘲笑される事は無かった。炊事勤務が有った為にこれを一緒にする必要の無かった婦人達のおしゃべりを聞いて欲しいものだ！私達は臆病、奴隷、等といわれた。ハニー・ファン デ ブリンクは一番偉そうにしていた。貴方は何処に居たの、と聞けば：彼女もやはり炊事場のテーブルに居たらしい！

モドー

1944年10月8日

新聞を読むと、中国が今アジアで最も重要な戦争劇の場となっている、一方アメリカ人達...
日本で沢山の飛行機を失う ことを私達はもちろん困った事とは思わない！又今インドネシアが日本を支持することで彼等の独立を勝ち取ろうとしている事を伝えている。これを日本は戦後に間違い無く与えるだろうし、だから今既に行政管理はその部分的な権利を握っていた。ヤレヤレ、彼等は私達からはもう既に長らく握っていた、その権利！今ただ望むのは、簡単に言えば、日本軍が近い内にインドネシアから消え去る事を認める事だ。手袋⁶⁴をはめてもはめなくても！

ブルゲルーダウファス

1945年1月1日

絶対これが最後の1人で迎える新年の朝、ね、ヴィム？多くの救いと祝福、愛、今年への祝福、これらが私達にとっても必要なのだ。私達皆今年はどうな厄介な知らせを聞かされるのか私は恐ろしい、特にオランダから。自由になったとしても、余り猛烈に戦った為かなり沢山の戦死者が出たことだろう。そしてドイツで働かされている男性達。全て余りに不安で恐ろしく私は如何に悲報に耐えるべきか敢えて考えたくもない。そういう事への力強さは無いし、もし'我が家'の存在の確信が無くなったら、私にはほぼ何も残らない、実に少ない。もし家族背景無しに、我が家の皆から何時も目に見える支持無しに、ヴィムの為だけ人生を祝福すべきなら、私には出来ない。ここの生活がとても難しくなればなおさら。

私の活力は相当無くなった、それが私の一番の魅力だった、と思う。今はそんなに敢えてしようとは思わず以前なら直接その上に或いはそれを通して行った事柄に疑いと不安を感じる。全てに、まずはヴィムの意見そして特に家の影響と父の(意見)が聞けない。あの厳しい、

⁶⁴ 日記の筆者モドーが1944年10月8日に日本人達の為に(140ページ参照)手袋を縫う義務雑役の報告を再びした事からこの皮肉な結論が出ている。

我が家での批評、しばしば無慈悲とはいえ実に正直な。それは多面に私を導いてくれた。最初の頃はまだよかったが、今は東インドの色々に分れたグループ精神、もっと多い給料の人々を羨ましがる人達、の影響の下に打ちのめされてしまった。又収容所の中でもそうだ。実に馬鹿みたい、でもこれが現実だ。

最初彼女等は私をここで嫌がった、つまり私が彼女等を一番高い給料の妻達という事で軍人の妻達よりもっと尊敬を持って扱うなどという事はしなかったからだ。とにかく、ヴィム、私は決してその様な理由でこれらの婦人達を不親切に扱ったつもりはないが、彼女等にお世辞も言わなかった。そして今悔しいかな、ヴィム、もし私が注意しなかったら、今それをするかもしれない！私はそれをしたくない、断る。私は私でありたい。これを書き記す事でなんとすっきりしたことか！

テ フェルデ

1945年3月11日

昨夜日本兵がやって来てジャワの3年にわたる'独立'を祝ってジルデルダ婦人に質問した。その内の1つは大体誰が勝利を得ると彼女は考えるか：アメリカの物質主義か日本の精神か、というのに彼女は答えた：'アメリカの精神'。3回彼は言い直したが3回とも同じ答えが返り彼はついに諦めた。その後彼はジャワ人が自分達で管理して行くのに充分成長しているかどうかと質問したがそれにはロデル医師が答えた：経済と政治的には大丈夫だが、精神的には無理。何かから今又そんな変な質問を？

モドー

1945年3月30日

全ての良い知らせを大半の人々は今はもう信じなくなっていて私はというと再びもっと私の以前の意見に傾いてきている、それは私達の同盟国はジャワを文字通り左に残しておくだろうという事、つまり日本軍がここでアメリカの勢力により海からも空からも隔離されるだろうから日本自体をフィリピン側から即攻撃に出るのが賢明だからだ。

相互の関係と性生活

ブルゲルーダウファス

1942年12月31日

食事は無料給食所から来る。(それは)ここではすぐ始まった。12時に美味しいナシ ティム (かなり柔らかく炊いたご飯) をマリアンの為に貰い、午後3時半には私が彼女を母乳で育てているので400ccの暖かいミルクを貰う。其処からエルスもマグカップ一杯貰う。イヤ、全ては上手く行っているのよ、でもヴィム、エイミーとフェミーが私をとても虐めるのよ。バケツ或いは洗い桶(彼女等の)は使わせて貰えない。私は今になって急に全て自分で買わなければ、今まで全部彼女達と一緒に使ってきたというのに。雑巾は駄目、箒も、何もかも、そして私が言う全ての事に彼女は反対を主張する、こうして実に苦しめるかと思うとそのちょっと後では再び人のご機嫌を取る。酷い、私はそのことから凄く神経質になって足が震える、そして丁度今、1日中エルスとマリアンで走らなければならない今。だって私達にはもう使用人(を持つ事)は許されないし、エルスは未だ慣れなくて毎回私を見失うと大騒ぎなのよ。

私は何度もかなりの道程を歩いて彼女等の所まで食事をしに、そしてそれらのバケツや雑巾を借りに行かなければならない、そうすると何時も無礼な応答や罵り、これが一番堪らないのよね。作業をする事は出来るけど、そこの虐めはかなわない。今日私は凄く泣いた。とても見捨てられた気がして、そして相当疲れていたの。そして貴方は余りに遠い。あーヴィム、この可哀相な私達の子供達、皆どうなって行くのかしら？ ヴィム、愛するヴィム、何とかして又帰って来て。私はこれにもう耐えられない、このバラック満員の女性達と子供達そしてこの虐め、何度も思い知らされる事は：貴方は何も持っていないの、だから待っている事ね。彼女は決して親切に渡さない、エイミー、彼女はまず与えた物は全て再び取り返したいか或いは更に何かそれに利子を付けて貰いたがる！もし私が彼女にこれら既に借りた品物を何時か返す事が出来たなら、何と神様に感謝する事かしら！

ブルゲルーダウファス

1943年1月5日

そして毎午後雨が降る、それで私はエルスを腕に抱いてすっかりずぶ濡れにならない様樋越しにバランスを取らなければならないのだが、私が汚すからというのでエイミーの部屋の中を通る事は許されない！このバランスを取る事はハニーの愛する従妹のお陰だ、この人は自分の囲い小屋を窓があるからという理由でエイミーと私の間(の囲い小屋)を欲しがり手に入れた！あっそう、私の子供達が新鮮な空気を受けること(ところでこれは思ったほど酷くはない)は問題

にならないと。そして私にとって腹の立つ面倒なこの走り回り、も気にならなかったとはね。其処から喧嘩の全てが実際生じているのよ。この厄介な奴に加えて彼女の友達がここで人という人全てを虐めている！彼女等は私達がここを出なければならなかった時、素早くハニーも押し出した。彼女は今この向かい側に居て、愛する従妹は彼女にナイフ、フォーク、平鍋の類を分け与えたので、ハニーはもはや誰かをお茶に呼ぶなんて事は出来ず、そして1日中食器を洗っている！貯蔵食料品から彼女は全く何も貰わなかった。これは酷いのを通り越しているが、ハニーは彼女達から離れた事、そしてその上全て受け入れてきているあの虐めに遭う事がもはや無くなるので、とても喜んでいる。彼女は運良くなかなか素敵な表ベランダに当たった、素敵な広さでランプ付き。愛する従妹はとても小さい場所でランプ無し（当たり前）。

ブルゲルダウファス

1943年1月12日

ここはとても酷く不愉快だ。私はここで長くは続かない。作業の事ではなく、人々についてのこと。今になって貧民街に或いは賃貸兵舎に住む事が如何に大変であるかが判る。私の隣に住むそれらの婦人達はエルスが彼女達の足元前の下水溝に落ちて指一本触れないのよ？彼女らが只言うのは：何とあのブルゲル夫人は御自分の子供の面倒見が悪いこと！

チャックスーグレイン

1943年2月2日

グレートが再び戻ってくる（アンバラワの病院から）、でも皆の主張で第三ブロックに独自の部屋を貰った、全ての仲間にとっては実に幸いな解決策。人は緊急の際いつもより違った事をすると云うことが再び立証された。彼女が家に帰って来るその日、キキと一緒にシュワンク氏が鉄条網の所に居た、勿論あらゆる物を持って。我々をがっかりさせた事には彼等は中に入れてもらえず小包1つ手渡す事が許されなかった。私はシュワンク夫人が絶望していると見たが、彼女は二度と戻って来るのを恐れたし、こうして私達の美味しい品物が何と酷い事に再び消え去って行くのを見ていた。でもそれより私がもっと不愉快に思ったのは私が彼女と話す事が出来ず、そして興奮していた事により快い顔を見せられなかった事だ。とにかく、グレートは午後家に帰って来る、そしてシュワンクさんは病院へ行き数個の品々を手渡せた。でも翌日運転手が balan（品物）を持って来てそして全ての物を中へ運び入れる事を許された、その中には私用に大きな缶入りのブスハウト（乾パン）と一缶のマリービスケット等など。

今グレートが言うのにはそれは間違いで缶入りブスハウトは彼女に当てた物だった、でも私が半分貰っても良いと。私は言う：「勿論全て貴方が持っていれば良いわ。そしてそれを

貴方が開けたら私に頂戴、マリーの(ビスケット)を半分」。第三ブロックへの引越しで彼女は病院で確かに大きな缶入りブスハウトを貰っていたことが解ったけれど。それらは呆れた事にブルウオケルトでバス ヘルマンが私に買ってくれた物だった。彼女は更に飴を手に入れようとしたが、これは成功しなかった。ヤレヤレ、もううんざりだわ。私がこんなに長い間アネケの我儘さに耐えて来たというのに、これがそれに上乘せされた事で決着をみる、そしてもっと何度も私の人生で経験したことだが、彼女等も又私に対して無頓着になった。彼女をこの環境で見殺しにするのは多分キリスト教的ではないだろうけど、この私に―彼女には私自身の最後の缶を更に上げた―そおいう仕打ちをするのは卑劣だと思った。

ブルゲルーダウファス

1943年2月9日

ここから出て行けない、ということを実にこんなにも寂しく思わないなんて。日々があらゆる忙しさで飛んで行き、そして終わった時はその出て行きたい欲求を持つには余りにも疲れている。でも私は貴方のキスそして貴方の身体、貴方の抱擁そしてオルガスムに喘いでいる。恐ろしい。貴方にとっても何という災難かしら。貴方ったらそこで間違った方向(同性愛)に行っていないでしょうね?気をつけてよ!

モード

1943年2月25日

数日前私は馬鹿な事をして夜中トゥウェカ(商標名)シャツを干し紐に掛けっぱなしにし、中へ取り入れるのを忘れていた。翌朝それは姿を消していた。犯人は警察官でも私の収容所仲間の一人でもある。こおいった盗みは既にもっと多く発生している。それならここでは洗濯物を何処へ掛ければよいというのかしら、もしそれが夜になっても未だ乾いていなければ?

ブルゲルーダウファス

1943年3月20日

ベラが今夜私の所に居た。(彼女は)隣近所の例の小さな意地悪にちょっと落ち込んでいる。ゲルダもやって来た。この人はとても冷静で誰の影響も受けず我が道を行く。私達もそうしなければ。私に関しては今までの所まらずまらず上手く行っているが、私もベラと一緒に。この意地悪な刺には耐えられない。

ブルゲルーダウファス

1943年3月26日

今夜ベラは私が水飴を作るのを手伝ってくれた。チョコレートとココナッツを入れて美味しくなった。楽しい仕事。ベラとは気が合う。ここで他の誰と一緒に居るよりも私達はよくとても楽しい時を過ごす。

モドー

1943年4月15日

以前髪を染めていた多くのご婦人達はここ収容所で三ヶ月の間に私より白髪が多くなってしまった！又頬に付ける頬紅も無くなってしまったと見え、彼女等は顔がとても薄汚くなっている！そう、それは‘お化粧をした’女性達にとって特別な収容所の災難だ。

ブルゲルーダウファス

1943年4月16日

エイミーが又一時意地悪だった：シーフ（ドルスト）と私は大抵一緒に教会そして夜の聖別式に行くので、しばしば各々小さな籐の椅子を持って行く、というのは長椅子の座り心地が悪く又よく満員なので、とにかく日曜日は。これらの椅子は実際勿論エイミーの物だが、彼女は置く所が無いので、私の所においても良いわけだ。さて、昨夜6時半前彼女はコピーに椅子を取りによこした、というのは彼女が近頃えらく仲良くしているサップおばさんも教会へ行くというのだ。想像してよー彼女はシーフと私も行くことをよく知っていたのよー勿論私達は行ったけど、エイミーは私に再びそれらは彼女の椅子だったという事をよく思い知らせたかったに違いない。あーヴィム、それで私は最初の瞬間彼女を酷く憎む。後になったらそれを笑う事が出来るけどね！私にはとどのつまりこの椅子などが問題ではなくて、このやり方なの！！

モドー

1943年4月30日

雰囲気は不愉快だ：嫌悪に妬み、喧嘩、中傷、破壊欲、不潔、怠惰、食欲さそして盗みさえも降盛を極めている。こんな収容所生活は人々が愛情を育てて行くには全く適していないし、ここに多数歩き回っている犬どものほうがもっと感じがよく礼儀正しい仲間だと私は思う。私達

はその中に既にかなりの数の忠実な友がいる。

ブルゲルーダウファス

1943年5月1日

ここで病気になると、或いは私の様に突然片足で椅子に座っていると、まず隣人達は最初の数時間は急いで通り過ぎる。彼女等は何も聞かないし酷く忙しいのだ。原因：洗濯物の心配！半日してからそう言えば私が洗濯物を分配して洗ってもらう様たのんでこない事に彼女達は気が付き、躊躇しながらやっと、如何したのかとか多分何かする事は無いのかとか聞きにやってくる。彼女等は大変忙しいのだ、でも時として未だ何か洗う物があるとすれば？全ての病人達はそうだから。

少なくとも大変な病気でなければ笑って済ませられる。さもなければそれで更に病気が悪化するというものだ。特に私の初回の時の様に実際洗濯物を手伝ってくれる人が誰もいなければ。その時フェミーは‘助けて’くれたけれど一日中ため息と不平タラタラで、そして絶え間無く私に如何に私の洗濯物が酷く厄介であるかという気分を思い知らせた。本当に病気だと実にえらい事だ。そうすると全く余りにも見捨てられた気がする。

今現在この収容所の雰囲気は悪い、とても悪い。例：今まで別々のバラックに住んでいた看護婦達が今一緒に医者の方の二部屋に移った。それは最初病院だった離れた建物だ。それが大きな向上であるのは、そこはこの看護婦達がもし休みであればもっと静かだから、さもなければ又もやこの騒々しさ続きの中に居て決して本当には休めない。今この病院は以前の軍隊病院の中に行き其こには今までのところ百日咳の家族達が居た。この百日咳はジョクジャから持ちこまれた。(百日咳蔓延)それ自体はここでそんなに広がらなかったし、今は通り過ぎた、故にこれらの人々は再び其処から出ることができ今は彼女達の昔の囲い小屋へ戻らなければならない。しかしよく聴いて！—これらの囲い小屋が隣人たちによって既に使い分けられていた！だから大きなくだらない喧嘩、嫌悪と妬み。アダム夫人⁶⁵とかジョクジャのお偉方の一連が住んでいるこの‘高貴な’通りにも1つ囲い部屋が空く事になっている。其処には今のところブラウス夫人が来る事になっている。彼女は其処に彼女の姉妹、クラ-テンから来たバケル夫人(同じ伝道派遣医師夫人)は近いしもっと多くの知り合いも居る。でもこの‘軍人の妻達’が彼女等の内の一人(百日咳はつまりがジョクジャで既に一緒に学校で隔離されていたこれらの軍人の妻達が元だった)でなくブラウス夫人がその高貴な通りに来るということでもとても罵るは愚痴を溢すは。そのことでブラウス夫人は以前から言っている：勝手にしなさいよ、引越さないから！そのことについてはもう諦めるわ、と彼女は私に激怒して言った。私

⁶⁵ J. G. アダムーデ フリース夫人、1892年生まれ、公国の総督、L. アダム博士の妻であった。

はここで充分だしそんな全ての面倒や無駄口など！その軍人レディが‘クワリティ ストリー
ト（上流通り）’（私達はそう呼んでいる）で今実に寛いでいるだろうと本当に思う？それを私
がおしゃべり仲間と言ったら彼女らは即座に同感した。それで彼女等はまだ何をごねている
の？

そしてそれから炊事場！11時半以降に未ミルク（を貰い）に来る者はもう貰えない。
そうすると10時からナシ ティム（かなり柔らかく炊いたご飯）とミルクを分配しているこ
れらの婦人達は後ブイヨン（薄い肉汁）粥にする。それを取りに来るのを忘れたこれらのお馬
鹿さん達になお又その間ミルクを分配する事が出来ないのは理に叶っている。にもかかわらず、
如何しても前もって来られなかった根本的な理由の有る10人程度が毎日いるのだが、この人
達はそれでも貰えない。それで今彼女等からの不平が：このミルクは一体何処に有るのかしら？
誰が飲んでしまうの？？私達のミルクよ、私達には権利が有るわ！等等！そして果物、追加
の果物だが、それには医者の手紙が必要で、それを果物 - 婦人（係）が記述する、それがその
通りにならなければ再び喧嘩だ。毎日何かが有る、酷い。でもまあ私自身は毎日ミルクと果物
を取りに行かなければならないけど未だ一度足り共喧嘩はした事が無いわ。

それに私は即座に大騒ぎしてこれやあれやに権利が有るなどと言わないことにして
いる。大半の女性達が現在している事は愚かよ、本当に！赤十字の小包は今だに入れては貰え
ないが、下水溝を掃除しているクーリー（人夫）達はあらゆる注文物を持ち込んでいる。警備
所長はそれを良しとしている。マゲランから来たX夫人は今何をするつもりかしら？彼女はこ
の警備所長の所へ行って禁制取引されている事を伝え、彼がこれを阻止しなければ日本兵に報
告しに行くというのだ！ヤレヤレ、この全収容所が勿論混乱。この人もちょっと変だ。警備所
長は肩をすくめて彼もそれ以上は如何して良いか判らないと言った！このX夫人はそれ以外は
親切な婦人、凄い丈夫（.....）。私は理解出来ない、でもそれは事実なのだ。それを信じるまで
は少々時間を置いた、それは全てのこおいった話しに私がしていることだ。

ブルゲル - ダウファス

1943年6月14日

ここの婦人達はエルスが自由奔放で睡眠が少ないと思っている。そしてそれにはフェミーが真
っ向から反対している。昨日エルスが彼女と一緒に洗濯場へ行った、其処は彼女が大好きなの
だ。そして彼女は洗濯物の濯ぎを手伝う。数人のご婦人達が子供が自分を濡らすことを良く思
わず、彼女を常に追いやった、というのだ。まあ、いいじゃないの、とフェミーが言った、彼
女の母親は良いと思っているし私もそうだ！

ファン デル クロフト

1943年6月21日

そして食事前にワーゲマンさんが私達に何かを持って来てくれた。その時お母さんが私達のやかんが凄く漏るので彼女の物をほんの暫く貸してもらえないかと聞いた。「ああ、と彼女、一緒にいらっしやい」パウラと一緒に行き空色のやかんを持って戻って来た。「私達がこれを保管して良いつて！」、と彼女が大声で言った。あー、私達は皆これをととても素晴らしく思った。このごろ私達の隣人バルク婦人が何時も即座に嫉妬する。というのは前回ワーゲマンさんが私達の小さなバケツを大きなのと交換した時、バルク婦人にその様な一つがととても必要だったものなのに。今私達はこのやかんが有って間抜けなパウラが即満杯にしたいからとバルクさんの所を通り力を込めて言う：「楽だわ、見て、今私達にもちょっとしたものがあるのよ！」それがバルク婦人を勿論今までより以上に嫉妬させた。彼女は実際ドラゴン（気性が激しい）よ、美味しい物は取りこみそして誰にも少しでも分け与えた事の無い太っちょ！

ブルゲル - ダウファス

1943年7月5日

貴方にととても会いたい。そして私はこの収容所がととても嫌だ。どうしてもここから出たい。ヴァイム、隣人達或いはとにかくバラック仲間達に見られていたり噂されたりで動く事が出来ない。このごろ又炊事勤務が有る、これは今まであれこれの理由で放免だった多くの女性達までにもかなり拡張された。例えば2歳の唯一の子供を持っている私の隣人ブルネ夫人やまだこの‘通り’から数人、でも私はマリアンがいるので必要無いのだと思う。そしてエルスは未だフルベル学校へは行かせてもらえない。其処へは彼女が二歳半にならなければ。おやまあ、だから私は何とかめっ面で見られている事。

チャックス - グレイン

1943年7月5日

新入居者達の中には変わり者達がいる、本当の男爵（v. V. t. N.）〔何処から何処までの土地の領主〕がいて彼が朝如何にしてトイレを掃除しなければならないかを聞きにいた。それはこのごろ男性達の雑役になっている。婦人達の1人のトランクに；レディ何それとあり、これが実にだらしが無い女と判る。その中のファン フィル夫人も16歳の少年達を彼女の囲い小屋に引張り込んでいる。その事で又話し合わなければならない。今、夜中見回り歩く婦人一警察勤務が作られた、特に暗い時。とんでもない。それには各母親が自分で気を付ければ良

いのよ。

チャックス - グレイン

1943年7月17日

今日ウィスと私は長い躊躇と塾考の後、私達の三番目の住人仲間を追い出した。静か、不愉快な事がなくて私達二人今は自分達の場所を持ちあの顔を見る必要がもうない、以前に色々有ってここまで来てしまった。この収容所全体では大半が離れていつている。女性達が一緒に居るにはこの神経に触る期間がまた長すぎる。自分自身も神経質になりだんだん我慢しなくなってくる。

ファン デル クロフト

1943年7月23日

フィネケはこの所何時も元気に学校から家に帰って来る、というのは彼女のテストが何時もよく出来ていたからだ。今日彼女は泣いて帰って来た：「私、落第したの」。彼女は語学に9点を取ったし、計算の方は先生が何も言わなかった。とにかく、お母さんはこれを大した事ではないと思ったし私達はこれ全て反カソリック派の先生、ミセットとリム、この二人の‘指導者’による決定だと即知った。私は彼女らのことをもっと話す事が出来るし未だ話し終わっていない！私達の推察はジェテケが心配そうな顔つきで帰って来た時明らかになった。「それでジェットは受かった？」その時彼女は激しく泣き出した：嫌だ、本当に卑劣よ。皆カソリックは駄目、ロビー パウマン、リシェ ファン ロー、クララ タブそして私」。私達は未だ何も言わなかったが、お母さんと私は意味深長にお互い見合っていた。彼女が言うには：少年達の中の一番馬鹿なのが、勿論プロテスタント、だから受かったと。これが余りに顕著だったのでジェテケでさえも判った。

「女の子達は誰も泣かなかった、と彼女、でも二人の男の子達はね（泣いた）」。この他の子は偶然カソリックではなかったが、先生が我慢できなかったのだ！これは如何した事ですか！

ブルゲル - ダウファス

1944年1月16日

去年私はハニーとかなり仲良しだったのに、この頃彼女は私の事をもう勘定に入れていない。

私の主人が‘内務部の役人’でないので余りに劣っているのだ！彼女はここでは必ずしもより親切にはならなかった。彼女は何時にも妨害し、何かと喧嘩を引き起こすあらゆる共同社会 - の為の - 仕事から逃れようとする。(私とではないのよ、幸い私は他の側に住んでいるから、この経験は一度も無い。) ベラも余り見なくなっている。彼女はこの頃凄い仲良しが居る。ウィニー - ウデマ。ゲルダ エンデンプルグと私は其れゆえ第二番目のレベルにずらされた。ゲルは未だに何時も本当の友達でここバラックに私は今数人楽しい知り合い達がいる、ロット スタウテンとアドリー ラウテンだ。私達がこの頃夜ランプの下で廊下に座っていることから自然に廊下仲間の近くに座る、其れがこの二人だ。私達は子供達の椅子にぎりぎり座ることが出来、テーブルも同じく(子供の) 更にその傍に置くことができる。9時半には又ベッドへ行かなければならないのだが、其れは一度もしていない。何時も10時になる。

ブルゲル - ダウファス

1944年2月11日

今又一つ事件が起きているのヴィム、身震いするわ！ここである人に赤ちゃんが生まれるのよ；パパは警察官！ 皆分っている内に今彼女は6ヶ月目だ。土着の薬草もドクン酒(呪医の飲み物)も墮胎するまでにはいかなかった！一昨日収容所のリーダーと彼女が警備所長の所へ行った。其れまでは誰もこの事を知らなかったし実際昨日まで誰も知らなかった。人が言っていたのは：何となくこのXは太ってきたし(何かドイツの名前、彼女は強いドイツのアクセントも持っている)そして今沢山の婦人達が話しているのを聞くと、彼女達はそうではないかと思ったが決して敢えて言おうとはしなかったと！

彼女は、だから今から半年前、巧みに警察官達の回りに近づいたが、もっと多くの人々が彼等の中へ持ちこんだ品物を狙ってそうしていた。私はその時運営がそれを良しと見なしている事に驚いた、というのは其処で凄く沢山のいちゃつきがあったから！とにかくその時の主任リーダーは今手錠を掛けられ、スホルテ夫人、その歌(日本人に後で禁じられた歌)の為に、哀れな人！そして現在の主任リーダーはこれで罰を受けることなく済んだ(ジルデルダ夫人)。昨日医者、ジルデルダ夫人そしてXが警察署に来された。最初の二人は一時間程後に戻って行ったが、後の者はさしあたり再び戻る事は無いだろう。とはいえ酷いわよネエ、その女性、私はやはりとても彼女に同情するわ。彼女はこの警察官に夢中だった！パパは罪を認めたので今重い拘束中だ。何時も何か変なことがあるのは私達の収容所だ。

ファン デル クロフト

1944年2月11日

今未だとあるX夫人と土着の警察官によるこの収容所のスキャンダル。ウェドノ（地区長）まで知らせるに及んだ。日本兵達はそのことについて何も知らない。（この子を彼女は持っていたくなく、其れはこの警察官が貰う事になる）。彼女は今この収容所の外の何処かに居る。不名誉な淫らさだ。経った今又聞くところによると日本兵が干渉しているとか。そして彼女は不愉快な刑務所に居る。そして警察官は首になり彼も刑務所に居る。

モド -

1944年2月15日

約半年前この婦人の一人が歩哨の警察官と親密な中になって彼女は今数ヶ月後に出産を待っている。最初この人々はこの事件を収容所内で可能な限り静かに処理するつもりだったが、事態が明白になってきたので収容所リーダーはやはり報告したほうが良いと思ったのだ。この問題の女性、結婚して既に二人の子供を持ち、その内の一人だけが法律上のご主人の子供、は尋問の為警察署へ連れて行かれた。再び帰され、数日後には又連行されて四日ばかり拘束され、其れから又送り帰されたので彼女は今再び‘家’に居る。

チャックス - グレイン

1944年2月25日

ジョクジャ部に警察官から妊娠してしまった一人の女性が居る。其処では今既に処罰があるのだろうか？将来の父親はペーターといい、そのことで色々な冗談が作られている。クパラ（責任者）が監視に来たら、私達は叫ぶ：「シ-ッ、ペーター クパラ アダ」（シーッ、ペーター、責任者が来た）。

ファン デル クロフト

1944年3月9日

炊事場婦人達（係）には実に嫌気がさす。炊事場婦人達は炊事場でお茶用の水を準備し、熾った炭でケーキ等を焼く、そしてアラン（木炭）を貰う。ブランク夫人は毎土曜日水飴を作る。（ミケ、養子関係、によると：「私の叔母さんは何時も炊事場から砂糖を持って来るの。」）

ファン デル クロフト

1944年4月19日

私は二度目の夜警勤務が有り一人暗闇に座っていた。日本兵と所長が歩調を速めてやって来た時は即座に立ち上がった。彼等は私が目に入り暫く立って見ていたが、私はゆっくりと歩き続けた。びくびくしながら‘彼が早く出て行く様に’と(恐れて)心で祈った。そしたら本当に、何も言わず、少なくとも照らして、彼等は炊事場の方へ行ってしまった。

ブルゲル - ダウファス

1944年6月6日

ところで 新参者達(セマランのカランパナス収容所から来た)は良い人達は別として、奇妙なグループだ。彼女等は最初の夜トイレとしてバラック周辺の下水溝を使った!彼女等は自分達の便器を貯水槽の中で洗い、彼女らの洗濯物を、大きな洗面器の中に投げ入れた、洗面器から水を汲み出し服の上に水をかける代りに。つまり、私達の全収容所はあまりの衛生上の(無)理解から反乱があった!彼女等は故に又あらゆる方面から文句を言われ、これについて医者から強い注意を受けた。

彼女らのバラ(荷物)が未だ届かない事も彼女等にとって大変不快なことだ。彼女らが自分で持って来た手提げカバンだけを彼女等は持っている。後は何も無い。マットレスも、蚊帳、洗い桶等。私達は返して貰う事を心配する気持ちで全て彼女等に貸してあげる。今までの所彼女達は正直そうに見えるが!この不信の念、ヴィム、私達側から彼女等に対する、其れは不快だけれど、貯水槽内の便器から生じている。其れが彼女らを永久に汚い奴等という判子を押ししてしまった!

私達のバラックは彼女達の最初のと向かい側だ。彼女達はバラック1, 2と3、そして私達は4に住んでいる。彼女達の出口の一つが私のテラスに近い反対側だ。丁度エルスが彼女達の近くで歩道に座りシャボン玉を吹く為に石鹼水を泡立てていた(其れを彼女はねぎをパイプにしてする)。彼女はちょっと石鹼水をまき散らかせ其れが歩道から下水溝へ流れた。暫くして私の隣の男の子が彼の母親の所へ来て言うには、あその向かい側で子供が吐いたが彼女達は掃除すらしないと!それは不審に思った。私は感染を凄く恐れているのと、エルスが‘其れは石鹼水よ!’と叫んで全ての子供達がそれに同意した時、私は飛掛かっていくつもりで既にバケツを掴んだ。でも其れが又バラックを通して広がって行く:彼女達はペッと唾を吐く!彼女達は凄いい化粧をしていて、其れがそれらのやつれた頭に余りに忌まわしく写る!

モード

1944年7月8日

最近セマランからここに来た婦人達の中に、かなりの数の変人、売春婦、等がいて、この人達はここでスパイ勤務についている。幸い彼女達は凄い厚化粧の顔だから簡単に見分けられる。嫌ね！

モード

1944年8月19日

男性の医者達が収容所の面倒を引き起こしている、日本軍がこの収容所に保健所の指導を委任したその中の一人、ヒーセン医師、が同僚を裏切り私達の女医達にさえ失礼な態度を取る、その中では今まで私達の最大限の満足を導いてくれた63歳のワルシュ医師がいる。その上彼は他の分野にも手を伸ばし、このようにして私達のかなり有能な収容所リーダー、ジルデルダ夫人の権限を傷つける。これら三人の坊や達の代りに三袋の砂糖が中に入れて来た方が良かったのに、というのが一般の意見だ！

チャッケス - グレイン

1944年8月19日

8月10日ここに三人の男性達が入って来た。それは：医療上の世話をするためにこの収容所に加えられた三人の医者達だと判った。ヒーセン、アバルバネルそしてファンレーント（医師）だった。それは物凄い大事件だった。最初私達は彼等が赤十字からの人達で嬉しい知らせを持ってやって来たのだと思った。とはいえ何かおかしいものがそこにあると思う。彼等は今ここに九日間居るが、既に最も大きな不愉快さがこの辺を取り巻いている。それは今女達側に因るのかそれとも男達側にか、私はその中間を取らせてもらう。でも私のヨッシヤはそんな女性達の大騒ぎに陥っていない事を心から願っている。彼はもっと魅力的だったから多分それによって全女性のハートを射止めた事だろう、でもそれは又良い事ではないのだから、だって：「誰が其処にいたか知っている？」...その人は既に三回も来ていた。アー、私は何時も最初に見た男性に抱きついて、全ての男性たちに‘お帰りなさい’と言いたいと話していたが、ここではさらさらそんな気は無い。ブルゲルハウト夫人はところでラウ前軍隊将校は既に‘私のもの’であるからと私に最も厳しく釘を刺した。この人はここに要するに時々ランプゲームをしに来る、そしてそれで私は酷くそれとで虐められる。彼は68歳で私は43歳、とても情けない事だ。

ブルゲル - ダウファス

1944年8月22日

ヒーセン、ファン レントそしてアバルバネル、すなわち三人の男性達は既にここで興奮の原因となった。最初の（人）は生意気な伊達男で女たらし、でも他の二人はきちんとした人達だ。最初の人（人）はワルシュ医師に最初大変逆らったが、私達は皆で彼に私達が彼を好んでいないという事を良く気付かせてから今は少し改善した。彼は日本兵にかなり凄惨な影響を及ぼせると思っているが、もし何か頼まなければならないとすると、彼は敢えて其処へ一人では行かない。昨日彼は高官訪問者に私達が1日一個のブローチェ（小形の丸いパン）の代わりに二個貰う事は出来ないものかと頼む勇気があった、そしてそれは約束された。ワルシュ医師はその様な約束は既に百回貰っていたが、彼は今彼が頼んだ事は本当に実現すると考えている。とにかく、様子を見ることにしよう。

チャックス - グレイン

1944年9月7日

あー愛する人達、私はとても強烈に家が恋しい。あー、一つの部屋そしてそれから自由に自分のしたい事をする。夜はドアが閉まりそして翌日の為のオーダー或いはプリンタ（命令）はなにも無い。あー、もし病気だと全く何も我慢出来ないわ。とてもイライラし、そして自制し全て感情を抑えなければならない。私達は礼儀正し過ぎた。もし私達がお互いもっと真実を言うことが許されたなら、もっと気持ちが良い事だろうに。

ブルゲル - ダウファス

1944年10月30日

私は今週とても忙しかった、と言うのはその可哀相なゲルが又二回冷たい身震いの来るマラリア - 発作にかかった。彼女はとても気分が悪かった。私は彼女の小屋を掃除し洗濯物等も。アドリは子供達を面倒見た。この様にして全ては上手くいった。アドリはゲルが病気の時は不可欠だ。子供達はとても彼女の事が好きで彼女も彼等の事を。

テ フェルデ

1944年12月9日

そして私はデー家に行く時間が余り無く、彼女達は私達の所へ全く来たく無いのだ。近頃では彼女達をここで見かける事はもはや無いしこの間彼女達が一度言った事は:「アーチ -、今夜私達は貴方の所へ来れないわ、本当にごめんなさいね、でも私達は約束が有るのよ。残念に思わないでね、あなた？」一時間後彼女らの部屋の前まで来てそして見たのは彼女等が其処で静かにランプの下に座っていた。嫌だなあ、やはりどこでも同じだ何時も私は女の子達の後を追っていかなければならない。私の所に彼女等は来ないのだ。私に何があるというのかしら？

チャックス - グレイン

1944年12月21日

「クリスマスは何時？」「アッそう、24日の日曜日？」。「あーそうしたら私達は赤豆のスープが貰えるわ」。「ゲーッ、(スキーティング)【リンブルグの方言？】、そうしたら私は全く炊事場にいないからペウク(残り物)がもらえないわ」。塵籠を空にしてこの塵を鉄製の手押し車で土着民の監視のもとに門の外まで持っていかなければならない十代の女子達のクリスマスの概念。900人のバンドゥンから来た人達には大勢軽薄な気取り屋達がいる、彼女達はピンクのマニキュアを塗った爪で便溝をすくい出さなければならぬ。

テ フェルデ

1944年12月26日

デー家とは幸い再び上手くいっている。私達は或る日じっくり話し合った、そして彼女達はやはり本当に言葉に出したとおりのつもりだと私は信じる。でも嬉しい、1組の本当に楽しい友達達を持つて。彼女達はちょっと私より年上で、ほぼ19歳と20(歳)、でもその差感じない。

テ フェルデ

1945年1月25日

昨日は素晴らしい日だった。ミサの後10時半にデー姉妹の所へ行った。即座に其処へ行ったので家はお風呂用に私の服を取りに帰っただけ。凄く楽しかった。イケは私の食事さえも持つ

てきてくれた。ここにデー姉妹が居る事を私は何と嬉しく思っていることか。今私は少なくとも本当の友達（達）を持っている。彼女等は本当に優しい。

テ フェルデ

1945年2月13日

明後日はコーリー デーの誕生日だ。どうなるのかなあ？私は其処に又1日中居たいけど、聞く勇気が無い、というのはそうすると彼女達はそうしたくなくても勿論良いと言うし、彼女達は私という厄介者を抱え込む。嫌だなあ、妬まないという事はやはり難しい。私が其処に居ると面白くない、他の女の子達と過ごした時は面白かった。

テ フェルデ

1945年2月14日

万歳！デー達が自ら私に明日来ないかと聞いてきた。

テ フェルデ

1945年3月12日

食事は近頃実に質素だ。やはり余りにちょっとしか中に入って来ないし、そしてそれから炊事場で物凄く盗まれる。炊事場婦人達は食べて太り、又更に平鍋一杯を家に持って行く、そして私達は殆ど何も貰えない。幸いミセット夫人によってこの事の反対運動が始まった、彼女は私達の部屋に住んでいて、稀な不平屋、でもこの場合はかなり役立つ。

テ フェルデ

1945年4月2日

デンデン（乾燥した香料入りの肉）を貰ったが、炊事場で余りに多く消えてしまうので生で分配された。近頃益々炊事場と喧嘩が起こっている。物凄く盗まれるので今私達の部屋からの婦人、ミセット夫人がそれに反対して管理勤務を制定するべくせっせと忙しい。それは又本当に酷く、そして物凄いえこひいきがある。

チャックス - グレイン

1945年4月4日

幸いにも、又同時に殆ど理解できないのは（表面からでは）女性達の陽気さだ。私達は今だそれぞれのちょっとした美しさや何か親切を受ける事に喜びを感じる。残念ながら又不必要な嫌がらせや周囲からの権勢欲のピークでしばしば邪魔はされるが。それには只一言‘ふん’そして私ももうその事を考えたくはない。

テ フェルデ

1945年4月15日

私達は小さな卵の事で喧嘩した。今朝私達は又それぞれに半分の卵を貰った。それは実に美味しい、そして今！私達は大家族であって後は主に一人者達だからということで、私達は果物の分配では何時もそれらの一番小さい物を貰う。ファン デウテコム夫人、私達の組長（バラックリーダーの補佐）、がそれで言うには：「まあね、大家族だから気にならないでしょ！」、でも彼女は忘れてる、ということは私達の一人が同様にこの小さい物を貰うのだという事を。果物では例えば彼女は各家族に大きな物を分配しそしてその残りを私達が貰う。だから個人は例えば三個の大きなドックス（黄色い、丸い果物）と三個の小さいのを貰う、私達五人で三個の大きなドックスと後の人達はゆえに十二個の小さい物。それはやはり余りにおかしい！でもお母さんは喧嘩したくないし、だから何も言わない、でも今私達が今日又勿論一番小さい卵を貰った時、お母さんが文句を言った事にファン デウテコム夫人は怒って彼女の卵をその小さな卵と交換した、そこでは同時に彼女が裏切って一番大きな物の一つを取っていたのだ。それ以降は又上手く治まった。幸い私達はここで長く尾を引いてすねる事はしない！

収容所の外との接触

ファン デル クロフト

1943年1月6日

私達は朝の内洗濯物を収容所の外に渡す事と果物は歩哨の前で買う事を許されている。又知り合いの人達が朝の内何かを持って来ても良い。それで今日マゲランからマーサ（アンボン人）とハリー デ ラノイが果物を持って私達と他の人達の為に来てくれた。土曜日（1943年1月9日）にハリーは又来る、それで私は彼にキティと私の日記を持ってきてほしいと頼んだ。大型トランクの鍵を彼に渡し、そしてそれが何処にあるかを説明した。やはり私が日記を手元に持っている方が安全だと思う。其処には余りに沢山書いてある。それが一体誰の手に届くことになるのか決して判り様が無いもの！（静かに.... 私がそれを持っている！）

ブルゲル - ダウファス

1943年1月6日

今までの所全て上手く行っている。私達は朝の内一時間半使用人（を持つ事）が許されていて、彼等はだから洗濯物を持って行って良い。私にはきちんとした使用人が居る。スミ - デスカンプ先生がその人を私に世話してくれたというのはエイミーの使用人を私は今もう勿論使いたくないので。彼女は拭き掃除と埃を払い、靴を磨き便器を空に、だから丁度追加の仕事、そして彼女はスミ - デスカンプ先生の家で洗濯をする。彼女は又石鹼の監視をしている。それは故に良く規制されていた。

チャックス - グレイン

1943年1月14日

私はヨッシャに間抜けなマレー語の葉書を書いた、運を天に任せてスラバヤに。まさか返事は期待しないけれど、ひょっとして今まさしくそれを貰うかも。

ブルゲル - ダウファス

1943年1月14日

洗濯物は再び出たり入って来たり。私達は未だあらゆる物を鉄条網の所で買う。時々人々が見せびらかしにいつものやり方で追い払われる。彼等が編まれた竹製の仕切りを私達の回りに作ろうとしなければ良いのに。私はそれが絶対辛抱できない！

ファン デル クロフト

1943年1月16日

全て今はとても厳しくなっている。カワット（鉄条網）に今はほぼどの行商人達ももう来ない。それは禁止された、でも彼等はとにかくあらゆるやり方で試みる。大抵はトイレの後ろ。警察が背を返すや否や...彼等はカンボンから走ってあらゆる種類の食べ物を持って来る。警察に手を縛られた何人かの行商人達は酷く虐待された。踏まれたり引っ叩かれたり自分達のバンサ（民族）によって。ニュース（噂で聞いた）：ジャワの攻勢戦が始まった。昨日から私達も‘戦争捕虜’となる。そして私達はここから再び出て行くと人が言う。

モードー

1943年1月19日

12月24日私達が丁度私達のトランクを汽車へ持って行くのに忙しくしていた時突然サバンが爆撃されたことを耳打ちされた。スマトラの他の場所等も、と後で私達は聞いた。一昨日ここに立ち寄った人が、ニューギニア、アンボン、ティモールとフローレスが目下奪還されたと教えてくれたそうだ。私達はそれを期待している！又ここで私達は何度も飛行機の音を聞くが、それらを一度も見えていない。それは実のところ簡単かも知れない、というのはアンバラワは小さな、ほぼ全て山に囲まれた高原（海拔500メートル）に有って空は今たいてい曇っている、（というのは）雨季なのだ！

モードー

1943年1月24日

歩哨の所長が彼の窮地を私達の収容所リーダーに嘆いた：歩哨の内から六人の警備員達が鉄条網の回りで絶対何も買う事が出来ない様にほぼ1キロメートル半の収容所の外周を簡単に監視

できるわけがない。その事で彼等は日本兵達から叩かれそして給料からの控除で罰を受ける。彼等はこの仕事を嫌っているのだが、解雇してはもらえないのだ。彼等が逃げるなら、捕まると刑務所に行くことになる。数人はこの近所でカンポン人の民衆からも引叩かれたに違いない。彼等は故に両側から攻撃を受けているわけだ。

この所長、感じの良い年配のジャワ人、はそれ故に何ももう外に向かって禁制取引しない様私達の協力を求めた。そうすれば彼は私達に供給される食料品が全く不十分である事を良く知っているので、彼の側から私達をなるべく可能な限り援助すると。私達三日間は何も買わない事、そしてその間必要ならば私達に払うつもりはあるので色々な改善を日本兵に頼む事を今約束した。

例えばもっと砂糖、ミルク、お茶、ましな米、等。所長は今のところ私達が時としてここで働いているクーリー達に店々用にメモとお金を渡す事を許してくれているが、それだけでも当座のしのぎで、というのは大半の品物はこれらのクーリーたちによれば売り切れだし後は彼等が持ってくる物とそれを支払う事で我慢しなければならない。こんな風で私が例えば、1ギルダー35セントで半キロのカカオを書き記したら、受け取ったのは1オンズで40セント。暗くなって来た途端しばしば女性達が籠一杯の食糧を持って中に入ってくる。彼女達は大半が私達の警備員達の親類だ。

ブルゲル - ダウファス

1943年1月26日

今日私はバタビアからの手紙を受け取った！何という無上の幸福。私はそれでやはりとても嬉しい。凄く沢山の人が今日は一通受け取ったが、これらは全てバンドウン（から）の物だった。私が今までのところバタビアからの一通を持つ唯一の者。そして他の人々の物（手紙）は全て12月25日（1942年）からで、一方貴方からは1月20日（1943年）バタビアから出ていたけれど、其処には消印がある。他の人々には無し！残念ながら貴方はカードに日付を忘れたわ、でもとはいえそれは長く郵便局に置かれてはいなかっただろう。24日にそれはジョクジャにあった、だから送信は早急に行われたのだ。

今彼等が言うには、私が返事を書くなら、貴方の葉書を提出しなければならないと！想像してよ。私には全くそんな気持ちは無いわ。貴方の自筆がとても嬉しいんだもの！ヴィンピユ、ヴィンピユ、貴方が六日前に私に当てて普通に座って書いていたのだ、ということ、それはこの上なく幸せな感じ。私は1日中その楽しさからスキップして歩いていた。！ここに貴方の葉書を書き写す。

僕の最愛のジェティ、

君達が皆健康で元気に暮している事を願っている。子供達は元気かい？君は自分達が保持する食糧用の十分なお金を持っているのかい？僕の健康は最高だ。日本人達は我々を良く扱っている。だから僕の事は心配せず決して不安にならないでくれ。葉書のみで返事を書く様に！誕生日のメッセージは嬉しかった、それは一週間以内に着いたよ。エルシュとマリアンチェにお父さんからキスを。エギンクは健康だ。ヴィムから抱擁を。そして私は返事を書いた：

私の最愛のヴィム！

今朝私は貴方の葉書を受けとったわ、凄く嬉しい！ご覧の通り、私達は今収容所で生活している、貴方の様に。12月30日私達はここへ着いたの。その前はウガランにハースマ夫人と住んでいたわ、9月1日にジョクジャを出発したのよ、というのはウガランの気候の方が子供達には良かったし、其処の家はとても美しかったから。ジョクジャの友達達は皆ここに居るわ、とても素敵。楽しい時を過ごしているわ。沢山の労働はしなければならないけど、微笑は絶やさずそして私がヘーグ（オランダの都市）の病院で一生懸命働くことを習ったことは幸せ！子供達はとても元気、そしてこの赤ちゃんはとても美人で、ヴィム、そしてとても健康よ。彼女は何時も笑っているわ、乳児食はここでは大変良くて、今私は彼女に三回母乳を与えているの。エルシュはとても悪戯な可愛い子。彼女はお喋りで毎日パパにおやすみのキスをしているわ！お金は充分あるから、心配しないで、百ギルダー受け取りました、どうも有り難う。ファン レウセン医師は何時も私達を世話してくれている、彼は親切だわ。さようなら愛する人、私は何時も貴方の事を思っているの（そして特に毎晩10時半に！）。沢山、沢山のキスを子供達とそして貴方のジェティから。

ブルゲルーダウファス

1943年2月2日

今日私は貴方の葉書を返してもらったが、残念ながらこの検閲が英語を知らないなので、英語で返事を書く事は許されずマレー語だけらしい！だから私は早速新しい葉書を書いた。又私達とはとにかく受取カードを其処に付けなければならない。それは翌日返してもらえる、という事は私達のが即送られたという印だ。それを今私は未だ待たなくてはならない。幸い私は未だ上手く書けたが、マレー語では英語の様に全く心をこめて書けない。嫌ね、マレー語ってやはりガラクタ語だわ。

モドー

1943年2月25日

六人でジョクジャにととも沢山の物を注文した。其処に住んでいる婦人達の一人の母親が世話してくれるだろう。火曜日の午後この母親のバブ（使用人）が大きな包みを持って収容所の入り口に現れたが、歩哨が彼女を次ぎの知らせをもって追い返した：「明日朝5時から5時半までにこれを中へ持ってきて良し」。判るかしら、それだと未だ暗いので日本兵おじさんにはそれが見えないというわけ！

本当にこのバブは昨日の朝5時半前に更に色々な他の重い荷物を背負った彼女のバブ達とジョンゴス達(家事手伝い)〔彼等から日本兵が私達を守った！〕とで中に入って来て、私達は今高価な十八枚の板チョコ、大缶のビスケット、十個のペパーミント、一包みの蝋燭そして三箱のカメリア（石鹸の種類）にととも喜んだ。他の包みから私達に又その砂糖工場に勤める私の生徒の母親から小包が現れた。中味は半ポンドのたっぷり中の詰まったターイーターイ（固いライ麦のクッキー）だった、美味しい！貴方達は普通想像できないでしょうね、毎日の惨めな食べ物の中で如何に今私達はその様な物を美味しく食べているかを。或いは...いや想像できない、オランダで貴方達は食事を如何しているのかしら？

ブルゲルーダウファス

1943年3月8日

このバラックの色々な夫人達が昨日C収容所の彼女らのご主人達から葉書を貰いそして彼等は皆、スラバヤだと言っている、だから貴方、今私もやはり貴方は其処にいると思う。それらも（葉書）私の物と全く同じ、最後の十七文字以外は。ああ、全く何時になったら私達はどうなっていたかを伝える事が出来る様になるのかしら！

ファン デル クロフト

1943年3月14日

私が家に帰って来た時（再び収容所で）〔アンバラワの病院から〕、ストラウケル ブージュール夫人がガウヰから彼女のご主人の葉書を受け取り、そしてファン ネッセル夫人も、と耳にした。ファン ボメル夫人などは二通も（貰った）。私達には無い。郵便規制はかなり悪い。

ブルゲル - ダウファス

1943年3月20日

マリアン用にベルタ ブロムから今やっと来た小包の中に可愛いお揃いのジャケットとソックスを受け取った、何と親切よね、それは彼女にとっても可愛く映る。エルスにも未だ三枚のシャツが入っていた。そして私には二枚のトゥウェカシャツ、私の長ズボン用に、白と濃い青色の、とても途方も無く嬉しい。私は何も持ってなくて、ズボンだけ、そしてそおいった物はここではとても快適に着られる。彼女達は私達をととても良く面倒見てくれるのよ！忘れられてはいない、という気分はとても嬉しい。それは支えをくれる。

チャックス - グレイン

1943年3月22日

私は今朝沢山の小包で再び大喜びだった。中でも赤十字経由でハニー レーリング夫人から。美味しいコーヒークッキー、タフィー (キャンデー)、アッセムクッキー (クッキーの種類)、鰯、ミルク、ジャム、チョコレートそして米粉。小包を受け取る事は凄く楽しい。シュワンク夫人からは再び見事な缶に入ったデンデン (乾燥した香料入りの肉)、美味しいケーキとクッキー。全ては今赤十字経由で中に入れて良い。私達の事をととても思ってくれる事は優しいわ。

ブルゲル - ダウファス

1943年3月22日

昨日タベア バックスが又来てくれた事を書くのを忘れた。この人は本当に私達の為にととても親切に面倒を見てくれる！彼女は再びベーコンを持って来てくれ、ソーセージそして私用に二枚のシャツとクッキー。彼女が居た時はどしゃ降りでも彼女は何も手渡せなかった。私達はそれから後ろ側に行ってそこでこっそり持ちこんだ！やはり彼女は素晴らしいわよね。もしその警備員が彼女を捕まえたら、彼女は何日も長く閉じ込められてしまうに違いない！彼女は又私の誕生日に書き送ってくれた、優しいわね。

ブルゲル - ダウファス

1943年4月6日

沢山中に貰えて今日は素晴らしいわ、1ポンドのバター！そして一瓶の油、一箱のお茶、ゴル

パラ（お茶の商標名）そして更に美味しいコーヒー。素敵でしょ、特にこのバター。何もつけていないパンはやはりとても不快に思う、それなら全くパンを食べない方がまだ。そしてスミ・デスカンプ先生が又ジェルクス（柑橘類の果物）とクッキーを送ってくれた。シーフ（ドルスト）と私はマリチェ ワッセルマンからあらゆる楽しい物を入れてジョクジャから小包を貰った。私は缶入り鮭、葉書、ビタミンCとB剤、見事な中身がたっぷりに入ったスペキュラース（甘く香辛料の利いたビスケットの一種）、三枚の板チョコそしてマリアンとエルスにはチョコレートでできた復活祭の飾り卵。素晴らしいわね、これらの小包みデーは大変楽しい、それは毎火曜日と毎金曜日だ。とはいえ何も貰えない多くの人々が居る事でそれは又多くの嫌悪と妬みを与える、とても可哀相。でもまた一般と貰わない人達に分け与えられる赤十字 - 発送物が中に来る。最近はニュースが少ない。外では何も進んでいないと思う。そして私はとても終結を期待する。ジェチェ ファビウスから今日葉書を貰った、大変楽しい。彼女はスラバヤの収容所も今閉鎖されそして物を何で持って来るのを許されていないと書いていた。又彼女は私に何を送ろうかと聞いてきた。私は歯磨き粉と白粉を頼んだ、そしてカカオと。

モードー

1943年4月8日

収容所の外に家族や友達たちを持っていて、その人達にお金をおいてきた多くの人々は食糧や他の品物の定期的な小包を受け取っている。これらは今ここで赤十字の仲介により中に持ってくるのを許されている。スイスの領事がこの指揮に当たっている。鉄条網の外にコネが無い他の人々はその時隠し持っていたお金で夜な夜な再びカワッテン（禁制取引）を始めた。最初はこれを警察に黙認させていたが、数週間後には干渉されることになった：食糧の入ったいくつかの大きな籠は取り上げられそして今それが続く間は恐ろしい。とは言え真夜中に未だ食べ物が収容所に定期的に禁制取引されている。それで恐らく警察自身もかなり儲けている！労働者達は今、ゲデック（編まれた竹製のマット）、それは編まれた竹の繊維の仕切りで、鉄条網近くの外側に作るのに忙しい、そうすればもはや何もその間を通すことが出来ないから、でもその上は大丈夫だ、と思うけど。ところで、大半はきちんと門を通して来る！お金の‘家宅捜査’への恐怖はまだ存続しているが、殆ど皆未だお金は持っていて場所さえ有れば買っている！

モードー

1943年4月10日

昨日はシンタークラス（聖ニコラスの祭り）の様だった：赤十字の仲介によって再び相当の小包と籠が中に入って来た。私達は今回もまたかなり貰った、つまり‘私の’砂糖工場から。私

はその婦人に葉書でイエレにもう殆どシャツが無いので何時か少しメリヤス糸を届けてくれないかと頼んだ。今彼女は二枚自分で作ったフランネルのシャツを彼に送ってくれた。メリヤス糸はもう手に入らないと見える。後は食べ物が小包に入っていた、つまり半缶のカカオ、薫製肉の塊、自家製の瓶に入ったジャム、二箱のフンクウェー(粉)(ソーヤーエンドウを挽いた粉)、それはグリーンピースの粉の一種、二箱のテンテン(ピーナッツクッキー)、これはオランダでピーナッツ中国人⁶⁶が売っていた物、そして化粧石鹸。その他私達は更に赤十字自身からの分配として二箱のクッキー、これらは寄付金で費用が負担されたと推察する。私達には既に一度そおいったことが有った。

それは小さな事だけれど、彼等は非常に私達、空腹な捕虜達、から高く評価された。又私達は夜幸せな事に、くじ引きで砂糖工場の職員から収容所に送られた大きな包みから板チョコを貰った。

もし外の世界が私達の事をこんなに良く思い続けてくれるなら、未だちょっとは辛抱する。その他の点ではその外界も生活がだんだん難しくなっていて、大量の品物が日本兵達によって取り上げられたか、あるいは全てが高くなっている。ローンや給料はそれに歩調を合わせていかない、とにかく、この現象は貴方達も良く知っている事でしょう！

チャックス - グレイン

1943年4月11日

アー、何という人生。とは言え私は元気そうに見える。それは昨日ここに半時間の面会を許されたウィリーの結論でもあった、彼女はその為に三朝警察署で時間を費して二時間半の旅をしなければならなかった。私達は二人とも凄く神経質になっていた。彼女は青白く痩せて見え、かなりイライラしていた。沢山話をした、そして多くの人々が挨拶と話をしたがってやって来たので未だ全て言い切れていない。彼女は再び美味しい物をどっさり積んでいた、ここに三人の子供と一緒に居る彼女の従妹シーチェの為に。彼女は未だ本調子ではない。厄介だ。私達はマゲランの皆から沢山挨拶を受けた。私は沢山の事に関してとても嬉しかった。今私達は又来月まで生き延びる。彼女は月の毎第一土曜日に来るだろう。

ブルゲル - ダウファス

1943年4月19日

フレイクの誕生日だ。彼は今既に24か25歳になっている。随分な年に思えるが、でも合っ

⁶⁶ 路上でピーナッツ菓子を買っていた中国人。

ている。私がそれをきっちりと知らないというのはそれにしても何と厄介な事か。彼は何処に居るのかそして何をしているのか？まだ何時か私の知る時が来るかしら？彼がドイツの工場で働いているだろうとかいった事は決して信じられないけど有り得ることだ。何とか再び皆オランダでどの様に過ごしているかについて、何か手紙なり連絡で知れたらなあ。アー、私はそれでとても幸せだろう。

チャックス - グレイン

1943年4月25日

赤十字が閉鎖された。どの小包も中へはもう許されない。家族だけはまだ（来ても）良い。

モード

1943年4月27日

赤十字の発送物が前もっての警告無しに不明な理由で突然止められてしまった。既に駅からこの柵前まで持って来られた大量の小包は、収容所の中へは許されずそして送り主に送り返されるだろう。新しい規律！

4月の初めまで私は殆ど‘外界’の誰にも私の事を聞かせなかったが、その時私は突然数人の知り合いに書くつむりの私のペン軸を曲げてしまいそして...オルガにも。彼女から私は既に長い間何も聞かなかつたし、私自身も彼女に書く気力も意欲も無かった。そして偶然数日前ベルトから返事を貰う！そして私は彼も遅くとも去年11月には強制収容されただろうと堅く思っていた。彼も年上の三人の女子達も未だ働いている、ラッキーな人達！そしてオルガは一人沢山の子供達と居て私と同様に無収入、と私は未だ想像していたのだ。そうなら彼等はずっと以前に書けたに違いないのに。

彼等はいまいまでも未だ同じ家に住んでいる、そしてそれにもかかわらず私達はあちこちのバラックに既に南京虫が現れてきた、嫌な収容所に居るのだ。

食物は徐々に少なくなる。散髪と靴の修理も今は私達の一日に貰う5セントで支払われなければならない、そしてもし終結が今見えたとしたら、私達は少なくとも日を指折り数える事が出来ただろうに。でも囚人 - 犯罪人（出所の日が判っている）のこの慰めさえ私達には無い。

ブルゲル - ダウファス

1943年5月15日

私達は貴方達に再び書くことを許される、十四行。大変結構。私は既にポストに入れた。写真も送ってよし。残念ながら私達の物はジェチェ ファビウスの所に有る。私は彼女にそれを貴方に送ってくれるかと頼んだ。貴方達が今返事を書けるのなら良いのに！！

ファン デル クロフト

1943年5月17日

そして又面会日だった。とても沢山の人が来た、数人の本当の家族達は歩哨の所に来る事を許される。他の人々はただ小包を中へ渡せた。私達には勿論何も無い。ハートホールン夫人が書いてきたのは：(ちなみに、全ての郵便物を彼等は今日解き放した。私達は三枚の葉書を貰った、その中には...お父さんから、ヘラルド(彼女の兄弟)の一枚、そしてハートホールン夫人からの一枚) 彼女は警察から許可状を貰っていないので、小包は中へ入れてもらえなかった。故に彼女は私達にただ手紙を書いた。毎日私達の事を思っている、と彼女は言う。

お父さんは今日で42歳になった。今朝私達は皆で収容所の教会へ行ってきた。そしてそれからお母さんがその後落ち込み泣いた時、彼女はお父さんから葉書を受け取った、(1943年)3月19日付で、それは私達が丁度最初の葉書を受け取った日、二ヶ月前になる。これは三通目の葉書で、それからいくと私達は二通目を受け取っていない。でも私達は凄く嬉しい、特にお母さん、そして彼女は少々元気を取り戻した。

ブルゲル - ダウファス

1943年5月18日

昨日は面会日だった。そんなに沢山の人は来なかった - 今未だ家族の居る人はフリーだ - 家族だけ入って良い！中に入って来た情報はフランコが平和交渉の仲介を申し出たが、アメリカが断りそしてドイツは服従させたがっている。後は日本が未だ爆撃されている。徐々にだが確実に前進している、マリアンは未だここで誕生日を迎え、そして大晦日も私達は未だここで祝う事だろう！

ブルゲル - ダウファス

1943年5月25日

ロットが又日曜日にここへ来た。私達は彼女が馬車で通りすぎるのを見、何かお互い叫び合った。彼女は凄く沢山の品物を私達の為に中へ密輸した、石鹼、マイゼ - ナ (コーンスターチ)、カチャン - イジュ粉 (小さなグリーンピースの粉) そして数冊の本、素敵でしょ？ロットは私達に凄く親切なのよ。

昨日は日本軍の高官がいた。私達は1時から2時の間中に留まっていなければならなかった。この男は幸い早く再び出て行った。でも彼はクーリー達が下水溝を清掃している所を見た事から今この人達はもう中へ入ってはいけない。(何と)むかむかする振る舞いだろう！この頃は年長の少年達がこれを又しなければならぬ。私はこおいった事が我慢できない。これらの少年達は既に余りにも沢山労働しているのだ。そしてこれらのクーリー達はとても素敵なバラン (品物) を中へ持ちこんだのに！

ブルゲル - ダウファス

1943年6月7日

今日はえらい驚き：貴方から郵便為替！チマヒから。貴方が今スラバヤでなくチマヒに居るとは何と幸せ。今故に貴方はその気候を楽しんでいて間違いなく逞しい健康体なのね。これは貴方の五ヶ月目の給料の一部とある、だから5月。と言うことは貴方はお給料を貰っているのね。私はとても嬉しい。だから何でも買える、果物と煙草、多分服も、石鹼等。ねえ、ヴィム、今又ちょっと返事を書いてよ！この為替は、送り主タワナン事務所 (戦争捕虜事務所)、とタイプされている、だからとても非個人的だ。それは12ギルダ一分。幸い前回ほど沢山ではない、というのは私は今それを貰うわけでは無いから。私はそれを現金化するつもりも無い、だってそんなことをすると私はそのお金を所長に手渡さなければならぬもの！でも私はそれとにかくとても嬉しい！ヴィミー、私の心臓は貴方からのそおいった物ではちきれんばかり。もし貴方が本当に戻って来るとしたら、私はどんなに気が動転するかしら！

ファン デル クロフト

1943年6月7日

今朝再びお父さんからの葉書、七通目、これを私達は欠かしていた。私達は今既に八通受け取った、そして天皇陛下の時彼等は赤十字からクウェー (クッキー) を貰い、そして薫製肉とベーコン。男性達はこれらの子供達と一緒にいるこの私達よりあちらで実際もっと良い物を手に

している。

ファン デル クロフト

1943年6月21日

今日は家族達の為の面会日だった。どの小包も中へは許されなかったが、全てはそれでカワット（鉄条網）の上から投げ入れられた。警察は門の所で中も外も、殺到する人々で双方に大変忙しかった。少年達が大きな塵籠を外に捨てにやってくる、そしてそれから籠一杯小包を持って戻った。警察はビングン（途方に暮れた）、婦人達により25セントと煙草で説得されて最終的には全てを許した。私達は何も貰えない事に腹が立った。

モード

1943年6月22日

昨日は今だ免れている人々の面会日だった。オランダ人達だけだ、彼等も今に間もなく‘後ろ’（収容所）に行く事になるだろう。戦争について彼等が知って居る事を伝えたところでは、ヨーロッパは連合軍がとても良い状態だが、私達はここで未だ暫く辛抱しなければならない。他の言葉に置きかえれば、私が既に思ったごとく、日本は差当たり副次的な事柄なのだ。まずはドイツが打倒されなければならない。イギリス-アメリカのイタリア、シシリアの襲撃、そして平和交渉、これはドイツが全ての引渡しを要求されたことで中断した事だろう。まだどれほど長く（私達はいなければならない）？

チャックス-グレイン

1943年6月22日

これは言葉で描写できないし、自分でこれを見た事の無い人は昨日の面会を想像できない。今回は沢山の面会人たちが居た、皆ベッセク（竹で編んだ籠）そして小包に一杯積みこんだ。最初の流れが中に入って来た。ウィリーは未だ。全ての人々は門の前で待ち構えている。今はもっと多いゲデック（編まれた竹製の仕切り）が収容所を覆っているのだから、私達はもはや外を見る事が出来ない。でも女性達は方策を知っていた。私達近頃では私達自身の塵樽を数個のかなり大きな塵だるが置いてある門の前まで持っていかなければならない。私達は猿の様にこの樽の上で誰が来たのか狙い見る。

最初の面会はバンドゥンガンから来たオーヘルネの家族だった（これらの女の子達の

一人は私達のマゲラン当時ヘラルドと居た)。彼女達はバラン(品物)を一杯詰めてきたが...何も中へは許されなかった。彼女達は打ちひしがれた顔付きでつつ立ったまま別れを告げた。実際たった15分話が出来ただけ、彼等の籠一杯を彼等の前にしてオーヘルネ氏が言った：「沢山ランパス(掴み取る)しなさいよ」。

傍観していた全ての女性達は籠から何かをもぎ取り、そして警察が何とか手を打つ前に籠の中の全ては消え去った。そして、それから土手の柵だった、全ての次ぎの面会者達は従来通り手から小包をもぎ取られた。其処へウィリーが来た、重い荷物を一杯詰めて。残念ながら、最初に私は言わなければならなかった：「何も許してもらえないのよ」、でも彼女はドアの前で待たなければならなかったので、その間私達はこれらの籠の中にもらおうと目指す。私達のバラック仲間で背がかなり長く塵樽の上に立っていたジュ-リーがズーッと叫び続けた：「私はジュ-リーよ、私にそれらの小包を頂戴よ」。ウィルはちょっといぶかしげに見た、私は門の所に目指して立っていた、でも彼女が言った：「チャックス夫人用に、頂戴!」、いずれにせよ私も全て中へ貰った。

籠全部にジェルク(柑橘類の果物)を持った婦人は、一つ一つゲデック(編まれた竹製の仕切り)の上をハンドボールの様に目指した。デールマン⁶⁷一杯のバラン(品物)で外に居る女の子、そしてそれを中で渴望している彼女の母親、彼女は何も手渡す勇気が無かった、そして彼女の母親が自暴自棄になって叫んだ：「とにかくよこしなさいよ」、彼女は勇気が無かった。これはハイエナの様子に門に居るこれらの女性達の最も純粋な野生動物のギャンブルだった。

やっとしてウィルが中にやって来た、彼女が今少なくとも何かを持ってこられた事で凄く幸せそうに。私達は更に沢山お喋りが出来た。彼女は以前より元気そうに見えたと、望む限り来月再びやって来る。今私は又何か美味しい物を手にしそしてベーコンとソーセージそしてあらゆる物。その中には私が作ってもらった頼んだ二枚のパジャマ。布はもう手に入らないので今私は何とか存在する最も不快な物の二枚を貰った。オヤ、オヤ、私の最悪の空想でもそおいた物は想像できなかった。一枚はけばけばしい朱-ピンク、そして後の一枚は青-緑、更にまだそれが光った絹で、それからドミノ(カーニバル)一衣装を作る品だ。私達はそれに関して凄く笑った。私は既に言った、それで即舞踏会へ行けるわ、と。とにかくそれは良かれとのこと。手ぬぐいはもう手に入らない。どうすれば良いの?昨日は本当に元気を取り戻した、あの面会、それはユーモアの有る見方をするかぎり。もし深く考えればヨーロッパ女性が食べていくのにその様ことをしなければならぬというのは本当にとっても悲しい。

⁶⁷ (借用)二輪車、チャールズ テオデール デールマン技師の名に由来した。

ファン デル クロフト

1943年7月7日

私は上機嫌だ！ティツ叔母さんのアンキーから連絡を貰った、そして即彼女に返事を書いた。ティツ叔母さんはウィリー クラーネンドクがアンキーを良く知っていて、彼女と‘マン ボラ’（ビリヤード）をしたと書いてきた。私は故にウィリーにも書かなければならなかった。そうすれば彼女がアンキーにつたえてくれるだろう。というのは叔母さんはアンキーの住所を知らなかったけど、ウィリーのは知っていた。幸せ、突然何かが聞けるなんて。彼女達は其処の地区で強制収容されたらしい。

チャックス - グレイン

1943年7月25日

沢山話す事がある。最初はウィリーの面会。彼女は二人のバブ（使用人）を後ろに従え10個のブクセン バラン（まとまった品物）を持って来た。大半は他の御婦人達用だ。誰かを助ける事が出来るのは気持ちの良い事だが、今回は彼女自身が代償になった。私が話し合っただけを中に貰い受けようとしていた間、彼女は中から籠をカワット（鉄条網）の上へ出す様に求められた。

即座にその事で彼女は警察に捕まり警察主任の所まで連れて行かれ、其処で彼女は水曜日まで服役しなければならなかった。それは彼女自らの責任、だから故にそんなに悪くは思わない。幸い私は昨日の朝連絡を貰い彼女は無事でマゲランに帰ったとの事だった。彼女は何と言っても手際の悪い若者だし、そしてまた面会はびくびくする大騒動なのだ。私達自身も1日中それで疲れる。

ファン デル クロフト

1943年7月25日

19日（7月）は面会日でハートホールン夫人とローゼ（夫人）が小包を私達の為に作り、ケボン（使用人）によってここまで送ってきた。この人はこれを朝早く5時に他の小包と一緒に中へ持って行く様料理人に渡した。その中にはハイトン夫人のが。ハイトン夫人は故に5時にいつもの親切な歩哨の所でこれを受け取ろうとしていたのだが、残念な事に全く新しい歩哨がやって来たので私達は今のところまで未だ貰っていない。明日ハイトン夫人は多分又歩哨の所へ行くに違いない。でもとにかく...それから、20日に、デヴィンクさんとかいう人によって描かれたヘラルドの似顔絵付の葉書を受け取った。とても楽しかったが、彼がそこに書いている

のは：「これはただのガンバー(スケッチ)で、肖像画ではないよ、ママ。」お父さんも再びストラウケル(ブジェール)氏の所でちょっと書いた。(私達は)未だ個人的には(彼から)何も聞いていなかった。

ファン デル クロフト

1943年8月1日

昨日(私達は)長く待ったお父さんからの葉書を受け取った、其処に彼が書いたのは：「サヤ、スダ タウ カウ プンヤ ウワン セムア ムスティディ カッシ カンプ、テタピ サヤスカ タウ ベラパ ウワン カウ カッシ？」(共同の収容所金庫が存在しているのは知っているが、君たちが幾ら渡したかを是非知りたい)。まあ私達が彼に12ギルダー81セント、そして半セントは上げたと書けば、彼は既に充分わかっている(それは全てではない)。

ブルゲル - ダウファス

1943年8月11日

夜。思いがけず今日の午後貴方の葉書が来たわ、幸せ！アー ヴィンピェ、こんな貴方とのほんの小さな連絡でとにかく私は何と元気になれることか。貴方が少し前に私の事を思ってくれたりとか、そして貴方が未だジャワにそしてバンドゥンにいるという気分、はとても心地良いわ。これは今第2収容所からだ。其処へ行ったばかりの人々によってそれは未だバンドゥンであることは誰もが明白に知っている。最愛の、最愛の、最愛のパパ！

ファン デル クロフト

1943年8月18日

昨日は又もや興奮する日だった。朝早く7時にオランダ人の男性達がバスで傍を運転して来た。そしてそれは暫く止まった。それから再びグループがやって来た。全ての女性達が草原に向かって歩き、そして歓声を上げはしゃぎ回った。でも男性達はとても無表情だった。彼等は手を振ることすら敢えてしなかった。数人は手でVサインを顔の傍で作った、誰にもこれが見えない様に。彼等は強制の下にいた。彼等の間には日本兵と警官が座っていた。そして一人が手を振り返そうと試みて即平手打ちを受けた。大半は気落ちした風に見えた。その時ケシリール⁶⁸

⁶⁸ ケシリールは1942年7月から1943年9月までの間、抑留所として開設された。

(出身)のヘンク マレーとアルベルト ファン デル ハムを見たということが伝えられた。ジルデルダ夫人はそのちょっと後彼女のご主人を見、そして私でさえもタンゲルダ - 氏を見たと思う、窓のすぐ前に黒の髭。人が言うには彼等は五日間道中をしていた。約壱千人(の男性達)が傍にやって来た。彼等は推察するにバンジュビル(バンジュビル第十収容所)の刑務所に居る、そして其処は囚人達がたった1日前に出て行った、ゲ-ッ! 又人はその半分の人々はギリ-ソクタに行ったと言う。お母さんはヘラルド(彼女の兄弟)も其処に居ればと願っている。とにかく、出来事は少なからず起る。私達今後は早く男性達から何か聞けることを願っている。ケシリールのあそこから出なければならなかったことは凄く良いニュースだ。

モード

1943年8月28日

最近の週はここに何度も男性の捕虜達を乗せたバスやトラックが傍を通過してやって来る。(彼等は) 駅から(アンバラワの) 来てバンジュビルへの途中だ。皆民間人達か又は軍人達か私達には判り得ない。何故なら彼等が通り過ぎて行った時、私達は柵の近くに来てはいけなかった。何人かは男性達に見覚えが有ったと思っている、この人達は最初バンジュワング(ケシリール)の(強制)労働キャンプにいた。これは凄く楽しみだ。各人が何度もまた道に可能な限り近くに来ようと試み、そして傍を通過してくる各自動車は歓声で迎えられ、モーターバイクに乗って随行している日本兵の大きな激怒をかうまで! ベルトとオルガからは私の誕生日に何の便りも無かった。彼等ももう少しは強制収容された彼等の家族達に関心を示してくれても良いのでは。

ファン デル クロフト

1943年8月31日

昨日は面会日(だった)そして私達は全ての空しい小包の後、ついに今回は本当の一個を受け取った。お母さんにドレス、ハネケに最も愉快的な遊びズボンとドレス、ジャンパーとパジャマ。食べ物は中に入れてはいけない。でも私達はとっくにこれら数枚の服で嬉しかった。

ファン デル クロフト

1943年11月9日

私の日記への全ての興味を無くしてしまった。全収容所は悲しい雰囲気にも包まれている。あま

りにも全く、改善の見通しは無いけれど、でも私は日記を書き続けよう、それがお父さんの望んでいる事だと知っているから。11月7日の日曜日、私達の収容所の四人の婦人達が彼女らのご主人の死亡通知を受け取った：パウメン夫人、シュリンク(夫人)、マイス(夫人)そしてブルググラフ(夫人)。この通知は半年も遅く来た。お母さんは即刻パウメン夫人の元へ行った。彼女達は皆すっかり参っている。自分の主人を二度ともう見ることが無いという思いに。打ち勝つ事はまず無理だ。全ての幻想と期待は消え失せた。

ファン デル クロフト

1943年11月12日

パウメン夫人は強く持ちこたえている。私達は地図で彼女のご主人が埋葬された場所を探した、とても奇妙、アンボンの近くのハルク島。彼女はこの近辺からそんなに遠いことを酷いと思うが、私達は多分その収容所がそう呼ばれているのだろうとあって慰めた。ブルググラフ夫人のご主人もフローレスで亡くなったに違いない。お母さんと私も勿論、男性達の事を何かと心配している。連絡が来た時、とにかく全ての女性達はちょっと足が震えた、そして未だ(手紙が)一杯積み上げてあった、と言ったが、それは嘘だった。

チャックス - グレイン

1943年11月15日

何処にヨッシャは居るのかしら？これらのゲデック仕切り(編まれた竹製マットの仕切り)の外で何が起きているのかしら？今日は小包を中に入れてもらえた。又してもウィリーからは何も。彼女も既に収容所にいるのかしら？何も答えが来ない物に限りの無い問いかけ。

ファン デル クロフト

1943年12月9日

思いがけなく私達は12月1日、11月13日付のお父さんからの葉書を受け取った。即私達は返事を書いた。ただきっちり25単語で返事を書かなければならなかった。感嘆符、数字そして複数、例えばアナク²(子供達)は全て加算される。これは三回目に葉書が返送されてきた時やっと判った、そして私達は三回とも新しい葉書を投函しなければならなかった。この葉書は残念ながら私達が送れなかった二通目で、お父さんの送った二重に使った葉書の1枚なのに。

昨日私達は三通目を送った。これが戻って来ないことを祈って。(葉書の文章): アナク² ダン サヤ セムァ セハット。(子供達と私は健康よ)。ケマリン テリマ カルトポ ス トン ギラン! (昨日貴方からの葉書で嬉しかったわ、トン)。ダリ ヘラルド ベロン。(ヘラルドから私は何も受け取っていない) ミシ センバヤン バヤック、レカス クンプール! (私達が早く再び一緒に居られる様神様にずっとお祈りしています)。バンチャック ペロ ック チュム²。7 アナック²。(私と子供達から沢山の抱擁とキスを)。

ブルゲル - ダウファス

1943年12月16日

11月(1943年)の終わり貴方から葉書を貰った。それは再び元気付けになった! 今回はマレー語で、でも赤痢に関して良い助言を添えた再びその本当に優しい - 最愛の葉書。私は即返事を書いた、それが今だに戻って来なかったので検閲は私の葉書を良しと判断したと見える、多くの女性達は戻されるのに。嫌ね、この検閲はとても酷い!

チャッケス - グレイン

1944年1月12日

昨日やっとうィリーから葉書を受け取った、その中には「ヨス アダ ディ バンドウン ダン アダ バイク」。(ヨスはバンドウンに居て大丈夫だ)と書いてあった。それで私がどんなに嬉しかったか判ると思う。でも如何して彼女はそれを知るに至ったのかしら? 彼女は今その住所から言えばブラウンズ夫人の所に住んでいる。ということはダウベリールの家族も多分強制収容されたのだろう。アー、何という人生!

ファン デル クロフト

1944年1月26日

昨日の午後食事の時間に彼等がバスを運転し始めた。そうそう、彼等は最初前もって誰も草原に行ってはならないことを予告した。警察(官)が道の角で監視し、そして門の所には一人が銃を持って立っていた! 病院には二人の刑事が立っていた。日本兵が中にやって来て彼のサーベルで、人々が其処を通して見る事の出来たバラックの全ての上げぶたを叩いて閉めた。

でもリス レ ノーブルは病院で良く見ることが出来る。でも残念ながら大半の車は覆い隠されていた。トイレから私達は車が駅の方へ行き又戻って来るのが池の向こう側に良く

見えた。私達は勿論一生懸命手を振った、そうしたらやはり下から或いは横から振っている白い手がみえた！私達はそれで勿論大喜びだった、だって彼等も私達が勿論見えたのだから。彼等は汽車が第二収容所(アンバラワ第七)のすぐ近くを通るセマランの方向に行ってしまった。私達は以前許されていた金切り声や大歓声を聴いた。

ファン デル クロフト

1944年6月8日

月曜日(1944年6月5日)五百人の人々がセマラン(カランパナス)からやって来た、其処では彼等はたった三ヶ月間だけ強制収容されていた。その前にはスラバヤとマランの地区に(強制)収容されていて、そこでは全て手に入れることが出来た。セマランは凄く悪かった。3ヶ月間に五十人が発疹チフスで死んだ。

(新参者達から)私にはテア ファン デル メールだけが知り合いだ。注意を要する日本兵 - お気に入り達がその中に居る。奥さんと二人の息子達を連れて凄く太った医者がやって来た：ボンク ファン ケブメン医師、伝道派遣外科医。彼はたった十七日間だけ強制収容されただけなので沢山(収容所外の事を)伝えてくれた。その中には西ジャワの酷い飢饉について。民衆は道の端に溝鼠の様に死んでいる。五人の高官達(重要な権威者)を彼等はリンチにかけた。復讐として二つの村を皆殺しにした。

全ての強制収容された男性達は今皆バンドゥンの郊外に居る。彼、この医者は不可解だ。彼はチャーチルを罵り、そしてオランダは解放されたかと聞いた婦人の質問に彼は額に指を当てた(頭は確か？という時のジェスチャー)。彼等はとにかく大変楽観的だが、私達は未だそれを敢えて信じない。かなり信用できる出所からではオランダはやはり解放されていて日本では激しく戦闘されているとのことだ。ヨーロッパは一つの廢墟と化した。全収容所は赤十字から小包を受け取った。B. B. C.⁶⁹はここで起こっている事は全て即知っているに見える。(そのリンチも即放送された)。ボンク医師は翌朝彼の家族と再び連れ去られた。多分(彼等は)ムンティランに行き其処で強制収容されたのだ。

ブルゲル - ダウファス

1944年7月16日

ヴィレムピェ、今日貴方から四通目の葉書！それは私を驚かせたわ、素敵。私は即良くなった。これは強壯剤のような物だ。アーヴィレム、ヴィレム、その様な葉書が私にとってどんな意味

⁶⁹ 英国放送社団体法人、英国国内放送団体。

を持つか貴方はかつて知っていたかしら。貴方は書いている：愛するジェチェ、君の二通目の葉書を既に受け取ったよ。嬉しい！僕は非常に健康だ。君達が健康である事と何も不自由していないことを望んでいる。子供たちは健康かい？充分食べ物と家計費は有るのか？日没後に子供達をベッドに連れて行きなさい、そうすれば彼女達はマラリアにかからないだろう？元気でそして返事を待っているよ。ヴィムからキスを。

貴方の葉書はW. N. キャンプから来ていて貴方の番号がまた変わったわ。でもそれは同じ収容所の事だろうと思っているけど。葉書を持っているのは又しても同じグループの人々だ。それは他の人々には辛い事だ。ゲルダも一通貰っている。返事を書くことについて未だ何も聞いていない。それが許されている事を望んでいる。

ファン デル クロフト

1944年7月27日

今日は特別な郵便が中に来た。(とりわけ) 私達のバラックのブログトゥロップ夫人。彼女のご主人は飛行士でオーストラリアへ飛んで行った。二年間彼から何の音沙汰も無かった。今日彼女は貰った - よく聴いて！ - 1943年8月13日付けでミシシッピから本当にオランダ語で書かれた1枚の紙切れの入った検閲済みの封筒。嬉しくて彼女は大はしゃぎだった。又オーストラリアから一通の手紙とドイツからドイツ海軍に移動させられたヴォイト夫人の兄弟から一通。そしてバオマン夫人も今日初めて(生きている証拠を)タイから貰った。ベッケリング氏(セマラン)は日本から雪が降って寒いと書いてきた。日本兵が私達は皆連絡を貰ったし、皆返事を書いて良いと言った。

モード

1944年7月27日

ここの収容所からある婦人が最近セマランの病院へ手術の為行かなければならなかった(ここアンバラワはこの頃全て兵隊達用なのだ)。或る日彼女の隣のベッドに囚人服を着、頭は包帯で覆われた女性が寝かされた。何と双方が見て驚いたのはその包帯が取り去られた時だった：その囚人とは...私達の前キャンプリダー⁷⁰だったのだ！彼女が話すには、他の人達と同じく、1945年1月まで未だ刑に服することになるが、彼女が胃病を持っている為重労働は何もする必要は無いとのこと。(彼女が言ったことには)追跡できないルート(‘カバ-ル アンギン’=風の便り)から十人の女子達の誘拐の情報が彼女まで入ってきて彼女は娘の事ととても心配

⁷⁰ J. G. スホルテーエックハート夫人

していた、と。幸い彼女の娘は未だここに居るので彼女をその点では安心させる事が出来た。

チャックス - グレイン

1944年7月29日

やっとの事でヨスの生きている印、タイのP. O. W. 第六キャンプからの葉書、印刷された面倒な物で、そこからはただ‘ヨス’とあるだけが私に意味のあるものだ。‘彼の健康状態’は‘最高’で、‘アイ アム ノット ワーキング’。‘貴方の健康’は‘テイク ケア’されている様にして。僕のを君へ、ヨス。」これが葉書の内容だ。‘貴方の健康’だけが彼の自筆である。(1944年7月26日には又郵便物が中に入れて来た、そして私には未だ何も無かった。私はほとんど対処の仕様が無かった。今のところとにかく抵抗力が無い。今は少なくとも何か解り、そして私達が約束した様に私が返事を書く住所がある

チャックス - グレイン

1944年9月7日

1944年8月21日ヨッサから1944年1月10日(本当にヨスらしい、几帳面で)付けの二通目の葉書を受け取った。彼の住所は今タイのP. O. W. 第一キャンプだ。私の住所：マゲラン第五。‘僕の健康状態は良い。僕から君と友達に宜しく。君のヨス’。

チャックス - グレイン

1944年9月19日

アー ヨッサ、なるべく沢山伝えられる20語文字を私は既に何時間も座ってパズルしている。でもそんな家庭生活を送るなんて大変。まあとにかく、最善を尽くすことにしましょう。

ブルゲル - ダウファス

1944年9月24日

後或る日又貴方に返事を書いた。終に私達は葉書と用紙を貰った。今は又三文選べて20語文字を自分で書くことが許された。

ファン デル クロフト

1944年9月29日

昨日の午後お母さんはやっと又外に座る事が許され、そしてそこへブルゲルハウト夫人がお父さんからの葉書を持って走ってきた、そのちょっと後ではヘラルド（彼女の兄弟）から一通。嬉しい...私達！そして二通ともジャワC. Q.⁷¹から来た。でも私達が推察するに彼等と一緒にではない。タンゲルダ - 夫人とストラウカー ブージ - ル夫人もそれぞれにジャワC. Q. からの葉書を持ってやって来た。即私達はこれらの葉書をお互い比べ合った。彼等は私達の様に書くことを許された、三文(基準)と自分の20語文字。私達は文7、8と12お父さんは文5、7と12。ヘラルドは文3、5と12、そして2604 - 8月18日の日付。お父さんからは日付が無かったが、ストラウカー（ブージ - ル）氏のは8月とあった。

お父さんのには二字大切な言葉がかき取られていた。検閲で彼等は勿論ペロックとチュムのこの2という数字を加算して、二つの大切な言葉を意地悪して消し捨てたのだ。お父さんは書いている：ジェット、アナック テルチンタ、(愛するジェットと子供達)、ミ - プ サラマット ハリ タフナン。(ミ - プの誕生日おめでとう。)ヘラルド... (?) (ヘラルド...) サヤ セハット、ケルジャ ブックレペラシ - (僕は健康で本を修理している。)ダペット... (?) セハリ トン、(僕は毎日... 貰う) ペロック、チュム。(抱擁とキスを)。

私達はお父さんがヘラルドを見たのだと思う、そしてその製本で毎日お金を貰っているのだ。幸い私達の葉書（お父さんに当てた）は未だ収容所にあつて住所を変更して良い。そうすれば彼は即私達が彼の葉書を受け取った事がわかる。ヘラルドへは多分翌月になって書いて良い事になるだろう。

モドー

1944年10月8日

既に二回第八収容所から一団の少年達がここに半日労働しに来る、その後彼等は母親達の所で昼食をして良かった。イエレは未だその中に居なかった。聴いたところでは、彼は新しい収容所到着三日後に腹痛、そしてその後再びマラリアの為入院したが、今は又良くなっていると。多分彼もまた近じか訪ねて来る事だろう。

⁷¹ ジャワC. Q. とは民間抑留所チマヒ第四の事と推定された。

ファン デル クロフト

1944年11月27日

12日(11月)以降大変忙しい週となった。特に女子達は全てにそして未だ何かにかき使われた。(彼女達は)ゲデック(編まれた竹製の仕切り)を運び竹を運ばされた。一度私達は竹を取りに外に出て良かった(その時私は掃除勤務だった)。一台の荷車に五人の女子達。私達二十五人で行った。ミセット(先生)とストックパールチャ(土着の日本軍の補助兵)が私達に付き添った。私達ははるばるカソリックの教会まで行った。この建物はその境にあって、第九収容所であったに違いない。今は空でストックパールチャ達の宿泊所のような物と見えた。

再び何か違った物を見る事は気持ち良かった、例えば美しい建物の白い壁、そして未だ中に掛かっていたシャンデリア或いはランプの火屋は快感を与えてくれた。後は全て未だ以前と同じで、ペパーミントを入れた詮付き瓶とのワロン、飴、ピサン(バナナ)の房。何人かがちょっとした好奇心で私達を見たが、邪魔にはならなかった。びっしょり汗を掻いて私達は竹とゲデックを荷車に載せて戻って来た。又私達は更に第二収容所(アンバララ第七)の婦人達に出くわした。彼女等にも人々が傍に群がっていた。帰る道中又小さな棺を乗せた霊柩車とその後ろに母親と第二キャンプの班長を乗せたドッグカー(馬車)にも出会わした。

ブルゲル - ダウファス

1944年11月28日

突然思いがけずヘルミンから葉書を貰った、セレベスからだ。彼女達は其処に強制収容されていた。ヨー(ブルゲル)はパレパレの男性収容所に居て、ヘルミンはカンピリ、ベティブルゲルと一緒に。総督エドの夫人だと思う。又デニスもヨープと男性収容所に居る。どう思う?故に彼等はバリからセレベスに引張られて行ったのだわ!私が目にした事は信じられなかった。葉書はプウォダディの私達の住所へ普通に送られ、其処で(1944年)8月26日の消印が押されている、そしてその後無事にここに到着したのだ!何と嬉しいわね!又一刻も早く貴方書けることを祈っているわ。貴方の兄弟姉妹に関しての情報で貴方はさぞ嬉しい事でしょう!

テ フェルデ

1944年12月6日

今朝セントルイスから再び少年達の中にやって来た。私は病院に居た、それでハルムがひょっとしてその中に居ないかどうかを見る為門まで走って行ったが、彼は未だバンドウンガンに居

る。少年達は良い生活を送っている。彼等は野菜畑で野外作業している。

テ フェルデ

1944年12月22日

父の誕生日（だった）そして昨夜（私達は）父から葉書が届いた!!!! 素敵!!!! 私達はこの嬉しさから母にいっぱい食べさせた。母は十分食べた!!!!

モドー

1944年12月27日

今朝私は丁度我々の通称‘店’で私達のバラック用の砂糖分配の監督に立っていた、その時叫び声が上がった：「少年達の中に（いるわ）」。本当に数人の年長の少年達が、第八収容所の少年達の小包を持ってやって来た：クリスマスのプレゼントを私達のセントニコラースのプレゼントと交換だ！それをさせてくれる日本兵はでも親切だ。そしていかに‘人’がこの親切に反応するか、という事に気付くのも思いやりが有る：「良く判るでしょう、彼等は最後が近づいて来ている事を感じているのよ、だってとても愛想が良いもの」。でも私の小包に話を戻すと、イエレが私に送ってきた袋の中には（呆れた事に私が彼の下着の修理の為に渡した私達の旗の白い部分で作って）、彼が作った木靴に吊り紐を取りつける為のバラの釘（この紐は私が自ら作らなければならない）、自分で作ったカレンダー、150グラムの粉入り缶、そして中に布切れを入れたマグカップ、そこには100グラムの米が含まれていると解った。私にはなかなかの物だ！これの物が健康に使われる事を望んでいる：後生だから彼自身空腹に苦しんでいなければ良いのだが。彼は私がとても痩せてしまった事をかなり心配していたのだ。

ブルゲル - ダウファス

1945年3月2日

忌まわしい日。二十四名の死亡通知が入る。ここのバラックではフィン フックセマ（が死亡通知を受け取った）。彼女は二人の子供が居て、一番下の子アルヤは三歳。子の子は父親を見た事が無かった。マリー スナイダースもオルトフ夫人、バウテラー修道女そして未だ沢山の他の人達と同じく通知を受けた。これから未だ何がやって来るのだろうか？

私はオランダのパパから赤十字の紙を受け取っている、1942年3月19日付けで、其処にあるのはただ：便りが欲しい。スハウテンキャンプウェグ 75番。ヴィム、わたしは

この通りの名前をすっかり忘れてしまっていたのよ！ゲルは1月1日付で彼女のご主人から葉書を貰った。更に三通ばかり中に来ている。今私は貴方からの連絡を又期待している、アー愛するヴィミー、早く欲しいなあ。

主人がもはや生存していないという通知、これは数ヶ月前に書いた自分の葉書に二字の日本の判子が押されて、後は何も無く、戻って来たことによる。酷いと思わない？夫人達にとってこれは打ち勝てない事だ。全てあまりに辛すぎる。これ以上はもう無理だ。今朝私は思い巡らさない様に馬の様に働いた。

最初私達は暫くマリー(スナイダース)の所に居た、ゲルと私、可哀相な人。彼女はとても惨めだった、そしてヴィム、ここには哀悼する静かな場所が何処にも無いというのがとても惨い。それさえも妬ましい。彼女はあらゆる大きさと製品のベッドの並ぶ長い列の一つのベッドに座っていた、一方彼女の周囲の人々は先を生き永らえ、洗濯をし、作業等をしていただけれども。丁度又大部屋で引越しをしなければならなかった。人々は再び圧縮されるわけだ。マリーは丁度又一个のベッドを取られ二つの小さなベッドを三人で使う事になり、そして再び更に少ない場所が残った、ガラクタの真中でそれが全てだった。私達は何かのカーテンと毛布で彼女のベッドを囲ったので彼女はもう皆から見られる事は無い。それが出来て良かった。

手助けを必要としていることは間違い無いが助ける事が何も無い。だから私は又後で自分の囲い小屋を片付ける事にした。私達が彼女のところから帰って来た時この赤十字の紙を見つけた。ゲルも一枚と更にイギリスから彼女の義理の兄弟の手紙も手にした。今三日後にエルスが又誕生日よ、ヴィム。貴方から葉書を貰えたら良いのに。ところで、このバウテラー医師も亡くなったわ、何と惨めなんでしょうね？そして何の情報ももう聞かない、でも昨夜再び何か、ジャワで五箇所の重要な場所が占拠されたらしいということだが。

テ フェルデ

1945年3月3日

私達はヨーから赤十字の手紙を貰った。連絡通知みたいな物だ。それは私達の1941年の連絡通知に寄せる返事で、彼は1942年1月に書いていた。ということはこれは三年かかったということだ。全収容所は憂鬱な雰囲気にも包まれている、というのは男性達から三十人の死亡通知が入って来たのだ。そしてその何というやり方！女性達が去年9月ご主人達に当てて書いた葉書が戻って来た、その上に判子が押され日本兵によればそれは宛先人が死亡したという意味なのだ。後は何も無し！本当に残酷、とてもぞんざい。

チャックス - グレイン

1945年3月10日

各収容所につき十枚電報をオランダへ送ることが許される。誰が幸運者かくじが引かれることになるだろう。私はカルメンとファン レンスとでもし私達のうちの一人が幸運であれば一緒に電報を送る事を申し合わせた。一枚葉書を書く事も許される。ピッタリの語彙を選ぶのがいつも頭痛の種だ。

モドー

1945年3月13日

そしてイエレは先金曜日十六歳の誕生日を祝った、そして私は彼におめでとうすら言えなかった。未だどれほど長く...?でも小さな驚き事がやって来た:翌日イエレが居る第八収容所から重病人がここの中で手術を受ける為に来た(ちょっと前から私達の収容所に外科医が居る)、そしてこの病人は医者につき添われて、少年たちからたくさんの母親たちに当てた手紙を持参してきた。私にも。

それは数行の簡単な文章だったが、それでも私は嬉しかった。翌日この医者が私達の返事を持って帰るだろうから、私は手早く即走り書きした。残念!同日の午後日本兵が第七収容所から来てここで電線の修理をしていた男性の袋を見、そして第七収容所の少年達に当てた数枚の手紙を見つけた。勿論この男性は鞭を受けたが、後日本兵は突っ込んでこなかった。でもこの勇敢な医者は翌日になって私達の手紙を内緒で持参する勇気が無かった。私達の子供達にとっては残念、そして日本兵はあきれた事にこの医者が出て行った時彼に目もくれなかった!

ファン デル クロフト

1945年4月20日

今週は再び夜中十番バラック内で土着民により随分盗まれた。コープマンズ夫人と他一人が不寝番(夜警)で禿げ頭に上半身裸のこの男を見た。彼はゲデック(編まれた竹製の仕切り)に隠れたドアを作り其処から何枚かの服を持ち逃げしたのだ。このゲデックは補強される。それは全て日本兵がする。

ファン デル クロフト

1945年5月11日

アッそうだ、未だ忘れているわ。先日曜の夜（その前数回夜中に既に沢山洗い桶から、干し紐等から洗濯物が盗まれていた）2時に全てのランプが点され私達は起された。八番バラックで彼女達は要するにこの男を見て叫んでいた所だった。その後少しして彼女達は5Aでも男を二つの棚の間に発見した、真っ裸で、油を塗りそして禿げ。

ジルデルダ夫人とストックパールチャ - （土着の日本軍隊の補助兵）を連れてた日本兵がやって来て全てを調べた。寝巻き姿の全婦人達は、サブ（箒）、ハンマー等で武装し一緒に探した。とある瞬間日本兵がこの泥棒を捕まえはしたが失ってしまった。彼は激怒していた。この日以来私達は四人で不寝番（夜警）をして歩きそれからの日々は何も起こらない。

ファン デル クロフト

1945年5月17日

昨夜全く予期しないお父さんとヘラルドから、今だジャワC. Q. より1945年2月11日付の葉書を貰った。去年のお父さんの誕生日の時のように最高だった。パウラは花を摘む為に早く起きた。美味しいクリームメルコ - ヒー（濃縮牛乳入りのコーヒー）を飲みバターを塗ったパンと。

モード

1945年6月9日

私が収容所外へ外出したことをまだ報告し忘れていた。二年余り以来初めてのこと！何の為に？ クーリーとして貨物駅で作業する為！私達最後の‘新参者達’（これらの人々はソロの放棄された収容所から来た。主にマランとバンドゥンの前住人達だ）の荷物。彼等で私達の収容所の合計人口は約四千人になった。さて、これらの荷物は夜中に到着が期待され、百人の年長の女子達に加えて、五十人の婦人達が求められ、貨車からトランクと木箱を引張りそして軽めのコリ（荷物）を手で収容所まで持って行く。各バラックリーダーは五人の婦人達を送らなければならず、それで私は簡単に引き受ける事が出来た。それにはかなり喜びがあった。それが不思議でないのは素晴らしい天気、満月、そして一皿の糊とコップ一杯の熱湯が貰えた！

12時半に私達は呼び起こされ、そして三回収容所から約1キロの所にある貨物駅へ行ったり来たりした後、3時半に又蚊帳の中に潜り込んだ。これは私にとっては歓迎の気分転換で嬉しい事に私は未だ筋肉労働をするのにかなり元気があることを確信した。駅には四人程の

日本兵達が居た。道に沿って四人のストックパールチャ - (土着の日本軍隊の補助兵) が配置され立っていたが門の外に出て道に沿って散歩をするような解放感があった。誰一人通りには見当たらなかった。夜中は確かに許されない。

グメリグ メイリング - エーケルズ

1945年6月21日

今日私達は主人達に手紙を書いてよいことになった。今回は各バラックにつきこれをしなければならぬ(文章を作る)二人の女性達が指名された。だから自分で書く事さえもう許されず、後はこの忌まわしい既に定められたこれらの文章。婦人達がこれらを完成したら、私達は活字体でその下にサインすることだけが許された。私達が何という名前の収容所に居るのかを述べる事は駄目だった。それは日本兵が判子を押ししてするだろう。これって全てとても、とても酷くない？

チャックス - グレイン

1945年7月2日

ヨスから三通目の連絡そして今は自分の話を書いた葉書...第四収容所から。彼等は又かなりよく引っ越している。幸い彼は‘オーライト’で全てとそして皆と再会する事を楽しみにしている。私はそれで心から幸せだった。彼が私の書簡を受け取ったかどうかは推測出来ない、とは言え彼は今初めて‘ペルリンドゥンガン アンバラワ’ (アンバラワ保護収容所)と書いている。時間が又これを(課題)解決するだろう。

ブルゲル - ダウファス

1945年7月8日

唯一元気付けられるのは今回はマラヤ(マレーシア)から四、五日前に来た貴方の葉書だ。貴方は今本当にそこに居るの、それともその収容所をそう呼ぶのかしら？貴方がとても奮起して書いているから私に凄い元気をくれた。それは私が病気になる丁度一日前だった。それが何なのか解らないので既にとても不快だった。私達は丁度自分で手紙を書いて良いことになった。マレー語で、でも貴方が今英語で書いてきたので、私も未だ英語で新しい返事を書く事が出来た。幸い英語だともっと快い。マレー語は何時も凄くガラクタ語に思う。今日私達は開放されるという声明を受けるだろうと彼等が言っている。素晴らしい！そして丁度今全ハンチョウ

班長達（バラックリーダー達）が歩哨の所に呼ばれた、だからこれは大変良い兆候だ。

ブルゲルーダウファス

1945年7月28日

待って。今夜約9時半に凄い大騒動（があった）：不寝番（夜警）によって泥棒が捕まえられた！それは大変な騒音で、でも彼女達は彼と一緒に捕まえた：大きな太った土着民。如何して彼女達に彼を捕まえる勇気があったのか解らない。一億貰っても私はしないだろう！彼女達は彼をここの病院の所で捕まえ、最後に彼はエンパー（廊下）に横たわった。彼を留置する為に、彼の足をエンパーの鉄製柱の回りにくくりつけた、よし。それから彼はもう何もする事は出来なかった。日本兵と二人のクレボネル（兵補達、日本軍隊に勤める土着の補助兵）が来て彼を連れて行った。

ファン デル クロフト

1945年7月30日

昨日の夜中とにかく彼女達は終に泥棒を捕まえた。彼、頑丈なジャワの男、はここ五番バラックで全ての服を洗い桶から釣り上げその束を投げることに精を出していた。不寝番（夜警）が尋ねた：「シアパ アダ？」（誰が其処にいるの？）「ディアム サジャ」（静かにしろ）、と彼は答えた。色々な婦人達が外に出てきた。ファン デル ザオ夫人が彼をひっくり返しそして彼女達皆で彼の手と足を縛った。彼は敵意に満ちてファン デル ザオ夫人の手に噛み付いた。歩哨では彼は相当鞭打たれた。一番バラックで彼女達は彼が叫んでいるのを聞いた：「アンブン、トゥワン！」（ご容赦を、旦那）

モードー

1945年8月19日

数週間前沢山の薪の大群が駅に横たわっていて、私達が自分で取りに行くなら持って行っても良いという通知に喜んだ。志願者を募り荷台でそこへと出発した。この木は細い枝と約1メートル長さの幹片からなっていた。

私は四回一緒に行った。これは重労働だったが、今数週間分は十分な薪がこの収容所に有るし、それは大変な安堵だ。薪の切断面に木炭でいろいろな名前が書いてあった、とりわけ（ファン） J. デ フリース。他の（薪）には：僕達は元気だ。今既に解っている事は、第七

収容所の決められた男性達と少年達がクダウンジャティ（セマランの郊外）へ収容所用の薪として木々を切倒しに行く。イエレがこれを書いたとは私は信じないけれど。それは彼の自筆ではないし他にもっと同じ名前の少年達がいるもの。

戦争経過についての情報と風評

ブルゲルーダウファス

1943年3月8日

とても良い情報だ。ドイツでは今全体的が外れたに違いなくそしてここでは新聞に彼等が大掛かりな軍事演習に出る予定、それは不意に来るかもしれないので民衆は驚かない様に、と載せている！ふんふん！！

チャッケスーグレイン

1943年5月5日

私達が丁度十七日に立ち去るといふ執拗な噂が今再び流れている。私がこれを書くのは只私達が如何に頻繁に興奮させられているかを知らせる為、少なくとも興奮している人は。噂には何時もちょっとは影響される。

モドー

1943年5月6日

誰かが5月1日付の葉書を受け取った、それからいくと執筆者が言うドイツが終末を迎えたということにかなり確信した結論が持てる。数日前既に中へ入ってきている情報でオランダが再び解放された事が推察出来ると人は思った。それは今終に本当になったのだろうか？そして私達は？

ファン デル クロフト

1943年6月8日

ここに又ショットステ（最高）なニュースが流れている：アメリカがタラカンを征服した。ジャワ海では激しく戦闘中。そしてイギリスはケルンの手前に居る；オランダ、ベルギーそしてフランスが解放される。今月には終結されるかもしれない。チャーチルが言った：「これは血まみれの三ヶ月になるだろう」。

ブルゲルーダウファス

1943年6月23日

たった今外で大騒音があった。走る、そして慌ただしいお喋り。十二機の飛行機がここに二機、あそこに三機、そこにも一機と乱れて飛んで来た。今だ嘗てここにはこんなに沢山飛んで来た事は無かった。だから皆が言うには：これらの日本兵達は何処へ急いで行かなければならなかったのか？彼等はチラチャブの方へ飛んだ。私にそれで鳥肌が立ったなんて信じる？アー、ヴェイメル、でも事がやっと始まったのかしら。

ファン デル クロフト

1943年7月1日

後今日は沢山の良いニュースがあった、その中にはジョクジャのジャワ人達がポスターを貼り、其処に書かれていたのは：「日本よ、あんたの繁栄は何処へ行ったのさ？」。そして更にもっとニュースは有るが私には書くだけの価値が無い、というのはそれは既に余りに頻繁に伝えられ、そして何も起こらないからだ。その中にはバタビアとスラバヤの港が破壊されそしてオンルスト島⁷²がアメリカの手に落ちるだろう、というのだ。

チャッケスーグレイン

1943年7月5日

私達の心は落ち着かない。この大世界に何が起きているのか？この収容所の外はまるで何もかもはや存在していないみたい。噂の山、不愉快な或いは偽りの、充分周囲を取り巻く、でも何か肯定的な事など全く聞かない。毎日飛行機が空を飛んでいる。それが何かを意味するとか？ヨッシャは何処に居るの？彼も何か耳にされていて心に期待を持っていれば良いのだけれど。

ファン デル クロフト

1943年7月24日

昨日の午後聞こえた：「一、二、一、二！」私達は即座に長椅子の上に立ち其処に長蛇のインド

⁷² オンルストはバタビアの入り江に作戦上置かれた島。

ネシア人達⁷³の列を見た、武装して...一笑わない一棒を持って！それぞれが長いジャチの木の丸いポール（棒高跳びの棒）を持っていた。「頑張れ ジャワ」、と私が窓から叫んだ。皆深刻に真っ直ぐ見ていたが、数人の少年達が私達を見、平常心を保つ事が出来なかった。恥ずかしくて彼等は笑い始めた。彼等は自分自身何か馬鹿げた様にしたのだ。同じ日の午後十四台の機関銃と武装した垂布帽の日本兵を乗せたトラックが来た。それは戦闘帽だ。人が言うのには翌土曜日はここは違って見えるだろう、と！待っているわ！

モードー

1943年7月24日

二回目の‘ジャワの戦闘’は今実際予定中、或いは多分既に始まってさえいるらしい。(マレーシアの)新聞によれば少なくとも‘灯火管制演習’は今実際の灯火管制に移った。言われた通りにするのも間に合った、今爆弾が既に落ち始めてきている！

ファン デル クロフト

1943年7月25日

一週間前、(1943年7月)15日、三回目の軍事演習を本当の爆弾等で再び始めると彼等は新聞に掲載し始めた。15日から25日(7月の)灯火管制。その少し後セマランでは既に二日延期された。(...)新聞に掲載されたのは：‘スラバヤが爆撃されそして死者達が出た。’そしてこれは実際本当だ。ストラウカー ブージュール(夫人)からの葉書には：‘ジョニー(イギリス)とメータ(アメリカ)の家はほぼ完成した。未だほんの少し建造しなければならない、そして私達はメータから郵便小包(爆弾)を受け取った’。

ファン デル クロフト

1943年7月27日

飛行機！ゴー...何と身の毛のよだつ唸り。アラ、外で彼女達が叫んでいるのが聞こえる：「バレム」(ふん)日本人野郎！たった今アニー ファン ボメルが中に駆け込んできた。警察官がある婦人に語ったのを彼女が聞いた所では、彼等は(全警察官)たった今日本兵達の事務所に来

⁷³ ここでは日本軍隊で働くインドネシア補助兵達のこと。彼等は棍棒だけで警備に当たったので、オランダ人の抑留者達は彼等の事を軽蔑して‘一本足木馬’とか‘棍棒坊や’と呼んだ。

さされ其処でアメリカ人達が来る時には—これをしかと聴いている？—落ちついて命令に従わなければならない、との事だった。万歳！彼等は既に降伏するみたい！ひょっとして私はこの平和に際して新しい日記を始められるかも！

ブルゲルーダウファス

1943年7月30日

そして素敵な情報、ヴィム！今日マディウンの空港が爆撃された。昨日には上陸して来た。ムッソリーニが辞職（それは新聞に出ていた）し、ティモール、アンボン、セレベスは未だ爆撃されている、スラバヤも爆撃された。全て信じる必要は無いけれど、事は上手く行っている。

ファン デル クロフト

1943年8月18日

そして情報は再びショット（素晴らしい）。今年に平和が来なければならない、とルーズベルト（大統領）が言った。このラインランド（ライン川流域地方）はオランダに至るまでも完全に水の下だ。ハンブルグ（ドイツの都市）破壊されそしてベルリンは半分ほど残っているだけ。又オランダの所々も完全に消えてしまった。其処での方がここよりもっと苦しんでいると思う。可哀相な人達！とはいえここ収容所でもこれら全ての喧嘩で耐えられなくなってきているけど。

モードー

1943年8月28日

中国と北の方から日本が直接攻撃を受けるという報告が新聞のニュースに記載されるだろうと人が囁いている。それが本当なら相当なものだけれど、それが何の役に立つというの？彼等がここで打ち負かされなければ、ここから決して出て行かないじゃない！

モードー

1943年10月2日

最近の月々はとても厳しく用心されているので、私達は外界と接触が持てず、戦争のニュースがもはや何も中へ入って来ない。ちょっとの漏れでも何時も極めて有難いが、私達はそれが本

当なのかどうか勿論知らないのだ。でも思うに例えばここに新聞の来る事がもはや許されないという事実は反って有利な印ではないだろうか。便りの無いのは、良い便り！

ブルゲルーダウファス

1943年11月20日

昨夜私が廊下に座っていた時—外にとても小さな電灯だけが許されているので私達は今未だ其処に座っている—有名なカード占い師がちょっと寄った。再び素晴らしい—噂が流れている—シンガポールが引き渡され、マラッカにチャンカイーチェック（上陸）、ジャワ国中の破壊—私達は彼女にちょっと（カードで）見てくれないかと頼んだら彼女はすぐにしてくれた。彼女は以前の様に再び見事なカードを持っていた。全てがとても明確だった。貴方は常に其処に出て来たわ。かなり早急に貴方が財産を袋に入れて家に帰って来るでしょう！とにかく、それは素晴らしかった。既に数日何度もバンバン音がしている、爆発みたいな、其処からこれらの破壊の風評。

ファン デル クロフト

1943年12月13日

最近の情報（多分噂だけ）は凄い：彼等はスマトラで戦闘し、シンガポールは撃墜そして破壊された。スンバワにある飛行場が征服され其処からスラバヤが定期的に爆撃されている。スラバヤにチラシが撒かれ、其処には：「われ等には全て判っている、服と食べ物を持って即来よう！」ハハハ。これは本当なのかしら？

ファン デル クロフト

1943年12月16日

中国人達がメラックで既に戦闘中で、ここアンバラワでは全ての中国人達の家宅搜索があったことだろう。そしてもし今実際何か本当だったら、H. が丸をつけた葉書を送って来るだろう。そして昨日それが起こった。私達はそれを心から信じたいのだが、それは無理だ！世界の出来事は破裂寸前だ...所謂。

ファン デル クロフト

1943年12月23日

お母さんが書いている：12月23日木曜日。何という落ち着かない日。それは既に私達の寝坊で始まった。誰ももう聖ミサに行けなかった、実に残念。私が未だ洗濯をしていた間、三人の日本兵士達と日本婦人がやって来た。彼等は収容所中を長い間探しまわった。その訪問後信じられない話しが旋回した。

今丁度、5時、(ファン) フォーレンフェルド夫人が沢山の質問事項を持って来た：オランダ人ですか？、NSB（国家社会運動）党员ですか？、何人で（ここに居ますか？）いくつバケツを持っていますか？やかんはいくつ、平鍋、洗い桶、ベッド、マットレス、蚊帳、アイロン台、アイロン、ミシン、冷凍庫、電気レンジ、電気トースター、洗濯板、タイプ（持っていますか？）何かが起こりそうだ。

ケジリは既に爆撃された。ジャワでは戦闘中だ。昨日はリド（アンバラワ第6敷地内の芝地）から全婦人達が追い出された。それは中国の男性達をのせた二台のバスが通ったからだと思っている。世評では空襲警報だとも。誰もがとてもはらはらしている。

モード

1943年12月31日

今日は、ロシアが日本に宣戦布告した事とベルギーが自由だという事でここではベルギー人達が強制収容されるという情報が旋回していた。ナンセンスだということは明らかだ。後は爆撃によって大切な交差点であるケロジャとチカンペック、バタビアとスラバヤの主となる接触が壊されたという噂が流れている。そしてその上スマトラで戦闘あり、でもこれらは全て楽観的なでっち上げに過ぎない様に見える。只先週ここアンバラワで或る数の顕著な中国人達が強制収容されたのはかなり確かだ。

ファン デル クロフト

1944年1月23日

昨日の午後私達は再び嬉しくて皆で飛び回った。町で貼り出されたニュース速報によると、西ジャワが攻撃されそして彼等はバンタムに上陸、今バンドゥンに向かっている。突然グッドハート夫人がカワット鉄条網の外にランドセルを背負った警察官を見た。皆が長椅子の上に。それが凄い緊張になった。彼は確かに別れを告げていた。意気揚揚と彼は今其処と出ていった（我々の昔のランドセルを持って）。後は今私達には1ヶ月間分の米と砂糖そして一袋のタピオ

カ（キャッサバの根から採った澱粉）粉の在庫がある、これは日本兵が以前決してしたくなくて何かグダン（貯蔵倉庫）に有れば激怒していたのだが。毎日彼は今だ何かを倉庫の中へ持ってくる。外は確かに安全ではない！後は既に数日一台の飛行機ももう聞かなくなった。

チャッケスーグレイン

1944年5月11日

私達は毎週‘日本の声’⁷⁴の中に受け取り、最初は読みたがったが、最近は馬鹿者だけがその新聞を読む。その中には天皇誕生日⁷⁵の為皆手紙を書いても良いとあった。何も未だ目にしてはいない。

モドー

1944年6月18日

私達がバラ テンタラ（軍隊）の守備下に置かれて以来、読書する週刊誌を受け取る、かなり古く不規則に中へ入って来るのだが。それは‘日本の声’と称し、英語で記述されバタビアで印刷されている。今日私達は（1944年）6月5日付けの第二十部を受け取った、数日前には十八部と十九部。故にそれは未だかなり古く、というのは其処に載っている情報は、大半が未だその新聞自体よりさらに数週間前の日付のものだから。だから尚且つそれらの日付が正しいという事を信じるしかない。ところで、この新聞全体には相当柔軟な‘信頼’が必要だ！とはいえ如何に今私達が隔離されてしまったこの世界がこの1年半の間に変ったかという事がこれを読んで大体判る。そして尚私達お互いこの状況は勿論我々にとっては新聞が伝えるより未だ見こみ有りとか確かめ合っている。だって...戦争の終結に関しては今皆一様に楽観的でそう有り続けるつもりだから。只、余りにも長くかかる！！新聞からの数事項をここに取り出してみよう：

1. ロシア軍がルーマニアで戦闘、カルパーテンと戦前のポーランドの国境まで、故に彼等はモッフエン(ドイツ人達)を完全にロシアから追い出した。
2. アメリカ軍は南イタリア(司令部 ナポリ)、そこでは政府の長がバドグリオだ、ムッソリーニが未だイタリアの残った個所を牛耳っていて、しかもはやそれに値するイタリア軍は存在しないのだが。
3. 連合軍の次ぎの(ヨーロッパ)本土襲撃が新聞に掲載。それに関連して我々の国の西の部分

⁷⁴ ‘日本の声’は日本の宣伝新聞で抑留者達、Á. F. D. プロディ、J. H. リットマンそして Á. ジーマーマンによって編集された。

⁷⁵ 1944年4月29日。

とその後数都市以外は完全に沈められたという。

4. オランダ領ニューギニアで戦闘がある。一ヶ月前スラバヤが少数の飛行機によって爆撃された（5月17日と18日）。（6月私達の収容所に来たスラバヤ人によれば、それは10月にも既に起こったという）
5. 日本軍は中国の中とビルマと英国領インドの国境まで前進している。
6. 人は日本への襲撃の不可能について盛んに話している！

ファン デル クロフト

1944年6月30日

皆楽観的、でも空腹。新聞に載っていたのは：ドイツがローマの美しい町を保持する事を断念した。数千機ものすごい数の飛行機がニューギニアの上を飛んで行った（これは新聞には掲載されず）。

（副総督）ファン モークはオーストラリアに駐在していて、即刻ここへ来てそれで G. G.（総督）となる。

ファン デル クロフト

1944年7月27日

最もナンセンスな噂が旋回している。皆楽観的。日本兵が数人の少年達に18日は私達にとって忘れがたい日になると言っていたが、（私達は）何も気付かなかった。二度目の家宅捜索で最初は怖かった。カワット（鉄条網）の上から石を括り付けてここ二三日前の情報が入り18日にオランダで再び女王の戴冠式があったという。万歳！一人の婦人がスラバヤの地区で占ってもらった：彼女は旅をするだろう。それから教会に来て横たわる（カランパナス）。其処で霊柩車を見るだろう。それから何処か沢山広間の有る所に来るであろう（ここ）。其処で輝く物を失うであろう（家宅捜索）。その後彼女はご主人から連絡を貰うであろう（今月の16日）。それから病気になり回復した時、ご主人を見るだろう。そして今彼女は病気で寝ている！そして全てが彼女には本当になった。全てのトランクは既に詰め終わっている。はらはらしながら私達は成り行きを見守っている。

ブルゲルーダウファス

1944年9月24日

昨夜聞いた事は私達が強制収容される前に住んでいた場所へ11月30日までに皆戻るに違いないという。徐々に色々な場所へ出発して行くだらう、そしてアンバラワから来ている私達だって向かい側の家々へ。これは抑留一後の過程のたぐいでそれから私達は解放される事になる。ヒーハーホー!!!

ファン デル クロフト

1944年10月30日

最もナンセンスな噂が流れる。ゲデック（編まれた竹製の仕切り）が取り去られ、アンバラワに有る一種の地区に全女性達が一同に連れて来られる。私達は時々何かを買う為に出て行って良い。チャーチルは新聞に依ればモスクワに居る。其処で彼等はヨーロッパを解放されたと決着をつける。

グメリフ メイリングーエーケルズ

1944年12月5日

既に気付いた点はこの全収容所が噂で持ちきりだという事。ニュースがここでは中に入ってくるのが不可能なのだ。だから人が聞く事はチェックの仕様が無いので即本当として受け入れられる。そして今でつち上げれば、毎日ニュースがあるというわけだ。バンドウンでは未だ本当のニュースを聞いた、其処では私達は次ぎのニュースから次ぎのニュースへ生きていた、でもここは彼等が私達に要望する事を実に単純に待ち受けるだけだ。何故なら私達は全ての点で外界から隔離されているのだから。

モードー

1944年12月8日

三年前ここで戦争が始まりそして今？ここへ出発するまでラジオ情報を聞いていたバンドウンからの人達によると、ヨーロッパ本土は戦闘の真っ最中で、ここ日本は苦境に立たされている。10月の最後の週、もっと正しく言えば、イエレがここに居た日、私達は最後の新聞を読んだ。この時以降世界には次ぎの出版にニュースになりそうな事が何も起こっていないと見える！

私達の最も新しい新参者、バンドゥンからの人々が伝える所では彼等のバンドゥン出發前に既にベルギー全土とオランダの西と南が部分的に解放されたという。ベルナルド皇太子がブルッセルからラジオ声明を発表したことだろう、彼はその中にこの解放された地域の大変な状況を話した。私達の素晴らしい橋々、堤防、等 もはや何も完全な形でなくそして国の大部分が破壊され水浸しになっている事だろうと懸念する。そして人々は？それは殆ど全く思い巡らせる勇気が無い。気が変になるからだ。そして私達はここ収容所に今既に約二年居る、全てに不平を言ったり口論したりそして未だ他にも、でも他の収容所に居る人々と比べたら私達は実際未だ良い方だ、そして...ヨーロッパは！

ファン デル クロフト

1944年12月14日

素晴らしいニュースが流れている！多分それらは今終に本当だ。シンガポールがまさしく解放〔された〕、バタビアのホテル デス インデスは爆撃され（日本の将校達）そしてG. G.（総督）の邸宅も。オランダはブトゥル（本当に）解放。彼等は今ドイツの領土を全て平らに（破壊）するべく忙しい。オランダは家々が全く跡形も無く破壊されレンガのみが地面に横たわっている。

昨日海からバタビアとチラチャップが銃撃されたという。多くの男性達、その中にはボルク医師も、がその辺の区域に居るといふ。もちろん女性達も。

グメリフ メイリングーエーケルズ

1945年1月6日

見聞きした（朝鮮人達の反乱、‘事件’の項目参照）沢山の事柄から私達は色々な結論を引き出した。そして多くの‘何故’が出てきた。何故私達は何時も日本語で言わなければならない‘火災監視’の規則を今突然オランダ語で（言わ）なければならないのか？ 何故今だ夜な夜な銃撃があるのか？何故兵補達（日本軍で働く土着の補助兵）が怖がっているのか？何故朝鮮人が私達の収容所リーダーに向かって：「何か貴方方に欲しい物があれば全て注文しても宜しい、我々が面倒を見ましょう、それが来る様に」と？何故出し抜けにそんなに沢山の薪が中に来るのか？何故日本兵達が夜中収容所で寝床の下で寝るのか、むしろ病院か台所の？何故女性達はもう不寝番〔夜警〕に歩かなくとも良くて、（でも）日本人か朝鮮人かが？

ファン デル クロフト

1945年1月19日

昨夜身の毛のよだつトントン（太鼓を叩く）が鳴った。いわゆる良い源からで；約午後3時以降。バタビアが落ち、それから後スラバヤが襲撃された。バタビアに数千のパラシュート部隊が降りてきた。（町は）二時間以内に占領（されただろう）。ソロも酷く爆撃（されただろう）、特にクラトン（宮殿）。これは余り信用できない：王子が生まれた、と。

モードー

1945年1月24日

噂は続く：ジャワを明渡す様（笑わないで！）最後通牒を日本に、それは日本から拒否された。今は爆撃とパラシュート部隊の上陸（が起こる）。これを私が信じる事が出来るなら。人はこれら全ての良いニュースをキャッチするラジオが収容所に有ると繰り返して言っているが、信じられれば、私がここに書き記す事は無いだろう。

チャッケスーグレイン

1945年1月28日

御伽噺のような月の夜の後光り輝いている日曜日の朝。（それは）7時半。私達は遠くに飛行機を耳にする、イヤ違う音だ。私達は緊張して耳を凝らしそして見る、それはバンジュビルへ向かって来ている。ベック夫人：「アラ、全日本軍が逃走して、これはアメリカ人よ。」隣人達：「ハ、ハ、ハ、アメリカ人が一人だけでアンバラワの上に、ハ、ハ、ハ」。ベック（夫人）：「如何してそれが無理なの？」。近所：「もう少ししたら収容所を通して噂があるわよ：私達は解放された！！」。「何故それがアメリカ人であるわけが無いのかしら、奇蹟はあるわ、或る日彼等はやはり来るに違いないわよ。」「ハ、ハ、ハ」、と近所（は反応する）。そして見て、其処に彼は収容所の上真っ直ぐに来ている、そして私達固有の赤－白－青（オランダの国旗）、我らがオランダの若者達そしてモールス信号で“勝利”を見る。

私は他には何も、只私達の、私達自身の赤－白－青を見た。私達の赤－白－青で喉を空にして叫んだ。それは収容所中強烈な感動だった。彼等は又更に‘状況’などのチラシを投げつけてきて、それについて更に大騒ぎが起こった。数時間後私達が集めなければならなかった、そして日本兵達が来て誰がそのチラシを読んだかを聞いた。全ての手が上がった！全てのチラシを手渡す事と、私達が読んだ事を‘忘れる’様に厳しい命令（が後に続いた）。未だチラシを持っていた人達は今未だ手渡せば何も起こらないだろう。何人か（29）の間抜け達はそれで

手渡したがこのお祭りが終わった後即座にペトゥト（刑務所）に行かねばならず、其処で8時半まで食事無しで服役していなければならなかった。でも彼女達には何も起こらないだろう。この日以降雰囲気は随分良くなった。只あまり長くかかってしまうと再び落ち込んでしまう。

ファン デル クロフト

1945年1月28日

やっと来た！終結の始まりだ。長く待ち続けた！昨夜ベッツ叔母さんが来て言うには：「ロシアが満州に侵入した、スラバヤとシンゴサリは解放。（彼等は）マランとバンドウンに向かって進軍している。昨日はセマランが占領され、中国人達が優位を占めた。全ての海岸沿いの町々にはパラシュート部隊（有色人種）が上陸している」。でも今朝のこと、思いがけず、私達は飛行機を耳にした。私達は薪が無い事で食事をととても心配していた。緑色で偽装したこの飛行機は突然山に下降した。ラワ ペニン（近くにある湖）だと私達は思った。少し経って、かなりの音がして、私達の収容所の上でそれがけたたましい音をさせた。見たら...赤ー白ー青が見えた...その時(皆)反応した。

私達は金切り声を上げ鳥肌が立った。お母さんとクリグネット夫人はお互いの腕を取り合って大泣きに泣いた。グッドハート夫人、ラウデンス(夫人)、キティとアンドレアは泣いていた。私は泣く事が出来ずそして信じられなかった。それはある誤魔化しかもしれないしお母さんに警告し、(彼女に)叫び続けた：「違う、違う！」。其処では飛行機が第七収容所の上にチラシを放り投げたのを見た。それから私達の方へやって来た。私達は走った。ぎりぎり収容所内のトイレの所に落ちてきた。

私は既に早くその一枚を手にしオランダ語で読んだ：「戦争の状況、1945年1月22日」。太平洋とヨーロッパの何かについて。オランダはその時、一週間下がって、いまだ完全には解放されていない。ゼーランド（オランダ南西部の州）、北ブラバントとほぼ全リンブルグ（オランダ南東部の州）だけが敵から解放された。ベルナルド皇太子とオランダ政府が祖国の復興した部分に赴いた。最後の行は：日本とドイツの戦闘力の即刻壊滅のチャンスは今ほど大きい事は無かった。オランダ領インドの海外領土の住民達は元気を失わない。執拗に充分持ち続けている。敵の終結は速足で近づいている。署名：女王陛下の特別公務、副総督官、最高司令官 L. H. ファン オーイェン。

これら全ての興奮から私達は空腹を覚え喜びの笑顔でアジア粥を食べた。その時日本兵達の中にやって来て私達は中から全てのチラシを手渡さなければならなかった、さもなければ半死半生まで引叩かれた。ストックパールチャー（日本軍で働く土着の補助兵）達が既に向かって来てかなりの物を取り上げた。11時前に婦人達は話しを聞くため整列させられた。

ジルデルダ夫人と五人の日本兵達が演説をした。全てのチラシは手渡さなければならなかった。それを未だしていなかった者は今すれば罰は受けないだろう。約二十人がそうした。

次ぎに彼は誰がそれを読んだかと聞いた。各人が両手を高く上げた。続いて私達は読んだ事全てを忘れなければならず、考えることはせずその話しもしてはいけなかった。そして又飛行機が来た時には（彼は十回も言った；その日本兵は怒りから荒れ狂って注視した）私達は即中へ行き何も拾い上げたり読んではいけなかった。全て約束さされそしてその時交代で手で探られた。でも何も見つからなかった。

暑くて既にもう食事の時間だった。私は病院に居てすべて見る事が出来た。一人の日本兵が私達の所にも来て看護婦だけ触れた。病人達のすぐ傍を彼は通った。その時私達は二十人の婦人達がストックパールチャー達に同行されて歩哨の所へ行くのを見た。今朝より彼女達は何も食べられずそして私が聞いた所では、彼女達に食事を持っていった婦人達は返されたと言う。彼女達は米袋が積まれているグダンチェ（貯蔵倉庫）に居る。

丁度5時私達は再びかなり高くこの上を旋回している飛行機を耳にしそして見た。時々それが近づかないでくれたらと思うのはそういった事が日本兵を何時も私達の収容所に引き寄せる事になるからだ。そして彼等は本当に今朝優しくなかった。アー、日記さん、何度も私は貴方の為にビクビクしているのよ。誰もがいつかこの飛行機に乗っていた向こう見ずな者が誰か是非とも知りたがっている。夜9時：二十人の罪人者達が解放される。

モード

1945年1月28日

この日、を私達は決して忘れないだろう：嫌悪する赤丸の替わりに**私達の赤―白―青**が再び空に。やっと、やっと解放が接近している明白な印、有利なニュースはやはり何か本当なのだ。是非今ほんのちょっとで良いからイエレと話しが出来れば！それは今朝7時半だった―私が丁度雑巾を洗おうと浴場へ行った―其処で南の方面からエンジンの唸り音を聞いた。という事はマゼランの方からだ。

私達はじっと目を凝らしたそしてやっぱりね、其処に低飛行している何かがテロモヨ⁷⁶の西の勾配の上に来て、東のバンジュビル方面へ針路を変えた。最初は見分けるのが困難だったが、すぐそれは緑の飛行機であるのが見えた。緑色の飛行機、私達は今まで日本兵の物では見た事が無かった、ということは...??これは木々の間を通して前方へ探し回っていた、と遠くからは少なくともそう見えたが、時々白い線が見分けられ、そしてそれが溪谷に消え去ったのが見えた、でもエンジンの唸る音は続いていた。

勿論全収容所では今皆外に出て来た。歓声が上がリ笑い声があったが、又泣き叫ぶ声もあった。私は背中がぞくぞく震えた、というのはそれが故障したか着陸する場所を探していたか、或いは多分既に不時着したか、としか考えられなかったからだ。でも突然それが再び姿

⁷⁶ テロモジヨは1892メートルの高さを持つ山。

を現し、怖いほど低空に私達の収容所の上を旋回した、そしてその時私達は皆その機体に赤―白―青を明白見た。その瞬間を私達は一生忘れる事は無いだろう！終に、ほぼ三年後、私達の赤―白―青がすぐ頭の上に。

この飛行機がこの収容所を偵察するのに、助走してそしてとても低く正確にその中心の上を唸って飛んだ時、耳がつんぼになるほどの歓声が飛び出し、それは更に増大した。唸り音を出しながらそれは普通に去っていった。飛行士（それが誰であったか、何時か耳にする事があるかしら？）は私達がのエンジンの騒音を上から聞かせたかったに違いない！丁度炊事場と第6バラックの間の通りに1束のチラシが放り投げられた。それからそれが他の収容所に消え、私達は下で渦を巻いている紙を拾い手に入れた。其処には有利な戦争のニュースが載っていた、その殆どがバンドゥンからの人達によれば既に二ヶ月前の古さと言うのだが。でもそれは構わない。事実、そのような簡易な飛行機が真昼間に落ちついてそして邪魔されずアンバラワにある全ての収容所を訪れ、高度100メートルで至る所を飛んでいる、それが多くを語ってくれている！！！！

ブルゲルーダウファス

1945年1月28日

飛行機

テ フェルデ

1945年1月28日

アー、一生忘れない日！いつもの様に今朝私は普通に作業に行き、そして洗面器を持って出入りしていた時飛行機の音を聞いた。この頃は何も珍しくはないのだが、その音は続きっぱなしだった。その飛行機がまるでこの場所の上を旋回している風だった。私は思った：「やはりちょっと見てみよう」。その飛行機が大きくカーブを描いて私達の方へ向かってきた時、私は丁度外へ出て来た。そして其処にそれが輝く空を通ってやって来て私達は見た：赤、白と青！

皆が喜びから叫びそして手を振って泣いた。機体はとても低く来たので、私達は飛行士を見る事が出来たほどだった。そして彼が再びカーブを描いて上に来た時、パンフレットを散らせ、それらは炊事場の近くに落ちた。皆が其処へと走った。それは1945年1月22日の状況の概要だった。ちょっと期待外れだったが、少なくとも私達は確実に知る。オランダはまだ完全には解放されず、ここ太平洋でも彼等は未だそこまではいっていない。でも前進はしている。この間更に又何処まで彼等が前進したか誰が知ろう。誰が知ろう！これらの良いニュースを今信じそうになるのは如何にここにその飛行機が後ろからつけられることなくとても落

ちついて上を飛べるからだ。

日本兵達は凄く神経質になっていて、薪を歩哨の所に取りに行かなければならなかった女子達はクーリー達と近づかせない様に送り返された。収容所は勿論又即私達がもはや作業する必要が無くクーリー達に重労働をさせるようにするだろうと思った。それは事実ではなかったが、暫くならそれは未だ私達だって出来る。暫くして後1組のストックパールチャー達(日本軍で働く土着の補助兵達)が収容所を囲みパンフレットを探し始めた。彼等は炊事場の屋根に這い登りそしてバラックの中を捜し、この紙を渡したくない者は死刑だと脅された。でも私達は未だ気は狂ってはいない!

11時に召集が有り全婦人達と年長の子供達が米の炊事場に来させられた。其処で高官が演説を立てて叫びながら、要するに次の様になった:もし又飛行機が来たら、私達はバラックの中に行き上を見てはいけない。後は全てのパンフレットを手渡さなければならなくて、内容を写記する事は許されず、‘忘れる(!?!)’事をしなければならなかった。もし又投げ放たれば、私達がそれらに触る事は許されなかった。それからパンフレットを手渡す機会が与えられた。彼は即刻それをした者には罰は与えないと約束した。三十名がそれをした。彼女達は今まだ歩哨の所のグダン(貯蔵倉庫)に服役している。その後私達はジルデルダ婦人、ウィレンガ、そして火災監視人によって身体検査された。勿論何も見つからなかった。今未だパンフレットを持っている者が見つかったなら、重い罪に服させられる。12時半にやっと私達は戻った。気にしない!粘り強く耐えよう!敵の最後は急ぎ足で接近している!

グメリフ メイリングーエーケルズ

1945年1月28日

人は時として言う:「最後まで諦めるな」と。この諺を今私達はこの収容所でとても良く習った。というのは今朝私がトイレに行く途中、私の隣の奥さんと私は絶えず飛行機の音を聞いた。それはかなり低空だった。私達は時々羽翼の先を見た、それ以外は見えなかったが、思いがけずこの飛行機が近くに来た時、私の隣の奥さんが強く私の腕を締め付けて叫んだ:「まあ、ちょっと、赤と白が見えるわ」そして確かに、私もそれを見た。その飛行機の機体の下に描かれた、大きな赤-白-青の国旗。

見た物が信じられなかった。この飛行機はとても低く私達の上を飛んで来た。直ちにこの全収容所では、とにかく歩ける人皆それが何なのか見る為外に走って出て来た。歓声を上げる声、叫ぶ大声は尽きる事が無かった。私達は独自の国旗と独自の飛行機を見たのだ!私達は殆どこれを消化できなかった。それは何と美しかった事か!(如何にそれが強烈であったかは、私にその為の全ての手段が欠如して居るので執筆するのが難しい)この飛行機は一度だけ直角に上に来て、回転し更にもう一度水平に上にやって来た。私達は踊りそしてシーツを振って挨拶をした。既にオランダの国旗さえも引っ張り出してきた。私達にはオランダの若者達が

座っているのが見え、彼等も私達に挨拶をした。

彼等が消え去る少し前彼等は何百の、イヤ多分何千のパンフレットを放り投げた。皆がその一枚を掴み取るチャンスに恵まれた。私さえもその一枚を貰った！でも一番奇妙なのは、日本兵側から何の銃撃も無かった事だ。でも今私達皆の思いは：「日本兵は何をするだろう？」その瞬間は何も気にしなかった。私達は嬉しい最中だった。その間私達は皆そのパンフレットを戦い取った。十分な数が落ちていた。全ては私達の間で活発に話された。女性達の一部は嘖然とし、他のグループは今だ平和が来ない事に激怒した。確かにオランダの飛行機がとても低く収容所の上に来ているのに未だ和睦が無いとは？一部は又、それが日本の飛行機だった、全てはだから偽造だったと思った。(出来かねない事ではなかった！)でも既にとても早く日本の歩哨の命令がやって来た。

女性達は皆中に留まっていなければならなかった。15分後に数百人の兵補達(日本軍で働く土着の補助兵達)がパンフレットを取りに中にやって来た。誰もがそれを手渡さなければならなかった！何人かの女性達は怖がってその紙を渡した、でもそれは私達にとって実に沢山の価値があったのに簡単に手放すなんて。多くの人々はそれを保持していた、そして一人の実に頭が切れるに違いない兵補が来て、これが私のパンフレットを取り上げようとした。これらの略奪品を持って彼等は日本兵の所へ行った。これが(日本兵)余りに少ないと見て全女性に歩哨の前に来る様命令を出した。何が起こるのだろうか？演説か何かその様な物？もし家宅搜索が行われるなら、いわゆる病気でマットレスの上に横たわらなければならなかった女性達の一部は後に残した。他の者達が前に進んだ。其処に到着した時、私達は凄惨な数の日本人将校達を見た。

エズキ、憲兵(隊)一将校、が通訳と私達の女性の収容所主任と他の日本人達とで私達を待っていた。最初の三人が小さな演壇に立っていた。沢山の女性達が来た時、エズキが全て日本語で話しをして、通訳がそれをマレー語に訳しそして私達独自の収容所主任が全てオランダ語で伝えた。最初のエズキの質問は私達がパンフレットを読んだかどうか？そしてそれをした者は両手を高く上げなければならなかった。それは見事な光景だった、全ての腕が同時に上へ上がったのは。とても愉快。これは日本兵に笑いを引き起こした。そして私達は皆そこに記載されていた事を読んだかどうか？大きな声で：はい！と答えた。彼によればこれは二度と起こってはならなかった。もし何時か又そのような飛行機が来た時には、私達は皆中へ入りパンフレットはそのままにしておかなければならなかった。そして特に高く見上げない事！その間兵補達は更にもっとパンフレットを取りに再び収容所の中へ入って行った。エズキから全ては自由意志に任せる、さもなければそれに関して他の手段が講じられると最後の警告を受けた。故に女性達は未だパンフレットを取りにバラックに行くチャンスに恵まれ、確かに女性達が出て行った。

彼女達が戻って来た時、彼女達は皆別に立たされ紳士達と一緒に事務所へ行かされた。その間私達から数十人の女性達が指名された。彼女達は同時に二人の日本兵達を両側に別に置かれた。私達は今五列に整列させられ身体検査される事になった。

幸い日本兵の監視でこれらの女性達によって。皆私達は腕を高く上げ只前に歩かなければならなかった。ちっとも楽しくはなかった。私達の全ての雰囲気は勿論何も見つからなかった身体検査の後損なわれてしまった。(それから)私達はバラックに戻って良かった。パンフレットを取りあげた女性達は連れて行かれそしてその為に特別に置かれた独房に閉じ込められた。彼女達は夜遅くやっと再び食事の貰えなかった其処から帰って来た！

モドー

1945年2月2日

先火曜日いわゆる日々の管理役で、色々な勤務の主任とバラックリーダー達、二重ストレープン(ストレープン=抑留所管理組織内で役職を持つ人の渾名)全員が飛行機を見た時何と思っただかを書面に描写しなければならなかった！「バタビアからの命令」、と収容所日本兵が言った。今、私達は皆オランダの国旗を再び見て大きな喜びを感じたことを釈明し、そしてその後はもちろん大変曖昧に濁した。そうよ、これで私達を捕まえ様としているけど！引っかからないないわよ！

ファン デル クロフト

1945年2月3日

私達の置かれている状態は理解できない。100パーセント自由であるべきなのに、その印一つ無く来る日も来る日も生活は神経の磨り減るビクビクした状態だ。とはいえ私達はしばしば轟き音を聞き、そしてアメリカ人達がまだかなり何かと奮闘していると信じている??? そしてそれは余りに長くかかる。

モドー

1945年2月4日

(1945年)1月30日の「降伏」は次ぎの様に説明されるべきだろう：日本兵がジャワの管理をジャワ人達に譲り渡し、そしてこのカラカイ政権がこの国を今引き渡すだろうという事を。人は白旗を掲げた色々な車を見たと言っている！私としては飛行機の到来を通して‘希望の観測’が飛び立った感がある。それは今の瞬間現実的な分別がベースになっている空想で、そして未だ数ヶ月私達は忍耐していなければならないだろう。でもそれが又どうであれ、終結は接近しているし、それが有り難い、というのは私達は今ではもう少しでも手離せる物：ドア、

窓、雨戸、等を全て燃やすのに忙しいので。バラックが交替で‘薪を供給’しなければならない、さもなければ食べ物を料理する事が出来ないのだ。

ブルゲルーダウファス

1945年2月16日

その飛行機の後私は余りに多くを期待していたので、もはや何も書いていない！でも思ったより長くかかっている、今貴方は既に又誕生日！アーヴィレムピエ、本当にこれで終わったにちがいないと私思ったけど。でもとにかく最後は近づいて来ているわ。

ファン デル クロフト

1945年5月5日

(5月2日)水曜日に又突然空襲警報が鳴った。何度も日本兵達が収容所を通って群をなして動き相当不機嫌だった。夜に彼は電灯の視察にやってくる。厳しく灯火管制されなければならなかった。数個の電球を彼は説明なしに持って行った。

ファン デル クロフト

1945年7月13日

1945年5月5日ユリアナ王女が王子を抱いてオランダに到着したという。11日(5月)平和が調印された。女王はドイツのどの部分も欲しくは無かった。ドイツはオランダの復興に十年間強制労働をさせられる事になったという。

ファン デル クロフト

1945年7月23日

昨日の午後、食事を取りに行く間、重いエンジンの唸る音を聞いた。私達は九台の光り輝く飛行機を見た。そのちょっと後彼等は再び戻って来た。今それらははっきりと見える：3-3-2-1。それらは素晴らしい四発エンジンの飛行機だったに違いないと見える。不思議な事に暗くなる前に全て覆い隠さなければならないという命令が下った。8時半丁度電気のスイッチが捻られ全ては暗闇の中だった。幸いお月様が輝いていた。ベッドに行く前に私達はまだ召集

され報告があった：「ベルが鳴ったら、空襲警報だから火災警視員が駆けつけて来なければならない。不寝番達（夜警達）は差し掛け屋根の下に隠れ人々はバラックで自ら静かに耐えていなければならない」。そして確かに、真夜中ベルが鳴り日本兵が収容所を通過して歩いてきた。それは四時間続いた。やはり何かエンジンの唸る音が聞こえた。

グメリフ　メイリングーエーケルズ　1 時半空襲警報。希望など無く、死ぬほどビクビクする。何時になったら彼等が来てくれるのか、どうして今即じゃないの？ 私達はもう一度期待したのに、でも3時には全て解除！

事件

A：強制慰安婦

モード

1944年2月23日

今日の午後3時一杯の日本兵を乗せて二台の車がやって来た。全バラックリーダー達が歩哨の所に来させられ、そこで18歳から28歳までの全女子と女性は即申し出なければならぬと聞いた。この人達に質問されたのは、何歳か、そして結婚しているか子供達は居るかという事だった。その間彼女達は大変きわどく見られた。今又それはどういう意味を持つのだろうか？又17歳の二人の女子達が紳士達のリストの中に18歳として記述されていた為率いられた。私達は忌まわしい憶測をしている。

ブルゲルダウファス

1944年2月23日

丁度18歳から28歳までの全女性が歩哨の所へ呼ばれた。彼女達は結婚しているか、何人子供達が居るかを申し出なければならぬ。今又これは何を意味するのかしら？もし彼女達に子供が無くてそして未婚なら田んぼに稲を植えに行かされるとでも！嫌な感じ、毎日何かある。勿論又ばかげた噂が旋回する、刑罰一移動とかなんとか。

ブルゲルダウファス

1944年2月24日

今日は昨日の女子達の一部が又‘紳士達’の前に出頭しなければならない。最良で、一番頑強で、太ってそして美人、そして子供の無い者達だ。既婚は問題無いが、二人の子持ちの一人が再び呼ばれた。彼女は賢明にも子供達と一緒に連れて行き、彼等が本当に彼女の子供達がどうかを聞いた後、その時送り返された！後の者達は一人一人事務所へ来て既婚しているかしていないかを再び言わなければならなかった、そして彼女達は又最も無礼に迎え入れられ嘲笑された。誰も未だこれが何を意味するのか知らない、ジルゲルダ夫人が聞いた時、日本兵は：ティダ アパ；マウ タンヤ サジャ！（何も無い；我々は只いくつかの質問をしたいだけだ！）私の隣の奥さん、ディディ ブールスは忙しく荷造りをしている、彼女もまたその中に所属し

た。彼女は凄くびくびくしている。フェミーはもう呼ばれなかった、余りに醜いからよきつと。最近のニュースは、この女性達が3月8日⁷⁷の祝宴に呼ばれたということだった！

チャックスーグレイン

1944年2月25日

18歳から28歳の全ての若い女子達が歩哨の所に出頭する様召集され、其処で彼女達は四人の日本兵達によって調べられた。何人かは見ようともされず、他は上から下まで覗かれた。「結婚しているのか?」「はい」。「子供達は?」「居ません」。「既にそんなに長く結婚しているのに何故子供達を作らなかったのかね?」。他の人達にも又。それじゃ子供達を頂戴よ。彼等は色々な印を名前の所に付けた。翌日何人かが更に召集され再び選ばれ蜂の巣の中の凄まじい騒動の如くだった、それは良く解る。

モドー

1944年2月27日

トッキーは今日百個目の卵を生んだ、一方彼女の四匹のひよこ達、全てめん鳥、も近い内生む事だろう。多くの人達はもし私が鶏など重要でない事について報告を今日メモし始めると知ったら、私に大いに腹を立てることだろう、ここで昨日と今日恐ろしい事が起こっているものだから。

最近のメンバーである日本兵達が(1944年2月23日)水曜日つまり翌日二回訪問してきてその時女性と女子達の何人かが歩哨の所に又召集された。男達は彼女達に再び同じ質問をし、汚らしいやり方で頭からつま先まで見入りそして彼女達の名前の後ろに印を付けた。そして昨日馬脚を現した：四人の日本兵達が空のバスで現れた。選ばれたと見られる十人の女子達が早急に荷物を詰めて乗り込まなければならなかった、母親達の抗議と嘆きにもかかわらず、彼女達は唯一の慰めとして、娘達はセマランへ送られて何の害も振りかからないし少なくとも1ヶ月の外出となるだろう、という請け合いを貰った！この旅の目的に関しては勿論あらゆる仮定が提起される。大半の意見はきつと：宣伝の映画用だと。

⁷⁷ 1942年3月8日蘭領東インド軍は降伏した。この日は毎年日本の命令で祭日として祝われた。

ファン デル クロフト

1944年2月27日

この頃は大変栄養価の高い米が貰えるが、ただ余りおいしそうには見えない。又更に私達は土曜日にお父さんから今月七日の葉書を受け取った。お母さんは凄く喜んだが、そのすぐ後ではもはやそうでなくなった、というのは数人の日本兵達を乗せてバスがやって来た、それは私達の収容所へ乗り込んでくるだろう。そしてその通りよ、それは門の中へ来た。皆が身震いした。恐怖、これをどうすることも出来ない！主人を取られ、息子を取られ、いまさらに娘を取られそして近い内には更に幼児達までも。すべて甘受しなければならない！十人が其処に居た、一人は病気だったが、やはり来なければならなかった。彼はも医者（日本人）だった。彼は彼女の脈拍と喉に手を当て彼女は確かに病気だと言ったが、回復した後では彼女も再び召集された。彼女達は即トランクに荷物を詰めて来なければならなかった。ジルデルダ夫人が何故なのかを聞いた。「ただちょっと、彼女達は移動さされるだけだ。」

ファン デル クロフト

1944年2月27日

(1944年) 2月23日の水曜日4時18歳から28歳までの全女子が歩哨の所まで来なければならなかった、其処では四人の日本兵達が彼女らを頭からつま先まで見定めた。彼等は四つの色々な印を使い、それを名前の後に付けた。ギョッとした事には私も、まだ17歳で8月(来る)になって18歳になるというのに召集された。でも幸い私は病気だった。火曜日に生まれて初めてマラリアにかかった。木曜日の朝日本へが又やって来て同じ印の付いた者達を召集した。再び震えてくる。

ブルゲルーダウファス

1944年2月27日

昨日彼女達は連れて行かれたわ、全部で九人。食事時間の前三人の日本兵達を乗せた空のバスが中に乗り込んできた。その時私達には良く解った！ジルデルダ夫人が未だ一生懸命頼んでみたが、役には立たなかった。彼女達はセマランの尼僧達の収容所(女子収容所)に行くことになっていた、彼女達は有能だし本当に何も災難は降りかからないことだろう。それから彼女達は召集された。ディディ ブールスは落伍しそして他の女子達も、私達のバラックからは唯一(X)が一緒に行かなければならなかった。母親達からは相当な抗議がありそしてかなりの涙が流れた。彼女達が何処へ行くのか全く判らない。彼女達は又手紙を書く事も許されないと、

惨めな事態。

チャックスーグレイン

1944年3月26日

今朝私は隣の奥さんに軽快な気分で少し嬉しい感がすると言ったばかりのところ、見て：11時半に日本兵を乗せたバスが来て十二人(最も見てくれの良い)女子達に出頭する様召集した、そして1時間以内に彼女達は目的不明の所へ消え去ってしまった。彼女達はトランクを持っていった。全収容所が反抗した。私達は更に大衆抗議を企てたが、母親達が自らそれは娘達に害を与える事だろうからと何もしない様頼んだ。彼等(日本兵達)も又不当に怒り易くなっていた、ムスティ(それをやるんだ)が彼等にとって決り文句だった。医者が彼女等に何が起こるのかと聞いた時、彼は答えた：「彼女らには何も起こらない。(…) 所長は叩かれ、そして大きな塵樽を外へ持っていった上半身裸の二人の少年達も別に何が有るわけで無く顔を引っ叩かれた。心臓は破れ無力で全てを見ていなければならない、そして今又これ以降に起こる事の成り行きを見守って行く。

ファン デル クロフト

1944年5月8日

7時半女子達の母親達と他の人々がバラン(棚とベッド以外)を持って歩哨の所へ出頭しなければならなかった。1時になってやっと彼女達は二台のオープントラックで、バラン(荷物)の上に座り、門を出て行った。

モドー

1944年7月27日

私はその頃十数人の女子達がケンペ(憲兵隊)によって選別され連れ去られた事は記述したが、後で未だに軍事当局がこの事柄に関して何も知らなかったらしいこと、そして調査後女子達の母親達からの再度にわたる緊急の嘆願を承諾した、それは母親達を娘達の所へ連れて行く様に、そうすればこの5月の末に彼女達は残りの子供達と一緒に私達の収容所から目的不明な所へ出発する、という事を報告する義務を怠っていた。これらの母親達が無傷でいる娘達を見つける事を望むばかりだ。私達はこの事柄についてもはや何も聞かなくなった。

B. 朝鮮人の反乱

ファン デル クロフト

1945年1月4日

初めて病院で働き始めた時は震えた。私は今だかつてそのような事をした事が無かった。お母さんは私と一緒に‘通り’を歩き、その事について話しをしなければならなかった。ゲデック一門（編まれた竹製の仕切り門）の近くに居た時、二回激しいどかんという音がした。私は隙間を通して見た。突然門が開いて二人のストックパールチャー（土着の日本軍で働く補助兵）達が慌てふためいて私達の足の間に飛び込んできて、粗野な音声で叫んだ：「アワス！」（気をつける）。お母さんと私はバラックの方へ逃げた。少なくとも彼等が銃撃されたのかと思った、そしてこの事態に笑いこけた。でもその後すぐそれが本当になる事が判った。あらゆる方面からバンバン音がし、そして中に入って静かにしている様にと告げられた。この音は続きいくつかは恐ろしい事にすぐ近くだった。（ファン）フォールンフェルド夫人がアンバラワ周辺で確かに何か動きがあること、そして私達は服を着たままでランドセルを横において既にベッドに横になっているよう警告に来た。倍増された不寝番（夜警）が回っている事だろう。

チャッケスーグレイン

1945年1月4日

混乱状態、夜5時半銃撃、バンという音、ストックパールチャー（土着の日本軍で働く補助兵）の逃走、あちこちに命令、全て中へ、空報、ゲデック（編まれた竹製の仕切り）の上を逃げて行くストックパールチャー達、人々のベッドの上を通過して外へ、歩哨には日本兵が見えない、門は非常に広く開いている、被保護者達が何か???から無保護のまま。ジルデルダ夫人が医者達等と一緒に協議し、婦人の警備員達を配置した。皆自ら冷静さを保ち事態に対処しなければならない、荷造りを済ませ成り行きを見守る。ロダー医師が来て、言うには：「朝鮮人達が日本軍に対して反乱を起し、皆殺された。」とにかく、次ぎに来る事を待つ。全ては平穏に終結された。朝は全て静かだった。その夜中には再び不寝番をし至る所で銃声が聞こえた。何の報告も無い。

テ フェルデ

1945年1月5日

今これは何と馬鹿な事。昨夜約8時半（日本時間）に外で銃声が聞こえた。そして突然かなり

の騒動が起こり其処では三人のストックパールチャー（土着の日本軍で働く補助兵）達が銃剣付きの銃を持って私達の部屋を通過して逃走した。私はベッドに横たわっていた、クレポネー（土着の日本軍で働く補助兵）の一人が私に向かって：「ラリ ナンティ ケナック！」（出て行け、さもないとお前も傷つくぞ）。彼等はどこか怖がっている様に見える逃走して行った。（彼等は）この扉を越え消え去って行った。彼等の銃は門の中に置かれたままだった。

そしてその間にも銃撃は続いた。そして皆それが何か推測したが誰も知らなかった。暫くして私達のブロックリーダーであるコープマン夫人が平静を保つ様に言いに来た。彼女が言うには多分日本軍に対する朝鮮人達の反乱だろう、そしてその時私達は完全に歩哨無しだった。私達はところで夜中じゅうそれで過ごしたのだ。最初は起きていて、ランプを完全に覆い隠し、ドアを閉め（私達はゲデック〔編まれた竹製の仕切り〕のすぐ近くに居る）婦人達は土着民達の襲撃があるかも知れないのに備えて鉄製の棒で武装した。やっと服を着たまま寝た。婦人達は二人づつ交代で警備した。1時（日本時間）に私が起きた時お母さんが伝えてくれたのは、事務所に電話があり情報が入って来たところによると、アンバラワが朝鮮人達の手落ち、そしてその事で私達が怖がる事は無く、自分達の事を良く気をつけること、そして私達が日本軍のもとより彼等の元の方がもっと良い扱いを受けるだろう、というのだ。さて、どうなるか、現在の状況からはこの時誰も判らない。私達としては再び良くなる事を望むだけだ。

モードー

1945年1月5日

昨夜7時突然近くで銃声が聞こえた。一人の日本兵と二人のストックパールチャー達が収容所を走りそして人々に向かって酔った日本兵達が居るから中へ入るように叫んだ。少しして収容所リーダーも皆中に行き特に平静を保つ様命令を持って来た。収容所の外では色々な方向で銃声を聞いた。更にちょっと後、既に8時半前、全ての歩哨達が出て行ってしまったという報告を受けた！紳士達は門さえも彼等の後ろで閉める事もせず、それは私達の収容所リーダーがその時閉めた：これで（彼等が出て行った事で）すっかり片付いたわ、確かに彼女はそう思っただろう！こんな風で故に私達は完全に警備無しだった、奇妙な状況。

全てに対処する為、私達は就寝の時に各バラックに三つの倍増した監視哨を設けた。後は全て普通だった：暗くて静か。時々全て正常かどうかを聞く為日本軍事務所からこの事務所に電話があった。夜中1時に紳士達の一人が自分で見に来たが、彼はその時も今朝もこの事件の説明はしなかった。

1時前には更に二人他の日本兵達が来て、彼等自身は朝鮮人である事を自己紹介しそして収容所リーダーに銃剣で脅しながら「日本人と死にたいか」と尋ねた。彼女がそんな気は無いと言った時、紳士達はご満悦の様で只まだこの収容所内に武器があるかどうかを尋ねた。それが目的だった様だ、でもそれにも否認の答えが返りそれから彼等は出て行った。何が正確

に起こったのか、故に私達は知らない、本当に日本と朝鮮（約四十年前日本によって併合された中国人達）⁷⁸間の喧嘩と推測するだけだ。色々な日本将校達が殺されたに違いないこの銃撃戦は、部分的な暴動だけか組織された反乱を表すのか、勿論私達は是非知っておきたい。

グメリフ　メイリングーエーケルズ

1945年1月5日

1945年1月4日。この日は決して忘れない！！夜7時私達の子供達をベッドに連れて行こうと立っていたら、出し抜けに逃走している人達の凄惨な騒ぎ（を聞いた）。そして私達が見たのは、全速力でやって来た銃を構えた兵補達（土着の日本軍で働く補助兵）だった。それは奇妙な光景だった。私達は彼等をびっくり眼で見た。彼等は未だ「メンブニ」（遮蔽物を探せ）〔隠れろ〕と叫んでいた。私達は最初全く何を如何して良いのか判らなかつたが、兵補達はビリック（編まれた竹）に直進して逃走していった。其処で彼等は銃を置き捨て他の側へ再び飛び降りそしてビリックを高くよじ登った。私達は何がナンだかさっぱり判らなかつた。如何したのか？何が起こったのか？でも即収容所周辺で相当な銃撃戦が始まった。ライフル銃だけでなく、大型の砲火も。突然私達は大変な騒音を聞いた。それは実際恐怖をかきたてた。この後すぐ門から次ぎの命令が来て「ランプに覆いを着せろ、ドアを閉め（居る限りは）女性達は中に留まり後は平静に成り行きを見守る様に」。

9時私達の収容所リーダーの代理人が来て今何が起きているか伝えてくれた。日本兵達は皆消え去り、逃げ去った。彼等は攻撃を受けたと見えそれによって兵補達もまた行ってしまったのだ。その夜中私達はとても恐怖に慄いた、というのは彼等がこの様な無保護の女性収容所を簡単に手中に収められるからだ。こういったことの場合には余り長く思い巡らせない方が良く、というのはいざ立ち上がらなければならない時にはそれで力尽きてしまっているだろうから。

今聞いたのは、女性達が今夜門の所で全く危険でなくはなかつた警備に歩く事になるだろうと。私達の何の武装もしていない女性の警備を信じるしかない。最終的には私達は皆バラックでやはり眠りに陥ってしまったが、翌朝即又命令を受け、外部からなるべく気付かれない様にととても静かにしている様に、という事だった。今だ尚銃撃されていた。

⁷⁸ 1905年朝鮮は日本の保護国となった。1910年以来日本皇室に併合された。1945年になって朝鮮は独立を奪還した。

ファン デル クロフト

1945年1月5日

(私達は)不便な服を着、そして更に続くバンバンという音で凄くびくびくする夜中を過ごした。それで奇妙だった事は、何の噂も悲鳴や叫び声を聞かない。お母さんは少しの音で目が覚め、ズス ファン デル ドップと夜中の話しをした。彼女が聞いたのは、門が開け放たれ歩哨には誰も居なかったという。朝鮮人達が全ての日本兵達を殺してしまったに違いない。

私達の三人の男性医師達とジルデルダ夫人が夜中警備をした。数回警備は未だ居るかと思ふ電話が有った。誰もいない。数回呼びかけがあつた：「気をつけて...気をつけて...」そして突然断たれてしまった。朝方に一人の日本兵が来て何も言わず、彼の寝床に入ってしまった。朝早い点呼で、それは小さな反乱でセマランから軍隊が来て抑制する、と言われた。私達は大変良く持ち堪えたと言われた。全て、つまり大部分が凄く不安で憂鬱だ。

ブルゲルーダウファス

1945年1月5日

昨夜6時半突然至る所で銃声（が聞こえ）そして二、三人のストックパールチャー（土着の日本軍で働く補助兵）達が急ぎ足で銃を放ちながら収容所を出て行った！全てが不安（だった）（そして）命令（続く）：「中に留まれ！」。銃撃は大体8時半まで続き、それから後は全て平穏で静かになった。今朝朝鮮人達が日本軍に対して反乱を起したが、既に全ては又平穏だったと言われた。

テ フェルデ

1945年1月6日

昨夜出し抜けに完全に灯火管制だった。今夜は未だ数回銃声が聞こえた。それは朝鮮人達と日本人達の間でかなりの戦いがあつたらしいが、誰が勝利を収めたのか私達は知らない。でも日本兵からは倍増のシンバンズ（夜警達）がゲデック（編まれた竹製の仕切り）の周りを歩かなければならない。実にご立派。近い内にはそれが更に進んで、彼等が収容所に居て私達が彼等を保護する為とその周囲を歩かなければならない事になるだろう。アルベルト（彼女の兄弟）は今少なくとも未だ出て行く必要は無い、それは良い事だ。

ブルゲルーダウファス

1945年1月6日

朝鮮人達の反乱は未だ進行中だ、私達は殆ど気が付かないけれど。昨夜私達は突然ゲデック（編まれた竹製マット）の所を警備に歩かなければならなかった。想像して、私達がそっと静かに立って様子を覗い何かが起こったら歩哨まで一生懸命走って行かなければならなかったのよ。考えられるかしら：強制収容された女性達が彼女らの警備員達を警備しなければならないなんて。最初の警備は7時から8時半まで、二回目は8時半から10時、それを私が受け持った。私達が立って15分ばかりした時、収容所を通過して1組の日本兵達がやって来てランプを消させ全て中に送りこんだ、バラック警備員達も、ゲデック警備員達も。彼等が自ら警備するだろう。そして私達の勇敢なバラック管理は私達にこの命令を伝える勇気が無く私達は馬鹿みたいに10時までゲデックに立っていた。私達が後任を起す為無邪気に家に帰って来た時、「貴方達が帰って来て良かったわ！」と歓迎された。何よ、バラックから足った二分歩いた所に私達は居たのよ。馬鹿な事！もし軍隊がやって来て私達を銃剣で刺したとしたら。

グメリフ メイリングーエーケルズ

1945年1月7日

未だに何も特別な事は(起こって)ない。只厳しい灯火管制と警備だけだ。私達の不寝番(夜警)は倍増された、という事は今四人で歩かなければならない。二人が座り二人がバラック周りを未だ歩いている。日本兵達は外を警備している。

チャックースーグレイン

1945年1月7日

警備は砂袋でバリケードが築かれた。何が来るかもしれないのか、私達には解らない。(私達は)この収容所内で射撃と戦いの準備をしている。私達は自らを防衛しなければならない、と言うのは今までの所セマランからこの収容所を警備し私達を守る為に送られてきた日本兵達は、女性達のベッドの中と後ろに居るのが見つかったからだ。一撃で彼等はその下に逃げ込んだ。1945年。これが現代の戦争行為かしら？己惚れる訳ではないけれど、今までの所女性達の平静さと体制には敬意を表するわ。

ブルゲルーダウファス

1945年1月8日

昨日は反乱に殆ど気付く事が無かったが、夜早めに中へ入るように通知は受けていた。そして弾丸のヒューヒュー鳴るのが聞こえたら、私達の枕を鳴っている方へ向けて置かなければならない！昨夜あらゆる日本兵達が再び中へやって来て、彼等は広間の長椅子、そしてベッドの下に横になった。この男達は疲れ切っていた、そして話したことに彼等は24時間勤務を二回して来たと言う。彼等はその他は大変礼儀正しく不寝番（夜警）にお辞儀をした。外はバンヤック スサ（大変な騒ぎ）、と彼等は言っている。後は大して話さない。門は良く閉まらないので昨日砂袋で補強された。

ブルゲルーダウファス

1945年1月10日

ここにもう一度1組の日本兵達がやって来てバラックの中で朝鮮人達或いは武器を探し回っていた、と人は言っている。

モドー

1945年1月12日

反乱、これは更に数日に渡ったが、今抑制されたと見える。少なくとも私達は何も気付かない。奇妙な動きがあった。それはまるで収容所日本兵の指示の元にこの収容所を警備すると称して夜中中に入ってきたと見えた男性達が、又朝鮮人達で（彼等はとても礼儀正しく、大変怖がって、とても疲れ、至る所に寝る為横になった、例えば病院のベッドの下とか！）、彼等は私達に続いて静かにして外に気付かれない様に警告した、それがここでは‘警備員達’で、日中他の男性達によって探されたと見えた。

何人かの‘搜索者達’は暗くなる前に車で連れてこられ、そして収容所の外の木の上に配置された、最も馬鹿げた光景だ。その間収容所長、私の考えでは二重の役目をしている（スパイ）、は日中殆ど中には来ず数日前彼は歩哨の最後の銃を持ち去ったので、私達の‘ストックパールチャー’は今再び長い棍棒だけの武装となった（＝ストック [棍棒]、これから彼等は私達によって渾名を貰った）。

和平の知らせ

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年8月23日

最近は何も興らない、私達はただ待っているだけだ。もう耐えられない。今日の午後私の簡易ベッドで一休みし、考え事をしていると、ものすごいなると呼び声で目を覚まされた。何と言ったの??明日は食事が多くなる!!!1日700グラムも!今は200グラムなのだ。“ああ”と私達は皆言った“これはおかしい、何かあるわよ”。人間が突然変わってしまうのはすごいことだ。

その直後に命令があった、全てのブランダー-インド(東インド人の親を持ち、東インドで生まれた人)は収容所を早急に出なければならない!それでは休戦になったの?私達には分からない。しかしみんな突然元気が出てきた!今夜は集会があり、そこで我々の1人が食事が多くなることに感謝した。私達は神経を緊張させている!最後の命令:全てのブランダー-インドはここを出る準備をするように。夜12時に彼女たちは登録をするために呼び集められた。

ブルゲル-ダウファス

1945年8月23日

昨夜はインド-ブランダ[欧印人]はここを出て良いという知らせがあった。彼女たちは申告し、外部にある生活資材を書かされた。今朝は銀行が精算されるので、まだ口座にお金のある人は返して貰えるから署名をしに来るように、という知らせがあった。そしてつい今し方、明日から食事の量が倍になると発表された。この最後の発表はキャンプ全体を卒倒させた。そしてあなたの妻は泣いた。1日400グラムから700グラムへ、これは重大変化だ。

始めに、私達は今夜、トロ豆スープの後で米の粥も貰った。ああ、ヴィメル、私達の子供たちったら。やっと彼女たちは食べ物を少し多く貰えるようになった。ああ、私はほんとは嬉しい、ヴィムピエ、ヴィムピエ。これでエルスは浮腫が治って出られる、これはこの数週間の間、私の最大の悲しみだった。又ニュースがあるわ。全ての灯火管制幕を取って良い。エルスは順調だ。私は今や彼女を又家に連れて来たい。こうして食事が良くなれば、彼女はすぐ完治するだろう。

モード

1945年8月23日

昨日の夜、印欧人で収容所を出たい者は、それを今日の朝申し出るようにという知らせが来た。今朝は長々と発表があり、これをキャンプリーダーが下記のようにして兵舎リーダーに伝えた。

1. 数日前、医薬品が大量に入った。
2. 今朝、公式には兵補と呼ばれる‘一本足木馬’の警備官が、本物の日本の兵士に変わった。
3. 全ての東インド人（あるいは自分をそう呼びたい人）はキャンプを出ても良い。
4. 全ての銀行口座残高は、今日の内に支払われる。（私はまだf 20, -以上残っていた、つい最近、私の口座から、追加の食料を買うためのf 30, -が収容所金庫に支払われたところだ。）
5. 収容所リーダーは今朝タイピストと一緒に第9収容所に行き（そこは書類上は第6収容所に属している）、そこで銀行口座を精算した。
6. 我々の食物が増える!!! 明日から1日米200グラム、9月1日から400グラムに、明日から粉は1日400グラムに、9月1日からは300グラム、パンはアンバラワのパン屋がそれ以上は焼けないので1日100グラムのまま。そのためにあの粉を、粥を作るために貰う、薪はもうあるし!

リーダーの印象では、ニップ達はこの数日ひどくいらいらしていたが、今はある種の落ち着きを取り戻している。これは何を意味するのだろうか？休戦か？和平か？私達はまだ信じられない気持ちだが、しかし、いずれにせよ、何か良いことだ！終わりの始まりだ!!!

収容所の外では街灯の灯火管制幕がはずされた。

モード

1945年8月24日

午後、東インド人で望んだ者は収容所を出た。全ては私達の抑留の終わりが来たことを示している。今は何ヶ月後かという問題ではなく、何週間でもない、何日か、だ!!! イエレがここに早く来てくれれば....。その後、収容所外の人からの知らせでは、日本は8月18日に降伏した!!!! 夜、アンバラワの最高指揮官のジャップがちょっと来て、戦争が終わったことを公式に告げた。明日は飛行機が飛んできて、パラシュートに食料を付けて落としてくれる。

グメリフ・メイリング-エーケルス

1945年8月24日

6時半に全ての女性と子供達が、‘リド’という、まあ大きな芝地に呼び集められ、そこには我々自身の収容所長の女性が箱に乗って私達の中央に立っていた。彼女は我々に、今日の午後ニッポンが、彼女に公式に戦争終結を通告した、と伝えた。

チャックス・グレイン

1945年8月24日

自由、自由、自由。これは多すぎた失望の後に、信じるのが怖くなってしまった、働きすぎで勇気のある女性達の一団によって、受け止められた。

ファン・デル・クロフト

1945年8月25日

今朝（誰も眠った人は居ませんでした）赤、白、青の旗を屋根に出し、シーツにオレンジの文字でW-W-B [戦争捕虜] と書いた物を出すようにという知らせが来ました。誰もそれが何の意味か分かりませんでした。今は8時半で、ヘデック [編んだ竹のマット] 添いに人垣がたくさんできていて、第7収容所の男の子達が、単に乗り越えて入ってきました。彼らはもう前から知っていました。彼らは一本足木馬 [日本軍内の現地人補助兵] を布類で買収したのです。ジョクジャカルタでは又ランパッセライ [押収] がありました。それでは、飛行機よ来てちょうだい！土曜夜8時半。まだ飛行機は音もせず、姿も見せません。それは中途半端な、混乱した日でした。まだ卵も肉も何も口にしていません。最も凶々しい人達だけが、またもや獲物を手に入れました。果物、鶏、鴨、魚、卵に焼きめしブンクシェス [何食か分]。今日は最高に悲惨な病室係をやりました。私は病室にただ1人で居ました。苦勞して明日の私の誕生日のために休暇を取りました。ファン・アウケン看護婦は私の誕生日に全く興味がない様子でした。

チャックス・グレイン

1945年8月25日

本当よ、みんなオレンジ色で歩いてる、旗を振って。私達はもうすぐ飛行機がパラシュートで小包を落とすのを期待している。人々は今や気が狂ったようだ。今日の午後、他の収容所の訪

問許可が出た。今しばらくの間は、収容所の中に居る。C. G. は既に家に行った。昨夜は死亡通知が沢山来た。私の旧友クリニエは昨日朝、ここの休養所で心臓麻痺で亡くなった。しばらくはまだ“一体これから何が起こるのか”という恐れのがちが支配的だ。第7収容所は既にここに訊ねてきた。母親達は大喜びした。ああ、子供達、後でまた。全ての感情のために疲れ果ててしまった。私の聖母様が今後もお導き下さる。さようなら。

モード

1945年8月25日

キャンプ全体お祭り騒ぎだ。いたるところに赤一白一青やオレンジが見られる。あんなに頻繁に家宅捜索があったのに、この旗は一体何処から出てきたんでしょう！第7収容所から多くの若者が囲いを乗り越えて入ってきた。後は飛行機を待つだけだ。その後、門が開かれる。私はイエレを待っている！

ブルゲル-ダウファス

1945年10月1日

私は既に9月の丸1と月、アンバラワ地獄から抜け出している！そしてここには何も書いていなかった。最後に書いてから、全ては急速に展開した。金曜夜[1945年8月24日]私達は公式に終わりを告げられ、土曜朝には外部からの訪問者を受け入れることが出来た。私達自身はまだ出られなかった。スミーデスカンプさんが来てくれた。彼女はいろいろなおいしい物を持って、私達みんなを寛大にもサラチガのバックスさんの家に来るようにと誘ってくれた！でも私達はその時までキャンプを出られなかった。全てが大混乱で、みんな勿論同じように興奮していた。エルスは看護婦が急速に減ったのでまた家に帰された。

次の日、私達は買い物などをするために外に出ても良いことになった。収容所の外ではたちまち活発な物々交換市場が出現していた。あの日曜日の朝、つまり8月26日、私は外に出ても良い、最初のグループの中にいた。私はそれを見逃すわけには行かなかったのだ。マリアンと一緒に、エルスはまだ病棟にいて、散歩は許されていなかったから。私はマリアンとアルン・アルン[前庭広場]をぶらついた、自由の空の下で、そしてヴィム、私は自分がどんどん成長していくような感じがした。私は次第に背筋を伸ばし、何トンもの重荷が滑り落ちていくのを感じていた。あの感じを、私は決して忘れないだろう。私は古い布をバッグに入れて持って行き、それをすぐに15個の卵と交換した。私はマリアンと、木の下に座って卵を食べた、素晴らしかった。その後は1日中非常に忙しかった。誰もが火を興し、そして食べる、食べる、食べる。

名簿録

Aatje	アーチェ
Abarbanel, dokter	アバルバネル、医師
Abbink, tolk	アビंक、通訳
Adam-de Vries, J.G	アダムー デ フリース、J.G
Albert; zie Velde, Albert te	アルベルト
Almamia	アルマミア
Amy	エイミー
Andrea; zie Krogt, Andrea van der	アンドレア
Annie; zie Bommel, Annie van	アニー
Assenderp-van der Wulp, N.	アッセンデルプ-ファン・デル・ヴルプ、N
[Assenderp], Reggi	[アッセンデルプ]、レギ
Auken, zuster van	アウケン、ファン 看護婦
Balk	バルク
Bax	ボックス
Bax, Tabea	(タ)ベア ボックス
Beck-van Haastert, A.T.	ベック-ファン ハーステルト、A.T.
Bekkering	ベッケリング
Bekkering, mijnheer	ベッケリング氏
Bertha; zie Blom, Bertha	ベルタ
Bets, tante	ベッツ叔母さん
Bi-Zing-Ho	ビ-ジン-ホ
Blokland	ブロックランド
Blom, Bertha	ブロム、ベルタ
Boers, Didi	ディディ ブールス
Bohlke, Jopie	ボールケ、ヨピー
Bolke, dokter	ボルク医師
Bommel, Annie van	ボメル、アニー ファン
Bommel, van	ボメル、ファン
Boomsma, Liesje	ボームスマ、リシェ
Bouwes-Bloemhof, J.S. [Jet]	バウウェス-ブルムホフ、J.S. [イェト]
Bouwman	バウマン
Brauns	ブラウンス
Breemen, F. van, majoor	ブレーメン、F.ファン、少佐
Brink, ten	ブリंक テン

Brodie, A.F.D.	ブロディ、A.F.D.
Brogdrop	ブルグドロップ
Brune-van Bochove, C.H.	ブルネーファン ボッホウヴェ、C.H.
Buitelaar	バウテラー
Burger, Wim C.	ブルゲル、ヴィム C.
Burger, Els H.	ブルゲル、エルス H.
Burger, Marianne Frederika	ブルゲル、マリアンヌ フレデリカ
Burger-Duyfjes, H.C. [Jettie]	ブルゲル-ダウファス、H.C. [ジエティ]
Burgerhoudt-Huidekooper, C.M.	ブルゲルハウト-ハウデコーペル、C.M.
Bussing, Janna	ブッシング、ヤナ
Buter van Oostveen	ブテル ファン オーストヴェーン
Bijleveld, Gootje	バイレヴェルト、ゴーチェ
Bijlevelt	バイレヴェルト
Cappers, Els	カッペルス、エルス
Cappers	カッペルス
Clignett	クリグネット
Dam-Van der Laan, J.A. van	ダム-ファン・デル・ラーン、J.A. ファン
Dam, Jan van	ダム、ヤン・ファン
Dam, Marijke van	ダム、マレイケ・ファン
Davellier	ダヴェリール
Dee, Nel	デー、ネル
Dee, Rina, ook genoemd Rien	デー、リナ、又リンとも呼ぶ
Deutekom-van Dijk, C.M. van	デウテコム
Didi; zie Boers, Didi	ディディ
Diderich, J.Ph.L. pastoor	デイデリッヒ、J.Ph.L. 神父
Dini	ディニ
Dirkmaat	ディルクマート
Dollé, Lilian	ドレ、リリアン
Dop, van den	ドップ、ファン デン
Dop, Zus van den	ドップ、ズス ファン デン
Doorenbos-Elgersma, Sj.	ドールンボス-エルゲルスマ、Sj.
Dorst, Sief	ドルスト、シーフ
Douwe	ダウヴェ
Dreckmeier, dokter G.J.	ドレックメイヤー、G.J. 医師
Doyer	ドイエル
Driel-Ballieux, J.H. van	ドゥリルーバリュウ、J.H. ファン

Duits	ダウツ
Els; zie Burger, Els H.	エルス
Elven-Yntema, W. van	エルヴェン-イエンテマ、W. ファン
Endenburg, Gerda	エンデンプルグ、ゲルダ
Erp, van	エルプ、ファン
Evers	エイヴェルス
Evers, Joke	エイヴェルス、ヨーケ
Evers, Piet	エイヴェルス、ピート
Fabius, Jetje	ファビウス、ジェチェ
Femmy	フェミー
Fermin-Carpentier Alting	フェルミン-カーペンティエールアルティン グ
Fien[eke]; zie Krogt, Fieneke van der	フィン
Fietje	フィチェ
Flammant, dokter	フラマント、医師
Flaumenhaft, dokter Ch.	フラウメンハフト、医師 Ch.
Freek	フレーク
Georg[eke], zoon van Tjakkes-Grein	ジョージ [ケ]、チャッケス-グレインの息子
Gerard; zie Krogt, Gerard van der	ヘラルド
Gerda; zie Endenburg, Gerda	ゲルダ
Gerritsen, Gertrude	ヘリッツン、ヘルトルーデ
Gerritsen, dominee	ゲリットセン、// ヘリッツン、牧師
Gessel, Pim van	ヘッセル、ピム・ファン
Gessel, Trees [T.G.J.] van	ゲッセル、トレース [T. G. J.] ファン
Giesen, dokter	ヒーセン、医師
Gmelig Meyling, A.W.	グメリフ メイリング、A.W.
Gmelig Meyling, Hebel	グメリフ・メイリング、ヘベル
Gmelig Meyling-Eekels, N.J.Th.;	グメリフ メイリング-エーケルズ、N.J.Th.
Goedhart	グッドハート
Göring	グーリング
Götz van Vet, Maud van	グーツ・ファン・フェット、マウド・ファン
Grasmeijer	グラスメイヤー
Greet	グレート
Groot, dokter	フロート、医師
Groot, Hetty de	フロート、ヘティー・デ
Haan, Lientje de	ハーン、リーンチェ デ

Haar, Lientje de	ハール、リンチェ・デ
Haarsma, Coby	ハースマ、コビー
Hady	ハーディ
Ham, v[an] d[er]	ハム、ファン デル
Hangelbroek, Henny	ハンゲルブルック、ヘニー
Hanneke; zie Krogt, Hanneke van der	ハネケ ; クロフト、ハネケ・ファン・デル参照
Hannie	ハニー
Heel, van	ヘール、ファン
Heidelberg-de Vos, E.G.	ヘイデルベルグーデ ヴォス、E.G.
Heine	ヘイネ
Herman, Bas	ヘルマン、バス
O'Herne, Jannie	オヘルネ、ヤニー
Heyton	ヘイトン
Hielkema, Joop	ヒルケマ、ヨープ
Hilde	ヒルデ
Hoeksema, Fien	フックセマ、フィン
Hoogendoorn, zuster Mary	ホーグンドーレン、マリー 看護婦
Hootzen; A.F.M. Hootzen-Emmen	ホーツェン ; A.F.M. ホーツェンーエメン
Hörchner, [J.G.] dokter	フルヘネル、[J.G.]医師
Hutsenson, mijnheer	フッセンソン、氏
Ike; zie Velde, Jettie B. te	イケ
Ineke	イネケ
Jamamoto	ヤマモト
Jan[neman]; zie Velde, Jan J. te	ヤン [ネマン]
Jansz; B.A.W.	ヤンツ ; B.A.W.
Jeanne	ジーヌ
Jelle; zie Vries, Jelle de	イエレ
Jet; zie Bouwes-Bloemhof, J.S.	ジェット
Jet[teke]; zie Krogt, Jetteke van der	ジェット [ジエテケ]
Jettie; zie Velde, Jettie B. te	ジエティ
Jezuki	エズキ
Jilderda-Visser, G.J.	ジルデルダーフィッサー、G.J.
Joke; zie Evers, Joke	ヨーケ
Jopie; zie Bohlke, Jopie	ヨピー ; ボールケ、ヨピー 参照
Jüncker, Joke	ジュンケル、ヨーケ
Kappers, Els	カッペルス、エルス

Kaptein	カピテイン
Kaptein, Pietje	カピテイン、ピチェ
Kessler	ケスラー
Kiki	キキ
Kitty; zie Krogt, Kitty van der	キティ
Koert	クールト
Koopmans	コープマン
Krogt, Andrea [A.G.Th.] van der	クロフト、アンドレア [A.G.Th.] ファン デル
Krogt, Eefje van der	クロフト、エーフィエ・ファンデル
Krogt, Fieneke [J.M.] van der	クロフト、フィネケ [J.M.] ファン デル
Krogt, Gerard van der	クロフト、ヘラルド ファン デル
Krogt, Hanneke [J.J.] van der	クロフト、ハネケ [J.J.] ファン デル
Krogt, Jet(teke) [H.A.M.] van der	クロフト、ジェット (テケ) H.A.M.] ファン デル
Krogt, Kitty [C.G.Th.] van der	クロフト、キティ [C.G.Th.] ファン デル
Krogt, Miep [M.C.] van der; passim	クロフト、ミープ [M.C.] ファン デル
Krogt, Paula [P.M.] van der	クロフト、パウラ [P.M.] ファン デル
Krogt-Gast, H.M.G. van der	クロフト-ハスト、J.M.G.ファン・デル
Krul	クルル
Krijnen; E.A. Krijnen-van der Meulen	クライネン -ファン デル メウレン
Küh	クー
Kuipers, dominiee	カウペルス、牧師
La Lau, mijnheer H.F.	ラ ラウ、H.F.氏
La Lau; B.J. Lalau-Brendgen	ラ・ラウ ; B.J.ララウ-ブレントヘン
Lamberts; G. Lamberts-Nijboer	ランベルツ ; G.ランベルツ-ネイブール
Lanoi, Harry de	ハリー デ ラノイ
Leent, zuster van -van der Laar [25-11-1896]	レーント、ファン-ファン デル ラール看護婦
Leent, dokter van	レーント、医師 ファン
Leering, Hanny	レーリング、ハニー
Leussen, van	レウセン、ファン
Lichtvoet	リフトフット
Lien	リーン
Lijntje	ラインチェ
Linders	リンダース

Lips, Pop	リップス、ポップ
Langhout	ラングハウ t
Leur, de	ルー、デ
Liems, Lies [E.F.]	リムス、リス [E.F.]
Lieze, A. de	リーズ、A.デ
Lodder, dokter J.	ロデル、J.医師
Loest, Margie van	ルスト、マルヒー・ファン
Lohman	ローマン
London, Lenny	ロンドン、レニー
Loon, Tjerp van	ローン、チェルプ ファン
Luidens; G. Luidens-Westerhuis	ラウデンス ; G. ラウデンスーウェステルハウ ス
Luyten; Adri [A.J.] Luyten-Rijsdijk	ラウテン ; アドリ [A.J.] ラウテンーライスダ イク
Lijntje	ラインチェ
Mandarijn, Lia	マンダレイン、リア
Mareis	マレイス
Maresh	マレシュ
Marian[ne]; zie Burger, Marianne Frederika	マリアン [ヌ]
Marie Catrien	マリー カトリン
Marie Josef, zuster	マリー ジョセフ、シスター
Marliesje	マルリーシェ
Maud; Götz van Vet, Maud van	マウド ; ゴーツ・ファン・フェット、マウド・ ファン
Meer, Miep van der	メール、ミップ・ファン・デル
Meer, Thea van der	メール、テア ファン デル
Meyer, Tine	メイヤー、ティネ
Meyer, Trees	メイヤー、トレース
Misset, A.	ミセツト、A.
Modoo, Adriana; passim	モドー、アドリアナ
Moeder-Overste	ムダーーオヴェルステ
Moorman	モールマン
Muis	マウス
Mulder	ムルダー
Mulder, Marie	ムルダー、マリー
Mulder-Bolle, Willy	ムルダー-ボレ、ウィリー

Nessel, Carla	ネッセル、カーラ
Nessel, van	ネッセル、ファン
Nettie	ネッティエ
Neuyen-Hakker, dokter J.Ch.	ネウエン-ハッケル、J.Ch. 医師
Nicolai, Ini	ニコライ、イニ
Nicolai, Marijke	ニコライ、マレイケ
Noble, Lies le	ノーブル、リス レ
Nunes	ヌネス
Oostveen, Tony van	オーストヴェーン、トニー ファン
Oyen, L.H. van; luitenant-generaal-adjutant in buitengewone dienst van Hare Majesteit de Koningin	オーイエン、L.H. ファン; 女王陛下の特別 公務副総督官、最高司令官コーニンゲン
Paumen, Rees [Resy]	パウメン、レース [レイシー]
Paumen, Robbie	パウメン、ロビー
Paumen-Beurskens, H.M.J.	パウメン-ブルスケンス、H.M.J.
Paula; zie Krogt, Paula van der	パウラ
Perk-Knebel, C.C. [Cietje]	ペルクークネベル、C.C. [シーチェ]
Perk	ペルク
Plomp, dominee	プロンプ、牧師
Pluis	プラウス
Pootjes	ポーチェス
Pordon-Mulder, J.Ch.M.	ポルドン-ムルダー、J.Ch.M.
Ogata	オガタ
Ooie, Annie van	ウイ、アニー ファン
Orata	オラタ
Pierre, oom	ピーレ、小父さん
Piet, tante	ピット、小母さん
Piet; zie Evers, Piet fam. Le Poetre	ピット; エーフェルス、ピット 参照 ル・プートレー家
Popta-De Groot Boersma, A. van	ポプターデ フロート ブースマ、A. ファン
Raaymakers-Soentjens	ラーイマーカーズ ースンチェンス
Ranneft	ラネフト
Rees; zie Paumen, Rees [Resy]	レース
Reggie; zie Assenderp, Reggie	レヒー; アッセンデルプ、レギー 参照
Rens, Jackie van	レンス、ジャッキー・ファン
Rens, Margot van	レンス、マルゴット ファン

Rens, Theo van	レンス、テオ・ファン
Riet	リット
Ritman, J.H.	リットマン、J.H.
Robbie; zie Paumen, Robbie	ロビー、
Robbertje	ロバーチェ
Roes	ルース
Roos-van Gelder, E.J.	ロース-ファン・ヘルダー、E.J.
Rudolf	ルドルフ
Sanders, Truus	サンダース、ツルース
Scharrenberg-Frantzen, A.C.	スハレンベルグ-フランツェン、A.C.
Scholten, tandarts	スホルトン、歯科医
Schrijner, Miep	スフレイナー、ミップ
Schulte-Eckhart, J.G.; kampleidster	スフルテ-エックハート、J.G. ; キャンプリー ダー
Schulte, Jaap	スフルテ、ヤープ
Schulte, Jopie	スフルテ、ヨピー
Schwank	シュワンク
Sief; zie Dorst, Sief	シーフ
Sillevis Smith, H.A.	シレヴィス スミット、H.A.
Smiedeskamp	スミ-デスカンプ
Smits	スミッツ
Smits, Frenske	スミッツ、フレンスケ
Snepvangers, L.W.	スネプファゲルス、L.W.
Snijders, Marie	スナイダース、マリー
Soewandi, dokter	スワンジ、医師
Sörbé	ソブレ
Stichter	スティフテル
Stouten, Ger Lot	スタウテン、ゲル ロット
Struyker Boudier-van Schaik, C.J.M.	ストラウケル ブージュールファン スカイ ク、C.J.M.
Struycker Boudier, Henk	ストラウケル・ブディール、ヘンク
Tabea; zie Bax, Tabea	タベア ; バックス、タベア 参照
Tangelder-Alferink, C.M.	タンゲルダー -アルフェリンク、C.M.
Tangelder, Bernard	タンゲルダー、ベルナルド
Tap-van den Berg, C.M.	タップ-ファン・デン・ベルグ、C.M.

Tems	テムス
Teepe-Roos, Th.	テーペ-ロース、Th.
Tiemens-Mulder, J.A.	ティームェンス-ムルダー、J.A.
Timmer-van der Monde, M.A.B.	ティメルーフアン デル モンド、M.A.B.
Tjakkes-Grein, M.C.C. [Maria/Mia]	チャッケス-グレイン、M.C.C. [マリア/ミア]
Tjakkes, Josje	チャッケス、ヨッシャ
Tjebbes, Luyke	チェベス、ラウケ
Tobias	トビアス
Ton	トン
Trip-de Vries, M.J.	トリップ-デ・フリース、M.J.
Truus, tante	トゥールース、叔母さん
U., familie	U、一家
Udema, Winnie	ウデマ、ウィニー
Velde, Atie te; passim	フェルデ、アチー テ ; 頻出 フェルデ、アリー テ
Velde, Albert te	フェルデ、アルベルト テ
Velde, Harm te	フェルデ、ハルム・テ
Velde, Henk te	フェルデ、ヘンク テ
Velde, Jan. J. (bijgenaamd Janneman) te	フェルデ、ヤン J. 渾名はヤネマン) テ
Velde, Jettie (ook Ike genoemd) te	フェルデ、ジェティ イケとも呼ぶ) テ
Velde, Mijnie te	フェルデ、メイニー テ
Velde-Brouwer, D. te	フェルデ-ブラウワー、D.テ
Venninck, Zuster	フェニック、看護婦
Vera	ヴェラ
Vermeiden-de Neef, E.	フェルメイデン-デ ネーフ、E.
Vernee, Gusta	フェルネー、グスタ
Vink, mijnheer De	ヴィンク、デ 氏
Voigt	ヴォイト
Vonk, dokter	ヴォンク、医師
Voornveld-van Caspel, L.C.H. van	フォールンフェルドーファン カスペル、L.C.H ファン.
Vries, de	フリース、デ
Vries, Elly de	フリース、エリー・デ
Vries, Jelle de; zoon van Modoo	フリース、イエレ デ ; モドーの息子
Van de Waarde	ファン デ ワールデ
Wagemans, M.C.	ワーゲマンズ、M.C.

Wal, Rudolf van der	ワル、ルドルフ・ファン・デル
Walch-Sorgdrager, dokter G.B.	ワルシューソルフドラーヘル、G.B.
Wasch	ワシュ
Wasch, Lia [C.H.C.]	ワッシュ、リア[C.H.C.]
Wasch, Ongke	ワッシュ、オンケ
Wasserman, Marietje	ワッセルマン、マリチェ
Wegman, Lenny	ウェグマン、レニー
Weinberg	ウェインベルグ
Wichers, Jantje	ウィッケルズ、ヤンティ
Wielenga, J.D.	ウィーレンガ、J.D.
Wies	ウイス
Wijna	ワイナ
Wijs, de	ワイス、デ
Willy; zie Mulder-Bolle, Willy	ウィリー、
Wim[mel]; zie Burger, Wim C.	ヴィム
Witberg, zuster	ウィットベルグ、看護婦
Wilson	ウィルソン
Wooninck	ヴォーニック
Zimmerman, A.	ジーマーマン、A.
Zwaan, dokter	ズワーン、医師
Zeeuw	ゼーウ
Zeeuwen	ゼーウン
Zouw, Corrietje van der	ゾオ、コリーチェ ファン デル
Zwanenburg, tandarts	ズワーネンブルグ、歯科医
Zweep	スウェープ

Staff Diary project:

Elisabeth Broers (editor Dutch)
Mariska Heijmans-van Bruggen (project co-ordinator)
Jeroen Kemperman (project assistant)
Elly Touwen-Bouwsma (programme director)
Richard Voorneman (editor Dutch)

Members Advisory Committee for the Diary project:

Dhr. R. Boekholt
Drs. E. Derksen (Stichting Tong Tong)
Dhr. F.N.J. van Dijk
Dr. mr. G. Jungslager (Stichting Japanse Ereschulden)
Dr. E.B. Locher-Scholten (Universiteit Utrecht)
Dr. Osamu Namba
Dhr. H.R. Toorop (Voormalig Verzet Oost-Azie)
Dr. H.L. Zwitzer